

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第194集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集

Nakadakase Kannon-yama Site

# 中高瀬観音山遺跡

*Tomioka, Gunma*

群馬県富岡市

A 本文編

1995

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本道路公団





中高瀬観音山遺跡 C資料編正訳表(本文編索引掲載分以外)

頁	表名	遺物番号	項目	訳	正
p.20	土器一覧	0055	層位	下層	上層
p.22	土器一覧	0122	層位	下層	上層
p.24	土器一覧	0160	層位	上層	下層
p.27	土器一覧	0277	器高厚	3.8	なし
p.27	土器一覧	0277	口径長	なし	3.8
p.30	土器一覧	0436	遺構	80	081
p.34	土器一覧	0538	遺構	89	088
p.40	土器一覧	0815	遺構	135	136
p.43	土器一覧	0909	口径長	13.8	14.6
p.52	土器一覧	1256	層位	上層	下層
p.52	土器一覧	1266	層位	下層	上層
p.52	土器一覧	1291	層位	上層	下層
p.54	土器一覧	1312	遺構	KJ06	KJ03
p.56	土器一覧	1421	遺構	KD01	KP01
p.61	石斧類一覧	2024	層位	上層	下層
p.61	石斧類一覧	2039	遺構	018	025
p.61	石斧類一覧	2040	遺構	018	028
p.61	石斧類一覧	2045	層位	上層	下層
p.61	石斧類一覧	2047	遺構	047	046
p.61	石斧類一覧	2055	遺構	52	253
p.62	石斧類一覧	2129	遺構	80,81	080
p.63	石斧類一覧	2174	遺構	105	108
p.64	石斧類一覧	2230	厚さ	(4.5)	(0.5)
p.64	石斧類一覧	2248	層位	下層	上層
p.65	石斧類一覧	2292	層位	下層	上層
p.67	石斧類一覧	2403	層位	下層	上層
p.67	石斧類一覧	2435	長さ	(18.6)	(8.5)
p.73	黒曜石類一覧	3016	層位	上層	下層
p.76	黒曜石類一覧	3201	遺構	C-5G	C-7G
p.76	黒曜石類一覧	3202	遺構	C-5G	C-7G
p.76	黒曜石類一覧	3203	遺構	C-5G	C-7G
p.76	黒曜石類一覧	3204	遺構	C-5G	C-7G
p.76	黒曜石類一覧	3240	遺構	014	014
p.76	黒曜石類一覧	3246	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3290	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3291	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3297	層位	下層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3301	材質	人造ガラス?	黒曜石?
p.77	黒曜石類一覧	3301	備考	黒曜石?	人造ガラス?
p.77	黒曜石類一覧	3315	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3316	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3324	層位	上層	下層
p.77	黒曜石類一覧	3327	層位	上層	下層
p.78	黒曜石類一覧	3331	層位	上層	下層
p.78	黒曜石類一覧	3335	層位	下層	上層
p.78	黒曜石類一覧	3338	遺構	069	009
p.78	黒曜石類一覧	3341	層位	上層	下層
p.78	黒曜石類一覧	3356	層位	上層	下層
p.79	黒曜石類一覧	3409	層位	上層	下層
p.79	黒曜石類一覧	3435	層位	上層	下層
p.79	黒曜石類一覧	3438	層位	上層	下層
p.79	黒曜石類一覧	3441	層位	上層	下層
p.80	黒曜石類一覧	3506	遺構	091	C-4G
p.81	黒曜石類一覧	3527	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3531	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3546	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3549	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3556	番号	3556	3555
p.81	黒曜石類一覧	3556	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3556	挿入	なし	遺構141上層割片黒曜石重量35なし写真頁123
p.81	黒曜石類一覧	3557	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3557	重量	33	7
p.81	黒曜石類一覧	3558	重量	5	1
p.81	黒曜石類一覧	3588	層位	上層	下層
p.81	黒曜石類一覧	3592	層位	上層	下層
p.82	黒曜石類一覧	3658	層位	上層	下層
p.83	黒曜石類一覧	3662	層位	上層	下層
p.83	黒曜石類一覧	3693	層位	なし	上層
p.83	黒曜石類一覧	3694	層位	なし	上層
p.83	黒曜石類一覧	3697	層位	なし	上層
p.83	黒曜石類一覧	3703	層位	なし	上層
p.85	黒曜石類一覧	3795	層位	上層	下層
p.85	黒曜石類一覧	3800	層位	上層	下層
p.85	黒曜石類一覧	3811	層位	上層	下層
p.85	黒曜石類一覧	3824	層位	下層	下層
p.85	黒曜石類一覧	3853	層位	上層	下層
p.86	黒曜石類一覧	3859	層位	上層	下層
p.89	金属器類一覧	4018	層位	上層	下層
p.89	金属器類一覧	4037	番号	4037	4037C
p.89	金属器類一覧	4037	番号	39	計39
p.89	金属器類一覧	4037	番号	なし	鑑定片
p.89	金属器類一覧	4052	層位	なし	上層
p.90	金属器類一覧	4067	番号	4067	4067A
p.90	金属器類一覧	4067	重量	26	計26
p.90	金属器類一覧	4067	備考	なし	他2片



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第194集  
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集

Nakadakase Kannon-yama Site

# 中高瀬観音山遺跡

*Tomioka, Gunma*

群馬県富岡市

## A 本文編

1995

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本道路公団



## 序

昭和61年以来埋蔵文化財の発掘調査を進めて参りました高速道の上信越自動車道は、平成5年3月27日に関越自動車道蕨岡ジャンクションと長野県の佐久インターチェンジ間が開通し、多くの人達に利用されています。ご承知のように上信越自動車道が通過する西毛の鍋川流域は、武蔵国から信濃国への交通の要路として早くから開け、栄えてきた地域でありました。それゆえに数多くの文化財があるところとして知られています。

ここに報告します中高瀬観音山遺跡も、そのうちの一つであり、上信越自動車道建設に際して発掘調査を行いました。通称「離れ山」丘陵上にある本遺跡からは、弥生時代後期の竪穴式住居が100軒以上、掘立柱建物10棟等と、それらを取り囲むように地形に沿って巡る櫓列が発見、調査され、県内外の研究者の耳目を集めました。そして関係者の努力により「北関東における弥生時代の集落構造と社会状況を知る上で究めて貴重な遺跡」として、上信越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で唯一遺跡の保存が決まり、平成6年4月15日に国の史跡に答申されました。

本遺跡のある富岡市では、史跡中高瀬観音山遺跡を活用するために史跡の保存整備、活用計画を検討しています。かかる時に本遺跡の発掘調査報告書がまとまり刊行されることは、誠に時宜を得たことと存じます。また、酷寒・酷暑の日もいとわず、連日進められた調査の結果得られた各種の貴重な資料を取め、後世の人々に残す記録として、ここに本報告書が刊行できましたのも、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、富岡市教育委員会、地元関係者、本遺跡の保存に尽力した関係者等のご指導とご協力の賜物であります。これら関係者の皆様には衷心より感謝の意を表し、願わくば、本報告書が一人でも多くの方々に利用、活用されますことを願います。

平成7年12月10日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

# 例 言

- 1 本書は中高瀬観音山遺跡(群馬県富岡市中高瀬所在)の上信越自動車道建設に伴う発掘調査報告書である。  
2 本遺跡の発掘調査は、これまで次のようになされた。

A	上信越自動車道用地全面調査	第1次(平成1年度)	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団実施
B		第2次(平成2年度)	同上
C	範囲確認試掘調査	第1次(平成1年度)	群馬県教育委員会実施
D		第2次(平成2年度)	富岡市教育委員会実施
E		第3次(平成3年度)	同上

以上のうち、本書はA・Bの報告であり、C～Eについては、富岡市教育委員会、1993「中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書」で、すでに報告されており、必要最低限以外に本書では記していない。

- 3 A・Bの発掘調査は、次の体制で行った。

## 調査担当

観音山地区 坂井 隆・木村 収・山口良寛・津金澤吉茂・飛田野正佳・右島和夫・関口博幸・藤巻幸男・内木真琴・小島達夫・外山政子

庚申山地区 津金澤吉茂・飛田野正佳・保坂雅美・中沢 悟・関口功一・富田一仁

## 事務担当 関越道上越線調査事務所

所長 高橋一夫 総括次長 片桐光一(1年度)・大澤友治(2年度)

次長 徳江 紀 調査第二課長 鬼形芳夫

庶務 宮川初太郎・固定 均(1年度)・笠原秀樹(2年度)・町田康子

運転 神戸市四郎・松井留男

## 発掘作業員

青木和人・青木幸衛・浅香重作・阿部千代子・新井種次・新井ミツ・飯塚敬太郎・井田昌作・井野口和美・今井クニ・今井光治・岩井光子・上原きみ子・岡野乙二・小川美佐子・小沢秀明・落合トシ・小野沢隆行・神谷圭子・桐生喜代子・久保順子・小暮いま江・小嶋美代子・小林イチ・小林たか・斉藤はつ江・斉藤昭昭・佐藤サキ・佐藤トキ・佐藤ふじ江・佐藤よし・下山弥生・神宮永次郎・神宮百代・鈴木日出子・須賀いる子・岡美登里・瀬間正人・曾我 功・曾我みつ子・高橋治郎・高橋 均・竹内久子・田村梅之助・田村カメ・中條好子・中野セツ・中野利一・中野初次郎・原田 寛・堀口孝幸・真下伍男・増田道雄・松井洋子・黛かず江・黛 福松・宮下 勇・宮下浜子・三宅良成・室岡三七作・森千代子・矢島衣根・矢嶋君代・山崎忠太郎・安河内恵子・矢野 清・山田喜代志・山田正好・波部みつ江

- 4 整理作業は、次の体制で1993年4月1日～95年3月31日(平成5・6年度)に行った。

事務担当 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団関越道上越線調査事務所(平成5年度)

所長 吉田 肇 庶務調査課長 依田治雄 庶務 吉田有光

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団事務局(平成6年度)

事務局長 近藤 功 調査研究部長 神保佑史 調査研究第二課長 岸田治男

整理担当 坂井 隆

整理作業員 新井加寿恵・飯野幸子・宇佐見征子・掛川智子・串渕すみ江・佐藤信子・霜田恵子・須田はつ江・南雲繁子・馬場信子・細井敏子・丸橋富美子・吉原清乃

保存処理 関 邦一

遺物撮影 佐藤元彦

- 5 本書の多くは、発掘調査の際より本遺跡に関心を寄せ、また専門の分野でのご指導下さった当事業団内外の方々に執筆頂いた(内部執筆者は所属を省略した)。それ以外の無署名部分は、整理編集担当の坂井が執筆した。なお「東日本の高地性集落」についての考察を執筆中であつた森岡秀人氏(兵庫県芦屋市教育委員会)は、1995年1月17日の阪神大震災に罹災され、物理的に送稿が不可能になってしまった。調査中よりご指導頂いた同氏のご指道を掲載できないことははなはだ遺憾であると同時に、被災についてお見舞い申し上げます。

- 6 本遺跡の調査・整理にあたって、執筆頂いた以外にご指導下さった次の方々には感謝したい(敬称略)。

甘粕 健・石井好文・石部正志・井出正義・大塚初重・岡本 勇・小田富士雄・加藤見規・神谷佳明・荻谷俊介・車崎正彦・子安和順・佐原 眞・白石太一郎・末吉美佐・高島忠平・興澤一郎・田村晃一・玉口時雄・中谷俊吾・横口尚武・原島礼二・春成秀爾・宮下昌文・宮本長二郎・藪下彰治朗

# 凡 例

## 1 整理報告の基本方針

本遺跡は、主要な部分である弥生時代後期集落の調査中断後に国指定史跡として保存されたため、今後の史跡整備と活用に向けた基本資料の提示を本報告の第一の目的とした。

## 2 本報告書の構成

A本文編(本書)・B写真編(別分冊)・C資料編(別分冊)の3部よりなる。資料編のデータはフロッピーディスクを保管しており、希望により実費でコピーサービスを行う。

## 3 遺構について

- ア 掲載対象 : 検出した遺構全てを掲載した。
- イ 遺構番号 : 観音山地区については種別に関わらず通番を付した。庚申山地区は、4桁番号の第1桁は全てKを、第2桁は調査時の種別認識によるアルファベット略称を付した。
- ウ 報告の焦点 : 可能な限り立地条件を現すことを優先した。本文編の図だけでなく、原則として本文に従って掲載した写真編の遺構景観写真を併用されることが望まれる。
- エ グリッド : 調査時には国土座標に基づく5×5mの小グリッドを用いたが、呼称が煩雑なため25×25mの大グリッドに統合した。大グリッドは各地区全体図に記してある。
- オ 掲載順序 : 観音山地区と庚申山地区に分け、立地に基づいた大グリッドごとに掲載した。時代・遺構番号による検索は、巻末の遺構索引(p.378)を利用されたい。
- カ 実測方法 : 調査時の実測は、(株)シン技術コンサルに空中写真測量で委託した。遺憾ながら、整理時にこの委託図に少なくない問題点の存在が判明した。極力誤りは修正したが、資料不足で一部遺物の出土レベルに確認できない部分が残った。
- キ 図表現 : 土層断面図に木根(列点)・ローム塊(横平行線)・粘土(縦平行線)をトーン表示。平面図の一点破線は焼土範囲、破線は未掘掘り込み。
- ク 土層説明 : 浅間山起源の軽石略称、A(A軽石)・YP(板鼻軽石)・MP(室田軽石)・BP(褐色軽石)

## 4 遺物について

- ア 掲載対象 : 取り上げた遺物の中で、遺構出土のものは特徴のあるもの全て、遺構外の出土のものは石器を中心に報告した。各遺構出土の全遺物重量比は、資料編に記録した。
- イ 遺物番号 : 4桁の通番を付け、第1桁を次のように分けた。0,1:土器・陶磁器(原則1/4、無表示は1/4) 2:石器(黒曜石・チャート系以外、原則1/3) 3:石器(黒曜石・チャート系、原則1/1) 4:金属器(原則1/2) 5:ガラス器(原則1/1)
- ウ 報告の焦点 : 遺構と出土した遺物の関係、特に遺構と出土石器の時代差の有無を重要な課題とした。だが上記実測ミスにより遺憾ながら出土レベルの未確認土器片が少量ある。
- エ 出土状態認識 : 出土位置層位より上層(二次埋没以後)・下層(初期崩落埋没以前)・掘り方に大別した(接合資料は重量比率で判断)。遺構の時代認定は、下層遺物の組成より判断した。
- オ 実測目的 : 土器類は使用痕表現を最優先した。但し廃棄後の焼成痕は記さない(番号に下線付与)。

## 5 その他

- ア 石材認定 : 飯島静男氏(群馬地質研究会)
- イ トレース : 黒曜石・チャート系:(株)アルカ 非黒曜石・チャート系:(株)シン技術コンサル 土器類:(株)測研 遺構図:(株)測設
- ウ 鳥瞰図作成 : (株)四門

# 抄 録

## 1 遺跡の概要

本遺跡は富岡市中高瀬々観音山と庚申山に所在する。鍋川右岸の高瀬山丘陵から突出する二つの尾根上(平地との比高60m強)の要害地形に立地し、上野一ノ宮貫前神社とは低地を挟んだ鍋川の対岸にあたる。

発掘調査は、第1次が平成1(1989)年5月1日より2(1990)年2月28日まで、第2次が同年6月1日より7月31日まで行った。兩次調査の間に、弥生時代集落としての特異性より、本遺跡地の保存の方向が決定された。その後、富岡市教育委員会が史跡指定申請に伴う範囲確認調査を平成2年度と3年度に実施し、平成6年4月には文化庁文化財保護審議会より国指定史跡の指定答申がなされた。

## 2 遺構数量

種別	時代	主な種類	特記事項	
祭祀 生産	近世	庚申塔群跡	1 天明浅間山噴火復興に関わる庚申信仰跡と高地開発跡。	
		土坑		57
城館	中世	曲輪	2 山城跡帯曲輪の一部。	
祭祀 居住	古代	礎石建物	2 山岳信仰関係の施設。8世紀の須恵器水瓶や鉄鈴などの遺物と斜面立地の礎石建物・性格不明石組遺構。	
		斜面石組		2
		竪穴住居		8
居住	古墳	掘立建物	1 集落は中期が中心前期は小竪穴が僅かにあり、後期は斜面下位に浅敷状の掘立建物。	
		竪穴住居		13
居住	弥生	竪穴住居	トンネルで屋外の土坑と連結する竪穴住居がある。竪穴の大部分は板材の主柱穴を持ち、焼失した割合が高い。斜面への傾斜変換線に構列がいくつも展開。構外の斜面には矢倉状建物がある。鉄鏝9点出土。	
		トンネル土坑付竪穴		8
		掘立建物		10
		構列		17
居住	縄文	竪穴住居	7 前期の竪穴と埋壘。石器多い。未掘の遺構が想定される。	
		埋壘		3

## 3 まとめ

1 中世以降 天明の浅間山大爆発を契機として、観音山地区は高地開墾・庚申山地区は信仰地として開発がなされた。その以前から耕地は高地が多く、その復興を目的に本遺跡を含む高瀬山で開墾を始めている。観音山東支尾根全体(長250m幅70m)を範囲とする中世の城跡の帯曲輪の一部を検出した。

2 古代 庚申山地区の急斜面地に焼失した礎石建物、また石組遺構など特異な遺構が見られ、須恵器水瓶や鉄鈴のような極めて信仰色の濃い稀少な遺物が出土した。近接する式内名神社の貫前神社(中世には上野一ノ宮)と深いつながりのある山岳信仰の中心地であっただろう。

3 弥生・古墳時代 観音山地区では、古墳中期に中央尾根上で鍋川流域では大規模の集落が短期間展開する。また同時期の他の集落に比べ、かなり多量に祭器類を竪穴廃棄後に献納する習俗を多くが持ち続けた。定義上、高地性集落にあたる大集落が、弥生後期後半に急速に膨張し終末に激減する。要害地形での立地に加え、木柵・矢倉状建物さらに堀が存在し鉄鏝が多い。緊張関係の反映だろう。大規模な水田耕作の存在は考えにくく、社会変動期における西日本と東日本を結ぶ交通要地として流通の拠点であったと想定できる。

4 縄文時代 前期後半の諸磯b・c期の集落で石器類が大量に出土。在地原石の硬質泥岩と信濃からの搬入原石の黒曜石の剥片剥離作業を行っていた。弥生時代の石器も混在している。



# 目次

## A 本文編

序 例言 凡例 抄録 目次

### 一 発掘調査

#### I 序 章

- 1 調査と保存の経過 岸田治男 1
- 2 遺跡の立地 2
- 3 調査の経過と方法 10
- 4 作業経過と周辺的环境 12

#### II 検出遺構と遺物

- 1 観音山地区
  - (1) 竪穴類・その他の遺構 13
  - (2) 旧石器試掘と保存範囲 177
  - (3) グリッド出土遺物 179
  - (4) 発掘範囲外採集遺物 192
- 2 庚申山地区
  - (1) 竪穴類・その他の遺構 193
  - (2) グリッド出土遺物 217
  - 時代別遺構分布図 218

### 二 調査成果

#### III 遺物の特徴

- 1 縄文土器 関根慎二 219
- 2 石器・石製品 麻生敏隆 222
- 3 弥生土器 大木紳一郎 229
- 4 弥生時代鉄器 250
- 5 古墳時代前期土器 友廣哲也 253
- 6 古墳時代中期土器 石塚久則・深沢敦仁 258
- 7 古代水瓶 268

#### IV 遺構の特徴

- 1 弥生時代の集落変遷と竪穴の形態 272
- 2 弥生時代木柵・掘立と焼土坑 280
- 3 火災遺構の問題 283
- 4 古代石組遺構と礎石建物 284
- 5 遺跡立地と地形との関係 285
- 6 黒曜石類と遺物埋没課程 296

#### V 分析成果

- 1 黒曜石分析 鈴木正男 298

2	出土炭化材の樹種	鈴木三男	304	
3	プラント・オパール分析	古環境研究所	323	
	4	出土種実	吉川純子	325
	5	<sup>14</sup> C年代測定	バレオ・ラボ	327
	VI 調査成果まとめ			
	1	中世以降	329	
	2	古代	329	
		時代別遺構分布図	330	
	3	弥生・古墳時代	332	
	4	縄文時代	332	
	VII 特 論			
1	中部高地千曲川水系の弥生集落の繋がり	小山岳夫	333	
2	北関東・北陸東部の弥生集落遺跡の立地	若林正人	338	
3	弥生時代北関東の集落立地とその様相	柿沼恵介	343	
	4	鑄川上・中流地域の弥生集落	井上 太	356
	5	弥生後期大型竪穴式建物の復元	石井榮一	360
	6	火災住居について	鈴木拓男	369
	VIII 保存・整備			
	1	富岡住民と遺跡保存	松倉絃洋	372
	2	史跡公園整備計画の概要	井上 太	374

## 三 資 料

### IX 索 引

資料編の利用法 377

遺構索引・遺物索引 378

summary 394

報告書抄録 396

## B 写真編

遺跡の立地(原色) PL.1

景観・環境・作業見学風景・関連遺跡(単色) PL.7

観音山地区遺構と遺物(単色) PL.29

庚申山地区遺構と遺物(単色) PL.202

## C 資料編

遺構一覧

遺物各種一覧

遺構内遺物出土重量一覧

## 一 発掘調査



# I 序 章

## 1 調査と保存の経過

岸田治男

関越自動車道越線(現上信越自動車道)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車道として、日本道路公団によって建設された。昭和47年に群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画の策定がなされ、日本道路公団は昭和54年に建設大臣より施工命令を受けている。次いで昭和57年には松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市が、昭和58年には群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)までの路線が発表された。

これを受けて関越自動車道越線の事実上の埋蔵文化財調査が開始されるわけだが、計画段階も含めて基本的な発掘調査に至る経緯を示す次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法を遵守すること、国・県・市町村の指定文化財を避けること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は道路通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡市～松井田町間、松井田町～下仁田町間について、『関越自動車道越線関連公共事業調査報告書』として群馬県(企画部交通対策課)より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い路線内の埋蔵文化財について、より具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、埋蔵文化財包蔵地を遺物分布密度の濃い地域・薄い地域・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定して、55遺跡を認定した(後の試掘調査により52遺跡に変更)。そして、埋蔵文化財発掘調査の基本方針を次のように策定した。

発掘調査終了年度を昭和65年度末(平成2年度末)とする。

群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、事業団が対応できない部分に調査会方式を導入して、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。

事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行う。

機関別対応面積は次のとおりとする。

- ・埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。
- ・調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

昭和61年度 4月に埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で調査を開始した。

中高瀬観音山遺跡は、平成元年度に上信越自動車道の建設工事に先立って当事業団の手により調査された。この調査中に弥生時代後期の大規模な拠点集落が発見され、その重要性が認識されて、遺跡の保存を要望する声が高まった。このため、日本道路公団では路線の設計変更を検討し、調査終了後の平成2年6月にはトンネル工法による遺跡の保存が決定された。

## 2 遺跡の立地

### (1) 地理的環境 [PL. 1～15]

#### A マクロの視点

本遺跡北の利根川支流鍋川は、水源の上信国境荒船山(海拔1422m)から約50キロ東へ流れ、関東平野に入った高崎市南部で、榛名山西側から南東流してくる烏川と合流する。さらに10キロほど東で利根川本流に合流する烏川は、他に上信国境の関東山地から流れる碓氷川と神流川を併せている。

鍋川の流域は、北の碓氷川との間に奇峰妙義山(海拔1104m)から続く比高100m弱の岩野谷丘陵が連なり、南は神流川との間に赤久縄山(海拔1522m)と西御荷鉢山(海拔1286m)をピークとする急峻な山脈が走り、その裾には河岸段丘が発達している。両側の山地に挟まれた現在水田となっている平地は南北の幅が1～3キロ程度と狭いが、鍋川の流れは平地が形成される富岡市南蛇井付近から東は大きな蛇行をしていないため、東西方向は眺望が良く開放的な景観を示している。そのため、鍋川流域(古代名は甘楽)全体は、東西走向の回廊地形として認識できる。

荒船山は頂上が長く平坦で、航空母艦のような特異な形状をしている。頂上北側の内山峠への断崖を含めて、背後の活火山浅間山(海拔2542m)と共に、広く関東平野北部全体から識別できる。碓氷峠などその他のいくつかの関東山地の峠を超えると、千曲川上流の長野県佐久地方に達する。千曲川は下流では信濃川と呼ばれて新潟で日本海に注いでいる。すなわち、荒船山周辺は本州の分水嶺にあたるが、前後には通行がそれほど難しい峠が多い。

また佐久地方から南西には蓼科山塊が広がるが、遠く瀧に流れる天竜川源流の源訪問に達することはいくつかの峠を経て容易である。衛星写真からも明らかなように、甘楽回廊は中部山地へ深く入り込んだ関東平野の最西端であると同時に、本州中部山地の末端としても見る事ができる。

#### B ミクロの視点

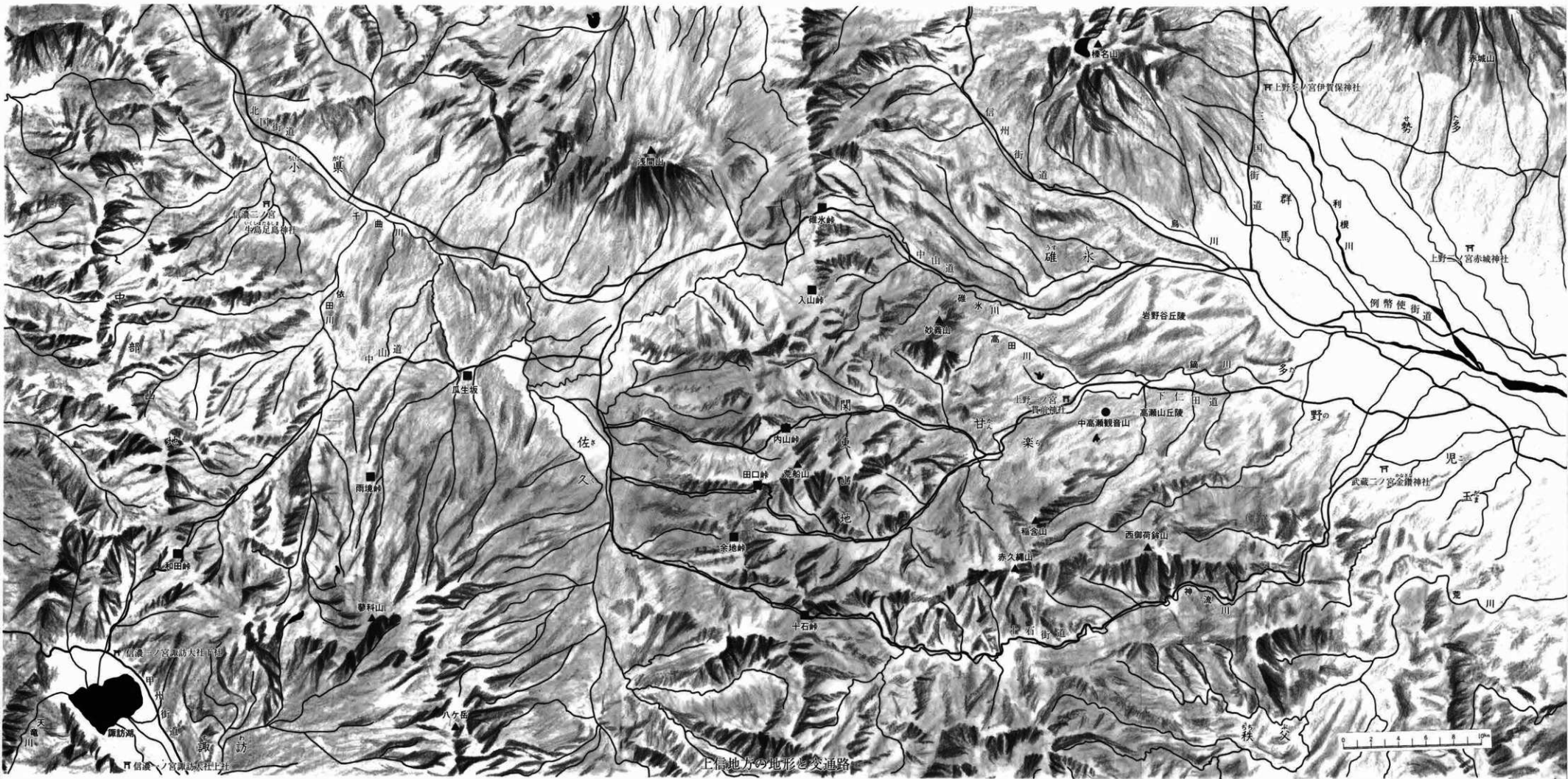
本遺跡の乗る鍋川右岸の高瀬山丘陵(海拔約250m別名北山・離れ山)は東西に細長く延びており(約東西3.5km南北0.5km)、北側の鍋川平地とは崖を形成する(比高約60m)が、南側の藪部・岡本地区平地との間はやや勾配が弱い(比高約40m)。また本遺跡の西の庚申山を境として、東側は鍋川上位段丘で頂部が平らだが、西側は丘陵地でほとんど平坦地は見られない。

本遺跡のある観音山尾根は、高瀬山の中ではほぼ唯一北側に向かって刻まれた東西の深い谷(西側ジョーコーヤツ・東側ホージョーヤツ)によって形成されている。また鍋川平地に向かって飛び出た形であるため、頂部が平らな台形状の形は、平地のかなり遠くからも識別できる。逆に尾根上からの眺望は、ささぎるもののない東西方向の鍋川全体はもちろん、西の荒船山から東は関東平野中の太田金山丘陵まで見渡せる。北側は低い岩野谷丘陵を隔てて榛名・子持・武尊・赤城などの山々の裾の広い平地全体を望み、また南西側では赤久縄山支峰の岩山稲倉山(海拔1370m)を仰ぐ位置になる。

鍋川平地を挟んだ北西側の対岸には、上位段丘である貫前神社の段丘を経て、妙義山が屹立している。北側の碓氷川流域での上信国境の各峠を下った場所が妙義山麓であり、そこから低い岩野谷丘陵を狭い部分を越えると鍋川支流の高田川に達する。貫前神社の位置は、高田川と鍋川の洪積末の合流点と推定されている。換言すれば、上信国境のどの峠を下っても無理なく貫前神社に達し、本遺跡の位置はその間近にあたる。

#### C 気象状況

稲倉山は、夏季の激烈な雷の発生地として知られている。妙義山方向からの雷も含め、高瀬山一体は落雷の被害が多い。冬季は妙義山方向からの激しい季節風が吹き続けるため、平地部より体感温度がかなり低い。



上信地方の地形と交通路





## (2) 歴史的環境

本遺跡地をとりまく歴史的に重要な要素は、次の二点に集約できる。

### A 上信間の交通路

近世においてこの甘楽回廊には、下仁田道と通称する中山道の脇往還が走っていた。五街道の中山道は、越後への三国街道の分岐点が甘楽回廊入口の藤岡から高崎に移ったことにより、岩野谷丘陵北側の碓氷川に沿って信濃へ向かった。しかし、中世以前においては、この甘楽回廊ルートがより主体的な役割を担っていた。本遺跡の直下も含めた上位段丘の下を鎌倉街道の名が残る古道が走り、その周辺には多くの中世遺跡が展開している。

そして、例えば近世においては米作の乏しい当地が信州米の関東への搬出拠点になっていたこと、中世においては在地の小幡氏が甲斐武田氏の勢力下に入ったことや木曾義仲の本拠が下流の多野郡(旧多胡郡)であったことなど、当地方と信濃の濃い結びつきを示す事象は数えきれない。今日富岡周辺の人々は、距離的に遠く峠を越えねばならない信濃佐久地方に対して、より近い下流の上野平野部各地に比べ親近感を抱いている。そこに物資と人間の頻繁な往來の深い歴史を持つ交通路の存在が感じられる。

同時に当地方は、さまざまな石材原料の産地でもある。近世に関東でも屈指の存在であった砥沢(しもとら)の砥石、古墳から石塔までの大型の石材である天引(あまひき)(甘楽町)の牛伏砂岩、そして板碑の原材料として有名な片岩や古墳時代に遠くまで運ばれた滑石などは多くの場所で産出する。

古墳時代の峠の祭祀遺跡として有名な信濃の入山峠・瓜生坂・雨境峠を越えて行った先には、旧石器時代以来、東日本有数の黒曜石石器原料供給地である和田峠に至る。直線で60km強の距離は、決して遠いものではない。

本遺跡から鍋川の対岸は七日市と呼ばれ、近世には前田藩の陣屋が置かれた。中世に貫前神社と富岡の中間のこの地に、定期市がたっていた可能性は高い。交通路にはどんな形にせよ宿駅が必要であり、その初現的なものは市であろう。扇の要として地形的に各峠からのルートが集まる本遺跡周辺には、市ができる要件は古くからあったと見て良い。

### B 貫前神社

上野国一ノ宮の呼称を持つこの神社は、赤城神社(赤城山)・伊賀保神社(榛名山)と並んで延喜式では上野の三名神大社になっている。9世紀以降、貫前・抜鉾両神の名で畿内の文献にもしばしば登場している。もちろん中世には14世紀の神道集にも2ヵ所で現われたり、豊富な奉納鏡から見ても、その信仰の大きさが知られる。尾崎喜左雄の研究より、この神社は稲倉山を神体とする在地物部氏の信仰と荒船山を神体とする渡来系氏族の信仰が合体したものとされている。

しかし、独立峰として雄大な裾野を広げる赤城山や榛名山に比べ、それぞれ峰の一部程度でそれほど美麗な山容を持っているわけではない両山への信仰が、なぜ優位を占めるのか。また古代国府推定地から離れて有力神社が存在する例は少なくはないが、農業生産力から見て赤城信仰地や榛名信仰地の平野部に比べ決して優位とは考えられない当地方の信仰中心地が、なぜより脚光を帯びるのか。

それは、雷神としての稲倉山の激しさと同時に、荒船山が象徴する西方への交通の安寧が、多くの人々を引きつけたのではないと思われる。前述のように、内山峠方向の鍋川と碓氷・入山峠方向の高田川が僅か40m弱まで近接する地点が鎮座地である。なお本遺跡から貫前神社まで直線で2.5kmだが、共に段丘上にあるために、お互いに指呼の間と呼べる眺望である。

## I 序 章

## 周辺の遺跡一覧

(P: 旧石器 J: 縄文 Y: 弥生 F: 古墳 D: 古代 C: 中近世)

番号	遺 跡 名	P	J	Y	F	D	C	文 献	番号	遺 跡 名	P	J	Y	F	D	C	文 献
1.	中高瀬願首山	+	+	+	+	+	+	本書, 富, 1993B	79.	丹生東城							
2.	同庚中山地区	+	+	+	+	+	+	本書	80.	丹生城							
3.	七日市願首前	+	+	+	+	+	+	富, 1994	81.	丹生城西	+	+	+				富, 1992E
4.	七日市古墳群								82.	五分一	+						富, 1992E
5.	六反田					+		富, 1987C	83.	松原							
6.	小沢田	+						富, 1989	84.	千足				+	+	+	富, 1992E
7.	小塚	+	+			+		富, 1987C, 90D	85.	八木通覚館				+	+	+	砂, 1990
8.	辻平		+	+		+			86.	下丹生山口	+						
9.	寛八木		+	+	+	+			87.	三笠山岩除				+			
10.	阿曾岡・権現堂	+	+						88.	相田古墳							
11.	山下								89.	山口古墳							
12.	本谷・郷土							富, 1981	90.	千足古墳							
13.	一ノ宮古墳群	+				+			91.	金栗塚古墳							
14.	横瀬古墳群					+		富, 1990C	92.	塚土谷津の磐							
15.	一ノ宮氏館跡								93.	長直の磐							
16.	浅香入城								94.	内匠城							
17.	岩染城								95.	天皇塚							
18.	野上之磐								96.	善慶寺古墳群							
19.	野上塚之入	+	+			+		埋, 1991	97.	善慶寺早道場	+			+			埋, 1994F
20.	内匠日影岡地	+	+	+		+		埋, 1992	98.	天王塚古墳							
21.	下高瀬寺山	+	+	+		+		埋, 1995	99.	二日市古墳							
22.	田塚中原	+	+					埋, 1990	100.	皇の森稲荷古墳							
23.	内匠上之府	+	+			+		埋, 1993B	101.	栗					+	+	博, 1963, 66
24.	内匠諏訪前	+	+			+		埋, 1992A	102.	尾島古墳群							
25.	下高瀬上之原	+	+			+		埋, 1994C	103.	眞ノ沢							
26.	北山茶臼山西古墳								104.	宮戸	+	+					
27.	北山茶臼山西古墳							埋, 1988	105.	巾下	+	+					
28.	芝宮古墳群							富, 1992C	106.	ウツギクネ	+						
29.	上田籬古墳群							富, 1984	107.	小倉	+						
30.	田籬上平							埋, 1989	108.	赤谷平	+						
31.	原田籬古墳							富, 1984	109.	伏魔	+						
32.	久保								110.	二ツ石	+						
33.	長久保古墳群								111.	入山							
34.	陣屋								112.	甘藷桑里	+	+					
35.	菅原	+							113.	稲荷北	+	+					甘, 1983-87
36.	内匠							富, 1982	114.	佐久間					+	+	甘, 1988
37.	原田籬							富, 1984	115.	中原古墳							
38.	内匠日向岡地	+				+		埋, 1995	116.	天引古墳群							
39.	塚原古墳群								117.	天引城							
40.	砂部塚古墳								118.	庭谷城							
41.	例行古墳群								119.	大山古墳群							
42.	清水入古墳群								120.	白倉城							
43.	諏訪谷古墳群								121.	国陣城							
44.	下田籬古墳群								122.	日向山							甘, 1976
45.	坂詰	+						富, 1990A	123.	天引風崎	+				+	+	富, 1992D
46.	田籬塚原	+							124.	天引向原	+						埋, 1994BDE
47.	柳河古墳群								125.	白倉下原	+					+	埋, 1994BDE
48.	中高瀬	+							126.	長根安坪	+					+	埋, 1994BDE
49.	中村	+							127.	下小塚・三ツ俣館	+					+	
50.	一ノ宮押出	+	+					富, 1995	128.	堀之内							砂, 1989
51.	貫前神社								129.	八木通達沢						+	砂, 1990
52.	黒川	+							130.	古立中村	+					+	砂, 1990
53.	御嶽塚古墳								131.	古立栗山	+					+	砂, 1990
54.	稲荷森	+						富, 1980	132.	大久保共同墓園	+					+	
55.	恵下原	+							133.	諸戸日影	+						
56.	早道場								134.	菅原川後石	+						
57.	市子塚・山ノ上	+							135.	菅原城							
58.	中山	+							136.	高田城(後期)							富, 1991
59.	内出 I	+	+					富, 1992E	137.	諸戸城							
60.	前畑	+						富, 1992E	138.	行沢城							
61.	南蛇井増光寺	+	+					埋, 1992B93A94A	139.	鎌田	+	+				+	
62.	南蛇井古墳群	+	+						140.	柳瀬							
63.	上小森古墳群								141.	大塚古墳							
64.	神農原古墳								142.	竹ノ上古墳							
65.	朝塚古墳								143.	尾屋敷城							
66.	神農原	+							144.	桐ノ本坂城							
67.	野上中山古墳								145.	中沢平賀界戸	+					+	
68.	輪戸原 I Ⅱ	+	+					富, 1992B	146.	松葉慈学寺	+					+	甘, 1994
69.	西平原	+	+					富, 1992B	147.	上野寺場	+					+	
70.	大島上城							埋, 1988	148.	上人見向原	+						
71.	塚之入城	+						埋, 1991	149.	下高田島田						+	砂, 1987
72.	大島下城								150.	住連引原 I Ⅱ	+						安, 1987, 88
73.	赤部屋敷								151.	下原	+						
74.	宮崎城								152.	中原							
75.	神成城								153.	天神 I	+					+	甘, 1994
76.	宇田城							富, 1990B	154.	天神 II	+					+	甘, 1994
77.	高田城							富, 1991	155.	西原	+	+				+	甘, 1994
78.	高田西城	+															



周辺の遺跡分佈





周辺の遺跡に記したもので明記した文献は、以下の発掘調査報告書である。その他は富岡市.1987『富岡市史 自然編・原始古代・中世編』他、甘楽町・妙義町などの市町村史による。

発掘調査報告書関係文献一覧(遺跡調査会編集のものも当該市町村分に入れた。)

安：安中市教育委員会

- .1987『注連引原遺跡』
- .1988『注連引原Ⅱ遺跡』

甘：甘楽町教育委員会

- .1976『国峰城遺堀発掘調査報告』(手書き)
- .1983『甘楽条里遺跡1』
- .1984『甘楽条里遺跡2』
- .1985『甘楽条里遺跡3』
- .1986『甘楽条里遺跡4』
- .1987『甘楽条里遺跡5』
- .1988『佐久間遺跡』
- .1994『天神Ⅰ遺跡・天神Ⅱ遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡』

塚：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- .1988『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』
- .1989『田篠上平遺跡』
- .1990『田篠中原遺跡』
- .1991『野上塚之入遺跡・塚之入城遺跡』
- .1992A『内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡』.1992B『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』.1992C『神保下条遺跡・天引口明塚遺跡』
- .1993A『南蛇井増光寺遺跡Ⅱ』.1993B『内匠上之宿遺跡』
- .1994A『南蛇井増光寺遺跡Ⅲ』.1994B『天引狐崎遺跡Ⅰ・白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』.1994C『下高瀬上之原遺跡』
- .1994D『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』.1994E『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』.1994F『善慶寺早遺跡』
- .1995『内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡』

博：群馬県立歴史博物館

- .1963『笹遺跡』
- .1966『笹遺跡遺物編』
- .1972『富岡5号古墳』

山：山武考古学研究所

- .1991A『妙義町の遺跡(1)』.1991B『大国家2号墳』
- .1993『妙義町の遺跡(2)』

富：富岡市教育委員会

- .1980『稲荷森遺跡』
- .1981『本宿・郷土遺跡』
- .1982『内匠遺跡』
- .1984『上田篠古墳群・原田篠遺跡』
- .1987A『桑原遺跡群』.1987B『中島遺跡』.1987C『小塚・六反田・久保田遺跡』
- .1988『上ノ宿・千足遺跡』
- .1989『小沢西遺跡』
- .1990A『新井・板詰遺跡』.1990B『宇田城址』.1990C『横瀬古墳群』.1990D『小塚遺跡Ⅱ』
- .1991『高田城址』
- .1992A『井戸沢遺跡』.1992B『頼戸原Ⅰ・頼戸原Ⅱ・西平原』.1992C『芝宮古墳群』.1992D『日向山遺跡』
- .1992E『前畑・内出Ⅰ・丹生城西・五分一・千足遺跡』
- .1993A『前田遺跡』.1993B『中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書』.1994『七日市観音前遺跡』
- .1995『一ノ宮押出遺跡』

妙：妙義町教育委員会

- .1987『妙義東部遺跡群(Ⅰ)』
- .1989A『妙義東部遺跡群(Ⅱ)』.1989B『中世虻田遺跡』
- .1990A『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連磐石遺跡・八木連磐畑遺跡』.1990B『花立遺跡』

### 3 調査の経過と方法

- ＜調査地点＞** 本遺跡の発掘調査は、前述のように上信越自動車道用地について当事業団が2回実施し、その後範囲確認試掘調査を県教育委員会が1回と富岡市教育委員会が2回行った。
- なお、中高瀬遺跡の名で1977年に市教育委員会が弥生土器片と石鏃などを採集した地点は、本遺跡の下の平地で西に800m離れた地点である。また1894(明治27)年に住民により三角縁神人竜虎画像鏡などが発見された北山茶臼山古墳は、同じ高瀬山の頂部の西1kmの山頂にある。
- 本遺跡は高瀬山西部の中世塚天皇塚の北側に延びる観音山尾根を中心とする。そして西にジョーコーヤツをはさんで庚申山尾根があり、東の二つに分かれたホージュオーヤツの対岸は下高瀬山遺跡として調査した寺山尾根になる。いづれもホージュオーヤツの下にある曹洞宗光厳寺に関係する地名と思われる。ホージュオーヤツが下高瀬と中高瀬の境界になっており、また天皇塚南側の農道が高瀬地区と額部地区の大字界になっている。
- ＜調査経過＞** 次頁図に示したように、観音山地区調査地点は天皇塚周辺より20m弱低く平坦部の幅は50mほどで、東西両側は斜面になる。第1次調査開始の時点での調査予定地は、観音山尾根の平坦部のみだった。しかし、調査用の道路を造成する課程でジョーコーヤツ側の急斜面から大量の遺構が現れたため、調査範囲は両側の斜面に拡大し、また小尾根「東尾根」も対象となった。弥生遺構の集中した西側斜面は平均15度前後の急勾配であった。
- さらに移築された庚申塔の調査だけであった庚申山尾根についても、第1次調査中に試掘を行って弥生遺構の存在が明らかになったため、可能な限り20度近い急斜面の調査を行った。なお、調査範囲外の庚申山南側尾根は、第1次調査開始以前に削平されている。
- 第1次調査は、本遺跡の保存検討のために未掘の弥生堅穴を多く残しながら中断した。調査の中断状況は各遺構によって異なるが、保存検討の対象となったのは観音山地区中央尾根上と両側斜面の上位のものだけである。埋め戻しは、各遺構に砂を入れた後に合成樹脂シートをかけ、その後土を入れている。第2次調査は、高速道路のトンネル工法設計変更に伴って非保存部分となった観音山尾根両側斜面下位の部分を行った。県教育委員会と市教育委員会の範囲確認調査は、図のように観音山尾根全体と天皇塚周辺の平坦部に及んだ。
- ＜標準土層＞** 観音山地区と庚申山地区は、共に強風の影響を受けることもあって、表土層の残存が極めて少ない。尾根上では10cm程度しかない場合も多く、そのような薄い表土層の直下が地山となる単純な層序である。しかし地山は、観音山地区が浅間室田軽石(As-Mp)層を含むローム土だが、庚申山地区は礫(通称ゴンベイ岩)を大量に混在するシルト質の褐色土で全く異なる。
- ＜調査方法＞** いづれも重機による表土掘削と共に廃土を行いつつ発掘を行ったが、急斜面での作業のため全ての点で困難なことが多く、特に各季節の自然の影響を強く受けた。また凡例で記したように、当初調査期間が限られた中での作業進捗を目的として、写真測量による遺構平面図作成を委託し遺物取り上げを行ったが、予想以上に誤記が多かった。
- ＜その他＞** 困難な中ではあったが、調査中に大きな人的損傷を受ける事故がなく、また周辺住民を中心とする大勢の見学者が訪れてくれたことが、調査にあたっての最大の援助となった。なお、検出した遺構の中で多くの関心を呼んだ大型火災堅穴075号遺構の大量の炭化材については、物理的に保存することができなかつたため、すでに存在していないことを付記しておく。



## 4 作業経過と周辺環境【PL.16~26】

＜土木的課題＞ 斜面での調査にはさまざまな問題に直面したが、前節で触れたように作業道の建設が最初の難関だった。表土掘削用の大型機械を尾根上に上げるには、道路の建設は避けられない。

続いて廃土の処理も非常に困難な課題であった。大型機械で掘削した表土だけではなく、調査中に絶えず増加する発掘土をどのように移動するかについては、終始問題となった。基本的に尾根上には簡単な形では廃土は置けない。表土分は当初東谷の一部に張り付け、雨水による流出防止措置を施したが、それ以後の発掘土の追加仮置きは不可能だった。

斜面の中位あたりの調査では、落下台を作っての手作業でも何とかしのげたが、尾根上の本格的な調査ではやはりベルトコンベアーに頼らざるをえない。とすると次には、いかに重いベルトコンベアーと発電機を尾根上まで上げるかという課題も生じてきた。

＜作業の安全＞ まず、斜面での調査の際には、転落が最も危ぶまれた。特に西斜面は谷底まで30m以上あるため足がすくむ感覚にとられる。そのような場所での入った一輪車を水平方向とは言え押す作業は、危険なことは間違いない。そのため、三重の転落防止柵設置を奮戦に頼んだ。

また谷底に設けた調査事務所までの比高40mほどの昇降は、平均年齢50代後半以降の作業員にとって、決して楽な労働ではない。そのため尾根上にテントによる簡易休憩所を設置したが、そこまでの飲料水の給水も簡単ではなかった。

それ以上に最も危ぶまれたのが、落雷の危険である。避雷針を設置して安全通路を設けると共に、事前に雷雲の動きと気象情報を察知しようと心がけた。そして、谷底の事務所のラジオより得た危険情報を即座に伝えるように、当初調査対象外であった庚申山尾根上に事務所から有線の警報装置を設置した。

前述のように、結果としては重大な事故は発生しなかったが、冬季における手作業での道路から調査地全ての除雪作業も含めて、常に安全対策には苦慮させられている。

＜見学会と住民＞ 遺跡地は、富岡の市街地に近いにも関わらず、地理的な条件のため、通常はほとんど住民に接する機会はない。上記のような困難な作業の中で徐々に異常な高地にある弥生の大集落が姿を見せ始めて来ると、やはり少しでも多くの住民に知ってもらいたいと考えた。

そこで、当初の予定期間では調査終了が全く不可能であることが判明した89年7月から月例の見学会を開始し、併せて調査成果を伝える簡単な報告紙を定期的に地元各戸へ配布した。

第1回の見学会に集まった人は10人ほどだったが、次第にその数は急増していった。大きく報道された11月に行った本格的な見学会では、4万人の人口の町で1,000人を大きく越える見学者が集まった。そして「中高瀬観音山遺跡を学ぶ会」を中心とする保存運動が急速に巻き起こった。

＜周辺の文化財＞ ホージョーヤツ下には中世に創建の光厳寺がある。そこに面した観音山尾根斜面には、近世の石仏が多数残されている。小字名の由来と考えられる観音信仰関係のものが多く。

一方、庚申山尾根上にあった近世後期の百庚申は、調査に入った時点ですでに谷底に移築されていた。天明の浅間山大噴火被害からの復興を企図した信仰物だが、その姿は住民にとってこの尾根の精神的な意味を感じさせてくれる。



## II 検出遺構と遺物

### 1 観音山地区

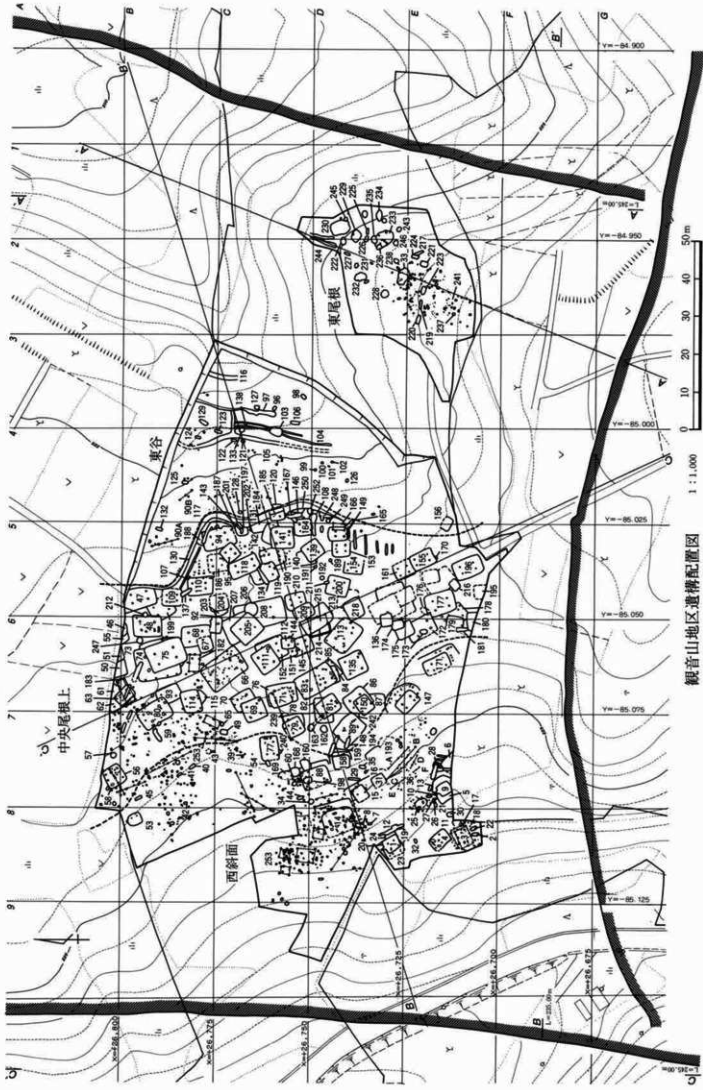
#### (1) 竪穴類・その他の遺構

観音山地区は調査面積13,000㎡で、地形的に西斜面(海拔215～230m平均傾度12～20度)・中央尾根上(海拔228～233m平均傾度1～5度)・東谷(海拔220～232m平均傾度7～20度)・東尾根(海拔223～232m平均傾度10～14度)に分かれる。西斜面はジョーコーヤツの右岸にあたり、東斜面はホージョーヤツ左支谷の源頭部である。各部分での時代種類別の遺構の検出状況は、次のとおりである(時代・種類が断定できないものも含める)。

		西斜面	中央尾根上	東谷	東尾根	合計
近世	建物	0	0	1	0	1
	溝	0	1	1	1	3
	道	0	2	0	0	2
	土坑	20	6	20	11	57
中世	曲輪	0	0	2	0	2
古代	竪穴	0	3	0	0	3
	土坑	0	1	0	0	1
古墳	竪立	1	0	0	0	1
	竪穴	3	10	0	0	13
	土坑	1	1	0	0	2
	風倒木	0	1	0	0	1
弥生	竪穴	18	76	1	0	95
	竪立	7	3	0	0	10
	構列	15	0	2	0	17
	柱穴	1	1	0	1	3
	土坑	7	6	1	0	14
縄文	竪穴	2	2	0	3	7
	土坑	1	6	0	12	19
	集石	1	0	0	0	1
	不明	1	0	0	0	1
不明	竪穴	1	0	0	0	1
	土坑	0	4	0	0	4
	谷?	0	0	1	0	1

以下、調査時に従い西斜面部分から東尾根への順で見て行く。そして各部分ごとに原則として北東方向から南西方向への順(グリッド順)で、検出した遺構群を出土遺物と共に報告する。

なお、次頁図に示した中央尾根上部分の破線は、平面形を確認したが遺跡保存のために発掘しなかったもので、多くは弥生時代の竪穴である。またここでは弥生時代竪穴の下に縄文時代の遺構がまだ存在していた可能性はあるが、やはり保存のため確認していない。

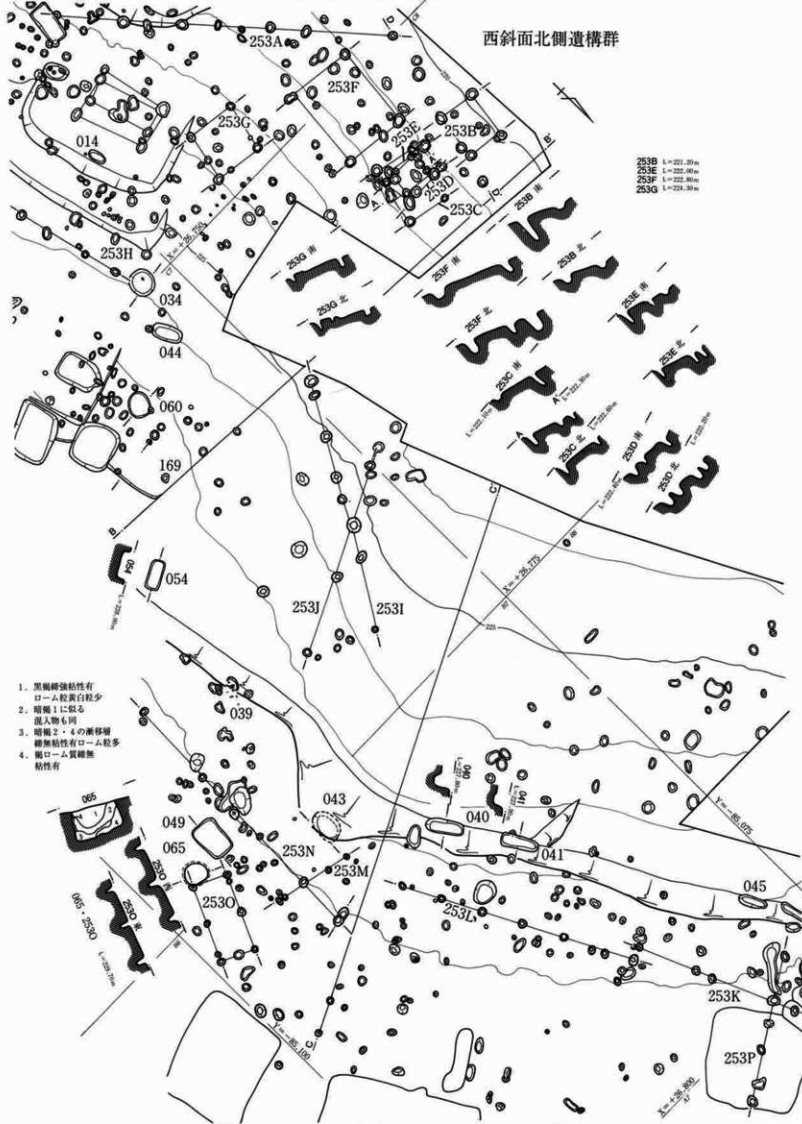


観音山地区遺構配置図

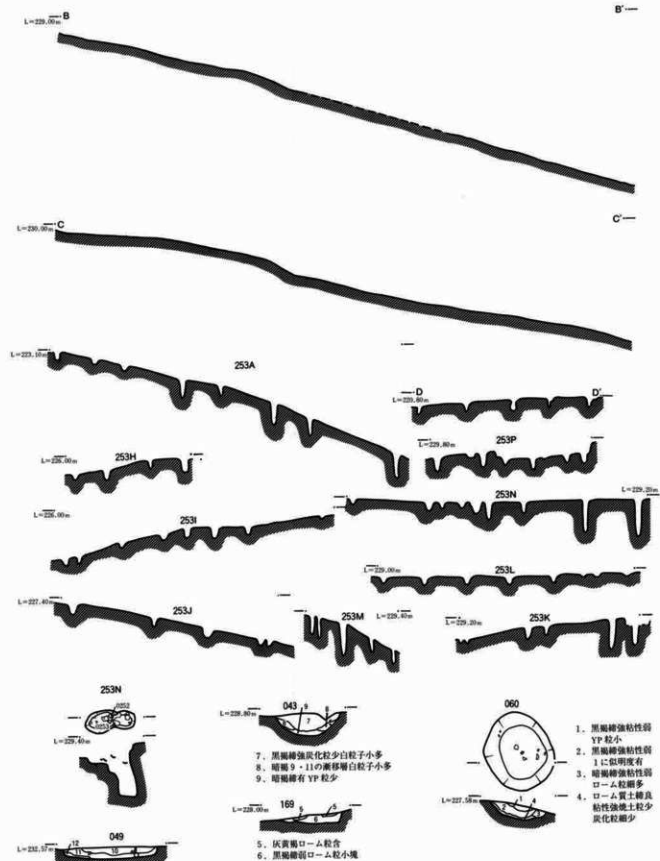
1 : 1,000



西斜面北側遺構群



1. 黒層輝強粘性有ローム粒裏白粒少
2. 階層1に似る炭化物含有
3. 階層2・4の黒層輝強粘性有ローム粒多
4. 層ローム質跡無粘性有

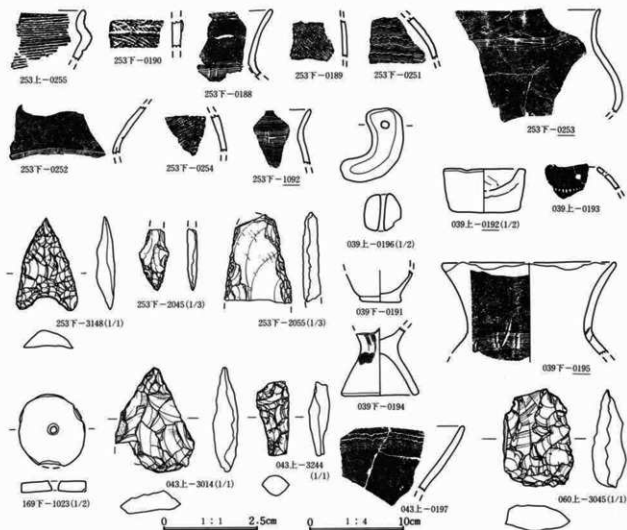


7. 黒層輝強炭化粒少白粒子小多
8. 階層9・11の黒層輝白粒子小多
9. 黒層輝有YP粒少
5. 灰黄層ローム粒含
6. 黒層輝弱ローム粒小塊
10. 暗層輝強YP粒ローム粒大粒子含
11. 暗層輝強ローム粒少
12. 暗層輝強ローム質

1. 黒層輝強粘性弱YP粒少
2. 黒層輝強粘性弱
3. 暗層輝強粘性弱ローム粒多
4. ローム質土層具粘性強土粒少炭化粒細少







## 西斜面北側遺構群

【図p.15~19 PL.29~32】

海拔220~229mの間で多くの遺構が確認された。最大傾斜は南側に近い部分(A断面)で16度、中央の沢頭状の緩斜面(B断面)でも11度の傾斜の部分である。この部分の傾斜が急であるだけでなく、同じかそれ以上の勾配で比高40m下の谷底までそのまま傾斜が続いている地点である。

時代ごとの種類は、次の通りである。

近世 土坑 040,041,044,045,054各号

弥生 掘立 253B,253C,253D,253E,253F,253G,253H各号

横列 253A,253I,253J,253K,253L,253M,253N,253P各号

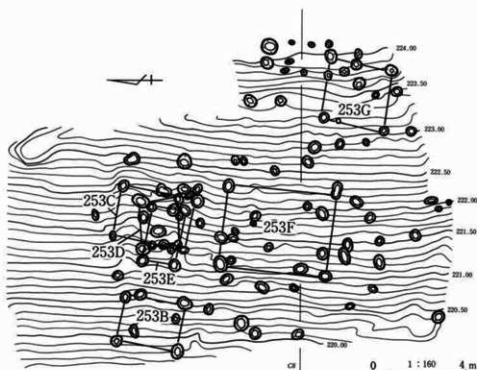
柱穴 039号

土坑 043,169両号

弥生? 土坑 049,065両号

この部分は、当初弥生竪穴014号の壁外柱穴を確認するためにその周辺から調査したが、急斜面にもかかわらず上記のような数多い弥生のピットを多数検出し、最終的には図に示したように西斜面北側上部全体の広範囲に展開した。その中で掘立あるいは横列として認定できたものみに遺構番号を付与した。

## II 検出遺構と遺物



急斜面掘立群拡大図

横列は、中央尾根上との傾斜変換線に沿って重なるものが253K, 253L, 253N各号で、特にL号は柱穴間隔が均等に近い。253M, 253P両号の横列はそれらの傾斜変換線に直交する方向に短く走っている。これらに接する尾根上の平坦部は、弥生の堅穴が見られず広場状の空間になっている。

N号の最北端の柱穴(深1.1m底径0.4m)では、確認面からやや下がった位置で立った状態での複数の弥生土器片(0252, 0253 4期)を検出した。柱痕に相当する中央部分には土器片がなかったため、柱止め用の埋設と思われる。なお、この柱穴は谷側に傾斜していた。

単独の柱穴にしかならなかった039号でも、似た状態で弥生土器片が多く出ている。ただし、ここでは土製勾玉(0196)とミニチュア(0192)が上層から出土した。これらは胎土より弥生土器と同時代であることは間違いないが、柱止め用途のために埋設したとは考えにくい。単独存在であることも含めて、この遺構は異なった役割があった可能性も否定できない。

横列253A, 253I, 253J各号は斜面の傾斜方向と平行して走ることになるが、ちょうどこれらの内側は、沢頭の南側で小さく尾根状に盛り上がった部分の際にあたる。

また1×2間の掘立253O号は、すでに平坦部分の立地になる。この周辺に弥生もしくはその可能性のある性格不明の土坑043, 049, 065各号が見られる。

海拔227mと228mの等高線の間には0.5mほどの段差の続きが見られる。そこには一連の短冊形の近世の土坑が連なっていた。高地開墾に伴う傾斜面の造成で、土坑群はその関係で掘られた貯蔵用のものだろう。

0252と0253以外の253号出土の遺物(土器・石器)は、各掘立・横列から出土したものである。いずれも柱穴の内部から検出したが、意識的に入れたものではない。ただし各柱穴の埋土は弥生堅穴の下層と同一であり、石器類の所属時代は別にして、これらの掘立・横列が弥生時代後期(5期)の遺構であることは間違いない。

掘立では1×1間のものが、弥生堅穴014号の下側に集中する253B, 253C, 253D, 253E, 253F, 253G各号で

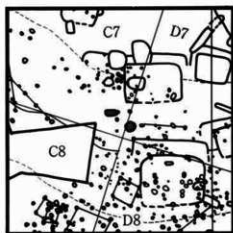
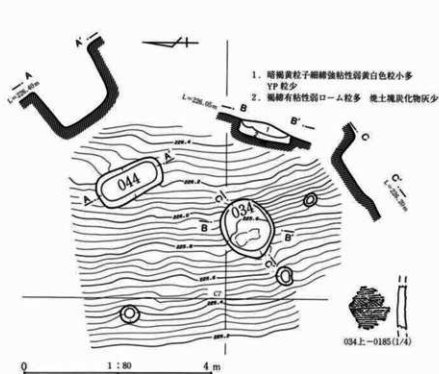
ある(拡大図前頁)。柱穴は深いものが多く、中でも253B号では0.8m近いものもあった。

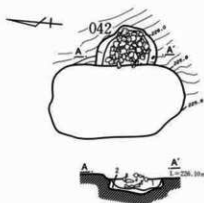
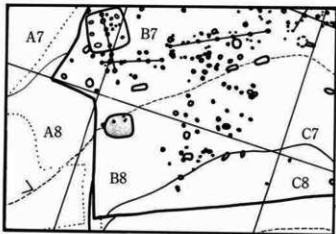
この掘立群で、特に253C, 253D, 253E各号は同一場所での重複であり、同じ場所にまだ柱穴が多いため、まだ同様の建物が建て替えられていた可能性がある。平均的な柱穴の深さは確認面からでも0.3-0.5mを測った。これらの建物より下位は、谷底に向かって全く何の遺構も確認していない。なお、走向が等高線と一致するのは、傾斜の状況から自然なことであろう。

発掘調査そのものに危険を感じたような急傾斜地点に、平坦面を造成しないで構築された遺構であり、極めて特異な性格を有すると思われる。

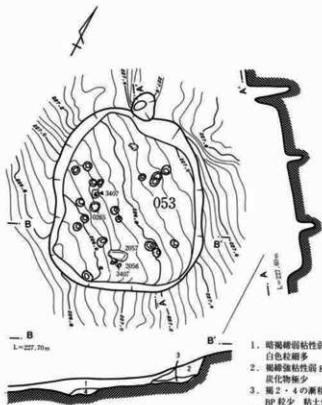
円形土坑034号と060号では、底に焼土と炭化粒子が沈着していた。その状態は、竪穴住居の炉と比べて凝固の度合いは弱く、非恒常的な屋外の燃焼施設と考えられる。両者の間は距離で3m、高さで1m強の間隔で、かなり近い。034号は縄文土器片の出土が上層より見られたただけだが、埋土の状況より弥生の遺構と考える。なお、034号北側の短冊形土坑044号は近世の貯蔵穴である。また南側には横列253H号が水平に走っている。

060号と重なる169号は土坑としたが、山側に0.1mほどの立ち上がりを持ち底が平坦であり、また広がりを持つため、竪穴の可能性も否定できない。ただ、炉や硬い床も検出できないので住居としては考えにくい。南北両側に未掘のピットがある。土師器の有孔円盤(1023)が出土しているが、南側で弥生の方形土坑168号に切られており、埋土下層中の破片重量率から弥生の遺構とした。

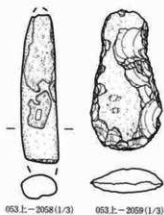




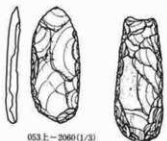
1. 黒褐色弱粘性弱炭化粒多
2. にぶい黄褐色粘土膠強粘性強白色粒細多



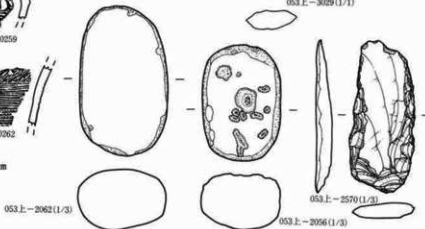
0 1:80 4 m



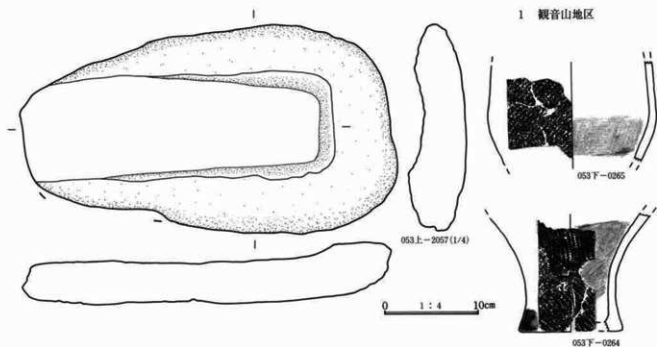
1. 暗褐色弱粘性弱 BP 粒少白色粒細多
2. 暗褐色強粘性弱 BP 粒多炭化物極少
3. 第 2・4 の層暗褐色有粘性有 BP 粒少 粘土化 BP 粒少
4. 暗褐色有粘性有 BP 粒塊



0 1:4 10cm  
1:3 10cm







### 042号遺構(B-8 G) 053号遺構(B-7 G) 【図p.20,21 PL.27~39】

西斜面北側の沢頭部分(勾配約7度)で検出した042号は、拳大の礫が多量に入っていた円形ぎみの土坑である。西側が攪乱されていたため、全体の正確な形状は確認できない。底は平らではなく、礫と共にかなり多くの炭化粒子が見られた。礫は特別な加工痕は見られない自然石で、他に遺物は全く出ていない。

時代認定する積極的な資料に乏しいが、同様の遺構は他の時代ではないため、縄文の集石土坑と推定する。沢頭北側斜面(勾配10度)で確認した053号は、楕円形ぎみの堅穴(9.5m<sup>2</sup>)。床はあまり明瞭ではなく、最終的には傾斜した状態で掘り上がったが、当初の状況であるかは確定できなかった。燃焼施設は不明。

主に南側を中心に小ピットが見られたが、柱穴とはっきり想定できるものはない。北側壁外のやや深いピットは地中動物穴である。

上層(1層)を中心に土器片と石器片がやや多く出土したが、掘り上げた床面に密着して正立する深鉢(0265)が見られた。内部に煤が付着していたため、埋燬炉として使われた可能性がある。とすれば使用時の床面は上位になるため、上層出土とした遺物はいづれも下層(2~4層)出土となりうる。なお南側で雲母石英片岩の大型の石皿(2057)が見られた。

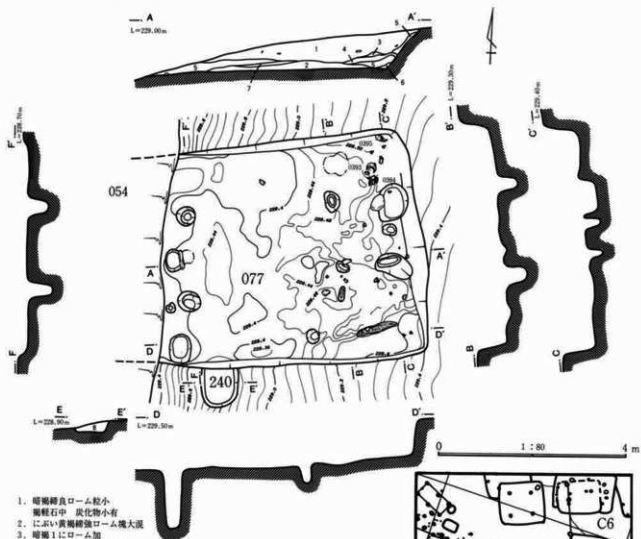
### 077号遺構・240号遺構(C-7 G) 【図p.22 PL.39】

077号は、西斜面頂部に近い傾斜10度の斜面に位置する弥生後期(1期)の堅穴。弥生の堅穴では唯一東西方向に主軸を持ったもの。谷側が1mほど割られ近世の土坑054号が重なる。また南壁では土坑240号を切っている。

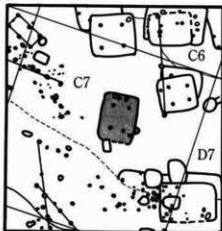
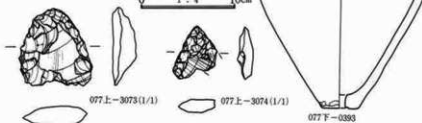
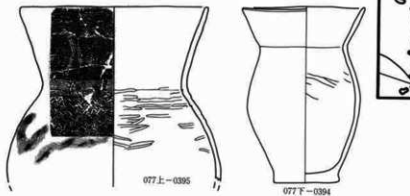
主柱穴は4本で、少なくとも南東側のものは板状の柱痕がある。西側に炉跡が見られ、東側の壁際へ入口ピットを検出し、その脇には貯蔵穴状ピットがあった。また南西壁近くにも深いピットがあるが、これはこの堅穴のものではなく、周辺の横列253号に関係するものだろう。有孔鉢(A393)と小型甕(A394)が、貯蔵穴状ピットの近くの下層(2~7層)で出土。焼失しており、南東側に炭化材が残っていた。谷側に炉を設けるなど、斜面立地の堅穴の中でも特殊な立地である。

240号は楕円形状の土坑で、底は平坦である。上層から弥生土器片のみ出土したが、埋土より縄文の可能性が考えられる。

## II 検出遺構と遺物



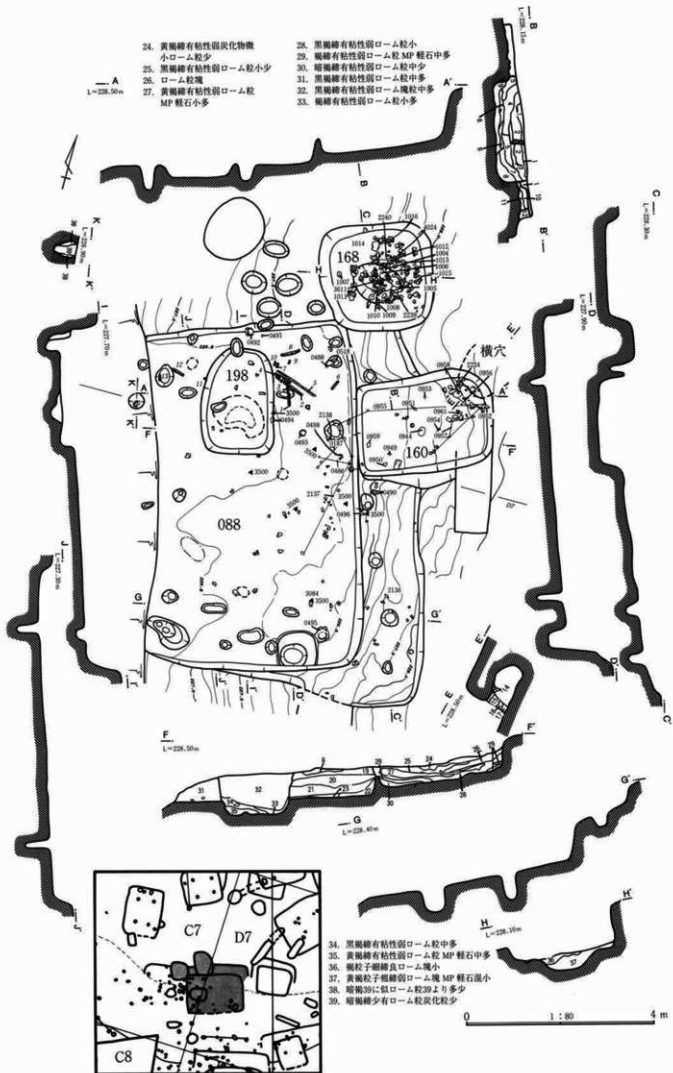
1. 暗褐色良ローム粒小  
軽石中 炭化物小
2. にぶい黄褐色強ローム塊大混
3. 暗褐色にローム加
4. 明黄褐色ローム二次堆積土  
炭化物少
5. にぶい黄褐色ローム粒塊多
6. 黄褐色ローム二次堆積土
7. 黒褐色ローム粒大少
8. 淡褐色ローム塊黒褐色少



088号遺構土層注記 (次頁図)

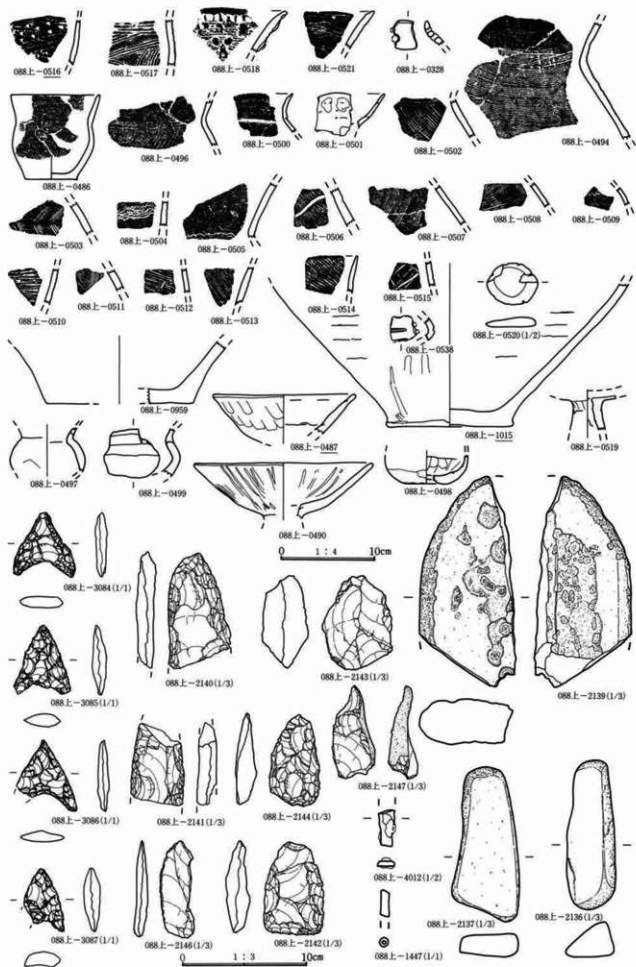
1. 灰褐色作土
2. 黒褐色弱ローム粒少
3. 黒褐色に似る暗褐色炭化物含
4. にぶい黄褐色弱ローム粒塊大
5. 概4に似る暗褐色ローム塊中大
6. 黒褐色弱混在物少
7. 黒褐色弱ローム粒中
8. 暗褐色弱ローム粒多
9. 8に似るローム粒中小塊中
10. 黒褐色弱ローム粒微小
11. 10とローム粒混
12. 暗褐色10に似る塊
13. 暗褐色強ローム粒層多
14. 暗褐色土粒子細粒良ローム粒微小器片混
15. 暗褐色土層に似る弱ローム粒微小炭化物含
16. 暗褐色土層に似る弱ローム粒多
17. 概15に似る炭化物粒多炭質汚粒混
18. 黄褐色ローム混強粘性有
19. 暗褐色有粘性弱ローム粒中少量炭化物含
20. 暗褐色有粘性強ローム粒小ローム塊多
21. 黄褐色有粘性強ローム粒中ローム塊多
22. 暗褐色有粘性弱ローム粒中多
23. 暗褐色強粘性強炭化材多

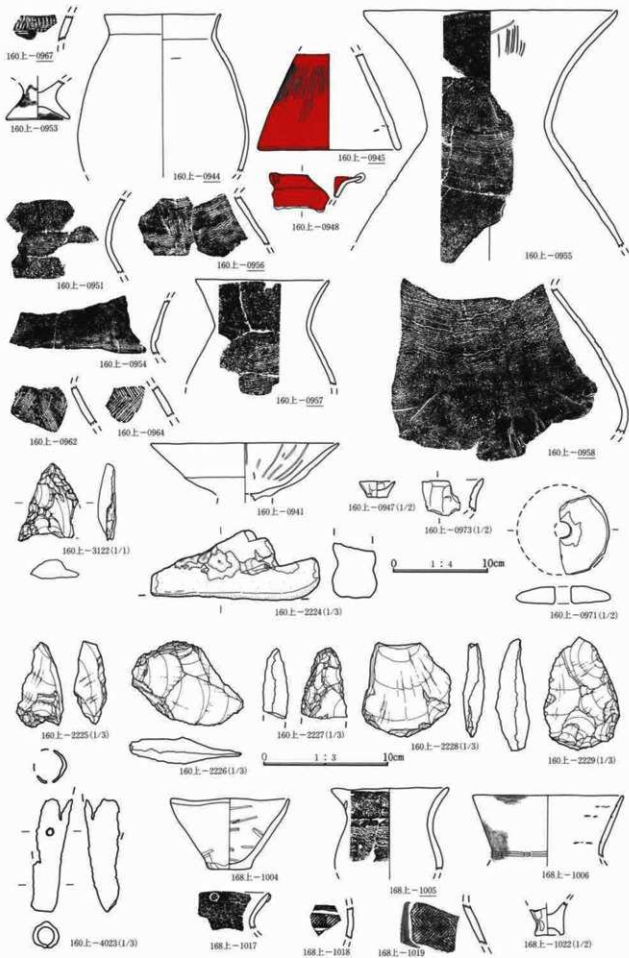
- |                            |                         |
|----------------------------|-------------------------|
| 24. 黄褐带有粘性团炭化物微<br>小ローム粒少  | 28. 黑褐带有粘性团ローム粒小        |
| 25. 黑褐带有粘性团ローム粒少           | 29. 黑褐带有粘性团ローム粒 MP 軽石中多 |
| 26. ローム粒塊                  | 30. 暗褐带有粘性团ローム粒中少       |
| 27. 黄褐带有粘性团ローム粒<br>MP 軽石小多 | 31. 黑褐带有粘性团ローム粒中多       |
|                            | 32. 黑褐带有粘性团ローム塊粒中多      |
|                            | 33. 黑褐带有粘性团ローム粒小多       |

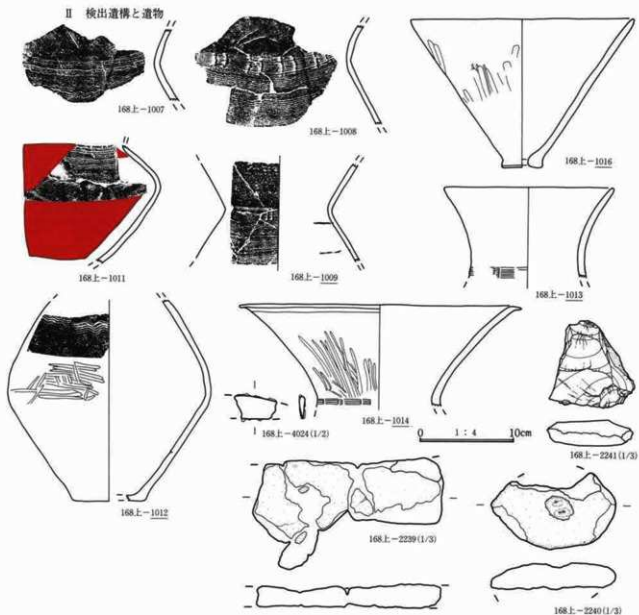


- |                         |
|-------------------------|
| 34. 黑褐带有粘性团ローム粒中多       |
| 35. 黄褐带有粘性团ローム粒 MP 軽石中多 |
| 36. 黄粒粗纤维ローム塊小          |
| 37. 黄粒粗纤维ローム塊 MP 軽石混小   |
| 38. 暗褐39に似ローム粒39より多少    |
| 39. 暗褐带有粘性团ローム粒炭化粒少     |

0 1:80 4m







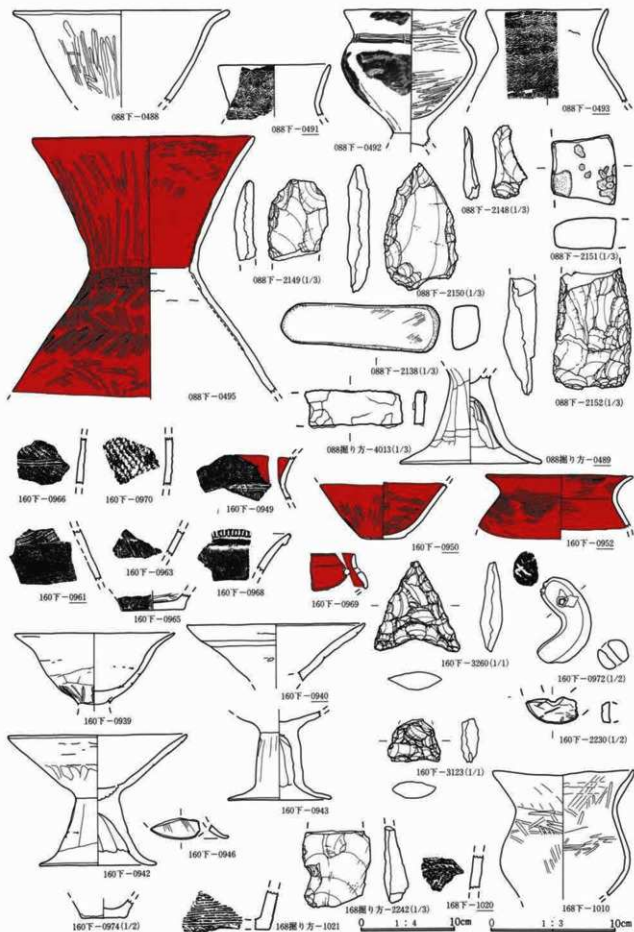
088・160・198号遺構(CD-7 G) 168号遺構(C-7 G) 【図p.23~27 PL.40~46】

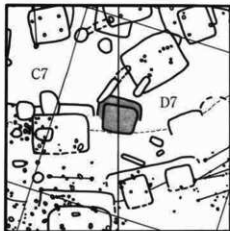
西側斜面上位(勾配12度)に位置する遺構群。弥生後期(5期)竪穴088号は山側にテラスを持つ形態で、4本の板材主柱穴及び入口施設と貯藏穴がある。谷側は僅かに削られる。北側内部と壁外のピットの多くは横列253号に関連するだろう。火災にあい、北東側の床に炭化材が見られた(樹種同定)。

上層(18-21,31層)では鉄鍔基部?(4012)が含まれている。下層(22,23層)の遺物は貯藏穴際の大壺(0495)等と硬質泥岩の打製石斧(2149,50,52)があり、掘り方で厚手鉄板(4013)と土器高坏(0489)が見られた。

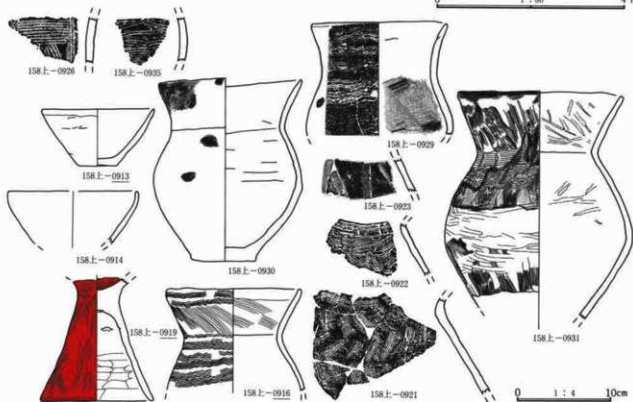
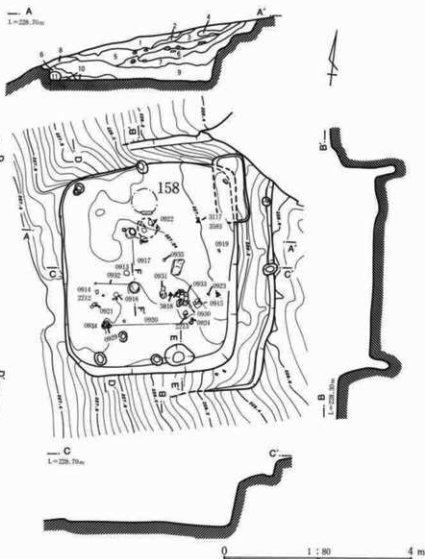
088号を3基の土坑が壊す。いづれも人為的に埋められている。東側の古墳中期(4期)の160号は平底の長方形で、北東隅の底に横穴(幅0.8奥行1.0m)があった。ここでオニグルミ等の炭化種実を検出した。南東側に未命名近世土坑がある。全体に土器片が多く、上層(24-27層)で土製紡錘車(0971)や刃物基部鉄器(4023)が、下層(28-30層)では土器高坏(0939,40,42,43)と滑石紡錘車片(2230)が出た。下層出土クスギ節炭化材の<sup>14</sup>C年代は、2160±80BPである。

北東側の168号は、正方形だが底にやや凹凸があり、竪穴状土坑169号を壊している。全体に弥生土器片が多い。楕円形の土坑198号はかなり深く、088号の埋没後に掘られている。炭化イネ1個体を検出。



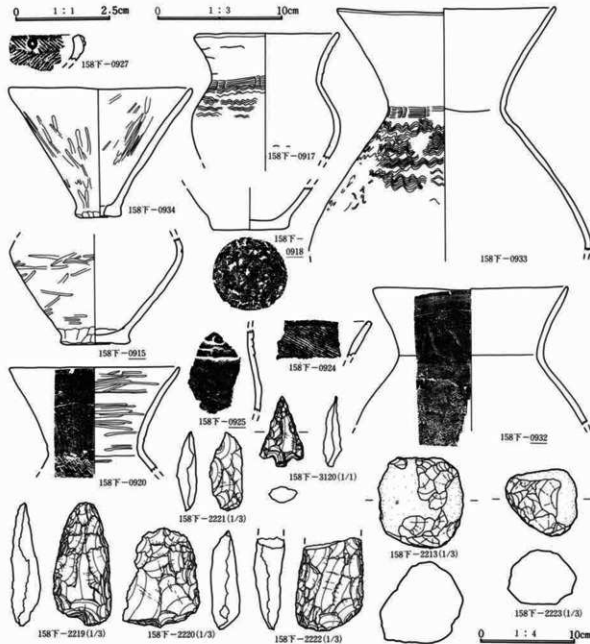
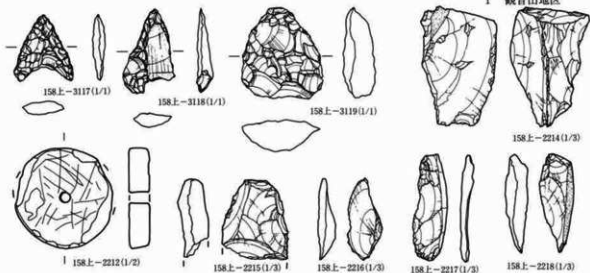


1. 黃褐色粘質粉口—ム粒中多
2. 褐細粘質粉口—ム塊多
3. 暗褐色粘質粉口—ム塊少
4. 暗褐色粘質粉口—ム粒少
5. 黑褐色粘質弱灰化材中少
6. 暗褐色粘質粉口—ム粒中多
7. 黑褐色粘質粉口—ム粒中少
8. 暗褐色粘質粉口—ム粒中少
9. 黃褐色粘質石干盤口—ム粒中少
10. 暗褐色粘質弱
11. 黑褐色粘質粉口—ム塊粒中少
12. 黑褐色粘質粉口—ム塊粒少
13. 黑褐色粘質粉口—ム塊粒中少
14. 暗褐色粘質粉口—ム塊粒中少





1 观音山地区



## II 検出遺構と遺物

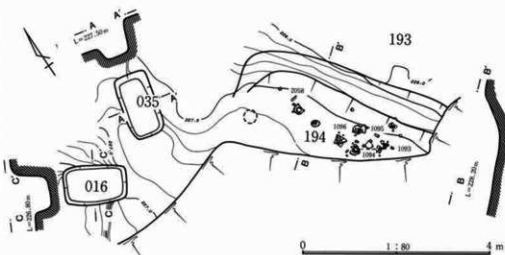
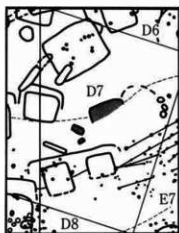
### 158号遺構(D-7 G) 【図p.28,29 PL.47,48】

158号は西斜面の上位の急勾配面(14度)に位置する弥生後期(4期)の堅穴で、北側では堅穴088号に接する。また、北東側は堅穴089号に付属するトンネル土坑159号と重なり、その南で近世の未命名短冊形土坑に上部を切られている。

山側を中心にコ字形にテラスが廻り、谷側は壁の立ち上がりが残っていた。柱穴は床面中央でははっきりしなく、南北の壁際の中央と谷側近くそしてテラスの中央で検出した。ただし、竈に接する内側で未掘の掘り込みを確認している。また、南壁際で貯蔵穴ピットを検出した。

遺物は比較的多く、上層(1-7層)では工字文状の文様がある甕片(0935)や砂岩製の紡錘車(2212)が目立つ。下層(8-14層)からは有孔鉢(0934)・大型壺(0933)・稜痕のある甕(0918)などの土器の他に、有茎の黒曜石石鏃(3120)・硬質泥岩打製石斧(2219,20,22)・被焼痕のある粗粒安山岩磨り石(2213,23)が見られた。

この堅穴は斜面立地で、谷側に壁がはっきり残る珍しい例である。



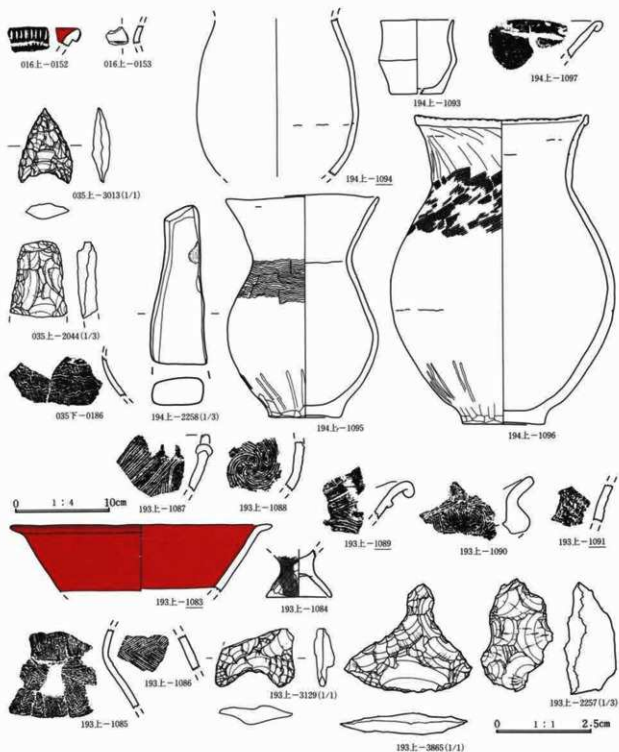
### 193・194・016・035号遺構(D-7 G) 【図p.30,31 PL.49,50】

194号は西斜面上位の急勾配地(13度)に位置する弥生後期(6期)の堅穴で、西・南側大部分は農道で削られており、東側では193号と重なる。僅かに東側の立ち上がりと床の一部のみを検出した。この部分がテラスにあたる可能性もあるが、壁上の緩斜面をそう考えることもできる。床北側にピットを確認したが、未掘。

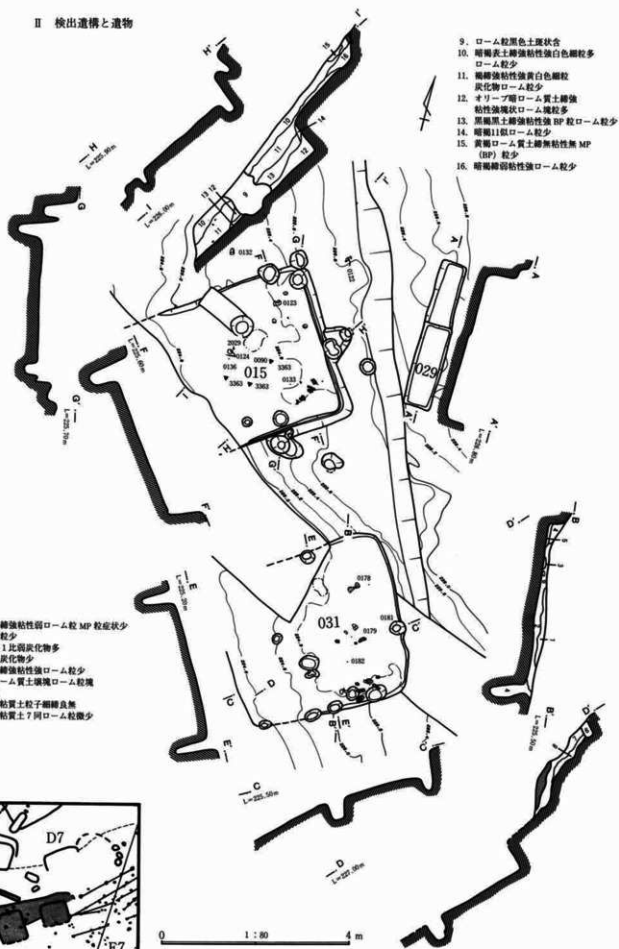
遺物はいづれも床よりやや浮いた状態だが、かなり残存状態の良い甕類(1095,96)などを検出した。東側に重なる193号は遺構の存在として掘り込みを確認したが、全く掘っていない。確認面で表面採集した遺物は、重量比で弥生土器片50%・縄文土器片18%・石器類32%となる。縄文土器片には図示したように比較的目

立ったものが多い。堅穴の可能性も想定できる。

194号の北西側には近世の短冊形土坑016号と035号がある。いづれもあまり長くなく、深い。016号の上層から18世紀瀬戸美濃の灰軸袋物片(0153)が出土したが、他は流入である。035号も同時期と考えられる。

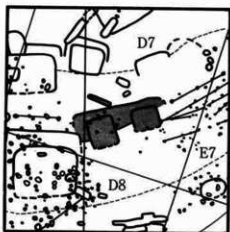


## II 検出遺構と遺物



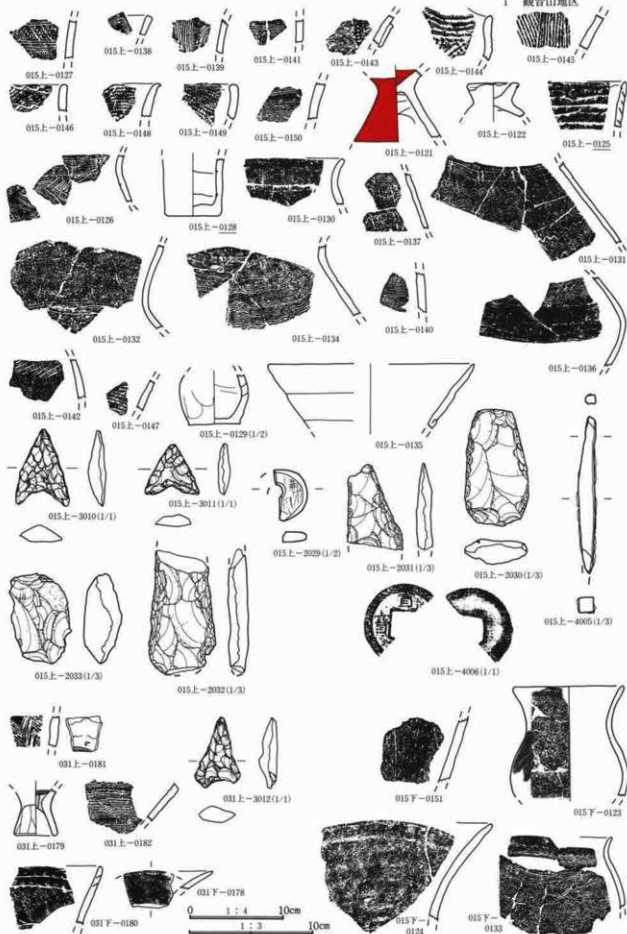
9. ローム粒黒色土塊状多
10. 暗褐色土層強粘性強白色細粒多  
ローム粒少
11. 暗褐色粘性強黄白色細粒  
炭化物ローム粒少
12. オリーブ暗ローム質土層強  
粘性塊状ローム塊多
13. 黒褐色土層強粘性強 BP 粒ローム粒少
14. 暗褐色ローム粒少
15. 黄褐色ローム質土層無粘性無  
(BP) 粒少
16. 暗褐色弱粘性強ローム粒少

1. 暗褐色強粘性弱ローム粒 MP 粒状少  
炭化粒少
2. 黒褐色 1 未満炭化物多
3. 2 未満炭化物少
4. 暗褐色強粘性強ローム粒少
5. 弱ローム質土塊塊ローム粒塊
6. 塊状
7. 黒褐色質土粒子細粒良無
8. 暗褐色質土 7 同ローム粒少



0 1:80 4 m

1 觀音山地区



## II 検出遺構と遺物

### 015・031・029号遺構(D-7 G) 【図p.32,33 PL.51~54】

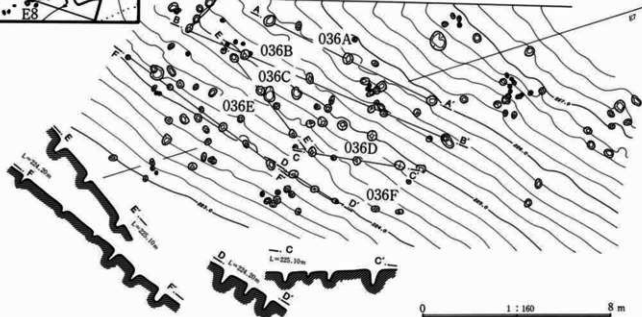
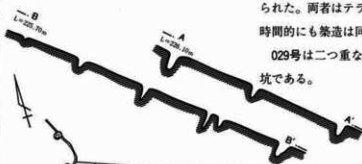
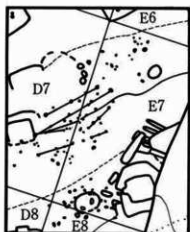
015号と031号は西斜面上位(勾配13~15度)に位置する弥生後期(6期)竪穴で、直線状のテラス(長約12m)を共有する。北西側で弥生竪穴014号と重なる。また中央を斜めに走る農道で壊されている。前者は北側で未命名の近世小土坑に切られている。

共に正方形に近いほとんど同じ形態(約3.2×3.8m)で、上端で2.2m離れる。柱穴は規則性がなく、いづれも壁際にいくつか並んでいる。炉は不明だが、両者とも炭化材が床に残っており、焼失している。

015号は上層(10,11,15,16層)で多彩な遺物が見られたが鉄鑿(4005)が最も興味深い。下層(12~14層)では弥生甕(0124,0151)・甕(0123,0133)が出ている。031号は上部がほとんど削られていたため、上層(1層)の遺物も下層(2~4層)とそれほど状態は変わらないかも知れない。上層からは削れ口に研磨痕のある縄文小片(0181)、下層で甕(0180)と高坏?片(0178)が見

られた。両者はテラスを共有するため、時間的にも築造は同じと思われる。

029号は二つ重なった近世の短冊形土坑である。



036号遺構(DE-7 G)

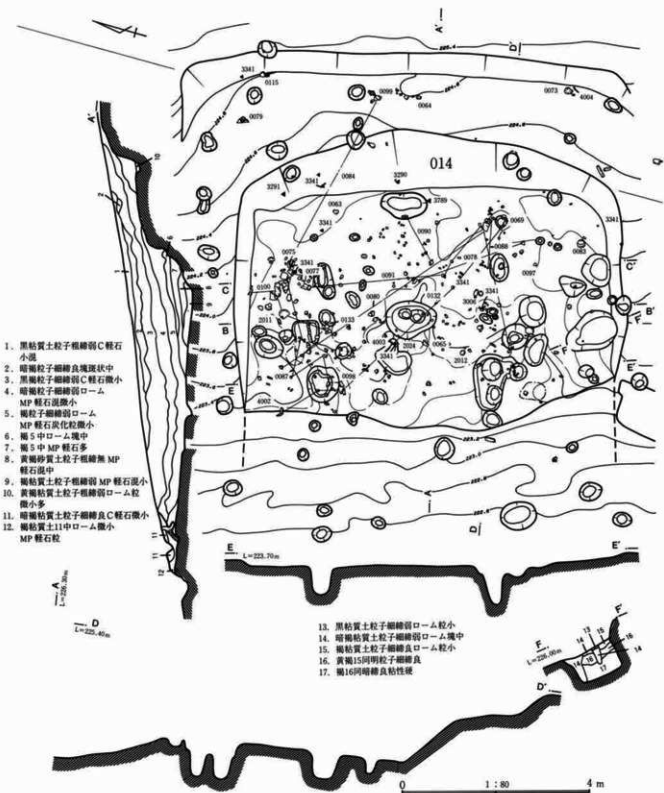
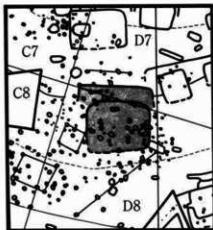
【図p.34 PL.54】

西斜面南側の湧水部谷右岸の急傾斜地(18度)で検出した横列群。竪穴031号の南東側の斜面(範囲10×20m 高低差4m)で多数の柱穴を確認したが、掘立にはなるものはなく、3個以上直線状に並ぶものが次のように6条になった。

036A号(柱穴3個) 036B号(柱穴5個031号と重なる。) 036C号(柱穴3個) 036D号(柱穴3個)

036E号(柱穴6個) 036F号(柱穴3個)

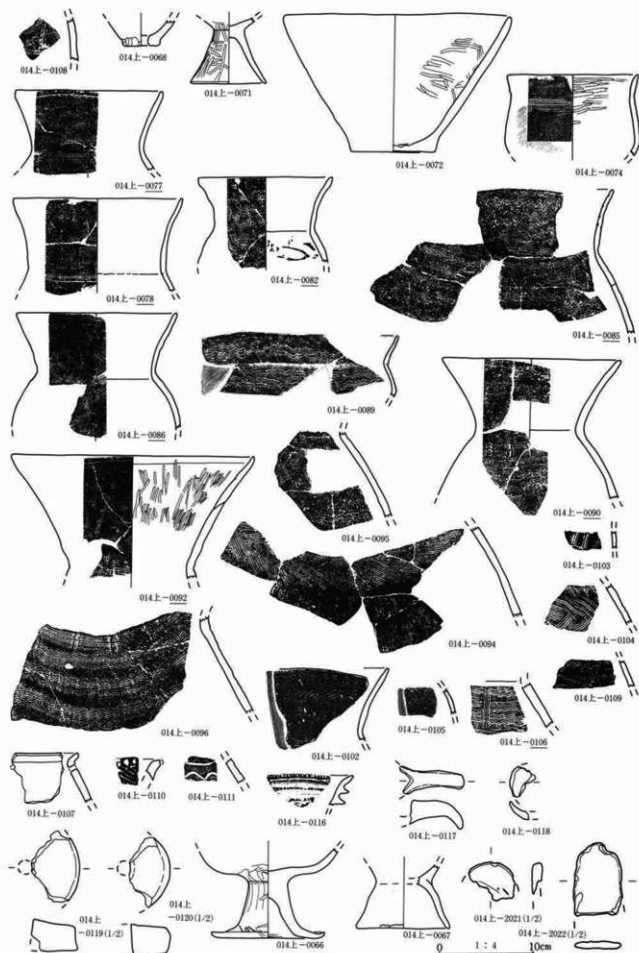
遺物は見られなかったが、埋土の状態より弥生の遺構と考えられた。



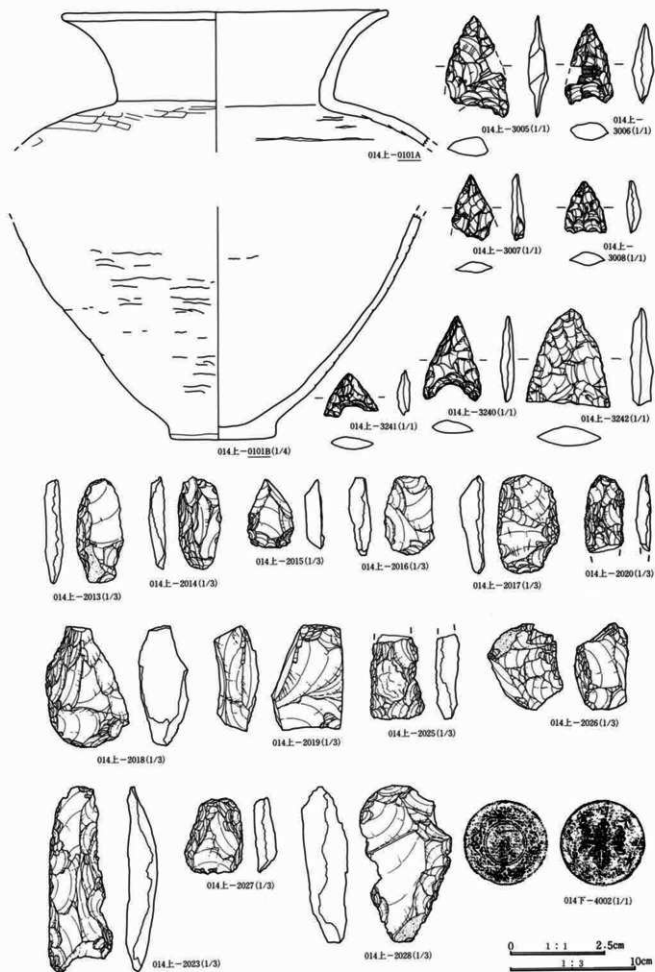
1. 黑粘質土粒子粗線弱C輕石小混
2. 暗褐粘土細線良塊斑狀中
3. 黑粘質土細線弱C輕石微小
4. 暗褐粘土細線弱ロームMP輕石混小
5. 黑粘土細線弱ロームMP輕石化粒混小
6. 黑S中ローム塊中
7. 黑S中MP輕石多
8. 黃褐砂質土粒子粗線無MP輕石混中
9. 暗粘質土粒子粗線弱MP輕石混小
10. 黃褐粘質土粒子粗線弱ローム粒微小多
11. 暗粘質土粒子粗線良C輕石微小
12. 暗粘質土11中ローム微小MP輕石粒

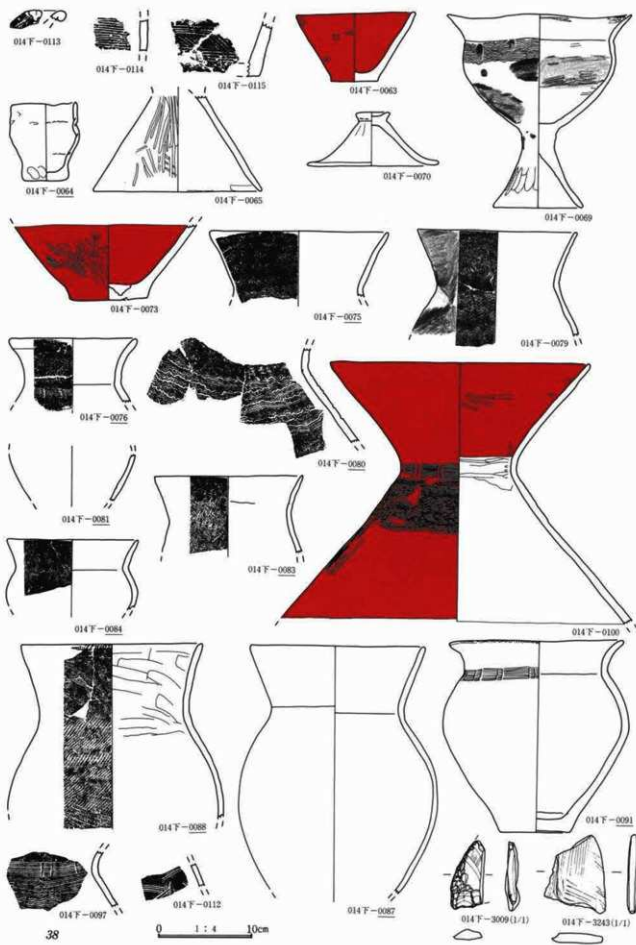
13. 黑粘質土粒子粗線弱ローム粒小
14. 暗粘質土粒子粗線弱ローム塊中
15. 暗粘質土粒子粗線良ローム粒小
16. 黃褐15同明粘土細線良
17. 黑16同暗線良粘性強

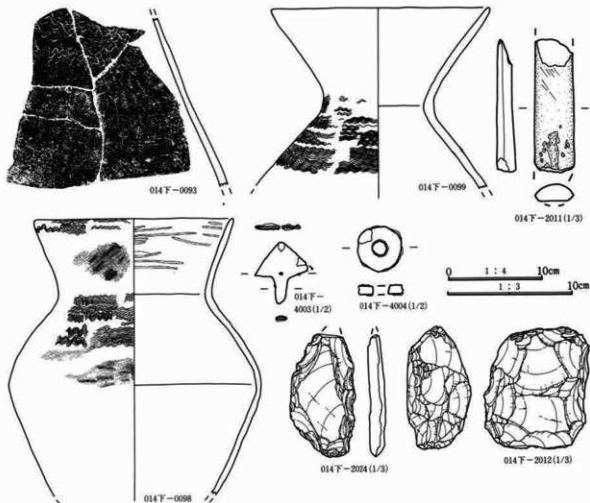
0 1 : 80 4 m











014号遺構(D-7, 8 G) 【図p.35~39 PL.55~59】

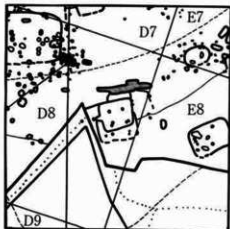
西斜面中位(傾斜16度)に形成された弥生後期(5期)竪穴。北側で掘立253G号と、南東側で竪穴015号のテラスと重なる。斜面上で検出した竪穴では最大のもの(床7.7×約6.0m)で、山側に広いテラス(幅約2m)が廻る。谷側は少なくとも今世紀初頭には削られていた。

柱穴は多数確認したが、板材の主柱穴は4個で少なくとも2回建て替えられている。また主柱穴間の対角線交点にも柱穴がある。南壁近くに入口施設の柱穴がある。その他に掘立群253号のピットが重複しているが、厳密には識別しがたい。炉は北側主柱穴の間で確認した。

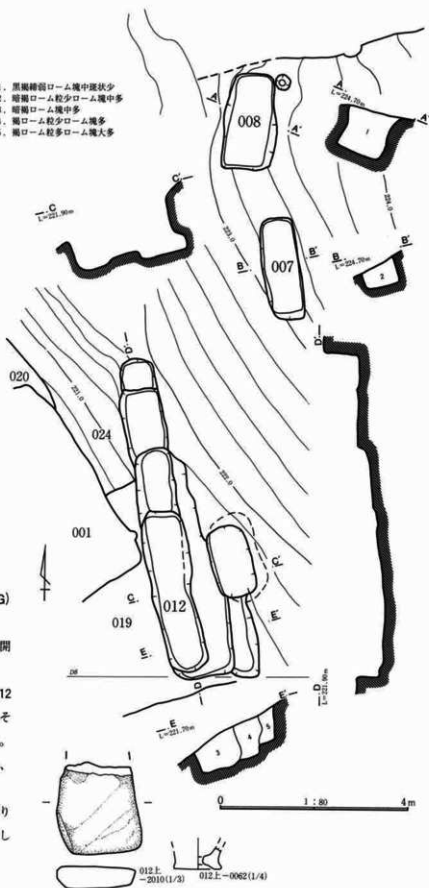
遺物量が多いが、上層(1~4, 11, 12層)では土師器大壺(0101)・弥生土製紡錘車(0119, 20)・石鏃(黒曜石3005~8, チャート3240~42 3005.06分析)が目立つ。また硬質泥岩製の石器(2013~19, 25~28)も多い。下層(5~10, 13~17層)では、北西側主柱穴近くで発見された鉄鏃(4003)が最も興味深い。肉厚の有孔円盤(4004)は用途不明。石器では珪質岩製の打製石斧(2024)や硬質泥岩石核(2012)・黒曜石打製石鏃未製品(3009)・珪質準片岩製磨製石鏃(3243)が見られた。土器は大型の壺(0093, 99, 0100)・甕(0087, 88, 98)などが目立った。

なお出土遺物の重量比は、上層が弥生67%・縄文2%・土師器18%・石斧類14%で自然石は全体の12%、下層が弥生69%・縄文1%・石斧類30%で自然石は全体の38%である。自然石の混入度が本来同じであるなら、下層の石斧類には本来上層に属するものが入っているかもしれない。ただし、縄文土器の混入率は多くない。

この遺構は西斜面北側最下位の弥生竪穴で、すぐ北西側下の急斜面に掘立群が展開している。



1. 黒黒粘りローム境中低状少
2. 暗黒ローム粒少ローム境中多
3. 暗黒ローム境中多
4. 黒ローム粒少ローム境多
5. 黒ローム粒多ローム境大少

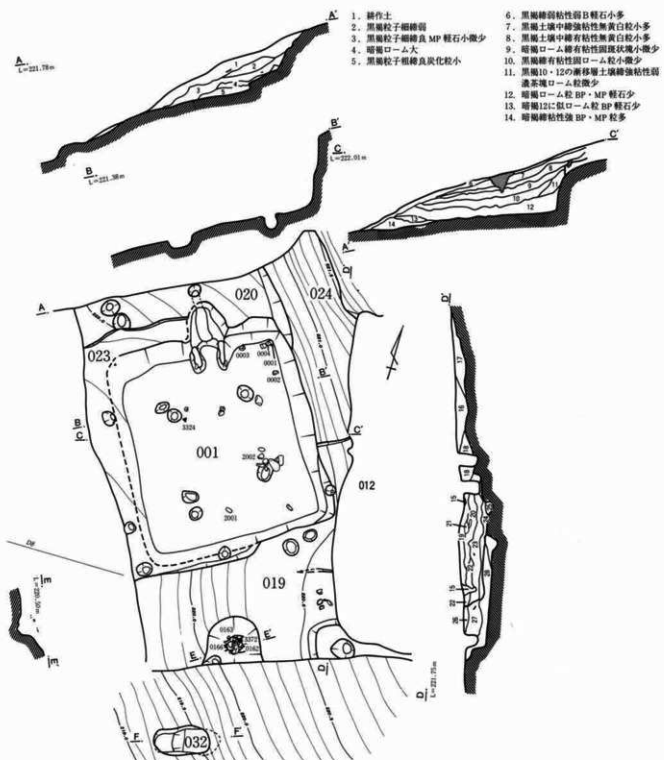


007・008・012号遺構(D-8G)  
【図p.40 PL.60】

西斜面の北側と南側の境に展開する近世短冊形土坑群。

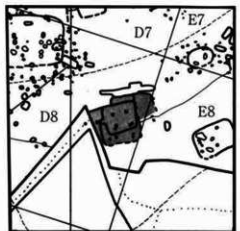
007号と008号は単独だが、012号は7回以上の掘り替えがあり、その一部は地下が広がっている。008号は弥生堅穴014号と近接し、012号は同019・024号を切る。

012号からは、弥生の砂岩磨り石(2010)と有孔鉢(0062)が出土した。



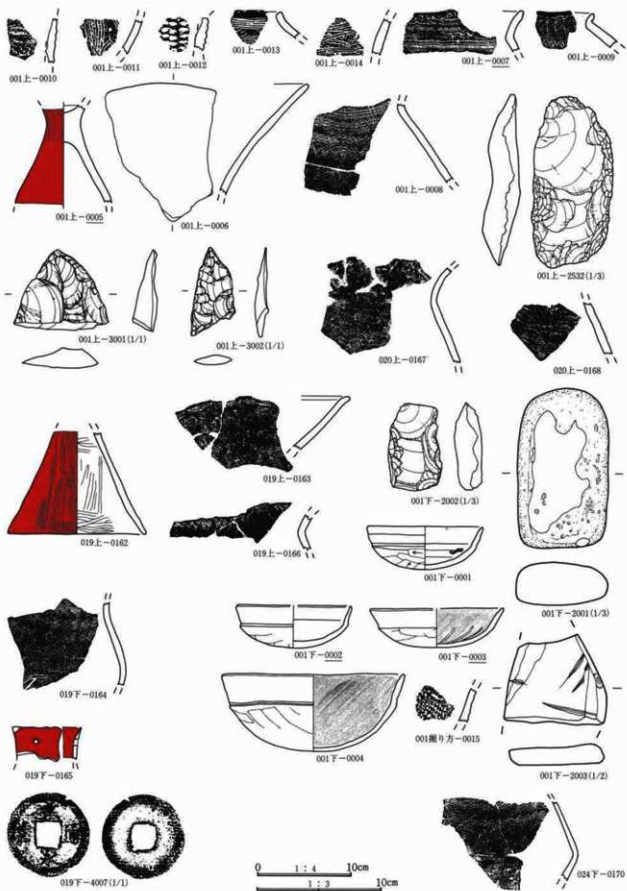
1. 耕作土
2. 黒濁粒子細砂質
3. 黒濁粒子細砂質MP軽石小散少
4. 暗褐色ローム大
5. 黒濁粒子粗砂質炭化粒小
6. 黒濁粘弱粘性弱B軽石小多
7. 黒濁土壌中暗褐色粘性無黄白粒小多
8. 黒濁土壌中暗褐色粘性無黄白粒小多
9. 暗褐色ローム粘有粘性阻攔状塊小散少
10. 黒濁粘有粘性固ローム粒小散少
11. 黒濁10・12の漸移層土壌粘強粘性弱濃茶塊ローム粒散少
12. 暗褐色ローム粒BP・MP軽石少
13. 暗褐色12に似ローム粒BP軽石少
14. 暗褐色粘性強BP・MP粒多

15. 攪乱
16. 黒濁粘質土粒子細砂質C軽石大
17. 黒濁粘質土16に似やや明
18. 黒16に似より暗
19. 黒濁粒子細砂質C軽石散少
20. 黒濁19に似より明ローム粒散小
21. 20中ローム粒多
22. 暗褐色粘質土粒子細砂質ローム粒散小
23. 暗褐色粘質土粒子細砂質ローム粒MP軽石散小多
24. 暗褐色粘質土粒子細砂質ローム粒塊混中
25. 暗褐色粘質土粒子細砂質ローム粒散小多
26. 暗褐色粘質土粒子細砂質ローム粒散小
27. 黒濁粘質土粒子細砂質ローム粒炭化粒小
28. 黒濁粘質土粒子細砂質ローム粒MP白色軽石小炭化粒小
29. 暗褐色粘質土粒子細砂質



0 1 : 80 4 m

II 検出遺構と遺物



## 001・019・020・023・024・032号遺構(DE-8 G) 【図p.41, 42 PL.61~63】

西斜面南側の湧水部分右岸下位に位置する。周辺はかなりの急勾配(18度)である。

001号は古墳時代後期の堅穴で、北側に粘土カマドを持つ。やや南北方向が長い長方形で、4本の柱穴が中央に並ぶ。上層(6~10層)では各時代の土器と石器類が見られるが、下層(11~14層)ではカマド外の右隅に土師器坏が4個(0001~4)が集中していた。

001号は3軒の弥生後期堅穴を壊している。023号(6期)は001号の西側に重なっており、平坦な床と4個の主柱穴を確認したが、西側は作業道で削ってしまい残存部分は極めて少ない。

020号(4期)は023号と001号に南側を壊され、また北側は調査範囲外になるため、床の一部のみ検出した。東の山側がこの堅穴のテラスにあたる024号である。西側でピットを2基検出したが、性格不明。上層(1,2,16~18層)で甕片(0167,68)が確認したのみで、下層(3~5層)ではテラス部で壺片(0170)が出土。

023,024両号の南側にある019号(3期)は、両者及び北と東を001,012両号に壊され、さらに南側は立ち上がりがあるものの農道で削られたため、ほとんど形状不明。平坦な床面の一部と貯蔵穴状のピットが見られた。このピットの西側では床は削られて判然としない。南北の土層断面にはもう一つ新しい堅穴の掘り込みが見られる(19~25層)。上層(26,27層)では貯蔵穴周辺に遺物が集中しており、下層(28,29層)では甕(0164)・小型甕(0165)が見られた。

032号は近世の地下坑で、階段状に山側に底が掘られている。019号下層で出土した寛永通宝(4007)は、この遺構と関係あるかもしれない。

この遺構群は、本調査に際して最初に検出した部分である。斜面での遺構の存在を全く予想せずに作業道を建設していた課程で発見し、このような重複状況からついにここでの作業道の立ち上げを諦めざるをえなかった。

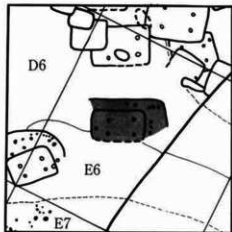
## 171号遺構(E-6 G)

【図p.44 PL.64】

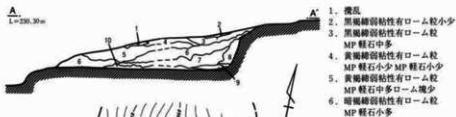
西斜面南側湧水部右岸の上位で確認した弥生後期(6期)の堅穴。かなりの急勾配(17度)で、南西側を中心にテラスが良く残っている。当初この位置での遺構の存在を想定していなかったため、作業道を建設したところで発見した。そのため北西側は作業道でかなり削ってしまった。

板状柱痕の主柱穴が4個見られ、北側の柱穴間と南西側柱穴の北側の2ヶ所に炉がある。南壁際には未掘の貯蔵穴状の掘り込みを確認したが、その他には北壁中央に1個と、テラス南西側に数個の柱穴があった。テラスでは周溝も一部検出した。テラスは北側では不明瞭だが、地形的に勾配が急なのは南側であるため、もともと北側ではテラスはなかったかもしれない。火災を受けており、炭化材と焼土が床に残っていた。

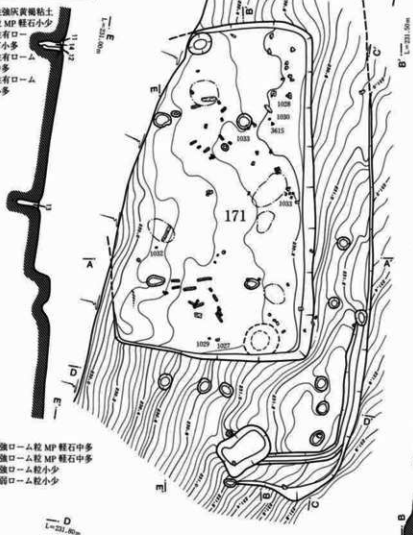
遺物はあまり多くなく、南壁際の上層(1~6層)で榎痕の見られる壺底部片(1027)があり、下層(7~10層)では北東柱穴付近で土製勾玉(1033)、またチャート製石匙(3864)があった程度である。



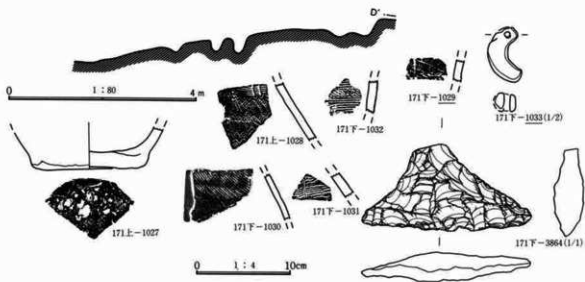
7. 黑陶帶有粘性强質黃褐粘土塊多ローム粒 MP 輕石小少
8. 暗陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石小多
9. 黃陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石中多
10. 黑陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石小多炭化材多



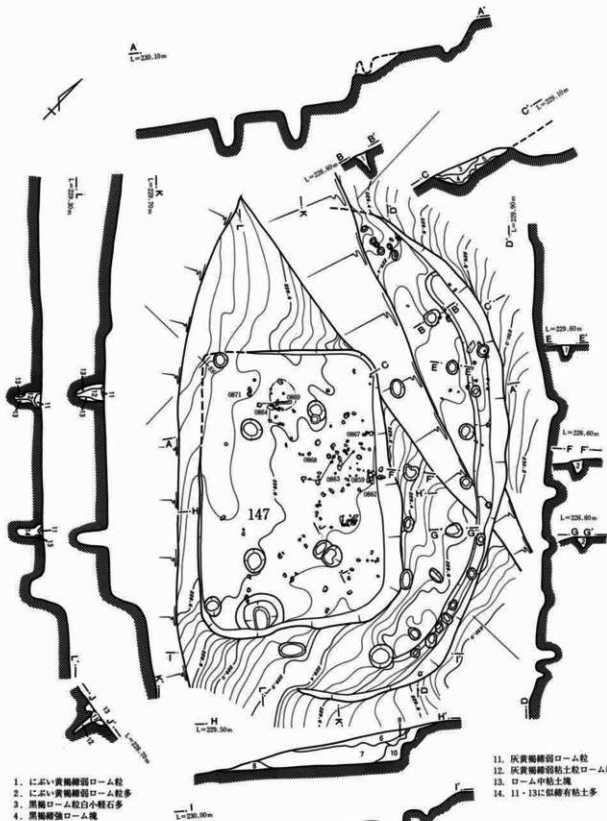
1. 壤土
2. 黑陶帶有粘性强質ローム粒小少
3. 黑陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石中多
4. 黃陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石小少 MP 輕石小少
5. 黃陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石中多ローム塊少
6. 暗陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石小多



11. 暗陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石中多
12. 黃陶帶有粘性强質ローム粒 MP 輕石中多
13. 黑陶帶有粘性强質ローム粒小少
14. 黑陶帶有粘性强質ローム粒小少



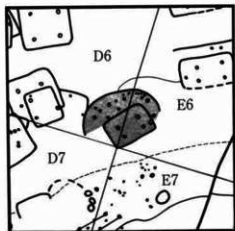




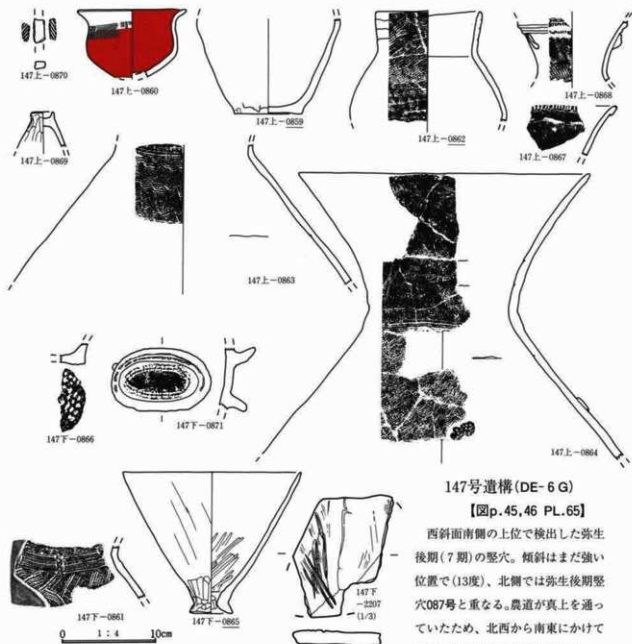
1. にぶい黄褐色ローム粒
2. にぶい黄褐色ローム粒多
3. 黒褐色ローム粒白小軽石多
4. 黒褐色ローム塊
5. 暗褐色粘性ローム塊
6. 黒褐色強粘性ローム粒  
MP 軽石少
7. 黒褐色強粘性ローム粒  
MP 軽石中多炭化物少
8. 黒褐色有粘性ローム粒  
MP 軽石中少
9. 暗褐色有粘性ローム粒  
MP 軽石中少
10. 黄褐色有粘性ローム粒  
MP 軽石中多

11. 灰黄褐色ローム粒
12. 灰黄褐色弱粘土粒ローム粒少
13. ローム中粘土塊
14. 11 - 13に似る粘土多

0 1 : 80 4 m



## II 検出遺構と遺物



### 147号遺構 (DE-6 G)

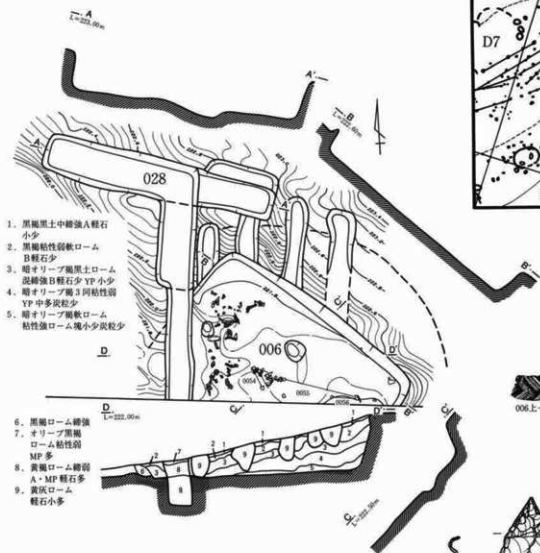
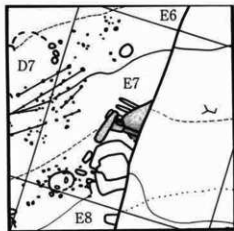
【図p.45, 46 PL.65】

西斜面南側の上位で検出した弥生後期(7期)の竪穴。傾斜はまだ強い位置で(13度)、北側では弥生後期竪穴087号と重なる。農道が真上を通っていたため、北西から南東にかけてテラス部を中心に削られている。

長方形の床面に対し、山側を大きく半円形のテラスが囲っている。床面は板材柱痕の4主柱穴が長方形に並び、北側柱穴間に炉が、南壁際に貯蔵穴が見られる一般的な形態である。特徴としては西壁の隅付近に側柱穴がそれぞれある。谷間は立ち上がりが一部見られる。南東隅付近の床は平坦でなく、掘り残して壇状になっている。

これに対し、最大2.6mの幅を持つテラスはかなり大きく、最も山側には周溝がある。また、周溝内から始まって3列の弧状の柱穴列を確認した。本来、全体に平坦面が広がっていたはずである。

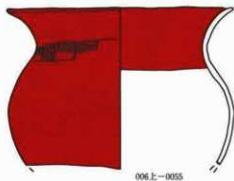
遺物は比較的少なく、上層(3,4,5-8層)では大型壺(0863,64)などの種々の弥生土器片があったが、下層(1,2,5,9,10-14層)からは砂岩砥石(2207)・有孔鉢(0865)が顕著なもので、縄文土器片(0866,71)も混在していた。重量比は上層が弥生94%・縄文1%・石斧類4%で自然石は全体の38%、下層では弥生78%・縄文3%・石斧類19%で自然石は全体の33%である。



1. 黒縄土中締強A軽石  
小少
2. 黒縄粘性弱軟ローム  
B軽石少
3. 暗オリーブ黒縄土ローム  
流締強B軽石少 YP 小少
4. 暗オリーブ層3同粘性弱  
YP 中多炭粒少
5. 暗オリーブ弱軟ローム  
粘性強ローム塊小少炭粒少

6. 黒縄ローム締強
7. オリーブ黒縄  
ローム粘性弱  
MP 多
8. 黄褐色ローム締弱  
A・MP 軽石多
9. 黄灰ローム  
軽石小多

0 1 : 80 4 m



006上-0055



006上-0056

0 1 : 4 10cm  
1 : 3 10cm

### 006・028号遺構(E-7 G) 【図p.47 PL.66】

006号は西斜面南側の湧水部右岸で確認した弥生後期(6期)の堅穴。範囲外となる南側の沢湧水部へ下る急斜面(16度)に位置。小型の堅穴で、山側の壁近くの中央に柱穴が1個あり、北側では炉を確認した。また、山側では不明瞭な形でテラスを認めた。焼失しており、炭化材が北西側を中心に残る(樹種同定対象外)。顕著な遺物は大部分が上層(1-3層)で、下層(4,5層)からは弥生壺(0054)が出たのみである。

028号は近世の短冊形土坑群で深い5個と浅い4個が重なる。

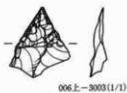


006上-0058



006上-0057

006上-0059



006上-3003(1/1)



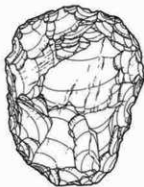
028上-4008(1/3)



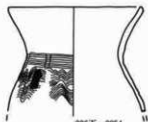
006上-2537(1/3)



028上-2040(1/3)



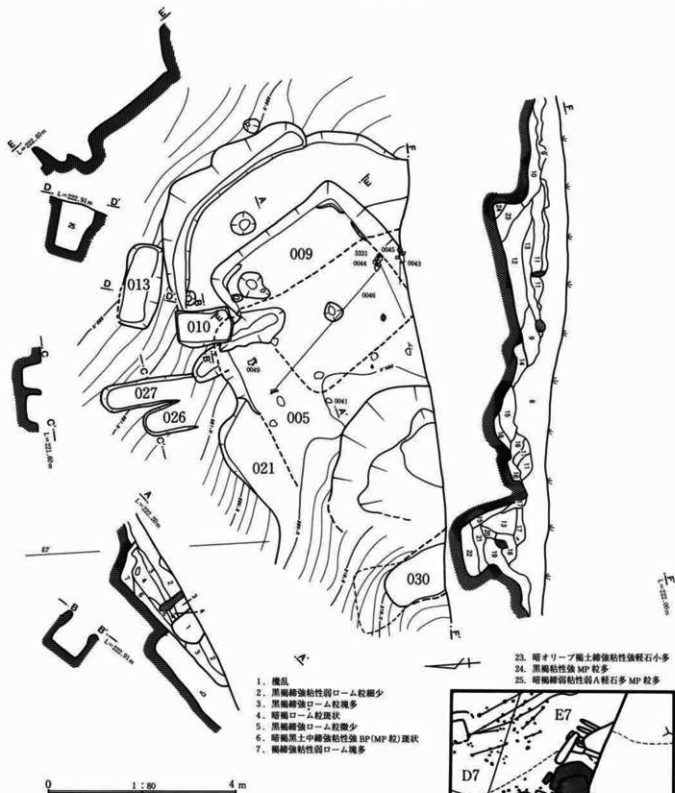
028上-2040(1/3)



006下-0054

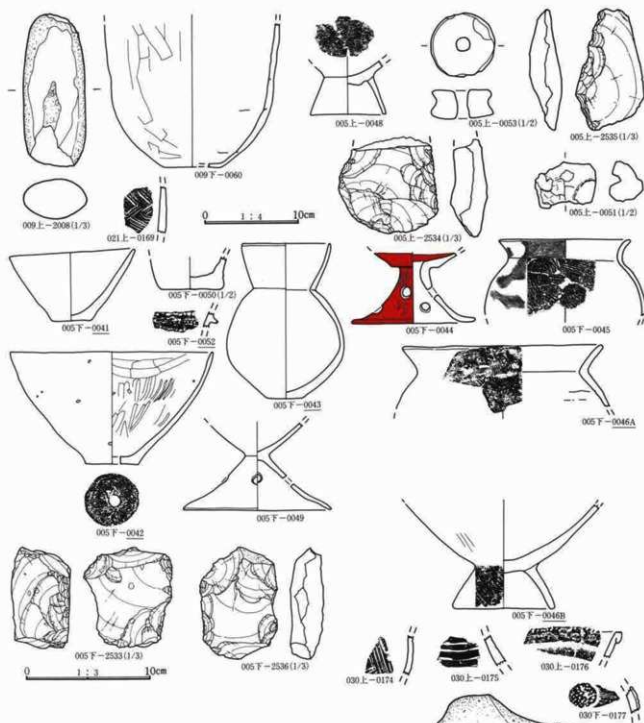
## II 検出遺構と遺物

- |                       |                        |                         |
|-----------------------|------------------------|-------------------------|
| 8. 黒編織強粘性弱A軽石中多       | 13. 黒編織強粘性有 YP・MP 軽石中少 | 18. 暗黒13と同軽石ローム塊中含      |
| 9. 黒編ローム塊中軽石小炭粒混      | 14. 黒編13と同強粘性有         | 19. 暗編強粘性弱              |
| 10. 暗オリーブ編土ローム粘性強     | 15. 暗オリーブ編強粘性有軽石小少     | 20. 黒編暗砂質土              |
| 11. 黒粘性強 MP 粒中微少      | 16. 黄編強 MP 粒中多         | 21. 編織弱粘性強ローム YD・MP 軽石多 |
| 12. 黒編強粘性強 YP・MP 軽石微少 | 17. 暗編強粘性強炭粒少          | 22. 黒編21に同ローム YD・MP 軽石多 |



1. 溝瓦
2. 黒編強粘性弱ローム粒細少
3. 黒編強ローム粒混多
4. 暗編ローム粒混多
5. 黒編強ローム粒微少
6. 暗編黒土中強粘性強 BP (MP 粒) 混状
7. 編織強粘性弱ローム塊多

23. 暗オリーブ編土強粘性強軽石小多
24. 黒編粘性強 MP 粒多
25. 暗編弱粘性弱A軽石多 MP 粒多

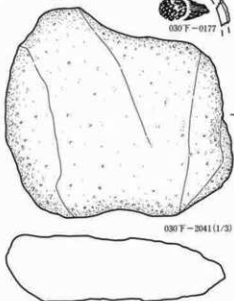


005・009・010・013・021・026・027号遺構(E-7G)

030号遺構(E-8G)【図p.48,49 PL.67~69】

西斜面南側の湧水部右岸下位の急勾配地(19度)で検出した遺構群。沢湧水部は南側の範囲外にあたる。

010・013・026・027各号は近世の短冊形土坑で、近い位置に集中して掘られている。027号の南には未命名の土坑の一部が重なる。やや下位に離れる030号は、底が広がる近世のフラスコ形土坑である。底付近で牛伏砂岩の砥石(2041)が出土。(P.50へ)



## II 検出遺構と遺物

(P.49より) 009号は、古墳後期の堅穴である。北側にカマドを持つ正方形の平面形で、カマドの一部が010号に壊される。北東隅に貯蔵穴がある。また南壁際に周溝を部分的に検出した。上層(3-6層)より粗粒安山岩磨り石(2008)、下層(7層)より土師器甕(0060)が出土した。

005号は、古墳前期の堅穴である。山側に大きな半円形のテラス部分があり、床は方形に近いが谷側が大きく風倒木と地中動物攪乱で壊されている。またテラスと床の接点は009号により大きく抉られた。テラスに2個、床面に1個の柱穴があるが、性格は不明。攪乱を受けた上層(9,11-13層)から弥生紡錘車(0053)・土師質粘土塊(0051)が、下層(10,23,24層)からは弥生壺?片(0052)・同ミニチュア(0050)・同小型鉢(0041)及び土師器甕(0045,46)・同甕(0042)・同小型壺(0043)・同高坏(0049)・同器台(0044)などが出土した。

この堅穴は、形状としては弥生後期のものに類似している。

021号は、南側を大きく005号に西側を風倒木と地中動物攪乱で壊され、僅かに北東隅部分のみを検出した弥生後期の堅穴状の遺構である。顕著な遺物は上層より出土した甕片(0169)のみだが、位置などから4期と推定した。

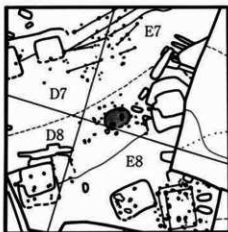
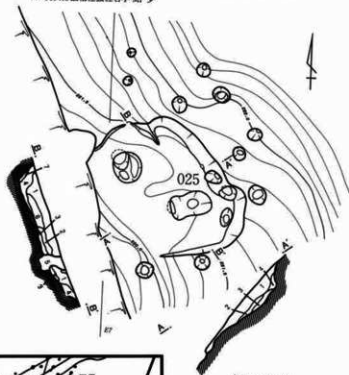
1. 黒褐色強粘性有軽石小ローム塊大 1
2. 黒褐色強粘性塊
3. オリーブ黒白粘土粘性強 MP 多
4. 黄灰強粘性強軽石小 MP 少
5. 攪乱
6. 黄褐色強粘性塊
7. 黄褐色強粘性有 MP 中多

### 025号遺構(E-7, 8 G)

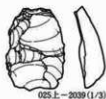
【図p.50 PL.70】

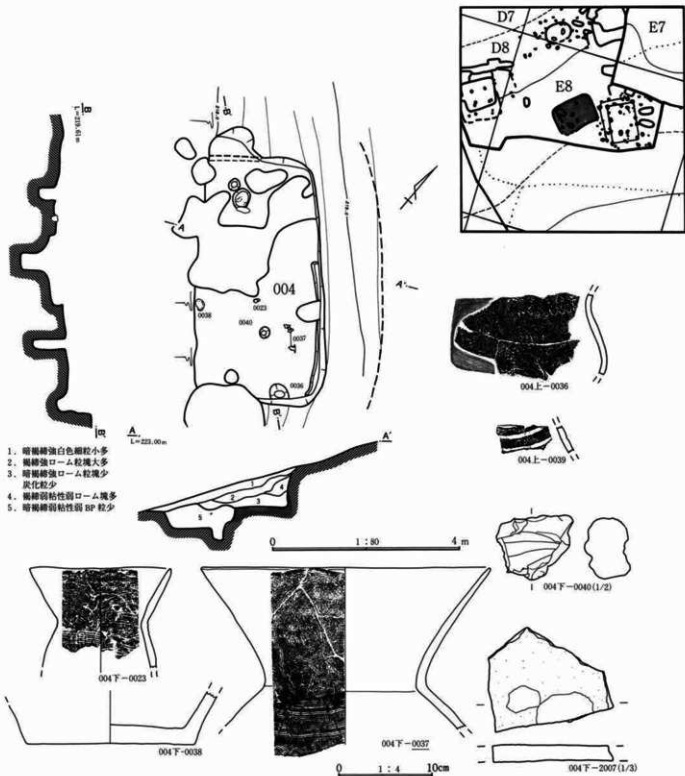
西斜面南側の沢湧水部右岸の急勾配地(16度)で確認した堅穴。平坦な床面は確認したが、規模は小さく平面形は不整形である。内部にあるピットは地中動物攪乱で、壁外の山側を中心に見られるピットがこの堅穴の上部構造を支える柱穴と思われる。しかし、如などの生活痕は不明。

遺物はいずれも上層(1,2,5,6層)より出土した小片。埋土の状況は弥生後期のものに似ているが、下層(3,4,7層)での遺物出土状態からは断定しがたい。少なくとも住居跡とは考えられない。



A.B L=222.00m  
0 1:80 4 m





004号遺構(E-8 G)

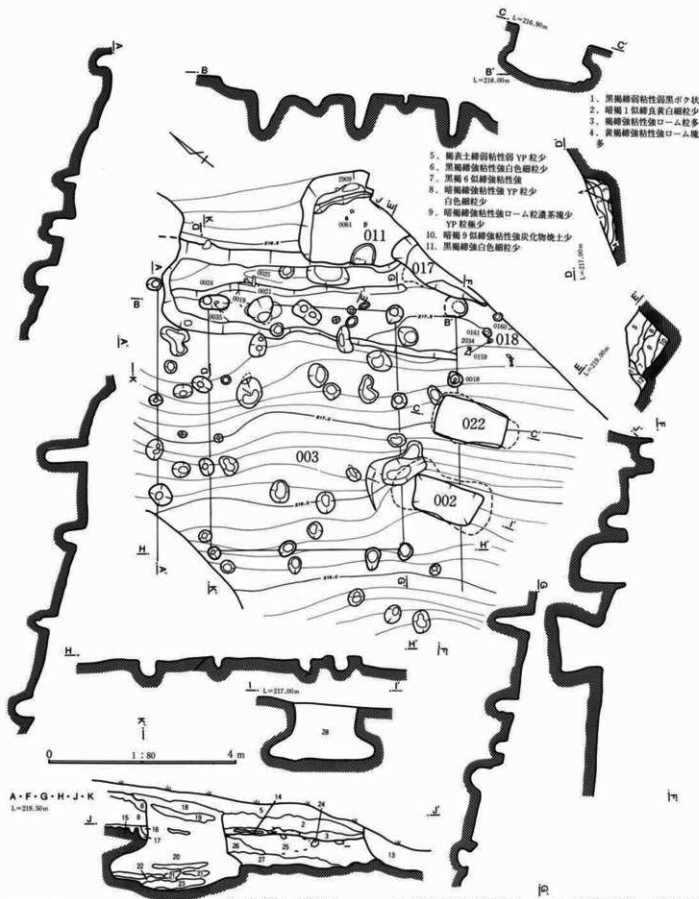
【図p.51 PL.70】

西斜面南側沢湧水部右岸下位で確認した弥生後期(2期)の堅穴。急傾斜地(15度)に位置し、南東側を古墳掘立003号に切られ、谷側は調査用の作業道開設で壊してしまった。

床面全体は地中動物攪乱が激しいが、北西側に炉跡の焼土が見られた。山側壁外はやや削ってテラス状にしているが、平坦面は確認できない。

上層(1,2層)からは中期の壺片(0039)も見られたが、下層(3,4層)からは後期の壺類(0037)や土師質の粘土塊(0040)・砂岩砥石(2007)が出土した。

テラスの形態は、北側に少し離れた020号に似ている。



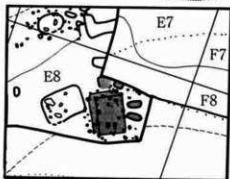
1. 黒層粘弱粘性高黒ボク状
2. 暗層1似粘良黄白細粒少
3. 暗層粘弱粘性強ローム粒多
4. 黄層粘弱粘性強ローム層

5. 暗表土粘弱粘性弱YP粒少
6. 黒層粘強粘性強白色細粒少
7. 黒層4似粘強粘性強
8. 暗層粘強粘性弱YP粒少  
白色細粒少
9. 暗層粘強粘性強ローム粒遺着塊少  
YP粒細少
10. 暗層9似粘強粘性強炭化物塊土少
11. 黒層粘強白色細粒少

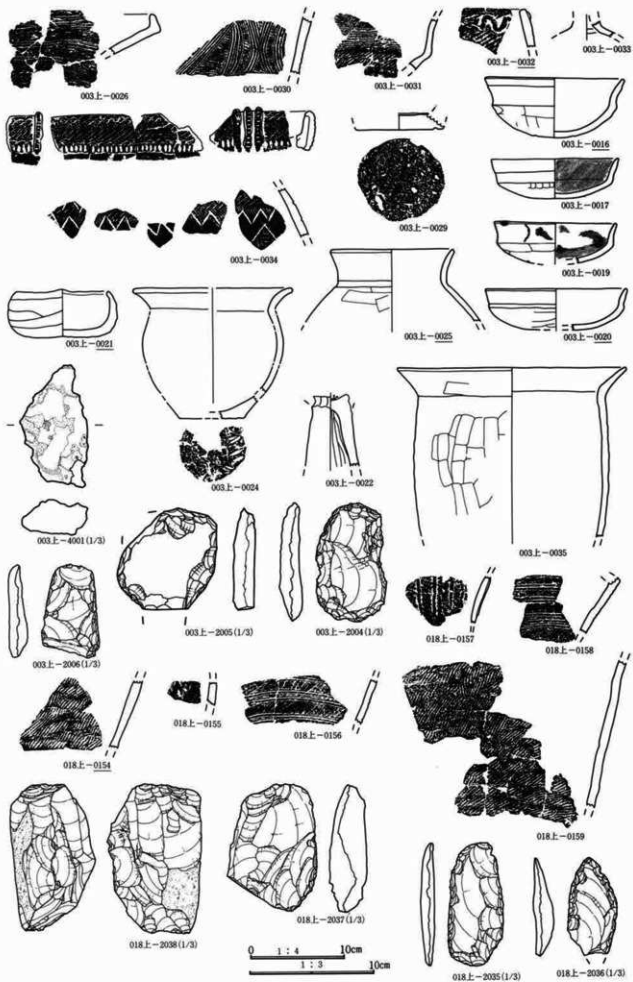
12. 黒層粘強ローム粒塊土少
13. 塊土
14. 暗層ローム突土粘強BP粒少
15. 暗層ローム質土層土層炭化物少
16. 暗層ローム質土粘弱粘性弱土
17. 暗層ローム質土粘弱粘性弱土
18. 暗層粘性弱黒土粘土層YP、BP粒塊状少
19. 黒層1似L8同少

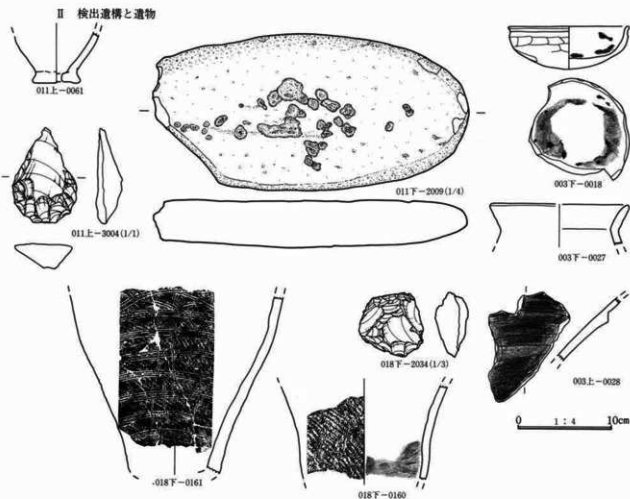
20. 暗層粘土質粘弱粘性有黒土少
21. 暗MP層粘弱粘性弱黒土少
22. にふい暗MP層粘土粘弱粘性強
23. 暗層黒土粘強MP粘土層多
24. 暗層黒土粘弱粘性有
25. 暗層粘有粘性有BP(MP)粒少
26. 暗層粘有粘性弱ローム粒BP粒少
27. 暗層24似粘有粘性強炭化物  
YP、MP(BP)粒少

28. 黒層粘弱粘性弱ローム粒塊塊状少  
炭化物少









002・003・011・017・018・022号遺構(E-8 G) 【図p.52~54 PL.71~73】

西斜面南側の沢湯水部右岸下位の急傾斜地(19度)に位置する遺構群。5 mほど南側は沢の底で、湧水がある。

002・017・022各号は、近世のフラスコ形土坑。いずれも底が開口部より広く人為的に埋没。

003号は、古墳時代後期の掘立建物だが、山側は約2 mの幅で地山を削って造成している。柱穴は多く検出したが、中心をなすのは2×3間の母屋の南北に幅1.2 mほどの庇を付けた形態と考えられる。柱穴は山側が深く、谷側が浅い。山側の妻部には溝状の掘り込みが見られる。

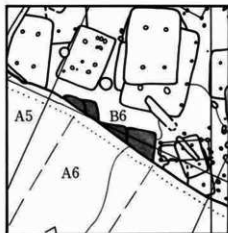
上層(1,2層)から出土した遺物は多く、中でも南関東系の弥生土器壺片(0034)は注目される。また椀痕のある弥生壺底部(0029)や副歯状粘土紐縄文片(0032)時期不明の鉄滓(4001)があった。下層(3,4層)では土師器坏(0018)・壺(0027)・壺(0028)が見られたが、坏の内部に煤が付着していた。上層の坏でも同様の例(0019)がある。

斜面ながら床をなるべく低くしようと造成したことや遺物の状態より見て、この建物が居住施設であった可能性は高い。周辺の2軒の同時期堅穴(001号・009号)との有機的な関係も考えられる。ただし、わざわざ長軸を傾斜走向にあわせている理由は不明である。

011号は弥生後期(7期)の堅穴で、谷側を017号と003号に削られ南側は範囲外になるため、検出したのは僅かに北東隅部のみ。003号に壊された部分に推定炉跡の焼土を確認した。東壁下には周溝もあった。

顕著な遺物は、上層(5~7層)から弥生有孔鉢(0061)と黒曜石石鏃未完成品(3004)、そして下層(8~10層)からは緑色片岩多孔石(2009)があるのみだが、破片重量や埋土状態と形態より弥生後期であることは確実である。

018号は縄文前期の遺構だが、017号と003号に壊されているため、形態は不明。017号の南に接して深鉢が2個(0160, 61)正立で出土した。しかし床面も全く把握できず、単独の埋没遺構の可能性も考えられる。



1. 耕作土
2. 黒炭粒子細粒良
3. 黒炭粒子細粒良
4. 暗褐色ローム粒ローム塊
5. 黒炭粒子細粒劣
6. 黒炭粒子細粒良ローム粒
7. 暗褐色ローム粒混入物少
8. 黒炭粒子細粒無ローム粒多
9. 暗褐色炭化物ローム粒少
10. 黒炭粒子細ローム粒少
11. 黒炭粒子細粒良
12. 暗褐色ローム粒
13. 暗褐色ローム粒ローム粒多
14. 暗褐色ローム炭化物含
15. 暗褐色ローム粒
16. 黒炭粒子細粒無炭化物多

046・050・051・055号遺構  
(AB-6G)【図p.55～57 PL.74～76】

中央尾根上の調査範囲北端で検出した弥生後期竪穴群。

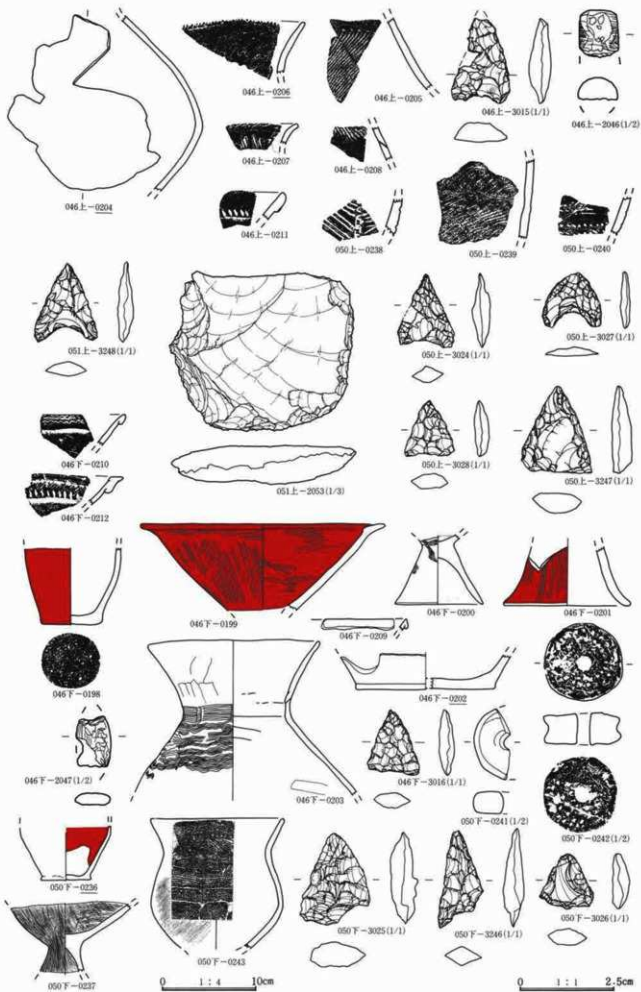
055号(1期)は東側を046号に壊され、北西側で051号と重なる。そのため検出部分は僅かである。遺物はかなり少なく、時期は重複よりの推定である。

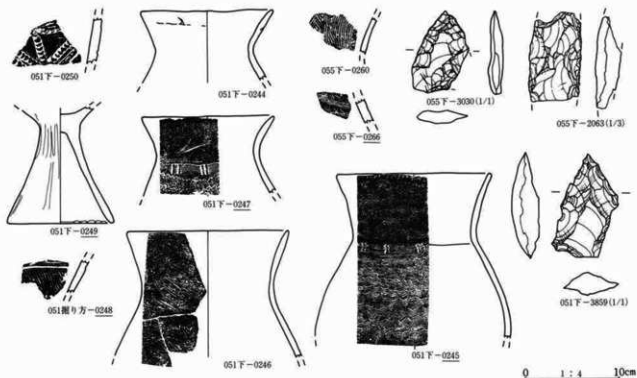
046号(3期)は、西側で055号を壊す。南端部のみを検出で、入口状ピットと貯蔵穴を確認したが、支柱は不明。最下層に炭化物が多く、火災住居。



上層(12～14層)から出土した滑石製円筒形石製品(2046)と下層(15,16層)からの滑石製舟形石製品(2047)は似た感じがある。下層からは高坏(0199)・大型壺(0203)などの弥生土器と共に黒曜石石鏃(3016)も出土。

050号(3期)は、東側が051号で壊されている。南西側の板材支柱穴が出ており、対応する南東側支柱穴は051号の掘り方で確認した。その他にいくつかのピットがあるが、南壁際のは入口状施設だろう。西壁中央近くの床面に焼土が残っており、炉ではないため、焼失した可能性が考えられる。(P.57へ)



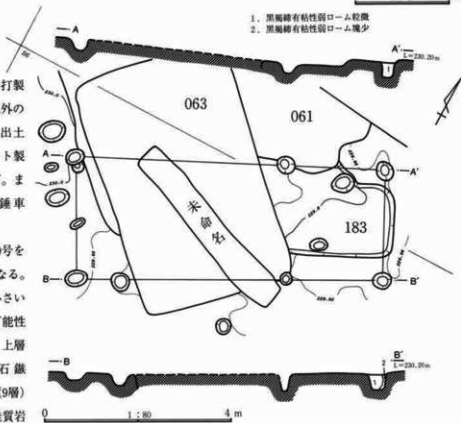


1. 黒麻痺有粘性珪ローム粒微
2. 黒麻痺有粘性珪ローム塊少

(P.55より)

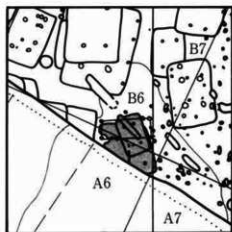
上層(2~4層)での4本の打製石鏃は黒色頁岩製(3247)以外の3本は黒曜石。下層(5層)出土の3本の打製石鏃はチャート製(3246)以外の2本は黒曜石。また下層で2点の土製紡錘車(0241, 42)も見られた。

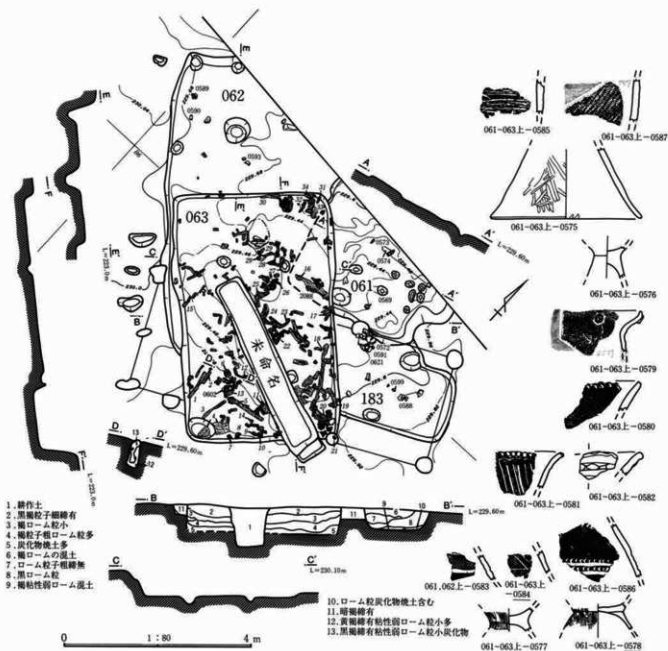
051号(5期)は西側で050号を壊し、南東側で055号と重なる。内側に10cmほどの段差で小さい壁が見られ、拡張された可能性がある。遺物はやや多く、上層(6~8層)でチャート製石鏃(3248)があった他に、下層(9層)でも黒曜石(3030)と赤色珪質岩(3859)の石鏃がある。下層では縄文土器小片も見られるが、弥生鏃類も多い。



061・062・063・183号遺構(AB-6 G) 【図p.57~59 PL.77~80】

中央尾根上北端で検出した遺構群。複雑に遺構が重複しているが、中央の長方形プランは近世の未命名短冊形土坑(1層)。(P.58へ)





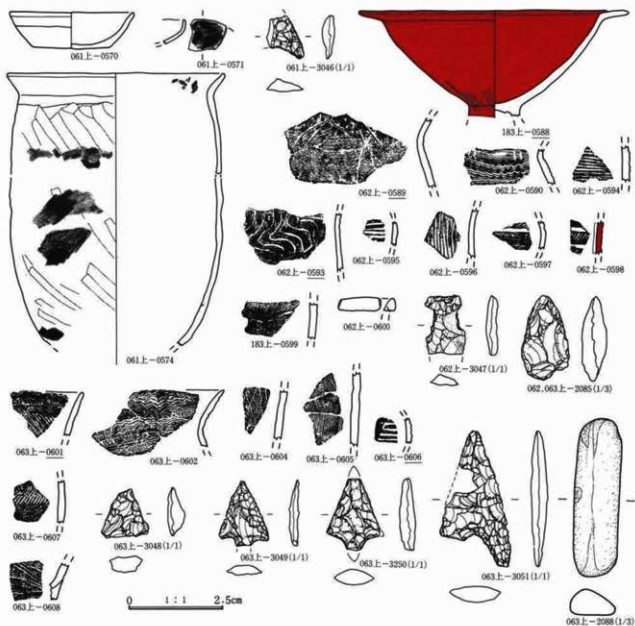
- 1.耕作土
- 2.黒褐色細砂有
- 3.黒ローム粒小
- 4.黒粒子粗ローム粒多
- 5.炭化物焼土多
- 6.黒ロームの混土
- 7.ローム粒子粗線無
- 8.黒ローム粒
- 9.黒粘性弱ローム混土

- 10.ローム粒炭化物焼土含む
- 11.奇形線有
- 12.黄褐色粘性強ローム粒小多
- 13.黒褐色粘性弱ローム粒小炭化物

(P.57より) 183号は弥生後期(5期)の掘立(前頁図)。1×3間を推定するが、063号東側の1×1間(2.1×2.4m)部分内部には、浅い方形の掘り込みがある(11層)。その南東・北東壁の走向は、掘立線に一致し、その上層から高坏(0588)・甕?(0599)、下層から甕(0572,0591,0621)が出土した。北西壁は061号に壊されているため、この掘り込みは掘立と同一の施設と推定。そのため、高床ではない構造と思われる。

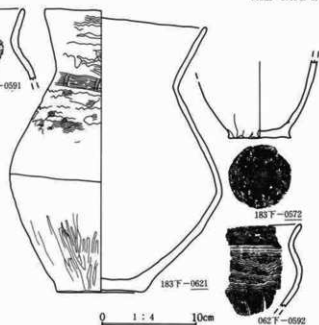
061号は古代前期(8世紀)の堅穴。東壁の突出部がカマド上層(6-8層)より土師器長甕(0574)、下層(9,10層)より須恵器碗(0569)・弥生有孔鉢(0573)が出土。

063号は弥生後期(7期)の堅穴。小型の長方形で、全体に大量の炭化材が残る。丸形の柱穴4個が並び、北西側の中間に炉。炭化材は大部分がクリ材(樹種同定)。火災は強烈だったようで、壁面もかなり硬く焼土化していた。南側柱穴の炭化材下柱穴内部には炭化状況は見られない。遺物は少なく、上層(2-4層)から甕



片(0602)・石鉄(黒曜石3048,49,51)分析・チャート3250)が出土したが、下層(5,12,13層)にはほとんど遺物がなかった。

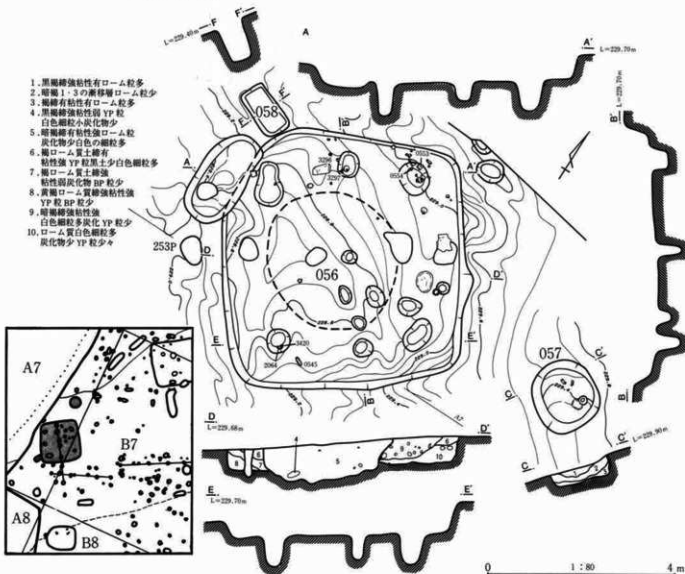
062号は弥生後期(6期)の竪穴。長辺(6.2m以上)は北西・南東走向。北西主柱穴と壁際の側柱穴を検出し、炉石も調査境界に接して現れた。上層からは弥生中期土器片(0593~98)が多く見られた。183号との関係は不明だが、位置より時期を想定。



0 1:4 10cm

## II 検出遺構と遺物

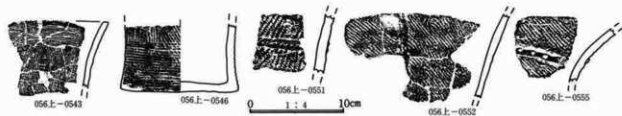
1. 黒曜石強粘性有ローム粒多
2. 層1・3の黒曜石ローム粒多
3. 黒曜石粘性有ローム粒多
4. 黒曜石強粘性弱 YP 粒  
白色細粒炭化物少
5. 層間層有粘性強ローム粒  
炭化物少白色の細粒多
6. 層ローム質土層有  
粘性強 YP 粒黒土少白色細粒多
7. 層ローム質土層強  
粘性弱炭化物 BP 粒少  
YP 粒 BP 粒少
8. 真層ローム質強粘性強  
YP 粒 BP 粒少
9. 層間層強粘性強  
白色細粒多炭化 YP 粒少
10. ローム質白色細粒多  
炭化物少 YP 粒少



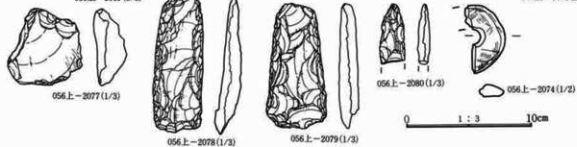
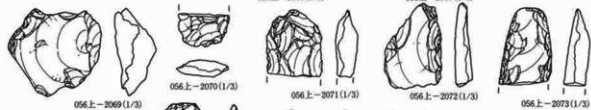
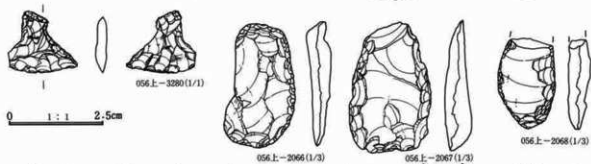
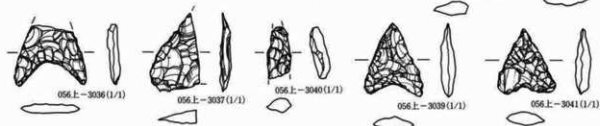
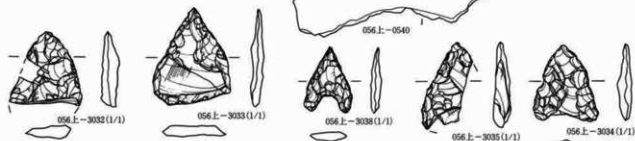
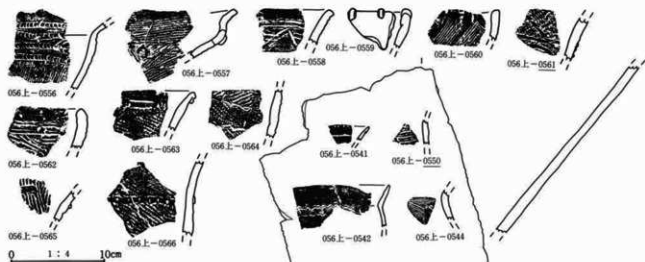
### 056・057・058号遺構(AB-7 G) 【図p.60~62 PL.81~83】

中央尾根上際(5度)で検出した遺構群。056号は縄文前期の堅穴だが、中央を弥生構列253P号が重なると共に、大きく楕円形と推定される土坑(5層)に壊されている。そこで、中央部では平坦な床は検出できなかった。また西隅も地中動物の擾乱で形状は不鮮明。北西辺と南東辺に各3個そして中央に1個の柱穴を確認した。

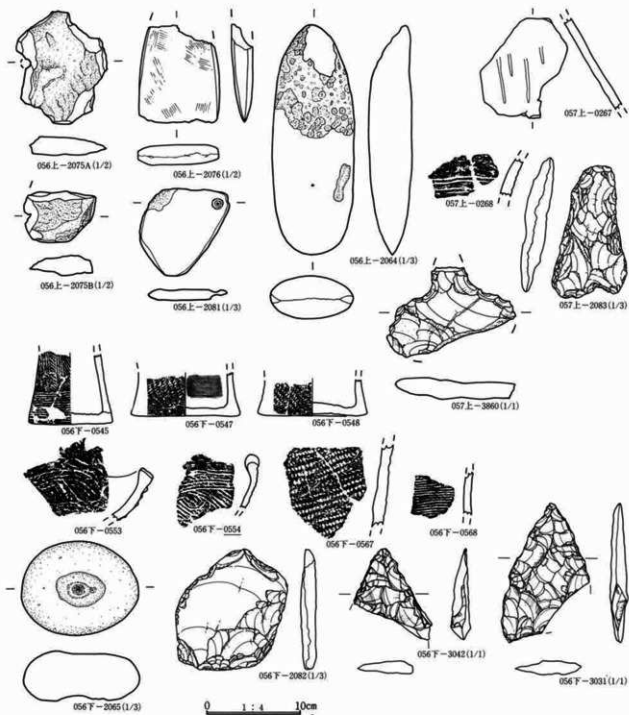
石器を中心に大量の遺物が出土したが、重量比では上層(5-7,9層)が弥生13%・縄文40%・石斧類44%・黒曜石3%で自然石は全体に対し44%、下層(8,10層)が弥生0%・縄文66%・石斧類27%・黒曜石6%で自然石は全体に対し53%だった。上層からは縄文・弥生土器片と共に黒曜石土器が9本(3032~39,41 3032分析)出土したが、その他に剥片は上層で331g(3296,97,3420他)、下層で86g見られた。他に上層(P.62へ)







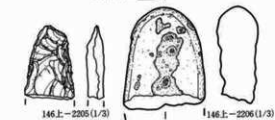
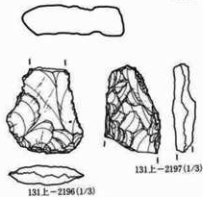
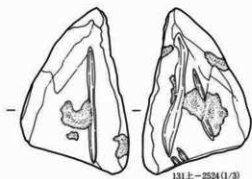
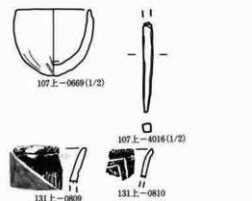
## II 検出遺構と遺物



(P.60より) では滑石原石(2075AB)・変質蛇紋岩磨製石斧(2076)・変玄武岩蛤刀型磨製石斧(2064)も目立っている。下層では北側柱穴で深鉢片(0545, 53, 54)がまとまっていた。

057号は056号の東に近接する土坑で、上層(1,2層)から縄文・弥生土器片と石器が出土。埋土状態より縄文と推定したが、遺物重量比は弥生14%・縄文21%・石斧類63%・黒曜石3%で、自然石は全体の69%である。

056号の西隅に接する058号は近世の短冊形土坑。



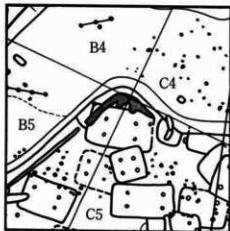
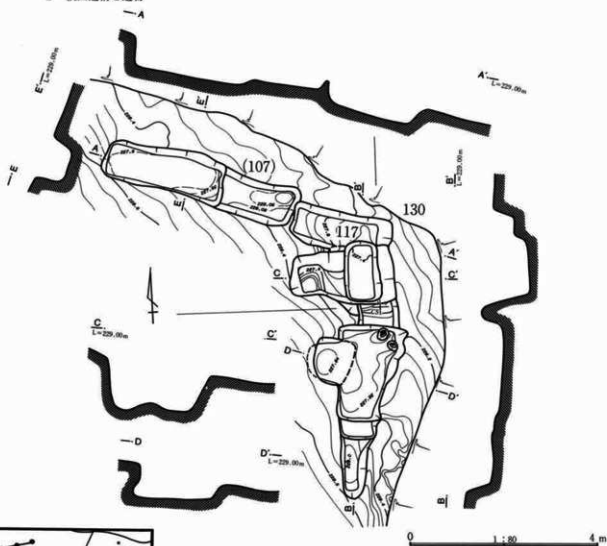
1. 層砂弱粘性弱  
A 軽石少
2. 灰黄褐色A 軽石純層
3. 黒褐色弱粘性弱
4. 黒褐色強3に似
5. 層ローム質層弱粘性弱
6. 層砂弱粘性弱
7. 層砂弱粘性弱  
MP 軽ローム状  
粘土化したMP 軽多



中央尾根上東端遺構群



II 検出遺構と遺物



中央尾根上東端遺構群(B-4,5 CD-4G) 【図p.63,64 PL.84,85】

中央尾根上の東端は最大2mほどの段差が見られ、その下側はローム層下位が露出しており、この段差で切断されている弥生遺構が多くあった。その成因はここで確認した近世遺構群による。本来中央尾根はまだ続いていたはずである。

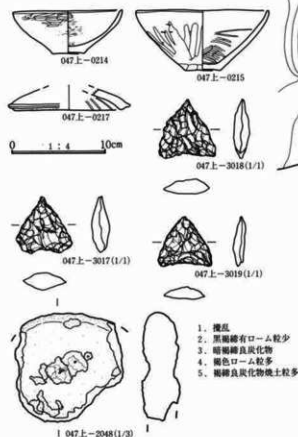
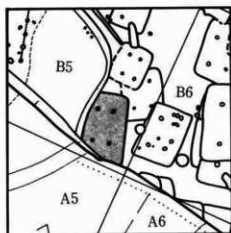
130号(2~5層)と131号(6,7層)は、この段差を形成した近世の小道である。130号は天明3年降下の浅間A軽石層群に直接覆われているため、131号はその復興として作られたことになる。

この段差に沿って上側に短冊形土坑群が北から117・143・146・108各号の順で並ぶ。多くは同軽石を埋土としていたため、130号の削削以後で131号以前に掘られたことになる。形状は全体に短冊形である以外は、117号の一つの底が横穴状になっていた。117号の北側に沿って走る浅い直線状の小溝(P.107に一部図示 幅10センチ深5センチ)が107号である。

なお、楕円形の202号は埋土より弥生後期と推定した。また131号の下には方形の128号と長方形の120号がある。後者は底と周囲が漆喰(厚約10cm)で囲まれており、肥溜状の施設と思われる。

遺物はいづれも古い遺構の混入であるが、土師器ミニチュア(0669)・弥生中期寛片(0809,10)・縄文前期深鉢(0807)が目立っていた。

1 観音山地区



047号遺構(B-5 G)

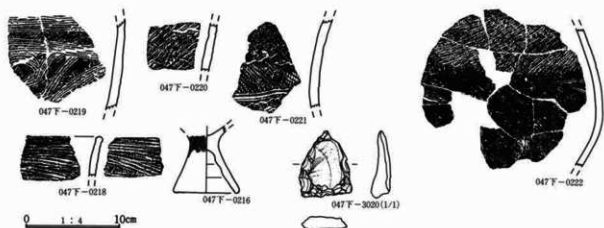
【図p.65,66 PL.86,87】

中央尾根上北側で検出した弥生後期(7期)の竪穴。東側と南側は近世以降に削平を受けてかなり壊されており、北側は調査範囲外にかかるため、確認した壁は北西隅から西壁部分のみである。南西側で弥生竪穴199号を壊している。

全体に大量の炭化材が残っていた。特に西壁際は比較的長めの材が多く見られた。大部分がクリ材である(分析参照)。柱穴は保存のため床を検出した部分では位置を確認したにとどまるが、主柱穴と推定できるものの配置は不整形の状態である。また西壁際には側柱穴が見られた。炉は北側の中間になる。

遺物は上層(1~3層)から弥生小型鉢(0214, 15)と黒曜石石鏃(3017~19)、下層(4,5層)からは縄文土器片(0219~21)・黒曜石石鏃(3020)と弥生台付甕(0216)・壺(0222)などが出土した。ただ周辺を攪乱されているため、層的な状況は必ずしも絶対ではない。

## II 検出遺構と遺物



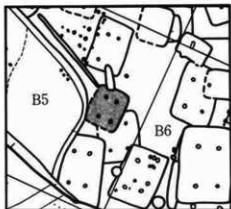
### 109号遺構(B-5 G)

【図p.67 PL.88】

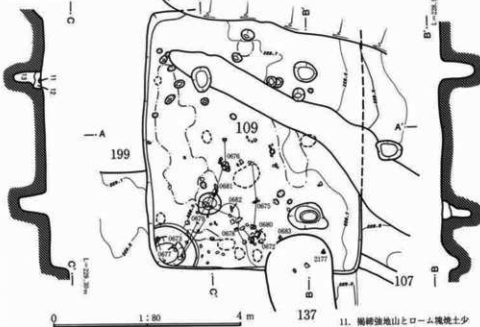
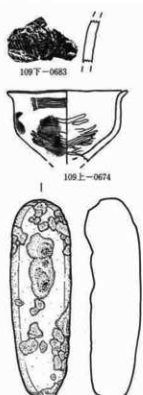
中央尾根上北東側で検出した弥生後期(4期)の竪穴。やや傾斜(7度)が始まる位置である。北側は近世以降削られ、中央にも大きく近世の畚(1,6層)が入る。また南東側はトンネル土坑付竪穴110・137両号に一部壊され、北西側では弥生竪穴199号(8層)を壊す。

丸材基調の主柱穴が4個並び、北側主柱穴外に炬がある。南西隅は貯蔵穴になっている。その他に入口状施設など、未掘のビットがあった。西壁側と東側主柱穴間の床に焼土が敷っており、焼失した可能性がある。

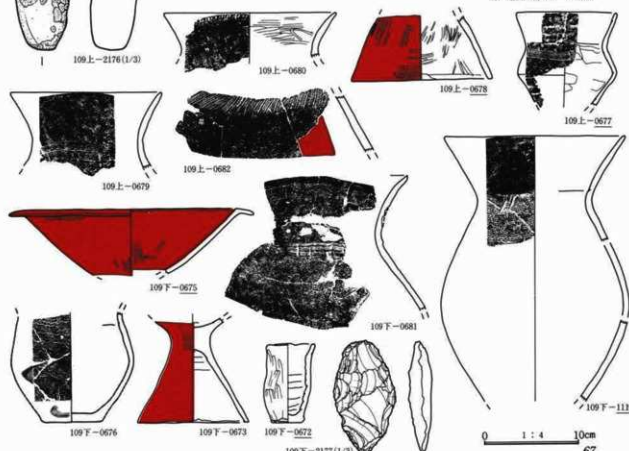
遺物は南半分を中心に比較的多かった。上層(2層)と下層(3-5,9-13層)に分かれるが、もともと埋土の残存状態が少なかったため、全体としては他時代の遺物の混入は縄文鉢片(0683)・砂岩多孔石(2176)程度で、他は甕を中心とした弥生土器片が多い。ミニチュア(0672)は南壁近くで見られた。硬質泥岩打製石斧(2177)は位置的に110・137両号に含める可能性もある。

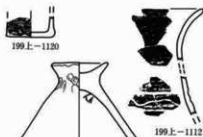
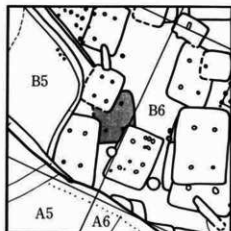
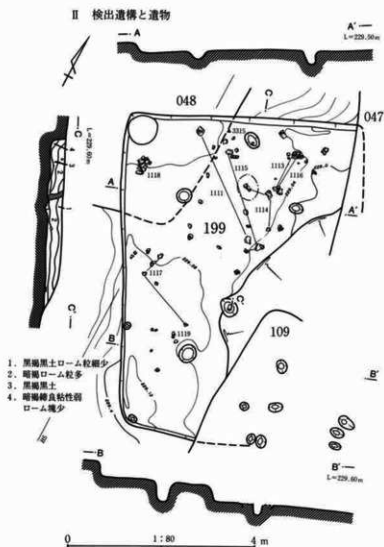


1. A 軽石群作土
2. 灰黄褐色粘性弱ローム状
3. 濃い黄褐色粘ローム状焼土粒炭化物
4. 黒褐色粘性弱ローム状ローム塊少
5. 黒褐色粘性弱混合物少
6. 暗褐色やや軟いローム塊
7. 2層に似る粘性弱
8. 3層に似る炭化物焼土粒含まず
9. 粘強地山と灰褐色のローム塊炭化物少
10. 粘強地山と灰褐色のローム塊炭化物少

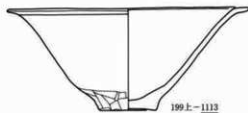
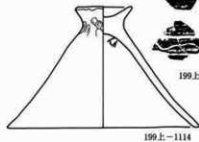


11. 粘強地山とローム塊焼土少
12. 粘強焼土含まず
13. 地山と堀のローム塊炭





B'



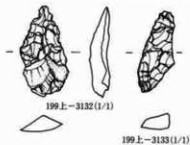
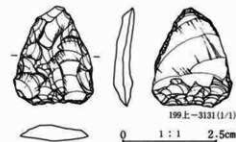
0 1:4 10cm

### 199号遺構(B-5, 6G) 【図p.68,69 PL.89】

中央尾根上北東側で検出した弥生後期(1期)の堅穴。少し傾斜(5度)が始まった位置である。北西側で048号、北東側で047号、南東側で109号の各弥生堅穴に壊されており、また東半分は近世以降削られたため、確認した床面は全体の3分の2程度である。

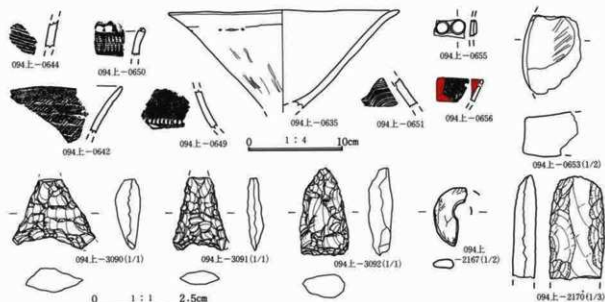
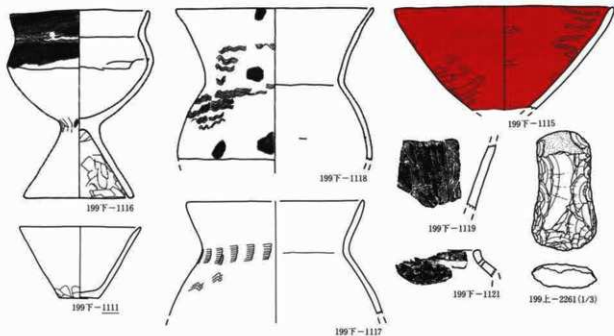
丸材主柱穴が4個並び、北側柱穴の中間外側に埴の焼土が残る。南西側の壁際には欄柱の小柱穴が見られる。

遺物は上層(1,2層)では弥生中期壺(1112)そして黒曜石石鏃(3131-33)・同刺片(3315)・硬質泥岩打製石斧(2261)そして弥生後期蓋(1114)・鉢(1113)が目立った。下層(3,4層)では、弥生後期の台付甕(1116)・甕(1117,18)・鉢(1111,15)などが出土した。





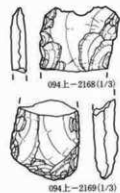
1 観音山地区

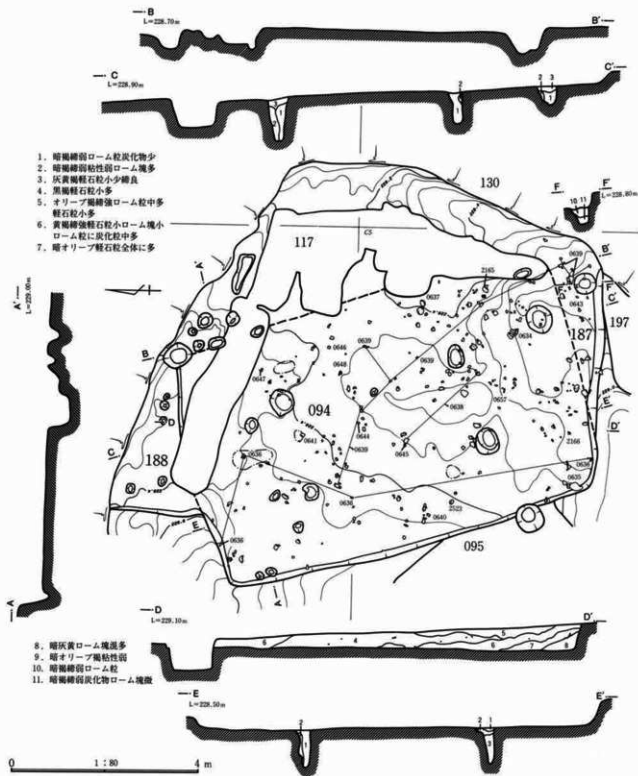


094・187・188号遺構(BC-5 G) 【図p.69~71 PL.90,91】

中央尾根上北東側で検出した弥生後期の遺構群。緩く傾斜(5度)が始まった位置である。北側と東側は近世の130号と117号に、南西側では古墳中期の095号に壊され、南側では弥生後期の土坑197号が重なっている。そのため、残存状態はあまり良好ではなく、この3遺構の把握も必ずしも十分にはできていない。

094号は後期(5期)の長方形の堅穴だが、南壁が外側に開いており、床面は同一ながら堅穴の重複(187号)が考えられた。しかし埋土状態からは両者は識別できず、また弥生大型器片(0639)は両者にまたがって散っていた。そのため、(P.70へ)



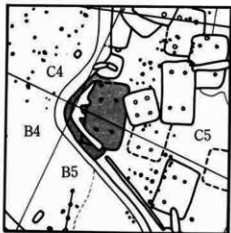


(P.69より) 187号が単独の竪穴になるかは断定できない。

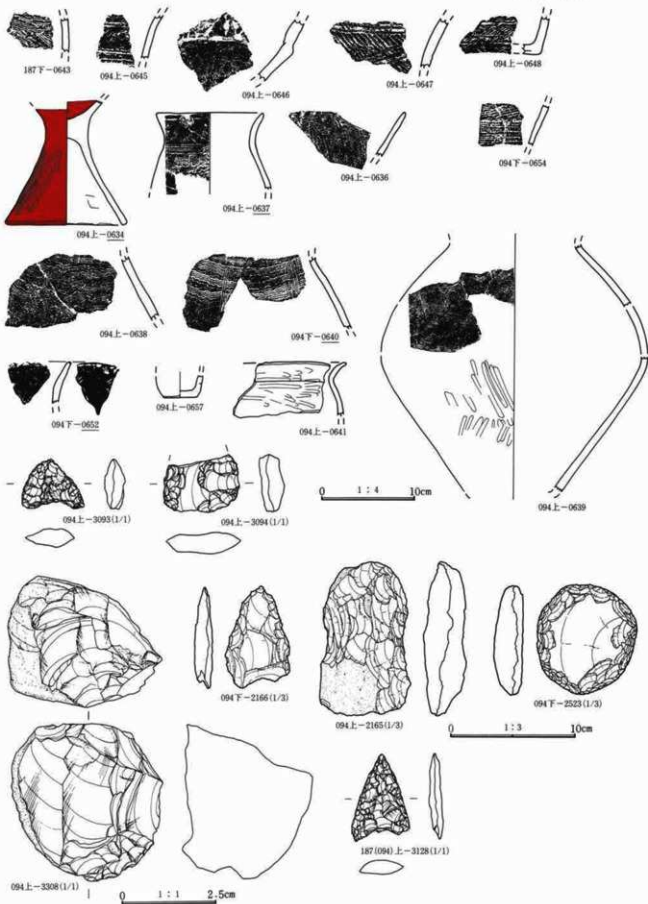
柱穴は板材主柱穴が4個並んでおり、また一部側柱状のものもあった。しかし、北東隅の柱穴は側柱にしては大きすぎ、横列090A号の延長の可能性も考えられる。北側主柱穴の外には小柱穴が2個あり、炉はその中間にあたる。南西側の床面で焼土が見られたため、焼失した可能性もある。

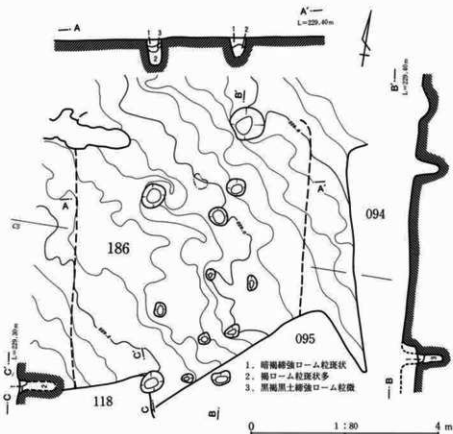
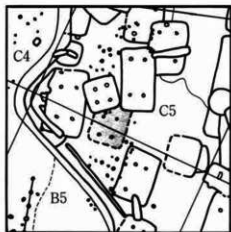
遺物は土器片が全体に散っていたが、埋土状態は攪乱堆積の感じがある。

(P.72へ)



1 观音山地区





(P.70より) そのため大部分は上層(5~7層)の出土となり、下層(1~3,7,8層)としたものは弥生壺(0640)・硬質泥岩打製石斧(2166)・同礫器(2523)そして187号分として縄文深鉢片(0643)にすぎない。なお上層で黒曜石鏃(3090~94)と共に57gの黒曜石石核(3308)が出土した。

188号は南側を094号と117号に北側を130号に壊されて、床面の僅か一部を検出しただけである。

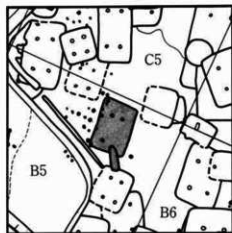
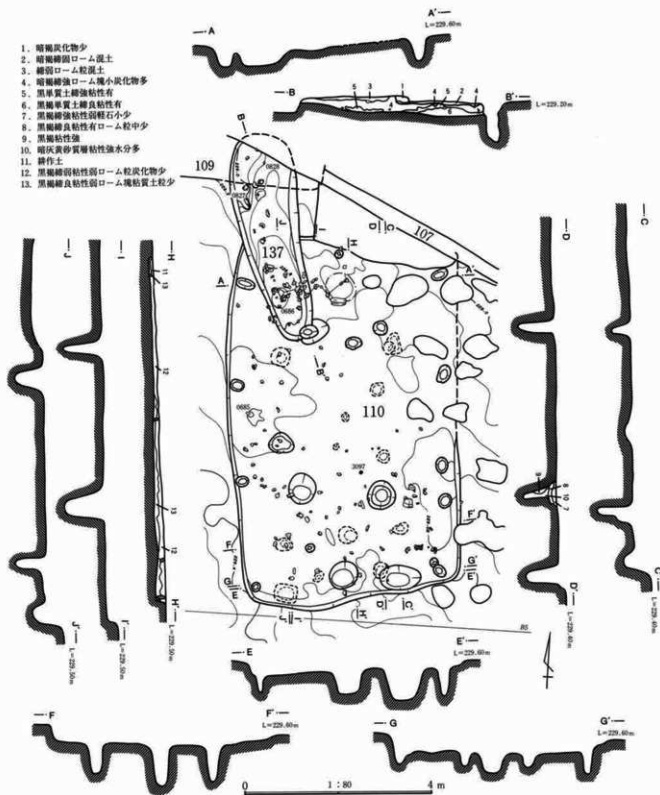
#### 186号遺構(BC-5G)

【図p.72 PL.92】

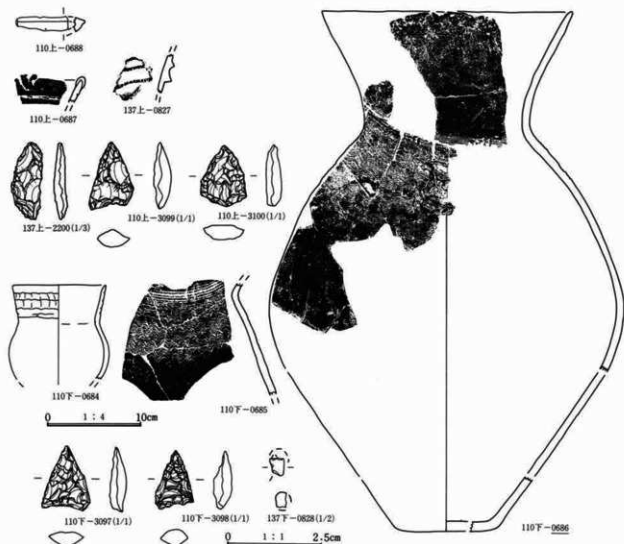
中央尾根上北東で検出した弥生後期(推定4期)の竪穴。この部分は表土の残存が極めて乏しく、耕作土の下はすぐに地山ローム土だった。そのため、床・壁は全く確認できず、僅かに柱穴と炉跡の焼土を検出しただけである。

4個の主柱穴は板状で中規模以上の弥生竪穴と同じであり、炉跡も同様に北側の柱穴間にあった。そのため、平面形は図のように推定できるが、弥生竪穴118号と重なり、094号と近接することになる。南東側主柱穴は、古墳中期竪穴095号の床下より検出した。遺物は、以上の検出経過により確認できなかったが、位置から時期を推定した。

1. 暗褐色灰化物少
2. 暗褐色弱ローム混土
3. 暗褐色ローム粒混土
4. 暗褐色強ローム塊小灰化物多
5. 黒草質土弱強粘性有
6. 黒草質土弱良好粘性有
7. 黒草質土弱粘性弱軽石少
8. 黒草質土弱粘性有ローム粒中少
9. 黒草質土弱粘性有
10. 暗褐色砂質弱粘性強水分多
11. 耕作土
12. 黒草質土弱粘性弱ローム粒灰化物少
13. 黒草質土弱粘性弱ローム塊粘質土粒少



## II 検出遺構と遺物



### 110・137号遺構(B-5 G)

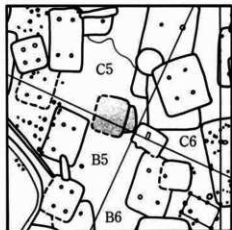
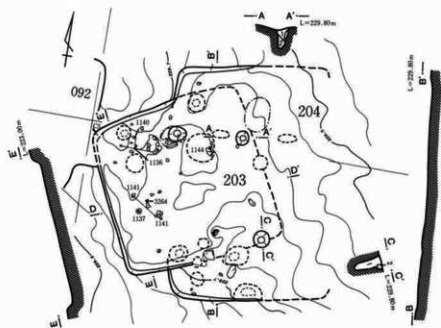
【図p.73,74 PL.92,93】

中央尾根上北東側で検出した弥生後期(7期)のトンネル土坑付き堅穴。表土の流失が激しく、北東側を中心に耕作痕が壁・床を壊している。トンネル土坑の先端は、近世の地境107号に削られ、弥生堅穴109号を切る。

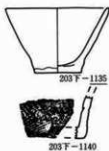
板材の主柱穴が4個並び、その対角線交点では床下から小柱穴を発見した。東西両壁際には4個づつの側柱穴が並ぶ。南壁際には、貯蔵穴及び入口用柱穴があった。北側主柱穴間の外側に炉がある。北西側主柱穴から楕円形(長4.4m最大幅1.4m)のトンネル土坑(137号)が北側に延びる。この主柱穴は、137号掘削後に掘られたようだ。137号が機能した時点では、床下から検出した柱穴のいくつかが主柱穴として使われ堅穴の規模は小さかったと推定できるが、明瞭なプラン痕は不明である。

遺物は137号部分で多く、上層(1~3層)では黒色安山岩削器(2200)など、下層(4~13層)からは弥生大型壺(0686)・土製勾玉片(0828)また床面中央で黒曜石石鏃(3097)が出土した。

137号の下層に小炭化物が多量に含まれ(4層)、大型壺が出土したことは、この部分の機能を暗示している。



1. 暗褐色粘土質ローム粒少
2. 黄褐色粘土質ローム塊少
3. 黒褐色炭化物少
4. 暗褐色ローム粒
5. 暗褐色ローム粒ローム塊
6. 黒褐色炭化物



203 F-1137



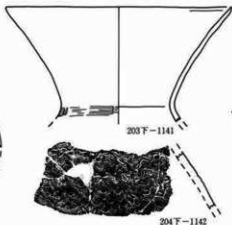
203 F-1139



203 F-3264 (1/1)



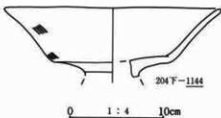
203 F-1136



203 F-1141



204 F-1142



204 F-1144

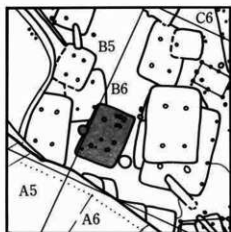
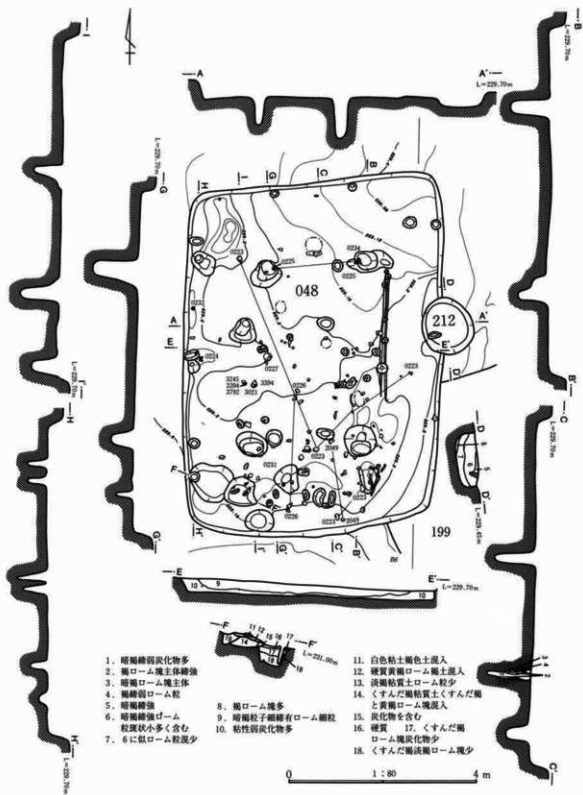
0 1:4 10cm

### 203・204号遺構(BC-5G)

【図p.75 PL.93】

中央尾根上北東側で検出した弥生後期竪穴群。表土はかなり削られており、特に東側は壁・床共に不明。推定小型正方形の203号(3期)は北西側一部を古代竪穴092号に壊される。ほとんど埋土も飛んでいたため、203号と長方形の204号(推定5期)は層位的には新旧関係を識別できなかった。

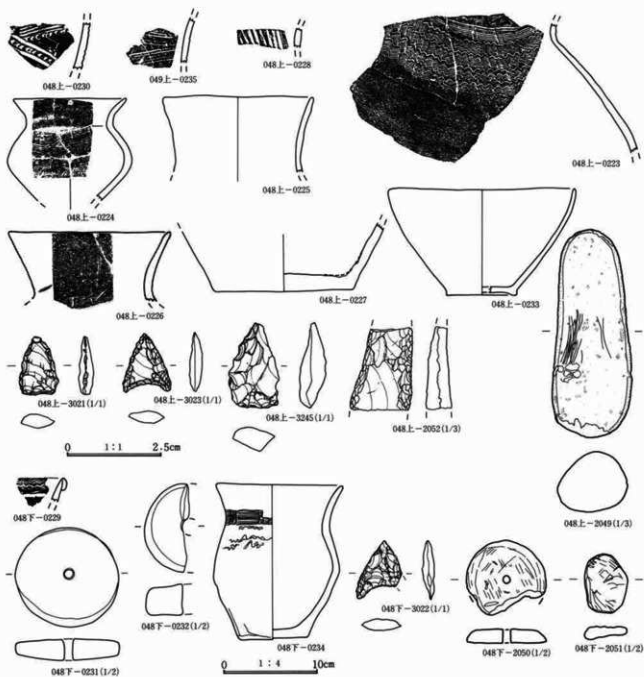
床下部分も含めていくつかビットがあったが、203号南東隅近くの1個(C断面)を除いて、柱穴と考えられるものはなかった。遺物はそのような状態であったため、203号部分に集中している。土師器高坏(1144)は、この部分のビットに伴うもので、竪穴全体とは別と考えられる。縄文深鉢(1140)や黒色安山岩石鏝(3264)も見られた。204号の時期は、位置より推定した。



048・212号遺構(B-5, 6 G) 【図p.76,77 PL.94】

048号は中央尾根上北東側で検出した弥生後期(4期)の竪穴。南東側で弥生竪穴199号を壊しており、西側では同073号と縄文土坑247号が近接している。板材主柱穴が4個並び、北側中間外に炉がある。東西壁各3個、北壁2個を基本とする個柱穴があり、南壁側には入口状柱穴と貯蔵穴を検出した。また南西



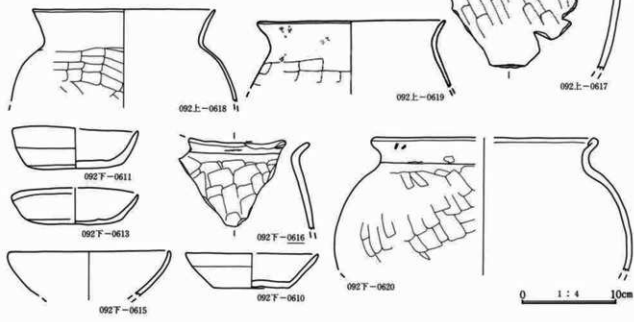
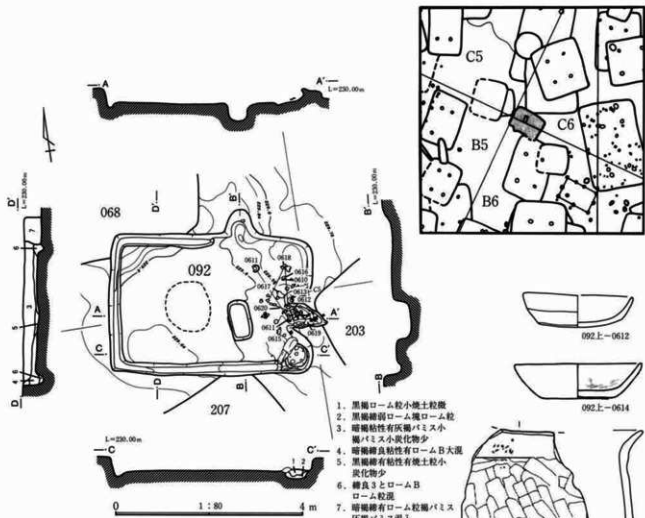


隅では白色粘土の堆積があり、その下にはやや大きい貯蔵穴状のビットを確認した。上記とは別に少し規模の小さな4個の主柱穴セットが南西側に見られる。また東壁側には小ビットを配した浅い溝を確認したが、これらは最終的なものより規模の小さなプラン(5.0×4.2m程度)の痕跡と考えられ、床面の拡張を示しているのだろう。

南壁側の床面にいくつかの炭化材が残っており、最後は焼失している。

遺物は、上層(9層)では弥生土器の他に黒曜石(3021, 23)・チャート(3245)の石織とデイサイト製打製石斧(2052)が目立ち、下層(10~14, 19層)ではビット内から出土した土製紡錘車(0231)も含めて他に紡錘車が土製(0232)及び白色凝灰岩製(2050, 5I)と4点あったことは興味深い。

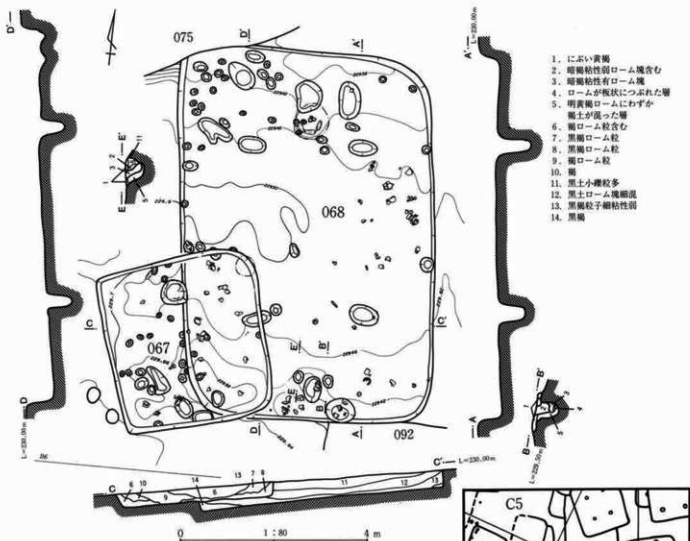
212号(5~8層)は048号より新しい円形土坑だが、遺物はなく時代性格は不明。



092号遺構(BC-6G) 【図p.78 PL.96】

中央尾根上の中央部で検出した古代前期(8世紀後半)の竪穴。203・207・068各号の弥生竪穴を壊す。床中央に、未命名の近世短冊形小土坑が重なる。東壁と北壁の2カ所で共に焼土の残るカマドを確認した。また南東隅で浅い貯蔵穴を検出したが、北東隅にも未掘のピットがある。北カマド左隣から南東隅までやや幅広い周溝が巡っている。また床中央西よりの床下にも未掘の大さめのピットがある。

遺物は上層(3層)では土師器類(0618, 19)等、下層(1, 2, 4-6層)では底部調整の須恵器坏(0610)等があった。

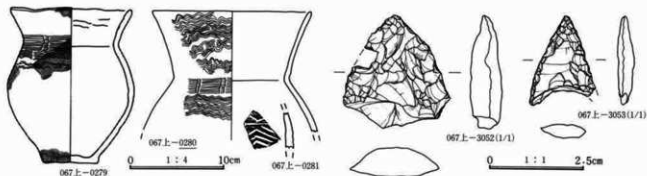


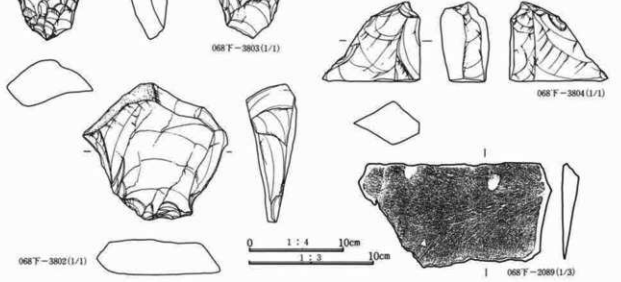
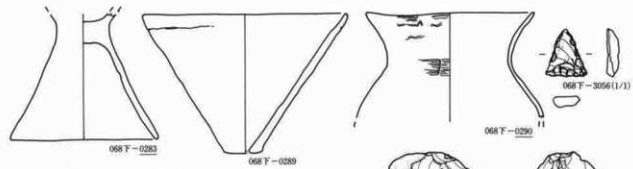
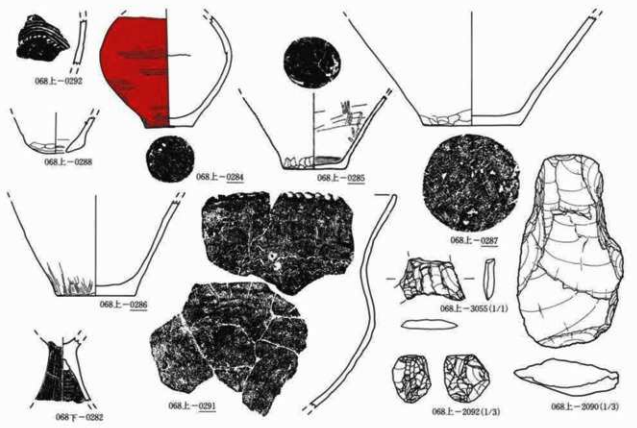
### 067・068号遺構(B-6 G) 【図p.79,80 PL.97,98】

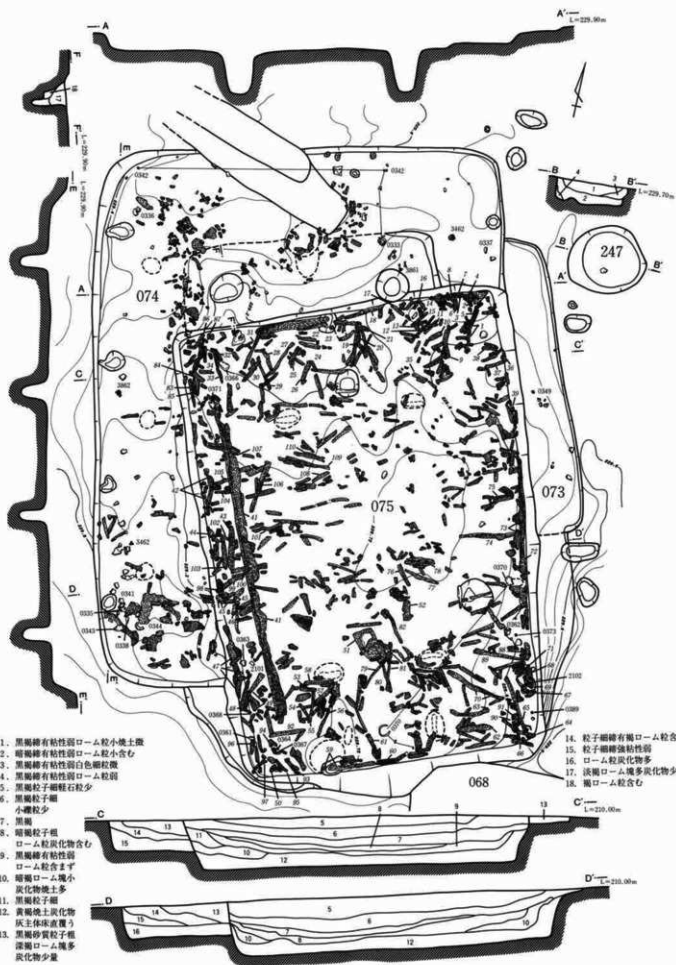
中央尾根上中央で検出した弥生堅穴。新しい067号(5期)は正方形で、北側中央に炉のようなピットがある以外に柱穴は不明。上層(6,9,10層)には弥生瓦類と共に黒曜石石鏃(3052分析・3053)があったが、下層(7,8層)は顕著な遺物はなかった。

長方形の古い068号(1期)は、075・092両号に一部壊される。板材主柱穴が4個並び、北側外に炉がある。東西壁下には側柱がある。床面西側に焼土が散っており、焼失の可能性もある。

上層(11,12層)では榎皮のある壺(0284,85,87)が目立ち、0285は断面に榎本体が見える。下層(1-5,13,14層)には弥生土器以外にチャート製削器類(3802-04)・頁岩砥石(2089)・黒曜石石鏃(3056)があった。



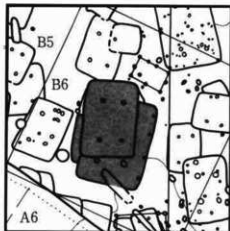




1. 黑褐色有粘性弱ローム粒小塊土微
2. 暗褐色有粘性弱ローム粒小含む
3. 黑褐色有粘性弱白色細粒微
4. 黑褐色有粘性弱ローム粒粗
5. 黑褐色粒子細軽石粒少
6. 黑褐色粒子細小塊粒少
7. 黑褐色
8. 暗褐色粒子粗ローム粒炭化物含む
9. 黑褐色有粘性弱ローム粒含まず
10. 暗褐色ローム塊小炭化物焼土多
11. 黑褐色粒子細
12. 黄褐色土炭化物灰主体床直履
13. 黑褐色黄褐色粗深層ローム塊多炭化物少量

14. 粒子細線有弱ローム粒含む
15. 粒子細線強粘性弱
16. ローム粒炭化物多
17. 淡褐色ローム塊多炭化物少
18. 弱ローム粒含む

0 1:80 4 m



073・074・075・247号遺構(B-6G) 【図p.81～85 PL.99～106】  
中央尾根上の中央で検出した遺構群。

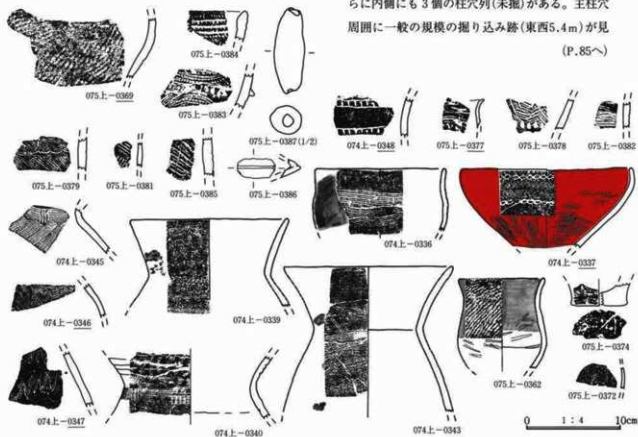
最も新しい075号は弥生後期(7期)の大型堅穴(65m<sup>2</sup>)で、北辺がやや長い長方形(北辺6.7m南辺6.0m東辺9.4m西辺9.6m)で確認面からも深い(1.0m)。北側で073号と074号を南側で068号を壊している。重複のない南側の壁にはテラス状の浅い掘り込みが見られた。

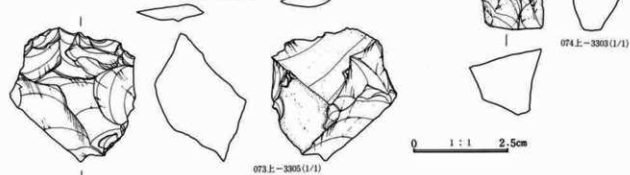
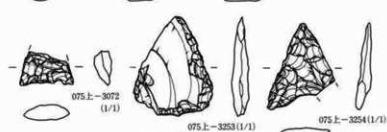
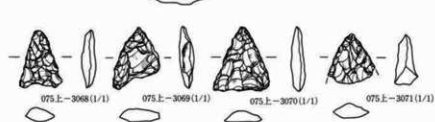
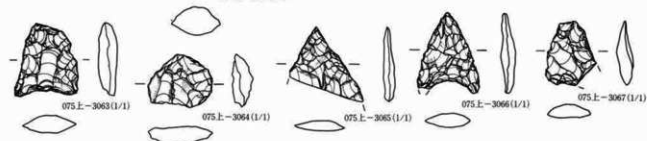
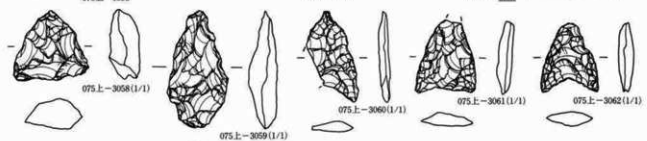
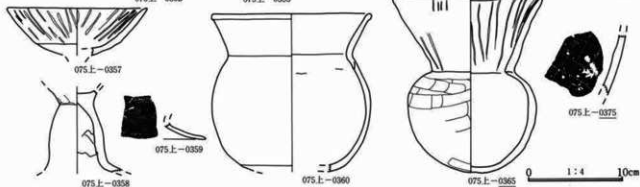
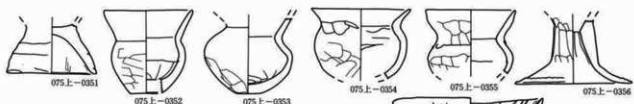
全体に大量の炭化材が散って足の踏み場もないほどの状態であった。特に西壁側が最も濃密で、7m近い直線状の材(カヤ材)を含めて、何重にも重なっていた。材はクリ材が主体を占めたが、その他にも各種見られた(樹種同定参照)。板材主柱穴を4個確認したが(未掘)、主柱北辺中央と東辺南側の2ヵ所で炉を検出した。他に入口柱穴と貯蔵穴また側柱穴も一部確認した(未掘)。

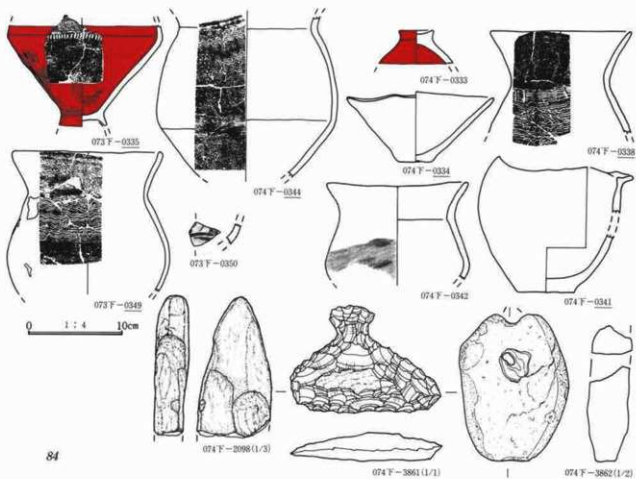
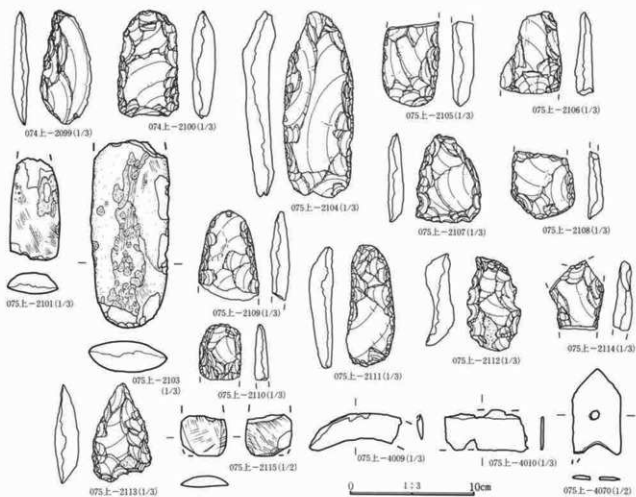
遺物は出土状態に特徴がある。上層(5～7層)では土師器(0351～60, 65, 75)が比較的多く(破片重量比15%)、また黒曜石石鏃(3058～72)・同原石(3303)・同石核(3305)・チャート石鏃(3253, 54)も目立った(黒曜石剥片重量285g)。また大型の鉄鏃(4070)も際だっている。これに対し下層(8～12層)は、黒曜石類が減る(黒曜石剥片43g)と共に、出土土器の量が床面積に比べかなり少ない。また3個の有孔鉢(0366～68)など種類も偏っている。南東隅で出土した把手型飾り(0389)は縄文土器片を加工したものである。同様のものはさらに1点(0388)見られた。なおクリ材の<sup>14</sup>C年代測定は、2,280±80BPを示した。

074号は弥生後期(4期)の大型の堅穴で、北側で近世の未命名短冊形土坑に壊され、南東隅を大きく075号に削られる。本調査で検出した堅穴の中で、最大の面積(8.5×11.0m面積94m<sup>2</sup>)が推定される遺構である。板材の主柱穴2個を北側で検出し、その中間で炉を確認した(未掘)。また西壁際では4個の側柱穴が並び、さらに内側にも3個の柱穴列(未掘)がある。主柱穴周囲に一般の規模の掘り込み跡(東西5.4m)が見

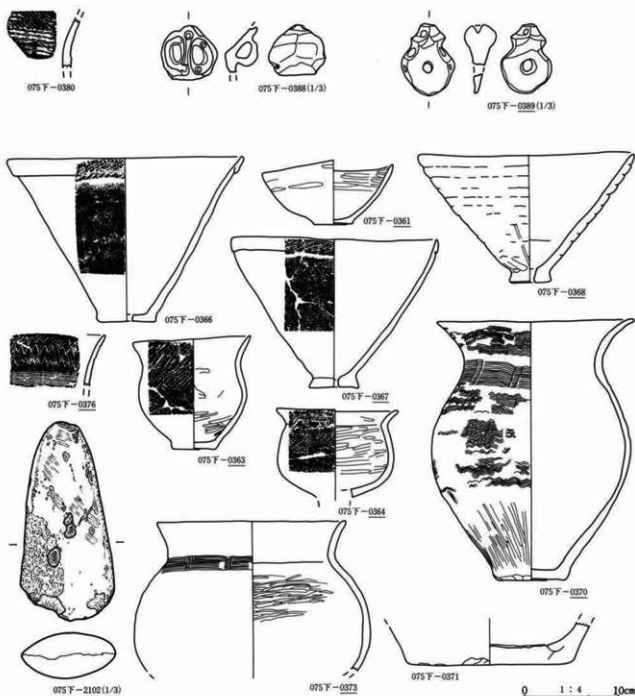
(P.85～)











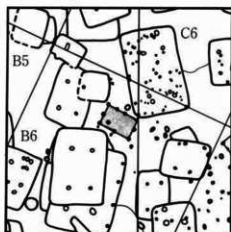
(P.82より) られるため、本堅穴は同一プランの中で拡大されたものと考えられる。

この堅穴も焼失しており炭化材が残っていたが、その状態はまばらで、075号のあり方とははっきりと異なっていた。遺物は、残存床面積から見て著しく少なくはなかった。上層(13.14層)は弥生土器が主体で、黒曜石刹片の量は多くない(3462など30g)。下層(15~18層)では南西隅に片口鉢(0341)などがまとまっている他に、チャート製垂飾(3862)・砂岩砥石(2098)も見られた。

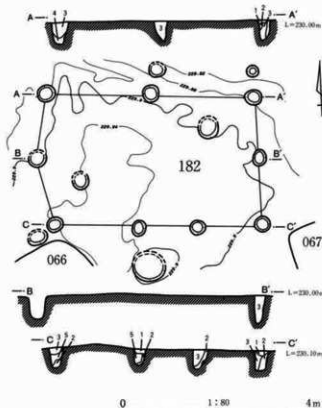
073号は弥生後期(1期)の堅穴で、074,075両号に壊されているため、僅かに東壁(約6.2m)側を検出したにすぎない。確認面からの深さは浅く(10cm)、遺物も壺(0349)・高坏(0335)が見られた程度である。

247号は073号の東に近接する円形土坑で、上層(1.3層)から縄文土器片が出土。下層(2.4層)では遺物はない。

## II 検出遺構と遺物



1. 暗褐色粘り質ローム塊少
2. 黒褐色粘り質白色細粒微量
3. 黒褐色粘り質ローム粒小微量
4. 黄褐色粘り質ローム塊若干
5. 黒褐色粘り質ローム塊若干



### 182号遺構(B-6 G)

【図p.86 PL.106】

中央尾根上の中央で検出した掘立。周辺には弥生竪穴066・067・075各号が同時存在不可能なほどに近接している。また同068号と074号もかなり近い位置にある。

長軸北辺が2間で南辺が3間、短軸は共に2間だが西辺中央が外に出ている。そのため西側が膨れた長方形(2.7×4.4m中央長4.7m)で、柱穴も短軸中央のものが深い(短軸中央0.5~6mその他0.3~4m)。

遺物は出土しなかったが、埋土の状態より弥生と考えられ、上記近接により後期の3, 4, 5, 7期以外の時期だろう。深い柱穴は棟持柱と考えられ、妻部屋根は外へ広がっていたことになる。また南辺が3間になっているのは、入口部分があったためかもしれない。

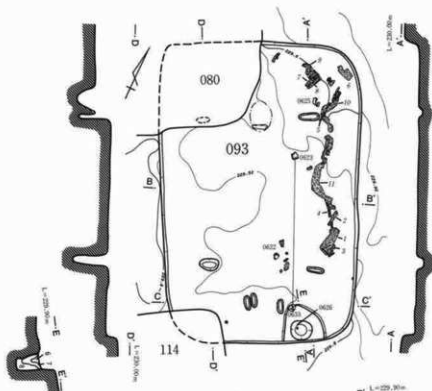
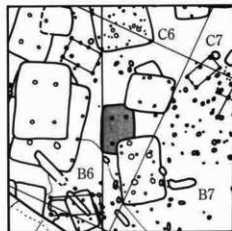
### 093号遺構(B-6 G)

【図p.87 PL.106, 107】

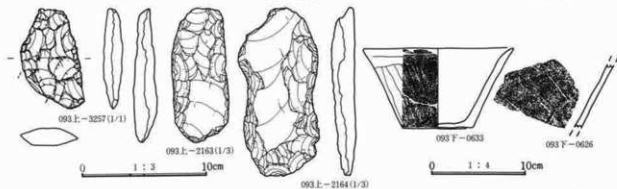
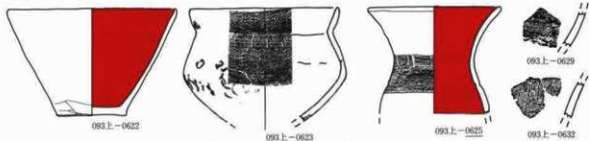
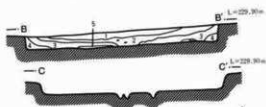
中央尾根上の中央で検出した弥生後期(2期)の竪穴。隅丸長方形だが、北西を080号に、南西を114号に壊される。板材主柱穴が4個並んでおり、北側中間に炬がある。また南壁際には、周囲に掘り残しの高まりを持つ貯蔵穴があった。焼失した遺構で、東壁に沿って炭化材が残っていた。しかし、他の弥生焼失竪穴では必ず見られたタリ材は、ここでは見られなかった。この竪穴が樹種を調べた中では、最も古いことと関係しているかもしれない。

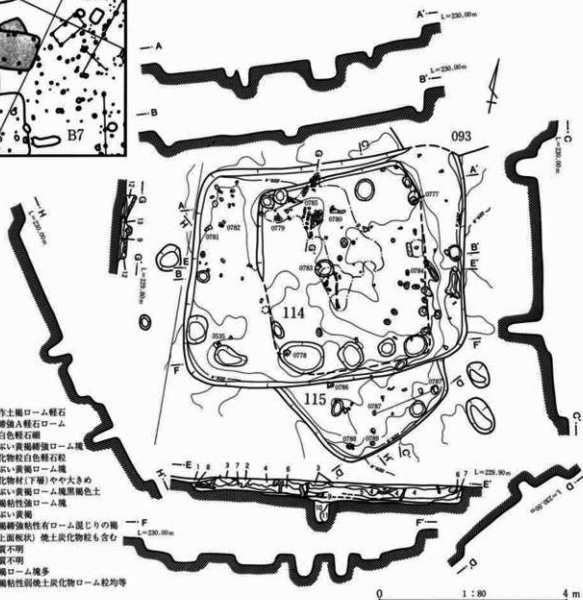
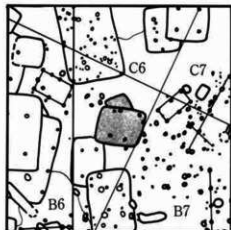
プラントオパール測定では炭化材はススキ属と判明し、屋根材と考えられる。

上層(1, 2層)からは弥生小型壺(0625)・台付甕(0623)・チャート製石鏃(3257)などが、下層(3~8層)からは小型鉢(0633)・甕片(0626)が出土した。

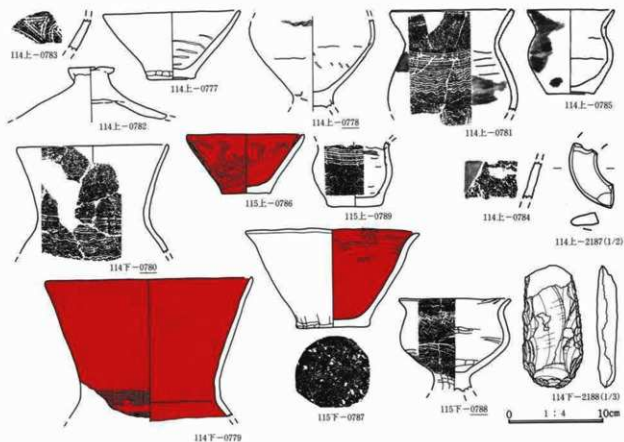


1. におい黄褐色質ローム粒少
2. 暗褐色土と黒褐色の流土ローム粒質物少
3. 1と同質ローム粒質多
4. 暗褐色ローム塊を含む
5. 暗褐色や硬質粘性有
6. 縦線面やや明るい色調
7. 縦線結良粘性有
8. 暗褐色のくずれローム塊多





1. 耕作土層ローム軽石
2. 黒締強入軽石ローム
3. 陶白色軽石層
4. にぶい黄褐粘強ローム塊  
炭化物粒白色軽石粒
5. にぶい黄褐ローム塊  
炭化物材(下層)やや大きめ
6. にぶい黄褐ローム塊黒褐色土
7. 黒粘粘強性ローム塊
8. にぶい黄褐
9. 黒粘粘強性ローム混じりの層  
(上面板状) 焼土炭化物粒も含む
10. 土質不明
11. 土質不明
12. 暗褐色ローム残多
13. 暗粘粘強性同焼土炭化物ローム粒均等



## 114・115号遺構(B-6G)

【図p.88,89 PL.108】

中央尾根上の中央で検出した弥生堅穴群。114号は後期(6期)の不整隅丸長方形の堅穴で、東西方向を長軸にとる珍しい例である。北東側で093号を壊し、南側で115号を切っている。

北辺がややくぼんでおり、支柱穴の位置はかなり特異な配置である。すなわち、各隅を結ぶ対角線の交点の位置に最も深い柱穴があり、それを通して短辺中央にやや小さめのものがある。また中央より東側の南北の壁近くにやや深い柱穴が並んでいる。また炉はその南北の柱穴よりさらに東側の中央にある。

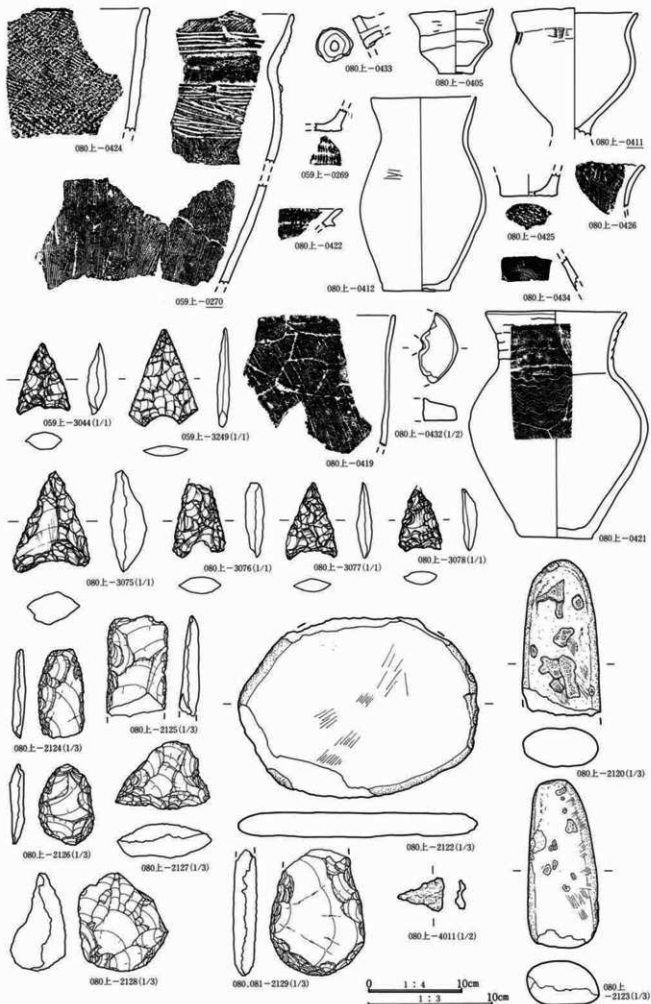
なお、中央には少し床が下がって、南北走向の小型隅丸長方形のプラン(3.4×4.0m)が確認できる。またこのプランの中央北側には炉跡が残っている。埋土の状態を含めて考えれば、この小型プランが当初のもので、それをなぜか東西方向に不整形に拡大した状態がここに見られるのだろう。そのため、柱穴の位置もかなり特殊なものになってしまった。

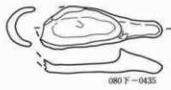
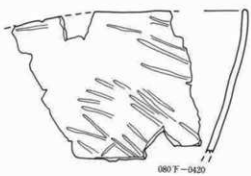
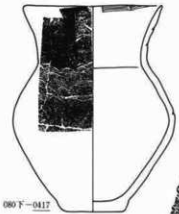
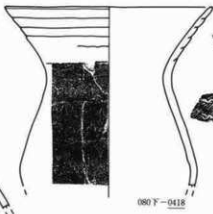
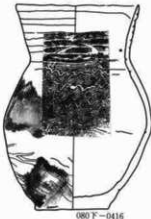
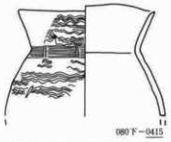
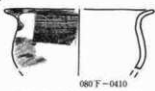
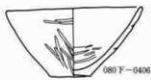
炭化材が中央部分を中心に残っており、焼失している。

上層(1-5層)からは、甕類(0778.81.85)・小型鉢(0777)・蓋(0782)などの弥生土器片と滑石質蛇紋岩製の塊状耳飾り(2187)が見られ、下層(6-13層)では甕片(0779.80)が出土した。

115号は114号に北側を削られた弥生後期(2期)の堅穴である。北西・南東方向を主軸にした小型の形状と考えられるが、南隅の支柱穴のみを検出した。上層より小型鉢(0786)・ミニチュア(0789)が出ており、また下層からは榎皮が底部に見られる鉢(0787)と台付甕(0788)などが出土した。



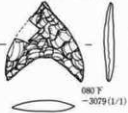
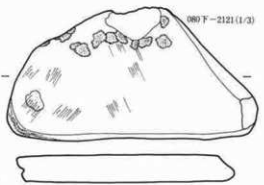
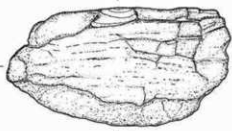




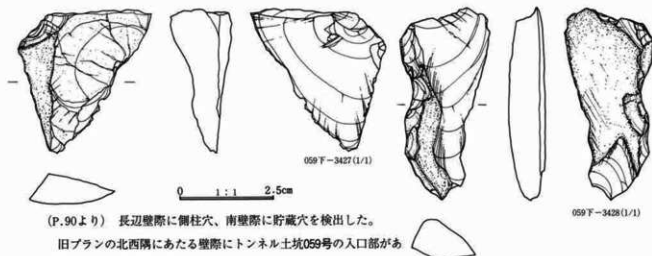
0 1 : 4 10cm



0 1 : 1 2.5cm







(P.90より) 長辺壁際に側柱穴、南壁際に貯蔵穴を検出した。

旧プランの北西隅にあたる壁際にトンネル土坑059号の入口部がある。床から40センチ下がつて外側に1 m くぐった場所がトンネルの開口部になる。全体は少し鍵手状に延びており(3.6×0.6 m)、底はやや凹凸がある。人為的に埋めたような同一混土の埋土状態だった。

焼失遺構で、南側に炭化材が残存。遺物は多く、南壁際の貯蔵穴周辺の残りが良かった。上層(1.2.6層)から縄文晩期～弥生中期相当の土器類(0270, 0419, 26)がいくつか見られた。また打製石鏃は6本(黒曜石3044, 75～78, チャート3249)あり、石核は黒色安山岩(2127)と硬質泥岩(2128)が見られた。銅滓状の小片(4011)も出ている。下層(3～5.7層)では、貯蔵穴から4個の壺類(0413, 0415～17)・トンネル土坑から小型鉢(0407)・高坏(0409)・台付壺(0410)・黒曜石の打製石鏃(3043)と剥片(3427)を検出した。ここからは同剥片(3428)も出ており、下層出土のその他の剥片の合計は20 gである。一方、080号ではチャート製有蓋石鏃(3256)・黒曜石石鏃(3079分析)・同原石(3306)があり、その他の黒曜石剥片の合計は上層が72 g 下層が44 gである。

本遺構西の横列253N号と本遺構の間は、狭い中央尾根上では唯一堅穴の見られない空間になっている。

#### 164・167・248～250・252号遺構(CD-4, 5 G) 【図p.94～96 PL.113～116】

中央尾根上東側で検出した遺構群。東側は近世の小道130, 131両号で削られ、また短冊形土坑群108・146両号と未命名の近世畠跡が全体に重なっている。

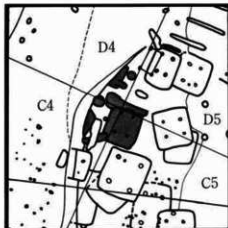
250号は古墳中期(4期)の堅穴で、僅かに推定正方形プランの南西隅のみを検出した。遺物は多く、上層(6層)からは石英閃緑岩コモ羅み石(2310)、下層(7.8層)からは土師器台付壺(1301.03)・同壺(1302)・紡錘車(1306)が見られ、また硬質泥岩削器(2309)・黒曜石石匙(3283)も混じていた。

164・167両号は弥生後期(5期)のトンネル土坑付き堅穴である。東壁は東谷上部の黒色土中で、あまり明確には検出できなかった。板材主柱穴が並んでおり、北辺には炉がある。南壁側は107号で壊されるが、入口柱穴も一部検出。北東隅側からトンネル土坑(底3.0×0.6 m)が北東方向に延びる。床面からは0.6 mの深さ。

上層(1.2.29層)では南東側で黒曜石剥片一括(3604)と縄文深鉢片(0998)が見られた。下層(3～5.9～13.30～32層)では有孔鉢(0992)・小型壺(0993)・大型壺(0989)などの各種弥生土器片が北壁と西壁際に残っていた。北西隅の掘り方(20～24層)からは黒曜石石鏃(3124)が出ている。

248号は、縄文前期の堅穴で、残っていたのは西壁側のみである。上層(17層)からは深鉢(1294)など土器片と硬質泥岩削器(2233)・同石核(2308)が出土した。下層(18, 19層)から浅鉢(1291)・深鉢片(1295)が出ている。

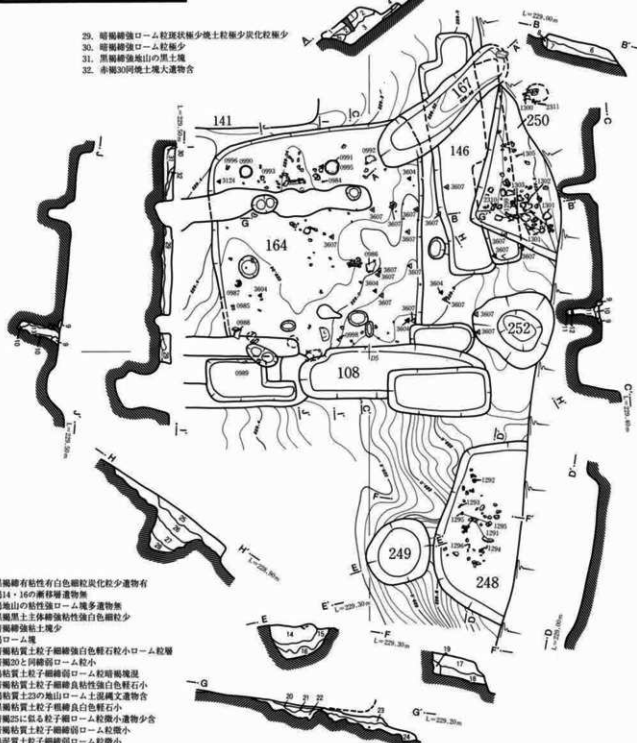
249号は縄文の円形土坑で、252号は同横円形土坑である。共に顕著な遺物は見られなかった。



1. 暗褐色弱粘性土粒小
2. 暗褐色弱粘性土粒小
3. 黒褐色土主体粘強炭化物小
4. 暗褐色弱粘性土粒多
5. 暗褐色弱粘性土粒比多

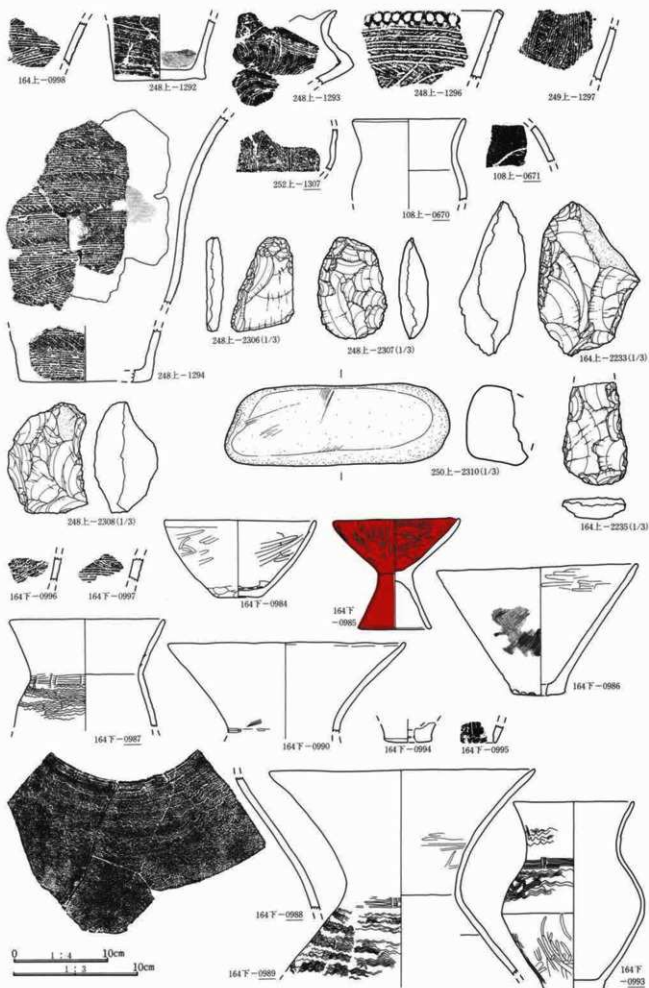
6. 暗褐色弱粘性土炭化物少
7. 黒褐色土炭化物少6・7境遺物多
8. 暗褐色弱粘性土炭化物多
9. 暗褐色弱粘性土炭化物多
10. 暗褐色弱粘性土炭化物多
11. 暗褐色弱粘性土炭化物多
12. 暗褐色弱粘性土炭化物多
13. 暗褐色弱粘性土炭化物多

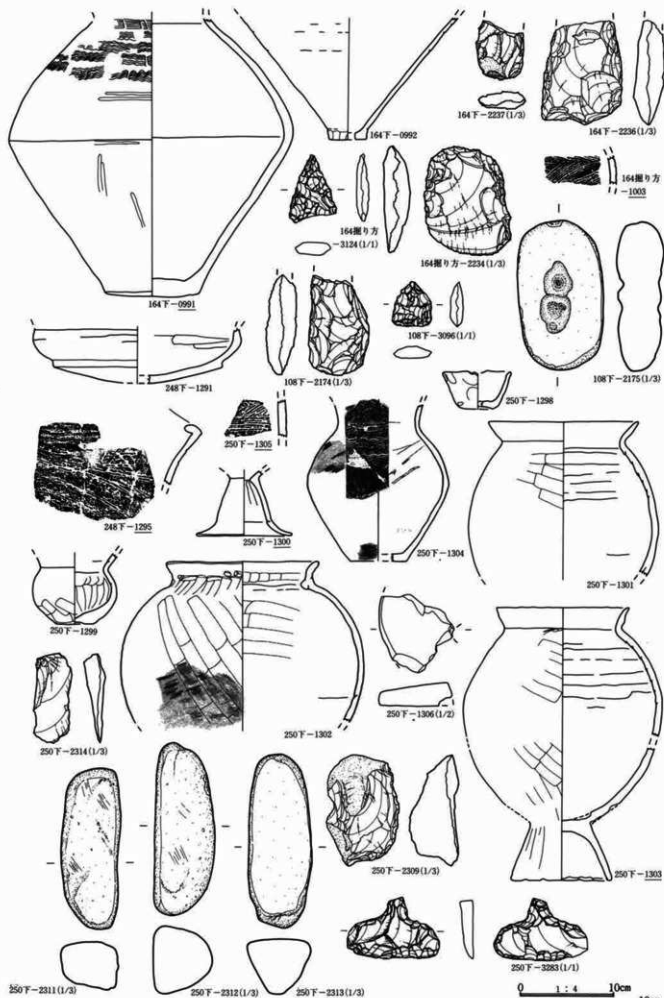
29. 暗褐色弱粘性土炭化物少土粒炭化炭化物少
30. 暗褐色弱粘性土炭化物少
31. 暗褐色弱粘性土炭化物少
32. 赤褐色弱粘性土炭化物多



14. 黒褐色粘有粘性有白色細粒炭化物少遺物有
15. 暗褐色弱粘性土炭化物少
16. 暗褐色弱粘性土炭化物少
17. 暗褐色弱粘性土炭化物少
18. 暗褐色弱粘性土炭化物少
19. 暗褐色弱粘性土炭化物少
20. 暗褐色弱粘性土炭化物少
21. 暗褐色弱粘性土炭化物少
22. 暗褐色弱粘性土炭化物少
23. 暗褐色弱粘性土炭化物少
24. 暗褐色弱粘性土炭化物少
25. 暗褐色弱粘性土炭化物少
26. 暗褐色弱粘性土炭化物少
27. 暗褐色弱粘性土炭化物少
28. 暗褐色弱粘性土炭化物少

0 1:80 4m



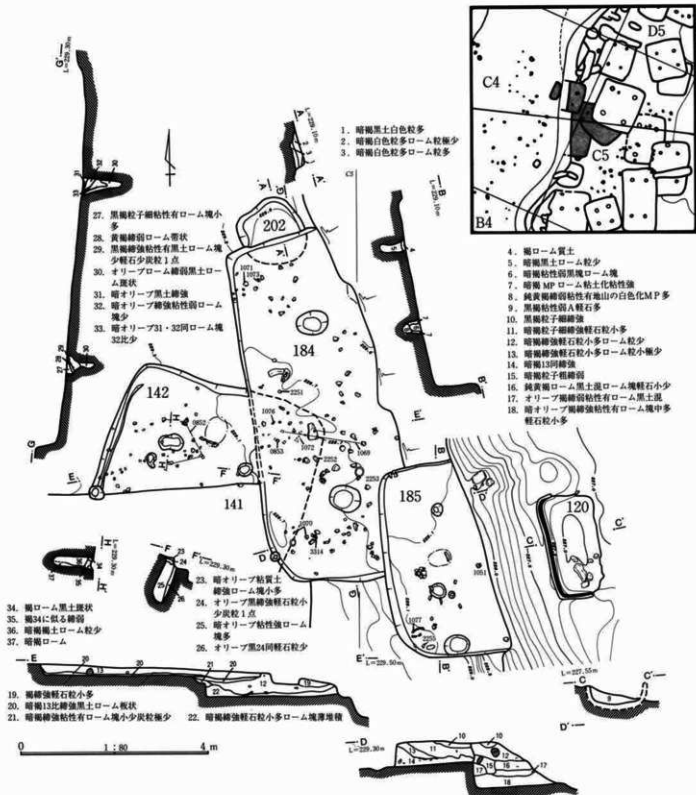


250 F-2311 (1/3)

250 F-2312 (1/3)

250 F-2313 (1/3)

0 1 4 10 cm  
1 : 3



120・142・184・185・202号遺構(C-4, 5 G) 【図p.97,98 PL.117,118】

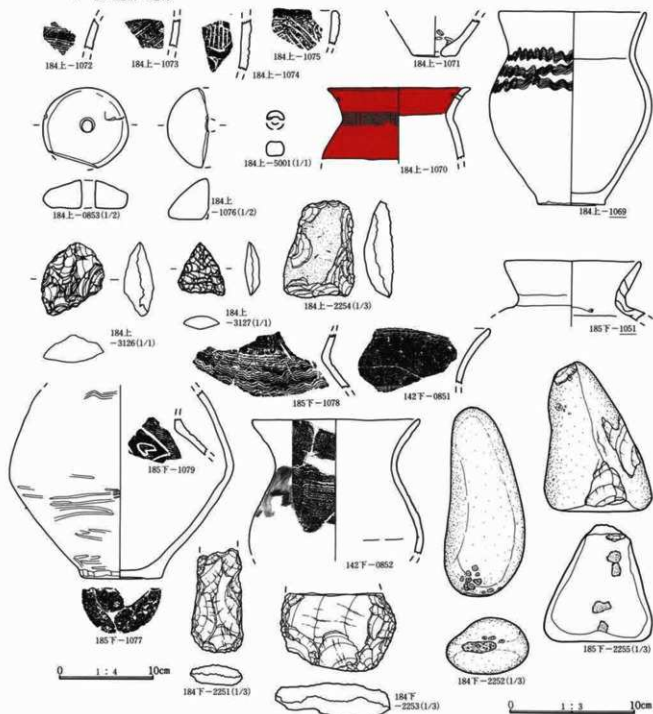
中央尾根上東側で検出した遺構群。東側は近世の小道130,131両号で、南西側は古墳堅穴141号で壊される。120号(p.64既述)は、漆喰で築かれた近世の肥溜で、埋土状態(9層)より天明3年の浅間山噴火以前に作られたことが分かる。202号(p.64既述)は、弥生後期の楕円形土坑。

185号は弥生後期(5期)の堅穴で、東側大部分は130,131両号に壊される。西側では184号を切る。西斜面上位の077号と同様に主軸を東西方向に持つ珍しい例(深1.0m)で、小円形の西側主柱穴の間に埴がある。

下層(4~8,18層)から弥生壺(1078)・壺(1077)・閃緑岩製磨り石(2255)そして沈線文壺片(1079)が出土。土師器壺(1051)は重複する130,131両号に壊された遺構のものだろう。

(P.98へ)

II 検出遺構と遺物

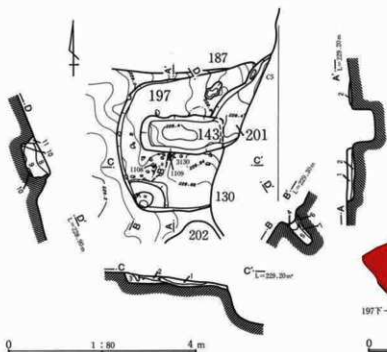


(P.97より) 142号は弥生後期(3期)の竪穴で、東側で184号を壊すが、南側半分以上を141号で削られる。北側の板材主柱穴2個を確認し、その中間外側で炉を検出した。西壁際には一部周溝が見られた。

下層(13.20.23~26.34~37層)の炉西及び主柱穴埋土より壺片(0851.52)が出土。

184号は弥生後期(1期)の長方形の竪穴で、東側半分が130.131両号で壊される。また重複する全ての遺構より古い。北西・南西の板材主柱穴を検出し、炉の痕跡が北西柱穴の右上に残る。

上層(12.19層)からは青色ガラス玉片(5001)また土製紡錘車(0853.1076)そして壺(1069)・短頸壺(1070)・黒曜石石鏃(3126.27)・同刺片(3314)などが出土。下層(21.22.27~33層)では、緑色石片打製石斧(2251)・珪質頁岩磨り石(2252)・硬質泥岩礫器(2253)を検出した。



### 143・197・201号遺構(C-5 G)

【図p.99 PL.119】

中央尾根上北東側で検出した遺構群。東側は近世の小道130,131両号に壊され、北側では弥生堅穴187号と重複し、さらに南側で弥生土坑202号が近接する。

143号は、近世の短冊形土坑。すぐ南側の197号部分で瀬戸美濃染付唐草文皿片(1109)が出ているため、19世紀前半の遺構と考えられる。

197号は弥生後期の小型楕円形(2.8×3.2m以上)の堅穴。西壁が弧状に膨らむのに対し、南北壁は直線状である。重複する187,201両号との関係は不明。中央を大きく143号に壊される。南西隅に斜めに入る柱穴が、掘り残しの土境内に見られる。床面は未精査のため、他にも柱穴などがある可能性は残る。弥生鉢口縁(1108)・黒曜石有茎石鏃(3130)が下層(2-7層)より出土。

201号は弥生と推定される楕円形土坑で、上層(8,9層)には天明より古い浅間山軽石(同定できず)が多く含まれ、下層(10,11層)には少なかった。187号との新旧関係は不明だが、トンネル土坑のような形状にも見える。

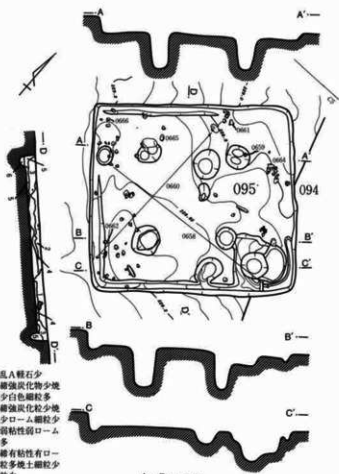
### 095号遺構(C-5 G)

【図p.100 PL.120】

中央尾根上北東側で検出した古墳中期(4期)の堅穴。弥生堅穴と重複し、東側で094号、北側で186号を壊し、西側では118号に近接する。

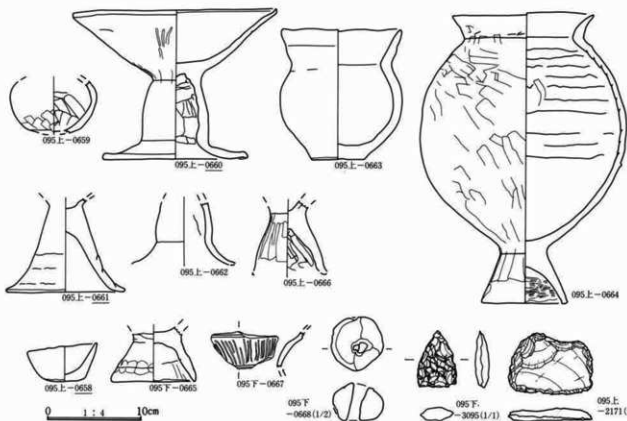
丸材の主柱穴4本が並び、北辺や内側に坪がある。東には主柱穴から隔まで大きな貯蔵穴が見られ、各墳際のかんりの部分で幅広い周溝を検出した。

埋土はあまり安定していないが、上層(1,2層)からは土師器高坏(0660-62.66)・台付甕(0664)・ミニチュア(0658)・頁岩打製石斧(2171)があった。下層(3-6層)からは、土玉(0668)そして黒曜石石鏃(3095)が出土した。



1. 陶器瓦片輕石少
2. 暗褐色強炭化物少燒土粒少白色細粒多
3. 暗褐色強炭化物粒少燒土粒少ローム細粒少
4. 陶器質粘性弱ローム細粒多
5. 暗褐色有粘性有ローム細粒多燒土細粒少炭化物少
6. 暗褐色ローム塊少

A~D L=29.30m  
0 1:80 4m

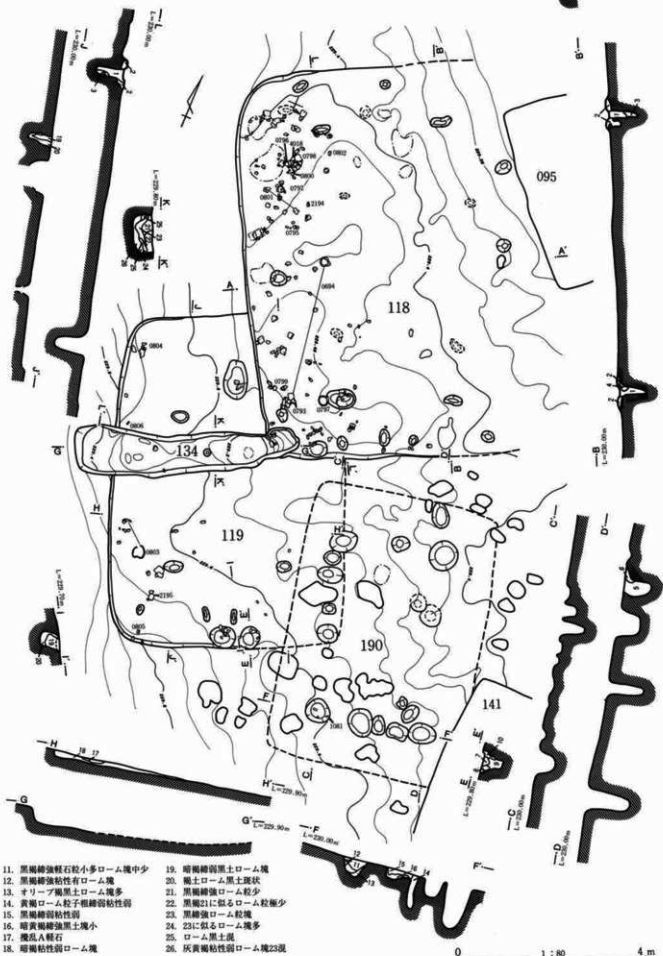




1. 暗褐色粘性弱ローム粒黒土粒
2. 暗褐色
3. 灰黄褐色弱ローム粒少黒土粒少
4. ローム1混
5. 腐粒子粘性弱粒石中少

6. 黄褐色強粘性強
7. 純黄褐色作土A粒石ローム塊
8. 暗褐色白色粒軽石小灰化物粒
9. 暗褐色黄褐色ローム混
10. 暗褐色黄褐色ローム粒多

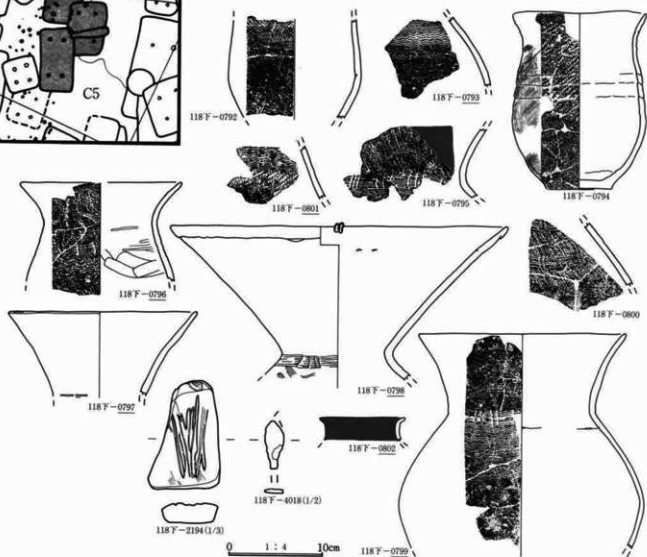
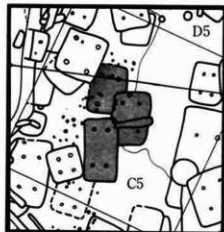
A' L=229.70m



11. 黒褐色強粒石粒小多ローム塊中少
12. 黒褐色強粘性有ローム塊
13. フゾロ黒土ローム塊多
14. 黄褐色ローム粒子粗粒粘性弱
15. 暗褐色弱粘性弱
16. 暗褐色強黒土塊小
17. 塊状A軽石
18. 暗褐色粘性弱ローム塊

19. 暗褐色弱黒土ローム塊
20. 腐土ローム黒土塊状
21. 暗褐色強ローム粒少
22. 黄褐色に似るローム粒極少
23. 黄褐色ローム粒塊
24. 23に似るローム塊多
25. ローム黒土混
26. 灰黄褐色粘性弱ローム塊23混

0 1:80 4m



### 118・119・134・190号遺構(C-5 G) 【図p.101～103 PL.121,122】

中央尾根上の中央で検出した弥生後期の堅穴群。このあたりでは表土がかなり削られており、埋土の残存状態は良くなく、特に南東方向はローム地山が大きくカットされていた。古墳中期の堅穴095号が北東で、141号が南東で重なっている。

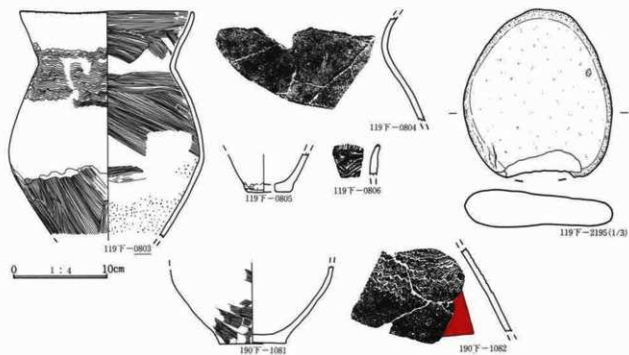
190号は推定長方形の堅穴(推定7期)で、南東側で141号に削られ、北西側で119号と重なる。地山のカットが激しく、壁・床ともに全く検出できなかった。4本の主柱穴を含めたビット群、そして北辺内側の炉跡のみを確認した。主柱穴は、掘り方で丸掘りしたが、板材使用の可能性はある。

柱穴埋土より壺(1081)・壺(1082)が出土。位置より時期を想定した。

118号はトンネル土坑134号を南西隅に持つ長方形の堅穴(6期)である。東側半分は床・壁共にすでに削られており、また095号が重なっている。南西側では119号を削っている。4本の板材主柱穴が並び、北辺内側に炉跡の焼土が残る。側柱状のビットも見られるが、あまり規則的な配置にはなっていない。

南西隅からトンネル土坑(底長4.4m最大幅1.0m)が西方向に延びる。トンネル土坑の底は、床より0.25mほど低い。この部分の埋土(21～26層)は、人為的な埋没状況の可能性も示している。

西壁際に焼土が数カ所散っており、焼失した可能性がある。



遺物は北西隅付近とトンネル土坑入口近くを中心に出土した。全て下層出土に含まれるが、有茎鉄罐(4018)を、大型壺(0798, 0800)・甕(0796)と共に北西隅で検出した。この近くでは他に砂岩製砥石(2194)も出ている。壺(0793, 97, 99)は後者で出ている。

119号は長方形の堅穴(2期)で、北東側から中央を118・184両号に壊され、南東側では190号と重なる。南東側は床・壁は残っていない。

板材の主柱穴4個が並び、北辺の外側に炉がある。南壁中央には入口柱穴が見られる。

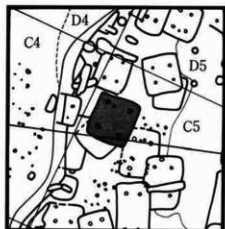
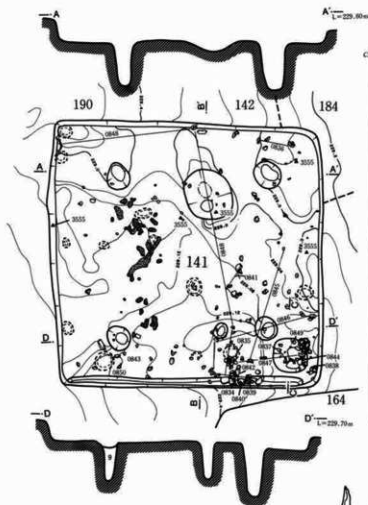
西壁際に遺物が残っていたが、埋土は薄く全て下層出土となる。甕(0803, 04)・有孔鉢(0805)が主なもので、粗粒安山岩の磨り石(2195)が南西隅近くで出土した。

#### 141号遺構(C-5G) 【図p.104,105 PL.123,124】

中央尾根上の東側で検出した古墳中期(4期)の堅穴。周囲には多くの弥生堅穴があるが、北東側で142,184両号を、北西側で190号を壊す。

丸材の主柱穴が4ヶ所並び、北辺の内側に炉がある。南東隅では貯蔵穴を検出した。掘り方で壁際にいくつかのピットを確認したが、規則性は見られない。西辺の床面には炭化材が残っており、焼失遺構である。

遺物は、上層(1,2層)から出た鉄鏃(4021)が特筆される。他に硬質泥岩打製石斧(2202.03, 2527)・同削器(2201)そして黒曜石石鏃(3109A, B)も出ている。下層(3-9層)では貯蔵穴付近を中心に、土師器台付甕(0847, 48)・壺(0846)・高坏(0834-39)が目立ったが、他に弥生台付甕(0843)・小型短頸壺(0844)も見られた。なお、複数の黒曜石刺片(3555)も出ている。



1. 用弱粘且粘性弱ローム粒少白色細粒少鉄屑有
2. 用硬土粒多炭化物多灰多ローム塊少ローム粒少
3. 用弱粘強粘性弱ローム粒多白色細粒少
4. 用硬ローム粒極少
5. 用硬黒土強強ローム
6. 用硬炭化物少ローム粒極少
7. 用Gに似るローム粒多
8. 用黒土粘性有ローム粒塊多
9. 用粘強粘性強黒土ローム質土

0 1 : 80 4 m



141上-2201 (1/3)



141上-2202 (1/3)



141上-2203 (1/3)



141上-2527 (1/3)



141上-3109A (1/1)



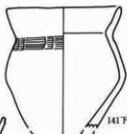
141上-3109B (1/1)



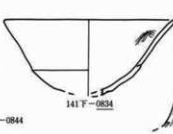
141上-4021 (1/2)



141F-0849



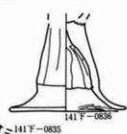
141F-0844



141F-0834



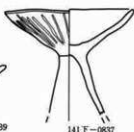
141F-0835



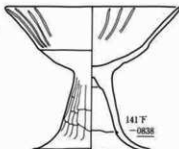
141F-0836



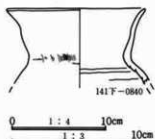
141F-0843



141F-0837



141F-0838

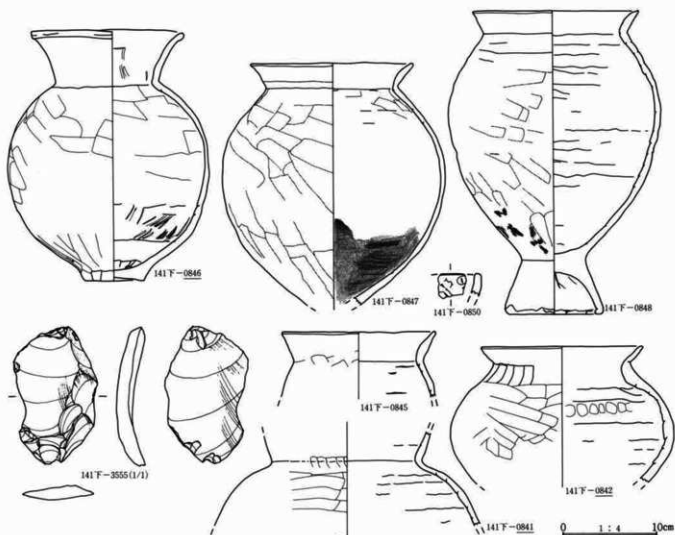


141F-0840



141F-0839

0 1 : 4 10cm  
1 : 3 10cm



139・140号遺構(CD-5G)

【図p.106 PL.125】

中央尾根上東側で検出した遺構群。周辺は近世以降の削平が激しく、地山ローム土が大きく削られており、また近世以後の畠サク5条が東西方向に走っている。

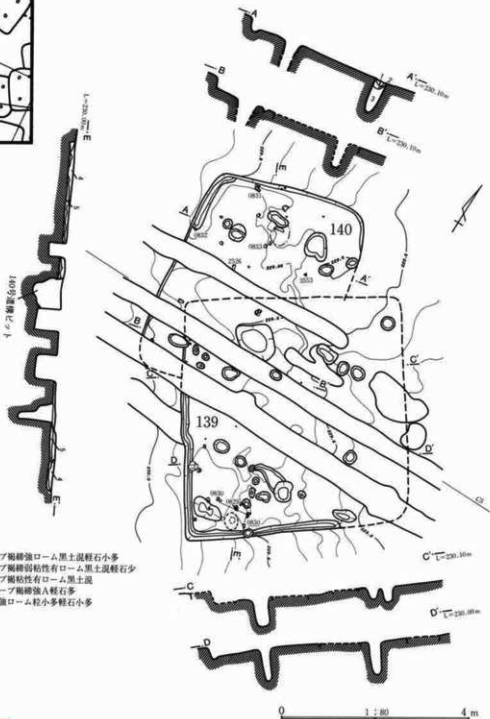
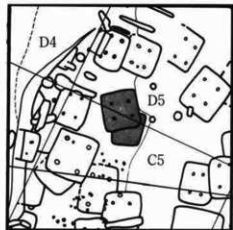
139号は古墳中期(3期)の堅穴で、壁を検出したのは南隅を中心とする全体の3分の1程度。小丸柱の主柱穴4個が並ぶが、炉跡は確認できなかった。正方形プランと推定した。壁の残っている部分には周溝も見られるが、床面もその他の部分ではすでに削られており、他にいくつか検出したピットも性格は不明である。

目立った遺物は南隅にまともっており、上層(4層)は近世の天明以後の堆積だが、土師器高坏(0829)が見られた。薄い下層(5層)では土師器台付甕(0830)があり、掘り方からは硬質泥岩の打製石斧(2525)が出土した。

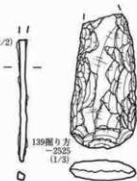
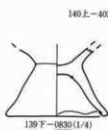
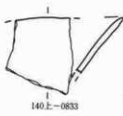
140号は弥生後期(6期)の堅穴だが、南西側を139号に壊されたため、床と壁を確認したのは北西側の半分程度にすぎない。さらに内部も3条の畠サクが切り刻んでいる。

小板材の主柱穴を4個確認したが、西辺の2個は掘りきっていない。北辺外側に炉があった。北西隅付近には一部周溝も見られた。

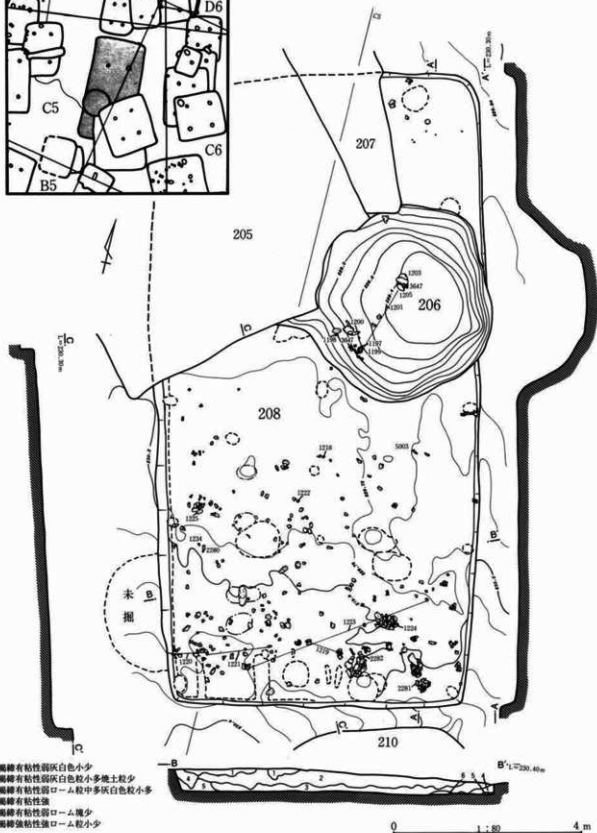
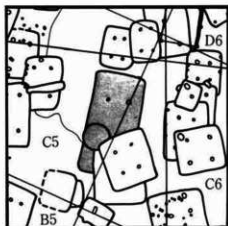
埋土の状態は薄いため、139号と明確に区別しがたい。北西隅を中心に上層(4層)から弥生小型鉢(0831)・甕(0833)・硬質泥岩打製石斧(2526)・黒曜石剥片(3553)などが出たが、下層(1-3,5層)で鉄鏃基部(4020)を検出した。



1. オリーブ編織強ローム黒土混軽石小多
2. オリーブ編織弱粘性有ローム黒土混軽石少
3. オリーブ編織粘性有ローム黒土混
4. 暗オリーブ編織強A軽石多
5. 黒編織強ローム粒小多軽石小多



0 1:4 10cm  
1:3 10cm

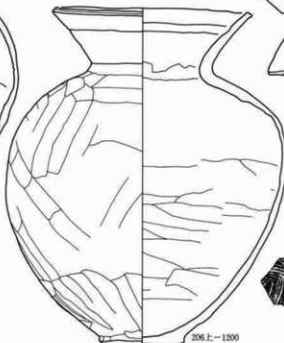
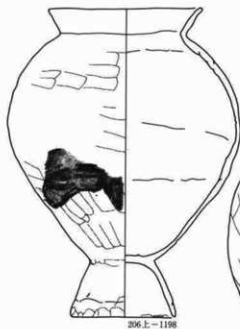
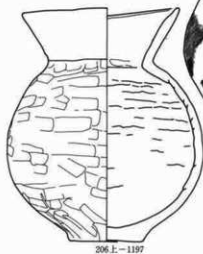
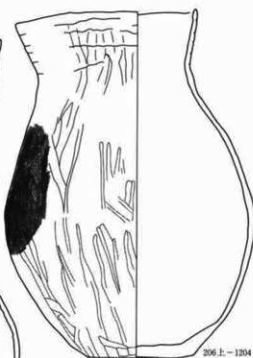
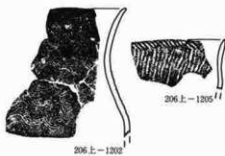
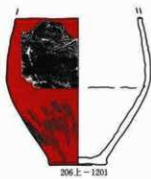


1. 黒麻縄有粘性弱灰白色小少
2. 黒麻縄有粘性弱灰白色粒小多堆土粒少
3. 黒麻縄有粘性弱ローム粒中多灰白色粒小多
4. 黒麻縄有粘性强
5. 黒麻縄有粘性弱ローム塊少
6. 黒麻縄強粘性強ローム粒小少

#### 206・208号遺構(C-5, 6G) 【図p.107~109 PL.126,127】

中央尾根上の中央で検出した遺構群。北側で古墳堅穴205号と弥生堅穴207号と重なり、南側では弥生堅穴210号が近接する。また南西側には未掘の土坑がある。

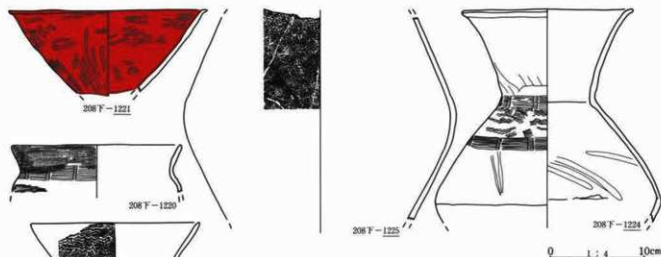
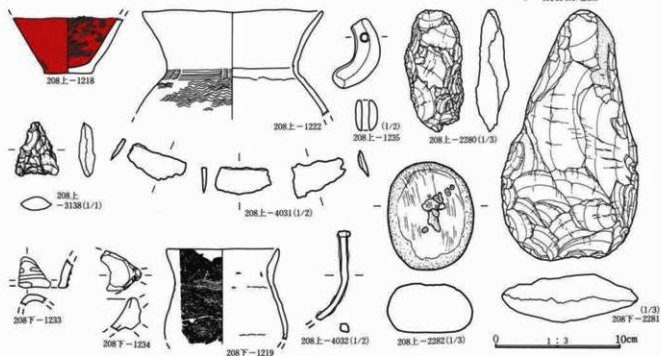
206号は風倒木(径4.2m深1.8m)で、弥生後期の207,208両号を壊し、古墳中期205号より古い。そのため、古墳前期に形成されたものと推定する。(P.109へ)



0 1:4 10cm



1 観音山地区

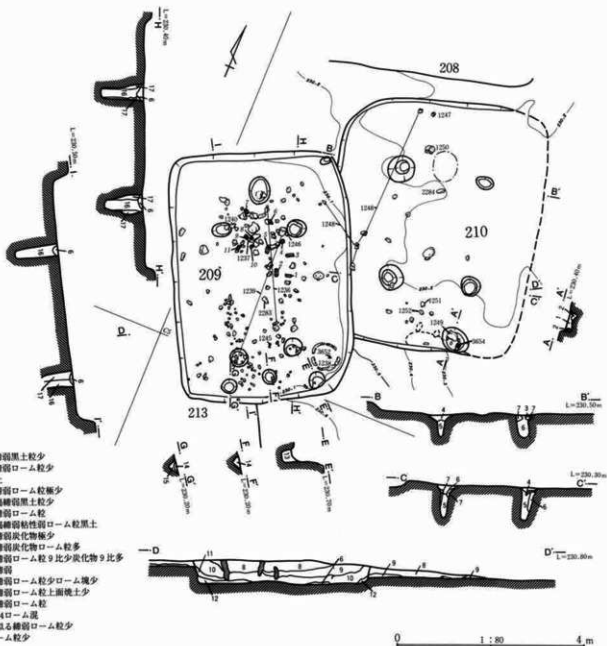


(P.107より) 遺物は、弥生土器甕(1201～05)、土師器壺(1197,1200)・台付甕(1198,99)そして黒曜石剥片(3647)などもあった。

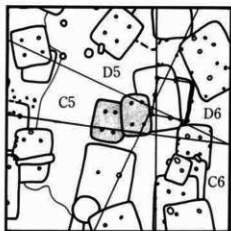
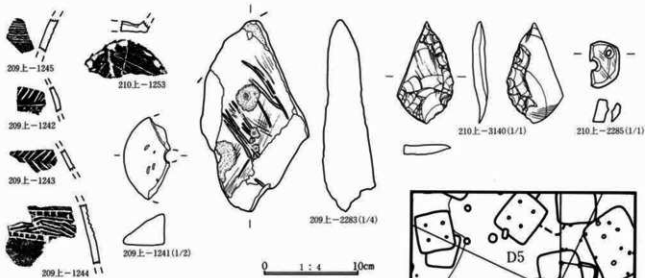
208号は弥生後期(5期)の堅穴で、206号が中央北側を挟る他に、北西側で205・207両号に削られ、南西側で未掘の円形土坑を壊す。

全体の規模(長13.2m幅6.4m床面積84m<sup>2</sup>)は、面積では074号に続き第2位で、一辺の長さだけでは最大のものになる。柱穴は未掘だが、2個の主柱穴と東西両壁際に並ぶ側柱穴、また南壁際の貯蔵穴や入口柱穴などを確認した。推定南西主柱穴の南側で炉を検出したが、他にも存在した可能性は高い。また数カ所焼土が床に散っていたため、焼失した可能性がある。

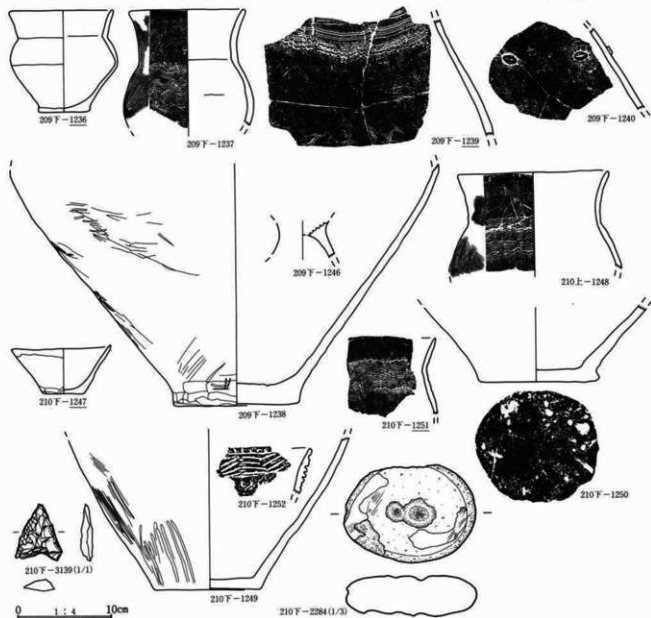
遺物は上層(1,2層)で青色ガラス小玉(5003)が目され、土製勾玉(1235)そして後の時代と考えられる鉄刃物(4031)・鉄釘(4032)が出土した。下層(3～6層)では、弥生土器の壺類(1224,25)・甕(1219,20,23)・高坏(1221)が顕著なものである。他に粗粒安山岩打製石斧(2281)と用途不明の有突起土製品(1234)がある。



1. 黒編織弱黒土粒少
2. 黒編織弱ローム粒少
3. 耕作土
4. 黒編織弱ローム粒極少
5. 黄黄編織弱黒土粒少
6. 黒編織弱ローム粒
7. 黄黄編織弱粘性弱ローム粒黒土
8. 黒編織弱炭化物粒少
9. 腐編織弱炭化物ローム粒多
10. 黒編織弱ローム粒9比少炭化物9比多
11. 黒編織弱
12. 黒編織弱ローム粒少ローム塊少
13. 黒編織弱ローム粒上面焼土少
14. 腐炭編織弱ローム粒
15. 腐弱14ローム混
16. 6に似る編織弱ローム粒少
17. 腐ローム粒少



1 観音山地区



209・210号遺構(C-5, 6, D-5 G) 【図p.110,111 PL.128,129】

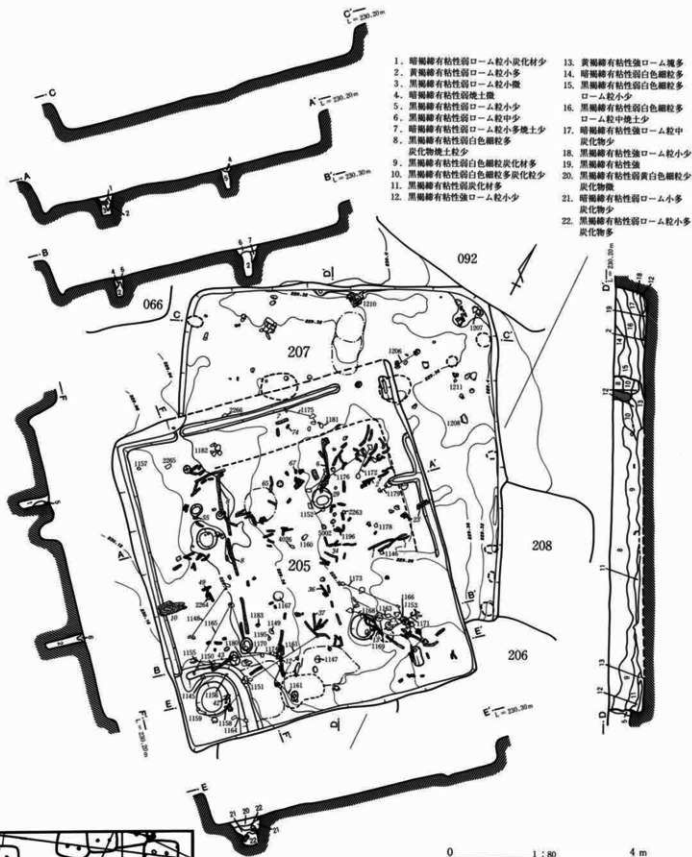
中央尾根上の中央で検出した弥生後期堅穴群。

209号(5期)は、東側で210号を西側で213号を壊す。また西側では掘立214号に近接している。

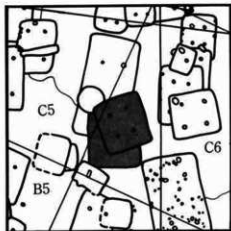
板材主柱穴4個が並び、北辺外側に炉がある。また南壁側には3個の入口柱穴を検出した。炭化材片が中央やや北側に見られ、焼失した遺構である。樹種同定ではクリ・モモ・ケヤキが確認され、また床面土壌のプラントオパール分析ではネザサ節やススキ属が同定された(p.326参照)。

遺物は、上層(8,9層)では沈線文土器片(1242-44)・土製紡錘車(1241)・砂岩製砥石(2283)が、下層(6,7,10-17層)で中央北側で甕類(1237)・壺類(1236,39,40)・台付甕(1246)が、南東隅で大型壺(1238)が出土した。

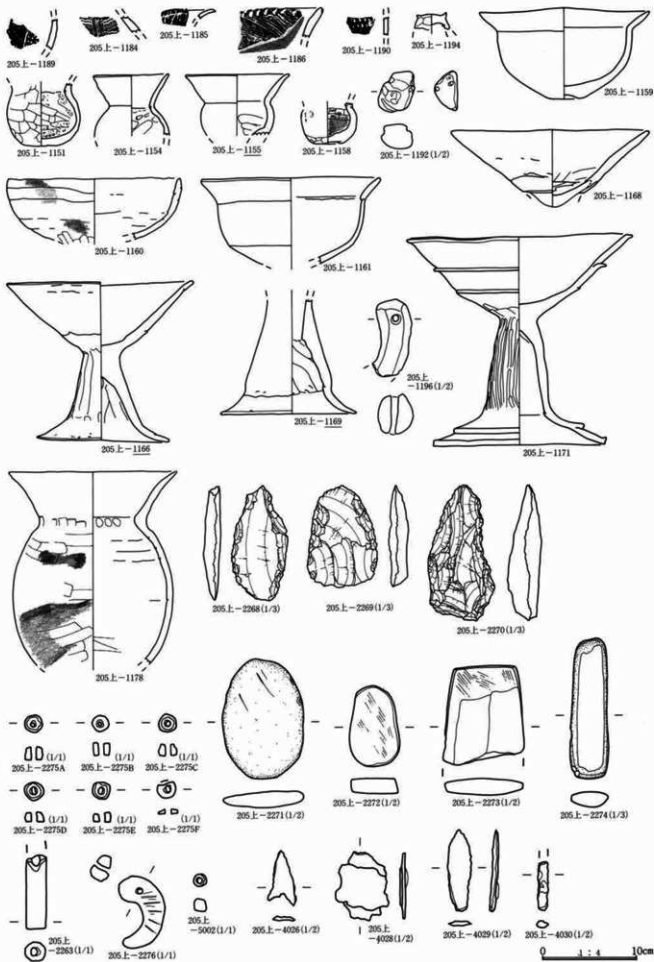
210号(2期)は、西側で209号に壊され、東側は削平されて壁は残っていない。また北側で208号が近接する。小丸材主柱穴が4個並び、北辺中央に炉がある。南壁に沿って浅い貯蔵穴が見られ、その近くには未掘の入口小柱穴を確認した。遺物は、確認面で黒曜石削器(3140)・鮮緑色硬質鉱物製勾玉(2285)が、下層(4-9層)で沈線文壺片(1252)・小型鉢(1247)・壺(1249)・黒曜石石鏃(3139)・変質安山岩凹石(2284)などが出土した。

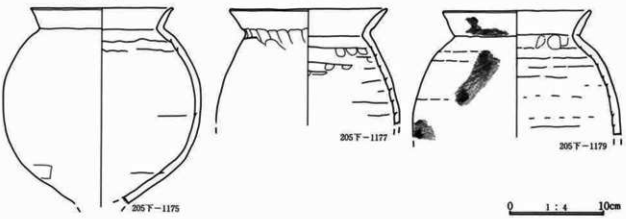
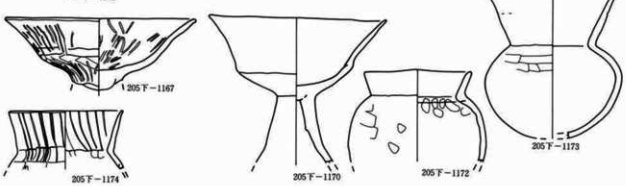
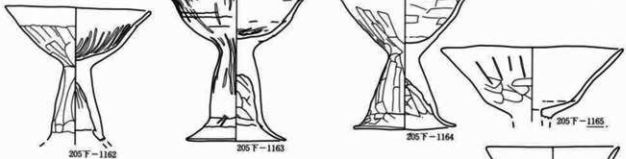


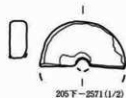
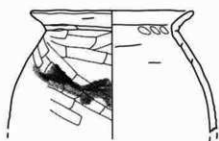
1. 暗褐色有粘性弱ローム粒小炭化材少
2. 黄褐色有粘性弱ローム粒小多
3. 黑褐色有粘性弱ローム粒小微
4. 暗褐色有粘性弱硬土微
5. 黑褐色有粘性弱ローム粒小少
6. 黑褐色有粘性弱ローム粒中少
7. 暗褐色有粘性弱ローム粒中多焼土少
8. 黑褐色有粘性弱白色細粒多炭化物焼土粒少
9. 黑褐色有粘性弱白色細粒炭化材多
10. 黑褐色有粘性弱白色細粒多炭化粒少
11. 黑褐色有粘性弱炭化材多
12. 黑褐色有粘性強ローム粒小少
13. 黄褐色有粘性強ローム粒多
14. 暗褐色有粘性弱白色細粒多
15. 黑褐色有粘性弱白色細粒多ローム粒小少
16. 黑褐色有粘性弱白色細粒多ローム粒中焼土少
17. 暗褐色有粘性強ローム粒中炭化物少
18. 黑褐色有粘性強ローム粒小少
19. 黑褐色有粘性強
20. 黑褐色有粘性弱黄白色細粒少炭化物微
21. 暗褐色有粘性弱ローム粒小多炭化物少
22. 黑褐色有粘性弱ローム粒小多炭化物多



0 1 : 80 4 m

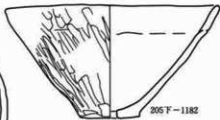
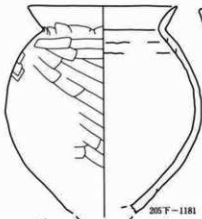






205 Y-1180 (1/1)

205 F-2571 (1/2)

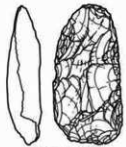


205 F-1182



205 F-1176

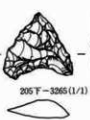
205 F-1181



205 F-2264 (1/3)



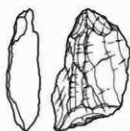
205 F-3137 (1/1)



205 F-3265 (1/1)



205 F-4027 (1/2)



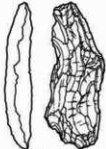
205 Y-2265A (1/3)



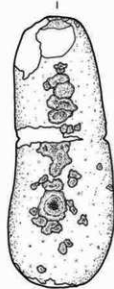
205 Y-2265B (1/3)



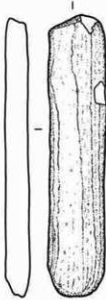
205 Y-2265C (1/3)



205 F-2265D (1/3)



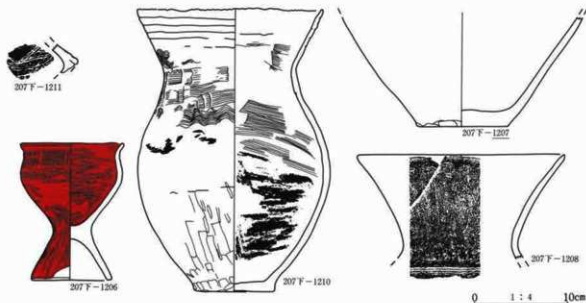
205 F-2266 (1/3)



205 F-2267 (1/4)



## II 検出遺構と遺物



205・207号遺構(C-5, 6 G) 【図p.112~116 PL.129~134】

中央尾根上の中央で検出した堅穴群。

205号は古墳中期(4期)の堅穴で、北側で207号、東側で206, 208両号を壊す。小丸材の主柱穴が4個並ぶが、西辺では他に2個柱穴が並んでいるため、拡張された可能性もある。北辺の中央に炉があり、南隅には掘り残しの土壇を挟んでやや大きな貯蔵穴がある。周溝が全て巡っていた可能性が高いが、重複遺構のある東側では明瞭には検出できなかった。なお、中央部分の床は掘り方に盛土して形成されている。

全体に多くの炭化材が残っていた焼失遺構である。樹種は大部分がクスギで、<sup>14</sup>C年代はAD320±80年を示した。また貯蔵穴埋土上層(20層)から炭化オニグルミが出土している。

遺物は絶対量はかなり多い。上層(8~10層)からは鉄鍔類(4026, 30)・鉄ヤリガンナ(4029)・ガラス小玉(5002)・珪質凝灰岩製管玉(2263)・土製勾玉(1196)などが中央で見られた。他に滑石製白玉(2275ABC)・蛇紋岩白玉(2275DEF)・土師質不明土製品(1192)などの他に、弥生土器では山形文壺片(1214)が目を引く。土師器では高坏(1161, 66, 68, 69, 71)が東・南隅で出土した。前遺物の重量比は、弥生土器42%・土師器43%・縄文土器1%・石器15%で、自然石は全体の18%であった。ガラス小玉は重複する208号で同様のものが出ており、鉄鍔類なども含め、弥生時代のものである可能性は大きい。

下層(1~7, 12, 13, 20~22層)からは、土師器では埴(1145~50, 52, 53, 56, 57, 73)・高坏(1162~65, 67, 70)・甕類(1175~77, 79~81)の3種類の数が非常に多い。他に滑石質蛇紋岩の玉原石(2265A~D)があり、上層の白玉の原料と思われる。他に砂岩製紡錘車(2571)・黒曜石石鏃(3137)・チャート製石鏃(3265)・鉄鏃(4027)さらに鉄斧型土製品(1183)が見られた。重量比では、弥生土器29%・土師器56%・縄文土器0%・石器14%で、自然石は全体の23%であった。そのため下層出土のものも全て古墳時代のものとは断定できない。

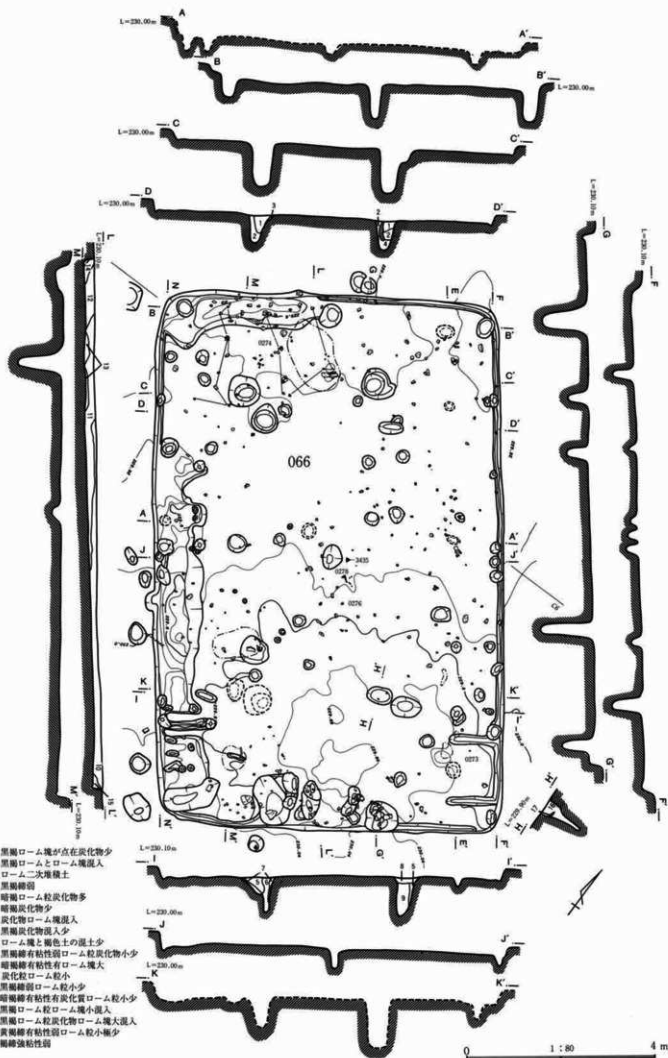
なお上記も含めた土師器の全出土量は、総量41.4kg(上層19.4kg下層22.0kg)に達している。

207号は弥生後期(7期)の堅穴で、南側大部分を205号及び206号で壊される他に、北側092号にも削られている。一方東側では208号を壊し、西側で066号が近接している。

未掘の状態だが、北西側の2個の主柱穴と壁際の側柱穴を確認した。また主柱穴の外側には炉がある。

遺物は、下層(17層以下)から炉北側の壁際で甕(1210)が出た他に、小型台付鉢(1206)・壺(1207, 1208)そして縄文鉢片(1211)などが見られた。

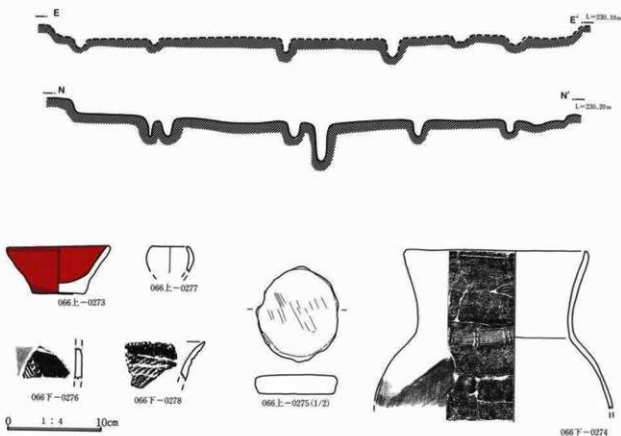




1. 黒編ローム塊が点在炭化物少
2. 黒編ロームとローム塊混入
3. ローム二次堆積土
4. 黒編砂固
5. 暗編ローム粒炭化物多
6. 暗編炭化物少
7. 炭化物ローム塊混入
8. 黒編炭化物混入少
9. ローム塊と褐色土の混入少
10. 黒編締有粘性固ローム粒炭化物少
11. 暗編締有粘性有ローム塊大炭化物ローム粒小
12. 黒編締固ローム粒少
13. 暗編締有粘性有炭質ローム粒少
14. 黒編ローム粒ローム塊小混入
15. 黒編ローム粒炭化物ローム塊大混入
16. 黄編締有粘性固ローム粒小極少
17. 網締強粘性固

0 1 : 80 4 m

## II 検出遺構と遺物



066号遺構(BC-6 G)

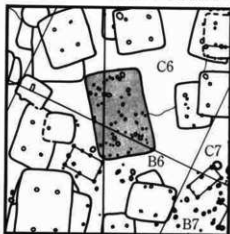
【図p.117,118 PL.135】

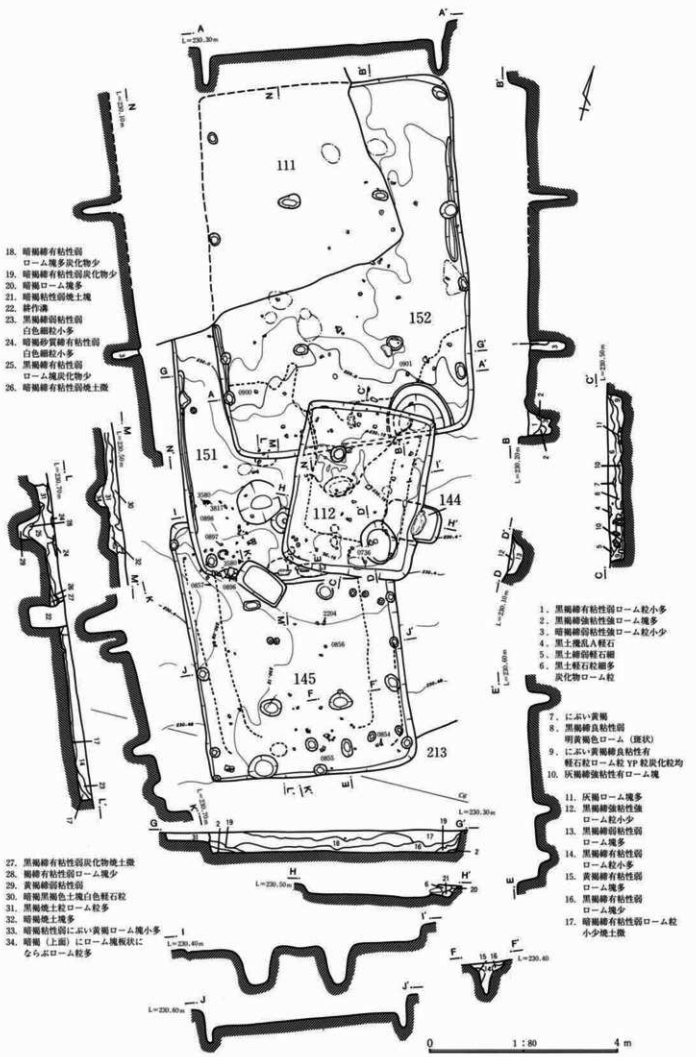
中央尾根上の中央で検出した弥生後期(3期)の竪穴。南東側で竪穴207号、北側で掘立182号が近接している。本調査で確認した中では、第3番目の規模の大型竪穴(長11.2m幅7.2m床面積81㎡)である。ただし、上面は大きく削平されており、僅かに20cm程度の壁が残っていたにすぎない。小板材の主柱穴を4個並んで確認したが、北西側に僅かにずれて別の1組も見られた。またそれぞれの対角線交点にも柱穴がある。さらに両長辺と北西辺にも側柱穴があった。

炉は、北西辺の外側及び南側柱穴の北西側の2カ所に見られた。また南東辺際に入口柱穴も確認できた。多くの壁際に周溝を確認したが、北西側と南西側ではかなり幅広くなっていた。また南東側では短い間仕切り溝が見られる。

主柱穴の移動に伴ってプランも変化したはずだが、その痕跡は確認できない。また検出したさまざまなピットは、本竪穴に伴うものか、あるいは重複する掘立遺構のものかは識別不可能である。

遺物の残りは悪く、上層(10層)から小型鉢(0273)・ミニチュア(0277)・土製円盤(0275)が、下層(1-9,11-14層)からは壺類(0274,76,78)が出ただけである。





- 18. 暗褐色有粘性弱  
ローム塊多炭化物少
- 19. 暗褐色有粘性弱炭化物少
- 20. 暗褐色ローム塊多
- 21. 暗褐色粘性弱硬土塊  
耕作痕
- 22. 黒褐色弱粘性弱  
白色細粒小多
- 23. 暗褐色弱粘性弱  
白色細粒小多
- 24. 暗褐色弱粘性弱  
白色細粒小多
- 25. 黒褐色有粘性弱  
ローム塊炭化物少
- 26. 暗褐色有粘性弱硬土塊

- 27. 黒褐色有粘性弱炭化物硬土塊
- 28. 暗褐色有粘性弱ローム塊少
- 29. 黄褐色弱粘性弱
- 30. 暗褐色黄褐色土塊白色細粒石
- 31. 黒褐色土粒ローム塊多
- 32. 暗褐色土塊多
- 33. 暗褐色粘性弱にふい黄褐色ローム塊小多
- 34. 暗褐色(上面)にローム塊板状に  
ならぶローム塊多

- 1. 黒褐色有粘性弱ローム粒小多
- 2. 黒褐色強粘性強ローム塊多
- 3. 暗褐色弱粘性強ローム粒小少
- 4. 黒土塊乱入粒石
- 5. 黒土弱粘性弱
- 6. 黒土粒石粒細多  
炭化物ローム粒
- 7. にふい黄褐色
- 8. 黒褐色良粘性弱  
明黄褐色ローム(床状)
- 9. にふい黄褐色良粘性有  
粒石粒ローム粒YP粒炭化物均
- 10. 灰褐色強粘性有ローム塊
- 11. 灰褐色ローム塊多
- 12. 黒褐色強粘性強  
ローム粒小少
- 13. 黒褐色弱粘性弱  
ローム塊多
- 14. 黒褐色有粘性弱  
ローム粒小多
- 15. 黄褐色有粘性弱  
ローム塊多
- 16. 黒褐色有粘性弱  
ローム塊少
- 17. 暗褐色有粘性弱ローム粒  
少少硬土塊

0 1 : 80 4 m



#### 112・144・145・151・152号遺構

(CD-6G) 【図p.119,120 PL.139,140】

中央尾根上中央で確認した弥生後期遺構群。

144号(終末期)は長方形の土坑で、埋土中

(21層)に焼土塊を含む。砂岩の自然石が入る。

112号より新しいが、調査時には先に112号を掘ったため、正確な全貌は捉えられなかった。

112号(7期)は小型の竪穴(面積8㎡)で、

144号より古く、145,151,152各号より新しい。

床面は周縁が脆弱でプランを小回りにした境

が見られた。上層(5-8層)より板状鉄製品

(4017)・弥生壺片(0736)が出土。

152号(5期)は中型の竪穴(面積37㎡)で、

112号より古く、151号より新しい。北西側を

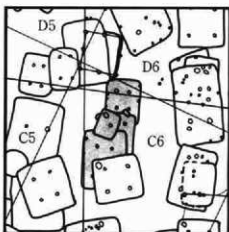
大きく古墳中期竪穴111号に壊される。

板材主柱穴4個を並んだ状態で確認し、北

辺外側に坪がある。東西壁際に個性穴が並ぶ。周溝一部と貯藏穴を検出。

南壁際は幅広く床が脆弱。床面に焼土が散り、焼土の可能性はある。モモ炭化核が見られた。上層(17,18層)より沈線文壺片(0902)・黒色頁岩石

皿(3259)等が、下層(1-3,19層)で匙片(0903)・黒曜石石皿(3113)等が出土。

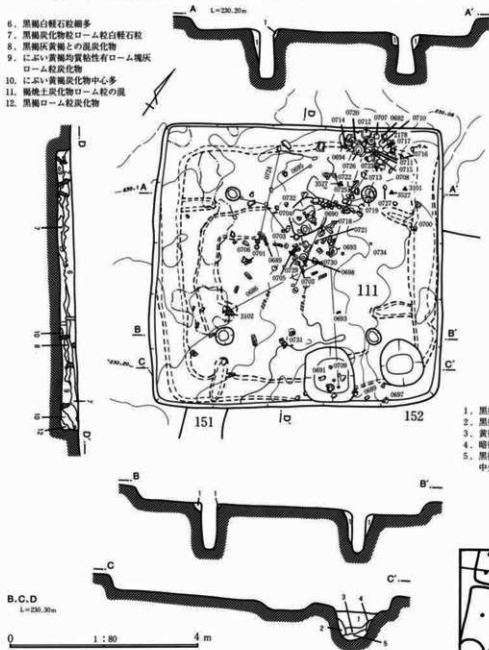


151号(3期)は中型の竪穴で、北から東にかけて111,152,112各号に壊され、南では未命名の近世土坑にも削られ、145号より新しい。南辺2個の板材主柱穴を確認し、西壁際で周溝の一部と側柱穴を検出した。南東隅には貯蔵穴があり、また南西主柱穴に沿って浅いピットがある。この主柱穴近くの床に焼土が見られるため、焼失の可能性もある。上層(12,13,24,30,31層)から甕片(0897)と沈線文壺片(0898)・黒曜石剥片(3580)・チャート剥片(3817)が、下層(25-29,32,34層)からは大型壺(0896)・砥沢石磨り石(2209)が出土した。

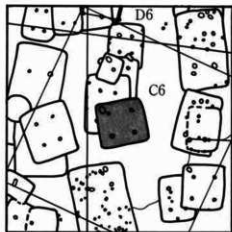
145号(2期)も中型(22㎡)の竪穴で、112,151両号と近世土坑に北側を壊されるが、南東では213号を壊す。板材主柱穴が4個並んでおり、北辺外側には炉跡を151号の床下で検出した。東西壁際で側柱穴、南壁で入口柱穴があり、床は壁際はやや幅広く脆弱だった。

上層(14層)から縄文小片(0856)・沈線文小片(0857)・甕(0854)・壺(0855)・頁岩磨り石(2204)が出土。

6. 黒曜白軽石粒細多
7. 黒曜炭化物粒ローム粒白軽石粒
8. 黒曜炭化物との混炭化物
9. にぶい黄褐色均質粘性有ローム塊炭ローム炭化物
10. にぶい黄褐色炭化物中心多
11. 凝焼土炭化物ローム粒の混
12. 黒曜ローム炭化物



1. 黒曜粘有粘性弱ローム粒少
2. 黒曜粘有粘性弱
3. 黄褐色粘有粘性弱ローム塊多
4. 暗褐色粘有粘性弱ローム塊多
5. 黒曜粘有粘性弱ローム粒中少





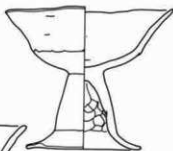
111上-0731



111上-0689



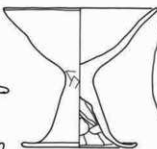
111上-0695



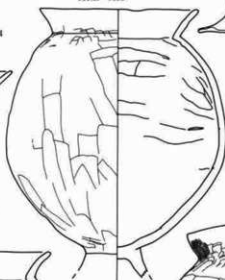
111上-0712



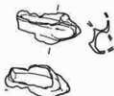
111上-0717



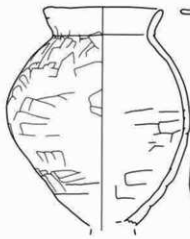
111上-0718



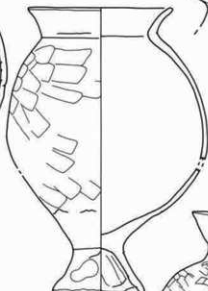
111上-0722



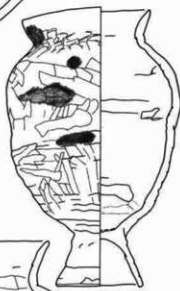
111上-0735(1/2)



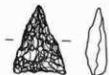
111上-0724



111上-0725



111上-0723



111F-3101(1/1)



111F-3102(1/1)



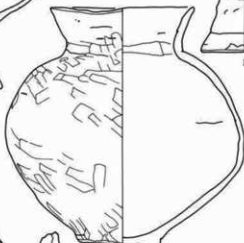
111F-3103(1/1)



111F-2178(1/3)



111上-2179(1/3)

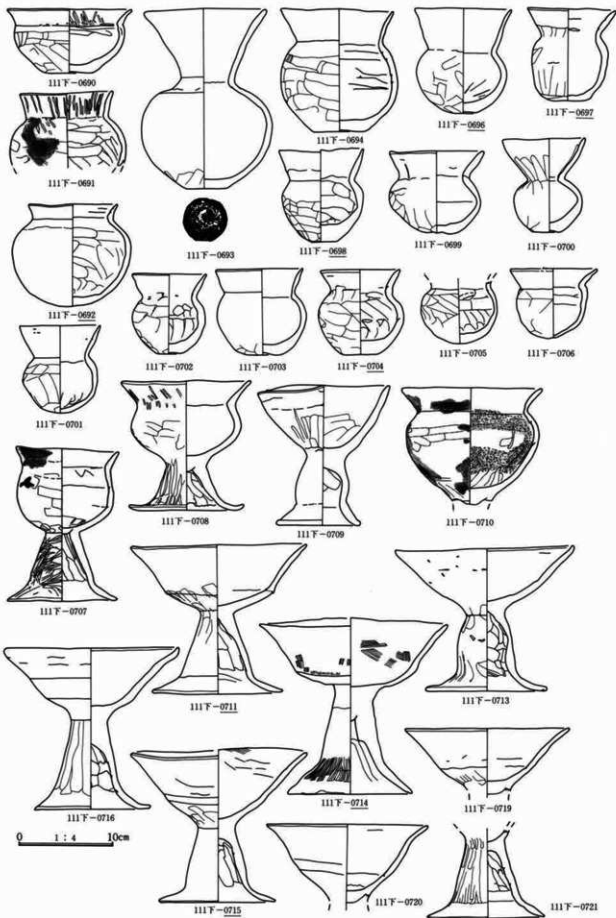


111上-0727

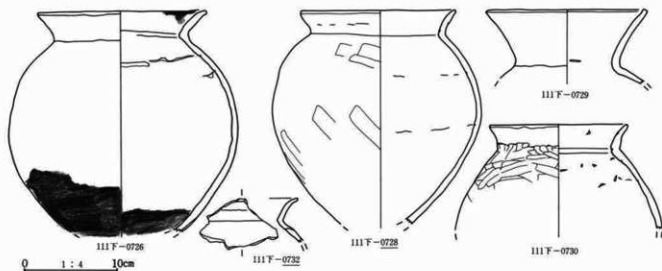


111掘り方-0733

0 1:4 10cm



## II 検出遺構と遺物



### 111号遺構(C-6G) 【図p.121~124 PL.136~138】

中央尾根上の中央で検出した古墳時代中期(3期)の竪穴。東側で弥生竪穴151,152両号を壊す。また北東側で3mほどの距離で同時代の竪穴205号が同じ方向で並んでいる。

小丸材の主柱4個が並び、北西辺内側に炬がある。また東隅に貯蔵穴が、それより少し南の壁際に浅いピットを検出した。掘り方面では、壁際にやや幅広く溝がめぐり、そこから中央に間仕切り状の溝がいくつか延びている。

焼失した竪穴で、炭化材があちこちに散り、焼土も床に見られた(炭化材樹種同定対象外)。

ここからは大量の遺物が出土した。上層(6,7層)では、弥生壺(0731)・注口(0734)の他に土師器鉢(0689)・埴(0695)・高坏(0712,17,18)・台付甕(0722~25)・壺(0727)があった。また中空の粘土塊(0735)も見られた。下層(1~5,8~12層)からは、土師器鉢(0690)・小型甕(0691,92)・埴(0694,0696~0706)・台付甕(0707,08,10)・高坏(0709,0711,13~16,19~21)・甕類(0726,28,30,32)・壺(0729)そして黒曜石石鏃(3101~03)・粗粒安山岩磨石(2178)・硬質泥岩打製石斧(2179)が出土した。弥生土器底部(0733)は掘り方で検出した。

以上を含めた土師器の全出土破片は、総量33.9kg(上層で12.2kg下層で21.7kg)に達している。これは205号に続く量である。器種的には図示したように、埴と高坏が圧倒的に多い。しかし注意すべきは、いずれも形状は決して同じではない。この両種に含まれる実に多様な形の異なるものが含まれている。特にこの両種については、使用痕がほとんど見られない点も興味深い。

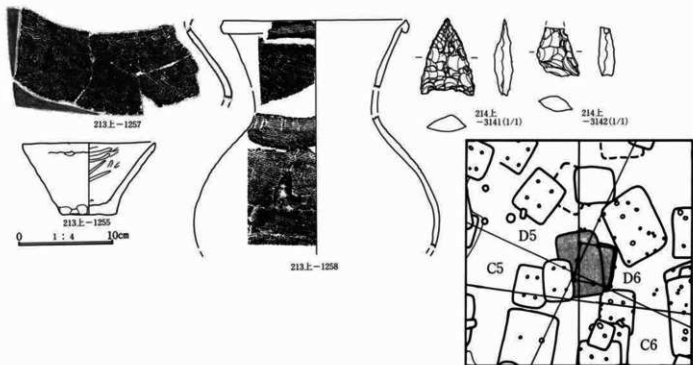
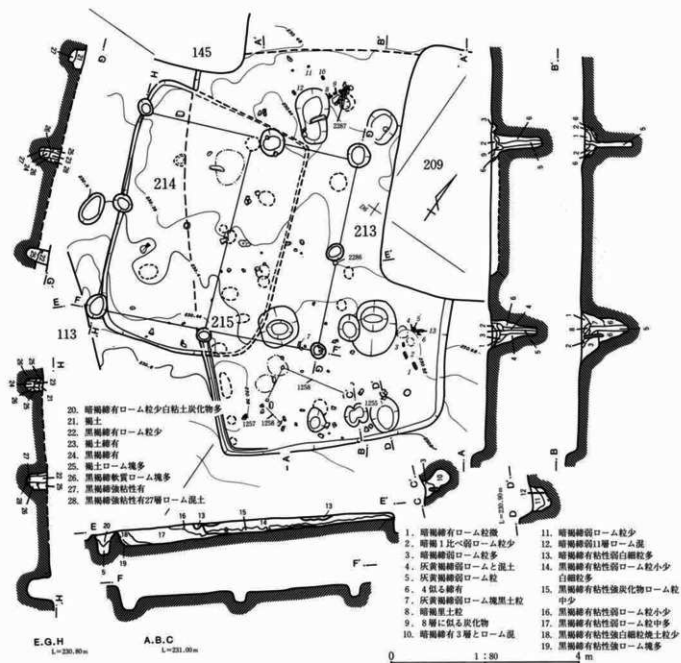
出土状態は、明らかに北隅から中央にかけて集中している。炭化材との関係から考えて、火災時点で遺棄されたものは多くなく、むしろ焼失直後に上記器種の多くは意図的に埋納された可能性が高いと考えられる。

### 213~215号遺構(C-6,D-5,6G) 【図p.125,126 PL.142】

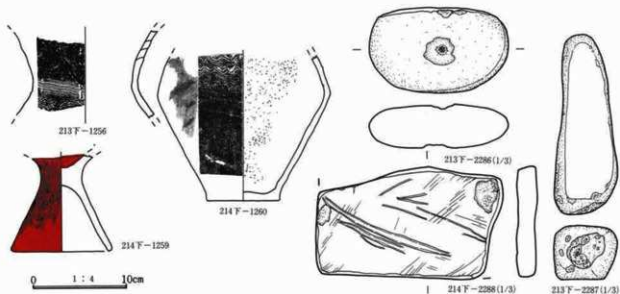
中央尾根上の中央で確認した弥生後期の遺構群。215号(7期)は、2×2間の総柱掘立建物。竪穴213,214両号より新しく、113・145・209各号が近接する。棟方向は南北で、西辺は214号の西壁と一致する。妻方向が僅かに長いが正方形に近い(面積19㎡)。柱穴は竪穴住居の主柱穴より浅く、確認面からの深さは40cm弱である。

213号(3期)は、推定変形長方形の竪穴。215号に切られる他に、北西の145号及び北東の209号より古く、214号より新しい。北側はすでに削平されて、壁は検出できなかった。(P.126へ)





## II 検出遺構と遺物



(P.124より) 4個並んだ板材主柱穴及び、その北辺外側で炉を検出した。また東隅近くの壁際で貯蔵穴として入口柱穴を、さらに周溝の一部を南隅周辺で確認した。主柱穴の配置は北東辺がやや長い台形状になっており、全体のプランが正長方形よりやや炉側が広がる傾向があるのに対応している。

炉及び東主柱穴付近に炭化材が残っており、焼失状況を示している。樹種同定資料1点は、クリ材だった。上層(13,14層)からは弥生壺(1257,58)・小型鉢(1255)が、下層(1-12,15層)から壺(1256)・粗粒安山岩凹石(2286)・変質安山岩磨り石(2287)が出土した。

214号(1期)は台形状と推定される竪穴で、全体が215号に切られ、東側は213号に壊される。また北西側で145号、南側で113号に近接している。未掘だが並んだ主柱穴4個とその北辺外側で炉を確認した。主柱穴の配置は北西壁の走向傾向にあって台形状になっている。215号の南西側柱穴が、南西壁と一致しているのは偶然だろう。

上層(16,17層)から黒曜石石鏃(3141,42)が、下層(18,19層)から変頸(1259,60)・砂岩砥石(2288)が出土。

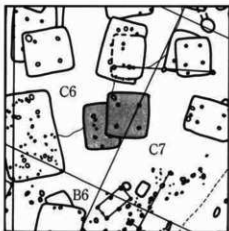
### 069・070号遺構(C-6,7G) 【図p.127~129 PL.143~145】

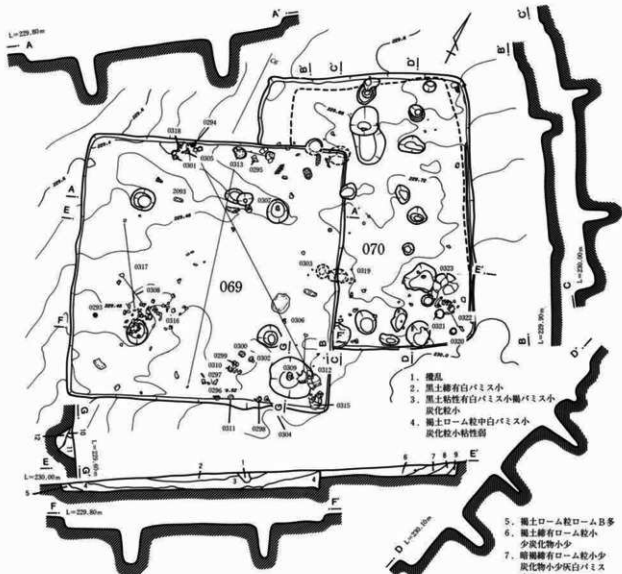
中央尾根上中央で確認した竪穴群。069号は古墳中期(3期)の正方形の竪穴で、東側で070号を壊す。4個の主柱穴が並び、その北辺中に炉がある。南東隅では貯蔵穴を検出した。床面には主に東側で炭化材が残っており、焼失した竪穴である。

遺物は、貯蔵穴周辺・炉北側・南西主柱穴周辺の3ヶ所を中心に出土した。上層(1-3層)では、土師器鉢(0301)・甕(0316,17)・硬質安山岩礫器(2094)・変質安山岩砥石(2093)を検出した。下層(4,5層)からは、埴(0295-99)・高坏(0302,04-09)・変頸(0310-15)が出ており、また鉄釜型土製品(0318)を北壁際で検出した。掘り方では玉髄製石鏃(3251)が出ている。

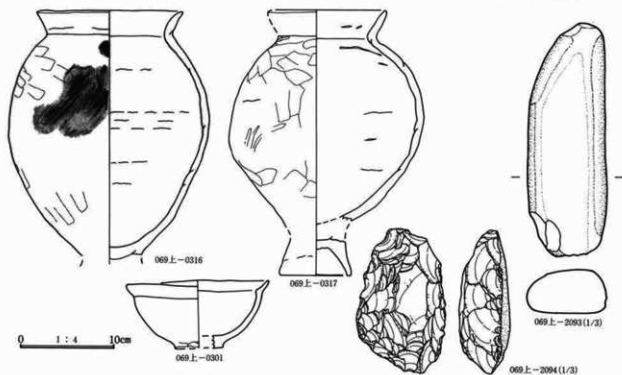
南東隅からの遺物が最も多く、鉄釜型土製品も含めて205号の遺物のあり方に似る。出土した全土師器片の重量は、計16.3kg(上層3.5kg下層12.8kg)である。

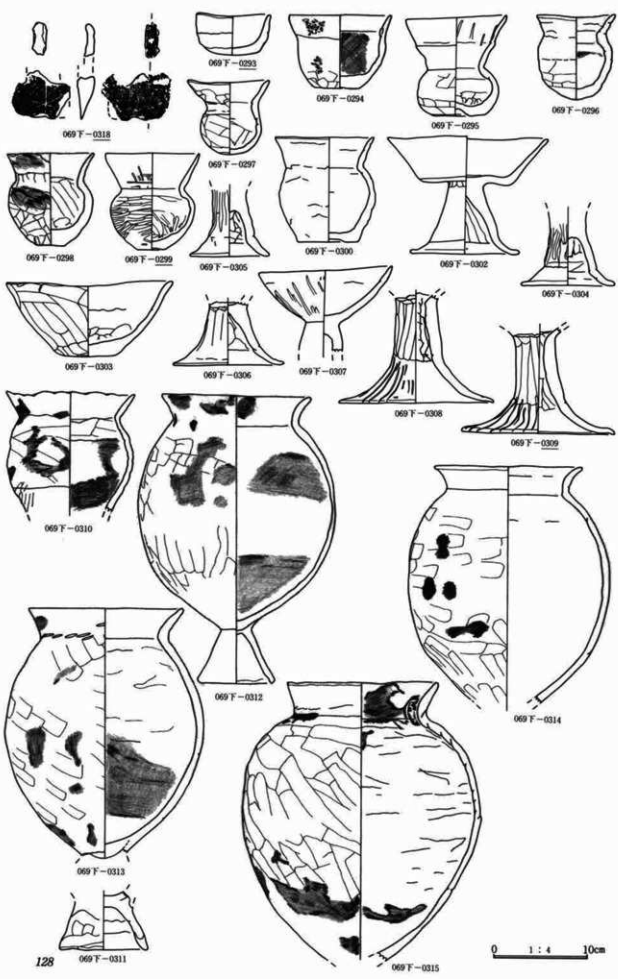
070号は弥生後期(3期)の竪穴で、南西側が069号に壊されている。並んだ4個の推定板材の主柱穴を確認したが、西辺はすぐ内側に1組の柱穴が見られたため、西側に拵張がなされたと考えられる。(P.129へ)



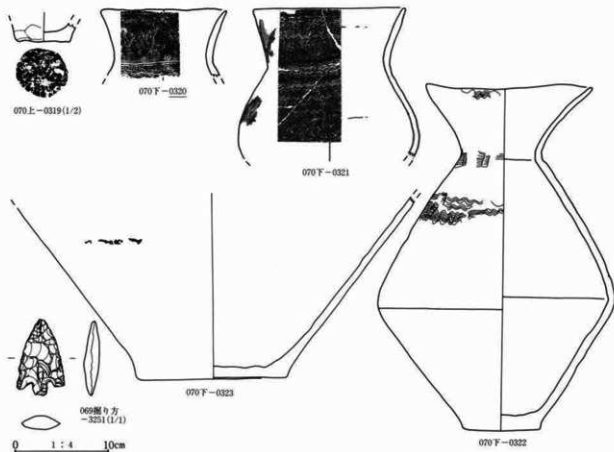


11. 黒土層弱ローム粒極小含炭化物中  
 12. 黒土層弱炭化物大





0 1 : 4 10cm



(P.126より) それらの北辺外側に炉があり、南壁際で入口柱穴を検出した。床は西壁際が幅広く脆弱である。

上層(6,7層)からミニチュア(0319)が、下層(8~12層)からは甕類(0320,21)と壺類(0322,23)が南東隅で出土した。なお、上記069号出土の石鏝は、この070号に伴う可能性が高い。

### 071・076号遺構(C-6G) 【図p.130,131 PL.146】

中央尾根上の中央で確認した弥生後期の竪穴群。

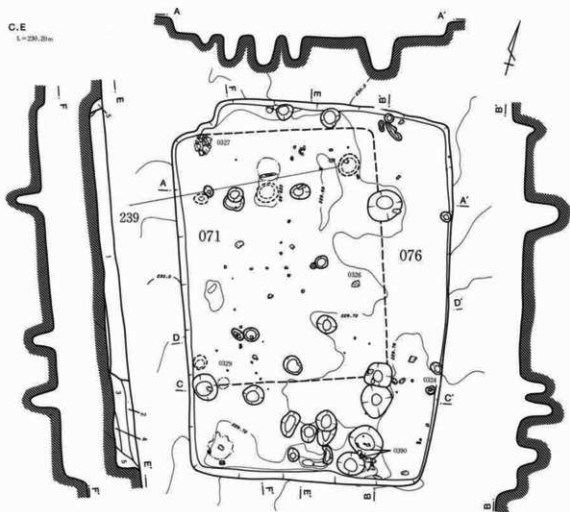
071号(7期)は、竪穴076号及び柱穴列239号を壊す。発掘時には当初076号との境界を識別できなかったため、西壁以外の壁は検出していない。小丸材の主柱穴4個が並び、その北辺外側に炉がある。推定南壁の両隅に主柱穴より大きいピットがあるが、性格不明。

上層(1層上位)からは、沈線文土器片(0330,32)・旧石器の加工痕ある黒曜石剥片(3301)・黒曜石石鏝(3057)・同石鏝(3302)・硬質泥岩打製石斧(2095)・珪質準片岩磨製石鏝(3252)と多彩な遺物がが見られた。下層(1層下位)では、沈線文土器片(0329)以外的大型壺(0327)・壺(0326)が、本遺構に伴うものと考えられる。

076号(4期)は長方形の竪穴で、大部分を071号に切られ、また南東隅で083号と重なる。柱材形状不明の主柱穴4個が並ぶが、北辺にあったと思われる炉は071号に壊されて検出できなかった。東西両壁際には側柱穴が2個ずつ並び、南壁には入口柱穴と貯蔵穴がある。残存した床面には、南西隅で焼土が散っていたのだが、埋土下層には炭化物がかなり含まれており、焼失したことは確かである。

上層(2層)からは甕片(0391,92)、下層(3~5層)からはミニチュア(0324)・高環(0390)が出土した。

C.E  
L=230.30m



1. 黒層土層有層パミス中炭化物中
2. 黒層純良ローム粒中層パミス小炭化物小
3. 黒土ローム粒ロームB中炭化物中多
4. 暗黒ローム粒小炭化物小炭土中少  
炭土粒中少
5. 暗黒4層ロームB中を加えたもの



A, B, D, F  
L=230.30m

0 1:80 4m



071上-0325

076上-0391



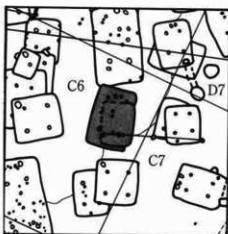
071上-0330

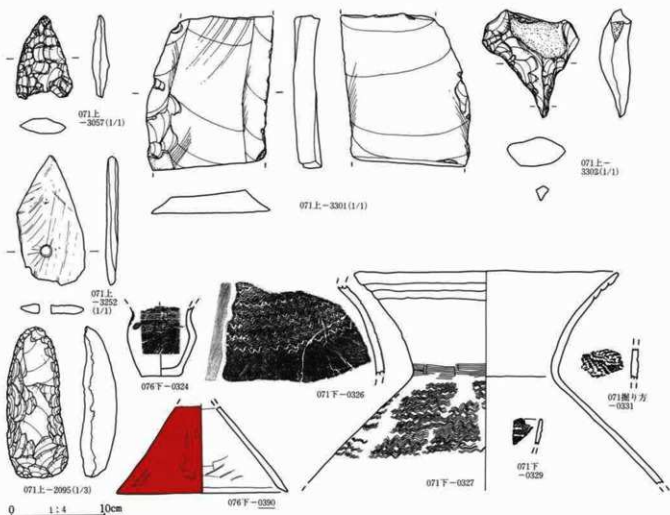
071上-0332



076上-0392

0 1:4 10cm





### 083～085号遺構(CD-6G) 【図p.132,133 PL.147,148】

中央尾根上の中央で検出した弥生後期整穴群。

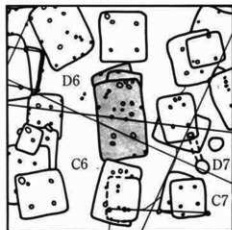
083号(6期)は、長方形の大型整穴(60㎡)で、南側で084,085両号を壊し、北側で076号と重なる。西側では082号が近接。床面積では第5位の大きさだが、中型(約44㎡)のものを拡張している。拡張前では板材柱穴4個(断面C.D.)と北辺外側の跡跡を検出した。周溝が東と南で出ている。その主柱穴を南側に1m強移動させて、拡張がなされた。3個の板材柱穴(断面F.M)を確認したが、南東隅にも未掘柱穴があるだろう。これら3個の主柱穴は床全体の四隅対角線上に乗り、交点位置の柱穴も構造的に重要と思われる。東西両壁には個性柱穴が4個づつ、また南壁際には複数の貯蔵穴が見られる。北東側床面に焼土が散っており、焼失の可能性もある。

遺物は、上層(1～7,19～26層)では沈線文土器片(0463)が、下層(12～18,27～32,39～42層)では甕類(0453～59,66)・壺類(0460,61,65)・高坏(0451)・白色凝灰岩紡錘車(2131)・黒曜石石鏃(3081～83)等が見られた。

084号(4期)は大部分が083号に壊されるが、南側で085号を壊す。083号の壁からはみ出していないため、中規模以下の面積だろう。柱穴は南壁際の入口関係と推定できるもののみを確認。

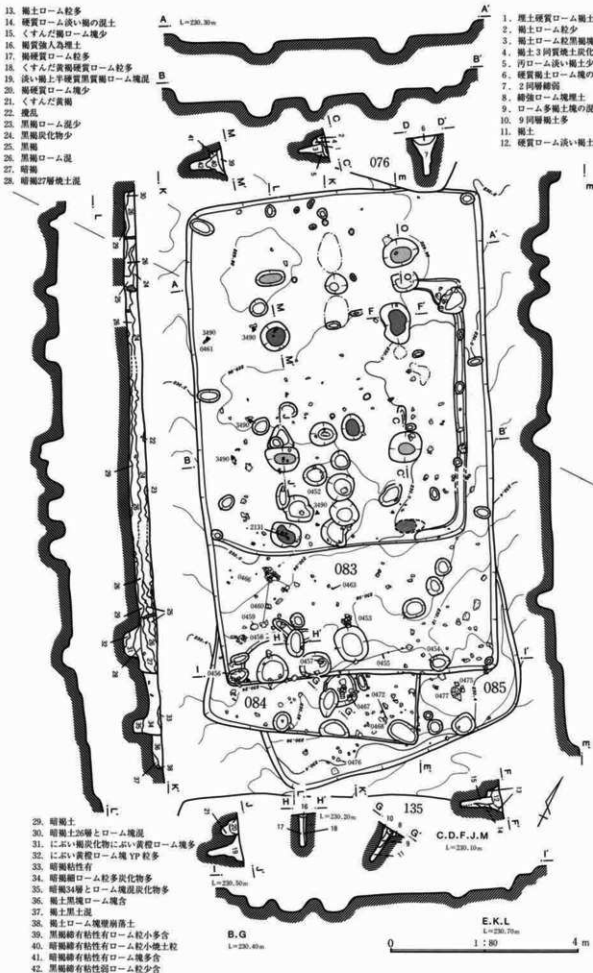
上層(33,34上層)で沈線文土器片(0470)・砂岩質準片岩磨石(2133)等が、下層(8～11,34下,35層)では弥生甕類(0467,72)と土師器甕(0468)等が出土した。

085号(2期)は083,084両号に北側大部分を壊され、南で古墳中期の135号が近接する。壁際で浅いピットを検出しただけで、確実な柱穴は不明。遺物は上層(36層)から鉢(0475)・甕(0477)等が、下層(37,38層)は甕(0476)があった。



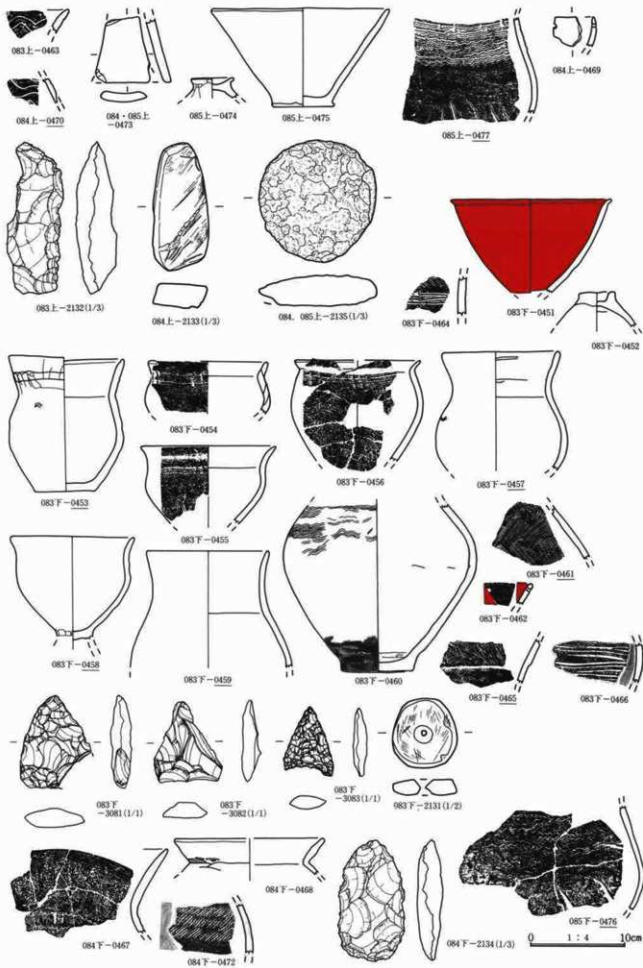
13. 粘土ローム粒多
14. 硬質ローム深い層の混土
15. くすんだ層ローム塊少
16. 腐葉強人為埋土
17. 腐葉質ローム粒多
18. くすんだ腐葉硬質ローム粒多
19. 深い層上半硬質腐葉層ローム塊混
20. 腐葉質ローム塊少
21. くすんだ腐葉
22. 腐土
23. 黒層ローム混少
24. 黒炭灰化物少
25. 黒層
26. 黒層ローム混
27. 暗層
28. 暗層27層境土混

1. 埋土硬質ローム混土混
2. 粘土ローム粒少
3. 粘土ローム粒黒層塊少
4. 粘土3同質焼土灰化物少
5. 汚ローム深い層土少含
6. 硬質粘土ローム塊の混
7. 2同層暗腐
8. 硬質ローム塊埋土
9. ローム多層土境の混
10. 9同層粘土多
11. 粘土
12. 硬質ローム深い層土と塊混

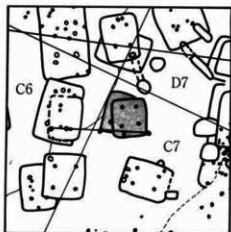
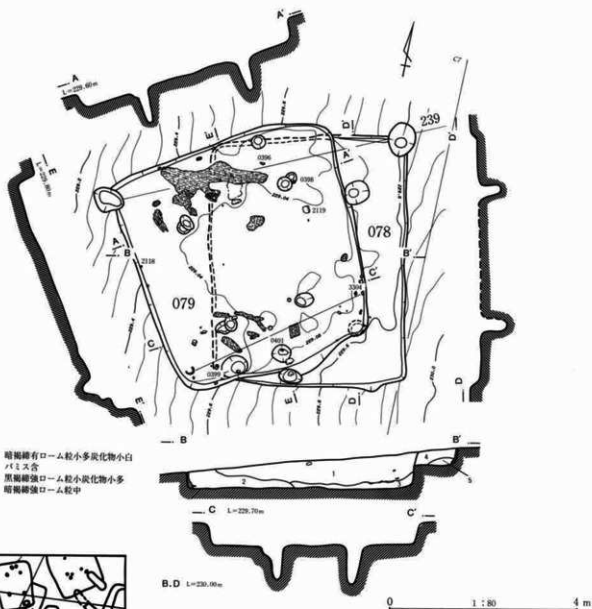


29. 暗層土
30. 暗層土26層とローム塊混
31. におい腐炭灰化物におい黄粒ローム塊多
32. におい黄粒ローム塊 YP 粒多
33. 暗層粘性有
34. 暗層細ローム粒多灰化物多
35. 暗層34層とローム塊炭灰化物多
36. 粘土黒層ローム塊含
37. 粘土黒土混
38. 粘土ローム塊埋崩落土
39. 黒層粘有粘性有ローム粒小多含
40. 暗層粘有粘性有ローム粒小塊土粒
41. 暗層粘有粘性有ローム塊多含
42. 黒層粘有粘性有ローム粒少含





## II 検出遺構と遺物



### 078・079号遺構(C-7 G) 【図p.134,135 PL.149,150】

中央尾根上西側で検出した弥生後期の竪穴群。

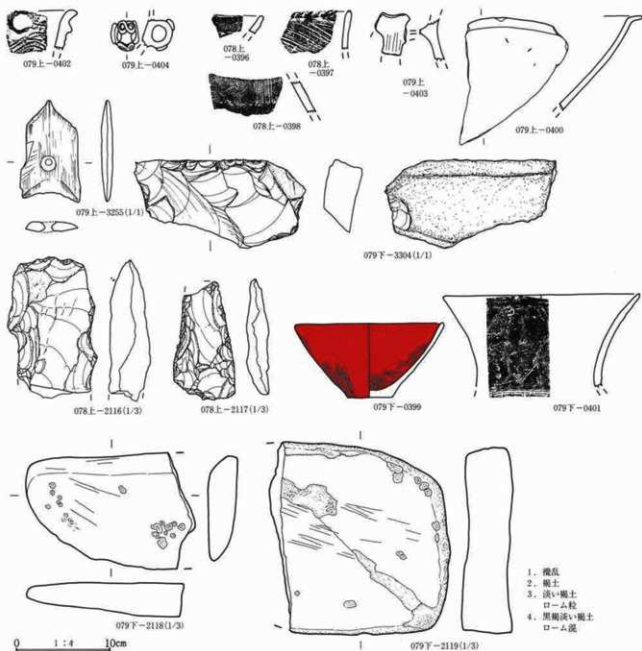
079号(5期)は、北辺がやや長い台形の竪穴で、東側で078号を壊す。北西隅には柱穴列239号が重なる。小丸材の主柱穴4個が台形状に並び、北辺外側に炉がある。南壁際で貯蔵穴と入口柱穴、北壁際では性格不明ピットを検出。

北側と南側の床面に焼失を示す炭化材が多く残っていた(樹種同定対象外)。

遺物は、上層(1層)で縄文把手(0404)・珪質準片岩磨製石鏃(3255)・高坏(0400)が、下層(2,3層)で壺(0401)・小型鉢(0399)・黒曜石石核(3304)・牛伏砂岩礫石(2118, 19)が残っていた。

078号(3期)は小型長方形の竪穴で、西側半分以上が079号に壊され、北東隅では柱穴列239号の柱穴が重なる。小丸材の主柱穴のうち、東辺の2個を確認した。他に南壁際に小ピットがある。

上層(4層)から高坏(0403)・条痕文土器片(0397)・硬質泥岩打製石斧(2116, 17)が見られただけである。

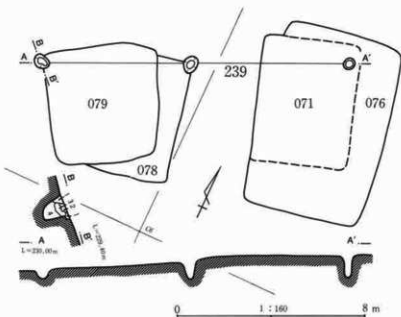


239号遺構(C-6,7G)【図p.135 PL.149】

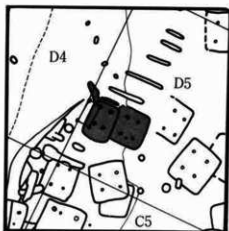
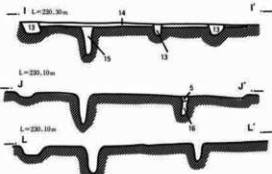
中央尾根上西側で検出した弥生後期の柱穴列(6期?)。僅か3個の柱穴を確認しただけだが、西・中央は078,079両号と重なり、東は071号床下で発見。

間隔はそれぞれ6.3mと6.6mと広いが、底の高さはほぼ同一である。

この状態のまま木構の跡とは断定しがたく、未確認の柱穴を含めて構成されるだろう。時期は重複から推定。



1. 暗褐色強ローム減少
2. オリーブ黒ローム質
3. 暗粘質土粒子細有  
ローム粒中暗褐色粒中
4. 塵乱
5. 黒土ローム粒少
6. 黒粒子細小
7. 黒ローム粒少
8. 暗粘質性弱A軽石  
白粒子少
9. 暗褐色強白粒子少  
白ローム粒少
10. 暗粘強粘性強ローム  
粒多ローム減少
11. 黒粘主体ローム減少
12. 黄粘ローム主体
13. 暗粘粘作黄A軽石中多
14. 暗粘有ローム塊
15. 土質不明
16. オリーブ黒汚ローム  
中ローム塊多数
17. 黄粘ローム粒少
18. 黒ローム主体黒少
19. 暗粘黒主体  
ローム粒少



### 153・149・165・166号遺構

(D-4,5G) 【図p.136,137 PL.150,151】

中央尾根上南東側で検出した弥生後期の  
竪穴群。全体に削平が激しく、また近世の  
畝路があるため、壁・床の残存状況は悪い。

149号(6期)はトンネル土坑(165号)付の  
竪穴で、西側で153号、東側で166号と重なり、  
南東隅には近世の未命名土坑がある。

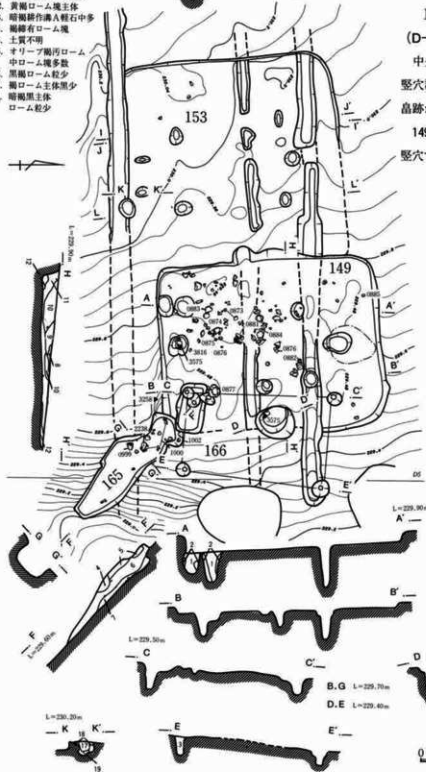
推定小丸材の主柱穴を4個以上検  
出したが、歪んだ配置で特に南東隅  
は確定しがたい。炉は北辺の外側で、  
東半分の床・壁は残存状態が悪く、  
壁推定部分に深いビットがあった。

南東隅からトンネル土坑が延びる  
が上部は削られていた。床と土坑の  
底は20cm弱ほどの差がある。

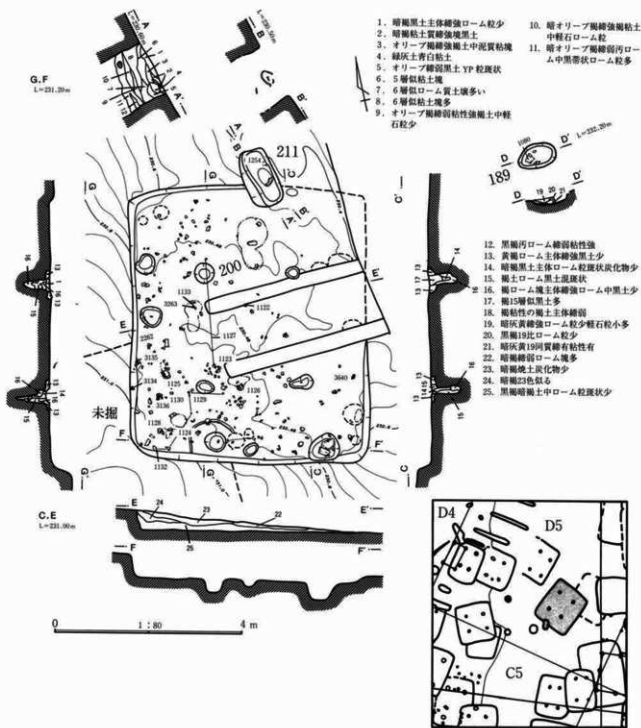
上層(4,5,8-10層)からは甕  
(0878,80-82)・壺(0876,77,83,84)等  
が、下層(1-3,6,7,11,12層)では、  
149号で縄文片(0885,86)・台付甕  
(0879)・石織(3110,11,3258)等が、  
165号で甕類(0999,1000)等が出土。

153号(4期)は東半分残存埋土  
が薄い。板材主柱穴4個が並び、北  
辺外側で炉、南辺で入口柱穴確認。  
下層(13-19層)で台付甕(1052)・  
黒曜石石織(3114)出土。

166号は柱穴群で、台形  
に4個並ぶ。歪むが、竪穴  
主柱穴配列に近く、149号  
より古い竪穴跡だろう。







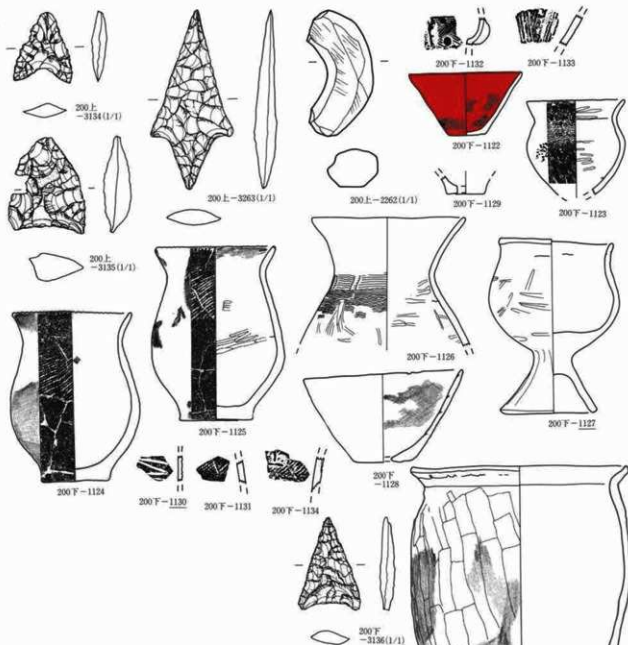
189・200・211号遺構(D-5G) 【図p.138,139 PL.152~154】

中央尾根上南東側で検出した遺構群。北東側を中心に削平が激しく、また近世の畠跡が入っている。

211号は古代前期(8世紀)の小長方形の土坑で、南側で200号を壊す。異常に深く、確認面より1.5m掘っても底に達していない。上層(1,2層)は自然堆積だが、下層(3-12層以下)は粘土とローム塊を主とした人為的な埋土である。下層最上面ではほぼ完存の土師器長甕(1254)が横になった状態で現れた。内部の土は特に異なっていない。

井戸状の施設を埋めた後に使用されていた長甕を埋納したと考えたい。

200号は弥生後期(5期)の長方形の堅穴で、北壁が211号に壊され、また北東側全体は削平されている。南西側では未掘の弥生堅穴を壊している。

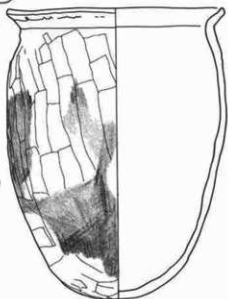


板材小支柱穴が4個並び、その北辺外側に炉

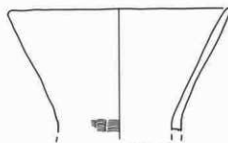
がある。南壁際には貯蔵穴が2ヶ所あり、西壁際には性格不明のピット2個を検出した。他にも未掘のピットがいくつかある。西側の数ヶ所の床面に焼土が散っており、焼失した可能性がある。プラント・オパール分析を炉の焼土で行ったが、顕著な成果はなかった。

遺物は、南西隅側を中心に出土した。上層(22-24層)では黒色頁岩石鏃(3263)・黒曜石石鏃(3134, 35後者分析)・流紋岩勾玉未製品(2262)が見られた。下層(13-17, 25層)では、小型壺(1124, 25)・小型台付壺(1123, 27)・有孔鉢(1128, 29)等と共に沈線文土器片(1130)・山形文土器片(1131)・黒曜石石鏃(3136)が出土した。

189号は弥生後期の楕円形土坑で、153号に近接。下層(19, 20層)より壺片(1080)が出土。

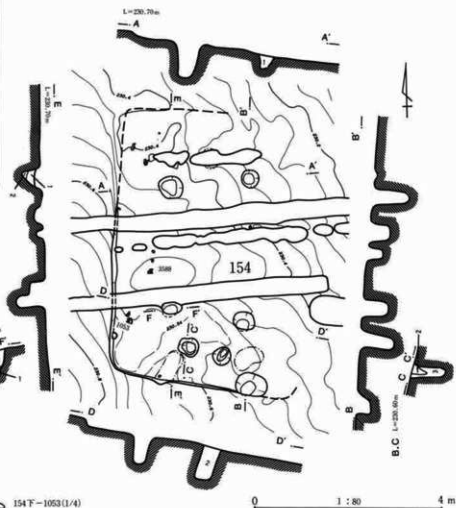
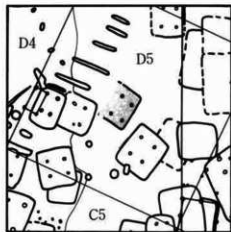


211下-1254



189下-1080

0 1:4 10cm



1. 暗褐色有ローム塊
2. 暗褐色有ローム粒
3. 黄褐色有ローム質



### 154号遺構(D-5, 6G)

【図p.140 PL.154】

中央尾根上南東側で検出した弥生後期(6期)の竪穴。削平が激しく進んでおり、また近世の畠跡も重なっているため、僅かに南西側で壁と床が残っていただけである。

小丸材の支柱穴4個を確認したが、配置は谷側に広がる台形状で、プランもその可能性がある。北辺外側の畠跡の周辺に、炉跡の焼土が残っていた。南壁側に入口柱穴と貯蔵穴状ピットがあり、その周囲の床に焼土が散っていた。そのため焼失した可能性も考えられる。

遺物は、南西壁際の下層から高坏(1053)が出土。

### 155・161・170号遺構(D-5, 6G) 【図p.141~143 PL.155,156】

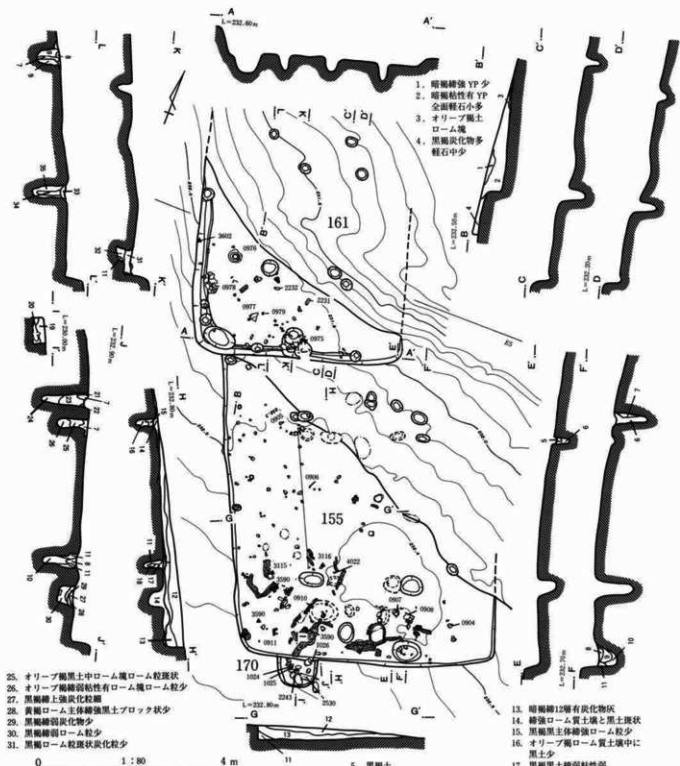
中央尾根上南東側で検出した遺構群。東谷の谷頭にあたり、北東側は近世以後の削平を受ける。

155号は弥生後期(5期)の竪穴で、北東側3分の1は削られており、北で161号、南で170号を壊す。板材支柱穴が4個並んでおり、一回り小さな配列を掘り方で確認したため、拡張と考えられる。西壁では側柱穴が3個、南壁際で入口柱穴と貯蔵穴が出ている。炉は削られていた。炭化材が多く残っており(樹種同定対象外)、焼失状況を示している。

上層(12層)から土製紡錘車類(0909,11)・黒曜石石鏃(3115,16)等が、下層(5~11,13~18,21~30層)からは小壺(0906)・甕類(0907,08)・鉄鏃(4022)等が出土。

161号は弥生後期(2期)の竪穴で、削平が激しく南西側が残っていただけである。板材支柱穴 (P.143へ)





- 25. オリーブ黒土中ローム塊ローム粒状
- 26. オリーブ黒粘弱粘性有ローム塊ローム粒少
- 27. 黒粘強上強炭化粒層
- 28. 黄粘ローム主体粘強黒土ブロック状少
- 29. 黒粘弱炭化物少
- 30. 黒粘弱ローム粒少
- 31. 黒粘ローム粒炭化炭化粒少

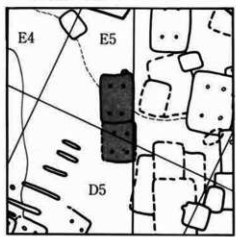
- 5. 黒粘土
- 6. オリーブ黒ローム質粘強黒土炭状
- 7. オリーブローム質粘強
- 8. 黒粘強ローム粒様少
- 9. 黒粘強中ローム粒少炭化粒少
- 10. 黒粘強炭化粒少
- 11. 黒ローム塊
- 12. 粘弱ローム粒YP極少炭化粒下層少

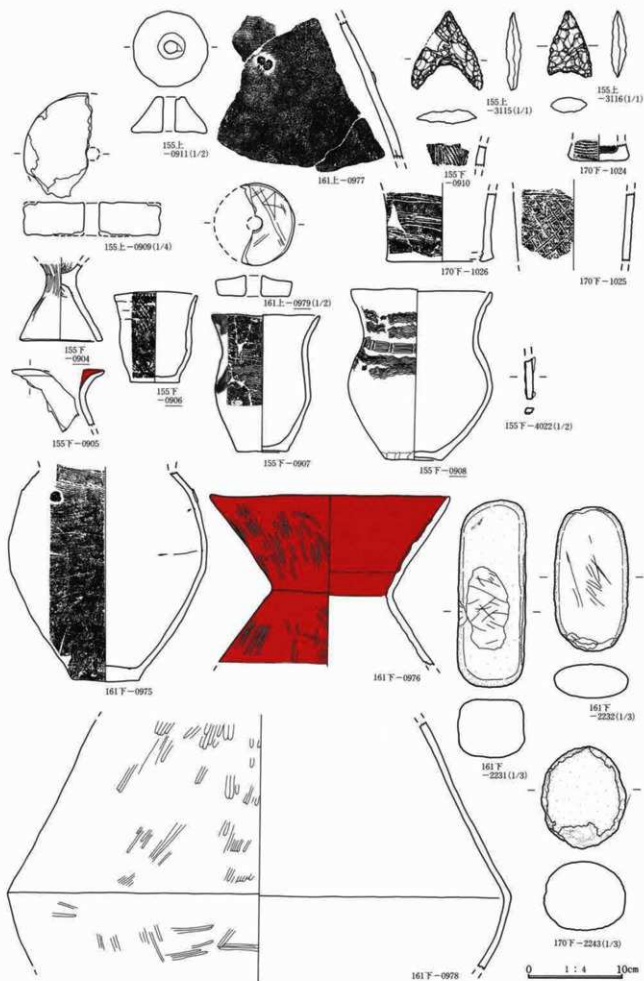
- 1. 粘弱強YP少
- 2. 粘弱粘性有YP全面軽石小多
- 3. オリーブ黒土ローム塊
- 4. 黒炭化物多軽石中少

- 13. 粘弱強上層有炭化物区
- 14. 粘強ローム質土塊と黒土炭状
- 15. 黒粘強主体粘強ローム粒少
- 16. オリーブ黒ローム質土塊中に黒土少
- 17. 黒粘強粘弱粘性弱
- 18. 粘弱オリーブ粘弱粘性弱黒土とローム土炭状
- 19. ローム質粘強
- 20. 粘弱強粘性強ローム質土中白粘粒ブロック状多
- 21. 黄粘ローム質

C.L.K L=232.30m

- 22. 黒粘土黒塊7周
- 23. オリーブ粘弱弱粘性有黒土中ローム粒炭状
- 24. オリーブ粘弱弱粘性有ローム質土中黒土少
- 32. 黒粘強弱ローム粒様少
- 33. 黄粘強粘性有ローム塊中少
- 34. 粘弱オリーブ33比弱粘性有黒土ローム塊少
- 35. 黄粘粘性強ローム塊多

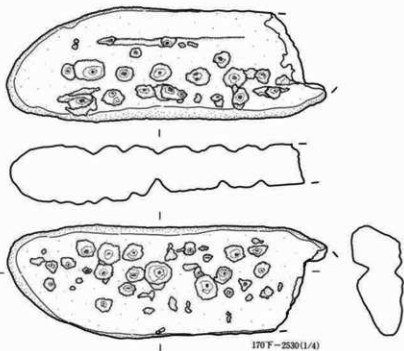




(P.140より) の4個配列を確認したが、南西側に小さい3個配列もあるため、拡張の可能性がある。南西側では周溝・側柱穴・入口柱穴を確認した。炭化材が残存し、これも焼失している。また炭化したオニグルミ他が見られた。

上層(1.2層上位)で土師質紡錘車(0979)等が、下層(2下位.3,7-9,31-34層)で大型壺(0976,78)・甕(0975)が出土。

170号は縄文前期の土坑で、155号に北側を壊される。下層(20層)で深鉢類(1024-26)・緑色片岩多孔石(2530)出土。



### 218号遺構(D-5, 6 G)

【図p.143 PL.157】

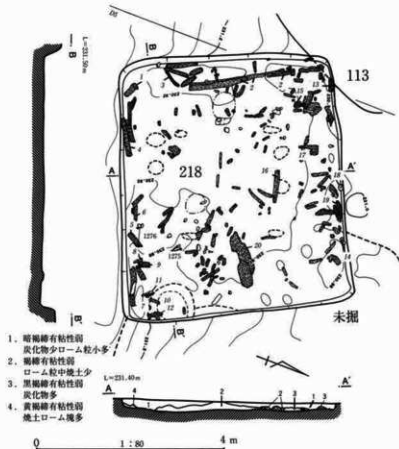
中央尾根上中央で検出した弥生後期(7期)の堅穴。西側で113号・北東側で未掘弥生堅穴を壊す。

板材柱穴4個配列と西外側での炉、東隅の貯蔵穴を確認したが未掘。

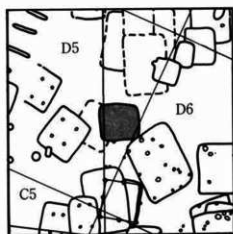
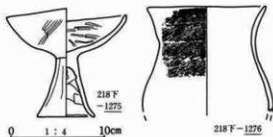
全体に大量の炭化材が残っていた。樹種同定ではクリ・カヤ・ヤマウルシ・モモが確認され、クリ材の<sup>14</sup>C測定ではBC250±80年となった。

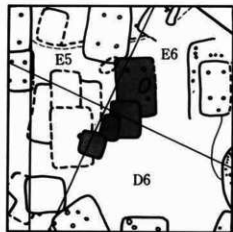
下層(2-4層)で小型高坏(1275)・小型甕(1276)が出土。

南西側に炉を持つ主軸方向は、他の堅穴にはほとんどない。

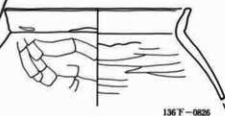
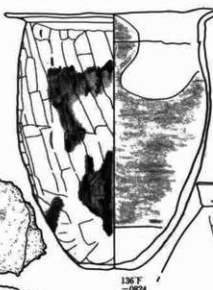
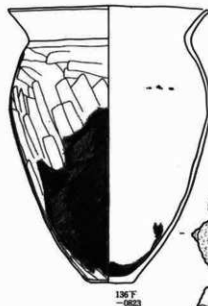
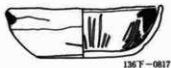
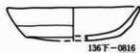
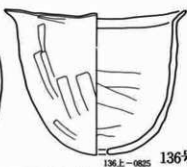
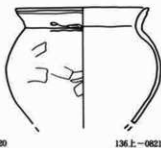
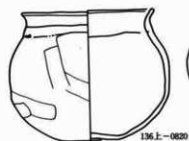
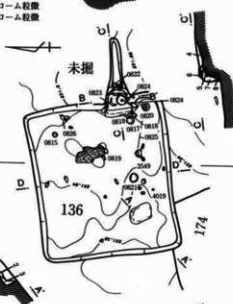


1. 暗褐色粘性土  
炭化物少・ローム粒小多
2. 暗褐色粘性土  
ローム粒中・炭土少
3. 黒褐色粘性土  
炭化物多
4. 黄褐色粘性土  
焼土・ローム多





1. 灰白色粘土鉄分沈着した部分あり
2. 灰白色粘土粒子層
3. にぶい黄褐色
4. くすんだ灰褐色土粒少
5. 黄褐色良ロームと褐色土混
6. 黄褐色弱粘性ローム粒少
7. 黒褐色弱粘性炭化物少ローム粒小緻
8. 暗褐色ローム粒焼土粒
9. 耕作土
10. 黒色土層ローム粒緻
11. 黒褐色弱粘性ローム粒緻

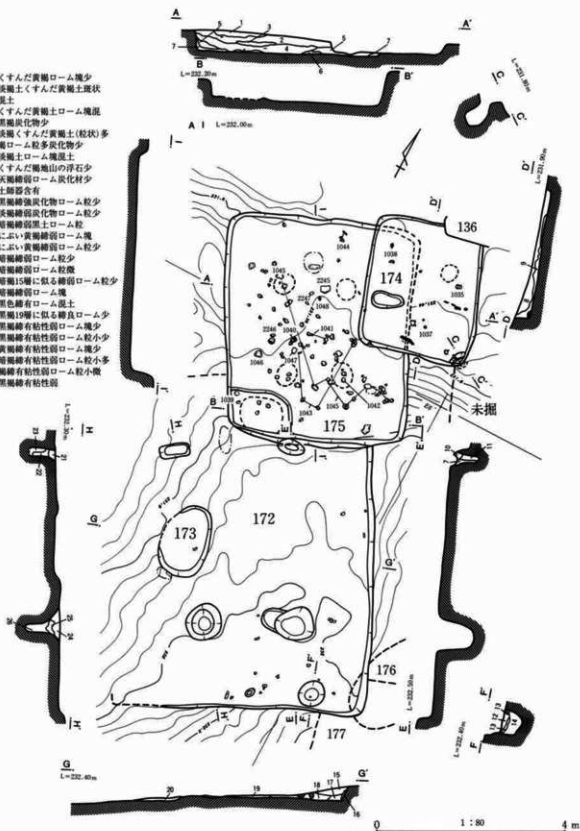


### 136号遺構(D-5, 6G) 【図p.144 PL.157.8】

中央尾根上南側で検出した古代(8世紀)の竪穴。南西側で174号、東側で未掘強生竪穴を壊す。東壁南側に鳥居状に自然石を組んだカマドがある。焼失して床中央に炭化材が残る。柱穴等では未掘。南西側上層粘土(1層)より炭化オニグルミを検出。

上層(1,9-11層)より土師器鉢(0819)・無頸壺(0820)・鉄滓(4019)等、下層(2-8,12-15層)から須恵器小坏(0815)等、カマド内で土師器甕(0823,24)が出土。南西隅近くには扁平な大型自然石がある。

1. くすんだ黄褐色ローム塊少
2. 淡褐色くすんだ黄褐色土塊状炭土
3. くすんだ黄褐色ローム塊混
4. 黒炭灰化物少
5. 淡褐色くすんだ黄褐色(粒状)多
6. 黄褐色ローム粒多炭化物少
7. 淡褐色ローム塊炭土
8. くすんだ黒地山の浮石少
9. 暗褐色ローム灰化材少  
土層部含有
10. 黒褐色炭化物ローム粒少
11. 淡褐色炭化物ローム粒少
12. 暗褐色黒土ローム粒
13. にぶい黄褐色弱ローム塊
14. にぶい黄褐色弱ローム粒少
15. 暗褐色弱ローム粒少
16. 暗褐色弱ローム粒微
17. 暗褐色に似る弱ローム粒少
18. 暗褐色弱ローム塊
19. 黒色弱ローム炭土
20. 黒色19層に似る弱良ローム少
21. 黒褐色粘性强弱ローム塊少
22. 黒褐色粘性强弱ローム粒少
23. 黄褐色粘性强弱ローム塊少
24. 暗褐色粘性强弱ローム粒小多
25. 黒褐色粘性强弱ローム粒小微
26. 黒褐色粘性强弱

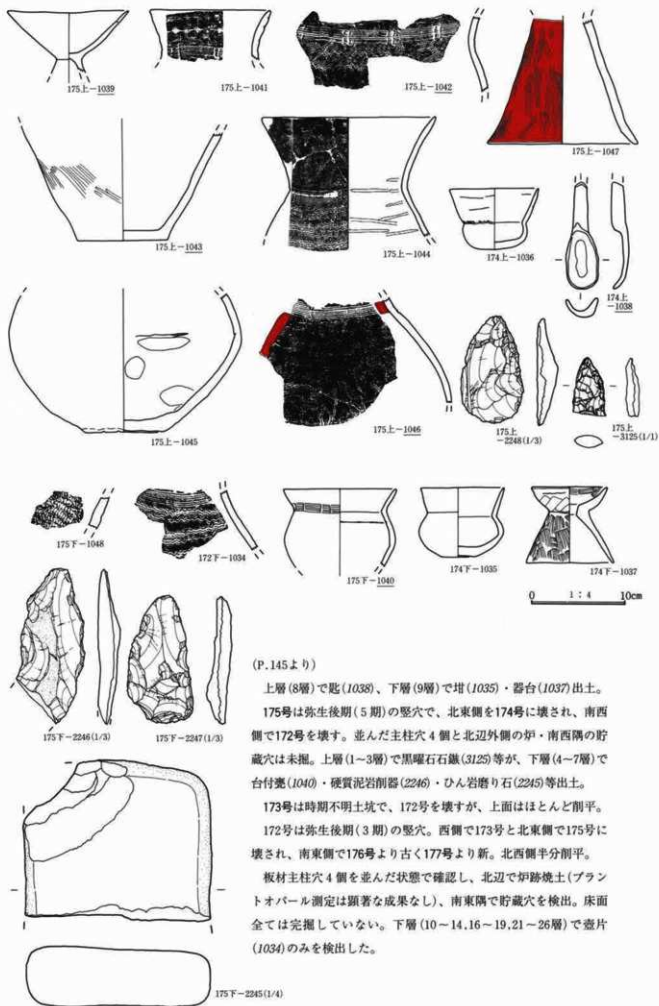


172～175号遺構(DE-6, E-5 G) 【図p.145,146 PL.158,159】

中央尾根上南側で検出した遺構群。西側は谷頭近くで、かなり削られている。

174号は古墳時代前期の小規模(6㎡)の竪穴で、北東側を136号に壊され、西側で175号を、東側で未掘弥生竪穴を壊す。柱穴は南東隅に斜めに入るものを検出しただけで、他には西側に浅いピットがあった。北東側に未掘のピットがある。炉はなかった。炭化材が残っており、焼失している。

(P.146へ)



(P.145より)

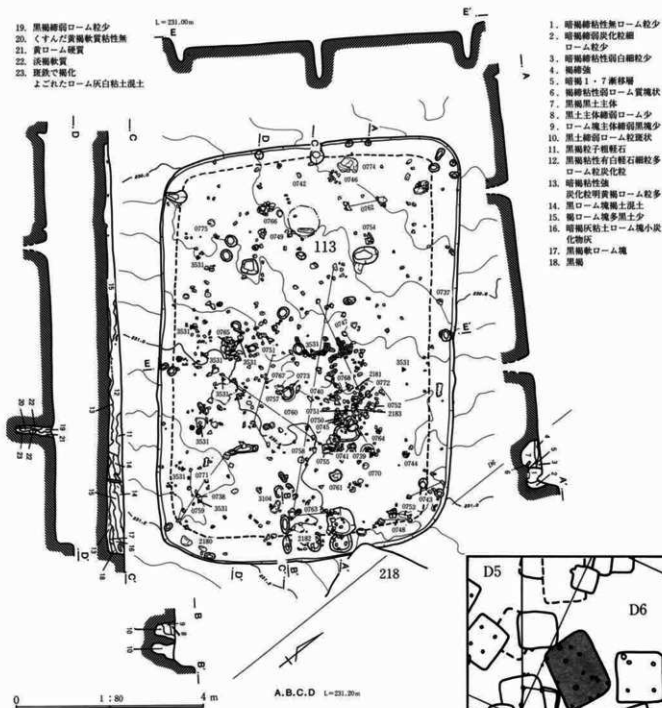
上層(8層)で匙(1038)、下層(9層)で埴(1035)・器台(1037)出土。

175号は弥生後期(5期)の竪穴で、北東側を174号に壊され、南西側で172号を壊す。並んだ支柱穴4個と北辺外側の炉・南西隅の貯蔵穴は未掘。上層(1~3層)で黒曜石石鏃(3125)等が、下層(4~7層)で台付甕(1040)・硬質泥岩削器(2246)・ひん岩磨り石(2245)等出土。

173号は時期不明土坑で、172号を壊すが、上面はほとんど削平。

172号は弥生後期(3期)の竪穴。西側で173号と北東側で175号に壊され、南東側で176号より古く177号より新。北西側半分削平。

板材支柱穴4個を並んだ状態で確認し、北辺で炉跡焼土(プラントオパール測定は顕著な成果なし)、南東隅で貯蔵穴を検出。床面全ては完掘していない。下層(10~14.16~19.21~26層)で壺片(1034)のみを検出した。



### 113号遺構(D-6 G) 【図p.147~149 PL.160~162】

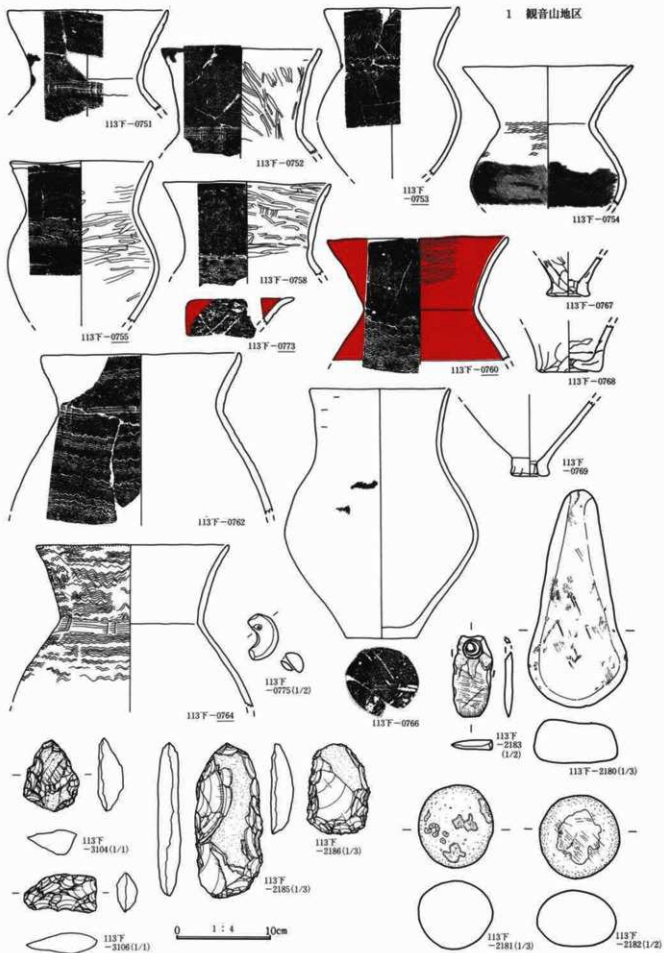
中央尾根上中央で検出した弥生後期(6期)の大型(52m<sup>2</sup>)の堅穴。東側で218号に壊され、北東側で214・215号が近接する。板材主柱穴4個が並び、北西辺外側に坪がある。長辺両側と短辺両側の壁際で備柱穴を、南東側短辺際では入口柱穴と貯蔵穴を検出した。壁際はやや幅広く脆弱。焼失のため、中央を中心に炭化材が残る(樹種同定対象外)。炭化モモが見られた。

遺物は多く、上層(11,12層)では浮線網目文小片(0776)・流紋岩垂飾(2184)が目立つ。下層(1~9,13~23層)では鉢類(0737,40~43)・小壺(0744,45)・片口(0748)・台付壺(0747,50)・甕類(0746,49,51~53,55,58,60,62,64,66)・中型壺(0754)・有孔鉢(0467~69)・土製勾玉(0775)・緑色片岩垂飾(2183)・黒曜石石鏃未製品(3104)・同異形石器(3106)等が出土。焼失時に甕類を中心として多量の器物を有していたことになる。

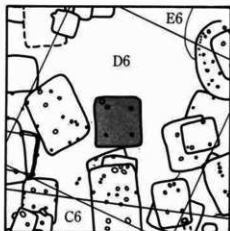




1 观音山地区



- A A'
4. 暗褐色土A軽石
  5. 暗褐色ローム粒多A軽石
  6. 炭化物ローム塊  
白軽石粒多
  7. 黒腐軟
  8. 暗褐色ローム塊多



### 135号遺構(D-6 G)

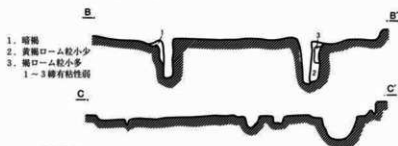
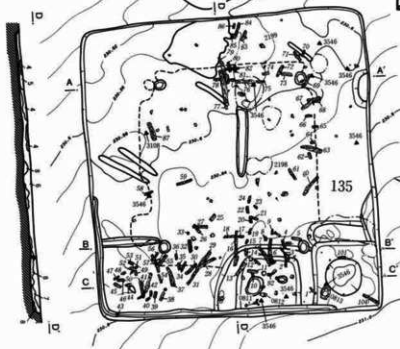
【図p.150 PL.163】

中央尾根上の中央で検出した古墳  
中期(3期)の堅穴。北側で弥生堅穴  
085号が近接するだけだが、削平激  
しく、埋土の残存は極めて少ない。  
北西・南東走向の近世畠跡が重複。

小丸材の主柱穴4個を並んだ状態  
で確認。その北西辺内側には炉が、  
東隅には方形土堤で囲まれた貯蔵穴  
が存在。南に接し入口柱穴関係の浅  
い方形区画検出。周溝を一部確認し、  
南柱穴沿いに間仕切りもある。壁際  
は幅広く脆弱な床。

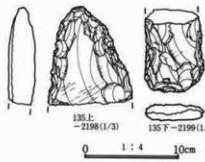
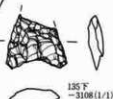
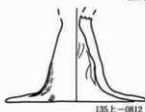
焼失のため炭化材が多く残る。大  
部分がクスギで、<sup>14</sup>C測定ではBC220  
±80の値が出ている(分析報告参照)。

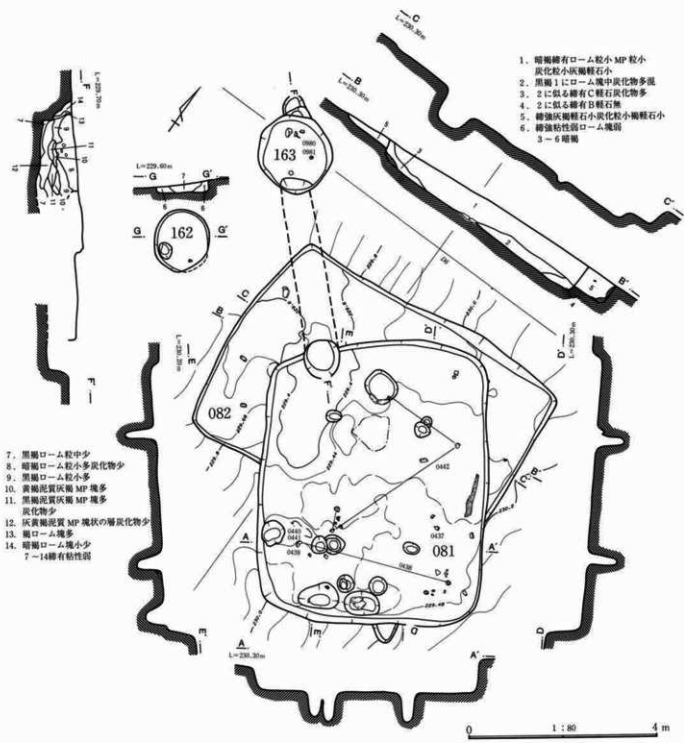
上層(4,5層)で高坏(0812)・弥生匙  
(0814)・硬質泥岩打製石斧(2198)、  
下層(1~3,6~8層)で脚付釜  
(0811)・台付釜(0813)・硬質泥  
岩打製石斧(2199)が出土。



A, B, C, D L=231.10m

0 1:80 4 m





1. 暗褐色有ローム粒小 MP 粒小  
炭化粒小灰濁軽石小
2. 黒濁 1 にローム塊中炭化物多量
3. 2 に似る層有粒石炭化物多
4. 2 に似る層有粒石無
5. 暗褐色有ローム粒小 MP 塊多  
炭化物少
6. 暗褐色有ローム塊多  
炭化物少

7. 黒濁ローム粒中少
8. 暗褐色有ローム粒小多炭化物少
9. 黒濁ローム粒小多
10. 黄褐色泥質灰濁 MP 塊多
11. 黒濁泥質灰濁 MP 塊多  
炭化物少
12. 灰黄褐色泥質 MP 塊状の層炭化物少
13. 暗ローム塊多
14. 暗褐色有ローム塊小少  
7-14 層有粘性質

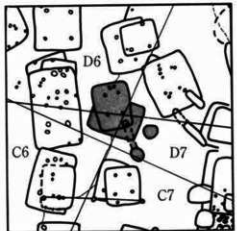
081・082・162・163号遺構(D-6, 7 G)

【図p.151,152 PL.164,165】

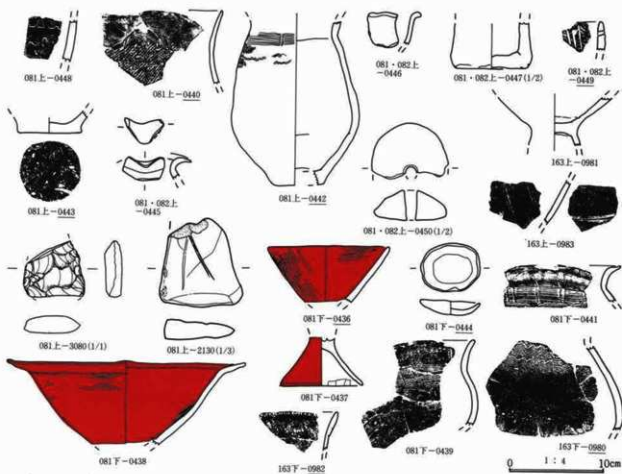
中央尾根上南西で確認した遺構群。

081号は弥生後期(5期)のトンネル土坑付の竪穴で、163号がトンネル土坑。082号を壊す。

(P.152へ)



## II 検出遺構と遺物



(P.151より)

小丸材の主柱穴4個が並び、北辺外側に2個の石を配した炉を検出。南主柱穴は建て替えて2個連結。南東壁側に入口柱穴と貯蔵穴があり、南西壁際にはビットがある。床面を未精査で保存したため、他にも柱穴存在の可能性がある。北西隅付近壁際にトンネルの入口部があり、3.3m北西方向に延びて円形の開口部に達する。床から40cm強の深さでトンネル部底に至る(トンネル部未掘)。焼失で、炭化材・焼土が床に残存。

上層(1.8,9層)からは壺類(0440,42)・沈線文小片(0449)・土製紡錘車(0450)・片口(0445)・黒曜石石鏃(3080)・砂岩砥石(2130)そしてトンネル土坑部で高坏(0981)などが、下層(2-4,7,10-13層)では内面黒色処理の小皿(0444)・高坏(0436-38)・壺(0439)・短頸壺(0441)、トンネル土坑部で壺(0980)・壺(0982)が出土。本堅穴の南西に2m離れてトンネル土坑付の堅穴089号が同一走向で並んでいる。

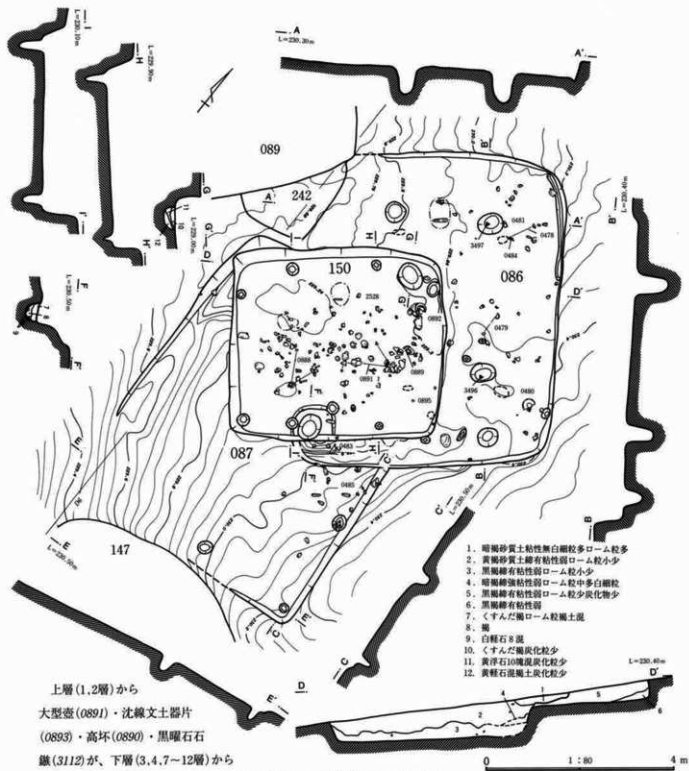
082号は弥生後期(2期)の長方形の堅穴で、081号に大部分を壊される。081号の西隅にかかる部分に一部焼土が残っており、炉の可能性がある。床面は未精査のため、他の施設は不明。顕著な遺物はなかった。

162号は縄文時代の円形土坑。顕著な遺物はやはりなかった。

### 086・087・150号遺構(D-6,7G) 【図p.153,154 PL.166,167】

中央尾根上南西端で確認した弥生後期の堅穴群。北西側で089・242号、南側で147号が重なる。南西側は削平で西斜面に続く傾斜(5-9度)になっている。

150号(6期)は小型で、086・087号を壊す。小丸材の側柱穴が各壁際に2個づつ見られ、炉は北西辺側で検出した。南東辺と北隅に貯蔵穴がある。炉以外の床に焼土が散っており、焼失の可能性がある。



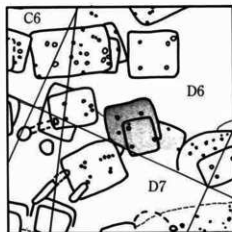
上層(1,2層)から  
 大型壺(0891)・沈線文土器片  
 (0893)・高坏(0890)・黒曜石石  
 鎌(3112)が、下層(3,4,7-12層)から  
 壺(0480,92)・台付壺(0888,89)・土製紡錘車(0895)・砂岩砥石(2528)が出土。

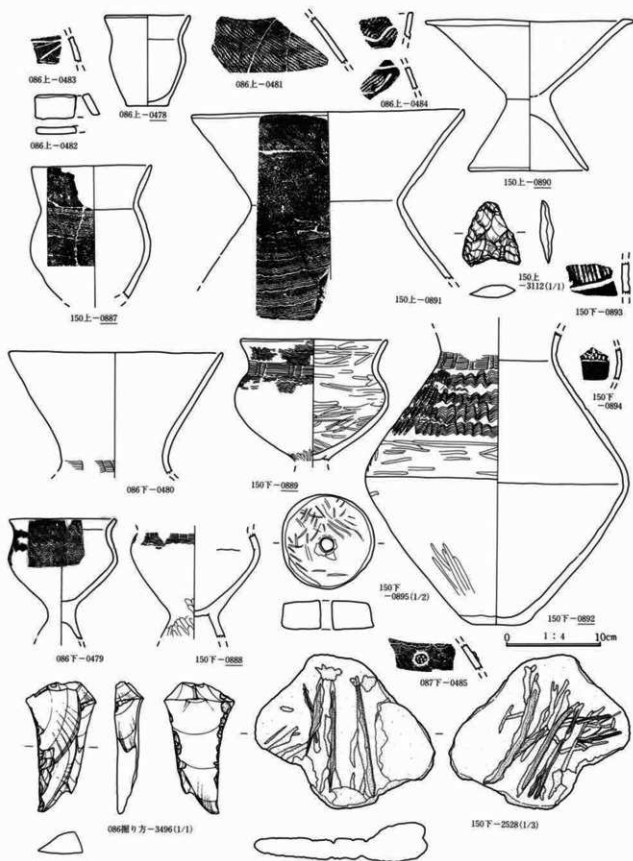
086号(3期)は、150号に壊され、087号を壊す。西側の089・242号と重なる部分は削平で壁は検出できない。

推定板材の主柱穴を4個、その北西辺中間で炉を確認した。それらの南東側に未掘の柱穴状プランを検出したため、拡張と考えられる。南東隅に柱穴状ビットがあるが性格不明。南側床に焼土があり、焼失の可能性がある。

上層(1層)で沈線文土器片(0483,84)・長方形土板片(0482)、下層(5,6層)で台付壺(0479)・壺(0480)等、掘り方で黒曜石削器(3496)が出土。(P.154へ)

1. 暗褐色土粘性無白細粒多ローム粒多
2. 黄褐色土粘性弱ローム粒少
3. 黒褐色土粘性弱ローム粒少
4. 暗褐色土粘性弱ローム粒中多白細粒
5. 黒褐色土粘性弱ローム粒少炭化物少
6. 黒褐色土粘性弱
7. くすんだ陶ローム粒土混
8. 陶
9. 白軽石混
10. くすんだ陶炭化粒少
11. 黄軽石10%混炭化粒少
12. 黄軽石混土炭化粒少



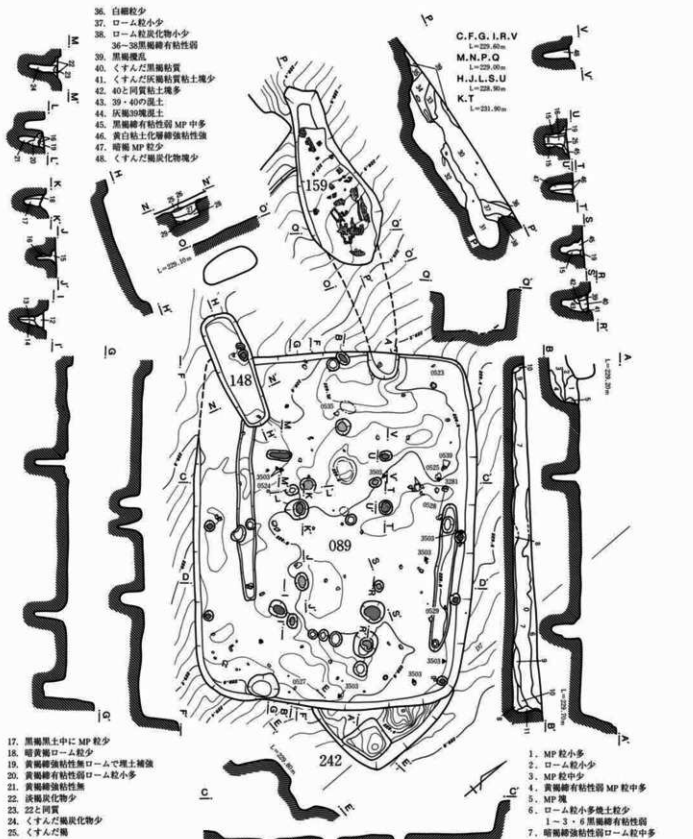


(P.153より)

087号(1期)は086・150号に壊され、147号とも極めて近い。南西側はかなり削平されて床・壁は削られていた。床面を精査しない状態で保存したが、確認したのは南東側の3個の側柱穴のみ。壺片(0485)のみを検出。

- 36. 白細粒少
- 37. ローム粒少
- 38. ローム炭化物少
- 39. 36-38黒礫有粘性弱
- 40. 黒礫混
- 41. くすんだ黒礫粘質粘土少
- 42. 40と同質粘土塊多
- 43. 39・40の混土
- 44. 灰礫39塊混土
- 45. 黒礫有粘性弱 MP 中多
- 46. 黄白粘土化層粘質粘土強
- 47. 暗礫 MP 粒少
- 48. くすんだ炭化物塊少

C,F,G,I,R,V  
L=229.00m  
M,N,P,Q  
L=229.00m  
H,J,L,S,U  
L=229.50m  
K,T  
L=231.50m



- 17. 黒礫黒土中に MP 粒少
- 18. 暗黄礫ローム粒少
- 19. 黄礫粘質性無ロームで埋土補強
- 20. 黄礫粘質性弱ローム粒少
- 21. 黄礫粘質性無
- 22. 炭化物少
- 23. 22と同質
- 24. くすんだ炭化物少
- 25. くすんだ礫

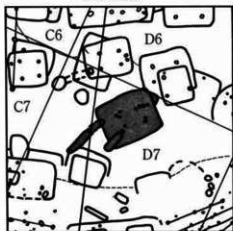
- 1. MP 粒小多
- 2. ローム粒少
- 3. MP 粒中少
- 4. 黄礫粘質性弱 MP 粒中多
- 5. MP 塊
- 6. ローム粒小多塊土粒少
- 7. 暗礫粘質性弱ローム粒中多炭化物塊土粒少

D  
L=229.70m

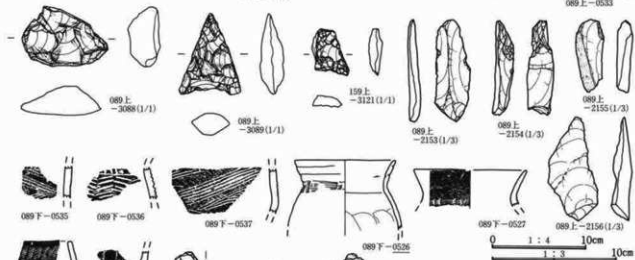
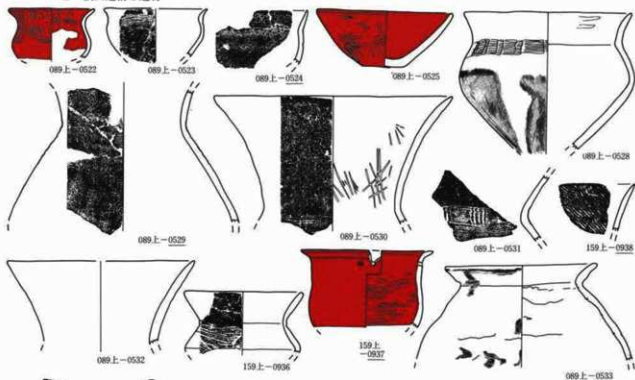
0 1:80 4 m

- 26. 礫弱
- 27. ローム塊多
- 28. くすんだ礫土と黒礫土の混土炭化物少
- 29. ローム塊多塊土炭化物少
- 30. 黄礫粘質性弱ローム粒中
- 31. 暗礫粘質性弱ローム炭化物中少
- 32. 暗礫粘質性弱ローム粒中多炭化物少
- 33. 暗礫粘質性弱ローム粒中多
- 34. 暗礫粘質性無ローム粒中塊状
- 35. 灰黄礫粘質性弱ローム粒中少

- 8. 粘質性強ローム粒少
- 9. やや砂質粘弱礫混
- 10. 粘質性強
- 11. 粘質性弱ローム粒中多
- 12. くすんだ礫
- 13. 浜礫
- 14. 地山軽石粘土12塊混土
- 15. 黄礫粘質性無 MP 粒中少
- 16. 黄礫粘質性弱ローム粒中少



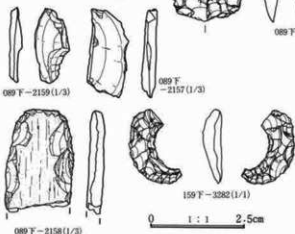
II 検出遺構と遺物



089・148・159・242号遺構  
 (D-6,7G)【図p.155,156 PL.168~170】  
 中央尾根上南西端で確認した遺構群。

089号は弥生後期(7期)のトンネル土坑付の竪穴で、  
 148・159号がトンネル土坑。後者は斜面の竪穴158号  
 と重なって、傾斜地(勾配8度)に入る。

多くの柱穴を検出したが、板材を中心とする主柱穴  
 と炉の位置より古(KT断面他)・中(JLSU断面)・新  
 (IMRV断面)の3回の拡張が考えられる。いづれも北  
 西辺を炉とし、148号が中段階・159号が新段階のト  
 ンネル土坑になり、共に北西辺より下方に延びる。前者

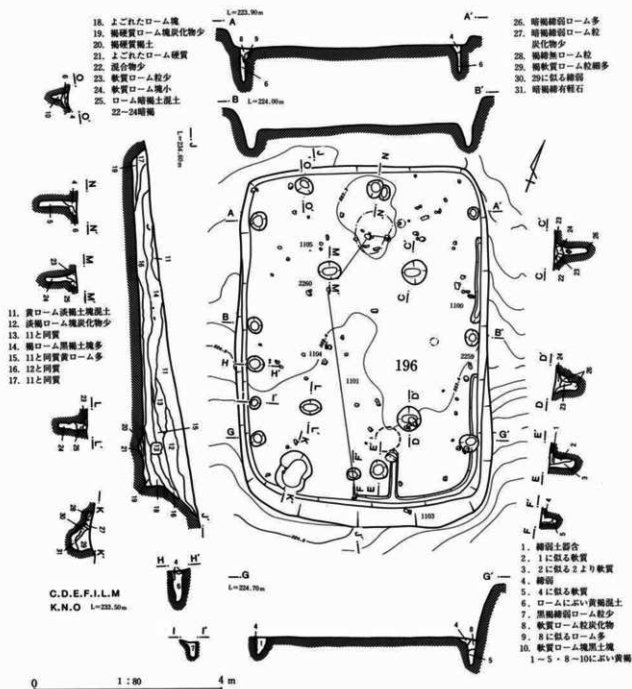




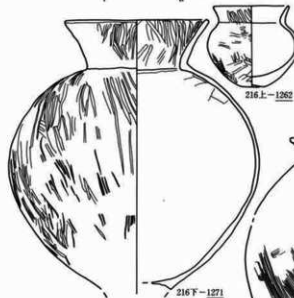
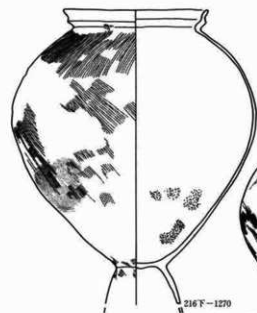
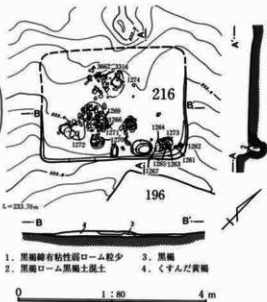
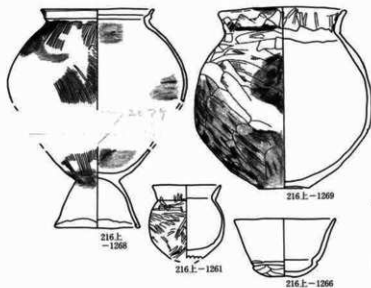
は上部が削平されていたが、後者はトンネル部が完全に残っていた(床との差0.6m断面1.2×0.5m)。新段階には掘柱穴と貯蔵穴があり、また焼失したため159号内には炭化材が残っていた。

遺物は上層(6.9, 25-27, 30, 33-39層)から小型台付鉢(0522, 23)・壺類(0529-32)・黒曜石石核(3088)・同石鏃(3089)・硬質泥岩割片(2153-56)等が本体で、トンネル土坑では小型短頸壺(0937)等が出た。下層(1-5, 7, 8, 10-24, 28, 29, 31, 32, 40-48層)では、小型壺(0526, 27, 34)・緑色泥岩打製石斧(2158)・硬質泥岩割片(2157, 59)・黒曜石石匙(3281)そして159号より黒曜石異形石器(3282)が出土。

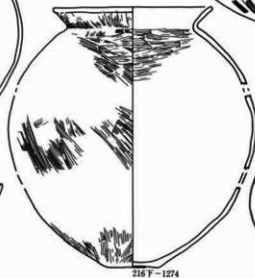
242号は089・086号と重なる方形に近い土坑。遺物なく時代・性格不明。







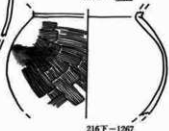
0 1 : 4 10cm



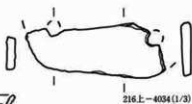
216下-1274



216下-1285



216下-1287

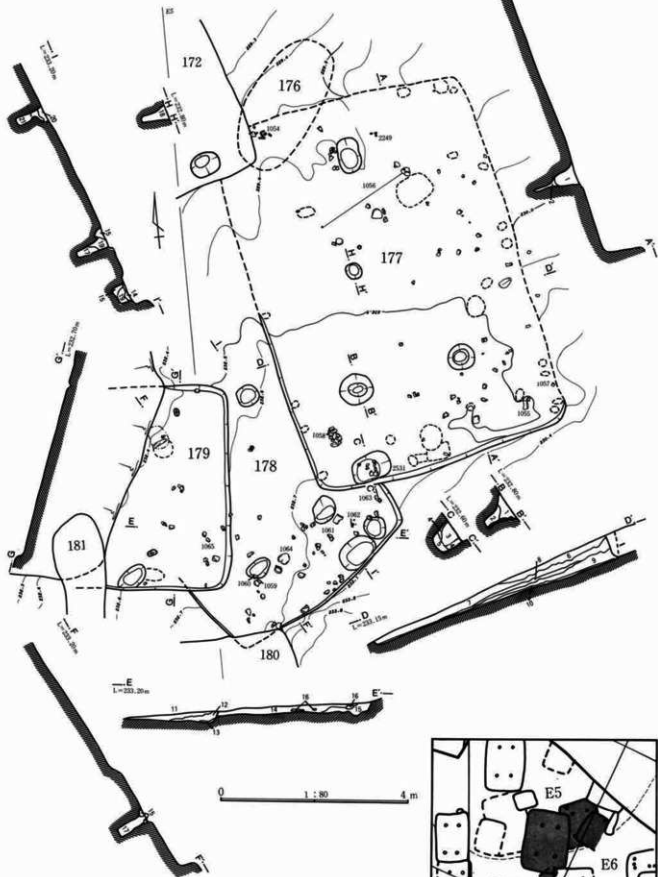


216上-4034 (1/3)

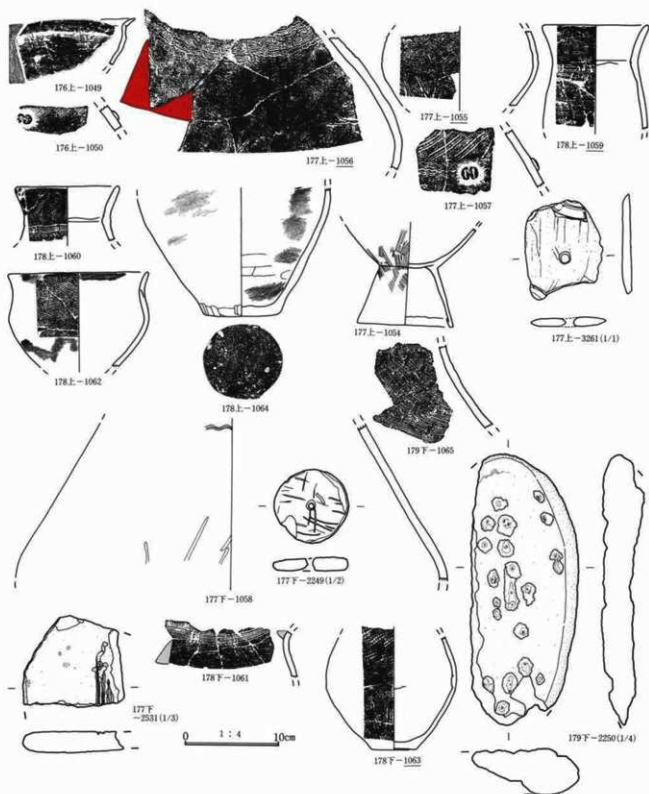
1. 黒縄繪有粘性器ローム較少
2. 黒縄ローム黒縄土混土
3. 黒縄
4. くすんだ黄褐色

0 1 : 80 4 m

- |             |                          |                      |
|-------------|--------------------------|----------------------|
| 1. 黒縄埴      | 8. 淡褐色ローム粒少黒縄土塊少         | 15. 黒縄埴有粘性弱ローム粒小多    |
| 2. 緑弱黒土ローム混 | 9. 淡褐色ローム粒多              | 16. 黒縄埴有粘性弱炭化物少      |
| 3. 黒        | 10. 黒縄埴粘性有               | 17. 黄縄埴有粘性弱 MP 粒中少   |
| 4. 黒ローム塊少   | 11. 黒縄埴有12比密度薄粘性弱ローム粒小多  | 18. 黒縄上層中下面弱ローム塊少    |
| 5. 黒        | 12. 黒縄埴有粘性弱ローム粒小多塊土少     | 19. 黒縄埴有粘性弱ローム塊少     |
| 6. くすんだ黒    | 13. 暗褐色有粘性弱ローム塊少塊土少炭化物極少 | 20. 黒縄埴有粘性弱ローム粒少炭化物少 |
| 7. 淡褐色ローム塊少 | 14. 暗褐色有粘性弱ローム粒小極少       | 21. 黒縄埴有粘性弱ローム粒少炭化物少 |



1 观音山地区



## II 検出遺構と遺物

### 176～179号遺構(E-5, 6 G) 【図p.160,161 PL.173,174】

中央尾根上南端で確認した遺構群。東側には未掘弥生堅穴があり、西側は削平が進んでいる。

176号は推定古墳前期の土坑で、172・177号と重なるが層位的な新旧関係及び形状は確定できなかった。想定される範囲附近で土師器台付甕(1054)を検出したが、本遺構との関係が確定でないため177号上層出土とした。

179号は弥生後期(5期)の堅穴で、東側で178号を壊し、西側は181号に壊され大部分が削平されている。南壁際で柱穴1個、そして北側で炉を検出したのみ。下層(11～13層)で壺(1065)・緑色片岩多孔石(2250)が出土した。

177号は弥生後期(2期)の堅穴で、北西側で172号に壊され、東側で未掘堅穴、南西側で178号を壊す。遺跡保存による調査中断のため床・壁は未精査で、北半分の形状は確定できず、また176号との関係も明瞭には把握できなかった。

4個の並んだ板材主柱穴のうち南辺のみ発掘。北辺の外側には炉がある。南壁際には貯蔵穴があり、他に側柱穴状のピットプランをいくつか確認した。

上層(6,7層)で壺類(1055～57)・珪質準片岩磨製石鏃(3261)が、下層(1～5,8～10層)から大型壺(1058)・砂岩砥石(2531)・白色凝灰岩紡錘車(2249)が出土。

178号は弥生後期(1期)の堅穴で、177・178・180各号に壊される。北側も削平されているため、僅かに南東側が残っていただけである。

板材主柱穴4個を並んだ状態で確認した。南東隅には貯蔵穴がある。確認面で壺類(1059,60,62,64)、下層(14～21層)で壺類(1061,63)が出土した。

### 180・181・195号遺構(E-5, 6 G) 【図p.163 PL.174,175】

中央尾根上南端で検出した弥生後期の堅穴群。いずれも南側は調査範囲外になる。

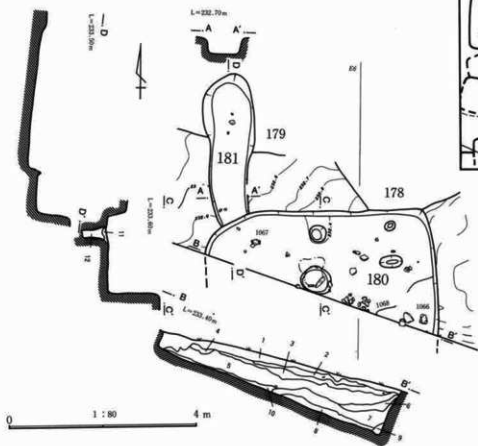
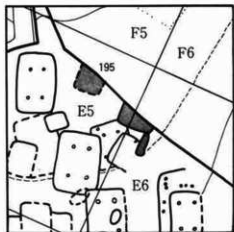
180号(7期)はトンネル土坑(181号)付の堅穴で、北側で178・179号を壊す。

北東側の板材主柱穴1個と北壁際の側柱穴そして炉を検出した。北西隅から床より30cm下がった状態で、すでに上面が削平されたトンネル土坑が北に延びている。小壺下の床面土壌でのプラントオパール測定ではネザ分節がやや多く確認され、209号と同様に床に敷かれていた可能性がある。

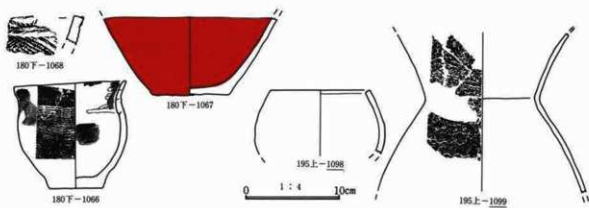
遺物は、下層(7～12層)から縄文片(1068)・小壺(1066)・鉢(1067)が出土。

195号は弥生後期(6期)の堅穴で、180号の東3mに位置する(次頁平面図には非記載)。遺跡保存のため、発掘は途中で中断になり、床・壁共に検出していない。未掘の堅穴と重複の可能性がある。

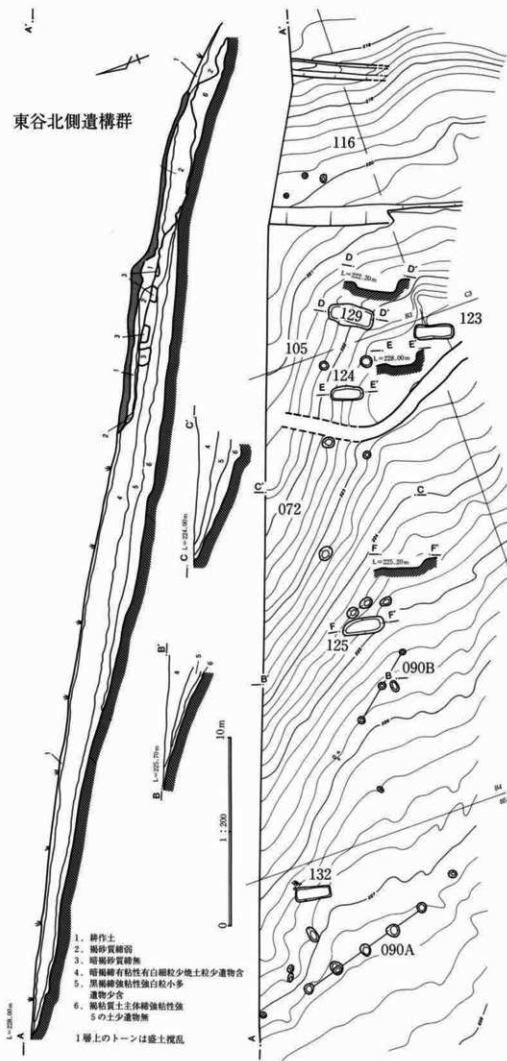
上層より壺(1099)・無頸壺(1098)が出土。



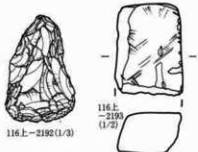
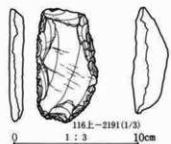
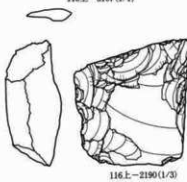
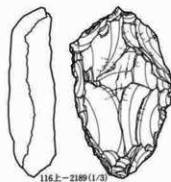
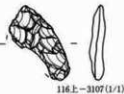
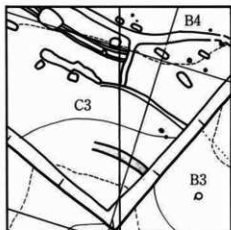
1. 耕作土
2. 暗褐色弱粘性有ローム粒小塊
3. 黄褐色有粘性弱ローム粒少
4. 暗褐色有粘性弱ローム粒多
5. 暗褐色有粘性弱ローム粒小炭化物微
6. 暗褐色有粘性弱ローム粒少
7. 黑褐色有粘性弱ローム粒少炭化物
8. 黑褐色有粘性弱ローム粒少焼土微
9. 黑褐色強粘性有ローム粒微
10. 黑褐色強粘性強焼土微
11. 灰土・黄褐色強ローム粒
12. 灰土・弱粘性



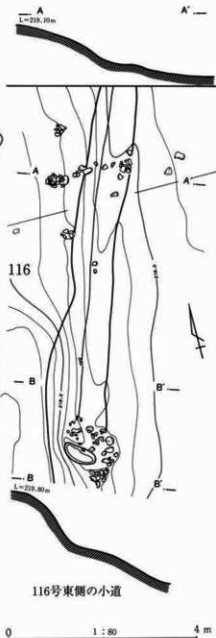
# 東谷北側遺構群







0 1 : 3 10cm



072・105・116・123～125・129・132号遺構(B-3～5G) 【図p.164,165,166 PL.176～178】

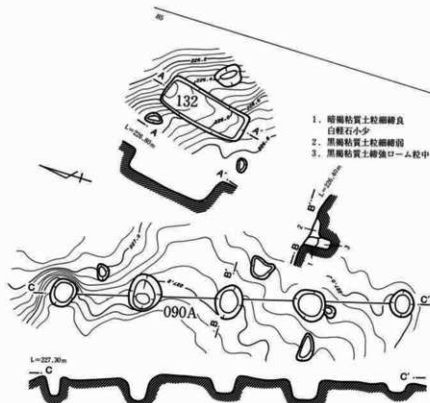
東谷北西側で検出した遺構群。いずれも北側は調査範囲外にかかる。

105号・116号は中世城郭の曲輪である。急勾配(17.18度)の斜面を削って(段差は上部から各0.5mと1.0m)、平坦面(幅は約10mと8m)を構成する。両者の間の段差は盛り土の攪乱があるものの、現地表面でも確認した。116号の東側は約1.5mの段差で小道(幅40cm)が延びている。105号の上面には、123・124・129各号の近世短冊形土坑が並んでいる。105号は南に約25m続く(p.168に記載)。

116号の上層より瀬戸美濃染付碗(0790)・砥沢石砥石(2193)・弥生麦片(0791)・黒曜石石鏃(3107)・硬質泥岩石核(2189.90)・同打製石斧(2191)等が、105号の埋土下層より瓦質土器コネ鉢片(1441)が出土。

072号は東谷の支谷の可能性が大きい落ちこみで、北西から南東方向に下る(傾斜約9度)。底の中心は調査範囲外にあるため、全体の形状はつかみえない。調査範囲内での上幅は7.5mあった。105・116号より古い。

当初、濠と想定し遺構番号を付与したが、調査範囲内では積極的な資料が判明しなかった。上層(4層)出土の大量の遺物は、遺構外遺物として扱った(p.179～181)。近世の短冊形土坑125・132号が西側で重なる。



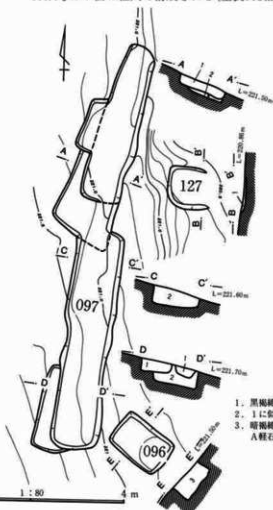
1. 暗褐色粘土粒細砂質  
白粒石少
2. 黒褐色粘土粒細砂質
3. 黒褐色粘土粒強ローム粒中

090A・090B号遺構(B-4, 5 G) 【図p.164,166 PL.176】

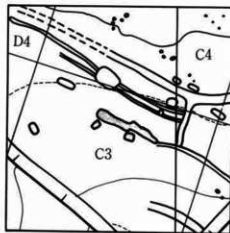
東谷北西端で検出した弥生後期の横列。南側は近世の道130・131号の造成に際し大きく削られ、ローム上層まで失われている。

090A号は5個の柱穴で構成される(全長7.3m柱穴間1.8m)。柱穴は均一の大きさで間隔で並び、確認面からの深さは最大0.4mだが、当初の掘り込みはもっと深かったはずである。130・131号に近い南側にはまだ柱穴が存在した可能性は大きい。また南の延長方向は、弥生竪穴094号の東壁側柱穴線と一致している。

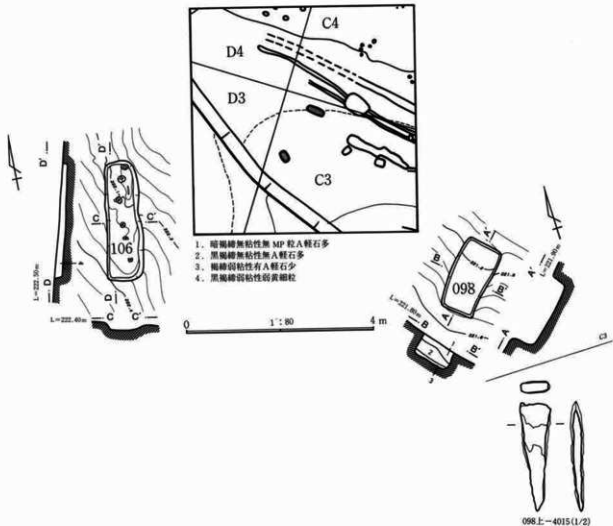
090B号は3個の柱穴で構成される(全長4.2m柱穴間2.1m)。090A号の東に10m離れ、高度は1.5m下になる。僅か3個の柱穴を確認しただけだが、少なくとも近世の削平を受けている南東側へは、まだ延びる可能性はある。西斜面に比べ近世の削平が大きいため、残存部分は以上のように少ないが、東谷そのものもそれほど深くないため、弥生後期にどの程度の規模であったかは不明。



1. 黒褐色弱粘性弱黄細粒
2. 1に似る塊状
3. 暗褐色弱粘性弱MP粒少黒塊大  
A粒石粒多



0 1:80 4m



#### 096・097・127号遺構(C-3G)

【図p.166 PL.178】

東谷中央の黒色土中で確認した近世短冊形土坑群。いずれも中世曲輪105号で形成された平坦面に位置する。097号は南北走向で6基以上が重なっている。127号はそれに直交して谷方向に向かっている。両者と走向が異なる096号は、天明の浅間山噴火軽石(A軽石)を処理したものと考えられる。

#### 098・106号遺構(C-3G)

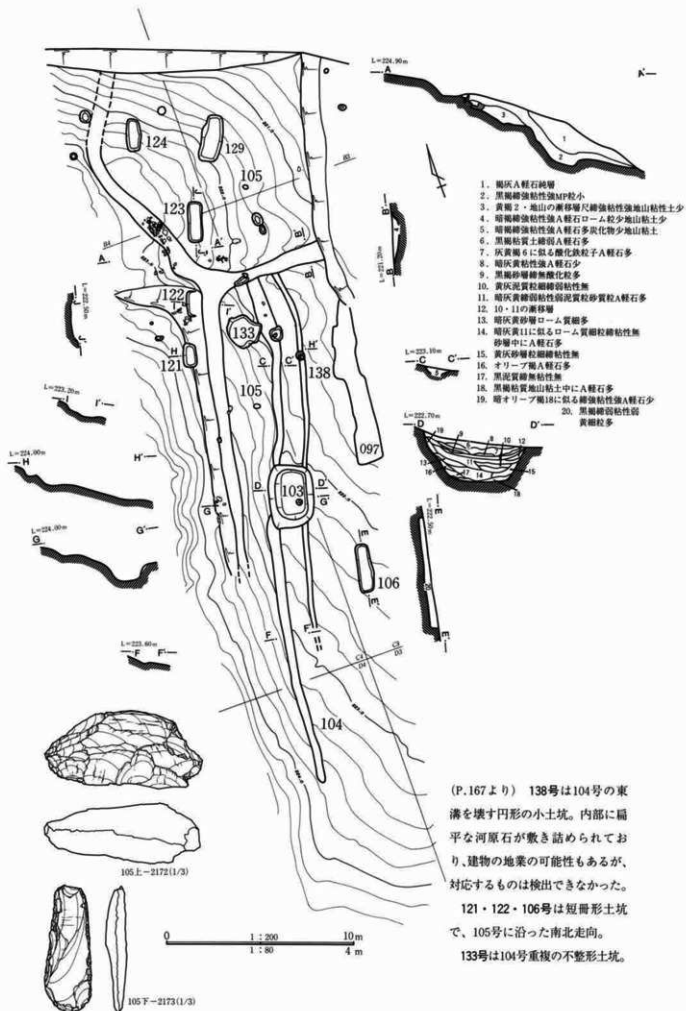
【図p.167 PL.179】

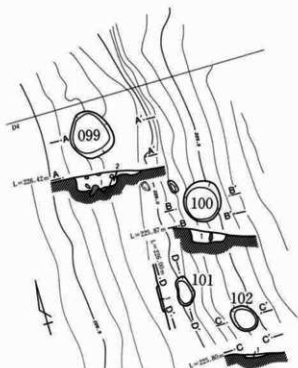
東谷中央で確認した近世の短冊形土坑群。中世曲輪105号が途切れた南側に位置する。106号は前記097号と同様の南北走向。098号は南西から谷方向に向かっている。096号と同様に天明の浅間軽石の処理用のものと考えられる。上層より、楔型鉄製品(4015)が出土。

#### 103～106・121・122・133・138号遺構(C-3,4,D-4G)

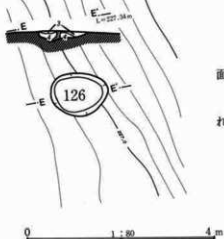
【図p.168 PL.179,180】

東谷中央で検出した中世曲輪105号に乗る近世の遺構群。  
 105号は北側の調査境界より10m強の位置で南北に分かつ小道が分岐して谷側に向かう。これは近世段階で形成された小道である。硬質泥岩石核(2172)・同打製石斧(2173)が見られた。  
 103号は長方形の土坑で、104号を壊す。断面逆台形をし、確認面からの深さは2～3mと深い。人為的に埋められており、井戸の可能性も考えられる。  
 104号は平行する二条の小溝で形成される小道(内幅1.2m)で、緩く屈曲し約27m南北に延びる。(P.168へ)



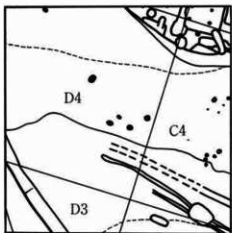
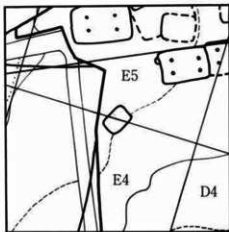


1. 黒褐色弱粘性弱黄細粒
2. 暗褐色粘性强礫土塊状
3. 弱粘性弱炭化粒焼土粒
4. 粘強粘性強焼土



156上-0912(1/4)

1. 黄灰粘強ローム粒中少軽石小多
2. 暗灰黄粘有粘性有軽石小多  
ローム粒中塊状多
3. 黒褐色弱粘性強



### 099～102・126号遺構(D-4G)

【図p.169 PL.180】

東谷南西側で検出した土坑群。東谷の源流部に近く、黒色土中で確認。

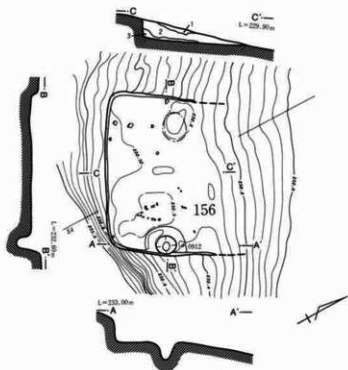
099号は近世の土坑で、立地勾配は13度。100～102号も近世の土坑で、立地勾配は24度と急である。

126号は、立地勾配14度にある楕円形土坑で、焼土が下層の埋土になっている。他の近世の土坑とは位置も離れ埋土も異なるため、弥生の可能性が推定できる。

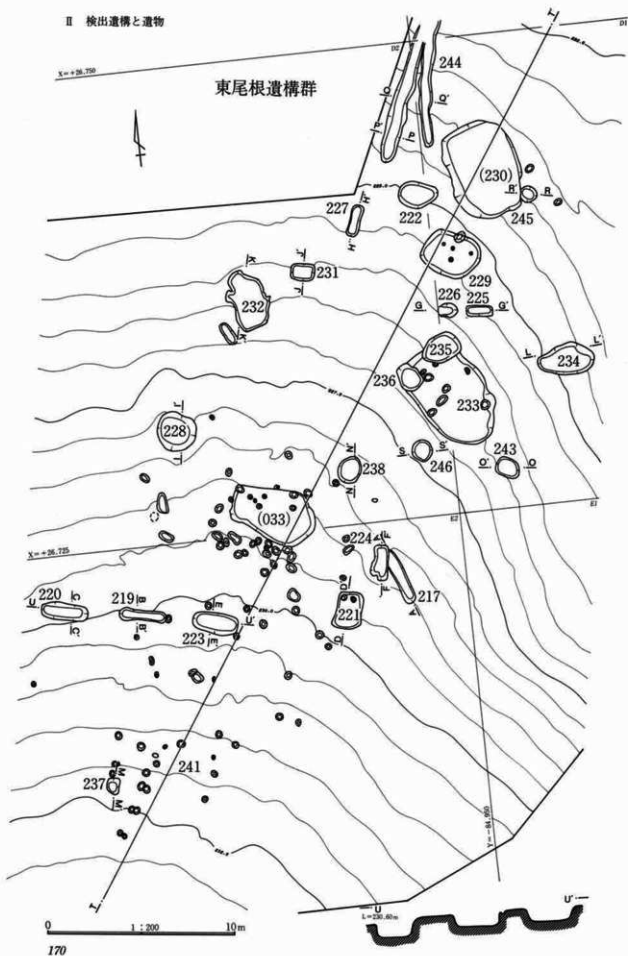
### 156号遺構(E-4, 5 G) 【図p.169 PL.175】

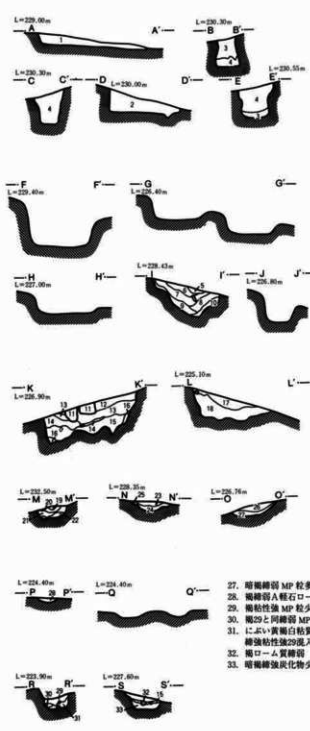
東谷最南端で検出した弥生後期(4期)の小規模の竪穴。谷の源頭の斜面(勾配11度)に位置するが、谷側は削られて壁・床は残っていない。南東壁際に柱穴が1個あり、反対側の北西壁近くで炉を確認。床はそれほど硬化していない。

上層(1,2層)より壘片(0912)が出土。



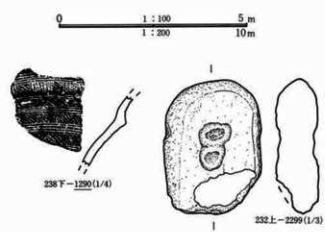
II 検出遺構と遺物





1. 暗褐色弱粘性無黒土中ローム粒少
2. 黄褐色弱黒土中ローム塊黒土  
A層石斑状少
3. 暗褐色ローム塊A層石斑状少
4. 暗褐色ローム塊A層石斑状少
5. 暗褐色無A層石
6. 褐YP粒少
7. 暗褐色6に似る
8. 黒褐色土中にYP粒少
9. 暗褐色土中ローム塊
10. 褐ローム塊主体
11. 耕作土
12. 暗褐色YP粒少
13. 黄褐色ローム質弱粘YP粒塊状少
14. 層13・15の漸移層弱粘
15. 暗褐色強黒土中YP粒少
16. 黄褐色ローム質
17. 暗褐色弱粘性弱MP粒少
18. 暗褐色弱粘土化MP塊状
19. 赤褐色土塊主体
20. 暗褐色19・21の漸移層焼土粒炭化粒少
21. 暗褐色ローム粒少
22. 暗褐色21中にローム塊多
23. 暗褐色弱粘細粘性強
24. 暗褐色23と同ローム塊大多
25. におい黄褐色汚れたローム弱粘
26. 暗褐色弱粘土粒細炭化粒多

27. 暗褐色弱MP粒多
28. 暗褐色A層石ローム粒少
29. 暗粘性強MP粒少
30. 層29と同暗褐色MP粒無
31. におい黄褐色粘質土主体  
細粘粘性強29混入
32. 暗褐色弱粘土YP粒多
33. 暗褐色強炭化物少



## II 検出遺構と遺物

### 東尾根遺構群(DE-1, 2 G) 【図p.170,171 PL.185~188】

東尾根で検出された縄文時代の竪穴とその周辺の土坑を除いた遺構群は、次の通りである。

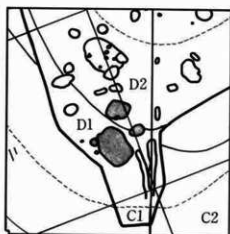
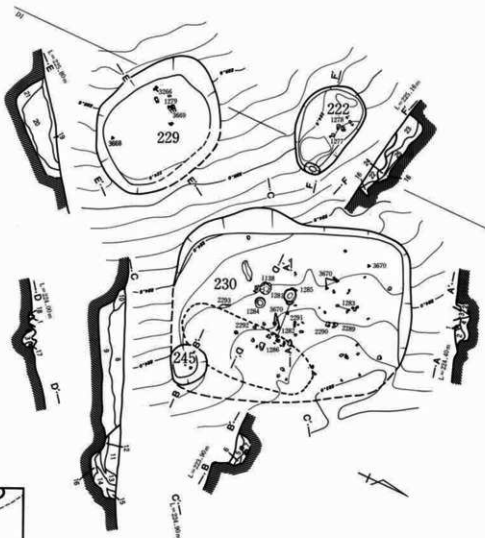
【近世】 短冊形土坑は217・219・220・221・223・224・225・226・227各号で、この内219・220・223・225・226各号は東西方向に並び、他は概ね傾斜に沿った位置である。箱形土坑は231・237両号で、また傾斜に直交する小溝244号が最北端にある。

244号は天明の浅間山軽石(A軽石)で埋まっており、小道と考えられる。東西走向の短冊形土坑は降下後の埋土が多い。237号の上層には焼土が見られた。

【弥生】 柱穴群241号が、上位の海拔230~233mあたりに展開している。調査範囲内では横列や掘立にはならなかった。

【縄文】 楕円形土坑は228・238・243・246各号で、不整形土坑が232・234両号である。この内、238号下層(24,25層)から深鉢片(J290)、232号の上層(11~13層)で綠色片岩凹石(2299)が出土した。243号の上層には焼土が見られた。

1. 黒編織有 MP 粒少
2. にぶい黄編織弱 MP 粒多
3. 灰黄編織弱軽石小 MP 粒少
4. 黄編 MP 純層弱有
5. 編織性強 MP 粒少
6. 編 5 と同質編弱 MP 粒無
7. にぶい黄編白粘質土主体編織粘性强 5 混入
8. 暗編無粘性强編土大塊状 MP 細粒炭化粒少
9. 黒編暗編土中に MP 粒大多炭化粒少
10. 編ローム質土塊状
11. 8 に似る編弱炭化物少
12. 編土主体編弱
13. 編弱 MP 粒少
14. 編弱 MP 粒多
15. 編弱有
16. ローム質編弱
17. 灰黄編軽石中純層編無
18. 黒編1と同 MP 粒中
19. 編ローム質 YP 粒少
20. 暗編炭化粒 YP 粒少
21. 暗編20に似る炭化粒無
22. 編、白粒少
23. 暗編純強炭化粒小ローム粒少
24. 暗編23に似る焼土粒多
25. 編ローム質土中に炭化粒少







## II 検出遺構と遺物

### 222・229・230・245号遺構(D-1, 2 G) [図p.172,173 PL.181~183]

東尾根最下位(傾斜14~15度)で検出した縄文前期の遺構群。

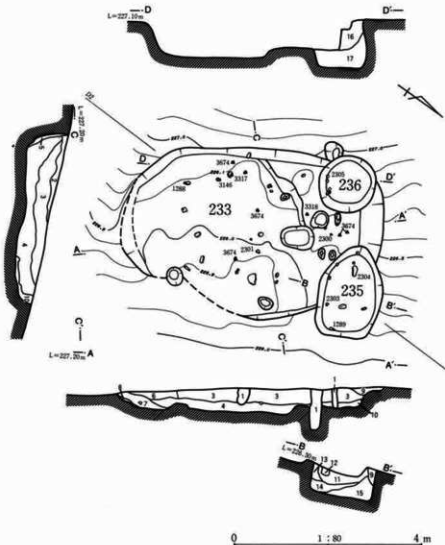
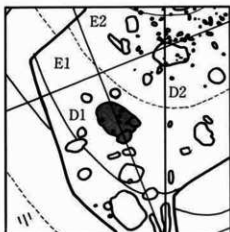
230号は隅丸方形の竪穴と考えられるが、谷側は壁・床は不明で、また楕円形未命名土坑(12~16層)に削られる。推定東隅に245号があるが、新旧関係は不明。鍵の手に3基の埋塞が並んでいた。1基は2個の土器(1281,85)で構成されていた。柱穴などの施設は不明。また埋塞に対応する硬化した床面は確認できなかった。

上層(8.10層)からは黒曜石石鏃(3143~45)・硬質泥岩石鏃(2572)・同打製石斧(2295)・緑色片岩打製石斧(2296)・変質蛇紋岩磨製石斧(2298)等が、下層(1~4,9,17,18層)からは上記以外の埋塞(1138,84)・深鉢片(1282,83,85)が見られた。1285は浮島興津式のものである。

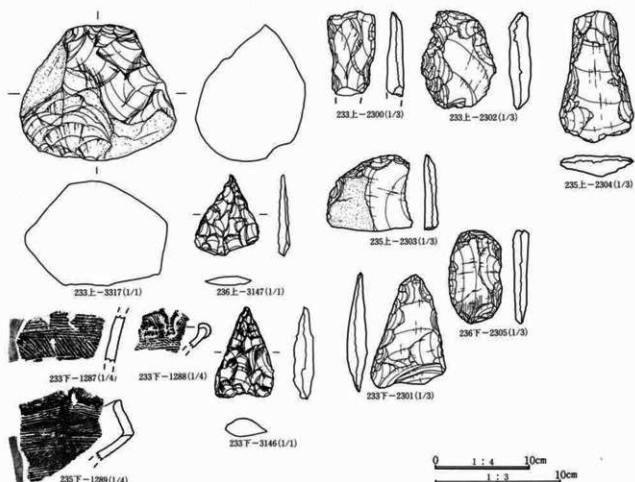
245号は230号と重複する円形土坑(5~7層)。顕著な遺物はない。

229号は230号の山側に位置する楕円形土坑。上層(19,20層)より深鉢片(1280)・チャート石鏃(3266)・黒曜石剥片(3668,69計重量35g)、下層(21層)より深鉢片(1279)が出土。

222号も230号の山側に位置する楕円形土坑。下層(16,25層)で深鉢片(1277,78)が出土。前者は浮島興津式。



1. 耕作土
2. 暗緑褐色粘性弱白細粒多
3. 暗緑褐色 MP 粒白細粒少
4. 暗緑褐色 MP 粒多
5. 暗緑褐色
6. 暗赤に似る暗弱 MP 粒少
7. 暗 4 層に似る
8. 明緑 MP 粒多塊土少
9. 黄緑ローム質粒子細
10. 暗緑強ローム塊少
11. 暗緑強白粒石粒多炭化物少
12. 暗緑強弱
13. 暗11に類似ローム粒多
14. 暗緑 MP 粒少
15. 暗緑11に類似白粒石粒少
16. 暗緑強白粒石粒多 MP 粒少
17. 暗緑16に類似炭化物少



## 233・235・236号遺構(D-1, 2 G) 【図p.174,175 PL.184】

東尾根北東側下位(傾斜14度)で検出した縄文前期の遺構群。

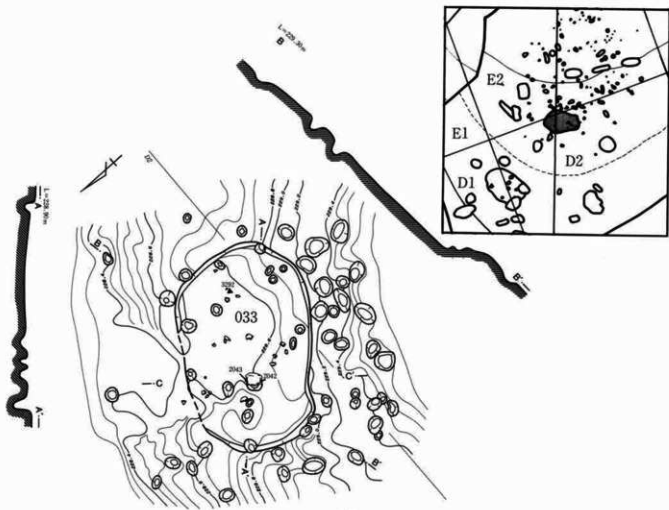
233号は楕円形の堅穴で、谷側の北東部分は壁・床不明。北西側で235・236号と重複し、それより古いだろう。

内部は特に床が曖昧で、顕著な硬化面はなく、凹凸もある。確実な柱穴や燃焼施設も検出できなかった。

上層(1~3, 6, 9層)からは黒曜石石核(3317重量41g)・硬質泥岩打製石斧(2300)・同削器(2302)が、下層(4, 5, 7, 8, 10層)からは深鉢片(1287, 88)・黒曜石石鏃(3146)・硬質泥岩打製石斧(2301)が出土。

235号は233号の谷側で重なる楕円形の土坑。上層(9, 11~14層)で硬質泥岩削器(2303)・同打製石斧(2304)が、下層(15層)から深鉢片(1289)が出土。

236号は233号の山側で重なる円形の土坑。下層(17層)より硬質泥岩打製石斧(2305)が出土。



1. 黒陶片、細粒性有軽石小石中少
2. オリーブ陶片強粘性有軽石小多  
YP 軽小



033上-0183(1/4)



033上-0184(1/4)



### 033号遺構 (DE-2 G)

【図p.176,177 PL.186】

東尾根の中位(傾斜11度)で検出した縄文前期の竪穴。北の谷側の壁は削られる。

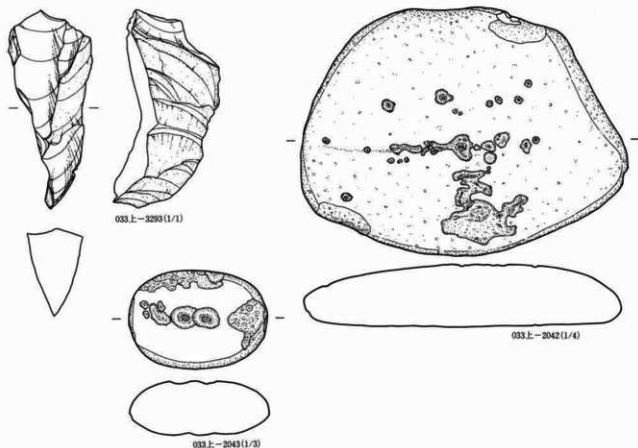
顕著な硬化した床は見られず、あまり平坦ではない。また焼焼施設も不明。竪

穴内外に多数の柱穴を検出したが、規則的な配列は認められない。またこれらの柱穴には弥生柱穴群241号に關係するものも混在している可能性がある。

いづれも上層(1層)から、接合した黒曜石石核(3292重量80g)・同(3293)・多孔石状の小穴を持つ石英閃緑岩台石(2042)・粗粒安山岩凹石(2043)・深鉢片(0183,84)が出土した。



033上-3292(1/1)



## (2) 旧石器試掘と保存範囲

【図p.178 PL.24】

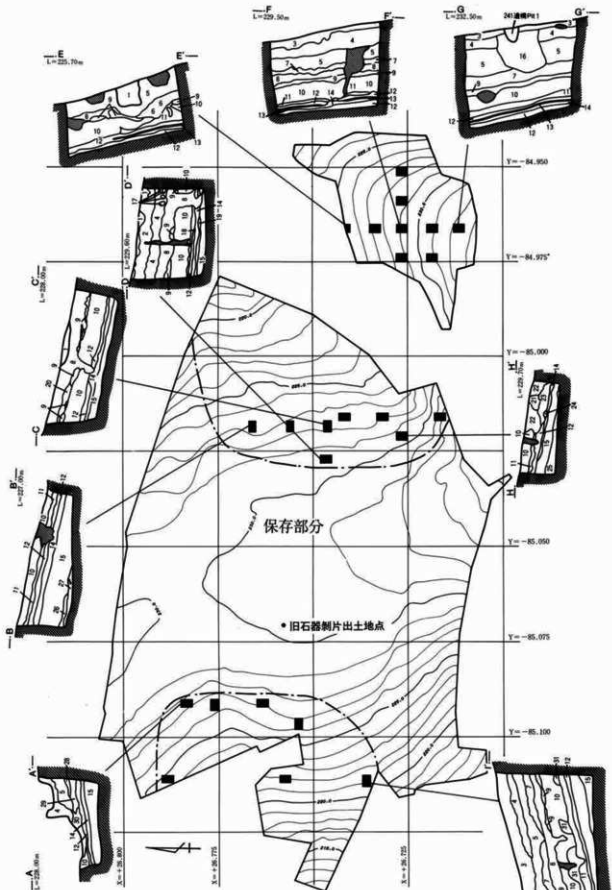
弥生時代集落保存のため第1次調査は中断されたが、保存を目的とした高速道路設計変更により、観音山地区では東尾根全体と中央尾根のトンネル開口部分は破壊せざるをえなくなった。破壊部分の面積は、合計約4,780㎡で調査面積全体の37%にあたる。

東西両側斜面の破壊予定部分で第2次調査を行った(次頁一点波線範囲)。そして、この第2次調査地では、旧石器の有無を確認する試掘を実施した。その配置は図に示したとおりで、2×3mの試掘坑を西斜面7カ所(2.9%)、東谷8カ所(2.3%)、東尾根9カ所(4.2%)の合計24箇所を設置した。中央尾根では縁辺部分を重点的な対象としたが、割合の最も低い東谷は、東側3分の1以上が谷底の黒色土の堆積地である。東尾根は傾斜が急のため、土層把握を含めた配置とした。

これらの調査の結果、全く旧石器は発見できなかった。しかし、調査終了後の整理時に、弥生竈穴からの出土遺物の中に旧石器があることが判明した。即ち、中央尾根上西側の071号遺構の上層(C-6G 図・印地点)より出土した、黒曜石加工痕ある刮片(330I p.131)である。

従って、保存された中央尾根上では、旧石器が他にも存在する可能性は考えられる。

なお、中央尾根上を中心とする保存部分の遺構ごとの保存状態については、資料編の遺構一覧表の保存欄に記した。これらの遺構は、最終調査面に砂を撒き(厚約5cm)、その上に緑色の合成樹脂メッシュシートを敷き、最後に調査前地表面より少し高いレベルまで発掘廃土をかぶせた。その際、炭化材など遺構にかかわる資料だが長期保存に絶えられないものは、取り上げて残してはいない。



- |   |  |  |   |
|---|--|--|---|
| <p>1. 耕作土・擾乱</p> <p>2. 黄褐粘質粒細砂小礫層土</p> <p>3. 黄褐粘質 YP 軽石中多</p> <p>4. 黄褐粘質 YP 軽石小</p> <p>5. 明黄褐粘質 YP 軽石小</p> <p>6. 暗灰黄 5 が汚れたローム礫層粘性土</p> <p>7. 暗灰黄砂質灰化粒包含</p> <p>8. オリーブ層軽石小</p> | <p>9. オリーブ層粒粗軽石大純層</p> <p>10. 橙 MP 軽石純層</p> <p>11. 灰白粒粗軽石小純層</p> <p>12. におい黄橙粘質 AT 軽石包含</p> <p>13. 黄褐粘質弱巾 1 cm の帯状</p> <p>14. 黄褐粘質分選状</p> <p>15. におい黄褐粘質鉄分砂粒包含</p> <p>16. 明黄褐粘強上層に YP・MP 少</p> | <p>17. 黄褐粘粗砂層 BP 軽石小礫層凝集</p> <p>18. 浅黄橙 MP 軽石小純層粒粗</p> <p>19. におい黄橙粘質粒細黒灰白粘質土塊</p> <p>20. におい黄褐泥粘細砂層白軽石小多</p> <p>21. 黄橙粘質 10 を中心塊状土</p> <p>22. 暗褐粘質 10 含礫凡土</p> <p>23. におい黄橙泥質 11 含礫凡土</p> <p>24. 黄粘質 14 含礫凡土</p> <p>25. 黄粘質粒細強鉄分砂粒小</p> | <p>26. 灰粘質黒粘細砂層</p> <p>27. 灰粘質 26 に小礫砂粒混</p> <p>28. 黄褐泥質粒細強 MP 軽石</p> <p>29. 浅黄橙泥質粒細無中位鉄分層 1 cm</p> <p>30. 黄褐泥質粒細層 4 に 29 の泥混</p> <p>31. 明黄褐泥質粒細無</p> |
|---|--|--|---|

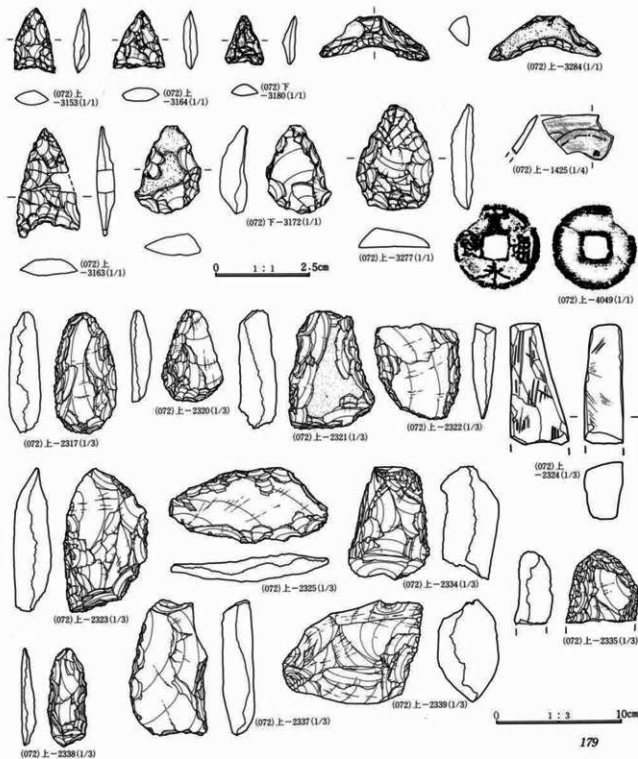
0 1 : 1000 50m

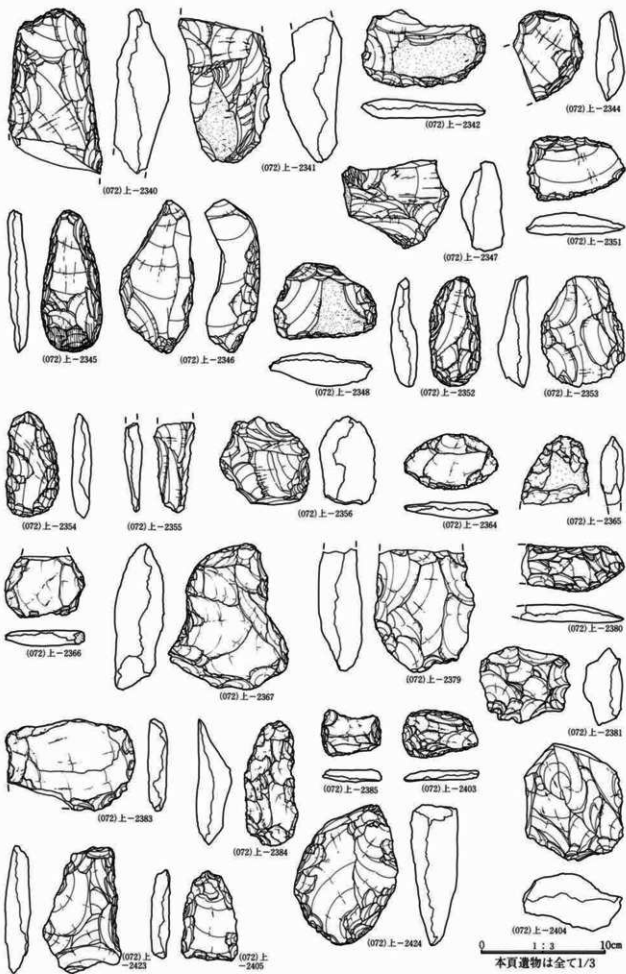
## (3) グリッド出土遺物

【図p.179~191 PL.190~201】

報告は、黒曜石石器製品は全点、その他の石器は重要な資料を、土器・金属器は一部にとどめる。

東谷支谷(072号)出土遺物 【黒曜石石器】打製石鏃(3163)は分析。3284は異形石器。【土器類】1425は瀬戸美濃青磁片。【その他石器】圧倒的に硬質泥岩製品が多く、特に打製石斧とこれにかかわる石核・剥片が見られる。また刮器(2322,23,48,64)・掻器(2346,2501)・礮器(2424,2500)も見られる。他石材では、珪質頁岩打製石斧(2338,85,2403,23)・同刮器(2366,2506)・細粒安山岩打製石斧(2345)・緑色片岩打製石斧(2383)・黒色安山岩石核と剥片(2355,2507)も見られた。2336と2382は緑色片岩の不明石製品。

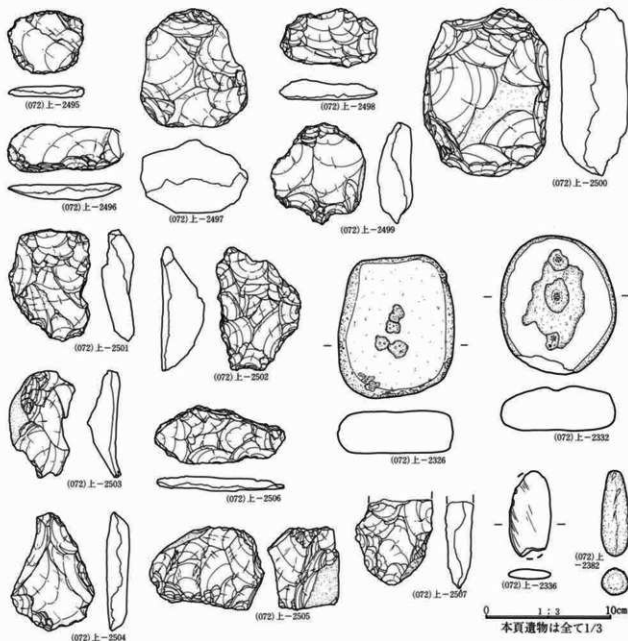




本頁遺物は全て1/3



1 観音山地区



その他グリッド出土遺物

【土器類】1426は弥生壺のボタン状貼付部。1445は志野鉄絵小皿片で出土陶磁器では最古の17世紀のもの。

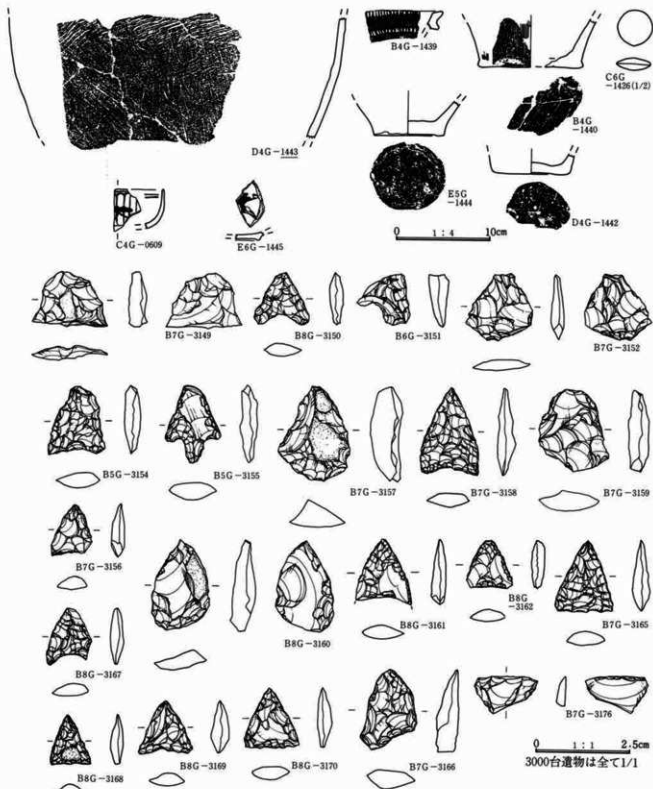
【黒曜石器類】打製石鏃が多いが、未製品(3157, 59, 60, 73, 3215, 16, 28)とやや特定しがたいもの(3149, 74)も含まれる。石鏃は他に玉鏃(3166, 3274)・珪質頁岩(3268, 75)・黒色頁岩(3272)・チャート(3269, 73)・黒色安山岩(3271, 3857)また珪質準片岩磨製石鏃(3276)がある。黒曜石では他に削器(3176, 3211, 12)・石鏃(3221, 23, 30)・石核(3286, 3783)・石匙(3288)が、チャートでは削器(3866, 67)と石匙(3868)がある。

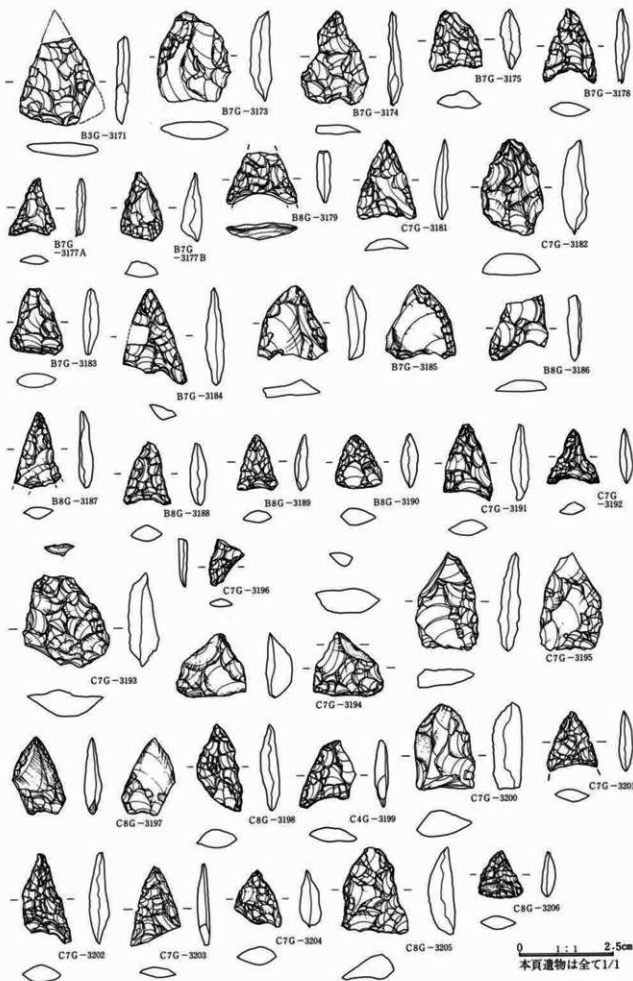
【その他石器】硬質泥岩製品の打製石斧及び石核・剥片が多い。同石材では削器(2161, 2375, 78, 93, 2401, 02, 08, 34, 36, 52, 61, 62)・搔器(2316, 60, 62, 91, 2437, 2444, 76)・礮器(2160, 2439, 50)も見られる。他石材では、珪質頁岩が打製石斧(2328, 50, 76, 2421, 60)、頁岩打製石斧(2422, 68)・凝灰岩珪質頁岩打製石斧(2487)・黒色頁岩石匙(2512A)・粗粒安山岩打製石斧(2387, 2459)・同凹石(2386, 2481)・黒色安山岩が打製石斧(2469)・削器(2474)・石匙(2511, 2512B)・異形石器(2515)・角閃石安山岩打製石斧 (P.182へ)

## II 検出遺構と遺物

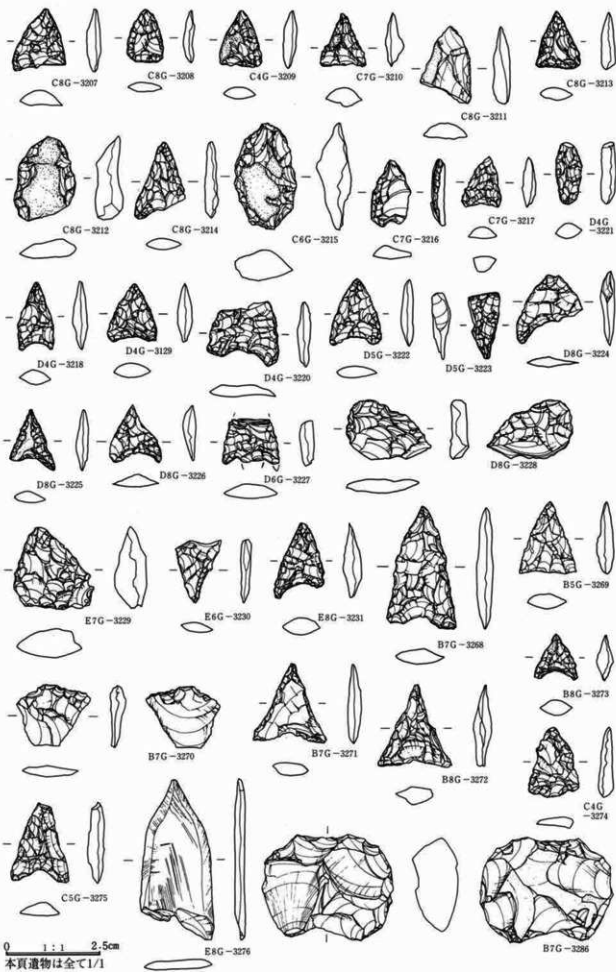
(P.181より) (2486)、緑色片岩が打製石斧(2425,57)・削器(2406,65)・磨製石斧(2368)・独鈷石(2482)・砥石(2449)・凹石類(2370,72,2426,27,54)・石皿(2519)・珪質準片岩打製石斧(2416)・変質玄武岩磨製石斧(2435)・変質緑岩凹石(2358)・砂岩磨り石(2333)も見られた。2508と2514は滑石製品。

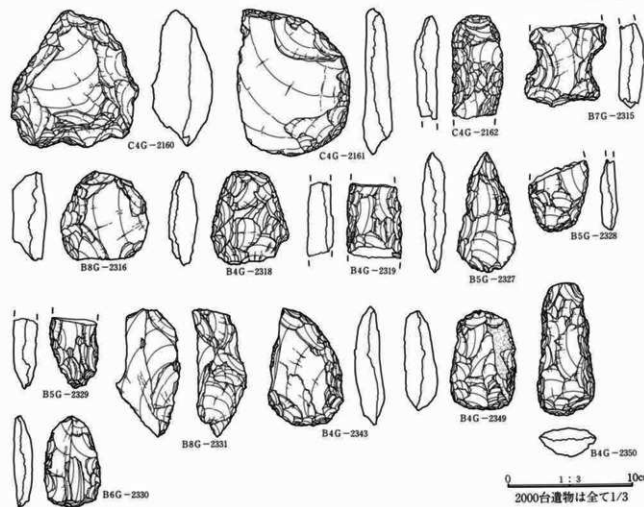
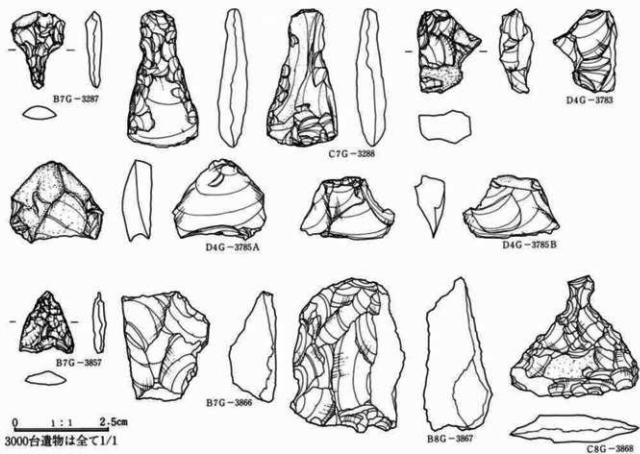
【金属製品】銅銭以外の銅製品は、4060と4062。

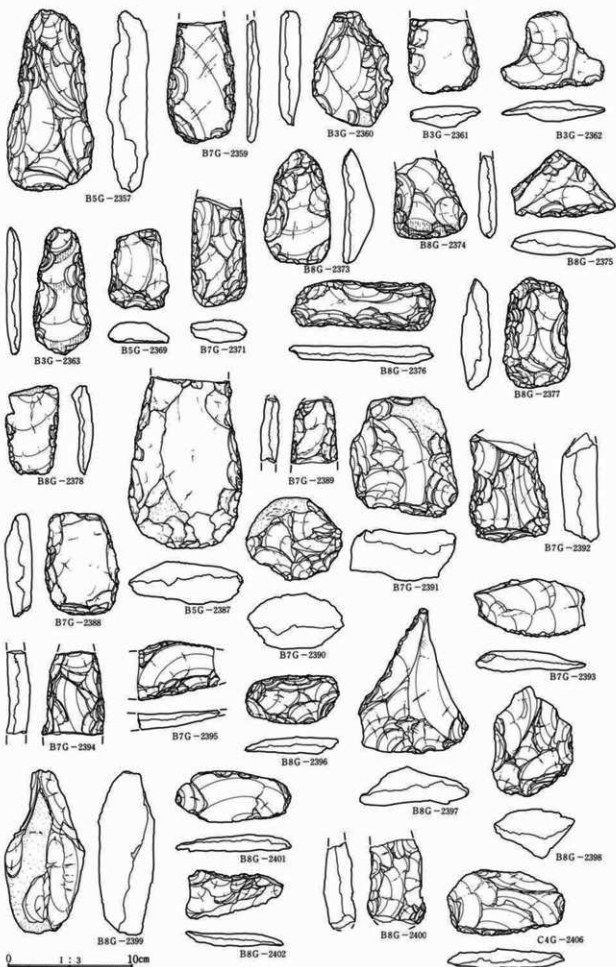




0 1 2.5cm  
 本頁遺物は全て1/1

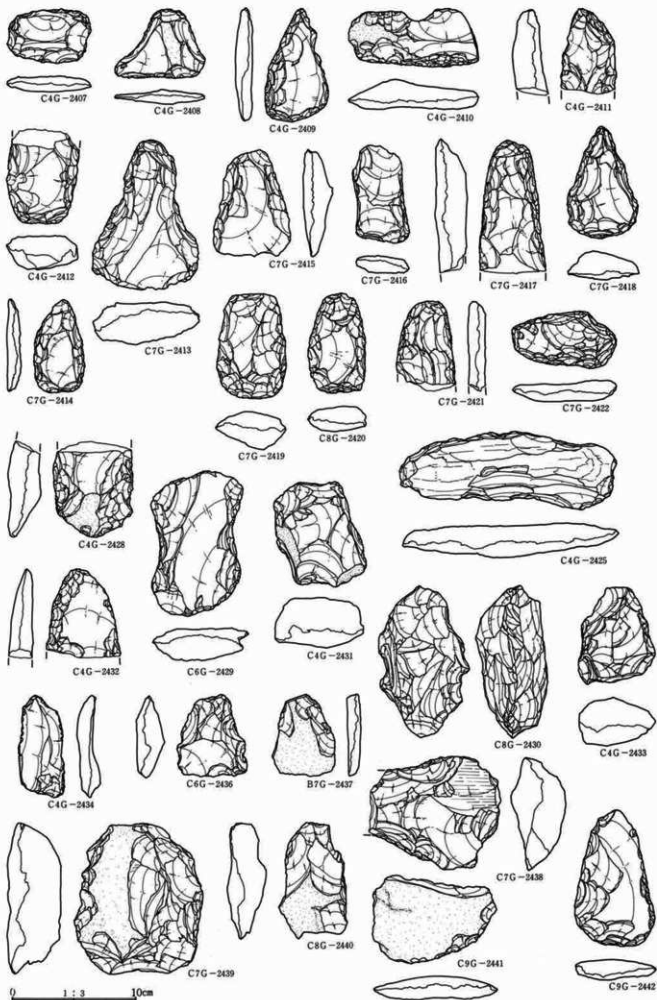




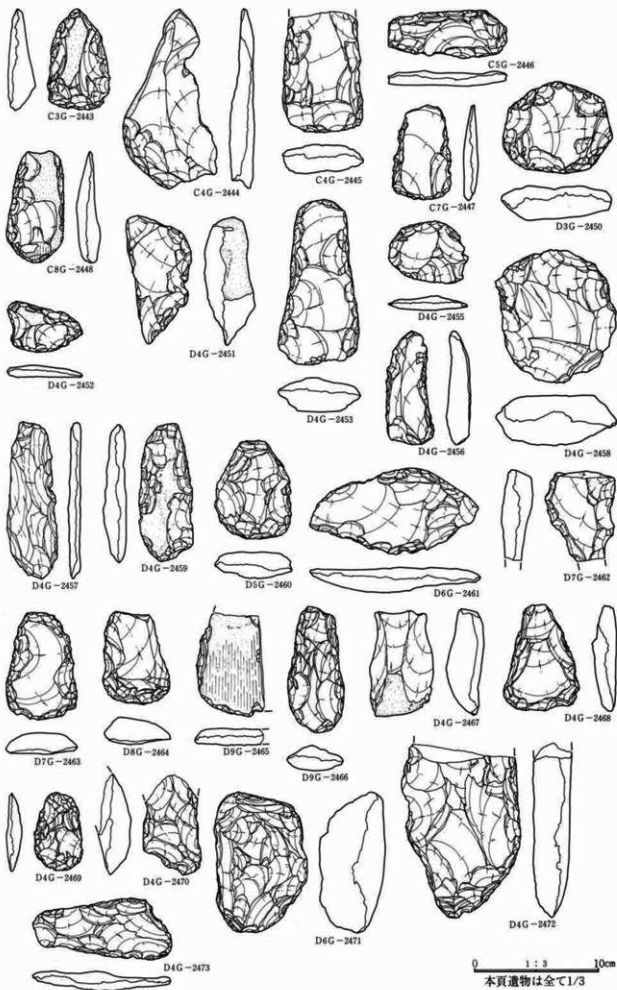


0 1 2 3 10cm

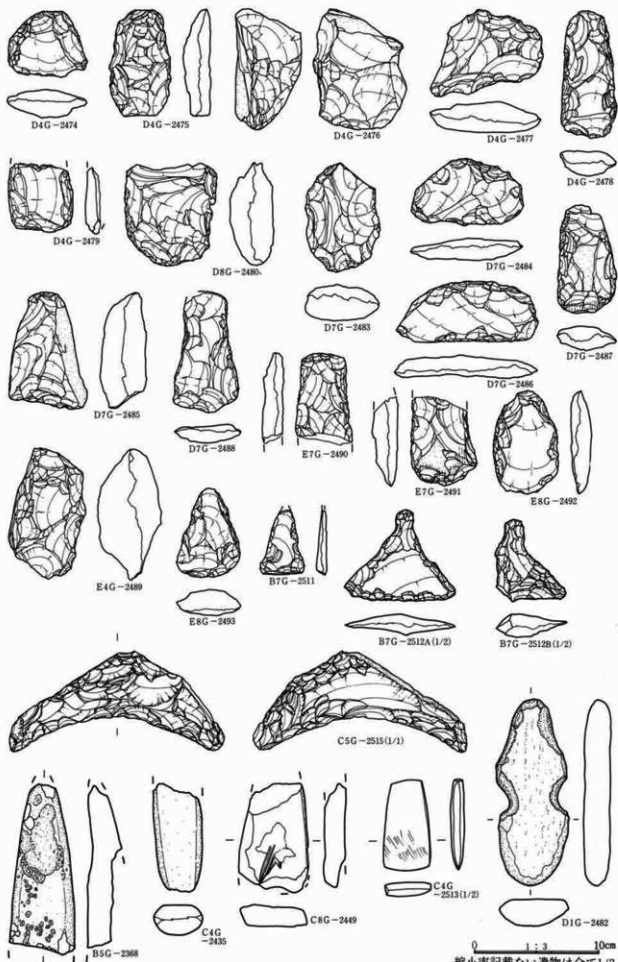
本頁遺物は全て1/3



本頁遺物は全て1/3



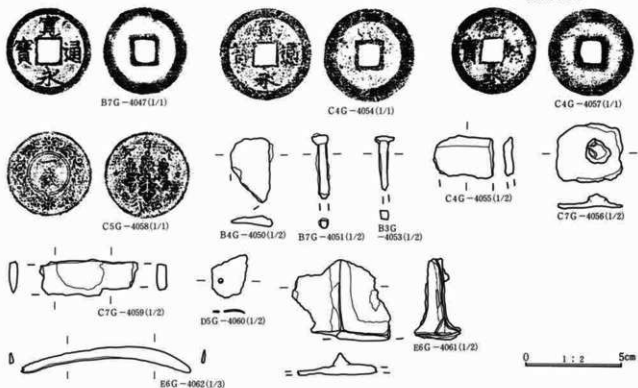




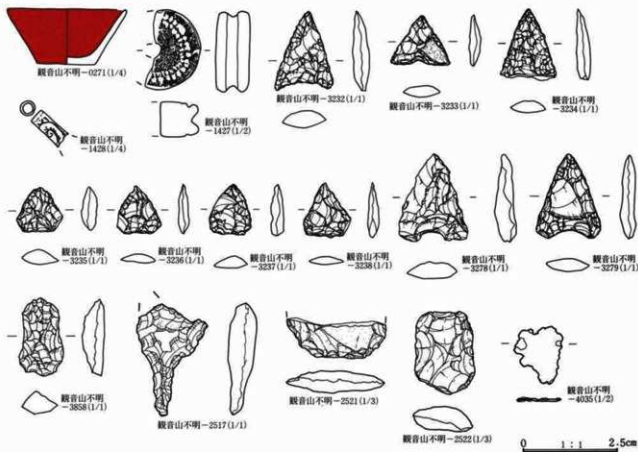
0      1 : 3      10cm  
 縮小率記載ない遺物は全て1/3



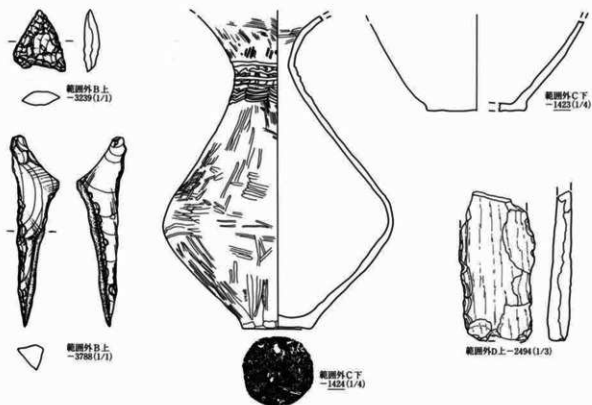
1 観音山地区



出土位置不明遺物 刺突文紡錘車(1427)・染付磁器鏡子片(1428)・チャート石鏃(3278)・珪質頁岩石鏃(3279)・同石鏃(2517)・黒曜石搔器(3858)が目立つ。



## II 検出遺構と遺物



### (4) 発掘範囲外採集遺物

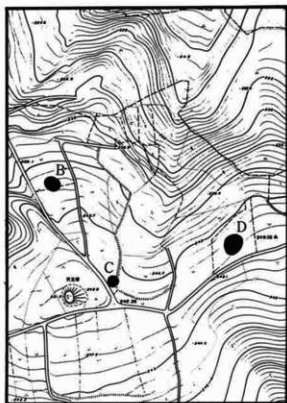
【図p.192 PL.189,190】

発掘調査した範囲の外で、周辺での遺跡の広がり状態を検討するために、遺物の表面採集を行った。採集地点は北側1ヵ所(A地点、P.11図XI・XIIトレンチ附近)、南側3ヵ所(B-C地点)である。

B地点では黒曜石石鏃(3239)・石鏃(3788)が見られ、C地点では沈線文壺(1424)と無文壺(1423)、そしてD地点で雲母石英片岩打製石斧(2494)が出た。

C地点は畚の開墾で断面が現れていたため、竪穴住居であることは採集時点で判明していた。これは、本調査では検出しなかった弥生中期の竪穴である。

またその後の富岡市による範囲確認試掘調査によれば、B地点付近で尾根を切る弥生後期の環濠が、D地点では弥生中期の竪穴群が発見されている。



## 2 庚申山地区

### (1) 竪穴類・その他の遺構

庚申山地区は調査面積3,300㎡で、南西から北東に延びる急峻な尾根である。鍋川低地に直接面する北西斜面はほとんど崖に近い傾斜(平均傾斜32度)であり、ジョーコーヤツの支谷側の南東斜面も観音山地区に比べはるかに急な勾配(平均傾斜20度)である。両者の間に挟まれた尾根上は極めて狭く、最も広い部分でも15m以下の幅しかない。

この南東斜面の海拔212mから上の部分と尾根上で、弥生時代と古代を中心とする遺構群を検出した。各部分での時代種類別の遺構の検出状況は、次のとおりである(種類が断定できないものも含める)。

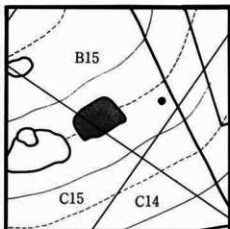
		南東斜面	尾根上	合計
近世	石組列	0	1	1
古代	竪穴	5	0	5
	建物	2	0	2
	斜面石組	2	0	2
	土坑	2	1	3
古墳	柱穴	0	1	1
弥生	竪穴	6	3	9
	土坑	1	0	1
縄文	埋藏	3	0	3
	土坑	7	3	10
不明	土坑	5	4	9
	溝	3	1	4
	柱穴	0	3	3

上記のように南東斜面と尾根上に地形形状は分かれるが、尾根上は極めて狭く遺構数も多くないため、以下両者の区分に、こたわらず原則として東方向から西方向へのグリッド順で、検出した遺構群を出土遺物と共に報告する。

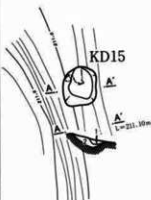
なお、調査経過欄(第1章3節)で述べた本地区調査の特殊な経緯と地形的な制約によって、実際に発掘を行ったのは、次頁図に記したように高速道路用地全体よりはるかに狭い。また本地区は保存協議の対象にならず、調査終了後全て破壊されている。

土層説明中に記した「ゴンベイ岩」とは、離れ山丘陵で庚申山尾根以西に分布する地山に多数包含される泥岩系統の岩だが、本調査では正確な岩石分類の対象にはできなかった。





- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 暗褐色土塊小少中多            | 9. 暗褐色白バミス小黄褐色バミス小   |
| 2. 暗褐色土塊小木炭小            | 10. 暗褐色有白バミス中ゴンベイ岩中  |
| 3. 擾乱                   | 11. 黒褐色粘質土ゴンベイ岩大炭化物小 |
| 4. 黒褐色白バミス小             | 12. 黒褐色白バミス中         |
| 5. 黒褐色白バミス小             | 13. 黒褐色11に近似         |
| 6. 黒褐色5に近似              | 14. 暗褐色粘質土小塊大黄褐色バミス小 |
| 7. 黒褐色白バミス小黄褐色バミス       | 15. 暗褐色粘質土13に近似      |
| 8. 暗褐色白バミス黄褐色バミス小黒褐色土塊大 | 16. 暗褐色8に近似          |



### KT04・KD15号遺構 (BC-15G) 【図p.195 PL.202】

南東側急斜面で検出した遺構群。

KT04号は古代の石組遺構で斜面下位(勾配21度)で検出。同一位置で2m南西側に同様の遺構KT03号が並ぶ。

長方形の平坦部(5.6×0.8m)の中央山側にさらに小さな長方形(2.4×1.2m)が張り出している。両者の平

坦部は高低差がない。谷側には溝状の擾乱がある。山側は少し上面(0.8m)に浅い溝状部分(底幅1.0m)がとりまわっているが、これは崩落防止のためのテラスだろう。埋土中に自然礫が非規則的に散乱していたが、KT03号の例を考えると壁面に積まれていた可能性もある。

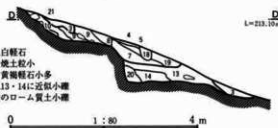
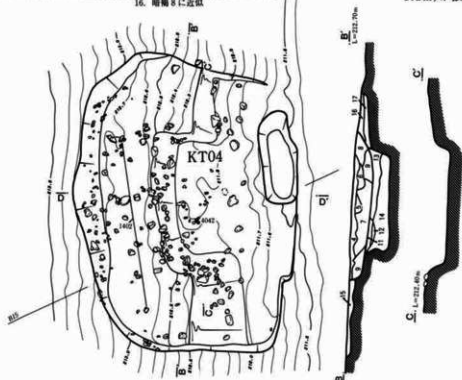
上層(3~12,15~19,21層)では弥生壺

(1402)があり、下層(13,14,20層)には鉄滓(4042重量17g PL.202)が残る。

燃焼施設や床面の状態として遺物より、住居とは考えにくい。形態類似よりKT03号と同じ古代の遺構と思われる。

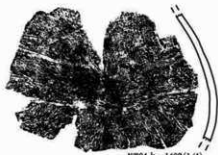
KD15号はKT04号から6m北東に離れた位置(勾配24度)の時期不明の楕円形小土坑。

埋土(1,2層)中には焼土と炭化物が含まれていた。



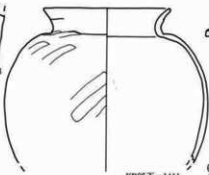
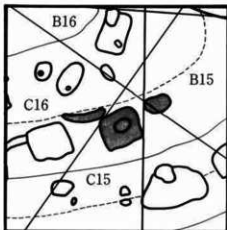
- |                      |
|----------------------|
| 17. 暗褐色粘質土白粒石        |
| 18. 黒炭化物中焼土粒小        |
| 19. 暗褐色粘質有黄褐色石小多     |
| 20. 暗褐色粘質土13・14に近似小塊 |
| 21. 明黄褐色地山のローム質土小塊   |

0 1:80 4m



KT04L-1402(1/4)

1. 埴輪線刻A軽石少
2. 黒ローム土粘性弱
3. 黒白軽石微少
4. 埴粘性弱白軽石微少
5. 黒陶白軽石炭化物粒小黄軽石小少
6. 黒陶粘性弱白軽石炭化物小少
7. 埴輪粘性弱白軽石炭化物焼土粒小
8. 埴輪7 灰
9. 埴輪7 ゴンベイ岩強大
10. 黒陶ゴンベイ岩小黒灰粘土粒微小
11. 埴輪8 似焼土粒炭化物多混中多
12. 埴輪9 似焼土粒炭化物多混中多
13. 埴輪粘性有焼土粒炭化物小少  
白軽石少
14. 埴輪粘土白軽石小多
15. 埴輪白軽石小多炭化物小少
16. 埴輪焼土粒小炭化物小
17. 埴輪炭化物焼土粒小白軽石小
18. 埴輪6 灰
19. におい黄陶層有白軽石小ゴンベイ岩中
20. におい黄陶6 似粘性強
21. 埴輪粘質土白軽石小少
22. 埴輪白軽石小多



KD05 F-1411 0 1 : 4 10cm



## KJ09・KD03・KD05・KM02号遺構(B-15,C-15,16G) 【図p.196 PL.202,203】

南東斜面中位で検出した遺構群。

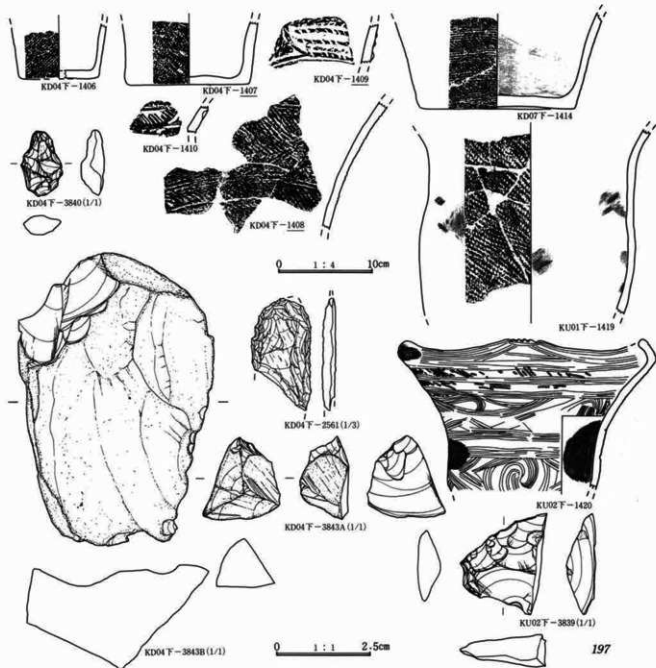
KD05号は古代(8世紀)の推定楕円形の土坑で、KJ09号を壊して形成(勾配15度)。やや扁平な河原石(長径20-30cm)を10個ほど上面を描いて並べている。埋土(5層)には炭化物も少量含まれるため、燃焼を行った可能性もある。須恵器坏蓋(1412)・土師器甕(1411)・鉄小片(4045)が出土。

KJ09号はテラスを持つ弥生(終末?)の長方形竪穴。中央でKD05号に壊される。山側に狭いテラスがあり、谷側は特に南西が削られている。浅い小ピットがいくつも検出したが、側柱穴的なもの2個(DH断面)以外は性格不明。また炉は確認できない。床面にいくつか炭化材が残っており、焼失したと考えられる。

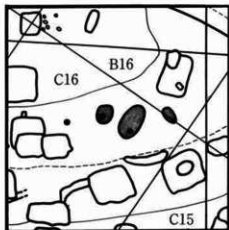
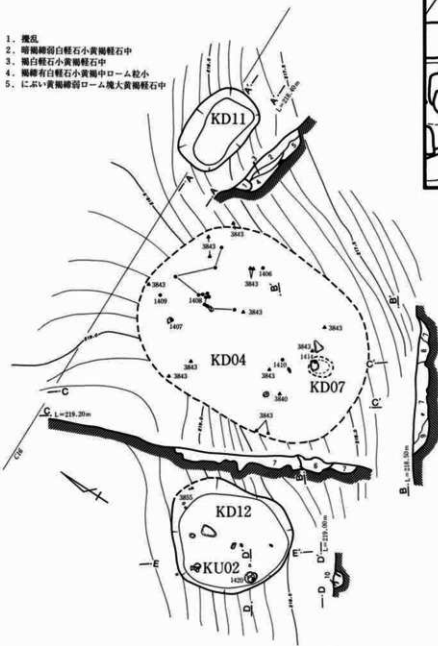
上層(3,4,6,7層)の縄文土器片(1413)の他は、下層(8-13層)に弥生土器小片が多いが、顕著な遺物はない。

KM02号は、KJ09号とKJ08号の間を水平に走る(勾配14度)時期不明の溝(5.5×0.8m)。性格不明。

KD03号は、KJ09号の北東側(勾配17度)で検出した不整形の弥生土坑。下層(2層)で弥生土器小片が多かった。



1. 検点
2. 暗褐色白軽石小黄陶軽石中
3. 黄白軽石小黄陶軽石中
4. 黒線有白軽石小黄陶中ローム粒小
5. 白い黄陶軽石ローム塊大黄陶軽石中



KD04・KD07・KD11・  
KD12・KU01・KU02号遺構  
(BC-16G)

【図p.197,198 PL.204,5】

南東斜面上位で確認した遺構群。

KD11号は時期不明の長方形土  
坑。

KD07号は縄文前期の埋変で、  
KD04号より新しい。深鉢底部  
(1414)のみ出土している。

KD04号は縄文前期の推定楕円形  
の土坑(勾配19度)。KD07号より古  
い。炭化物の混じった埋土下層(7  
~9層)より、深鉢類(1406~10)・  
黒曜石石錐(3840)・石核類  
(3843A,B重量102g)・雲母石英  
片岩打製石斧(2561)が出土した。

KU02号は縄文前期の埋変で、KD12号より  
新しい。深鉢口縁(1420)・黒曜石石錐未製品  
(3839)が出土。

KD12号は縄文前期の不整形の土坑で(勾配  
20度)、KU02号より古い。上層(11,14~16層)  
より黒曜石刺片(3855)出土。

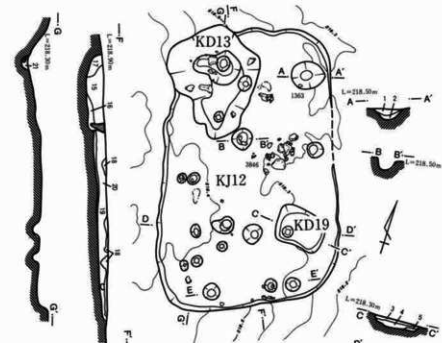
KU01号は縄文前期の埋変で、単独配置。  
深鉢胴部(1419)が出土。

3個の埋変は、ほぼ等間隔(4.2m)で並ん  
でいる。重複する土坑は当初は堅穴の可能性  
を考えて調査したが、はっきり裏付ける資料  
は検出できなかった。

6. 不明
7. 暗褐色白軽石小炭化物小
8. 黒白軽石小多炭化物小多
9. 黒ローム塊と黒土塊
10. 黒陶破片
11. 縄
12. 黒線有暗褐色白軽石小少
13. 黒線有白軽石小多
14. 暗褐色有白軽石小有
15. 黒線有白軽石小
16. 暗褐色有白軽石小



0 1:80 4m

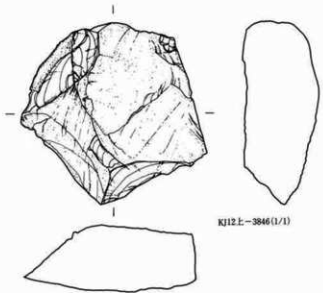


1. にぶい黄褐色軽石多
2. 黒ローム土
3. 黒白軽石小多灰土粒少
4. にぶい黄褐色軽石ローム粒少  
灰化物極少
5. 4気泡性弱
6. 暗黒白軽石黄褐色軽石小灰化物少
7. 暗褐色白軽石小多灰化物少
8. 黄褐色有黒土白軽石小多
9. 攪乱
10. 黒白軽石小黄褐色軽石少
11. 黒粘質土白軽石10比少

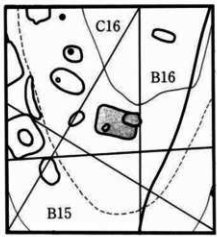
12. 黒10級細強
13. 黒10級細弱
14. 黒粘質土白軽石少
15. 暗黒黒褐色塊黄褐色塊
16. 暗褐色白粘土塊ローム粒粒混
17. 黒ローム土締弱
18. 暗黒白軽石小
19. 黒白軽石小少水灰少
20. 暗褐色ローム粒少
21. 暗褐色白軽石黄褐色軽石小少ローム少



KJ12下-1363 (1/4)



KJ12上-3846 (1/1)



**KJ12・KD13・KD19  
号遺構(B-16G)**

【図p.199 PL.206】

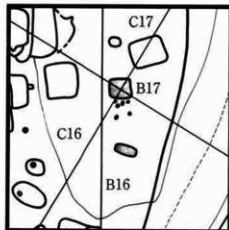
尾根上北東端で検出した遺構群。

KD13号は、古代の不整形の土坑で、KJ12号より新しい。埋土(15～17層)より土師器小片が出土。

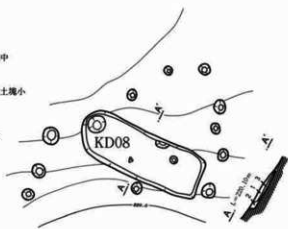
KD19号は、時期不明の小長方形の土坑で、KJ12号より新しい。

KJ12号は、弥生の隅丸方形の堅穴で、KD13・KD19号より古い。北東側は削平が激しく、壁は残っていない。柱穴状のピットはいくつも検出したが、必ずしも規則的な配列ではなく、主柱穴は不明。北辺の柱穴間に焼土があり、炉跡と考えられる。

上層(1,18層)から黒曜石石核(3846 42g)、下層(2,6-14,19,20層)から縄文鉢片(1363)が見られたが、重量的には弥生土器小片の量が最も多い。



1. 黒白粘土塊小少
2. 粘粘性有白粘土塊中
3. 灰黒白粘土塊強
4. 暗褐色土塊小少
5. 暗褐色土塊小黄粒土塊小
6. 暗褐色
7. にぶい黒粘土
8. 暗褐色粘粘性有  
焼土炭化物含中多



### KJ01・KJ16・KD08号遺構

(BC-16,17G) 【図p.200 PL.207】

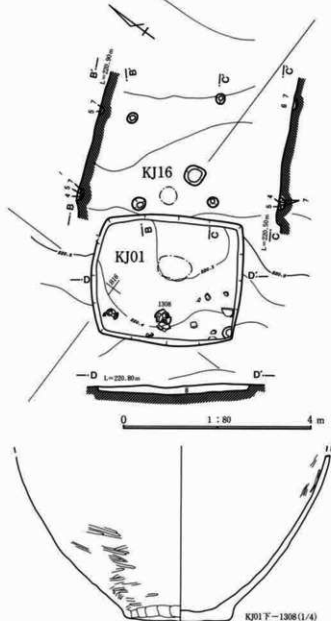
尾根上の中央で確認した遺構群。

KJ01号は弥生後期(終末?)の長方形の堅穴で、北東側でKJ16号を壊す。上面はすでに大きく削平されており、壁の残りは僅かで、床もあまり明瞭ではない。南隅で柱穴を1個確認した。中央に焼土があり、一応炉と考えたが、掘り込みは見られない。焼土が他の部分でも散っており、焼失した可能性がある。

南東壁近くに遺物が残り、壺底部(1308)が顕著なものである。

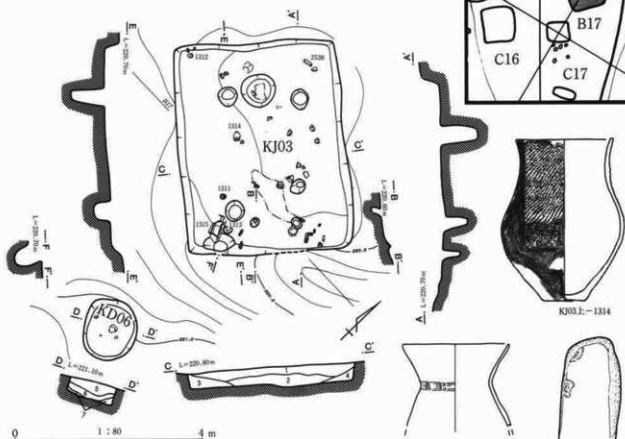
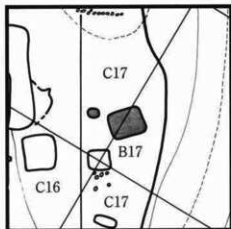
KJ16号はKJ01号に切られる推定弥生時代の堅穴。削平が激しく、壁は全く確認できなかった。浅い4個の台形状に並ぶピットを確認し、その南東辺内側で焼土を検出した。それらを柱穴と炉の跡と推定した。遺物は検出していない。

KD08号は時期不明の長方形土坑(2.7×0.9m)。南北方向に主軸を持つ。掘土中には粘土が多く入っていた。内部と周辺に多くのピットがあるが、関係は不明。



KJ01 F-1308 (1/4)

1. 黄褐色粘性弱白細粒少少焼土粒少少
2. 黄褐色粘性1比有炭化物中多
3. 黄褐色粘性2比有粘土多
4. 黄褐色強
5. にぶい黄褐色粘性強白粗石粒少少  
木炭黄粒少少
6. にぶい黄褐色粘性強白粘土塊中少
7. 黄褐色粘性強白粘土塊中少



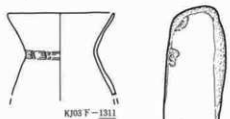
### KJ03・KD06号遺構(BC-17G) 【図p.201 PL.208】

尾根上の中央で検出した遺構群。

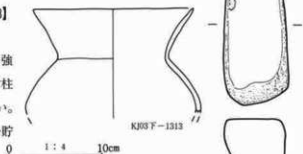
KJ03号は弥生後期(7期)の小型竪穴。北西側は2m強で崖に至る。隅の明瞭な長方形をしており、4個の丸材柱穴が台形状に並ぶ。北西辺の2個は深いが、南東辺は浅い。北西辺の中間に枺があり、南隅には外側へ少し潜り込む貯蔵穴を確認した。中央南側の床を中心に、炭化材が残っており、焼失している(樹種同定対象外)。

上層(1,2層)からは小型甕(1314)が、下層(3,4層)から壺類(1311, 13, 15)・小型鉢(1312)・粗粒安山岩磨石(2538)が出土した。

KD06号は時期不明の円形土坑で、性格不明。埋土下層(6,7層)に粘土が見られた。

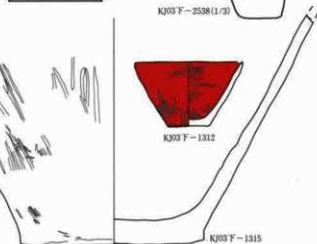


KJ03 F-1311



KJ03 F-1313

KJ03 F-2538 (1/3)

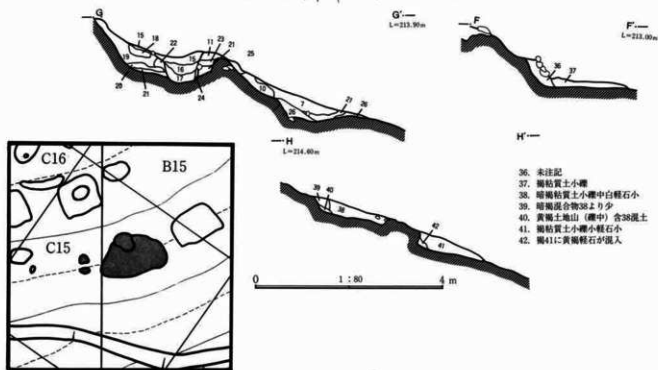


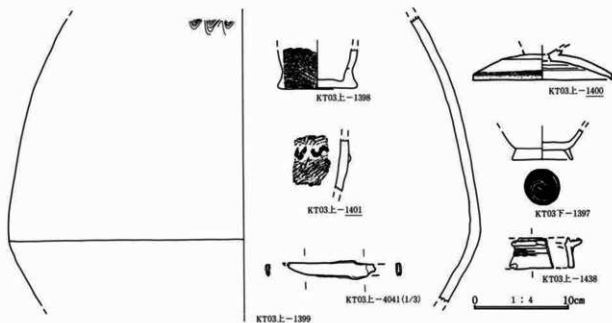
KJ03 F-1312

KJ03 F-1315

1. 暗褐色粘石粒少少焼土塊少少  
ゴンベイ岩中微少
2. オリブ暗粘性弱ゴンベイ岩中
3. 暗褐色に似る
4. 暗粘性弱粘石小
5. 暗粘石小青灰粘石小ゴンベイ岩中

6. 雑草
7. 暗褐色粘石小黄褐色粘石小
8. 9に小礫加
9. 黒褐色粘石小焼土粒小微少
10. 暗褐色粘石粒少少焼土粒小
11. 黒粘石小少少焼土粒小
12. 暗褐色粘土粘石小
13. 暗褐色粘土地山の角礫大
14. 黒粘11に粘石粒食
15. 深い黄褐色ローム質小礫中
16. 黒粘11・19黒土混
17. 暗褐色粘土3に近似
18. 暗褐色粘土粘石小
19. 暗褐色粘土塊中の堆積
20. 黒粘19に近似塊中
21. 暗褐色粘土小礫中少
22. 黒土塊
23. 暗褐色粘土有灰褐色粘石小黄褐色粘石小
24. 23の二次堆積土
25. 暗褐色粘土23に近似粘石より弱
26. 暗褐色粘土9に近似小礫(河原石)大
27. 暗褐色粘土弱小礫多
28. 暗褐色粘土(盛土)小礫中ゴンベイ岩中  
粘石小
29. 暗褐色粘土(盛土)粘石小少
30. 暗褐色粘土32に近似粘石小
31. 暗褐色粘土33に近似粘石小
32. 暗褐色粘石小
33. 暗褐色粘土粘石小
34. 暗褐色粘土ゴンベイ岩中黄褐色粘石小
35. 暗褐色粘土粘石小少





### KT03・KD16・KD17号遺構(C-15G) 【図p.202,203 PL.208,209】

南東斜面の下位急斜面(勾配20~23度)で検出した遺構群。

KT03号は古代(8世紀)の斜面石組遺構。山側で未命名の不整形土坑(15~21層)を壊している。

長方形(2.6×2.2m)の堅穴状の中心平坦部があり、その南西には僅かな高まりのある小平坦面(1.3×1.0m)が続く。そして山側全体には、半環状に溝型テラス(底幅0.3~0.6m)が取り囲んでいる。中心平坦部の3方の壁には礫が積まれ(高0.4m)、また溝型テラスの谷側法面にも同様の石積みが見られる。中心平坦部の谷寄りの中央には1個のピット(深約0.25m)が掘られ、床面には小礫が敷かれていた可能性がある。この部分の掘り方(9層)には僅かに焼土が含まれていた。

築造にあたっては、掘り方(3~5.9, 13, 22~24, 27, 29, 32, 33, 36, 37層)までの掘り込みがなされた後に、石を積み、小礫を敷いている。

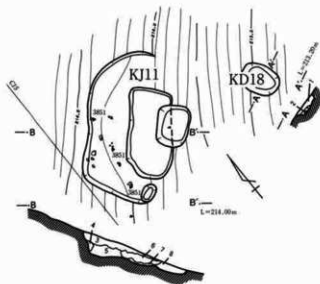
遺物は少なく、上層(1.6, 7, 14, 25層)より浮線文縄文土器片(1401)・須恵器坏蓋(1400)・同短頸壺蓋?(1438)・鉄刀子(4041)があり、下層(2, 8, 10~12, 26, 28, 30, 31, 34, 35層)より須恵器瓶(1397)が出土した。弥生大型壺(1399)は厳密にはこの遺構のものではなく、縄文鉢底部(1398)も未命名土坑の遺物である。

この遺構は、北東側に2mの距離で並ぶKT04号と同一の性格を持つもので、燃焼施設や床面がなく高床も考えにくいことから居住施設ではない。溝型テラスや石積みは、上屋の下部構造ではなく崩落防止施設と考えるのが自然である。そのような、かなりの労力をかけてまで、異常な急斜面にわざわざ立地している。ここで見られたピットの性格も上屋の柱穴とは考えにくい。

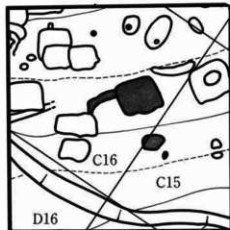
また崩落防止施設を設けたことから、築造後埋められたのではなく、開口状態で使われたと考えられる。出土遺物がはたして使用時の状態を示すかは、判断できない。

それらの点以外に性格を推定する材料は、現状では乏しい。

KD16号とKD17号は、共に時期不明の不整形土坑。急斜面(勾配23度)に立地。遺物は出土していない。



1. 暗緑強白軽石粒小少
2. にぶい暗緑強白軽石粒小少
3. 暗緑強白軽石小
4. 暗緑強白軽石小
5. 暗緑強白軽石焼土塊小少木炭粒小少
6. 暗緑強白軽石焼土塊小木炭粒黄褐土塊小
7. 暗緑強白軽石焼土塊小多黄褐土塊小多
8. 暗緑強白軽石

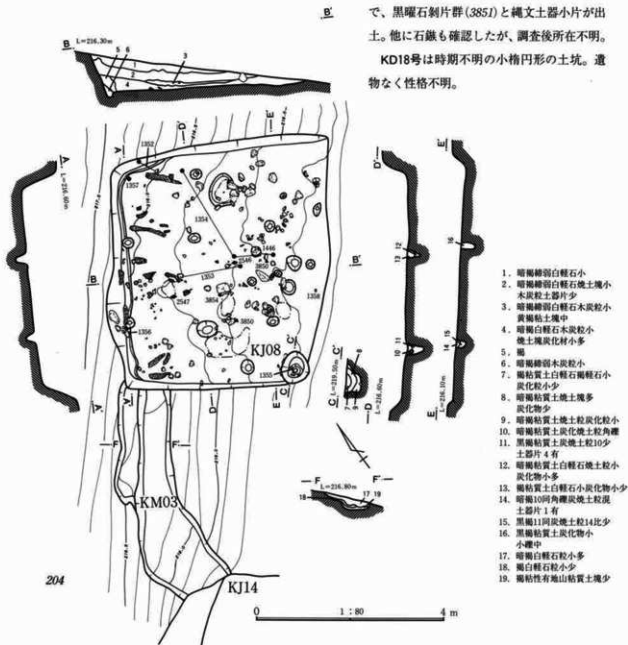


### KJ11・KD18号遺構(C-15G)

【図p.204 PL.210】

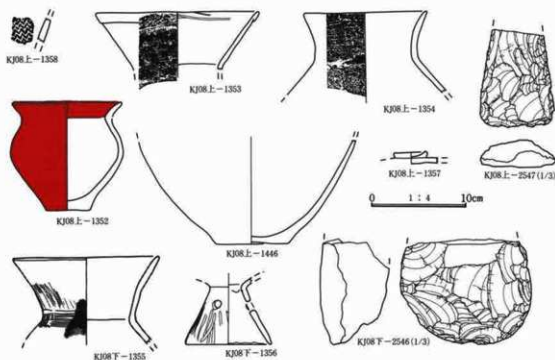
南東斜面下位(勾配22度)で確認した土坑群。

KJ11号は、大小3個の形態の異なる掘り込みが重なった不整形の縄文土坑。相互の関係は的確には把握できなかった。下層(4~8層)の中で、山側部分(5~7層)には焼土・炭化物が含まれている。遺物は山側の上層(3層)で、黒曜石剥片群(385I)と縄文土器小片が出土。他に石鏃も確認したが、調査後所在不明。KD18号は時期不明の小楕円形の土坑。遺物なく性格不明。



1. 暗緑弱白軽石小
2. 暗緑弱白軽石焼土塊小木炭粒土器片少
3. 暗緑弱白軽石木炭粒小黄褐土塊中
4. 暗弱白軽石木炭粒小焼土塊炭化物少
5. 燧
6. 暗緑弱白木炭粒小
7. 暗緑弱白軽石木炭粒小炭化物少
8. 暗弱粘質土塊多炭化物少
9. 暗弱粘質土塊土粒炭化物小
10. 暗弱粘質土塊炭化物角礫
11. 黒弱粘質土塊土粒10少土器片4有
12. 暗弱粘質土塊白軽石焼土塊小炭化物小多
13. 暗弱粘質土塊白軽石小炭化物小少
14. 暗弱10度角礫炭塊土粒混土器片1有
15. 暗弱粘質土塊14比少
16. 黒弱粘質土塊炭化物小小礫中
17. 暗弱白軽石粒小多
18. 黒白軽石粒小少
19. 暗弱粘質有地山粘質土塊少





KJ08・KM03号遺構(C-16G) 【図p.204,205 PL.210】

南東斜面中位(勾配14~16度)で検出した遺構群。

KJ08号は、弥生終末期の正方形に近い竪穴。谷側は削られており、南西側ではKM03号と重なる。

小丸材の支柱穴4個が並び、北東辺外側に炉がある。支柱穴と同位置の山側壁際に2個の側柱穴があり、また谷側の南隅では貯蔵穴を検出。他にもいくつか浅いピットが球に見られる。山側壁際を中心に炭化材(樹種同定対象外)が残っており焼失している。炉の近くから炭化したトチノキ種子10個以上を検出した。

上層(1~3層)からは縄文押型文片(1358)・弥生壺類(1352~54, 1446)・須恵器坏蓋(1357)・硬質泥岩打製石斧(2547)が見られ、下層(4~16層)では壺(1355)・器台(1356)・硬質泥岩礫器(2546)が出土した。

KM03号は、時期不明の溝で、KJ08号及びKJ14号の間にかかるが重複関係は不明。

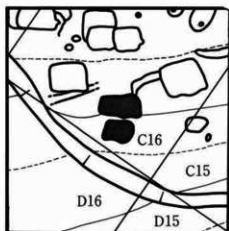
KJ14・KD14号遺構(C-16G) 【図p.206 PL.211】

南東斜面下位で検出した遺構群。

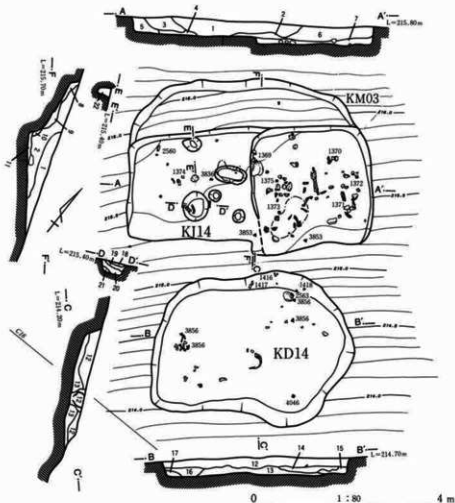
KJ14号は山側(勾配18度)に位置し、テラスを持つ弥生終末期の竪穴。北側でKM03号と重複し、谷側は削られていた。

床面は二つの部分に分かれ、後から築造された北東側(幅2.4m)は南西側(幅2.6m)より10cm低い。しかし、同時に使用されており、廃棄埋没に差がない。山側には弧状のテラス(最大幅0.8m)がある。南西側部分に炉・貯蔵穴そして1個の側柱穴があるが、北東側では何も検出されなかった。両部分共に炭化材(樹種同定対象外)が残っており、同時に焼失している。

上層(1,2,3,6層)からは土師器小型高坏(1369)・弥生器台(1370)・チャート石鏃(3836)・硬質泥岩打製石斧(2560)が見られ、破片総重量比は弥生72%・縄文7%・土師器10%・石器類11%である。下層(P.206へ)

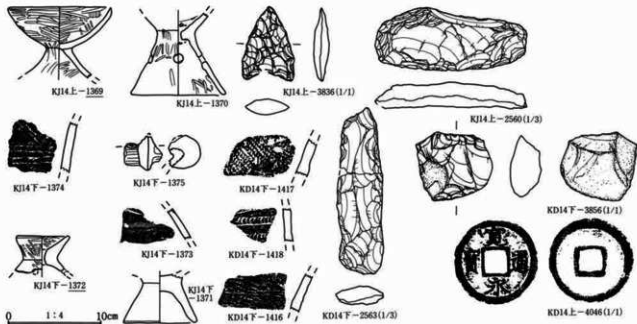


1. 黒褐色粘質土白軽石黄褐色石炭化物小
2. 黒褐色10級軽石粗少
3. 1と2中間層
4. 暗褐色粘質土白軽石小小礫中炭化物小
5. 暗褐色似ゴンベイ岩風
6. 暗褐色3似ローム質土塊中
7. 暗褐色粘質土白軽石小炭化物中
8. 黒褐色石層2比少
9. 黒褐色似灰褐色粘質土塊地山
10. 黒褐色粘質土白軽石小炭化物小
11. 黒褐色10級軽石少
12. 黄白軽石黄褐色粘質土炭化物小多
13. 黄白軽石黄褐色粘質土白軽石多
14. 12と13混土
15. 黄白粘質土ローム二次
16. 暗褐色粘質土塊土粒白軽石小
17. 黄白粘質土ローム質土白軽石多
18. 粘着性弱白軽石小少炭化物中多ローム少
19. 粘着性弱白軽石小少炭化物少ローム少
20. 粘着性弱白軽石小少黒軽石少ローム少
21. 粘着性弱白軽石小少
22. 粘着性弱白軽石小少

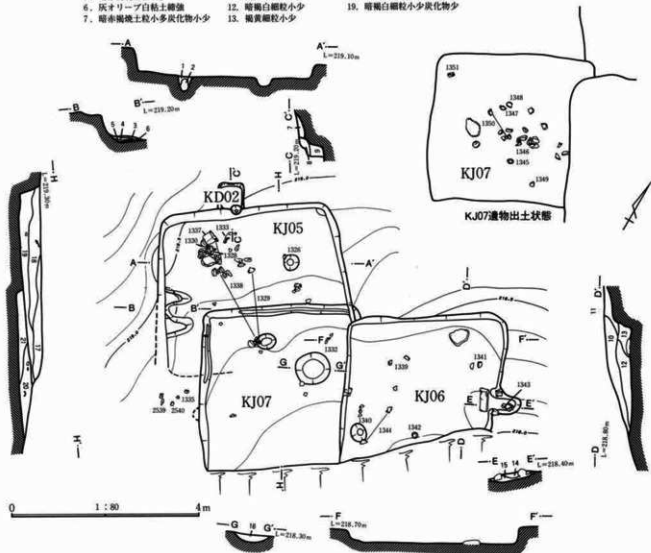


(P. 205より) (4.5.7~11, 18~22層)からは土師器壺上部(1371)・器台(1372)・弥生壺(1373)・縄文鉢片(1374, 75)が出土し、破片総重量比は弥生47%・縄文13%・土師器23%・石器類17%だった。

KD14号は谷側(勾配24度)に位置する縄文前期の不定形の埋土土坑。中央に埋土(遺構ながら調査後紛失)があり、その掘り方を形成している。上層(12層)では寛永通宝(4046)が、下層(13~17層)で鉢片(1416~18)・硬質泥岩打製石斧(2563)・黒曜石石核(3856)他が出土した。



- |                  |               |                 |             |
|------------------|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 暗褐色粘土質多       | 8. 暗赤褐輝強焼土粒小多 | 14. 暗赤褐輝有焼土粒中少  | 20. 暗黄白細粒小少 |
| 2. 灰白粘土質地山多      | 9. 稀暗褐輝強黄細粒小少 | 15. 暗褐輝有焼土粒小少   | 炭化物小少       |
| 3. 暗褐黄粒小少        | 焼土粒少          | 16. 灰褐炭粒粒石粒少    | 21. 暗褐黄粒小多  |
| 4. 暗赤褐黄粒小少焼土粒小多  | 10. 黒細黄細粒小多   | 17. 黒細黄白細粒小多    | 炭化物小少       |
| 5. 暗赤褐焼土粒小多      | 11. 暗黄白細粒小多   | 18. 暗褐白黄細粒小多    |             |
| 6. 灰オリブ白粘土質強     | 12. 暗褐白細粒小少   | 19. 暗褐白細粒小少炭化物少 |             |
| 7. 暗赤褐焼土粒小少炭化物小少 | 13. 暗黄細粒小少    |                 |             |



KJ05～07・KD02号遺構(C-16G) 【図p.207～209 PL.212～214】

南東斜面上位(勾配7度)で確認した遺構群。谷側は削られている。

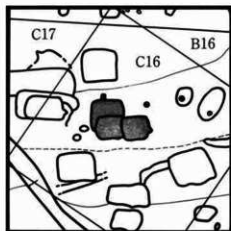
KJ06号は、古代(8世紀)の正方形に近い堅穴。南西側でKJ07号・KJ05号を壊す。

カマドは北東辺にあり、粗く切った3個の石(天井石は約40×15×10cm)を鳥居状に組んで焚き口部とする。南両側に浅いピットがあった他は、柱穴状の施設は不明。

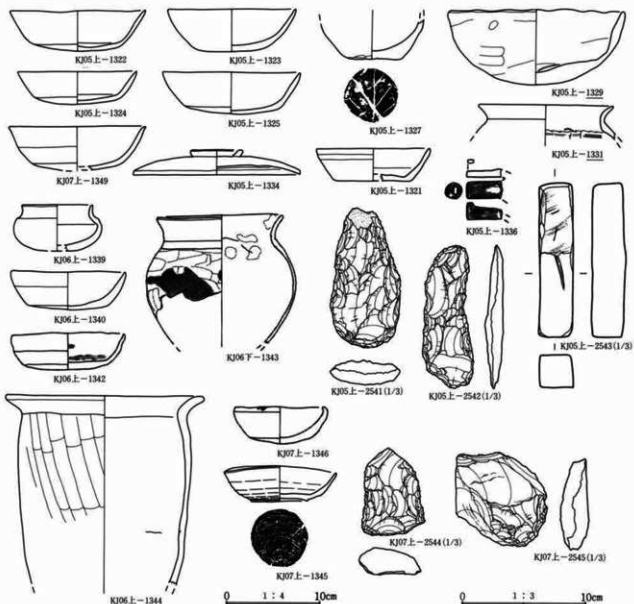
上層(10,11層)より土師器甕(1344)・坏(1340,42)・葉壺(1339)が、下層(12～15層)より土師器坏(1341)・台付甕(1343)が出土した。なお、山側の壁近くの床に、扁平な石があった。

KJ05号は、古代(8世紀)の正方形に近い堅穴。谷側でKJ07号、また山側でKD02号を壊すが、KJ06号に東側を削られる。

山側で2個の柱穴を検出したが、カマドの位置は不明で、KJ06号に壊されたと考えられる。南西壁際に粘土の堆積が見られたが性格は不明。(P.208～)



## II 検出遺構と遺物

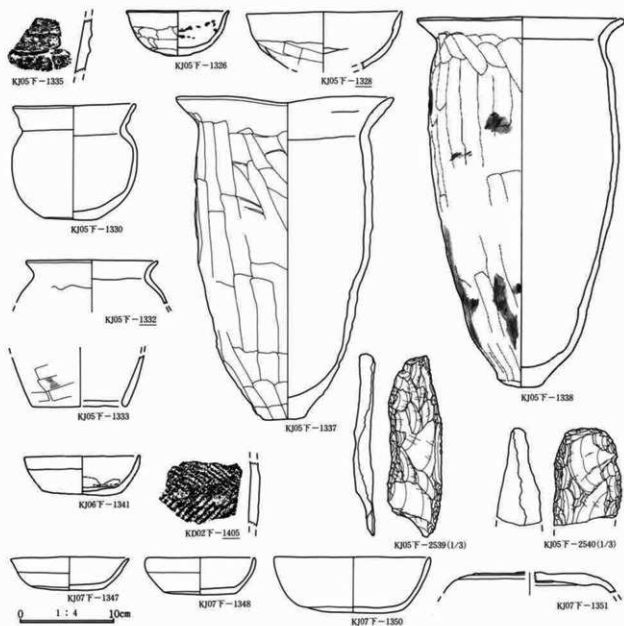


(P.207より) 上層(17,18)より土師器碗(1329)・須恵器坏(1321)・坏蓋(1334)・硬質泥岩打製石斧(2541)・珪質頁岩打製石斧(2542)・砥沢石砥石(2543)が、下層(1-6,19層)より土師器碗(1326,28)・小型壺(1330)・甑(1333)・甕類(1332,37,38)等が出土。なお、谷側でまとまって出土した縄文鉢片(1335)・硬質泥岩打製石斧(2539)・珪質頁岩打製石斧(2540)は、本来別の遺構のものだろう。

KJ07号は、古代(8世紀)の正方形に近い堅穴。KJ05号・KJ06号より古い。カマドは北東辺にあつたと思われる。中央や北よりで浅い皿状ピットが、また山側壁近くで1個の浅い柱状ピットを確認した。

上層(20層)より須恵器坏(1345)・土師器坏(1346,49)・硬質泥岩打製石斧(2544)・珪質頁岩打製石斧未性品(2545)が、下層(16,21層)より土師器坏(1347,48,50)・須恵器坏蓋(1351)が出土。

KD02号は、縄文時代の小方形土坑で、KJ05号に壊される。埋土(7-9層)には焼土が含まれている。下層(9層)より縄文鉢片(1405)が出土。



KJ10・KD10・22・23号遺構(C-16G) 【図p.210 PL.215,216】

南東斜面中位(勾配15~17度)で検出した遺構群。

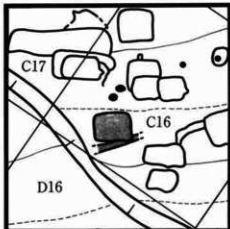
KJ10号は、弥生終末期と推定したテラスを持つ長方形の堅穴。谷側は削られ、KD22号と重なる。

小丸材の支柱穴が4個方形に並び、北東辺外側に炬がある。山側に狭いテラス(底幅最大20cm)山側と南西壁に欄柱穴、また谷側以外で周溝を検出した。山側を中心に炭化材(樹種同定対象外)が残り、焼失している。

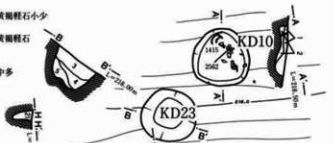
遺物は上層(15,16層)より土師器坏(1359)・土師質紡錘車(1360)・縄文鉢片(1361,62)・硬質泥岩石核(2548)、下層(6~12,17~21層)より黒曜石原石類(3842A,B A重量64g)が出土した。なお、上下層とも重量比は7割以上が弥生土器小片である。

KD22号は、時期不明の溝(上幅70cm深さ30cm強)。KJ10号と重なるが関係不明。他の溝KM02号・KM03号とはほぼ同一の高さにあり、走向も似ている。

KD10号とKD23号は縄文前期の土坑。前者より深鉢(1415)・硬質泥岩打製石斧(2562)が出土。



1. 黒濁粘質土白軽石小多黄緑軽石小少
2. 灰黄濁粘質土
3. 黒濁粘質土白軽石小多黄緑軽石小少  
少少ゴンベイ岩小少
4. 黒濁3に近似軽石混少
5. 暗濁粘質土ゴンベイ岩中多  
白軽石小少



KJ10上-1361



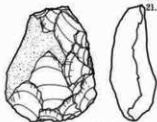
KJ10上-1362



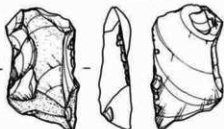
KJ10上-1359



KJ10上-1360(1/2)



KJ10上-2548(1/3)



KJ10下-3842B(1/1)

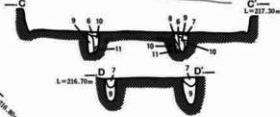


KJ10下-3842A(1/1)

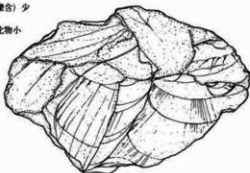


0 1:4 10cm  
1:3 10cm

6. 黒濁ゴンベイ岩微細粒  
少少木炭中少
7. 黒濁ゴンベイ岩小多木炭小  
多ゴンベイ岩小多
8. 黒濁ゴンベイ岩小少
9. 黒濁ゴンベイ岩小少
10. 9に同
11. 明黄濁ゴンベイ岩粒中を主
12. 暗濁粘質土ゴンベイ岩  
小焼土粒小炭化物小
13. 黒濁粘質土白軽石小焼土粒小  
炭化物小
14. ローム粘質土混
15. 暗濁粘質土白軽石小黄緑軽石小  
ゴンベイ岩中細中炭化物小
16. 黒濁粘質土15と同白軽石細粒多
17. 黒濁粘質土輝強白軽石小炭化物小  
焼土粒中ゴンベイ岩中少
18. 暗濁粘質土(流れ込)
19. 暗濁粘質土に近似輝強  
軽石類(ゴンベイ小礫含)少
20. 16にローム質土混混
21. 黒濁ゴンベイ岩中炭化物小



0 1:80 4m



KJ10下-3842A(1/1)



KD10下-1415

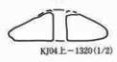
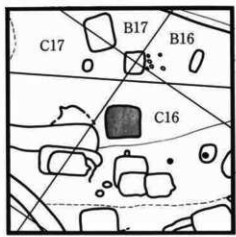
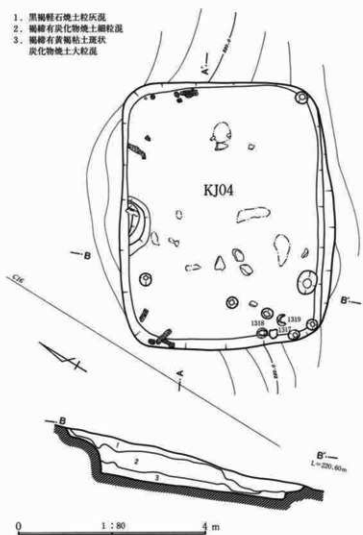


KD10下-2562(1/3)



KD10下-2562(1/3)

1. 黒褐色石焼土粒状面
2. 黒褐色炭化物焼土層状面
3. 黒褐色黄褐色粘土層状炭化物焼土大粒面



KJ04上-1320(1/2)

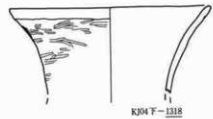


KJ04上-1316

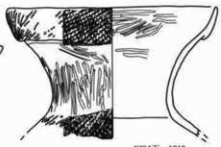


KJ04下-1317

0 1:4 10cm



KJ04下-1318



KJ04下-1319

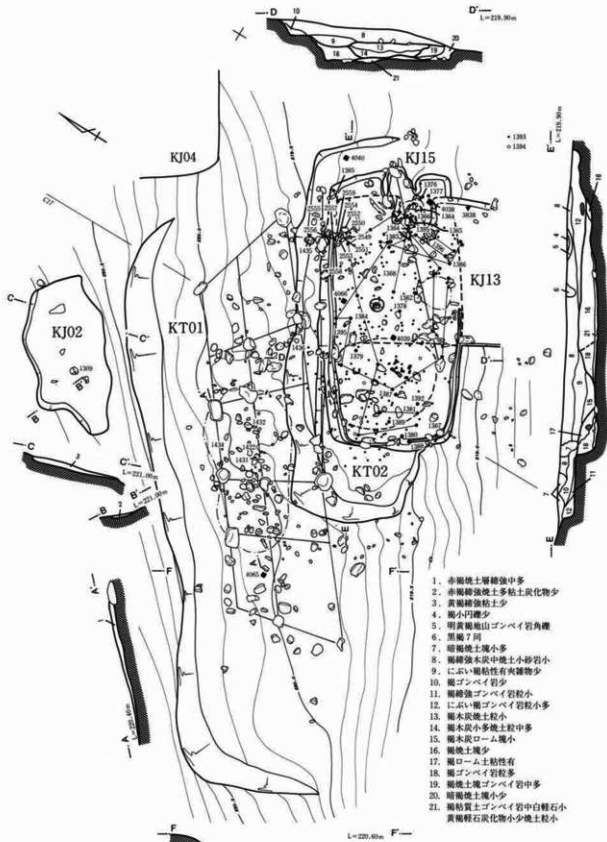
KJ04号遺構(C-16G)

【図p.211 PL.212,216】

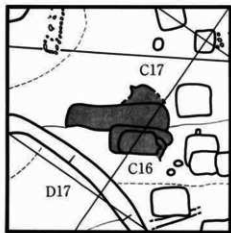
南東斜面最上位(勾配6度)で検出した弥生終末期の隅丸長方形の竪穴。

顕著な主柱穴は不明だが、側柱穴状のビットを谷側の両隅で検出した。また両長辺壁の南西側によったほぼ同じ位置に浅いビットがある。炉跡は北東側床に残っており、また山側壁際の中央には弧状に低く地山を掘り残した土堤状の部分があった。炭化材(樹種同定対象外)が残っており、焼失している。

上層(1,2層)からは土師器坏(1316)・弥生紡錘車(1320)が、下層(3層)からは小型高坏(1317)・壺類(1318,19)が出土した。



1. 赤褐色土層雜強中多
2. 赤褐色強焼土多粘土炭化物少
3. 黄褐色強粘土少
4. 堀小円礫少
5. 明黄褐色山ゴンベイ岩角礫
6. 黒燧7同
7. 暗褐色土塊中多
8. 暗褐色木炭中焼土小砂岩小
9. に近い粘粘性有夾雜物少
10. 堀ゴンベイ岩少
11. 暗褐色ゴンベイ岩粒小
12. に近い堀ゴンベイ岩粒中多
13. 堀木炭焼土粒小
14. 堀木炭小多焼土粒中多
15. 堀木炭ローム塊小
16. 暗褐色土塊少
17. 堀ローム土粘性有
18. 堀ゴンベイ岩粒多
19. 暗褐色土塊ゴンベイ岩中多
20. 暗褐色土塊少
21. 堀粘質土ゴンベイ岩中白粒石小  
黄褐色粘土炭化物少焼土粒小



0 1 : 80 4 m



## KT01・02・KJ02・13・15号遺構(C-16,17G) 【図p.212~215 PL.217~220】

南東斜面最上位(勾配6~12度)で検出した古代(8世紀)の遺構群。発掘時には時間を隔てて調査担当が替わったため、十分な遺構把握ができなかった。

KT01号は礎石建物で、南東側でKT02号を、北西側でKJ02号を壊している。緩斜面を広く平坦に造成し(約24×8m)、そこに礎石(長径0.3~4m)を並べている。調査時に検出した礎石は11個程度で、図のように2×5間で台形状に並んでいる。このままの形がそのまま建物の形状を示しているとは考えにくく、特に谷側を中心に大きく本来の位置から動いているだろう。それほどの移動はなく見える山側の3個の場合、芯々距離は1.3と1.4mである。なお造成地の中では南西側に空間が見られるが、はたしてこの部分まで建物が延びていなかったかは不明(調査時には建物としての認識がなかった)。

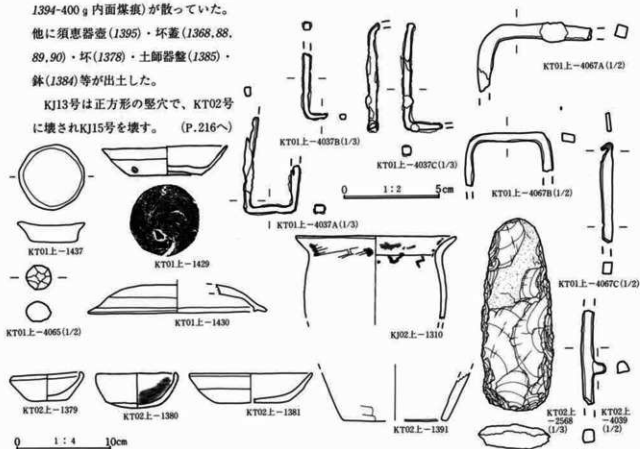
また山側3個の礎石を中心に広い範囲(3.4×1.9m)で焼土が散り、さらに谷側のKT02号の埋土上層(8層)にも焼土・炭化物が散っていた。そのため、この建物は焼失したと考えられる。確認面で鉛銃弾(4065 10g)・鉄金具類(4037, 67)・須恵器坏(1429)・坏蓋(1430)等が、下層(1層)で土師器坏(1422, 31, 32)・小埴(1436)・粗製小型高坏(1434)等が出土。

KT02号は礎石建物で、長方形(7.5×2.0m以上)の平坦造成地を形成。山側では約0.4mの上面にKT01号が乗るが、谷側ではKJ13・15号を壊している。平坦面の山際に僅かに4組の礎石群列が残っていた。これは桁方向4間の列(芯々間隔1.0~1.4m)と推定したが、築方向は全く不明。この建物の下には、やや南西側部分に楕円形(推定2.8×1.3m)の掘り方(13~15層)の土坑があり、焼土・炭化物を多く含んでいる。

上層(4~7, 8層上位)では土師器小皿(1379, 80)・坏(1381)・甑(1391)・角棒状鉄製品(4039)を検出した。下層(8層下位, 9~12層)では鉄鈴(4040)が北東隅で見られ、全体に大量の土師器坏片(1393-2, 860g 無痕1394-400g 内面煤痕)が散っていた。

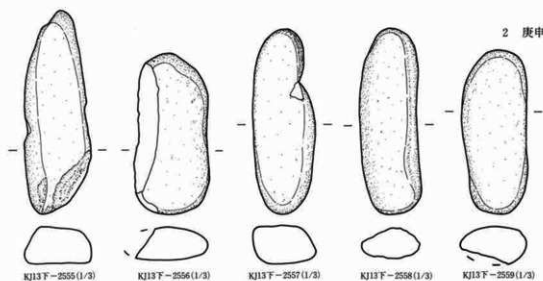
他に須恵器壺(1395)・坏蓋(1368, 88, 89, 90)・坏(1378)・土師器盤(1385)・鉢(1384)等が出土した。

KJ13号は正方形の竪穴で、KT02号に壊されKJ15号を壊す。(P.216へ)

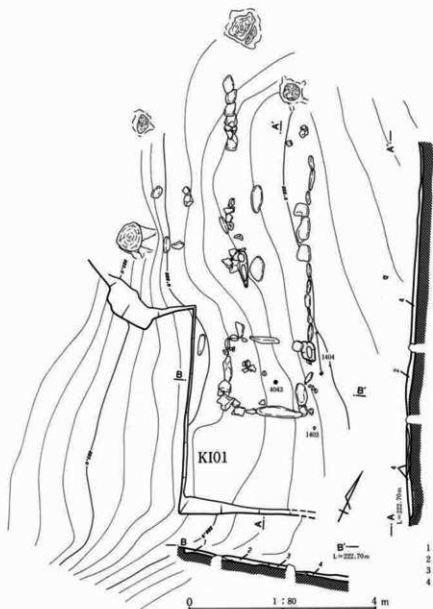
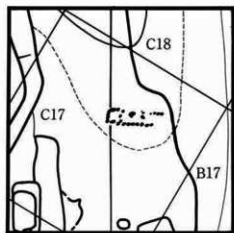




2 庚申山地区



0 1 : 3 10cm



KI01F-1403



KI01F-1404

0 1 : 4 10cm



KI01F-4043 (1/1)

1. にぶい黄澄粘土A軽石小少
2. 細灰粘土A軽石炭化物小
3. にぶい黄澄1・2の混
4. にぶい黄澄粘質土A軽石小多

## II 検出遺構と遺物

(P.213より) また谷側は削られている。北東壁にカマドがあり、その全面と南西側に小ピットが見られた。

下層(16層下位)から土師器坏(1364~66)・こも編み石(雲母石英片岩2549,54,58,粗粒安山岩2550,51,55,緑色片岩2552,53,57,閃緑岩2556,砂岩2559)が出土した。

KJ15号は北東南西方向に長い長方形(5.5×2.4m)の堅穴で、KJ13・KT02号に壊される。北東側の短辺にカマドがあり、南西側では周溝を検出した。下層(18,20,21層)から縄文鉢片(1377)・黒曜石石鏃(3838)・土師器坏(1376)と共に共存の須恵器水瓶(1367)が出土した。水瓶は南隅の周溝近くで横位状態で現れている。

KJ02号は不整形の土坑で、KT01号に壊される。底は比較的平坦で、埋土(2層)には焼土が含まれている。上層(確認面)で土師器甕(1310)、下層(2層)から同皿(1309)が出土した。

### KI01号遺構(C-17G)

【図p.215 PL.221】

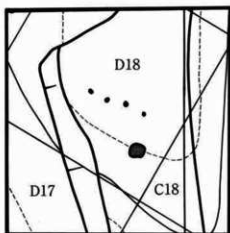
尾根上中央南西よりで検出した近世の石組遺構。尾根上の緩い傾斜部分(勾配6度)を削って平坦部を造成し、そこに河原石を並べて尾根の走向に直交する長方形配列(1.7×7.0m以上)を築いている。その中で南端は中間に石列があって、単独の正方形に近い区画(1.7×1.5m)を形成する。

南区画内側より寛永通宝(4043)、外側より油皿(志戸呂錆軸1403・産地不明灰軸1404)が出土した。

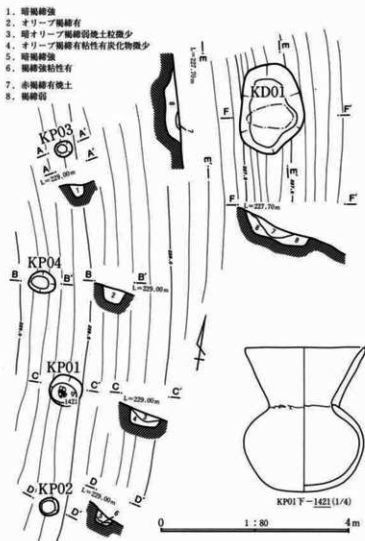
調査直前には1784年(浅間山A軽石降下の翌年)を最古の紀年銘とする百庚申がならんでいた場所である。

### KD01・KP01~04号遺構(D-18G) 【図.p.216 PL.221,222】

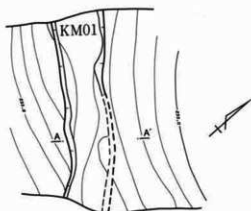
尾根上南西側の傾斜地(勾配16~18度)で検出した遺構群。



KD01号は不整形の土坑で、上層(7層)は焼土層。KP01~04号はほぼ同一の高さに散る(間隔2.4~2.8m)ピット。埋土・形状は微妙に異なるが、KP01号より土師器罎(1421)が出土。

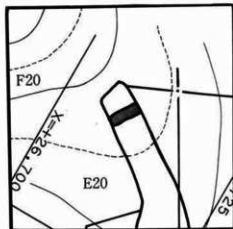


1. 暗褐色強
2. オリブ層有
3. 暗オリブ層弱焼土粒微少
4. オリブ層有粘性有炭化物微少
5. 暗褐色強
6. 暗褐色粘性有
7. 赤褐色有焼土
8. 暗褐色弱



1. 暗褐色粘土質軽石少

0 1 : 80 4 m

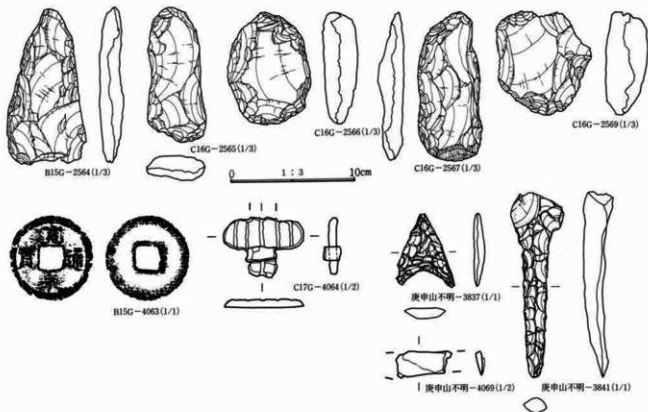


**KM01号遺構(E-20G) 【図.p.217 PL.222】**

尾根上最高位(勾配14度)で検出した時期不明の溝。  
遺物なく性格不明。

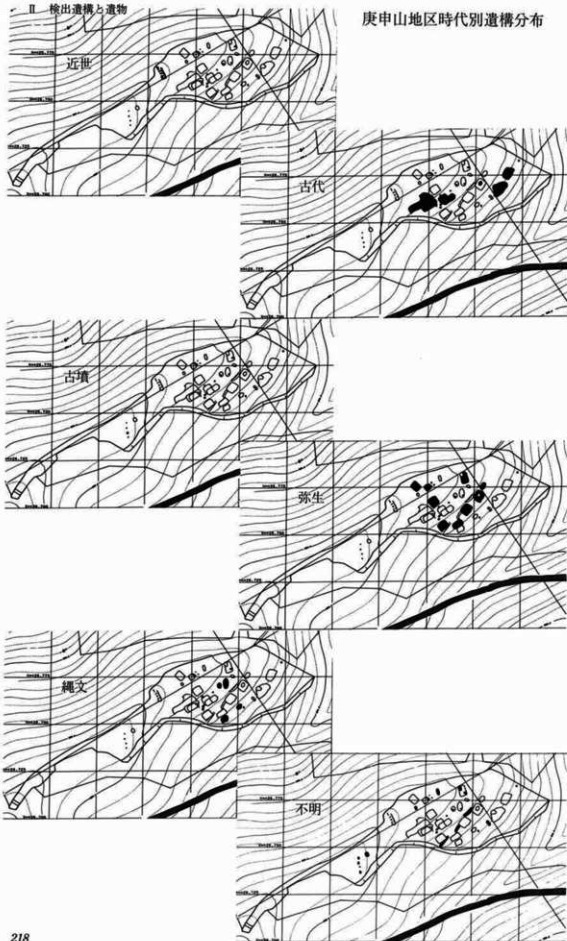
**(2) グリッド出土遺物 【図.p.217 PL.222】**

【黒曜石石器】打製石鏃(3837)は出土位置不明(KJ11号出土で所在不明の石鏃の可能性もある)。石鏃(3841)も同様。【その他石器】絶対量はそれほど多くない。硬質泥岩打製石斧(2564, 65, 67)・礮器(2566)・石核(2569)が顕著なものである。【金属器】十字型鉄製品(4064)と寛永通宝(4063)があった。刀子状の鉄刀物(4069)は出土位置不明。



II 検出遺構と遺物

庚申山地区時代別遺構分布



## 二 調査成果





### Ⅲ 遺物の特徴

#### 1 縄文土器

関根慎二

本遺跡では、発掘された縄文時代の遺構としては5軒の住居址と10数基の土坑が発見されているが、それらの遺構からは縄文式土器がまとめて出土していない。遺構出土の土器は、小破片が多く完形になる土器や、遺構に伴う一括資料というものはなかった。そのため本遺跡出土の土器については、県内の他遺跡から出土している当該期の土器と比較してみたい。

##### (1) 早期

押型文土器が1点(1358)出土している。西毛地域では、比較的発掘資料の少ない押型文であるが、鍋川対岸の丘陵にある安中市金井谷戸遺跡では押型文の住居址が検出されている。本遺跡の土器と同様山形の押型文土器が出土している。群馬県内では、桐生市の普門寺遺跡以後、北群馬郡小野上村八木沢清水遺跡で住居址が発見されている他、押型文土器の時期の住居址検出率は少なく、断片的に各遺跡から出土しているのみである。長野県地域での押型文土器の資料数と比較すると当地域での資料の少なさは際立つものがある。

縄文前期以降の土器を見ると長野県地域との関係が深まる中、現時点では西毛地域での押型文土器の出土例が少ない点から、早期においては交流が希薄であったとも考えられる。しかし、縄文前期以降の時期について、長野県地域との交流が頻繁であったことを考えると、押型文土器も精細に調査していくことで類例の増加が期待される。

##### (2) 前期前半

本遺跡出土の縄文前期前半の繊維土器は、住居址等の遺構は検出されず出土数も少ない。出土した遺物は、半截竹管による爪形文で、菱形に文様を構成する有尾式土器である。これ以前の花積式土器や関山式土器は出土していない。また、有尾式土器に伴う羽状縄文で菱形に縄文を施文する土器も出土している。群馬県では、有尾式土器に後続する土器として、半截竹管による平行沈線によって肋骨文のモチーフを持つ土器が考えられるが、これらの土器も僅かであるが出土している。

##### (3) 前期後半

#### A 諸磯式土器

前期後半の諸磯式土器は本遺跡から比較的まとめて出土している。諸磯式土器でも、諸磯b式後半段階浮線文と沈線文、諸磯c式土器のものが多く、諸磯a式土器や、諸磯b式土器の大型爪形文を施文する土器は極少ない。群馬県の当該期の出土傾向としては、諸磯b式土器の爪形文施文土器以前の土器を出土する遺跡と、諸磯b式土器の浮線文土器以降の土器を出土する遺跡に分かれる。本遺跡出土の諸磯b式土器は、県内各遺跡の当該期の土器と比較しても取り立てて特筆するものはない。諸磯b式土器から諸磯c式土器にかけては、沈線が集合糸線化して円形の貼付文や棒状の貼付文を施文する土器になる。長野県地域にみられるような、結節浮線文や細長い棒状の貼付文に爪形文を押捺するものではなく、集合沈線の地文に縄文を施すなど、県内各遺跡で多くみられる土器である。

#### B 大木系土器

大木系土器と呼ばれる土器が、諸磯式土器に混じって僅かではあるが出土している(図1-1, 2)。縄文地

### Ⅲ 遺物の特徴

に細い粘土紐で鋸歯状に貼付する土器である。県内ではこの様な土器は、出土量は多くないが、諸磯b式後半の浮線文施文の土器から諸磯c式土器の出土する遺跡で共伴して出土する例が多い。この土器の出土分布範囲を見ると群馬県や群馬県に接する地域で見られる。長野県東部町鋸冶屋遺跡などからも出土しており、比較的広範囲に出土の分布をもつ土器である。県内で出土するこの種の土器を便宜的に粘土紐による鋸歯状の貼付の角度のゆるいものを大木4式、きついものを5式としているが、これらの土器にも時期差があると考えられる。現在のところ大木4・5式を分ける根拠があいまいな点が多く、群馬における諸磯式土器との共伴関係を考えると、諸磯式土器と、大木式土器の関係がどの段階に伴うものであるのかははっきりしない。今後検討しなければならない問題である。

#### C 浮島・興津式土器

浮島・興津式土器(図1-3~8)も諸磯b式土器、諸磯c式土器に混じて出土している。図1-3の興津I式土器と考えられる土器は230号遺構出土のものである。この住居址からは、諸磯b式後半の浮線文土器と平行沈線が集合条線化している土器と諸磯c式土器が出土している。県内の浮島・興津式土器の出土する遺跡を見ると、諸磯b式終末に興津I式土器が伴ってくるようである。その他遺構に伴わない浮島・興津式土器を見ると、本遺跡出土の土器は、浮島Ⅲから興津Ⅱ式土器であり、本遺跡の諸磯式土器がb式後半からc式土器にかけてのものであることを考えると、ほぼ時期的には合致してくる。

本遺跡から出土している浮島・興津式土器の施文状の特徴として、貝殻腹線施文をまねて細かい半截竹管によって貝殻腹線状施文効果を出しているものがある(図1-7,8)。浮島・興津式土器の貝殻腹線文を、本遺跡出土例の土器は、平行沈線を使って横的に文様帯を区画した間を、貝殻腹線による文様のように細かい半截竹管を二個ならべて施文している。この手法は、貝殻の入手困難な内陸部にある遺跡では多く見られる手法で、福島県会津高田町寶富西遺跡、群馬県昭和村糸井宮前遺跡等幾つかの遺跡で出土例が確認されている。

浮島・興津式土器の鍋川流域での出土例は、これまで知られていなかったのであるが、本遺跡から出土したことで群馬県内の広い範囲に分布することが分かった。今後浮島系土器と諸磯系土器の地域的な交流の検討を必要とする資料である。

以上の前期後半の土器についても遺構に伴う確実な供伴関係をおさえることはできなかった。今後これらの土器について時期的な整合性を検討して行きたい。

#### 群馬県内の浮島・興津式・大木系土器出土遺跡一覧

1 御正作(大泉町)	17 六道(東村)	33 滝1号墳(藤岡市)
2 賀茂(太田市)	18 書上本山(伊勢崎市)	34 中棚(昭和村)
3 上8(太田市)	19 下触牛伏(赤堀町)	35 乾田(水上町)
4 焼山(太田市)	20 多田山東(赤堀町)	36 北貝戸(水上町)
5 伊豆田(桐生市)	21 大胡バイパス(大胡町)	37 小仁田(水上町)
6 金竜台(桐生市)	22 荒砥上川久保(前橋市)	38 湖尻(月夜野町)
7 雲祥寺(桐生市)	23 芳賀東部工業団地(前橋市)	39 国分寺中間地域(群馬町)
8 山腰(桐生市)	24 誉倉(前橋市)	40 大袋(館林市)
9 北山(笠懸村)	25 滝沢(赤城村)	41 金山(月夜野町)
10 清水山(笠懸村)	26 糸井宮前(昭和村)	42 道前久保(安中市)
11 稲荷山(笠懸村)	27 薄根中学校(沼田市)	43 押込(前橋市)
12 神社裏(笠懸村)	28 後田(月夜野町)	44 吉田原(安中市)
13 中島(笠懸村)	29 三峰神社裏(月夜野町)	45 横依(前橋市)
14 熊野・藤生沢遺跡(新里村)	30 中善寺・宮地(箕郷町)	46 戸原I(富岡市)
15 城(新里村)	31 天神原(安中市)	47 佐久間(甘栗町)
16 天笠南(新里村)	32 黒熊(吉井町)	■中高瀬観音山

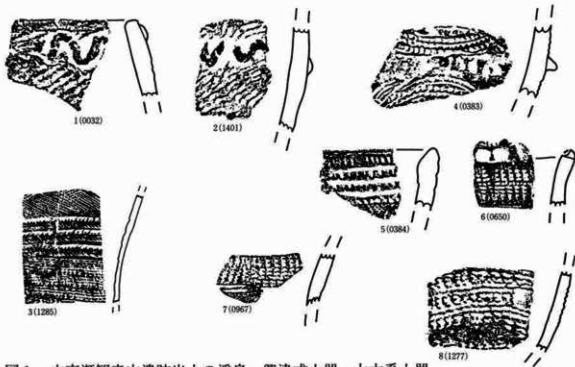


図1 中高瀬観音山遺跡出土の浮島・興津式土器、大木系土器

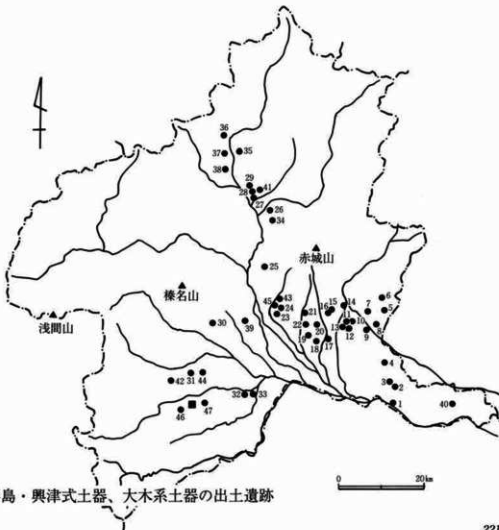


図2 浮島・興津式土器、大木系土器の出土遺跡

## 2 石器・石製品

麻生敏隆

本遺跡から出土した石器と石製品については、検出されている遺構の時期から、縄文時代前期から弥生時代・古墳時代のいずれかに属すると考えられる。

その種類をみてみると、打製石鏃・磨製石鏃・磨製石包丁・石錐・石匙・掻器・削器・打製石斧・磨製石斧・球状耳飾り・勾玉・管玉・白玉・多孔石・砥石・石皿・礮器・石核・剥片石器・原石などがあげられる。その中で、磨製石鏃や磨製石包丁などは弥生時代を代表する石器であるために時期の特定が可能である資料でもあるが、その他の大部分は縄文時代に属する資料と考えられる。

だが、縄文時代前期の住居跡から出土した資料は少なく、大部分の資料が弥生時代を中心とする遺構の埋没土中からや、表面採集の形で数多く出土しているのが、本遺跡での特色でもある。そのため、発掘調査途中での遺跡の性格をめぐるいくつかの議論の中に、多量の打製石鏃の存在などがあげられていた。そうした問題点の解明も含めた内容になるように極力努力したつもりである。

なお、今回の資料化にあたり、まず器種分類を行った後に、写真撮影や実測及び計測を実施した。ここでは、その分類した器種の個々の概要について記述しながら、問題点なども盛り込んでいくこととした。その資料化にあたっては出土した資料すべてを観察の対象としたものの、諸般の事情から網羅することが出来なかったことをここで述べておく。

また、打製石鏃の一部の実測図に、黒曜石の水和層測定のための試料をサンプリングした痕跡がそのまま実測されていることを、ご理解願いたい。

### 打製石鏃

総数で222点が出土している。資料の形状から従来の分類である凹基無茎(I形態)・平基無茎(II形態)・有茎(III形態)の三つの形態を用いることとする。ただし、欠損部分によっては分類不可能な資料も存在する。

**I形態** 中茎を持たず、基部に挟入があるものを指す資料で、点数は最も多く147点である。これには脚部が明確に作り出されている形状を主体とするが、返し部分の一方にでも僅かな挟入があるものも含めている。また、両側縁が内側に湾曲する形状を呈する資料があるが、これは縄文時代前期に特徴的な形状である。

**II形態** 中茎を持たず、基部が直線的、あるいは返し部分が丸味をおびている資料で、いわゆる三角鏃や円基鏃と呼ばれる形態であり、40点である。

**III形態** 基部に挟入がある資料と、基部が直線的な資料、それに、基部が突出する資料も含まれている。点数は僅かに11点だけと、他の形態に比べて数が少ない。この形態は、縄文時代草創期の段階と、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけて多く認められるものであり、本遺跡で検出されている時期と比較すると、弥生時代だけが該当している訳である。単純にすべての資料が弥生時代に属すると考えるのは早急であるが、中々興味深いものがある。

また、中茎部分を欠損する資料が8点であり、率にして実に7割を占めている。さらに、石材でも黒曜石が5点であるのに対して、チャート5点、黒色頁岩2点、玉髄1点と、他の形態に比べて非黒曜石の石材の割合が多いことが言える。

その他に、脚部部分を欠損しているために、形態分類できない資料が24点ある。本体の一部でも欠損した資料は93点であり、率にして4割を越えている。特に、先端部分と脚部を欠損している資料が多い。

石材をみてみると、黒曜石が189点と圧倒的な数を占めているが、チャート21点、黒色安山岩4点、黒色頁岩3点、珪質頁岩3点、硬質泥岩1点、赤色珪質岩1点である。特に、黒曜石やチャートなどは、小型で細かな押圧刻離を施す打製石鏃や石錐、石匙などの特定の石器の製作に適した石材であり、原産地も本遺跡からは離れた距離に位置していることから、筆者らは搬入石材(A類石材)とも呼称している。

石鏃未成品は44点と多く、大型で製作工程の途中の欠損により放棄された資料と、小型で側縁の押圧刻離作業の段階の途中で放棄された資料が多く認められる。石材は、黒曜石が43点と圧倒的に多く、チャートは1点だけである。この器種分類にあたっては、石匙や削器などの押圧刻離を多用する器種との分類の上でやや戸惑うこともあり、この種の石器の石材に黒曜石が多用されることがその一因と考えられる。

#### 磨製石鏃

弥生時代を代表する石器であり、5点出土している。穿孔が施された3点あるものの、完形品と呼べるものは1点だけであり、残りの4点は欠損品である。石材はすべて珪質準片岩である。この石材は、他の遺跡での出土例を含めた鍋川流域での磨製石鏃に利用される特徴的な石材である。

#### 石錐(ドリル)

可能性があるもの(打製石鏃の欠損品や未成品など)も含めて14点出土している。

形態では、小型で明確な握みのある資料(Ia形態)と、小型で握みが明確でない資料(Ib形態)、大型で明確な握みのある資料(IIa形態)、握みがなく、断面が菱形に近い細身の棒状の資料(III形態)が存在する。

石材は黒曜石が8点と最も多く、チャート2点、硬質泥岩2点、黒色安山岩1点、珪質頁岩1点である。形態との関係では、定型的なIa形態やIIa形態に黒曜石やチャート、珪質頁岩が利用されている。

#### 石匙

機能的には削器と同様の用途に用いられるものだが、握み部分が作出されているという定型化された石器ということで、個別に分類されるものである。12点出土しており、資料の形状から縦型(I形態)と横型(II形態)の二種に大別される。

I形態 僅かに2点であり、握み部分が基部のほぼ中央に位置する資料である。

II形態 9点で、握み部分が基部のほぼ中央に位置する資料である。欠損状態をみてみると、刃部部分を僅かに欠損する資料が3点である。

石材は、チャートと黒曜石がそれぞれ5点と多く、黒色安山岩2点、黒色頁岩1点であり、特定の石器に対しての石材の選択性が認められる。

#### 搔器(エンドスクレイパー)

9点出土している。共に先端部及び両側縁部に急角度に調整された刃部をもつ資料である。石材は硬質泥岩9点と黒曜石1点である。

#### 削器(スクレイパー)

剥片を素材とし、素材剥片自体の形状を著しく変えることなく、その周縁や側縁の部分に調整加工を施し、刃部を作り出した資料であり、打製石鏃や打製石斧の未成品、それに礮器や石核などとの分類作業にやや悩む器種でもある。総数で70点出土している。

### Ⅲ 遺物の特徴

大部分は、不定形、あるいは横長の剥片を素材としており、打製石斧などの製作段階で作り出された剥片を利用した可能性も考えられる。また、横刃型石器などと呼ばれるような形状の資料も僅かながら存在する。

石材をみてみると、硬質泥岩が50点と最も多く、黒曜石6点、チャート4点、黒色安山岩3点、緑色片岩3点、珪質頁岩2点、黒色頁岩1点、頁岩1点である。このことから、打製石斧や播磨などと石材を共用する資料であることが理解され、それらの製作工程は密接な関係があることを推測させる。

#### 磨製石斧

7点出土しているが、その形状から二つに大別される。断面が隅丸長方形のいわゆる定角式(I類)と、断面が楕円形の孔棒状(II類)である。

I類 頭部に多数の剝離痕や敲打痕が認められる3点で、その中の1点は小型である。石材は3点とも変質蛇紋岩である。

II類 大型で、資料の大部分の頭部が細く、最大幅はすべて刃部寄りの部分に位置すると推定される5点である。その中の4点に、研磨が充分でないために、荒い敲打段階の打痕が残っている。

欠損状態をみてみると、4点の資料が頭部、1点が刃部を欠損している。出土地点に特徴があり、056号遺構でI類とII類がそれぞれ1点の計2点、075号遺構でII類が3点出土している。貯蔵穴や副葬品として埋納された墓坑に相当する可能性がある。

石材は緑色片岩2点、変質玄武岩1点、ホルンフェルス1点、変質玄武岩1点である。

#### 打製石斧

総数222点と石器の中で最も数多く出土している。形態については従来から知られている短冊形(I形態)、楕形(II形態)、分銅形(III形態)の三種の形状による分類を用いることとする。

I形態 両側の側縁が直線的で平行なもので、いわゆる短冊形である。だが実際には、刃部が頭部よりも僅かに幅広い資料もその範疇に含めることとする。総数は欠損品も含めて24点と少ない。

II形態 両側の側縁は直線的だが、刃部幅が頭部幅よりも広いもので、いわゆる楕形である。だが実際には、側縁が僅かに内・外湾する資料もその範疇に含めることとする。総数は最も多く、欠損品も含めて175点を数える。

また、このII形態とした資料の中に、刃部が急角度の片刃調整を施された資料も36点存在する。これについては、片刃石器という個別の名称を使用する分類も行われる例もあるが、筆者らは打製石斧の範疇に含めて考えている。時期的には縄文時代前期に特徴的な形状である。

さらに、大型で頭部が細く刃部が大きく広がる資料や、同じく大型で有肩石斧と呼ばれるような形状の資料については、弥生時代の石鎌に想定される可能性がある。

III形態 両側縁が中央部で内側にくびれ、刃部及び頭部が外側に張り出すもので、いわゆる分銅形である。点数は僅かに5点である。この形態は、一般的には縄文時代中期から出現し、後期に数多くみられる資料である。

石斧に認められる使用の痕跡としては、装着痕や刃部の使用痕がいくつかの資料に認められる。これらの痕跡では資料の中央部(基部)の両面や両側縁に装着痕が認められるが、特に剝離面境の後部分にそれが見られることが多い。また、刃部の使用痕も両面に平行な何条もの線状の擦痕や、剝離面境の後部分がすれてはつきりしないなどの観察結果が得られている。欠損品は81点と多く、率として約36%を占める。また、欠損した部分を再生したと考えられる資料が数点存在する。

石材は、硬質泥岩が173点と圧倒的に多く、珪質頁岩13点、粗粒安山岩8点、緑色片岩8点、黒色安山岩5点、デイサイト4点、頁岩3点、雲母石英片岩2点と、黒色頁岩、凝灰質珪質頁岩、角閃石安山岩、珪質単片岩、砂岩、変玄武岩がそれぞれ1点づつである。特に、打製石鏃などの小型の石器に黒曜石などの搬入石材が多用されるのに対して、打製石斧や削器などの比較的大型で剥離を施す石器に多用される硬質泥岩や頁岩など、本遺跡周辺の近い距離で入手可能な石材を、在地系石材(B類)と呼称している。

打製石斧の素材は、従来から言われている様に、比較的大きく残されている素材時の剥離面から、その大部分が20~30cm程の原礫を半割、ないしは数枚に分割した大型板状剥片を素材として用いたことが想定される。これは礫面が一部に残存する資料が多く存在することからも間違いないと考えられる。

石材では、打製石斧の大部分が硬質泥岩という圧倒的な結果が得られた。この石材の鑑定については、本事業団では主に飯島静男氏に依頼して、石材名称の一元化を図りつつあるが、鍋川流域の石材については磯貝基一氏も分析・研究しており、ここで言う硬質泥岩は磯貝氏の言う頁岩と同意語である。その産出地については、大部分が新第三紀海成層最下部の下仁田層中であり、主に西牧川から下仁田で鍋川に合流して下流に転石として分布していくことが解明されている。本遺跡の位置が、合流点下流の丘陵上であるから、硬質泥岩(頁岩)の産出地、及び転石として分布する流域に近接しているという、地理的環境からくる結果とも言える。

打製石斧の未成品と考えられる資料が4点出土しており、石材は硬質泥岩3点と珪質頁岩1点である。

#### 異形石器

やや湾曲した形状で、ほぼ周縁に押圧剥離が施されている資料であり、打製石鏃などと形態的に異なることから、異形石器と仮称することとする。石材は黒曜石3点、黒色安山岩1点である。

#### 加工痕・使用痕ある剥片

多数出土している剥片の中に、剥片自体の周縁や側縁の部分をそのまま刃部として使用することにより使用痕が残されたり、僅かな調整加工を加えたものが存在することから、それらを加工痕・使用痕ある剥片と呼称することとする。その大部分は掻・削器的なものとしての用途が考えられる資料が多い。

石材は、硬質泥岩24点、黒曜石6点、チャート1点、黒色安山岩1点である。

また、中には旧石器時代の資料と考えられる黒曜石の加工痕ある剥片が1点(3301)含まれており、黒曜石の幅広の石刃の両端を折断し、鋭い刃部の一部に加工痕が残されている。さらに、部分的に擦痕が認められる資料でもある。

この石器の石材の鑑定を実施した飯島氏によれば、水和層が認められないことや、不純物が無いことなどの理由から、天然ガラスでもある黒曜石ではなく、人造ガラスの可能性もあることを示されている。だが一方で氏は、人造にしては質が悪いことや、古代のガラスにしては気泡が入っていないこと、さらに現代のガラスに想定した場合に質が悪いなどの理由で、判定を考古学側に任せられたような部分もある。

筆者は、長野県の黒曜石原産地の分布調査に携わった経験や、数多くの旧石器時代の石器を実際に観察してきた経験から、同様の石質の黒曜石が存在し、石器として利用されていると判断し、石材を黒曜石と認定する判断を下した。

#### 石皿

2点出土している。形状は縄文時代前期に多く見られる。石材は2点とも緑色片岩である。一般には、欠損した場合に多孔石として転用される場合が多い。

#### くぼみ石(凹石)

### Ⅲ 遺物の特徴

小型の扁平な円礫や楕円礫、あるいは棒状礫の片面か、あるいは両面のほぼ中心部に、くぼみが単独か、あるいは二つ三つの少ない数で残存する資料であり、23点出土している。

欠損状態をみると10点と多く、欠損率は実に4割を越えており、楕円礫や棒状礫の一端を失った資料が多い。石材は、粗粒安山岩と緑色片岩がそれぞれ7点と最も多く、砂岩2点と、牛伏砂岩、流紋岩、変輝緑岩、ひん岩、黒色片岩、変質安山岩、変質アイサイトがそれぞれ1点ずつである。

#### 多孔石

礫の片面か、あるいは両面のほぼ中心部に、くぼみが多数残存する資料であり、12点出土している。くぼみ石が小型の扁平な円礫や楕円礫、あるいは棒状礫を選択しているのに対して、多孔石は大型の扁平な楕円礫や棒状礫を選択している違いがある。欠損状態は7点と多く、欠損率は実に5割を越える。石材は緑色片岩が8点と最も多く、比較的入手しやすい大型の石材の中で、くぼみをつけやすい岩石であるのかも知れない。その他は黒色片岩、石英閃緑岩、砂岩、アイサイト?がそれぞれ1点ずつである。

#### 敲石

敲打痕が僅かに認められる資料を含めて5点出土している。石材は緑色片岩2点、粗粒安山岩1点、変質安山岩1点、変玄武岩1点である。

#### 砥石

23点出土している。石材には、一般に砂岩が用いられることが多いが、本遺跡でも14点も確認されており、大部分の資料に多数の線状痕が残存している。また、鑄川の下流域で利用される第三紀牛伏層から産出する砂岩(通称牛伏砂岩)も4点ある。鑄川の上流の南牧村砥沢から産出される砥沢石も3点あり、形状も四面の研ぎ面を作り出した定型な資料である。その他は、頁岩1点と緑色片岩1点である。

#### 磨り石

比較的大型の扁平な円礫や楕円礫、あるいは棒状礫の片面に磨り痕が認められる資料であり、砥石との分類作業にやや悩む器種でもある。点数は42点と多く出土している。他の石器からの転用や共用される場合が多く、明確な例で多孔石との7点、敲石との2点、くぼみ石の1点がみられる。また、特に大型の扁平な楕円礫の資料は、台石の可能性も考えられる。

石材は、粗粒安山岩が11点と最も多く、緑色片岩5点、砂岩4点、硬質泥岩3点、変玄武岩3点、流紋岩3点、ひん岩2点と、凝灰質砂岩、変質安山岩、珪質頁岩、頁岩、閃緑岩、石英閃緑岩、雲母石英片岩、黒色片岩、砂質準片岩、砥沢石、石材不明がそれぞれ1点で、多様な石材が用いられている。

#### 礫器

11点出土している。この種の石器は、石核や打製石斧との区別が難しいものも存在するが、周縁に刃部を作り出している資料を認定した。石材は硬質泥岩10点、粗粒安山岩1点である。

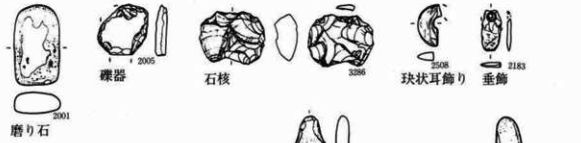
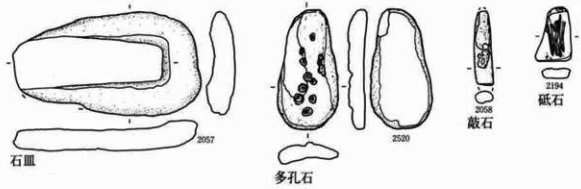
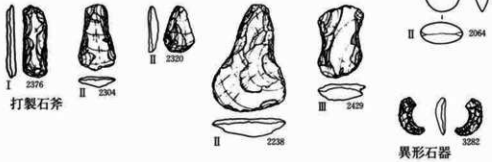
#### 石核

総数で58点出土している。残されている剥離面から、作り出された剥片の形状は横長や不定形を呈している。石材は硬質泥岩が42点と最も多く、黒曜石が14点、黒色安山岩が2点である。重さをもとみると、黒曜石が10～100gの範囲と小型であるのに対し、硬質泥岩は100～650gの範囲で、特に100～200gに集中するなど大きな違いが認められる。

硬質泥岩や黒曜石については、原石から石核、剥片、それに製作された石器と、すべてがそろっていることから、本遺跡内で剥片剥離作業が実施されていたと理解される。

#### 塊状耳飾り





### Ⅲ 遺物の特徴

5点出土しているが、すべて欠損品でほぼ半分を欠損している。石材は滑石質蛇紋岩3点、滑石2点。

#### 垂飾

可能性がある資料を含めて3点出土している。1点は石材が緑色片岩で、穿孔を施しているが、研磨が全体にまでは及んでいない資料である。113号遺構から出土している。1点は流紋岩の原石の礫面に見られる模様などの状態が良好なために、僅かな研磨だけで穿孔を施したと考えられる資料である。残りの1点は、表面に研磨の痕跡が認められないことや、石材がチャートであること、さらに、開いている穴が穿孔ではなく、自然に開いたようにも見えることから、垂飾でない可能性も考えられる資料である。

#### 勾玉

未成品も含めて3点出土している。その中の1点は205号遺構から出土している。石材は滑石1点、流紋岩1点、不明石材(青色鉱物)1点である。

#### 管玉

僅かに1点だけだが、205号遺構から勾玉や白玉と共に出土している。石材は珪質凝灰岩である。

#### 白玉

205号遺構から6点出土している。石材は滑石3点、蛇紋岩3点である。

#### 紡錘車

破片の可能性がある資料も含めて8点出土しているが、欠損品が5点もあり、完形品は3点のみである。石材は白色凝灰岩4点、砂岩2点、滑石2点で、やはり加工しやすい石質の岩石が選ばれているのがわかる。ただし、欠損している1点の滑石の資料は、石製模造品である可能性も考えられる。

#### 独鈷石

形状から独鈷石を模した石製品と考えられる資料が1点出土している。石材は緑色片岩である。

#### 不明石製品

ほぼ全体に研磨を施した何らかの石製品と考えられるものの、器種が特定できない資料であり、4点ともに石材は滑石である。特に、2箇所に穿孔を施した資料について、当初は磨製石包丁と考えたものの、石材が滑石である点から、器種不明と判断したものであり、今後の再検討を待ちたい。

#### こも羅み石

長さ12～16cm、幅4～6cmの形状が棒状の礫、いわゆる河原石をそのまま利用しており、15点出土している。特に、013号遺構から10点、250号遺構から4点出土している。石材は粗粒安山岩7点、雲母石英片岩3点、緑色片岩2点、石英閃緑岩1点、閃緑岩1点、砂岩1点である。

#### 棒状礫

3点出土している。石材は緑色片岩2点、片岩1点である。

#### 原石

8点出土している。その中の3点は重さ約20～60gの黒曜石であり、すべて角礫状で表面は風化した剝離面を持つ資料であることから、河川での転石の状態としてではなく、原産地露頭付近で採集された可能性が高いと言える。時期的にはおそらく縄文時代に持ち込まれたものと考えられる。

2点の雲母石英片岩には、まったく加工の痕跡が認められないことから、原石として分類した。

残りは滑石2点と、本来は一つの塊であった滑石質蛇紋岩が4つに割れたものの1点であり、紡錘車、あるいは袂状耳飾りなどの玉類の原石として遺跡内に持ち込んだものと考えられる。ちなみに本遺跡で出土している滑石質蛇紋岩は袂状耳飾りの3点のみである。

## 3 弥生土器

大木紳一郎

### (1) 概要

本遺跡出土の弥生土器は、中期前半代と思われる条痕文系土器から中期後半の竜見町式土器、また後期中業から後半までの櫛式土器が見られる。このうち、中期の土器は断片的で、遺構に伴う良好な一括遺物も少ない。一方、後期の土器は本遺跡で検出された多数の堅穴住居群に伴っており、一括遺物に恵まれていることから、本地域の弥生土器研究の恰好の資料といえる。また、検出された集落の分析にも、その前提作業として土器分析は欠かせない。ここでは堅穴住居から出土した後期土器群を対象として、編年上の時間的位置付けを行い、あわせてその変遷過程や地域的特色の抽出を試みることにする。

### (2) 土器の分類

#### A 器種分類

大まかには、甕類、壺類、鉢・高坏類、その他に分類される。これらは器形上の類似とともに、用途を想定した上で分類した。この場合、甕類は煮炊用、壺類は貯蔵・運搬用、鉢・高坏類は供献・盛器用、その他は特殊な用途専用と考えている。これらの器種は、大きさ(容量)や器形の特徴から更に細分される。これについては以下に掲げる。

**甕類** 甕、小型甕、台付甕。甕は平底で頸部がしまり胴部が張る器形で、口径15～22cm(18cm前後が主体)のものとした。小型甕は甕に準ずる器形で口径が15cmより小さく(14cm前後が主体)、器高20cm前後のものである。台付甕は、口縁が強く外反して肩が張り底部に向かって急にすぼまる上下に潰れた器形を呈する。胴部は正円錐形に近い。台付甕の口径は13～20cmで大小の差が見られるが、数量が少ないためここでは類別せず一括した。甕類の文様には柳描波状文(以下「波状文」と略す)、柳描簾状文(以下「簾状文」と略す)、縄文が見られる。

**壺類** 大型壺、中型壺、小型壺、短頸壺、小型短頸壺、無頸壺。大型壺と中型壺は口縁が大きく開き、頸部で細くしまり、胴部が大きく張る器形を呈する。口径20～26cm、器高50cmを越えるものを大型、口径18cm前後で器高40cm以下のものを中型として扱った。大型壺と中型壺の用途は、前者が据え置き貯蔵、後者が運搬と貯蔵と推定したい。小型壺は全形を知り得ないが、口径15cm以下でやや長胴の器形を呈する。これは口縁の開きが少なく頸部のしまりが弱いことから、貯蔵ではなく液体を注ぐ容器として用いられた可能性が考えられる。

短頸壺と小型短頸壺は、口径が胴径よりも大きく口縁が外反し頸部の短い器形で、赤彩したものや蓋用の小孔が穿たれることから甕と区別される。前者は口径15cm以上で器高20cm前後のもの、後者は口径14cm以下の小型品とした。ただし、小型品には小型甕と類似し峻別しがたいものがあり、その用途については検討を要する。無頸壺は口縁がわずかに外反し球形に近い胴部をもつと想定されるもので、口縁に蓋用の小孔が穿たれる。

**鉢・高坏類** 高坏、小型高坏、鉢、小型鉢、小壺、小型台付鉢。高坏、小型高坏は大きく朝顔形に開く坏部に円錐形の脚をもつ。前者は口径20cm以上、後者は口径15cm以下のものを一括して両者を分離した。鉢、小型鉢は単純な逆載頭円錐形を呈し、器形の変化は少ない。前者は口径15cm以上、後者は10～14cmである。高坏と鉢は供献あるいは盛器としては同じ用途と想定するが、小型鉢は個人用の可能性もあろう。これについては後述する。

### Ⅲ 遺物の特徴

小壺は頸部のくびれる平底の小型容器で、器高、口径とも9cm前後が多く、容量は230～500ccを測る。名称を「壺」としたが、用途は貯蔵用とは考えにくく飲用器のような使用方法を想定したい。小型台付鉢は口縁が小さく外反し「いちじく」形の胴部をもち、円錐形の脚を付したものである。口径は11～13cm、器高14～19cmの小型品で、貯蔵や通常の煮沸用器とは考えにくい。特に器面全体を赤彩したもの(1206)は、小壺と同様に飲用ではないか。ただし、外面に煤付着の見られるものもあり、少量煮炊の機能も考えておく必要がある。

**有孔鉢** 有孔鉢は鉢の形状で底部に孔を穿つ器形を一括した。いわゆる「甑」と呼ばれるものだが、「蒸器」としての使用はまだ実証されていないので、この名称を用いる。

なお、本遺跡特有の形態として0368や0865など底部が突出し端部外反するものが見られる<sup>11)</sup>。この形態を「鈕」と想定し蓋としての使用も考え得るが、よりふさわしい形態の蓋が存在すること、本例の突出底部が当初には見られず漸時変化したと考えられることから、「鈕」としての機能は疑わしい。もし蓋であるなら、蒸気孔のある甕用<sup>12)</sup>ということになるだろうが、本遺跡での口径の平均値は21cm(最大は28cm)であり、多くの甕の口径を凌駕する。またこの用法ならば口縁に煤吹きこぼれの痕跡が残る可能性が高いと思われるが、実際には確認できない。

以上から蓋の可能性は少なく、口縁を上にした器と考えたい。その用途は「蒸器」や「濾過器」などが考えられるが、その場合に突出底部には布あるいは袋様のものをくくって孔を塞いだり下げたりしたものが。即断は避けるが、有孔鉢の用途を推測する上で一つの手掛かりとなる形態かと思われる。

**片口・董・ミニチュア** 片口は口縁が内湾し1カ所に注ぎ口を設ける器形で、本遺跡では小型の深鉢形(0341,0748)が知られる。蓋は口縁が緩く外反する低い円錐形で小皿形のつまみを付すものである。口径の相異から大小2種が存在する。ミニチュア形土器は手づくねの小型品で、甕・壺・鉢を形どったと推定されるものが見られる。

### B 型式分類

ここでは、前項で分類した各器種について、系統や時期の差異に基づくと思われる器形や文様の変化をもとに、分類を行う。

**壺A** 櫛描文のみを施文する。これは施文部位の相違によって、1口縁上端と頸部～肩部、2頸部～肩ないし胴上半、3口縁下半～胴上半、4口縁～胴上半に分けられる。また文様構成の相違により、a波状文と簾状文、b波状文のみに二分される。壺Aはこの分類基準により以下の7類に細分される(次頁図参照)。なお、この基準は小型甕と台付甕にも適用する。

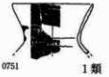














1類 文様1a。口縁端が内湾ぎみで、口縁やや長く、頸部は強い弓なりの曲線で屈曲する。全形の知れるものはない。口縁上端に1段の波状文、頸部に2連止め簾状文、肩に振幅の小さい波状文を施す。なお、口縁から頸部にかけて縦の刷毛目をわずかに残すものあり。

2類 文様1b。器形は1類と同じ。やや肩が張り、胴最大幅は中位より上にある。口縁上端に1段の波状文、頸部～肩に波状文を数段重ねて施す。なお口唇部に押圧を加えるもの(0291)は、頸部が緩く屈曲し、肩の張る古相の形態を示す。

3類 文様2a。口縁は直線状に開いて端部が丸く、頸部は「く」字状に屈曲する。胴最大幅は中位にある。頸部の簾状文は2連止めが主。胴上半の波状文は肩のみ2～3段と、全体に5段以上施すものがある。口縁無文が主だが、口唇部に篋や櫛描施文具による細かい刻みを巡らすものがある。

口縁～頸部と胴下に縦刷毛目を残すものがある。このうち、肩のみ波状文を施すものは、刷毛目

弥生土器分類図 1

文様組合せ 文様帯	a (波状文+簾状文)	b (波状文)	対応器形模式図
1 (口縁・頸～肩)	 0751 1類	 0098 2類	
2 (頸～胴上半)	 0031 3類   0045 4類	 0803 5類   1095 6類	  
3 (口縁下～ 胴上半)	 0086 4類	 1095 6類	
4 (口縁～ 胴上半)	 0621 6類	 0880 7類	

壺A (樽式) の分類

### III 遺物の特徴

を残し、器高に比べて口縁が短いという傾向を見せており(0831)、3類のなかでも古相を示すと考えられる。一方、胴上半部全体に波状文を施すものは、口縁が長くやや外反し頸部の屈曲も「く」字状に近く、新しい様相と考えたい。

4類 文様3a。器形は1、2類および3類古相に近い。施文部位は口縁中位以下肩部までの範囲で、振幅の小さな波状文と2～3連止めの簾状文を施す。口唇部に刻みを施すものもある。

5類 文様2b、3b。器形は4類と同じで、口縁中位以下肩部までの範囲に施文する古相のもの(0803)と、口縁が長く外反し頸部が強く屈曲する器形に、頸部以下胴上半に施文する新相のもの(1095)の2者がある。しかし口頸部の破片のみでは両者を判断するのは困難であり、ここでは一括して扱った。なお、1069は口縁が短く肩の張る器形で、間隔を空けた3段の波状文を施すことから、5類の中でも最古に位置付けられよう。また、0803は胴下半部に刷毛目を残しており、2類や3類との関連性が高い。

6類 文様4a。口縁長く、外反さみか直状に開くものが多い。頸部は「く」字状に屈曲し、胴部最大幅が中位から下位にある。頸部の簾状文は2連止めが主で3連止め以上の多連止めも少量見られる。なお、0762は口縁短く、端部が内湾し頸部屈曲の弱い形状で、波状文が間隔を空けて平行に施していることから、6類の中では古相を示すといえる。

7類 文様4b。口縁がやや長く、頸部は「く」字状に屈曲する。波状文はやや波形が乱れ、上下に重なる傾向が強い。類例少ない。

以上のように、壺Aは施文部位と文様構成を基準に細分を行い、これに対応する代表的な断面図を模式図として示した。口縁端の施文と内湾傾向、肩部文様の多段化と胴上半部の伸長に見られるように、文様の推移と器形の微妙な変化は相互に関連している。これは同時に時間的推移をたどると想定されるが、組列については後述する。

**壺B** 縄文施文、及び口縁に粘土紐積上げ痕を残して装飾効果としたものを一括した<sup>[3]</sup>。これらは従来赤井戸・吉ヶ谷系土器<sup>[4]</sup>、あるいはその影響を受けたものとして理解されてきた。主に文様の相違によって以下の4種に細分される。

1類 口縁～頸部に縄文を施す。口縁は緩く外反する形状で、体部形状は不明。粘土紐積上げ痕を残した上に施文するもの(0642)と、横位に整った帯状の施文を行うもの(0938)の2種がある<sup>[5]</sup>。

2類 頸部～肩部に縄文を施す。口縁は外反、頸部は弱い「く」字状に屈曲する。胴部は球形に近い。

3類 口縁に粘土紐積上げ痕を残し、装飾要素とする。器形は2類と同じ。

4類 口縁に粘土紐積上げ痕を残し、頸部～肩部に簾状文や波状文を施す。粘土紐積上げ痕を赤井戸・吉ヶ谷系の伝統ととらえれば、壺Bは同一系統で理解できる。4類は樽式母体の可能性もあり、3・4類はいずれも決めかねる土器群として分離も可能である。

**壺C** 無文のものを一括した。主に、口頸部が長く外反し、胴最大幅が中位にある器形を呈する。

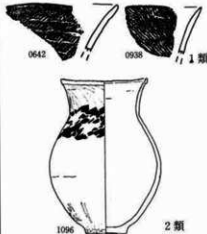
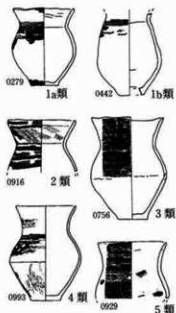

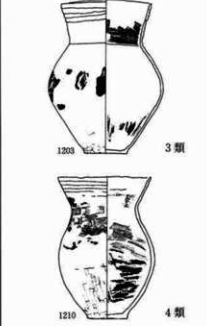
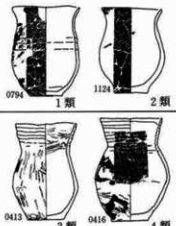
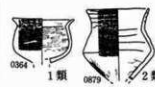

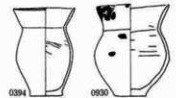
**小型壺A** 壺に準じて櫛描文土器を一括する。

1類 文様2a。頸部の簾状文は等間隔か2連止めで、胴上半部の波状文は2～4段が多い。器形には球胴に近いもの(0279)と、長胴(0442)がある。

2類 文様1b。口縁上位と肩～胴上半に波状文を施し、口頸部には刷毛目を残す。口縁形状は内湾する。壺A2類をそのまま小さくした形態といえる。

3類 文様2b、3b。壺A5類の小型型で、新旧2形態の存在も同じである。口頸部が長く、直線

弥生土器分類図 2

甕B (赤井戸・吉ヶ谷系)	小型甕A (樽式)	台付甕A (樽式)
 <p>0642 0938 1類</p> <p>1096 2類</p>	 <p>0279 1a類 0442 1b類</p> <p>0916 2類 0756 3類</p> <p>0993 4類 0929 5類</p>	 <p>0623 1類</p> <p>1052 2類</p> <p>1116 2類</p> <p>0528 3類</p> <p>0069 4類</p> <p>0889 5類</p> <p>0007</p>
 <p>1203 3類</p> <p>1210 4類</p>	<p>小型甕B (赤井戸・吉ヶ谷系)</p>  <p>0794 1類 1124 2類</p> <p>0413 3類 0410 4類</p>	<p>小型甕B(赤井戸・吉ヶ谷系)</p>  <p>0364 1類 0879 2類</p>
<p>甕C (無文)</p>  <p>0786</p>	<p>小型甕C (無文)</p>  <p>0394 0930</p>	

### Ⅲ 遺物の特徴

状に開き、頸部以下に施文する例(0756)は新しい様相を示すといえる。

4類 文様3a, 4a。壺A 4類と6類に相当する小型品。頸部簾状文は2-4連止めで、口頸部は長く直線状に開くものが多い。形態的には新旧の2者が混在する。

5類 文様3b, 4b。4類同様に新旧2形態が見られるが、必ずしも壺Aの5類と7類のような差異は見いだしがたい。

#### 小型壺B 壺Bに準ずる。

1類 口縁一体上半に縄文を施す。壺B 1類と同様に粘土紐積上げ痕の上に縄文施文するもの(0794)と、横位に整然と施文するもの(1314)とがある。口縁はわずかに外反するが、頸部のくびれが弱く胴部最大幅は中位から下位にある。

2類 胴上半部のみを縄文を施文する。この中には、口縁に粘土紐積上げ痕を残すもの(0862)も含めておきたい。1類に比べて頸部のくびれがやや強く、胴部も球形に近い。

3類 口頸部に粘土紐積上げ痕を残す。

4類 口縁に粘土紐積上げ痕、頸部-肩部に波状文、簾状文。

#### 小型壺C 無文で、器形は小型壺Aに近い。長胴(0394)と球胴(0930)の二者がある。

台付壺A 口縁は短く外反し、頸部は「く」字状に屈曲し、体部は上下に短く肩が張り底部に向かって急にすぼまる形状。脚部はやや外反する円錐形。口径は13-20cmで15cm前後が多い。櫛描文を施すものを一括する。これも壺Aに準じて、文様の相違により以下の五類に細分する。

1類 口縁上半に波状文、頸部に等間隔か2連止簾状文、肩部に波状文を施し、口縁上半はやや内湾する。口縁と肩に円形貼付文を付すもの(0843, 1052など)あり。

2類 1類と同一形状で、頸部簾状文の替わりに波状文を施す。

3類 頸部に簾状文のみを施す。口縁は1・2類より強く外反する。流量によって大中小の3形態の存在が予想されるが、資料不足のためここでは一括した。このうち小型品(0492など)は「小型台付鉢1類」との区別が困難で、ここでは口径によって分けた。

4類 3類に近い形状を呈し、肩部に波状文を施す。

5類 頸部に2-3連止簾状文か直線文、口縁全体と肩部に波状文を施す。円形貼付文を付すもの<sup>7)</sup>あり。

#### 台付壺B 壺Bに準ずる。

1類 口縁短く外反し、頸部は強く「く」字状に屈曲。肩の張りがなく体下半に最大幅がある。頸部直下に一条の縄文帯。

2類 口縁に粘土紐積上げ痕を残し、肩に波状文を施す。体部中位が強く張り出し、下半がすぼまる形状は台付壺Aに近いが、口縁が上方に長くのびる点で異なる。

大型壺A 大型壺は、口縁が大きく開き頸部が細く、最大幅が中位にある「算盤玉」形の胴部をもつ形状で、このうち櫛描文を施すものをAとする。また大型は口径20cm以上のものとした。

1類 頸部に2連止以上の簾状文、肩に5段以上の波状文を重ねる。

2類 1類の頸部簾状文の替わりに波状文を施す。

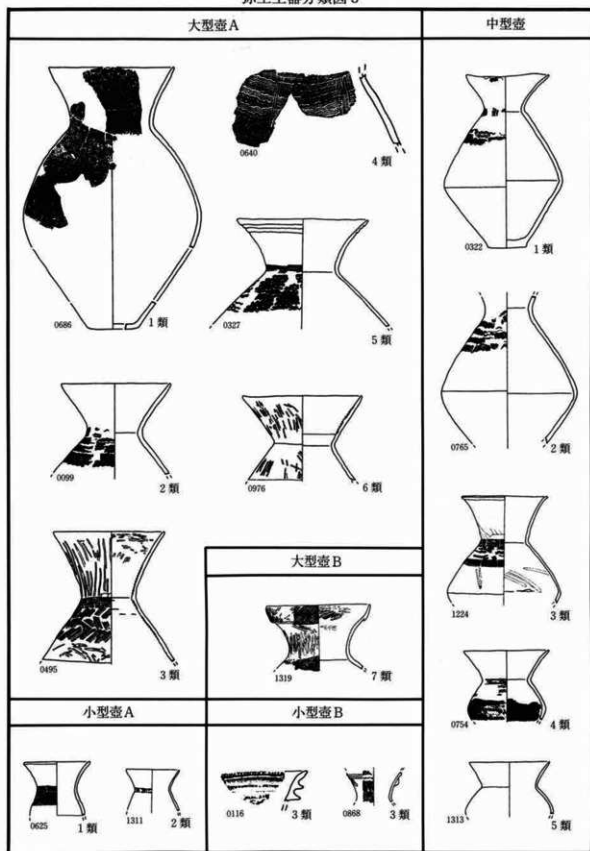
3類 簾状文ないし波状文と横位羽状文を組み合わせる。

4類 肩部波状文に直線文を垂下させる。類例は少ない。

5類 器形と文様は1類と同一で、口縁に粘土紐積上げ痕を残す。壺と異なり、壺では明らかにA類の器形を踏襲しているため、こちらに含めた。



弥生土器分類図 3



### Ⅲ 遺物の特徴

6類 器形は1～5類と同様で無文。

**大型壺B** 幅広い折り返し口縁に、弓状に屈曲した頸部をもつ器形で、口縁と肩に斜縄文を施す。類例少なく、明確なのは庚申山地区の1例(1319)のみである。なおこれは複節斜縄文(原体LR L)を施している。

なお、壺装飾要素として赤彩したものがA類に見受けられる。また口縁の変化については、単口縁が主体となる他に断面が薄い「蒲鉾」形の折り返しが見られる。これには刻目を巡らすのが多く、波状文や貼付文は少ない。ただし断片資料が多いため、ここでは分類基準とはしなかった。

**中型壺** 口径18cm前後、器高40cm以下と思われるものをまとめた。

1類 大型壺と同一の器形で、頸部に簾状文、肩に4～6段の波状文を重ねる。口縁は無文が主だが0322では波状文を1段巡らす。

2類 1類と同一器形で、波状文のみを施す。

3類 頸部と肩に簾状文、その間に乱れた波状文を施す。1・2類に比べて口頸部が長く直線状でくびれも「く」字状に近い。また胴部形状も上下に短くなり「算盤玉」形に近い。

4類 口縁形状は3類そのまま、胴部が小規模な球形に近づく。頸部～肩に乱れた波状文を施す。容量からすれば、1・2類の1/3以下になろう。

5類 4類の器形で、無文。

**小型壺A** 口径15cm前後のもので、頸部～肩に櫛描文を施す。

1類 口縁は緩く外反して開き、頸部のくびれは弓状。肩の張りは弱く細長い胴をもつと思われる。頸部に簾状文、肩に波状文を施す。0625は内面に赤彩を施す。

2類 器形は1類とほぼ同じで、頸部に簾状文のみ施す。

**小型壺B** 全体の器形は小型壺Aに近似するが、口縁に鐮状の粘土帯を2～3段巡らせて端部に刻目を加え、胴部には縄文を施す。0868では口縁下に一对の耳状貼付文を付す。吉ヶ谷式に類例がみられる<sup>16)</sup>。

**短頸壺** 主に口縁形状の相違から以下に二分される。

1類 口唇部上面に蓋受けのための平坦面を作るのが特徴。口縁に小孔を穿つ。頸部には簾状文を施す。なお0441は口唇部が強く弓なりに外反することで、上面に平坦面を作っている。これは肩に波状文を加える。

2類 口縁全体が弓なりに外反して、口唇部はまるく肥厚する。頸部に簾状文のみを施すが主だが、波状文を加えるもの(0952)も見られる。

なお、1・2類とも赤彩が多く、全体の約5割を占める。

**小型短頸壺** 短頸壺に比べてやや変化に富むが、形状や文様の特徴から以下に三分する。


















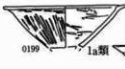




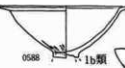
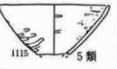


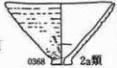
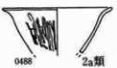


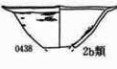














1類 口縁端が強く外反あるいは屈折し、上面に蓋受けの平坦面をつくる。頸部のくびれは弱く、下膨れの体部となる。1217は口縁下に鐮状の粘土帯を巡らせて装飾としている。櫛描文などの文様は見られないが赤彩品が多く4例中3例を占める。

2類 短頸壺2類の小型品といえる。口縁に蓋受けの平坦面は見られず、体部も肩の張る形状を呈する。

3類 口縁はほぼ直立し、頸部のくびれは非常に弱い。体部形状は1類に近い。頸部に簾状文を施す。赤彩例は1類に4例中3例と多いが、2～3類では見られない。また蓋との緊縛孔が1類にしか認められない。これらの点で、この両者は異なる用途を想定すべきか。

**無頸壺** 全形知り得ないが、球形に近い体部に小さな口縁をもつ器形と推定され、口縁にはしばしば蓋との緊縛孔を穿つ。口縁形状から二分される。

弥生土器分類図 4

短頸壺	小型短頸壺	無頸壺	小壺			
 0170 1類	 0937 1類	 0009 1類	 0789 1類  1137 2類  0486 3類			
 0441 1類	 0844 2類	 0969 2類	 0684 4類  0785 5a類  1236 5b類			
 0091 2類	 0074 3類	小型台付鉢				
		 1206 1類	 0479 2類	 1127 3類		
高坏		鉢	有孔鉢			
 0199 1a類	 0635 4類	 1113 1類	 0393 1類	 0834 2a類		
 0588 1b類	 1115 5類	 0787 2類	 0865 2b類	 0368 2a類		
 0485 2a類	 0335 6類	 0622 3類	片口			
 0438 2b類	小型高坏		 0233 3類	 0748		
 0890 3類	 0985 1類	小型鉢		蓋		
	 1039 2類	 0777 1類	 1114 1類  0070 2類			
		 0271 2類	ミニチュア			
		 0214 3類	 0064	 0672	 0277	 0872

### Ⅲ 遺物の特徴

1類 口縁が小さく外折する。図示した0009は肩部に波状文を施す。

2類 口縁が上方に反り、体部は肩で屈曲する。図示した0969は赤彩品。

**高坏** やや内湾ぎみに開く坏部と円錐形の脚部の組み合わせを基本的形態とし、口縁形状の相違により、以下に六分される。

1類 口縁が外折して水平に開くもので、この部分が肥厚するもの a (0199) とそのままのもの b (0588) がある。

2類 口縁が外折して斜方に開く。本類に含まれる0438は口縁の4カ所に突起を設ける例であるが、他類ではたまたま認められなかっただけで、本類の特徴ではない。

3類 口縁が小さく外折する。

4類 口縁が緩い曲線で外反する。

5類 口縁は体部から外反せず、そのまま内湾ぎみにのびる。

6類 口縁は体部から内屈し、この面に波状文と刻目を施す。

なお1～5類はいずれも赤彩が多く、図示資料全体の7割以上を占める。なお脚部については、背の高い円錐形、正円錐形、裾を引く円錐形などの変化があるが、脚のみの破片が多く、台付臺などの高坏以外の器種と混同する恐れがあるため、ここではあえて分類基準としなかった。

**小型高坏** 口径15cm以下で数量少なく変化もあまり見られない。

1類 体部がやや内湾し口縁変化は見られない。高坏5類の小型品といえる。

2類 体部がほぼ直線的に開き、口唇部は薄くなる。

**鉢** 逆載頭円錐形が基本的形態で、無文を主とするが、赤彩もしばしば見られる。口径15cm以上で、更に容量からは大～小の変化があるが、ここでは口縁形状の変化から三分する。

1類 口縁が外反して水平に開く。

2類 口縁が緩く外反する。

3類 口縁が内湾ぎみか、直状にのびる。

**小型鉢** 小型高坏と同様に口径14cm以下のものを一括した。口縁の変化は少なく体部の形状で三分される。

1類 口径に比べ底径小さく、体部下位ですぼまる。赤彩は約5割を占める。

2類 1類より底径大きく、体部は直線的に開く。赤彩は2割以下と少ない。

3類 体部内湾し、底径が小さく、器高が低い。

**小壺** 口縁短く外反し、頸部のくびれ弱く、胴中位が膨らむ大きめの平底の器形。臺に準ずる文様の相違で以下に五分される。

1類 頸部に簾状文を施す。

2類 口頸部に波状文を施す。

3類 頸部に簾状文、口縁と体部上半に波状文を施す。

4類 口縁に粘土継積上げ痕を残す。他例に比べ、口縁長く胴は球に近い。

5類 無文。1～3類と同一の器形 a (0785) と、やや器高が高く体部下半がすぼまる b (1236) がある。

このうち後者については、他例に比べ頸部のくびれが強いのが特徴である。

**小型台付鉢** 全形を知るものは少ないが、主に文様の相違から三分される。

1類 頸部に簾状文を施す。口縁は短く外反し、肩の張る体部をもつ。

2類 1類と同一形状で、頸部に波状文を施す。

3類 口縁がやや長く、頸部のくびれは弱い。体部下半が張る。無文。

なお、赤彩品が数点見られるが、いずれも1類に属する。

**有孔鉢** 円錐形を伏せた形状で底に一孔を穿つのを基本形態とする。無文が主だが、口縁を折り返し施文したものの(0367)も少数見られる。体部と底部の形状から以下に三分される(下図写真参照)。

1類 逆円錐形で、小さな平底を呈する。

2類 逆円錐形で、底部は小さく突出する。突出の度合によって、わずかなものa(0934,1016など)と、外反するものb(0865など)がある。なおa類には粘土結核上げ痕を残すもの(0368)も見られる。

3類 体部内湾し、やや大きめの平底をもつ。

**片口** 口縁-体部が内湾した小型の深鉢形で、1カ所に注ぎ口を設ける。この部分が筒状になったものが1点見られる。無文。

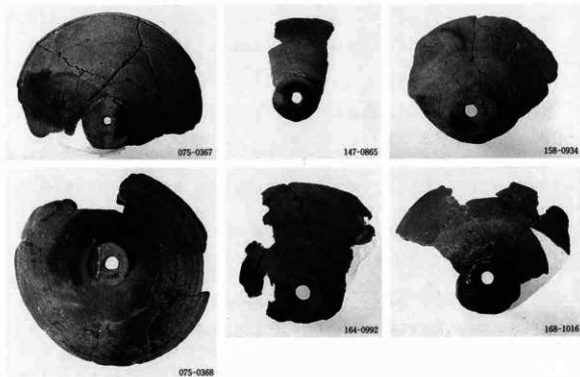
**蓋** 裾の広がる円錐形で、小さな皿形の紐を付す。いずれも身となる器種の口縁と合わせるため、口唇部下面は外反か面取りによって平坦に作り出されている。無文。大きさにより二分される。

1類 口径20cm前後。

2類 口径14cm前後。

この二者は、短頸壺に見られた大小二者などに対応するものだろう。

**ミニチュア** いずれも手捏ねによる成型で、無文・無彩である。壺(0064,0672)・無頸壺(0277)・鉢(0872)・高坏(0179)など、ほぼ主要器種をモデルとしている。ただし壺については不明。また、モデル器種の特定できないものも多い。ここでは特に分類を行わなかった。



有孔鉢底部

### Ⅲ 遺物の特徴

#### (3) 土器の編年

##### A 型式組列

甕Aは、口縁上端と頸部一肩に文様帯をもつ1類と2類が最も古い形態を示す。そして、口縁一肩上半全体に施文する6類と7類が最も新しく位置付けられよう。これは、口縁上端文様帯の消失と、頸部一肩上半部文様帯の拡張という推移で理解される。器形もこれに呼応して、口縁上端の内湾形状から直線形状への変化、口頸部が長くなり胴最大幅が下がるという傾向を見せている。5類では波状文の施文部位が頸部にあり屈曲の弱いものを古相、肩以下に施文し頸部屈曲の強いものを新相と捉えた。口縁形状も、前者では端部が内湾きみでやや短く、後者が大きく外反して長いという傾向を示している。なお、7類は6類の頸部簾状文が消略された新出のものとも理解できるが、本遺跡においては簾状文のない文様b系列が当初から存在していたと考えられるため、両者に時間差はないものとする。

以上に見た甕Aの文様帯と器形の変化における相関関係は、甕類他の器種においても認められるため、これを主要な指標と設定して組列を行うこととした。なお、簾状文における「等間隔止め」から「二連止め」更に「多連止め」への変遷や、波状文における短い波長で整った帯状施文から乱れた重複施文への変遷は、全体的な変化傾向としては認められるが、本遺跡出土土器においては必ずしも新旧をわかつ要素ではないため、副次的な指標として扱った。また甕1・2類に見られる、口縁と胴下半に残る刷毛目整形も新しくなるに従って消失すると想定し、これも副次的な指標として扱った。

以上に掲げた指標をもとに、甕Aの組列を次のように想定する。

- (a) 1類→3類→4類→6類
- (b) 2類→5類(古)→5類(新)→7類

小型甕は主な施文部位である口縁一肩上半部が狭いため、甕Aほど文様帯における明瞭な相違は見られないが、変化の方向は同じと考えられ、その組列は次のように想定する。a系では1類の祖型として、内湾する口縁上端に波状文を施すもの(甕1類に相当)を想定しているが、本遺跡では認められなかった。

- (a) ○→1類→4類
- (b) 2類→3類→5類

台付甕Aは甕Aと同様の変遷で1類→5類と想定されるが、3類と4類との系統的先後関係は不明である。

甕B、小型甕Bは、その文様と器形の特徴から赤井戸・吉ヶ谷系及びその影響を受けたものとした。文様である縄文は、横位の帯状に整然と施すものからやや乱れたものへ変化し、器形は粘土紐積上げ痕を残す頸部しまりの弱い長胴の形状から頸部の強くくびれる球胴に近い形状へ変化すると想定される<sup>27)</sup>。このことから、B1類は古相と考えられる。一方B2類は、甕A3～5類と同様に肩部のみへの施文へ移行したと解釈すれば、新相と考えられよう。また、B3類は粘土紐積上げ痕のみを特徴とするが、器形に古相と新相が見られる。

大型甕A・中型甕Aについて、分類要素としてあげた文様の相違は同時期におけるバラエティーと捉え、先後関係の把握には器形を比較するほうが有効と考える。すなわち、口頸部が長く弓なりに屈曲する下彫れの「算盤玉」形の胴部をもつ形状を古相とし、口縁が上下に短く直線的に開き、頸部が「く」字状に屈曲して球形に近い胴部をもつ形状を新相と想定する。ただし、全形のわかる資料が少ないこと、甕ほど変化の度合いが著しくないことを勘案すれば、明確な組列を与えることは難しい。ここでは、中型甕の1・2・3類→4・5類の組列に止めておく。

短頸甕は、口縁上面に蓋受けの平坦面が明瞭なものから次第に形骸化していくと考え、1→2類の組列を

想定した。この中間形態として口唇部が強く外反するもの(0441など)が位置付けられよう。

高坏は、主に1類に見られる外折口縁の簡略化と、分類はあえて行わなかったが背の高い脚から裾の広がる低い脚への変化で推移を追うことができよう。すなわち、1類→2類→4類と組列を想定できる。なお、3・5類は1類より後出的であるが後期の初めから存在しており、そして後続する形態が見られないことから、後期を通してほとんど変化せずに存在したと考えられる。

有孔鉢は、2類に特徴的な突出する底部の変化に注意すべきだろう。本来ならばその意義を明確にしなくては変遷の根拠として不十分であるが、特殊な突出底から一般的な平底への回帰という変化は考えにくく、ここでは平底から何らかの特殊な機能のために突出底への変化を果したと解釈したい。従って組列は、1類→2b類と想定する。2a類は中間形態でどちらともいえない。ただし同時存在した異用途器種の可能性もある。なお、有孔鉢3類は中期後半から後期全般をととして見られ、有効な先後関係を示す指標は明確ではない。

上記の器種以外の小型壺・小型短頸壺・無頸壺・鉢・小型鉢・小壺・小型台付鉢・片口・蓋・ミニチュア形土器については、系統的な推移変化が少ない、あるいは比較資料が少ないなどの点から、ここでは組列を想定しなかった。

## B 時期区分

前段で試みた各器種の組列については、一括遺物の器種組成によって検証することができる<sup>10)</sup>。また、重複遺構の先後関係をもとにそれぞれの一括遺物を比較したところ、各器種の組列に矛盾のないことが判明した。この組列に基づいて本遺跡出土弥生土器の位置付けを考えてみたい。まず、最古段階として壺、小型壺、台付壺のA1類及び2類、短頸壺1類、高坏1類が上げられる。一方最新段階としては、壺A6類及び7類、小型壺A4類及び5類、台付壺5類、短頸壺2類、高坏4類を上げられよう。大型壺、中型壺については、いずれも頸部から肩部にかけての簾状文と波状文施文という画一的特徴で捉えることができ、口縁や胴部形状などの器形的な変化以外に大きな相違は見いだせない。

これらを従来の編年観<sup>11)</sup>に従って位置付けると、後期の中葉-後半(飯島・若狭,1988の2-3期、三宅・相原,1982のII-III)に包括され、前後期に大きく二分される。しかしこの二期分類では本遺跡の集落分析には不十分で、集落景観復元に必要な同時存在の遺構を抽出するためには、更に細分された時間軸の設定が必要である。ここでは、前段で検討した土器型式の組列と調査で確認された遺構重複関係をもとに、遺構一括遺物の対比を行い、これに先後関係の序列を与えて下記の7時期区分を設けた。ただし、各期にまとめた土器群はそれぞれ細別型式として成立しうる可能性をもつが、ここでは時間軸を区分する指標としてのみ扱っており、必ずしも普遍性をもっている訳ではない。従って、この土器による時期設定は本集落遺跡の時期別分析にのみ有効なのであって、当地における後期弥生土器の変遷過程の一例として認識している。

- 1期 壺Aは1・3・5類で構成され、いずれも口縁短く内湾ぎみの古相を示すものが主体である。胴部簾状文は2連止めがすで見られる。また高坏は背の高い円錐形の脚を特徴とする。短頸壺と有孔鉢はいずれも1類で、古い形態を示す。赤井戸・吉ヶ谷系のB系列の壺類と小型品がほとんど見られないことはこの時期の器種組成の特徴として捉えられよう。
- 2期 壺Aは1期とほぼ同じ構成だが、新たに4類が現れる。小型壺B2類と小型台付鉢2類が少数ではあるが、新器種として出現する。
- 3期 壺Aは3類と5類に口縁が長く外反する新形態が現れる。また、高坏では背の高い裾の間く円錐形の脚が現れる。器種組成では、小型高坏、小壺などの小型品やわずかだが壺B1類か小型壺B1

III 遺物の特徴

	壺	短頸壺	高坏	鉢	小壺 高器鉢	有孔鉢 片口	蓋	壺口 片口
1	0731	0058	1070	1113	0303	1114		
2	0601	0022	0588		0788			
3	0603			1115				
4	0605	1224	0488	0787				
5	0621	0691	0635	0777	1137	0685	0794	0413
6	0753	0754	0685		1206	0782	0415	0383
7		0373	1273					

時期区分と主要器種の消長 (群線は各器種・各類の出現と盛期を示し、消滅時期は表わしていない)



類が伴うのが注目されよう。

4期 甕Aは3類と5類が主体で、3期に現れた新形態が主流となる。また頸部縷状文も新たに3連止めが見れる。高坏では1類の後出形態である2類に変わり、脚も背の高い円錐形は見られなくなる。小型品では鉢が加わり組成器種として目立つようになる。また有孔鉢に底部突出ぎみの2a類が見れる。

5期 甕Aは3類新相が主体でこれに新たに現れた6・7類が加わる。壺と甕の胴部は最大幅が中位にある「算盤玉」形が主。また、短頸壺2類や台付甕4類に見られるように、口縁が単純に外反するものが主流となる。高坏では背の低い円錐形の脚が見られる。この時期から赤井戸・吉ヶ谷系の甕Bが確実に伴うようになる。また、小型鉢、小型台付鉢、小型高坏など小型品が主要器種として確立する。

6期 壺、甕類に共通する器形上の特徴として、大きく直線的に開く口縁の出現と球形胴への移行、そして頸部の「く」字状屈曲の普遍化があげられる。甕Aでは6・7類が主流を占め、また新たに口縁の粘土紐積上げ痕を残す甕B3・4類と小型甕B3・4類が出現する。前段階に続き小型品が主要器種を構成する。

7期 壺、甕類はほとんどが球形胴で器高が低くなる。甕Aは6期とほぼ同じだが、口縁が短くなる傾向がある。高坏は新形態の4類が見れ、脚は低い円錐形で裾の開く形態が主となる。器種組成としては小型甕が煮炊形態の主流を占めるのが特徴。壺と甕に見られる櫛描文は退化傾向を見せ、粗雑な施文が目立つようになる。有孔鉢や小型品にも赤井戸・吉ヶ谷系の縄文を施すものが見れる。

以上の7期に区分された後期の土器群は、漸移的かつ継続的に変遷したと理解され、この間に時間的断絶は認められない。ここで、榛名山南東麓の土器を対象に器種毎の組別と一括資料の分析によって様式土器を3期区分した飯島・若狭両氏の編年(飯島・若狭,1983 以後飯島・若狭編年と呼ぶ)との対比を試みよう。

さて、従来の様式土器の編年観では、甕A6類の出現を後期中葉と後半を分ける重要な指標として時期区分が行われてきた<sup>20</sup>。飯島・若狭編年においても、2期と3期を区分する主な根拠としている。これを指標として編年を対比させると、上記の時期細分案は1～4期、5～7期に大きく2分され、それぞれ飯島・若狭編年の2期と3期に相当することになる。ただし、これは飯島・若狭編年で設定された榛名山南東麓での時期区分にそのまま一致するものではない。飯島・若狭編年で2期の代表とする高崎市正観寺遺跡A1号住<sup>21</sup>や同市引間遺跡50号住<sup>22</sup>、群馬町井出村東遺跡53・57号住<sup>23</sup>の例は、甕Aにおいて内傾あるいは内湾する口唇部と肩の張る器形が定型化しており、口唇外面に波状文を施すことが多い。また、頸部縷状文も等間隔止めが主体である。これに比べて、本遺跡1期の甕Aは、口唇部の形状と文様帯が形骸化しており、頸部縷状文も2連止めがすで見られることから後出的と考える。この比較から、本遺跡1期は飯島・若狭編年の2期代表例の直後に位置付けるべきものとする。そしてこれに続く本遺跡2～4期は飯島・若狭編年の2期から3期への移行期に相当し、これによって後期中葉から後半にかけてのスムーズな変遷過程が理解されることと思われる。

さて、本遺跡では1期以前の弥生土器として、中期後半の竜見町式土器が出土しており、やや古い沈線文を施すことから同型式の最新段階に位置付けられる前橋市清里・庚申塚遺跡<sup>24</sup>出土土器よりはやや古い様相を示す(次頁図参照)。従って、本遺跡では清里・庚申塚遺跡併行期から飯島・若狭編年の1期と2期前葉にかけての時期(中期末～後期前半)が全く欠落しているといえる。ところが、後に富岡市教育委員会によって実施された本遺跡の南側丘陵斜面を100mほど登った頂上地点の調査では、この欠落する後期2期前葉の住

### Ⅲ 遺物の特徴

居跡(30-32号住)が検出されており<sup>95)</sup>、頂上から丘陵斜面を含めて考えれば、本遺跡の集落形成は後期の初頭までさかのぼることが明らかとなった。また小破片ながら中期後半の土器を出土する住居跡も確認されており、その成立を更に古くさかのぼらせる可能性も出てきた。更に、本遺跡の立地する丘陵から見下ろせる北側の下位段丘にある中高瀬遺跡からも後1期～2期前葉の土器が出土している。このように、本遺跡の周辺にまで視野を広げた場合、少なくとも後期前半段階については編年上の欠落はないと言っても良い。

本遺跡時期区分の後半にあたる5～7期に関しては、飯島・若狭編年の3期とほぼ一致すると考えてよい。ただし、本遺跡5期は堯A6類の出現期であり、煮炊形態としては堯A3・5類が依然として残ること、胴部形状が「算盤玉」状を呈することなどから、飯島・若狭編年の3期の代表例として掲げた高崎市引間遺跡44号住<sup>96)</sup>、群馬郡倉瀬村水沼遺跡2号住<sup>97)</sup>などに比べて古く位置付けられ、飯島・若狭編年の2期からの様相を残す段階と考えられる。また、7期は本遺跡での弥生時代最終段階に位置付けられるが、土器の編年観からはこれに後続するものとして、樽式土器の器制が崩れて小型化・球形化・文様の形骸化が進み、高坏や小型器台など一部の器種に外束系土器が主要器種として加わる時期<sup>98)</sup>を考えたい。

### 弥生時代中期の土器



### 時期別遺構表

弥生時代に属する住居跡について時期別に分類し、その内訳を記した。なお、出土遺物が少ないため推測の優るものは( )で示した。ここに記載していない遺構は時期を限定する根拠が得られなかったものである。

飯島・若狭 1988	時期区分	対応遺構	他遺跡での対応例
樽1期	○		高崎市元島名3住
	○	富岡市調査分30-32住	甘楽町笹Ⅵ-1住 高崎市正観寺1住
	1期	068,073,077,184,199,214, (085),(087),(178)	
	2期	050,093,115,119,161,177, 210,(004),(196)	
	3期	019,046,066,070,086,142, 203,213	
	4期	048,074,076,109,158,174, 208,(084)	
樽2期	5期	014,051,062,067,079,088, 155,164,175,185,200,209, (094)	
	6期	006,015,047,080,113,114, 118,149,150,160,194,207, (031)	
	7期	071,075,083,110,147,154, 168,206,218	
終末期 -古墳初	○	KJ04, KJ08, KJ14	高崎市熊野堂Ⅰ13住 高崎市正観寺Ⅴ85住

観音山地区では不明であったが、西側に隣接する庚申山地区KJ04・KJ08・KJ14号遺構がこの時期に相当する可能性がある。県内では高崎市野野堂遺跡第1地区13号住<sup>28</sup>や同市正観寺遺跡K85号住<sup>29</sup>、前橋市西大室遺跡群G区96・97号住<sup>30</sup>がその代表例として上げられる。観音山地区の中で見る限りは、この時期が欠落しており、次に現れる土器群は弥生土器としての特徴を全く持たない、言い換えれば当地方の弥生土器と系統的に断絶する古式土師器の一群であった。

ちなみに、上記の7時期区分と従来の編年との関連を示し、これに基づいて時期別に分類した本遺跡検出遺構を表に掲げる(前頁)。

#### (4) 今後の課題

本遺跡の後期弥生土器の分類と編年上の位置付けについては前項で述べたが、この作業過程において、当地域の弥生土器を解明する上でいくつかの興味深い問題を見いだしたので、ここに呈示する。ただし、細かな分析と考察は別の機会に譲り、ここでは検討すべき課題の提起に留めることとする。

#### A 地域色について

まずは、土器の地域色の問題である。櫛式土器は器種、器形、文様ともに画一性の高い土器で、地域色の抽出はなかなか困難であるが、後期中葉以降に遺跡数が増加し、各地域に分布上のまとまりを見せるようになると、それぞれの地域で一定の結び付きをもつ社会が形成されると考えられている。その社会単位をおおづかみに把握するための前提作業として、土器地域色の分析は重要である。

さて、本遺跡の土器の地域色を抽出するにあたり、あらかじめ地域を設定する必要があるが、山地・丘陵によって挟まれ地形的に完結する富岡市から吉井町にかけての鍋川流域を想定しておくのが妥当だろう。この地域における公表資料は決して多くなく、他地域との比較は不十分ながら、飯島・若狭両氏によれば、鍋川流域の後期前半における甕の胴部にしばしば施される櫛描斜格子文は他の地域に見られない際立った個性としてとらえうとする<sup>31</sup>。また、外山和夫氏もこの文様にふれ、鍋川流域圏内にある甘楽町笹遺跡<sup>32</sup>や吉井町祝神遺跡<sup>33</sup>の土器について、高崎市周辺地域の土器と同様に理解する井上・柿沼両氏の考え方<sup>34</sup>に疑問を差し、埼玉県北部に分布する岩鼻式土器<sup>35</sup>との類縁関係を示唆した<sup>36</sup>。

ひるがえって本遺跡の土器を見ると、注目された斜格子文は認められないが、これは時期的に新しいためと考えられる。むしろ地域的特色として注目されるのは、甕類の口唇部における細かな刻み目であろう。これは、先に分類した各類のいずれにも見られることから、後期中葉から後半を通して存在した地域的な文様として捉えられる。これは中期後半には縄文押捺とともに古相の文様要素として普遍的に見られるのだが、後期に至ると、他地域では退下・消滅の一途をたどる。ここに見られる刻み目手法が、前段階からの技法をそのまま継続しつつ来たものが、あるいは南関東地方などとの交流により影響を受けたものかは、にわかには決め難いが、ここでは鍋川流域に目立って多い点を指摘しておく。

また口縁に関して言えば、甕類と壺類に装飾要素として粘土帯を付加する折り返し口縁の技法があまり発達せず、単口縁が主流である点も地域色として上げられよう。この折り返し口縁技法は権名山東南麓地域に特に顕著で、本地域の土器と好対照をなしている。

文様では、大型壺A3類に見られる横位の櫛描羽状文が目立つ。けっして主体的な文様ではないが、権名山東南麓など他の地域に比べれば多いといえる。この文様を多く採用する背景として、これに類する文様の発達した佐久地方との地理的近縁関係を当然考慮しなければならない。ただし、本地域では壺の胴文様に限定されるのに対して、彼地では壺に多い「横位羽状の斜行直線文」と呼称される(のが相違点である。このことから、文様の直接的な模倣ではなく、影響を受けながら本地域において生み出されたオリジナル文様と

### Ⅲ 遺物の特徴

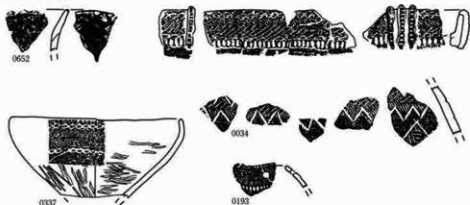
捉えておきたい。この他に、口縁無文の甕が卓越し新しい段階まで残存する可能性が高いこと、壺文様に鋸歯文が極めて少ないこと等が他の地域との異質点としてとらえられる。しかしこれらは限られた時期ゆえの特長ともいえるため、前後の時期を含めた後期全般を通しての地域抽出が今後の課題となる。

#### B 外来系土器について

ここでは、赤井戸・吉ヶ谷系土器と南関東系他の外来系土器について触れる。赤井戸・吉ヶ谷系土器は、本遺跡で甕B・小型甕B・台付甕B・大型壺B・小型壺B類とし、また分類はしなかったが有孔鉢や小壺、小型台付鉢にも見られ、樽式と同様の基本的な器種は揃っている。この点からすれば、外来系とはいえっして本遺跡においては客体的な存在とはいえない。赤井戸・吉ヶ谷系土器は縄文施文を最大の特徴とする後期土器で、その相型式や系統については一部中期にまで遡りうる資料も指摘されるが<sup>28</sup>、現段階では十分な解明はなされていない。しかし、少なくとも鍋川流域にその源流は見出しがたく、その本来の故地が推定されている埼玉県北～中央部あるいは赤城山東南麓のいずれであるにせよ、弥生時代後期のある時点で本地域に参入して来た新しい土器群であるのは間違いないだろう。

では、いつからどのように入って来たのか。前項で試みた時期区分によれば、本遺跡の5期から明確な共伴例が見られる。この時期には、赤井戸・吉ヶ谷系そのものの甕B1・2類が単体で樽式主体の土器群に伴う様相を見せる。いわば搬入品のな色彩が濃いといえよう。ちなみにこの時期は、甕A6類の出現や小型器種の定着など前段階とを分ける画期にあたっている。従来の編年観でいえば、後期の第3段階の初めに相当する。そして次の6期以降は、数量が増えて完全に定着する。また、本遺跡での存在は明確でなかった(図示したのは0801のみ)が、富岡市南蛇井増光寺遺跡116号住例<sup>29</sup>、富岡市額部出土例<sup>30</sup>で見られるような櫛描文と縄文を同時施文する折衷土器もこの時期以降の所産と考えられる。甕以外の有孔鉢や小壺、台付甕などの他の器種が樽式に混在して見られるようになるのもこの時期からである。この状況は前段階の単品搬入に対して、土器様式そのものの導入と理解すべきだろう。折衷土器に関しては、文様や製作技法の特徴から、赤井戸・吉ヶ谷系、樽式のいずれもが母体として存在したと考えられ、どちらかの一方的な模倣とは考えにくい。この異なる土器様式の混在現象を、土器製作者の問題として置き換えることができるならば、これは出自や伝統を異にする個人あるいは集団の同一集落における共同生活を示すものととらえる事も可能だろう。

#### 外来系土器



ただし、土器から見ると、赤井戸・吉ヶ谷系のみを出土する遺構は見られないことから、彼らが本集落内で独立性をもちえたとは考えにくく、あくまでも婚姻などを契機とした小人数の参入と捉えるべきだろう。では、この交流のあった赤井戸・吉ヶ谷系土器の主体である集団の存在をどう考えるか。

これに最も関連が深いと思われる集落跡としては、本遺跡と同一丘陵上の東方約1.7kmにある内匠上之宿遺跡<sup>95</sup>と西西南約2.5kmの箱戸原Ⅰ・Ⅱ遺跡<sup>96</sup>が上げられる。前者は本遺跡の6～7期に相当し、後者は土師器を伴うことからこれより一段階新しいと考えられる。いずれも少数の住居から構成される極めて小規模な集落だが、主に赤井戸・吉ヶ谷系土器を使用しており、また櫛式との接触を示す土器が存在することが注目される。本遺跡とは反対の様相を示しているのだ。このことから、これら三遺跡の間には密接な相互交流があったことが十分に推測される。ここでは土器論を本旨とするため、集団関係の具体相の解明については別の機会に譲るが、本遺跡に見られる赤井戸・吉ヶ谷系土器の様相の変遷が、本地域における赤井戸・吉ヶ谷系集団の位置付けや集団関係を微妙に反映しているのは間違いないだろう。

南関東系では、弥生町式土器と思われる破片が僅かながら見られる(前頁図0034、0193、0337)。節の細かい羽状縄文を施文しており、胎土は総じて砂ばく粗い。いずれも5期以降(飯島・若狭編年の3期段階)に伴っており、従来群馬県内では初期土師器段階に伴う例は知られていたが<sup>97</sup>、それを更にさかのぼる資料として重要である。前頁図0652については、わずか一点であったが、口縁内面に施された羽状構成の櫛描短線文から、北陸地方の中期後半に位置付けられる小松式に関連する土器かと推定している。このような小破片では、軽々な判断は下せないが、すでに南接する埼玉県にはその存在が知られている<sup>98</sup>ことから、本県でも発見される可能性は高く、今後注目しておく必要がある。

### C 器種構成について

本遺跡出土弥生土器の器種構成に見られる特徴は小型器種の定着だろう。これは本遺跡独自の現象ではなく、むしろ後期における普遍的な特徴と思われるが、従来はあまり言及される事がなかった<sup>99</sup>。ここで示す小型器種とは、小型甕・小型壺・小型短頸壺・小型高坏・小型鉢・小壺・小型台付鉢である。このうち小型甕、小型壺は中期後半から存在が知られているが、他は後期から新たに出現した器種と考えられる。

この新器種の中で注目したいのは小型鉢である。本稿では器形のわずかな相違から3分類を試みたが、大きさはほぼ画一的で、図示資料25点の平均値は、口径12.7cm(10.2～14.5cm)、器高6.6cm(4.5～7.5cm)、容量370cc(200～570cc)である。最大と最小のものに数値上の開きがあるが、これはそれぞれ2点ほどしかなく大部分は平均値付近に集中する。本遺跡における器種の明確な図示資料500点を対象に各器種の数量比率を求めたところ、小型鉢は全体の約6%にあたる。これは甕類40%、壺類30%、高坏9%に次ぐ数量で他の小型器種を凌駕し、少数ながらも高坏と並ぶ代表的な器種として存在したことが推測される。また時期を追って出現率の変化を見ると、1～4期には3%強であったのが、5～7期には9%と急増していることから、基本器種あるいは多数を必要とする定着期が後期の後半段階にあったといえよう。

この小型鉢は、畿内地方をはじめとした西日本各地の弥生時代後期に特徴的に見られ、「個人別食器」<sup>99</sup>あるいは「銘々器」<sup>99</sup>として性格付けがなされたものに相当すると考えられる。ただし全体比率からみた数量だけでは、個人毎に用いた食器と考えるには不十分だろう。ここで参考になるのが、鉢形土器の出土比率の問題であり、また080号遺構と113号遺構の出土品である。

本稿で「鉢」としたものは、器形から3分類した以外に容量で大(3,000cc)中(1,000cc強)小(670cc前後)に三分される。これに小型鉢(370cc前後)を加えると、「鉢形土器」は容量から四分され、その容量は小型から順にほぼ2～3倍づつ増えている。またその出土量は25:6:2:1と小さいものほど多いことが明らかで

### III 遺物の特徴

ある。この比率はそのまま一時期の基本的な組み合わせを示すものではないが、鉢の大～小型品は1～7期の全期を通して少数ながら一定の比率(2%強)で存在していることから、小型鉢と共存したことは間違いなく、少なくとも5～7期においては大～小型の鉢1個に対して小型鉢数個の組み合わせが成立していたと考えても良いのではないだろうか。

また、080号遺構では同期の小型鉢3点が、113号遺構からは1～3類の計7点が出土している。これは廃棄された遺物であり、また住居埋土中のもも含まれることから、必ずしも一時期における食器の実態を表すものではないが、小型鉢の複数同時使用を推定せしめる好例といえる。ただし実際の用途に関して、これが現代の茶碗のように銘々が使用する器か、あるいは各種の副食品に対応する器かの判断材料は見いだせなかった<sup>28)</sup>。

従来、関東地方におけるこの種の小型器種の成立は古墳時代初期からと捉えられていたが<sup>29)</sup>、それを更にさかのぼり、西日本各地とほぼ同時に始まることが判明した。

従来土師器のメルクマールとして小型埴や小型器台など小型土器群の出現が重要視されてきたが、ほぼ同一機能を果たし得る土器群がすでに弥生後期の段階で広範囲にわたって成立している事は改めて注目すべきだろう。といて土師器としての認定をこれまでよりも遅らせようと主張するつもりはない。むしろ逆で、弥生後期の小型土器群は政治的な背景とは無関係に成立し普及したと考えられるだけに、全国的な斉一性や播布性といった現象を再検討し、ことさらにその意識を強調することなく、等身大の評価をしてあげるべきだと思うのである。

#### [註及び参考文献]

#### (群理文=群馬県埋蔵文化財調査事業団)

- 1 群馬県内では他に富岡市南蛇井増光寺遺跡B区61住例を見るのみで、長野県では同様な例を知らない。群理文、1992『南蛇井増光寺遺跡I』
- 2 蒸気孔をもつ蓋は、県内では高崎市少林山台遺跡18住例、長野県では佐久市北西の久保遺跡Y93・100住、東部町城の前遺跡Y3住、佐久市池畑遺跡2住例などが知られる。群理文、1993『少林山台遺跡』、佐久市埋蔵文化財センター、1987『北西久保』、佐久市埋蔵文化財センター、1986『池畑・西御堂』、尾身智志、1988『東部町城の前遺跡Y3号住居跡の土器』、『佐久考古通信』46
- 3 口縁の粘土結核上げ痕は、関東地方一帯の後期の要にしばしば見られる特徴でもあることから、必ずしも赤井戸・吉ヶ谷系だけに限定する特徴ではない。
- 4 赤井戸式土器と吉ヶ谷式土器はそれぞれ、赤城山東南麓と埼玉県東松山市周辺を主分布地として設定されたが、その特徴である縄文施文と器形がほぼ同一であることから、極めて近い関係にあることがわかっている。しかし両者が同一か否かの検討は必ずしも十分に行われてきた訳ではない。また出自の問題や分布の相違についてはほとんど未解決のまま残されているといってもよい。この状況においては本遺跡出土の縄文施文土器をいずれかに決定することは困難であり、またそれを恣意にすぎないとも考える。ただし、両者が同一系統に連なる土器であることは十分に予想されることから、ここでは便宜的に「赤井戸・吉ヶ谷系土器」と呼称する。
- 5 赤井戸式土器研究の先達である藪田芳雄氏によって「段状縄文」と命名されたものにある。
- 6 埼玉県飯沼市花影遺跡例などが知られる。埼玉県教育委員会、1974『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』
- 7 赤井戸式の要に見られる器形の變化については、かつて赤城山南麓地域の土器でも検討したことがある。大木神一郎、1991『赤井戸式土器の祖型について』、『研究紀要8』群理文
- 8 この各器種の組別については、すでに飯島克巳、若狭徹二氏によって榛名山南麓の土器を対象に具体的な検討が加えられ、これに基づいた編年観は本地域についてもほぼ適用できるとされる。飯島克巳、若狭徹、1983『櫛式土器編年の再構成』『信濃』40-9
- 9 井上唯雄・柿沼恵介、1977『入門講座弥生土器-関東北関東3』、『考古学ジャーナル』143、三宅敦久・相草建史、1982『櫛式土器の分類-榛名山南麓を中心として』、『第3回三県シンポジウム資料弥生終末期の土器四世紀の土器』、柿沼恵介・平野達一、1986『解説弥生時代土器の編年』、『群馬県史資料編2 原始古代2』、飯島克巳、若狭、1983前掲8文獻など
- 10 同前
- 11 高崎市教育委員会、1979A『正観寺遺跡群(I)』
- 12 高崎市教育委員会、1979B『弓間遺跡』
- 13 群馬町井出村東遺跡調査会、1983『井出村東遺跡』
- 14 群理文、1981『清里・庚申塚遺跡』
- 15 富岡市教育委員会、1993『中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書』

- 16 前掲12文献
- 17 尾崎喜左雄他.1975『倉瀬村誌別冊水沼遺跡』倉瀬村役場
- 18 飯島・若狭福年では、これを樽式から除外したが、三宅・相京両氏や柿沼・平野両氏はIV期として古墳時代との間を充塞する位置を与えている(三宅・相京,1982、柿沼・平野,1986)。これを弥生時代に含めるべきか否かは時代区分概念の相違に基づくものであるが、いずれも土師器へ移行する過渡期的段階を想定している点では一致している。
- 19 群埋文.1984『熊野堂遺跡(1)』
- 20 高崎市教育委員会.1980『正観寺遺跡群(II)』,高崎市教育委員会.1981『正観寺遺跡群(III)』
- 21 前橋市教育委員会.1982『富田遺跡群西大室遺跡群昭和56年度』
- 22 前掲註8文献
- 23 梅沢重昭.1964『笹遺跡—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究』群馬県立博物館研究報告1.同.1966『笹遺跡—鍋川流域における滑石製品出土遺跡の研究(遺物編)』群馬県立博物館研究報告3
- 24 外山和夫.1982『群馬県吉井町祝神の弥生土器』『信濃』34-4
- 25 井上唯雄・柿沼恵介.1977,78『入門講座・弥生土器—北関東』『考古学ジャーナル』140-141・143-145
- 26 金井塚良一他.1975『中原遺跡』中原遺跡調査団
- 27 前掲註24文献
- 28 吉ヶ谷式土器については、熊谷市池上遺跡の堦4類(中島宏,1984『池守・池上』埼玉県教育委員会)があげられ、赤井式土器については筆者が群馬県内の中期後半の資料について言及したことがある(前掲註7文献)
- 29 群埋文.1992『南蛇井増光寺遺跡I』
- 30 外山和夫・津金澤吉茂・井上太.1978『群馬県地域における弥生時代資料の集成I』群馬県立博物館研究報告14
- 31 群埋文.1993『内匠上之宿遺跡』
- 32 富岡市教育委員会.1992『糟戸原I・糟戸原II・西平原』
- 33 新田町教育委員会.1984『重殿遺跡発掘調査報告書』
- 34 埼玉県教育委員会.1984『池守・池上』
- 35 飯島、若狭両氏は2期から小型器種の展開が見られるとの指摘をしている。前掲註8文献。
- 36 都出比呂志.1982『畿内第五様式における土器の変革』『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 37 佐原 眞.1983『食器における共用器・銘々器・属人器』『文化財論叢』同朋社出版
- 38 岡壁霞子氏は副食品の普及増加に伴う共用器としての性格も有り得ることを指摘している。岡壁霞子.1979『原始・古代人の生活食生活』『日本考古学を学ぶ2』有斐閣
- 39 前掲註36文献。ただし都出氏は南関東の弥生土器を念頭に述べられたようである。

### III 遺物の特徴

## 4 弥生時代鉄器

本調査で確認した弥生時代と関係する時代の鉄器は、次の通りである。(単位 g, cm 重量は四捨五入)

番号	時代	遺構	時期	層位	器形	刃部	基部	重量	長	幅	厚
4003	弥生	014	5期	下	鐵	鈍角三角形	短	1	3.3	2.8	0.1
4020	弥生	140	6期	下	鐵	不明	長	3	6.4	0.4	0.3
4022	弥生	155	5期	下	鐵	不明	不明	0.5	2.0	0.4	0.3
4025	弥生	196	2期	下	鐵	鋭角三角形	不明	2	2.7	2.1	0.2
4005	弥生?	015	6期	上	鑿			72	12.4	1.6	1.3
4070	弥生?	075	7期	上	鐵	五角形	無	7	4.4	2.5	0.2
4018	弥生?	118	6期	上	鐵	柳葉形	有?	1	2.5	1.0	0.3
4012	弥生?	088	5期	上	鐵?	不明	長?	1	2.0	0.9	0.2
4013	弥生?	088	5期	床下	鉄鏝?			75	7.5	2.5	0.8
4031	弥生?	208	5期	上	刃物			7	9.0	1.5	0.4
4029	古墳?	205	中期	上	ヤリガンナ			3	4.3	1.2	

ここでは、上層から出土した場合、出土遺構の時代時期とは断定できないため、?を時代に付与した(時期についてはIV章1節(1)項参照)。

まず器形として全10点の中で圧倒的なのが鐵である。可能性のある4012を入れて7点が見られる。しかしその形態は大きく異なる。刃部形態については三角形が古く、その他の形が新しい。基部形態は、短茎から長茎に移る傾向があるが、最新の4070は五角形(刃部と基部が稜で分かれるもの)で凹基無茎になっている。重量は、やはり4070が他のものより3倍以上ある。参考までに古墳時代中期の鐵は、次の通りである。

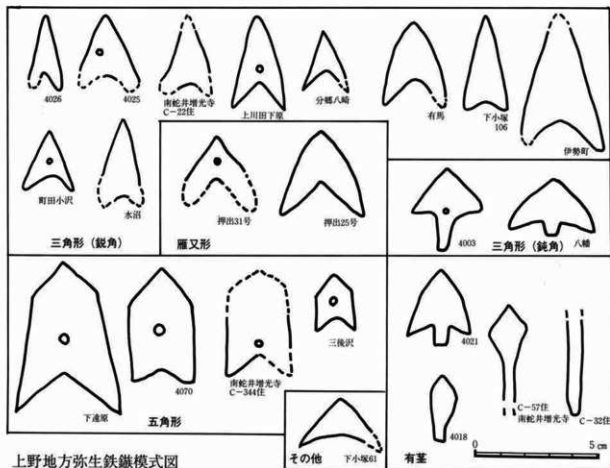
番号	遺構	層位	器形	重量	刃部形態	基部形態	長	幅	厚
4021	141	上	鐵	2	五角形	有茎	3.0	2.6	0.2
4026	205	上	鐵	2	鋭角三角形	無茎	2.3	1.2	0.2
4027	205	下	鐵?	3	不明	長茎?	3.2	0.6	0.2
4030	205	上	鐵?	1	不明	長茎?	2.6	0.5	0.3

以上のように、必ずしも同一の形態とは言いがたい。ただし、出土状態から見て4027以外は確実に古墳時代中期のものかは断定できない。むしろ、五角形無茎で重量の4070と比べてはるかに異なる4026は、弥生の可能性も考えられる。同様に有茎五角形で軽量の4021も、古墳時代のものよりは弥生時代のとした方が良くもしい。この2点を加えれば、弥生時代相当の鉄鏝は合計9点になる。なお、同じ理由で205号の上層で出土した上記ヤリガンナは、弥生時代の可能性も考えられる。

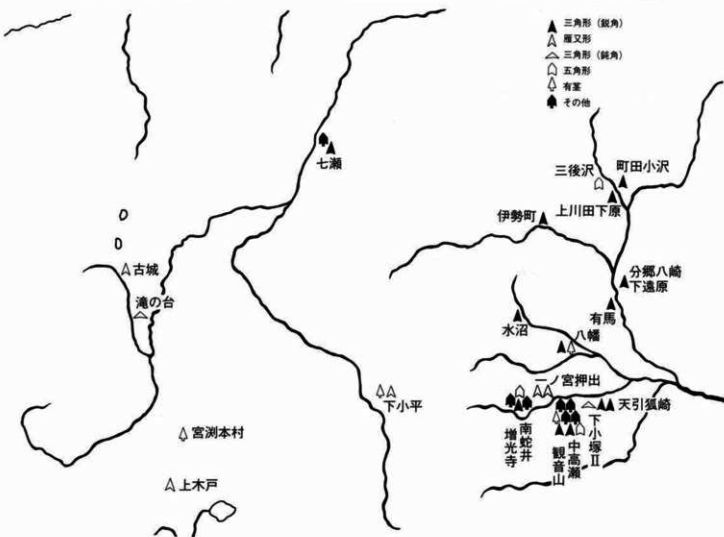
管見での上野地方の弥生時代の鉄鏝は、次の遺跡で出土している。

遺跡名	所在地	遺構名	状態	刃部	基部	重量	長さ	幅	立地
町田小沢	沼田市	22住	完存	鋭角三角形	無		2.3×2.1		C
上川田下原	沼田市	Y7住	ほぼ完存	鋭角三角形	無	2	3.8×2.2		C
三後沢	利根郡月夜野町	Y7住	完存	五角形	無		2.0×1.6		C
伊勢町	吾妻郡中之条町	B区196住	ほぼ完存	鋭角三角形	無	7	5.1×3.0		A
分郷八崎	勢多郡北碓村	群馬用水分	ほぼ完存	鋭角三角形	無		2.5×1.5		E
下遠原	勢多郡北碓村	Y2住	完存	五角形	無	7	6.0×4.2		E
有馬	渋川市	210住	完存	鋭角三角形	無	3	3.4×2.5		A
水沼	群馬郡倉湖村	2住	刃部完存	鋭角三角形?	無?		3.2×1.6		D
八幡	高崎市	弥生溝	完存	鈍角三角形	短		2.3×3.3		E
下小塚Ⅱ	甘楽郡甘楽町	61住	ほぼ完存	鈍角三角形	無				D
同		106住	ほぼ完存	鋭角三角形	無				
天引狐崎	甘楽郡甘楽町	71号遺構	2枚溶着	鋭角三角形他	有無	2	2.3×1.9		D
同		75号遺構他	基部3点	不明	有	1-3	3.6-4.6		
一ノ宮押出	富岡市	25住	完存	鋭角三角形	挟り	5	3.4×3.4		A
同		31住	刃部一部	鋭角三角形	挟り	2	1.9×2.5		
南蛇井増光寺	富岡市	C区57住	ほぼ完存	小葉形	長	3	3.9×1.5		A
同		C区22住	一部欠	鋭角三角形?	無	3	3.2×2.2		
同		C区324住	基部一部	不明	長	3	4.0×0.6		
同		C区344住	3分の2	五角形	無	4	4.1×3.4		





上野地方弥生鉄鍔模式図



### Ⅲ 遺物の特徴

形状は、基部の有無そして挟りの程度が大きな差として見られる。刃部は鋭角三角形・鈍角三角形・五角形・柳葉形・小菱形に分かれる。本遺跡での有茎鈍角三角形刃部のもの(4003)は、八幡例が似ている。これと無茎の下小塚Ⅱ61住例は、形状から殺傷力があまり大きいとは考えにくい。反対に五角形無茎(4070)に似た形状の下遠原例と南蛇井増光寺344住例は、いづれも大きく重量がある。同形の小型が三後沢例である。それらと同様に重いのは請を含む伊勢町例しかない。大きさでは下遠原例が最大である。

これら鉄製の出土した遺跡の立地については、第Ⅳ章第5節(立地欄のアルファベットは同節参照)に詳述するが、必ずしも同一の地形状況にあるものではない。大部分が堅穴住居からの出土で、多量の鉄剣を副葬していた有馬では、墓から出たのは銅剣で、鉄剣は堅穴から検出されている。上野地方における弥生時代の鉄剣に対する考え方を反映していることかもしれない。

上野地方での鉄剣分布の傾向を見ると、北部山地(利根・吾妻)で4点、その末端(勢多・渋川・群馬)で4点、西部山地(甘楽・富岡・高崎)で本遺跡分も含め23点となる。当然、本遺跡の出土点数が当地方において圧倒的であることは明瞭であるが、西部山地では、本遺跡分を含めなくても他地域より多い。特に調査の頻度がより高い中央平野部での出土状況は、明らかに西部山地より少なく、当地方での鉄剣分布の集中傾向が感じられる。北部山地では無茎鈍角三角形が主体を占めるが、有茎は西部山地でしか見られない。

信濃での鉄剣の分布は、管見では次の通りである。

遺跡名	所在地	遺構	刃部	基部	長さ/幅
滝の台	筑摩郡池田町		鈍角三角形	無	
古城	大田市		鋭角三角形	挟り	
宮淵本村	松本市		柳葉		
上木戸	塩尻市		鋭角三角形	挟り	
下小平	佐久市	Y4住-19a	鈍角三角形?	不明	1.8×2.3
同		Y4住-19b	鋭角三角形	無	2.6×1.8
同		Y4住-20	鋭角三角形	挟り	2.8×2.4
七瀬	中野市	17住	ヤスリ形	長	7.0×1.0
同		8土坑	五角形	無	4.2×2.5
同		グリッド	鋭角三角形	無	2.6×1.8

このうち、下小平の2本溶着した19aは、本遺跡の4003の刃部に似ている。また下小平20と上木戸例・古城例は、挟りが深く一ノ宮押出と類似している。一方、刃部五角形は七瀬8土坑例が、また下小塚Ⅱ61住の無茎刃部鈍角三角形は滝の台例と共通点がある。全体としては、上野西部山地のものは信濃佐久盆地・松本平と、同北部山地のものは善光寺平のものとの類似性が見られる。それは地理的な距離に起因すると思われるが、ただし刃部五角形のもの分布は、単なる距離をはるかに越えているような感じがある。

その他の3点の鉄製品については、出土状態からはたして弥生時代のものかは断定できない。ただし、鉄鑿(4005)については、同様の器形のもの南蛇井増光寺遺跡及び南関東の上野田西台遺跡(後期 埼玉県浦和市)・砂田台遺跡(中期 神奈川県栗野市)で出土している。特に前者は本遺跡のものと先端の尖った状態など形状が似ており、そのため弥生時代のものと考えられる。75gと重量のある鉄鏡のような長方形の鉄製品(4013)と刃物片(4031)については、所属時代は不明である。

#### 参考文献

- 鉄剣について、上川田下原遺跡は沼田市教育委員会の宮下昌文氏、天神遺跡資料は中之条町教育委員会の末吉美佐氏、下遠原遺跡資料は北碓村歴史民俗資料館、八幡遺跡資料は高崎市観音塚考古資料館、下小塚Ⅱ遺跡資料は甘楽町教育委員会の子安順氏のご指示による。天引狐崎は本事業団で現在整理中。
- 相沢貞順・中村富夫、1973「群馬県北碓村分郷八崎弥生住居跡」『考古学雑誌』59-1
- 倉淵村誌編纂委員会、1975「水沼遺跡」
- 佐久市教育委員会、1981「下小平遺跡」
- 群馬県立歴史博物館、1985「弥生文化と日高遺跡」
- 櫻川文、1986「三後沢遺跡・十二原遺跡Ⅱ」、1990「有馬遺跡Ⅱ」
- 埼玉県立博物館、1994「検証関東の弥生文化特別展」
- 沼田市歴史文化財発掘調査団、1990「町田小沢遺跡」
- 富岡市教育委員会、1995「一ノ宮押出遺跡」
- 長野県歴史文化財センター、1994A「栗林遺跡・七瀬遺跡」、1994B「赤い土器のクニ」

## 5 古墳時代前期土器

友廣哲也

### (1) はじめに

本稿に与えられた課題は中高瀬観音山遺跡における古墳時代前期土器についてである。本遺跡で検出された大部分の住居跡では樽式土器後期・終末期の遺物が出土している。このように検出された遺構遺物からみた本遺跡は弥生時代後期・終末期の集落の観がある。さて中高瀬観音山遺跡で検出された古墳時代前期の住居跡総数は、谷を挟み西側の丘陵中腹(庚申山地区)に検出された1軒を含み5軒を数えるのみである。

しかし、弥生時代後期樽式土器に混じり県内赤城南麓に出土の主体をもつ赤井戸式土器が検出されている事実がある。現在、県内での弥生時代終末から古墳時代初頭期の土器様相の特徴として、外来の土器が混入し樽式土器の組成に変化が生じ、同時に外来土器同様赤井戸式土器が樽式土器と混在する現象が広い範囲で認められることができる。

県内での弥生時代後期から古墳時代前期への土器の変質を概観すると、樽式土器後期に外来土器が混在し古墳時代へとの変質をみせる。この段階に県内高崎市新保田中村前遺跡、渋川市有馬遺跡、前橋市東南部荒砥周辺地域で外来土器の出土が目立つ。さらにこの時期に並行するか前段階に樽式土器に変質が認められ、前述の赤井戸式土器との共伴例が増える。この段階(古墳時代第Ⅰ期)は畿内では庄内段階、北陸土器からは白江段階が比定できる。したがってこの段階が弥生時代の土器組成に変質が始まる古墳時代の初まる時期とし、筆者は古墳時代の始まりを庄内新段階、東海廻間編年のⅡ段階と並行する時期に設定している。

(筆者は現在群馬県の古墳時代前期を3期に区分し、第Ⅰ期は畿内庄内段階、北陸白江段階並行に比定し、第Ⅱ期は布留古段階、第Ⅲ期は布留新段階に比定している。なお石田川遺跡出土遺物は筆者の第Ⅲ期に設定する。)

### (2) 本遺跡の古墳時代前期の土器

さて本集落での古墳時代に編入される住居跡は、つまり土器が主体として出土する住居跡は前述の5軒を数える。では本遺跡から出土する土器について県内及び外来土器の中での位置づけを行ってみたい。

005号遺構の遺物長頸埴(0043)は東海的な様相が認められる。口縁部僅かに内湾し、内面の面取り等はなく在地化した壺である。また共伴する甕は頸部がくの字のもの、湾曲するもの、さらに単口縁台付甕の底部が確認されている。

174号遺構からは小型の壺形土器・小型埴・器台が検出されている。小型埴は丸底で口縁部は体部より長い。器台は口縁部の屈曲が弱く調整の特徴は刷毛目である。

176号遺構ではS字状口縁台付甕の台部が出土し、端部は折り返している。樽式土器と共伴している。

216号遺構からは刷毛目の甕、小型埴、口縁部折り返しの壺、S字状口縁台付甕が出土している。

KJ14号遺構では高坏、器台が検出されている。

以上本遺跡出土土器は174号・216号遺構で小型埴の出土が認められる。県内高崎市下佐野遺跡、元島名将軍塚古墳等で出土している長頸埴、小型埴と比較しても005号遺構長頸の壺は口縁部内面の調整、小型埴の器壁の厚みや体部の湾曲など在地化した様相が伺える。また216号遺構S字状口縁台付甕も高崎市井野川流域での出土甕と比較しても在地での廻間式からの変質が認められる。このような土器は県内の庄内期に比定される土器や、県内の序列からも初期の土器群と比較すると年代的に後続し、外来放地での粗形からの変質がすでに伺える土器群である。従来より県内ではS字状口縁台付甕の肩部横線の有無による新旧関

### Ⅲ 遺物の特徴

係が考えられていたが、前述の井野川流域では既に導入初期にそれは消失するものもあり、下佐野遺跡では北陸土器、小型塔、肩部横線消失のS字状口縁台付甕の共伴が認められているなど、横線の有無による編年はむずかしい。

県内で外来の土器の初現は前述した北陸白江、東海廻間Ⅱ、畿内庄内段階にあたり、新保田中村前遺跡、有馬遺跡等で検出され、荒砥周辺遺跡群や井野川水系でも北陸土器や畿内系の土器が多数検出されている。この結果本遺跡で出土した土師器の一群は、県内での樽式土器後期に外来の土器が搬入を始め徐々に弥生時代の土器組成が変質し、古墳時代土師器へ変質していく過程の第Ⅱ段階に比定できる土器群である。現状での本遺跡出土土師器は微量であり、樽式土器の集落内に一部検出されたに過ぎず住居跡の形態自体も明らかとはいえない。古墳時代初期の集落の中心地が本遺跡に隣接する可能性もある事実も踏まえなくてはならない。

#### (3) 甘楽富岡地域の状況

ここで視野を広げ周辺地域の弥生時代遺跡及び古墳を概観すると本遺跡西方約6kmに南蛇井増光寺遺跡、同約1.5kmに茶白山西古墳、同約1kmに茶白山古墳、東方約2kmに内匠上之宿遺跡がある。茶白山・茶白山西の2古墳は西に隣接している(西古墳は本事業団の調査により報告書が刊行されている)。西古墳は尾根の頂きにある前方後方墳で、木棺直葬の主体部で方形規矩鏡、変形四獣鏡が出土した。出土土師器は二重口縁壺と小型塔がある。茶白山古墳からは二重口縁壺の出土が認められる。西古墳で小型塔の出土が認められ、それは中高瀬観音山遺跡出土土師器と同期的に並行する段階の土器である。周辺地域で確認される古墳時代前期の遺物は少なく、両古墳の段階に並行して本遺跡の土器をおくことができる。このことから両古墳の築造時に周辺地域に集落の存在を想定することはでき、さらに両古墳の築造時期は元島名将軍塚古墳出土遺物との比較からみてほぼ並行する時期と考えられる。

南蛇井増光寺遺跡と内匠上之宿遺跡の両遺跡では、県内で広く確認される樽式土器後期に赤井戸式土器との共伴例が認められている。しかし古墳時代初期の土師器は検出されていないが、古墳時代への変質初期の樽式土器・赤井戸式土器の混在現象が認められる。

さてここで中高瀬観音山遺跡出土土師器検討の結果は、ほぼ茶白山西古墳に並行し、さらに元島名将軍塚古墳に並行する段階、群馬県内では古墳時代前期第Ⅱ段階の土器、古墳時代土師器の組成が定形化する段階、畿内では布留古段階に比定できる(実年代観は畿内編年に従えば4世紀前半における)。

さらに視野を広げて、古墳時代初期(中高瀬観音山遺跡出土土師器の前段階・古墳時代第Ⅰ期)をみると、県内での外来土師器は有馬遺跡・新保田中村前遺跡等の弥生時代の拠点的な集落にその初現を見ることができ、従来言われるような山麓を中心とした樽式土器に対する、平野部への入植民を前提とした石田川式土器の対立・並立はない。

前述の2遺跡のような弥生時代中期～後期に継続存在する大規模集落に北陸系土器等外来の土器がまず出現し、弥生時代後期の中心的な地域が他地域の土器を受け入れて社会構造の変質を始める。有馬遺跡、新保田中村前遺跡等は外来の土器を受け入れ、有馬遺跡はその立地を山麓部から平野部へと移動する。それに並行するかや先行して、樽式土器の変質や赤井戸式土器との混在現象を認めることができる。井野川流域下佐野遺跡や下郷遺跡、荒砥地域に展開する古墳時代集落は、樽式土器の系譜を引きながら平野部にその立地を広げていく。この段階の土師器は中高瀬観音山遺跡出土土師器(古墳時代第Ⅱ期)の一段階前(古墳時代第Ⅰ期)におくことができる。

#### (4) 甘楽富岡での土師器出現の特異性

では中高瀬観音山遺跡の立地する富岡市周辺の弥生時代後期の集落における土師器の初現は、県中央部で一段階遅れる理由を検討してみたい。

県内での外来の土師器の初現は現状では前橋市・渋川市・高崎市等に多く、北陸系土器・畿内系土器を認めることができる(この段階、定形化した小型埴等の出現以前を筆者は古墳時代第Ⅰ期としている)。現状富岡市内ではまだ第Ⅰ期の遺物を確認することはできない。しかし、弥生時代後期の樽式土器と赤井戸式土器の混在する段階は認められる。さらに南蛇井増光寺遺跡、内匠上之宿遺跡には庄内並行(古墳時代第Ⅰ期)の土師器は現状ではない。中高瀬観音山遺跡では、その次の段階(古墳時代第Ⅱ期)の土師器が出土している。その理由は県内での土師器との比較では、在地化した土器群から見ることができ、古墳時代への変換時にその中心的な役割を果たしていない事が想定される。

次に弥生時代終末の土器を周辺遺跡と検討すると、南蛇井増光寺遺跡では箱清水式土器の系譜との関連性を伺える土器が認められ、弥生時代に信濃地域との関連を伺うことができる。そこで群馬県での古墳時代第Ⅰ期に出現する北陸土器の導入ルートを考えて、信濃では北陸系土器は中野市安源寺遺跡等を中心とした北信に多数認められ佐久市周辺には初現段階の土師器は少ない。そのため信濃からのルートには疑問が残る。佐久市の弥生時代遺跡を概観しても、周防埴B遺跡・一本柳遺跡・餅田遺跡・西一塚埴遺跡等の弥生時代集落は箱清水式土器を出土し、外来系の土器を伴う遺跡は少ない。

県内で最古段階の外来土器に比定できる北陸系土器は新潟県・福島県会津地方にも波及し、北西部からの導入が想定できる。これは県内渋川市有馬遺跡に確認できる。したがって中高瀬観音山遺跡での北陸系を含めた初現期外来土師器の出土が認められない理由は、逆に東の井野川流域からの土師器の導入の可能性をも想定しなければ理解できない点が多い。

つまり外来土師器導入期の赤井戸式土器と樽式土器の混在現象の中に初現期の土師器が伴わないこと、この段階に佐久地方にも同様に庄内段階の土師器が無いこと、土師器は古墳時代第Ⅱ期から始まり並行して古墳が築造されること、この段階に並行する井野川流域・前橋市地域の土師器より在地化傾向が強いことがその理由である。

県南平野部に拡散した古墳時代第Ⅰ期の集落はやがて古墳の築造を始め、周辺地域に古墳時代社会が浸透していく。それが当地域に古墳時代第Ⅰ期の土師器が認められない理由かも知れない(しかし、有馬遺跡に見られるように山麓部に展開した弥生時代の集落は古墳時代に入り低地平野部に立地を移す事も本遺跡で想定できるが、弥生時代にまず外来土師器を最初に受け入れた有馬遺跡とはその内容にあまりにも違いが大きい)。だが、この前提も本遺跡の僅かな土師器からの想定で、想像・予察の域を脱するものではない。

#### (5) 戦乱はなかった

本遺跡出土土師器からの展開をしたが、中高瀬観音山遺跡居住跡は弥生時代後期に集中し、古墳時代初期の土師器(古墳時代第Ⅰ期・畿内庄内並行期)の遺物は検出されず、古墳時代第Ⅱ期(畿内布留期)土師器が僅かに出土した。出土土師器からは集落の存在の主体は弥生時代後期に集中し、古墳時代初期は空白となり古墳時代土師器は第Ⅱ期で出現する。さらに、本遺跡の土師器に並行する段階には茶白山・茶白山西古墳は築造されている。

なお以上の結果、発掘調査中に再燃した従来の古墳時代の入植民を想定した戦乱の状況は、入植民の存在とともに全くその背景や痕跡はない。戦乱を前提とした佐久地域との関係も、前述のように佐久からの古墳時代第Ⅰ期の文化(外来の土師器)の導入を伺わせる根拠についての今後の資料の増加が(群馬県富岡市周辺

### III 遺物の特徴

及び長野県佐久市の両地域を含め)なければ、ほとんど現状では見当たらない。むしろ箱清水式土器との交流が認められ、武力抗争を想像させるものはない。

さて再度整理すると、中高瀬観音山遺跡には古墳時代第Ⅰ期庄内新段階の外来の土師器の出土がないこと、出土する土師器が古墳時代第Ⅱ期布留古段階並行以後の土器であること、そして茶臼山・河西古墳など定型化する古墳の出現と本遺跡出土土師器の時期が古墳時代第Ⅱ期に並行していることから、本遺跡出土遺物は弥生時代榑式土器から古墳時代第Ⅱ期土師器へと変質している。

では古墳時代初期(第Ⅰ期)は存在しないのか。前述の富岡市周辺遺跡同様、本遺跡でも弥生時代終末段階に榑式土器の変質がある。また赤井戸式土器との混在現象があり、榑式土器の変質の事実が認められる。088号遺構の榑式土器壺(0049)は、頸部2段の等間隔止め簾状文さらに下部には波状文ではなく刷毛目状文様が施されている。またKJ04号遺構からは南関東系の土器も出土し、土器の変質や移動の事実が認められる。つまり本遺跡の榑式土器は後期に編入されるものの、赤井戸式土器との共伴・榑式土器の中の変質・他地域の土器の出土など、古墳時代第Ⅰ期の特徴を備えている。

#### (6) まとめ

以上のことから中高瀬観音山遺跡の古墳時代第Ⅰ期(庄内新段階並行期)は、榑式土器の伝統を強くもつ集落で(住居跡の平面形態等からも認められる)、あまり積極的な土師器の導入はない。しかし古墳時代第Ⅱ期になると大型の古墳の築造を伴う古墳時代への変質は明らかとなる。

したがって本遺跡での古墳時代第Ⅰ期は、県内中央平野部と比較すると第Ⅰ段階の土師器が無い。しかしながら在地土器の変質が認められることは、上野の古墳時代への変質の初期段階の地域相と見ることができる。つまり上野の古墳時代への変質の中で、本遺跡は第Ⅱ期に大きな社会的な構造変換が推察される。すでに逆行する古墳時代第Ⅰ期には、平野部では井野川流域で古墳時代への大きな変質が古地移動や土器に現れている。

本遺跡は古墳時代第Ⅰ期(移行期)に明らかに古墳時代の波を受け、在地の榑式土器に古墳時代への変質が認められる。この段階を畿内編年と比較すると庄内新段階に在地の土器様式に変化が生まれ、布留古段階の古墳築造に向けての文化変質がすでに存在している。

このように本遺跡の資料から、当時の上野での古墳時代文化波及初期の地域相が垣間見られた。上野での古墳時代文化の波及にも地域的な受容に違いが認められる。

また集落内から出土する鉄器等からの戦闘を仮に想像しても、弥生時代後期～古墳時代前期に佐久地方からの外来の集団は前述のようにその存在を想定できず、あえて信濃を想定しても同一の櫛描文文化圏に所属する榑式土器と箱清水式土器との間にはその証拠は認められない。むしろ中高瀬観音山遺跡が受け入れた古墳時代文化は、井野川流域等東を意識すべきであろう。しかし井野川流域は本遺跡と同一の榑式土器文化圏にあり、榑式土器文化圏の中心地に波及した古墳時代文化の受容を武力によるものとの展開は、元高名将軍塚古墳と茶臼山西古墳の築造時期に大きな時期差がないことなどからも想定しにくい。勿論入植民を前提とした本遺跡の土師器化を促したものが、外来の征服集団と仮に想像しても戦闘する相手が不明である。

中高瀬観音山遺跡の集落は前述した群馬の古墳時代第Ⅰ期を含み、その展開は弥生時代～古墳時代前期の(第Ⅰ～Ⅱ期)社会・文化変質の中で理解されるものと考えられる。さらに付け加えれば、前期上野の古墳時代文化の受容に政治的背景をもつ征服集団や入植民集団が存在し介在した可能性も、現状では認められない。

#### 『追記』

脱稿後平成7年2月に富岡市教育委員会主催による「富岡市内出土品展」を見学した際、阿曾岡・

権現堂遺跡の遺物を実現する事ができた。

本遺跡は平成6年に発掘調査され、中高瀬観音山遺跡の北約3kmに位置し、弥生時代中期から後期、古墳時代前期に至る遺跡である。古墳時代前期の土器は、展示物の中から筆者の古墳時代第Ⅰ期に比定できるものが認められている。古墳時代前期に入る赤井戸系土器と樽式土器の混在現象も認められ、土師器も第Ⅰ期に入る。また前方後方墳も2基が検出されている。

筆者は中高瀬観音山も含め富岡市内には古墳時代第Ⅰ期の土師器を受容する集落はまだ確認は無いと想定していたが、本遺跡は弥生時代から古墳時代への変質を、初頭期から受け入れる事が想定される拠点集落である。渋川市の有馬遺跡・高崎市の新保田中村前遺跡等と似た様相が認められる。

こういった弥生時代後期の拠点的大規模集落は、やはり有馬遺跡・新保田中村前遺跡同様外来の文化を逸早く受け入れている事が認められ、中高瀬観音山ではややワンクッション時期において土師器が導入されたことが考えられる。

富岡市を中心とする地域での弥生時代から古墳時代への変換は、県内での他地域と同様、弥生後期(中期からも含む)の拠点的大規模集落がまず古墳時代文化を受け入れ、次に周辺の地域に拡散するという事が想定できる(本文中での井野川流域等の東を意識し、なおかつ阿曾岡・権現堂をこれに置き換えることも可能である)。

高崎市・前橋市等平野部でもおなじである。したがって弥生時代終末期における中高瀬観音山遺跡は、古墳時代の新たな文化の受容という点からはこの地域での中核的な位置を阿曾岡・権現堂遺跡に譲り、中核的な遺跡でなかったと考えられる(弥生時代後期における位置は別であるが)。いづれにしても本遺跡内での弥生土器から土師器への変換の中に存在するミッシングリングは、阿曾岡・権現堂遺跡の古墳時代初頭の土師器が埋めることになる。

#### 参考・引用文献

(群理文=群馬県埋蔵文化財調査事業団)

- 赤塚次郎,1992「東海系のトレース3・4世紀の伊勢湾沿岸地域」『古代文化』44  
 ,1990「瀬間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター  
 飯島克巳・若狭徹,1988「樽式土器の再構成」『信濃』  
 宇賀神誠司,1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』  
 宇賀神誠司,1988「上戸遺跡」第3章16節5-(2)長野県埋蔵文化財センター  
 田嶋明人,1986「津町遺跡」石川県埋蔵文化財センター  
 田口一郎他,1981「元鳥名将軍塚古墳」高崎市教育委員会  
 寺沢 薫,1986「畿内の古式土師器をめぐる二・三の問題」『矢部遺跡』  
 友廣哲也,1991「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』2、群馬土器観会  
 ,1992「群馬県の古墳文化初頭期の検討」『古代』94、早稲田大学考古学会  
 ,1994「北関東の古墳時代文化の受容」『古代』98、早稲田大学考古学会  
 ,1995「上野の古墳時代文化の受容」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学考古学会  
 若狭 徹,1990A「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬県考古学手帳』1、群馬土器観会  
 ,1990B「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220  
 1982「長野県史」考古資料編 全1巻(二)主要遺跡(北・東信)  
 群理文,1988「大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳」

地域 時期	群 馬 県			
	樽 式 土 器	畿 内	東 海	北 陸
古墳時代 第Ⅰ期	樽式土器に変質が始まる。樽式土器と赤井戸系土器との共伴例が認められる。畿内庄内系・北陸系の土器が出土する。有馬遺跡82・211号住居跡等。	庄内新段階	題間Ⅰ	白江
古墳時代 第Ⅱ期	小型墳の出現 中高瀬観音山住居跡出土土師器 茶臼山西古墳、元鳥名将軍塚古墳	布留古段階	題間Ⅲ	
古墳時代 第Ⅲ期	土師器が定着し、定型化する。	布留新段階		

参考文献 畿内 寺沢 薫,1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』

東海 赤塚次郎,1990「V 考察」『瀬間遺跡』

北陸 田嶋明人,1986「津町遺跡出土土器の編年の考察」『津町遺跡Ⅰ』

現在群馬県では、上記地域とのさらなる細分(庄内0-3等)とを比較する資料は未だ充分ではなく、本表は概念的に大まかに比較したものである。

## 6 古墳時代中期土器

石塚久則・深澤敦仁(藤岡市立東中学校)

### (1) 出土土器の分類

#### A 資料の扱いにあたって

中高瀬観音山遺跡では、いわゆる「和泉式」併行と考えられる土師器の一群を出土した壑穴住居が8軒検出されている。この8軒の中で5軒は焼失住居であり、さらにここで取り上げる土器群は焼失後に廃棄された状況で検出されており、土器の量も多く、かつ出土状況から一括性が考えられる。本稿ではこれらの土器群を、鍋川流域の同時期土器群と比較し、その前後関係の位置づけを試案する事を主眼とする。

なお、筆者はここで取り上げる遺構・遺物の発掘調査には立ち会っていない。そのため本稿は、遺物出土状況および遺構と遺物の帰属関係の全てを編者である坂井氏より教示を受け、それに基づいて記述にあっている。

#### B 出土土器の形態的特徴

出土した遺物には、「甕」「壺」「高坏」「甑」「罎」「鉢」の6種類がある(次頁図)。

それぞれはその形態的特徴によって、次のように大別できる。

「甕」 A類…台付+体部最大径中位 B類…台付+体部最大径上位 C類…平底+体部最大径中位  
D類…丸底+体部最大径中位+大型 E類…丸底+体部最大径上位  
F類…丸底+体部最大径中位+小型 G類…F類甕+裾開き脚

「壺」 A類…平底+大型 B類…平底+中型

「高坏」 A類…無稜坏+裾開き脚 B類…有稜坏+裾開き脚 C類…無稜坏+エンタシス状脚  
D類…有稜坏+エンタシス状脚 E類…C類鉢+裾開き脚 F類…有段高坏

「甑」 A類…外斜口縁

「罎」 A類…平底+大型 B類…丸底+大型 C類…平底+小型 D類…丸底+小型

「鉢」 A類…体部球形+平底 B類…体部球形+丸底 C類…体部偏球形+平底

なお、あくまで各名称は形態差による判断であり、必ずしも機能差を示すものとは言えない。例えば、「甕」と「壺」の差、「甕F類」と「鉢A類」の差、「甕G類」と「高坏E類」の差、など不明確なものも多い。

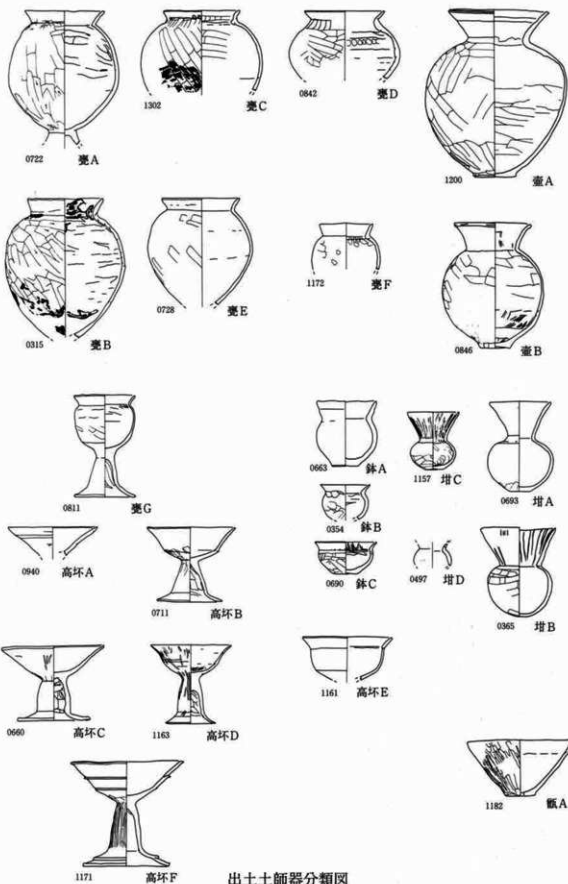
以上の分類に従って、遺構単位に分類したものがP.260の表である。出土遺物がまとまりを見せる遺構として、111号・205号・069号・141号そして弥生壑穴075号土層が挙げられる。何れも高坏・罎の出土が多く、この時期の特徴的な様相を示している。

当該時期の土器組成において高坏・罎の占める割合が高い状況は群馬県域に限った事でなく、広域的に確認できる状況である。高坏・罎については祭器的色彩が濃いとも考えられ、中高瀬観音山遺跡の出土遺物が廃屋後の一括廃棄の状況を示しているという事であれば、当該の他遺跡に比して高坏・罎の出土が際だって多い事は高坏・罎の性格が祭器的な要素を含む傍証になるようにも考えられるかもしれない。

組成全体から何えるように、本遺跡出土の当該時期の土器群は、当該の他遺跡に比して遺物総数が多く、とりわけ高坏・罎の量が多い。

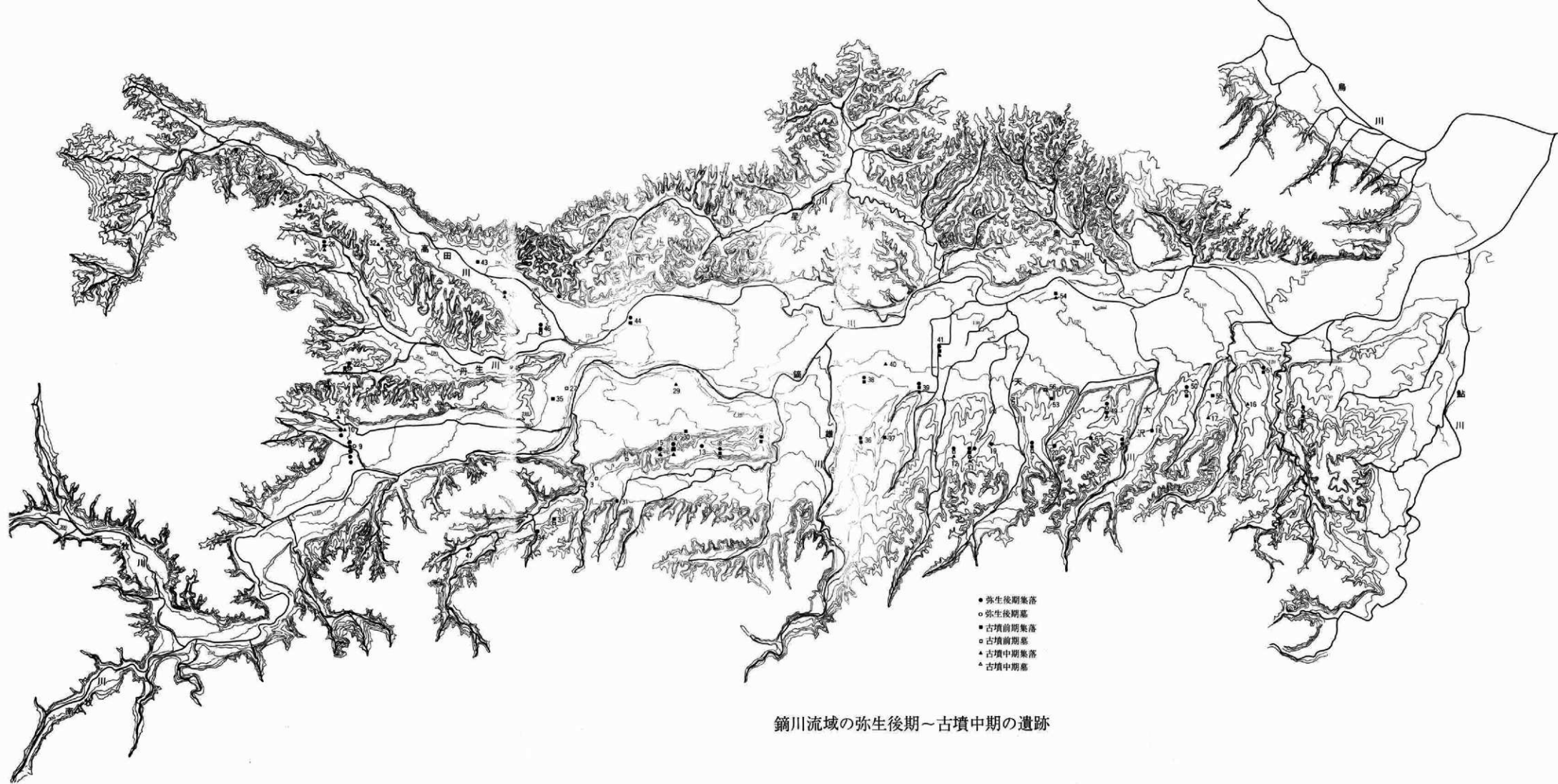
しかし、冒頭で述べた通り、これらの遺物群は一括性は持つものの、遺構の廃棄後の一括性ととの事であるため、上記の組成がこの時期の生活様式の遺物の一括性を示しているか否かについては明かでない。





出土土器分類図





鎭川流域の弥生後期～古墳中期の遺跡



遺跡名	所在地	弥生後		古墳前		古墳中		文献
		集落	墓	集落	墓	集落	墓	
1 北山茶臼山古墳	富岡市南後箇					○		富岡市, 1987
2 東八木	富岡市黒川	○						富岡市, 1987
3 北山茶臼山西古墳	富岡市南後箇							群埋文, 1988
4 内匠・下高瀬	富岡市内匠・下高瀬	○		○				群埋文, 1987, 88B
5 神保楯松	吉井町神保	○		○				群埋文, 1989A
6 神保富士塚	吉井町神保	○		○				群埋文, 1993A
7 長根安坪	吉井町長根	○		○				群埋文, 1988B, 89A
8 内匠日影周地	富岡市内匠	○		○			○	群埋文, 1992A
9 南蛇井増光寺	富岡市南蛇井	○		○				群埋文, 1992B, 93B, 94A
10 中沢平賀野戸	富岡市中沢	○		○		○		群埋文, 1991A
11 天引向原	甘楽町天引	○		○		○		群埋文, 1990A, 91A, 92B
12 白倉下原	甘楽町白倉	○		○		○		群埋文, 1990A
13 下高瀬寺山	富岡市下高瀬	○		○				群埋文, 1990A
14 本道跡観音山地区	富岡市中高瀬	○		○				本書
15 本道跡庚申山地区	富岡市中高瀬	○		○				本書
16 多比良追野	吉井町多比良	○		○				群埋文, 1991A
17 矢田	吉井町矢田	○		○				群埋文, 1993C
18 神保下條	吉井町神保	○		○				群埋文, 1992D
19 天引狐崎	甘楽町天引	○		○				群埋文, 1991A
20 長根羽田倉	吉井町神保・長根	○		○				群埋文, 1990B
21 前畑	富岡市蛇沼	○		○		○		富岡市, 1992A
22 内出 I	富岡市原	○		○		○		富岡市, 1992A
23 八木達覚畑	妙義町下八木達	○		○				妙義町, 1990
24 八木達窪沢	妙義町下八木達	○		○				妙義町, 1990
25 古立東山	妙義町古立	○		○				妙義町, 1990
26 古立中村	妙義町古立	○		○				妙義町, 1990
27 稲荷森	富岡市一ノ宮	○		○				富岡市, 1980
28 千足	富岡市上丹生	○		○		○		富岡市, 1992A
29 桐園 1号墳下層	富岡市上高瀬	○		○		○		富岡市, 1987
30 陣屋	富岡市高瀬	○		○		○		富岡市, 1987
31 菅原	富岡市南後箇	○		○		○		富岡市, 1987
32 早道場	富岡市上丹生	○		○		○		富岡市, 1987
33 箱戸原 I	富岡市野上	○		○		○		富岡市, 1992B
34 箱戸原 II	富岡市野上	○		○		○		富岡市, 1992B
35 本宿・郷土	富岡市一ノ宮	○		○		○		富岡市, 1981
36 西原	甘楽町上野	○		○		○		甘楽町, 1994
37 松葉慈学寺	甘楽町上野	○		○		○		甘楽町, 1994
38 稲荷北	甘楽町小川	○		○		○		甘楽町, 1986
39 笹	甘楽町小川	○		○		○		群馬縣博, 1963
40 天王塚古墳	甘楽町福島	○		○		○		群馬縣, 1981
41 甘楽条里	甘楽町白倉・金井	○		○		○		甘楽町, 1989
42 高島井	妙義町下高田	○		○		○		妙義町, 1989
43 堀之内	妙義町下高田	○		○		○		妙義町, 1989
44 六反田	富岡市七日市	○		○		○		富岡市, 1989
45 押出	富岡市一ノ宮	○		○		○		富岡市, 1995
46 阿曾岡・権現堂	富岡市宇田	○		○		○		富岡市, 1995
47 野上遺跡群	富岡市野上	○		○		○		富岡市, 1987
48 和田	富岡市上丹生	○		○		○		富岡市, 1987
49 折茂東	吉井町長根	○		○		○		吉井町, 1987A
50 川内	吉井町吉井	○		○		○		吉井町, 1982
51 入野	吉井町石神	○		○		○		吉井町, 1985, 86
52 黒熊	吉井町黒熊	○		○		○		吉井町, 1983
53 西場脇	吉井町長根	○		○		○		吉井町, 1987B
54 片山遺跡群	吉井町片山	○		○		○		吉井町, 1991
55 榎谷戸	吉井町矢田	○		○		○		吉井町, 1989
56 恵行寺裏古墳	吉井町長根	○		○		○		田島, 1984
57 子塚・山ノ上	富岡市上丹生	○		○		○		富岡市, 1995
58 馬の宮	妙義町下高田	○		○		○		群馬縣博, 1978

文献 甘楽町, 1986 『福南北遺跡現地説明会資料』, 1989 『甘楽条里遺跡』, 1994 『天神 I・天神 II・西原・松葉慈学寺遺跡』 群埋文, 1987 『年報 6』, 1988A 『北山茶臼山西古墳ほか』, 1988B 『年報 7』, 1989A 『年報 8』, 1990A 『年報 9』, 1990B 『長根羽田倉遺跡』, 1991A 『年報 10』, 1992A 『内匠源訪前・内匠日影周地遺跡』, 1992B 『南蛇井増光寺遺跡 I』, 1992C 『年報 11』, 1992D 『神保下條遺跡』, 1993A 『神保富士塚遺跡』, 1993B 『南蛇井増光寺遺跡 II』, 1993C 『矢田遺跡 IV』, 1994A 『南蛇井増光寺遺跡 III』 群馬縣, 1981 『群馬県史 3』 群馬県立歴史博物館, 1963 『笹遺跡』, 1978 『類報 20』 田島桂男, 1984 『日本の古代遺跡 16 群馬西部』 保育社 富岡市, 1980 『稲荷森遺跡』, 1981 『本宿・郷土遺跡』, 1987 『富岡市史』, 1989 『小塚・六反田・久保田遺跡』, 1992A 『前畑・内出 I・丹生成西・西一分・千足遺跡』, 1992B 『箱戸原 I・箱戸原 II・西平原遺跡』, 1995 『富岡市内出土品展覧会』 妙義町, 1989 『妙義東部遺跡群 (I)』, 1990 『古立東山・古立中村・八木達窪沢・八木達覚畑遺跡』 吉井町, 1982 『川内遺跡』, 1983 『黒熊遺跡群 3』, 1985 『入野遺跡 II』, 1986 『入野遺跡 III』, 1987A 『東沢・折茂東遺跡』, 1987B 『西場脇・長根・宿遺跡』, 1989 『榎谷戸遺跡』, 1991 『片山遺跡群現地説明会資料』

### Ⅲ 遺物の特徴

#### 2 内匠日影周地遺跡B区3号住居

指標：S字口縁台付甕(?)+単口縁台付甕+平底甕+器台+高坏(有稜口縁)

#### 矢田遺跡359号住居

指標：高坏(有稜口縁+エンタシス状脚部)→上記住居に補足

### B段階

#### 3 本遺跡111号遺構

指標：単口縁台付甕+単口縁平底甕+高坏(有稜口縁+長脚+エンタシス状または裾開きが主体)・埴の盛行

#### 4 本遺跡205号遺構

指標：単口縁台付甕+単口縁平底甕+高坏(有稜口縁+長脚+エンタシス状または裾開きが主体)・埴の盛行+(内湾坏埴)+甗

#### 5 甘楽条里遺跡54号住居

指標：単口縁台付甕+単口縁平底甕+高坏(有稜口縁)より顕著+裾開き：脚部と裾部の境が明瞭：短脚化)・埴の盛行+内湾坏埴・内斜口縁坏埴

### C段階

#### 6 前畑遺跡21号住居

指標：単口縁台付甕+単口縁平底甕+高坏(有稜口縁)より顕著+裾開き：脚部と裾部の境が明瞭：短脚化)・埴の減少+大型甗+内湾坏埴・内斜口縁坏埴・模倣坏埴

#### 7 甘楽条里遺跡1号住居

指標：単口縁平底甕(長脚)+高坏(模倣坏埴+短脚・裾開き)+埴の減少+大型甗の増加+模倣坏埴の盛行

#### (4) 「かぶらの谷」の和泉式土器

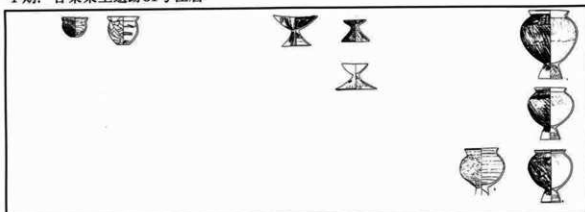
かつて群馬県の古墳時代の土器を様式論に高めて3段階に分類したことがあった。西暦300年~450年までの150年間を畿内中心とした斉一性の強い土器群でⅠ段階「土師器指向様式」、450年~600年までの150年間を朝鮮三国からの影響下に成立した須恵器を共伴するⅡ段階「須恵器指向様式」、600年~700年までの100年間を律令的規範確立前の朝鮮三国の金銅製品模倣土器使用のⅢ段階「金属器指向様式」とした。各段階はそれぞれ50年の小期に細分され8小期となった。(注1)

和泉式土器はⅠ段階3小期にあたる。この土器形式の特徴である、多様な形態の高坏群、多様で大型化する埴の大量出土は、前代からの継続である。反面、石田川式を代表する特徴的なS字状台付甕は長脚甕に脚台を貼る形に変化して、台付甕の命脈を保ち、小型三器種を構成していた鉄鉢型埴と器台は消滅する。この時期に大量に出現する底部の小さな長甕は斉一性が強く、須恵器からの影響を何わせて興味深い。なお、Ⅱ段階に特徴的な須恵器模倣の坏の出現は見られない。

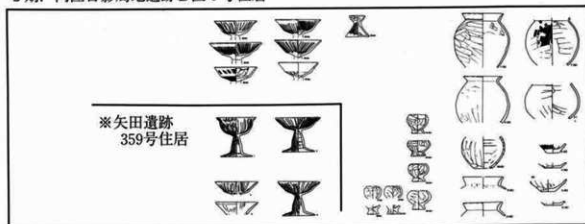
(3)で見通しを示した「かぶらの谷」の3つの段階で7つの小画期の土器の組列は、順に第Ⅰ・2期(A段階)は群馬のⅠ段階2小期に、第3期(本遺跡の111号遺構)・第4期(本遺跡の205号遺構)・第5期の土器(B段階)の組列は、群馬のⅠ段階3小期に、第6・7期の土器(C段階)の組列は、群馬のⅡ段階1小期に該当する。すなわち本遺跡出土の土器は3・4の小画期であり5世紀の前半50年の範疇、それもさらに前半に近いこととなる。

この時代を通史で語るとこのようになる。「かぶらの谷」の弥生時代後期から古墳時代前期の耕地は、ほぼ完全に近いほどに耕作されていたと考えてよい。4世紀後半、鍋川と高田川の合流地域に在地首長の墳墓

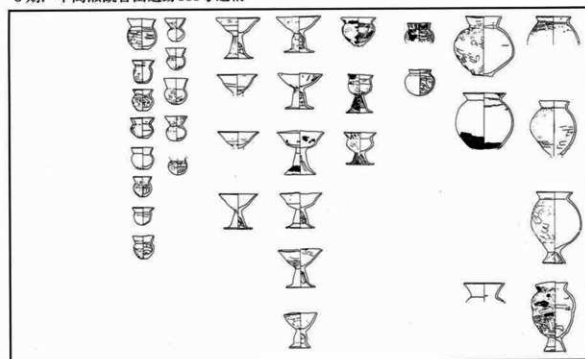
## 1期. 甘楽条里遺跡31号住居



## 2期. 内匠日影周地遺跡B区3号住居

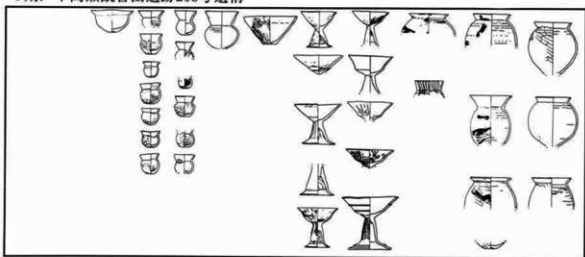


## 3期. 中高瀬観音山遺跡111号遺構

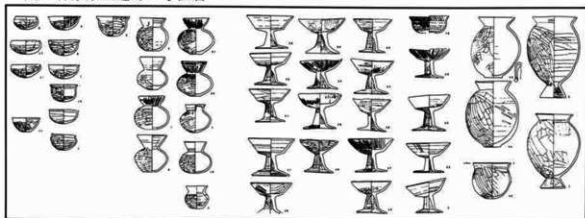


III 遺物の特徴

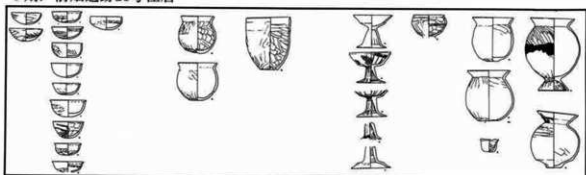
4期. 中高瀬観音山遺跡205号遺構



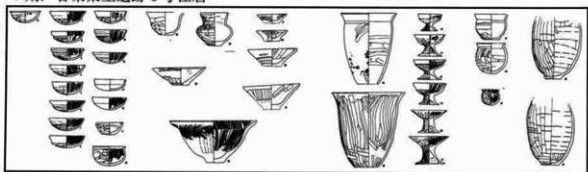
5期. 甘楽条里遺跡54号住居



6期. 前畑遺跡21号住居



7期. 甘楽条里遺跡1号住居





が、「阿曾岡・権現堂遺跡」の前方後方墳の墳形で出現することがそれを示す。5世紀前半の第一の大開発時代、太田天神山古墳、伊勢崎御富士山古墳そして高崎浅間山古墳、藤岡白石稲荷山古墳などの巨大古墳の大首長は、平野部の農業生産に一定の成果を挙げて畿内・尾張へ回帰してゆく。

第二の大開発時代は、二世主体の渡来系氏族集団による榛名山東南麓、赤城山南麓の開発が目標となった。この地域への労働力による支援が「かぶらの谷」の人達に求められ、大量移動したと考えられる。その結果、5世紀中頃の「かぶらの谷」の急速な遺跡数の減少にかかわらず、渡来系氏族が持ち込んだ集落への新来の導入の早さは甘楽条里遺跡で確認され、片山遺跡群で発掘された大古墳の埴輪壺が広域な地域との類似点が見出だせる点などは、この地域が先進地域と極めて近い関係を持ち続けていたためと考えている。6世紀、再び新来の技術を学んだ人々は「かぶらの谷」へ回帰してくるのである。

※ 執筆分担 (1)~(3)深澤 (4)石塚

(注) 1 西弘海氏の1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』に倣い1986「解説 土器の編年」『群馬県史』資料編にて群馬県の古墳時代の土器を編年した。

		300			450			600		700		
群馬県史 (かぶらの谷)	様式	土師器指向						須恵器指向			金属器指向	
	段階	I						II			III	
	面期	1	2	3	1	2	3	1	2			
	段階	A		B	C							
面期		1	2	3	4	5	6	7				

古墳中期遺構分布図



## 7 古代水瓶

### (1) 年代と製作地の推定

庚申山地区壑穴 KJ15号遺構から須恵器水瓶 (J367 口径3.5cm 器高27.1cm 底径8.3cm 次頁図-2 以下同)が出土した。

口縁は僅かに傾きながら水平方向に短く張り出し、その下に直立して裾が少し広がるパイプ状の長い頸部が延びる。なで肩状の胴部は卵型で、底部には八字状に開いた長くしっかりした高台が付いている。頸部に2カ所、胴部に5カ所の2条一組の沈線による水平文が描かれる(胴部の一部は擦り消えている)。頸部と胴部の接合部には、薄いが明瞭な突帯(幅1mm高1mmほど)が見られる。

胎土は明灰色で微少の黒色鉱物粒を含むが、次に述べる二之宮谷地遺跡例に比べれば、かなり均一な状態である。還元炎焼成されるが、やや温度は低く軟質な感じがある。軸は全く確認できない。全体に遺構埋土中に含まれていた鉄分が付着しており、頸部から肩部にかけて僅かに煤が見られる。

器形は、極めて整っており、製作地がどこであるかは明確には判別しがたいが、銅製品を直接模倣したと思われる。頸部や胴部に施された2条沈線及び接合部の突帯は、本来の銅製品にあったものだろう。

上野地方では、同様の須恵器水瓶は、管見では次の2例がある。

- + 二之宮谷地遺跡(前橋市)グリッド出土須恵器(図-3)
- + 十三宝塚遺跡(佐波郡境町)33号住出土須恵器(図-6)

前者は頸部の破片で、長さは本例の3分の2程度である。2条沈線は1カ所、接合部には似た突帯がある。暗灰色で気泡・白色鉱物粒を含む。本例より硬質に焼かれている。後者は頸部下位と胴底部の破片で、頸部下位にはカキメが残っている。残存している胴底部の形状は、裾が狭まらない長胴型と言える。接合部には突帯が見られず、また高台もかなり小さい。2条沈線は頸部と胴部に痕跡が見られる。

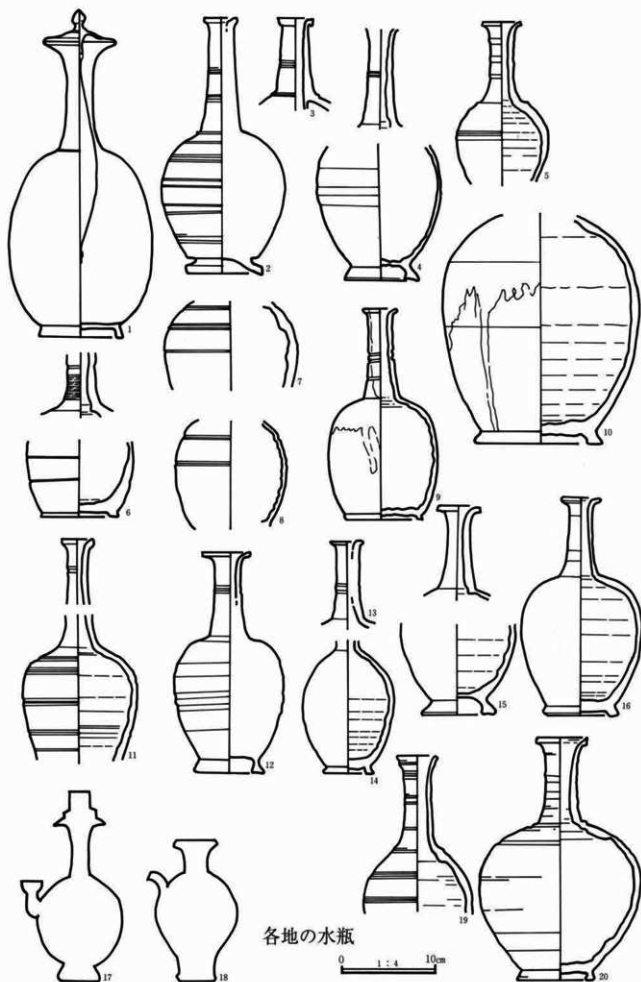
胴部の形状より、本例のような最大径が胴部中位にあり胴部下位径が最大径の半分程度になるものを卵型(A種)、後者のような最大径と胴部下位径が5分の4程度のものを長胴型(B種)とすると、畿内以東の消費地出土のものには、次のものが知られる。

- A種 + 平城京左京三条二坊SE4760出土原始灰軸(図-10)
- + 興福寺一乗院出土灰軸(図-4)
- + 阿木遺跡(中津川市)出土灰軸
- + 多賀城廃寺小子房床上出土灰軸(図-5)
- B種 + 南栗遺跡(松本市)SB129出土須恵器(図-7)
- + 平城京左京三条二坊二条大路SD5100出土原始灰軸(図-9)
- + 平城宮内膳司SK820出土須恵器(図-8)

A種の中で、残存状態のためもあるが、興福寺一乗院例(猿投遺 長岡京期)が最も本例に似た器形である。ただし、頸部の2条沈線は1カ所のみで、また高台も端部の形状に少し差がある。南栗例(美濃須衛衛 推定7世紀後半)は、2条沈線の間隔が似ている。また、多賀城廃寺例は大きさが異なるが、接合部に突帯が見られる。阿木例(猿投遺)は、胴高が長くやや長卵型であり、また2条沈線は確認できない。

次に生産地の例を見ると、次のようになる。

尾張猿投遺跡群では、高蔵寺2号窟(図-11)・鳴海32号窟(図-13,14)・折戸10号窟(図-12)・井ヶ谷78号窟(図



### Ⅲ 遺物の特徴

-15)・黒笹14号室で水瓶が見られるが、器形的には、胴部形状はほとんどA種で、鳴海32号室では長卵型もある。2条沈線は、高蔵寺2号室では顕著であるが、折戸10号室ではすでに施軸されているためか、目立たない。八字状に近い高台は、折戸10号室と井ヶ谷78号室で見られる。また接合部の突帯は確認できない。

和泉陶器窯群では、光明池60号室で胴部最大径と胴部高が近い形状のもの(C種とする)が見られる。八字状高台を持つ例があるが、無軸であるにもかかわらず、2条沈線は見られない。

上総不入窯2号室(図-16)では、小さな高台のA種の須恵器がある。2条沈線は確認できない。

武蔵鳩山窯群(図-19.20)では、I期からIII期の各時期において須恵器水瓶が焼かれているが、ほとんど大部分は高台の短いC種である。I期のA種を除いて2条沈線は見られない。ただ、この製品には接合部突帯があるものが多い。

出羽瀬瀨山窯(酒田市)では、胴部上位がなで肩で下位が長胴型のもの(D種とする)が見られる。頸部と胴部上位には各3カ所に1条沈線が巡る。また接合部突帯がある。

以上の中で、本例は猿投窯群の中の折戸10号室あるいは井ヶ谷78号室の形状に近い。ただし、接合部突帯は、猿投窯群やそれに近い不入窯では見られず、鳩山窯群などの東国の窯製品に多い点は、注意を要する。

全体的な器形変化を考えると、猿投では平城Ⅲ期併行の鳴海32号窯段階までB種が多く見られ、以後A種が登場している。また鳩山窯群は、少なくとも8世紀第2四半期とされるⅡ期からはC種が中心である。D種の瀬瀨山窯は、9世紀後半から10世紀と考えられている。2条沈線は、B種に共通して見られる。

一方、6世紀後半に築造された純寶観音山古墳(高崎市)には、蓋付きの銅製水瓶(図-1)が見られる。全体の形状はB種に近く、興味深いことに接合部突帯が見られる。なお、この純寶観音山古墳例と相似形の銅水瓶は、562年に死亡した北斉貴族の庫狄回洛墓(山西省太原)から出土している。

以上から考えると、接合部突帯と2条沈線は銅製品にあった可能性が高く、少なくともそれは7世紀代から8世紀初頭には将来されていたものと推定できる。本例は、前述のように器形的には猿投の折戸10号室・井ヶ谷78号窯製品に最も似ている。しかし、それらの窯の製品とは異なって本例には軸はなく、また接合部突帯と2条沈線が見られる。そのため8世紀中葉頃に、実際に銅製品を写して作られたものではないか。残念ながら、生産地を特定することは現段階ではできないが、上述のように本例で見られる接合部突帯がその後の東国製品に多く見られる点は、興味深い。

#### (2) 使用の意味

前述の水瓶の出土した消費地遺跡は、次のように分けられる。

- A 仏教寺院境内 : 十三宝塚・興福寺一乗院・多賀城廃寺
- B 有力神社近傍 : 本例・二之宮谷地・南栗
- C 都城内 : 平城京左京三条二坊・平城宮内膳司

Aの十三宝塚遺跡は、上野国佐位郡での最有力な寺院跡で、東山道と推定される直線路上に隣接した遺跡である。Bの二之宮谷地遺跡は、三夜沢赤城神社と共に赤城山信仰の中心である二之宮赤城神社の鎮座地に接する集落遺跡である。南栗遺跡は、信濃国三の宮沙田神社の鎮座地近傍で8世紀前半には掘立柱建物を中心とした拠点的な集落遺跡である。Cの平城京左京三条二坊とは、有力な皇族であった長屋王の邸宅跡地である。

竅穴住居からの出土は、南栗と本例だけが、貫前神社を間近に見おろす急斜面の本例と大型掘立柱建物に近接する南栗例は、もちろん一般集落の竅穴とは言いがたい。

水瓶が仏具であることから考えれば、もちろんこれらの特定遺跡での出土分布は当然のことである。

もともと、水瓶は浄瓶と共に僧具から仏前への供献具となったものである。本来、インドにおいてはクンディカ kundika と総称されていた。7世紀後半にインドネシア経由でインドへ行った義浄の旅行記『南海寄帰内法伝』には、水の容器には非常時に飲用するための焼き物の容器「浄瓶」と、日常的な便利のために使う銅鉄製の容器「触瓶」があるとしている。

金属器が容器の中心であるインドにおいて、果たして焼き物の容器があったのかは確認できない。しかしインドへの往復の際に義浄が長期滞在したインドネシアでは、金属器ならびに同型の中国製陶磁器が多く残っている。インドネシアの7～9世紀のクンディカは、肩に受け口状の注入口突起のついた浄瓶型(図-17)とS字形(図-18)の注出口を持つものがある。共に金属器と陶磁器があるが、前者は細い尖った口縁部が注出口になるもので聖水をそそぐことに適しており、後者は胴部あるいは頸部を持って短い注出口から飲用するのに適している。義浄の呼ぶ「浄瓶」が前者であり、「触瓶」が後者であろう。

後者は、陶磁器製品はクメールのものが知られているが、中国には伝わらなかった。

日本の仏教用語ではクンディカを総称して水瓶とし、浄瓶を仙蓋形と呼び、本例のような単口のを王子形としている。極めて素朴な形状である王子形のは、すでに6世紀後半には山西省に存在していた。仏教文化との関係で考えるなら、それは上記のように7世紀末にインドネシア経由で中国に伝わった浄瓶より以前に、西域経由で入っていたものとなる。

先行型のもの(王子形)は、7世紀後半には美濃須衛窯(南栗例)で製作されており、それは最初に中国に伝わった西域系統仏教の普及に関連している。後来型のもの(仙蓋形)は、義浄が伝えたインドネシア経由の仏教華嚴宗の普及に伴っており、猿投では折戸10号窯以降しか製作されていない。ここでその消費地での分布を検討する余裕はないが、恐らく前者とは微妙に異なったものが想定できる。なお、その点で長岡京時代の興福寺一乗院では両者が共に出土しており、興味深い。

本例に即して考えるなら、すでに早くから入っていたこのような王子形は在来の信仰＝神道と融合して使われていた可能性が大きく、初期の神仏混淆の信仰形態にあって必要器物として定着していただろう。本例あるいは二之宮谷地そして南栗のような、山岳信仰あるいは神道の拠点のような場所での存在には、それほどの不自然さはない、と言える。

#### 参考文献

- 群馬県立歴史博物館.1990『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』  
 古代の土器研究会編.1994『第3回シンポジウム 施輪陶器』  
 坂井 隆.1991『南海の水注—インドネシアのクンディ』『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会  
 .1992『クンディ水注の起源—型式学的考察の試論』『東西海上交流史研究』2.中近東文化センター  
 谷匂・藤島英司・小林信一.1993『生産遺跡の研究3 須恵器』『千葉県文化財センター研究紀要』14  
 長野県埋蔵文化財センター.1990『南栗遺跡』  
 植崎彰一編.1976『日本陶磁全集6 白瓷』,中央公論社  
 .1979『世界陶磁全集2 日本古代』,小学館  
 .1983『猿投窯の編年について』『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』,愛知県教育委員会  
 鳩山窯跡遺跡調査会.1988『鳩山窯跡群Ⅰ』,埼玉県鳩山町教育委員会  
 .1990『鳩山窯跡群Ⅱ』,埼玉県鳩山町教育委員会  
 .1991『鳩山窯跡群Ⅲ』,埼玉県鳩山町教育委員会  
 松本伸之.1994『インドネシアの金工Ⅰ』『月刊文化財』370.第一法規出版  
 雄山閣.1976『新版仏教考古学講座5 仏具』

## IV 遺構の特徴

## 1 弥生時代の集落変遷と竪穴の形態

## (1) 調査範囲内での集落変遷

弥生時代から古墳時代中期までの竪穴の規模と立地を両地区の時期ごとに分類してみると、次の表のようになる。これは、前述の弥生土器の時期分類と重複関係を基本としながら、竪穴は廃絶の直後には重複して建て替えをしないとの原則を設定し、それに不自然な遺構配置をも排除して検討した結果である。また観音山地区では、弥生の可能性の高い未発掘のもの(平面形は確認済み)も含めた。

弥生後期～古墳中期の竪穴住居(数字は遺構番号)

	観音山中央尾根上	観音山西斜面	庚申山
弥生後1期	055,068,073,087,178,184,199,214,未掘1	077	
後2期	082,085,093,115,119,145,161,177,196,210,未掘1	004	
後3期	046,050,066,070,078,086,142,151,172,203,213,未掘1	019	
後4期	048,074,076,084,109,153,156,186,未掘1	020,021,158	
後5期	051,067,079,081,094,145,152,155,164,175,179,183,185,200,204,208,209,未掘1	014,088	
後6期	062,080,083,113,114,118,140,149,150,154,195,未掘1	006,015,023,031,171,194	
後7期	047,063,071,075,089,110,112,180,190,207,215,218,未掘1	011,147	KJ03
終末期			KJ01,04,08,09 KJ10,12,14
古墳前期	174,216	005	
中期	069,095,111,135,139,141,205,250		

太字は土器分類の時期区分と一致するもの。斜体は重複状況より、土器分類より前後に時期を移動したものの。ただし、174号遺構は、古墳前期の遺構中に弥生4期の遺物が混入している。

床面積より、それぞれ極小型(10㎡以下)・小型(11～20㎡)・中型(21～40㎡)・大型(41～60㎡)・極大型(61㎡以上)に分けると、弥生全体104軒では、極小型6軒(6%)・小型25軒(24%)・中型39軒(37%)・大型10軒(10%)・極大型4軒(4%)・不明20軒(19%)の割合になる。これは、極小型が多い古墳時代前期と中型に集中する古墳時代中期に比べ、大きく異なった多様性を示している。

しかし、この多様性は本遺跡の弥生時代後期全体を通じて、同一の状態が存在したわけではない。終末期を除いて、観音山地区にはほぼ同数の竪穴住居の存在があるものの、規模ごとの変化が見られる。1・2期における出発は、中型が中心である。西斜面部南西側にはすでに1期から竪穴が見られる。ただ、ここは観音山地区の調査範囲では唯一湧水のあった沢であるため、各時代の遺構が見られる場所でもある。

3期には突然のように極大型066号遺構が中央に登場している。2期にも大型がすでに1軒あったが、それと比べ面積は倍近くのものである。4期には中型の割合は半数になり、極小型や小型が増えると同時に極大型が出現している。

5期には大きく状況が変化した。まず、絶対数が2倍近くになる。そしてその増加は、小型が倍以上になったことに主に起因している。また湧水の沢とは離れた西斜面の急傾斜地に014号遺構のような大型が出現している。中央尾根上の平坦地の狭さのため、居住人口増加を解決する目的もあったかもしれないが、勾配16度の傾斜地に55㎡の竪穴の造成は、極めて異常なあり方と思わざるをえない。ここで鉄鍬が出土したことから見れば、緊張状況が高まった可能性が考えられる。またこの時期から中央尾根上の両側にトンネル土坑付

観音山地区弥生後期～古墳前期竪穴遺構分布



後期 1期



後期 2期



後期 3期



後期 4期



後期 5期



後期 6期



後期 7期



古墳前期

#### Ⅳ 遺構の特徴

き堅穴(後述)が出現した。

次の6期は、斜面部に積極的な造成が見られる。絶対数は5期とほぼ変わらない。また中型がかなり減ってその分が大型化している。ただ、この時期には極大型は見られない。トンネル土坑付き堅穴は前期と同様に見られる。7期はやや数が減少するが、最も規模に多様性が出ている。中型を中心とはしながら極小型から極大型まで全てが見られる。トンネル土坑付き堅穴は、やはり前期同様に存在している。この時期に、庚申山の平坦部にも1軒小型が初めて出現している。

全く様相が激変したのが終末期で、観音山地区には堅穴が皆無になってしまう。そして、14から17度の急勾配の南東斜面を中心に主に小型の堅穴が、庚申山に集中する。古墳前期の状況はまた異なって、庚申山には再度なくなり、観音山中央尾根上に極小型が2軒、西斜面の湧水部に1軒のみ見られる。

古墳中期は、観音山中央尾根上に似た規模・形状の中型のものが集中している。

時代	弥生												古墳			合計					
	後1期		後2期		後3期		後4期		後5期		後6期		後7期		終末期		前期		中期		
地形	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	平	斜	
10㎡以下	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	5
11~20㎡	1	0	1	0	1	0	1	1	6	0	3	2	2	0	1	4	0	0	1	0	24
21~40㎡	5	1	7	0	5	1	4	0	5	1	3	1	5	1	0	1	0	0	6	0	46
41~60㎡	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	10
61㎡以上	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
不明	2	0	1	0	4	0	1	2	2	0	1	3	1	1	0	0	0	1	1	0	20
合計	9	1	10	0	11	1	7	4	15	2	11	6	12	2	2	5	2	1	8	0	109
トンネル付	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	8

弥生の堅穴は他に時期不明のものが、極小型3(平2斜1)・小型1(平1)・規模不明2(平2)がある。

以上の弥生後期から古墳中期の集落変遷は、大きく4分できるだろう。

##### 第Ⅰ段階(弥生後期1期~4期)

中型堅穴を中心とする均一の規模の施設が観音山中央尾根上を中心に分布。

##### 第Ⅱ段階(弥生後期5期~7期)

極大型と極小型を両極端とする規模の多様化と絶対数が急増。湧水部以外の斜面部にも立地し、それに伴い、木柵(5期)や斜面掘立(5期)が築造される。

##### 第Ⅲ段階(弥生終末期~古墳前期)

突然観音山地区の集落が消滅して、庚申山の急斜面に小型中心の小規模集落が出現。次の時期には、それも消滅して、観音山に極小型の堅穴が僅かに展開する大変動を経験する。

##### 第Ⅳ段階(古墳中期)

観音山中央尾根上に短期間、中型中心のまとまった集落が存在。

#### (2) 遺跡全体での変遷

既述のように本調査の終了後、史跡指定申請を目的とする範囲確認試掘調査が観音山尾根全体でなされた。その結果、弥生から古墳時代にかけての堅穴は、次のように確認されている。

試掘調査検出遺構

	中央尾根上北側	中央尾根上南側	山頂平坦部
弥生中期	0	0	12
後期	17	13(堀1)	18(方形周溝溝1)
古墳前期	(1)	0	1
中期	0	0	0
後期	2	0	4





#### IV 遺構の特徴

山頂平坦部は東側に幅を狭めながら延びるが、弥生中期の堅穴はその全体に展開している。本調査時に範囲外C地点として検出したもの(P.192)はその一部であろう。本調査範囲内でも少数ながら観音山地区では中期土器片が出土しており、中期の集落の一部が中央尾根上にあった可能性は否定できない。

続いて、弥生後期では本調査の1期の前段階のものが、山頂平坦部の天皇塚西側で数軒見られた。それも含めて、後期全体では少なくとも48軒の堅穴の存在が確認され、時間的には本調査での全ての時期のものを含むと思われる。大きく古段階(概ね1期～5期)と新段階(概ね6期・7期)に分けられるが、その分布には、顕著な差が見られない。ただ全体に分布密度は、本調査部分が最も濃い。

なお、観音山地区東尾根の東対岸の下高瀬寺山遺跡(寺山尾根)でも、後期の堅穴が1軒確認された。

後期新段階の重要な遺構として、堀と方形周溝墓がある。

前者は中央尾根南側の緩斜面の最も幅の狭い部分を、東西に切る形で走っている。断面V字形(最大上幅2.3m以上、深さ1.5m以上)で、中央にクランク状の折れを見せながら全長65mに達すると考えられている。一部後期の堅穴を壊して掘削されており、埋土状態より「後期のうちに埋没したものであることは明白」なものだとされる。

後者は、山頂平坦部の天皇塚の南西で確認されたもので、盛り土はなく全周する周溝(長南辺9.5m、北辺8.5m、東辺7m、西辺6m、上幅1～1.2m)が考えられている。この周溝墓の周辺は、弥生の堅穴は確認されていないため、墓域的な様相も想定されている。なお、少ない遺物からの推定では、後期新段階になる。

古墳前期では、中央尾根上北側で遺物出土遺構がある。堅穴は不明。また山頂平坦部南西で1軒、堅穴が確認された。本調査と同様に、存在はするが量は微量である。古墳中期は全く確認されていない。

前節では省略したが、すでに見たように本調査では西斜面南西の湧水部分で古墳時代後期の中規模の堅穴2軒と掘立柱建物1棟を検出した。範囲確認調査では、中央尾根上北側の東支尾根先端で2軒、山頂平坦部南西端で4軒の堅穴の存在が確認された。

以上の範囲確認試掘調査の成果などをもとにすれば、本遺跡全体の集落変遷は、次のように概観できる。

##### 第0段階(弥生中期前半～後期初頭)

広い山頂平坦部に、集落が形成される。特に中期後半に最初の集中居住が南北方向に眺望の良い最高点付近で見られる。

##### 第I段階(弥生後期前半)

山頂平坦部だけでなく、中央尾根上全体にまで及ぶ集中的な居住が展開される。全体に中規模の均一な堅穴で構成されている可能性が高い。

##### 第II段階(弥生後期後半)

密度の増した集落の中心は、東西方向に眺望の良い中央尾根上に移る。同時に防御施設として木柵と環濠の性格の堀が構築される。堅穴規模の多様化が進展し、特定個人の埋葬にかかわるとされる墓が堀外に形成される。

##### 第III段階(弥生終末～古墳前期)

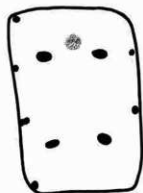
庚申山への短期的な移動を含めて、全体での居住が激減する。古墳前期の居住は部分的に確実に存在はするが、規模は極めて小さい。

##### 第IV段階(古墳中期)

中央尾根上に短期的に、まとまった居住が出現。

弥生～古墳中期 竖穴の形態(1)

トーンは炉



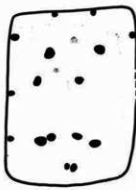
1期-068遺構



2期-196遺構



3期-070遺構



4期-048遺構



5期-079遺構



6期-114遺構



古墳中(3)期-111遺構

極小型



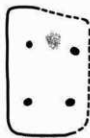
7期-112遺構



古墳前期-216遺構

中型

小型



1期-214遺構



5期-067遺構



終末期-KJ08遺構

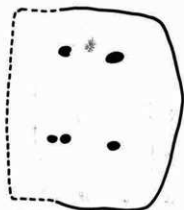


古墳中(4)期-095遺構



4期-158遺構

斜面型



5期-014遺構



6期-015遺構

6期-031遺構

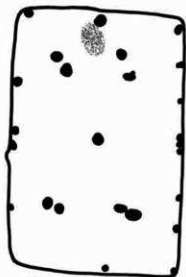


7期-147遺構

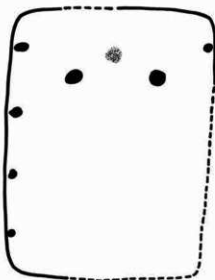
弥生～古墳中期 竪穴の形態(2)

トーンは炉

極大型



3期-066遺構

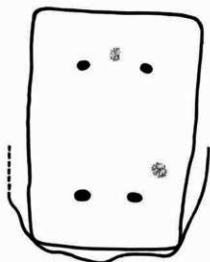


4期-074遺構

大型

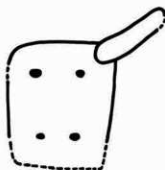


5期-094遺構



7期-075遺構

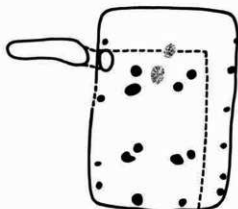
トンネル土坑付竪穴



5期-164遺構



5期-081遺構



6期-080遺構



6期-149遺構



7期-089遺構

0 1 : 160 8 m

## (3) トンネル土坑付き竪穴

本調査で検出された弥生時代の遺構の中で、最も性格が理解しにくいこの遺構は次の通りである。

竪穴番号	規模	土坑形状	土坑位置	トンネル長	口部位置	拡張	時期
081	中	円形	谷側	3.4m	短辺炉側	なし	後5期
164	中	楕円形	谷側	不明	短辺炉側隣	なし	後5期
080	大	楕円形	谷側	1.0m	長辺炉側	あり	後6期
118	大	楕円形	山側	不明	長辺入り口側隣	なし	後6期
149	小	楕円形	谷側	不明	短辺入り口側隣	なし	後6期
089	中	楕円形	谷側	2.0m	短辺炉側隣	あり	後7期
110	中	楕円形	山側	不明	短辺炉側	あり	後7期
180	中	楕円形	谷側	不明	短辺炉側隣	不明	後7期

以上の中で竪穴本体と土坑が完全に分離しており、かつトンネル部分の調査も行ったのは、080号と089号(拡張後例)である。081号はトンネルの存在を確認した。またその他の5例と089号の拡張前例は、上面が削平されていたため、竪穴に土坑が接続した形で検出した。しかし、土坑部の底部の状態から見ても、トンネルで接続していた可能性は極めて高い。

080号の場合は、拡張前にトンネル部が作られているが、拡張後このトンネル部分の機能が継続したかは不明である。

土坑部は、多くが谷側に向かっている。山側の2例も確認時の削平された地形をもとに判断したが、本来は土坑部の位置が低かったかもしれない。しかし削平例を除いていづれも土坑部の端部には立ち上がりが見られる。

この種の遺構について、まだ明確な意味は判断できないが、以下特徴を列記しておく。

- 位置 : 竪穴本体の隣付近(炉側が多い)。
- トンネル形状 : 床面から掘り下げ、人が這ってくぐれる程度の大きさ。
- 土坑部形状 : 開口する。木製の蓋がなされていた(089号拡張後例)。平面は楕円形が多い。
- 遺物 : 特定の顕著な遺物は未確認。
- トンネル方向 : 谷側に向かうのが一般的(排水機能はない)。
- 立地 : 尾根上平坦部の外縁が多い。

## 参考文献

- 富岡市教育委員会.1993『中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書』富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書17
- 群理文.1994『下高瀬上之原遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡』

## 2 弥生時代木柵・掘立と焼土坑

## (1) 木柵

観音山地区では、斜面部でいくつかの柱穴群を確認した。西側斜面北側の253号遺構、同南側の036号遺構、東谷北西側の090号遺構など、そして東尾根南側の241号遺構がそれである。それらの柱穴群の中で、直線状に柱穴が並ぶものは木柵跡の可能性が考えられるが、それは次のものである。

番号	位置	全長	柱穴数	平均間隔	最小間隔	最大間隔	間隔度	勾配
253A	西斜面北	18.2m	10個	2.0m	1.2m	4.7m	不揃い	8°
253H	同上	5.9	4	2.0	1.6	2.3	均一	4
253I	同上	13.8	8	2.0	1.2	3.9	不揃い	4
253J	同上	10.2	5	2.6	1.5	4.3	不揃い	12
253K	同上	8.8	5	2.2	0.9	3.4	不揃い	3
253L	同上	8.0	7	1.3	1.5	2.2	均一	3
253M	同上	4.1	4	1.4	1.2	1.7	均一	11
253N	同上	15.2	6	3.0	2.5	4.7	不揃い	2
253P	同上	8.1	6	1.6	1.2	2.4	均一	5
036A	西斜面南	7.5	3	3.8	3.6	3.8	少数	3
036B	同上	11.6	5	2.9	2.6	3.2	均一	3
036C	同上	4.0	3	2.0	1.8	2.2	少数	7
036D	同上	3.6	3	1.8	0.9	1.8	少数	9
036E	同上	7.5	6	1.5	1.2	2.2	均一	1
036F	同上	2.0	3	1.0	1.0	1.0	少数	1
090A	東谷北	7.3	5	1.8	1.7	1.8	均一	2
090B	同上	4.2	3	2.1	2.1	2.1	少数	3
239	中央尾根	12.8	3	6.4	6.3	6.6	少数	5
249	東尾根	—	—	—	—	—	—	11

間隔度は、平均間隔から見て、最大と最小間隔が1m以内に入っているものを均一とした。

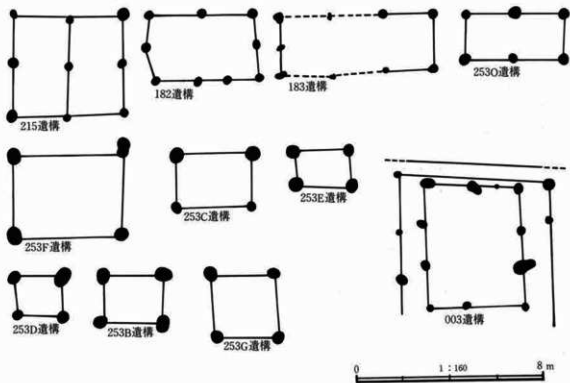
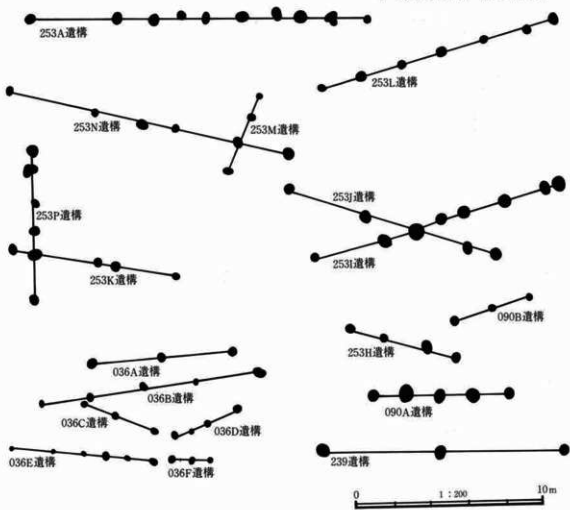
これらのうち、036号遺構に多い柱穴が3個のみのものは、偶然直線状に連なったものであることは、否定できない。逆に同じ036B号遺構などは、10m以上の距離を持ちながら、均一な間隔になっている。他に均一なものでは、253H号が5.9m、253L号が8.0m、253M号が4.1m、036E号が7.5m、090A号が7.3mの長さである。これらの均一な間隔度のものは、走向の傾斜が5度以内で比較的勾配のない状態で走っている。それに対し8度以上の勾配をもって走るものの中で、18.2mの253A号、10.2mの253J号、15.2mの253N号は距離が長い。

一般的に木柵がどのような構造であるのかは判然とはしないが、中央尾根上の平坦地にある239号遺構を除いて、上記の各遺構は、急斜面あるいは急斜面との傾斜変換線に立地しており、かつ建物として組み合わせが考えられずに直線状に柱穴が並ぶものである(249号は並びが確認できない)。3個以内のものを除いた各遺構は、そこに柱状のものが据えられて並んでいた可能性は高く、これを木柵跡と考えることは、決して不自然ではないだろう。それらは、平均間隔が1.3~3.0mで、延長距離が短く均一間隔なものほど、平均間隔も短い。恐らく、間隔が長いものと短いものでは構造的な差は当然あったのだろうが、いづれにしても、これらの柱穴は主要な柱の跡であり、その間には当然補助的な柱があった可能性は考えられる。

253N号には土器片(4期)の柱止めがあった。そのため5期の築造が考えられる。また削平箇所が多い東谷側の090A号の状況から、観音山尾根の主要な傾斜変換線に木柵跡がまだ多く存在していたことは十分想定できる。

## (2) 掘立

本調査で確認された掘立遺構は、次の通りである。



#### IV 遺構の特徴

番号	位置	柱間数	最大	最小	形状	面積	勾配	柱穴	特徴	時代
253B	西斜面北	1×1	3.2m	2.4m	正方形	5㎡	17°	深い		弥生
253C	同上	1×1	4.0	2.8	長方形	7	16	同上		弥生
253D	同上	1×1	2.5	1.9	正方形	3	16	同上		弥生
253E	同上	1×1	3.0	1.8	長方形	4	16	同上		弥生
253F	同上	1×1	5.8	4.3	長方形	16	17	浅い		弥生
253G	同上	1×1	3.3	3.3	正方形	7	15	同上		弥生
253O	中央尾根上	1×2	2.7	2.3	長方形	12	3	同上		弥生
182	同上	2×3,4	2.9	1.4	長方形	13	1	同上		弥生
183	同上	1,2×3	2.8	1.5	長方形	19	3	同上	堅穴重複	弥生
215	同上	2×2縦	3.0	2.5	正方形	19	1	同上	堅穴重複	弥生
003	西斜面南	2×3底	3.1	2.0	長方形	20	19	浅い	地山整形	古墳

最大・最小とは柱間距離で、柱穴では約0.5-1.0mの深さを「深い」とし、それ以下を「浅い」とした。

大きく見て、西斜面北側の15-17度の急傾斜に位置する1×1間の柱間のもの、中央尾根上の平坦部に位置する柱間の大きさなどに分かれる。前者は253F号を除いて、3-7㎡と小規模であるのに対し、後者は12-19㎡と中程度の規模である。

後者の183号は、ほぼ同プランで堅穴が重なり、高床でない可能性もある。182号の短辺には棟持柱があり、215号は総柱である。182号と183号は、周辺堅穴との近接状況から、1・2・4・6の各時期が推定でき、走向からは182号は1・2・6期、183号は1・4期が堅穴と適合する。253O号は、重複・近接する堅穴がなく走向は他の堅穴・掘立のいづれとも異なる。木柵跡の253N号との関連が考えられる。

これに対し西斜面北側に展開する掘立は、253F号を除いて面積と柱穴の深さが類似し、堅穴014号の北と北西の海拔220-223mの急勾配斜面に集中する点が共通している。また地形的な制約にもよるが、いづれも走向は似ている。时期的には5期の土器片が埋土中に見られるものが多く、それは堅穴014号と一致している。

古墳時代後期の庇付きの掘立003号は、西斜面の湧水部分にあり、山側に地山造成痕がはっきりと見られる。これは床面をあまり高くさせたくない意図と思われる、居住の可能性を想定できる。だが弥生の西斜面の掘立群には一つとして、そのような地山を造成した痕跡はなく、ただ深い柱穴が急斜面に掘られているだけである。

以上の点から、あえて各掘立の性格を推定すると、平坦部の3掘立はあまり床が高くないもので、堅穴群と一体の居住空間を構成している感じである。同時に182・183両号は尾根の走向に平行する堅穴の走向に対し、主軸が直交の位置関係になっている。そのため堅穴居住とは異なった意味がある可能性が考えられる。

西斜面の一群のものは、それらとは大きく異なり、狭い面積の床が高い柱の上に組まれた構造の建物で、014号の堅穴に近い急斜面に作ることに大きな目的性を持っている。環濠の外側に倉庫群が形成されている吉野ヶ里遺跡の例から、集落外倉庫群との考え方もできる。同時に、鉄槌の出土した014号との関係で、見張り矢倉との想定も、現状では決して不都合はない。

#### (3) 焼土坑

堅穴の外側に焼土を埋土中に含む土坑を、次のように5基確認した。

番号	位置	海拔	勾配	焼土の状態	時代
034	観音山西斜面	226.1m	21°	底に凝固	弥生
060	観音山西斜面	227.3	15	下層に含有	弥生
126	観音山東谷	227.0	14	下層に含有	不明
KD01	庚申山尾根上斜面	227.5	24	上層に含有	不明
KD15	庚申山南東斜面	211.0	24	上下層含有	不明

最も多く残っていた034号の場合でも、堅穴内部の炉で見られるほどの凝固状態ではなく、明らかに燃焼の頻度は日常的なものではない。他も燃焼は確実になされていたが、非恒常的なものである。これらはいづれも急勾配の斜面に位置するが、最頂部まではまだそれぞれ数mの高さがある。

たまになされた屋外での燃焼施設であることは間違いないが、それ以上の性格を特定することは難しい。ただ、立地的に見て、狼煙跡であることを否定するものではない。その場合、最頂部より少し下がったこれらの土坑の位置の方が、風の影響をやや弱くできると考えられる。



## 3 火災遺構の問題

本遺跡では、火災と関係のある遺構が多く検出された。ここでは、次のように定義してまとめてみる。

- A種 大量の炭化材が検出されたもの(「大量火災」)  
 B種 炉以外の床面で焼土と炭化材が検出されたもの(「一般火災」)  
 C種 炉以外の床面で焼土のみが検出されたもの(「可能性」)

A種とB種は、火災を受けたことは間違いない。C種は何らかの理由で炉の焼土が飛んだこともありうるため、火災があった可能性として考える。A種は、炭化材の下での残存遺物は少なく、また壁面も焼土化している例が多い。B種は炭化材と床面遺物が併存している。これらは、時期別に見ると、以下の通りである。

状態別の火災燬穴

時代	弥生										古墳				合計
	I					II					III		IV		
段階	1	2	3	4	計	5	6	7	計	終	前	計	中		
A種	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	4	
B種	1	2	2	3	8	6	7	2	15	5	3	8	5	36	
C種	1	0	3	1	5	4	4	1	9	1	0	1	0	15	
A+B	1	2	2	3	8	6	7	6	19	5	3	8	5	40	
A+B+C	2	2	5	4	13	10	11	7	28	6	3	9	5	55	
発掘総数	9	11	12	11	43	17	17	14	48	7	3	10	8	109	
推定総数	10	12	13	12	47	18	18	15	51	7	3	10	8	116	
割合1(%)	11	18	17	27	19	35	47	43	40	71	100	60	63	37	
割合2(%)	22	18	42	36	30	59	65	50	58	86	100	90	63	50	

発掘した燬穴に対するABC三種の合計を推定焼失率(割合2)とすれば、弥生の5期以降が5割以上の率になっている。段階ごとでは、第II段階以後の平均はやはり半数以上になる。ただ、A種は第II段階にしか見られない点は、注意を要する。一方、AB二種の合計の推定焼失率(割合1)から考えれば、II段階特に6期以降の率が高い。規模別に段階ごとの推定焼失率を出して見ると、次の通りである。

規模別の火災燬穴

( )は規模の判明する燬穴総数

時代	弥生				古墳				合計	
	I		II		III		IV			
小・極小	0(6)	0%	6(14)	35%	7(8)	88%	0(1)	0	13(30)	43%
中	8(23)	35%	11(16)	69%	1(1)	100%	5(6)	83%	27(45)	56%
大・極大	2(4)	50%	9(10)	90%	0(0)	0	0(0)	0	11(14)	79%

小・極小型はII~III段階にかけて増加している。III段階での焼失率は極めて高い。中型もI段階を除いて高率である。大・極大型はII段階の推定焼失率が高い。一方、各段階ごとの焼失率の高いものは、I段階で大・極大型、II段階では中型と大・極大型、そしてIII・IV段階は例が少ないが、中型が最高である。全体としては規模が大きいほど推定焼失率は高く、その傾向はII段階が最も顕著である。

ここで興味深いのは、焼失率の高さとそれぞれの段階での絶対数の関係が、I・II段階とIII・IV段階では差が見られることである。すなわち、前者では絶対数の多くない大・極大型での焼失率が高いが、後者では概ね絶対数と焼失率の高さが比例している。それが、火災そのものの内容と関係があるのかは不明だが。

なお両地区の他の時代の燬穴(縄文7軒・古墳後期2軒・古代8軒)では、僅かに古代燬穴1軒でB種の焼失状況が見られただけである。少なくとも、弥生後期から古墳中期までの高い焼失率は間違いない。

## 4 古代石組遺構と礎石建物

本調査では、庚申山地区を中心に古代の遺構を、次のように確認した。

番号	位 置	勾配	種 類	金 属 遺 物	特殊土器
KT01	庚申山南東斜面	12°	礎石建物	鉄金具類鉄滓	
KT02	同 上	8	礎石建物	鉄鈴	土師器小皿
KT03	同 上	20	斜面石組遺構	鉄刀子	須恵器瓶
KT04	同 上	21	斜面石組遺構	鉄滓	
KJ05	同 上	7	竪穴		
KJ06	同 上	7	竪穴		
KJ07	同 上	7	竪穴	鉄小片	
KJ13	同 上	8	竪穴		
KJ15	同 上	8	竪穴	鉄滓小片	須恵器水瓶
KJ02	同 上	5	土坑		
KD05	同 上	15	土坑	鉄滓小片	
KD13	同 尾根上	3	土坑		
061	観音山中央尾根上	3	竪穴		
092	同 上	2	竪穴		
136	同 上	2	竪穴	鉄滓	
211	同 上	5	土坑(井戸?)		土師器長甕

以上のように、庚申山の急勾配の斜面を中心に遺構が展開している。そのうち礎石建物KT01号はすでに報告したように焼失している。またここからは、鉄金具やカスガイ状の鉄製品が見られた。

KT01号は、かなり大きく斜面を造成して平坦地を作っており、使用された礎石もそれほど小さなものではない。ここに建てられた建物は、瓦葺きではないにしても、ある程度の重量が想定されるもので、このような急斜面を造成して建造することは、対応の目的が必要であり、それを裏付ける資力も求められる。

この建物の壊された礎石建物KT02号からは、鉄鈴が出土している。またこのKT02号の廃絶後、即ちKT01号の使用時には、内部に燃焼痕を持つものを多く含む大量の土師器小皿片が投棄されている。そしてさらに古い竪穴KJ15号からは須恵器水瓶(P.268既述)が出土している。それらの変化は、次の順として考えられる。

- ① 水瓶を持つ竪穴KJ15号
- ② 竪穴KJ13号
- ③ 鉄鈴・大量の土師器小皿出土の礎石建物KT02号
- ④ 焼失した礎石建物KT01号

KJ13号を除いて、いずれも特殊な遺物を出土した遺構が繰り返して建てられている。前述のように水瓶は8世紀中葉頃と考えられるが、他の遺物から見てもKT01号の時期はそれから多く下らないと思われる。KT01号とKT02号は日常的な居住施設とは考えられず、隣接する竪穴KJ05号・KJ06号・KJ07号が当然これらの施設と関わりのある人々の居住地となる。

さて、KT01号から直線距離で約40m離れ、高さが8mほど低い斜面石組KT03号とKT04号は何だろうか。前述のように両遺構の立地する場所は、20度以上の勾配で本遺跡の遺構が存在する場所では最も急斜面である。急斜面に居住が及んだ弥生時代においてさえ、このような急勾配の場所には生活の跡は見つかっていない。また石組は、急傾斜であればこそ、山側の崩落を防ぐ目的で築造されたと思われる。当然、その築造は簡単にはできないことであり、非日常的な特異な理由が必要となる。

残念ながら出土遺物が僅少であり、かつ管見では同様の遺構の検出例が不明のため、これ以上、両石組遺構の明確な性格については指摘することはできない。

観音山地区の中央尾根上の竪穴については、特別な特徴は見られない。竪穴以外では、井戸の可能性のある211号があっただけである。また、本調査の範囲外でも同時代の他の竪穴は確認できなかった。

なお、本遺跡の立地する高瀬山丘陵では、東に600m離れた同時期の下高瀬上之原遺跡で、8世紀後半の堅穴13号住から銅鈴及び銅鏡が出土している。銅鏡は、瑞花双鳥系の八稜鏡であり、年代的には従来かなり後出すると考えられていたが、共伴土器よりこの時期であることは確実である。また同遺跡の北側に接する内匠日向岡地遺跡の7・8世紀代とされる2号谷津からは、「奉竜王」と書かれた木簡が出土している。

さらに時期的にはかなり下がるが、同じ山並みの西に1キロ弱離れた大島上城遺跡では、17世紀代の2号墓塚に12個の小鈴を付けた鉄製と思われる握り鈴が副葬されていた。

いづれも、高瀬山地区が信仰活動と大きな関係があったことを示すものである。すでに前述のように、高瀬山と鍋川の狭い谷を挟んだ対岸には、延喜式内名神大社である貫前神社が鎮座している。同神社の祭神は、荒船山と稲倉山と考えられているが、二つの山とも本遺跡を含める高瀬山からはより良好に眺望できる。そのためこれらの事実は、本遺跡を含める高瀬山一体が少なくとも古代以降において、両山への信仰活動の拠点としての役割があったことを示しているのだろう。

#### 参考文献

- 群理文、1988『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』  
 .1994『下高瀬上之原遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡』  
 .1995『内匠日向岡地遺跡』

## 5 遺跡立地と地形との関係

### (1) 本遺跡立地の特徴

すでにI章2節地理的環境で述べたように、本遺跡は低地との比高60m以上の尾根上及びそれに至る斜面に立地している。

特に観音山の西斜面は平均13度、庚申山に至っては21度の平均傾斜で、弥生時代の堅穴住居や掘立建物が位置している場所は、共に16～18度の傾斜を測る。しかも、それぞれ最も下位にある遺構は、弥生時代では観音山が海拔218m、庚申山が216mで、低地からは45m以上の比高になる。

このような急峻な地形以外に、本遺跡周辺には居住適地はないのだろうか。そのようなことは全くなく、45m下の低地は、決して狭いとは言えない平地が広がっている。現在「高瀬田圃」と通称される富岡で最も広いこの平地が水田化したのは戦後の水路開削によるものである。だが、山裾の湧水を利用した何らかの農耕は、現在でも発見される石鍬や弥生土器に見られるように、弥生時代でも行っていたことは間違いない。

同じ高瀬山の頂部でも、東に約1km離れた下高瀬上ノ原遺跡・内匠日影岡遺跡・内匠諏訪前遺跡などでは、緩傾斜の広い平坦面がつながっている。しかし、それらの遺跡で検出された弥生時代の遺構は、極めて少ない。また本遺跡でも、南側の山頂部は観音山尾根に比べはるかに広い平坦面である。しかし、そこは掘で区画された外側と思われ、堅穴の密度は今回の調査部分とはかなり薄い状況が想定できる。

即ち、前面の平地はもちろん、東側と南側の平坦面でも、より居住環境の良い部分が周辺にあるにも関わらず、劣悪な条件の観音山尾根と庚申山尾根にこだわった理由は、何だろうか。それは、ここが高瀬山では唯一、北側の鍋川沿いの低地(甘栗回廊)に突出しており、しかも三方が急斜面で囲まれていること以外には考えられない。良好な眺望と防御性に富んだ地形であるからこそ、他の居住条件を無視して集中した居住がなされたと思われる。観音山尾根の北東端が中世の城郭であることも、それを裏付けている。

#### IV 遺構の特徴

##### (2) 他の弥生時代遺跡の立地

中部・関東地方での弥生時代後期を中心とする集落遺跡を、立地条件の点から見ると、大きく次のように分けられるだろう(図1-6:p.287, 図7-12:p.288, 図13-19:p.289, 図20-25:p.290, 図26-34:p.291, 図37-41:p.292, 図42-46:p.293, 図47-50:p.294)。

A類【平地】傾斜が乏しい地形にあって、想定される集落と周辺平地との間に地形的な差が少ないもの。

上野地方では、平野部の浜尻遺跡(1 高崎市)、清原庚申塚遺跡(2 前橋市)、新保遺跡(3 高崎市)、新保田中村前遺跡(4 同)、有馬遺跡(50 渋川市)、中村遺跡(49 同)が代表である。また西部山地では、伊勢町遺跡群(5 中之条町)、南蛇井増光寺遺跡(6 富岡市)、小塚遺跡(9 同)、押出遺跡(10 同)があたる。

B類【平地中の小丘】周辺の平地から比高10m程度の低い丘の上に立地するもの。

上野では阿曾岡遺跡(8 富岡市)、門前橋詰遺跡(7 川場村)そして引間遺跡(29 高崎市)があり、越後では横山遺跡(12 長岡市)、奈良崎遺跡(11 和島村)が該当する。

C類【平地近接の傾斜地】近くに平地があるものの、そこは隔絶された台地・段丘中央の傾斜地に位置する例。平地との比高は40-100mとかなりあるが、直接平地との境界には位置していない。

上野では北部山地の見立沼井遺跡(13 赤城村)、石墨遺跡(16 沼田市)、三後沢遺跡(17 月夜野町)が、信濃では中村遺跡(18 伊那市)が該当する。

D類【平地近接の低台地端】平地に近接した台地端部に位置して、平地との比高は10-20m程度。

上野では西部山地の下小塚・下小塚Ⅱ・三ツ保遺跡(21 甘楽町)、水沼遺跡(19 倉沢村)、中原遺跡(36 安中市)、日影岡地遺跡(14 富岡市)、内匠諏訪前遺跡(15 同)、そして平野部の八幡遺跡(27 高崎市)、四ノ市遺跡(29 同)、剣崎遺跡(30 同)、西原遺跡(20 粕川村)があたる。信濃の横口内城館遺跡(25 辰野町)、越後の大平城遺跡(24 見附市)、武蔵の下戸塚遺跡(22 新宿区)、相模の神崎遺跡(23 座間市)もこの例になる。比高はあまりないが、平地を見おろす立地である。

E類【平地近接の要害地】平地に隣接する比高が30m以上の高い台地・丘陵上に位置するもの。

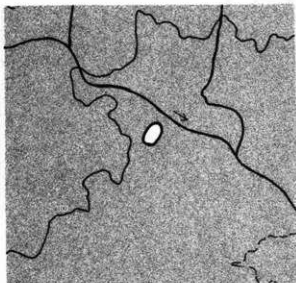
上野では、平野部で少林山台遺跡(26 高崎市)、栗附遺跡(31 同)、八幡遺跡(27 同)、分郷八幡遺跡(47 北橋村)、下遠原遺跡(48 同)があり、西部山地では古立東山遺跡(37 妙義町)、瀬戸原遺跡(38 富岡市)、注連引原遺跡(34 安中市)、下原遺跡(35 同)が含まれる。北部山地では下川田平井遺跡(32 沼田市)、日影平遺跡(33 同)が該当する。越後では斐太遺跡群(40 新井市)、山谷古墳遺跡(42 巻町)、大沢遺跡(43 同)、古津八幡山遺跡(44 新津市)、信濃では後沢遺跡(39 佐久市)、武蔵では駒塚遺跡(41 東松山市)そして遠江では西平戸遺跡(45 森町)、中芝原遺跡(46 同)がそれぞれである。

A類とB類は、生活条件から見て大集落を形成する上で自然なものである。後者は、排水の点を考えたものとも言える。

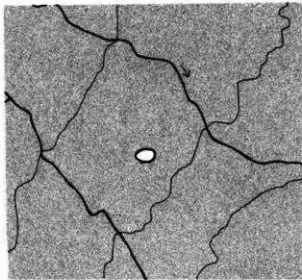
D類もそれほど、厳しい立地条件ではない。しかし、概して平地との傾斜はきつく、眺望は良く、一定度の防衛性がある。C類は平地との隔絶性が強く、水の確保などは容易ではない。ただ想定されている集落の範囲は平地との崖まで達していない、直接の防衛性は見られない。

E類は、極めて防衛性に富んだ要害地形で、逆に生活条件は極めて悪い。眺望が良い代わりに当然、風などの影響が大きい。

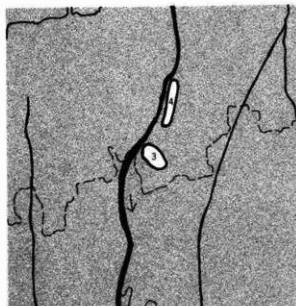
ここで使う平地とは、文字通り平坦な土地ということで、水田地を指すわけではない。しかし、生活条件は平地の方が容易であることは、洪水常襲地でない限り確かであろう。その意味でEは、かなり異常な居住



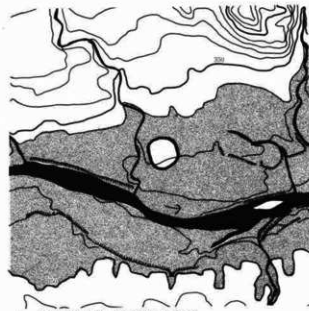
1. 浜尻遺跡 (高崎市)



2. 清里庚申塚遺跡 (前橋市)



3. 新保遺跡 4. 新保田中村前遺跡 (高崎市)



5. 伊勢町遺跡群 (吾妻郡中之条町)



6. 南蛇井増光寺遺跡 (富岡市)

等高線の間隔

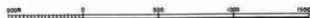
----- 5 m

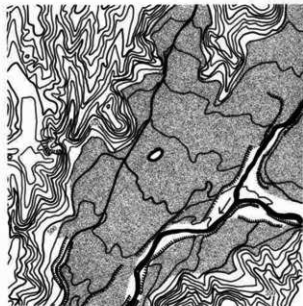
————— 10m

————— 50m

■ 平地

1 : 25,000

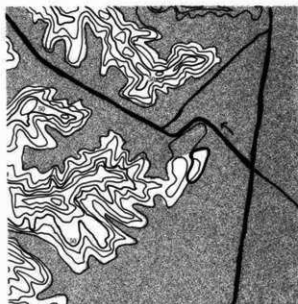




7. 門前橋詰遺跡 (利根郡川場村)



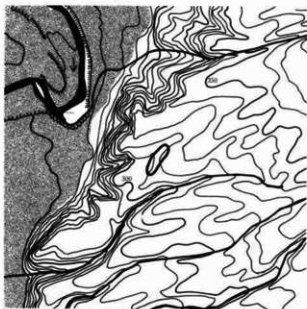
8. 阿曾岡遺跡 9. 小塚遺跡 10. 押出遺跡 (富岡市)



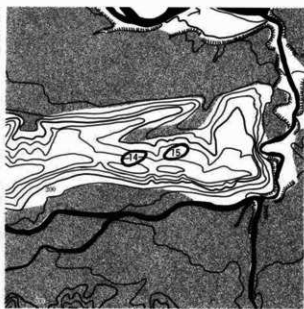
11. 奈良崎遺跡 (新潟県三島郡和島町)



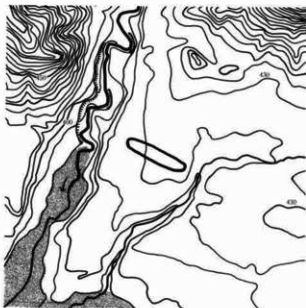
12. 横山遺跡 (新潟県長岡市)



13. 見立溜井遺跡 (勢多郡赤城村)



14. 日影埜地遺跡 15. 内匠瀬訪前遺跡 (富岡市)



16. 石墨遺跡 (沼田市)



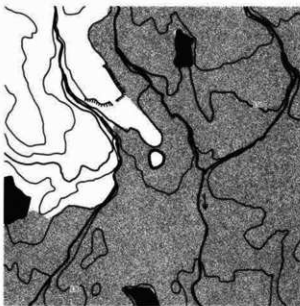
17. 三後沢遺跡 (利根郡月夜野町)



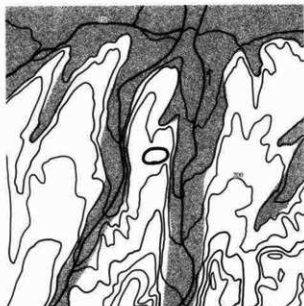
18. 中村遺跡 (長野県伊那市)



19. 水沼遺跡 (群馬郡倉田村)



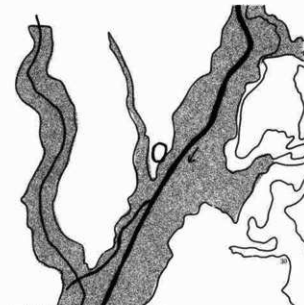
20. 西原遺跡 (勢多郡柏川村)



21. 下小塚・下小塚Ⅱ・三ツ保遺跡 (甘栗郡甘栗町)



22. 下戸塚遺跡 (東京都新宿区)



23. 神崎遺跡 (神奈川県横浜市)

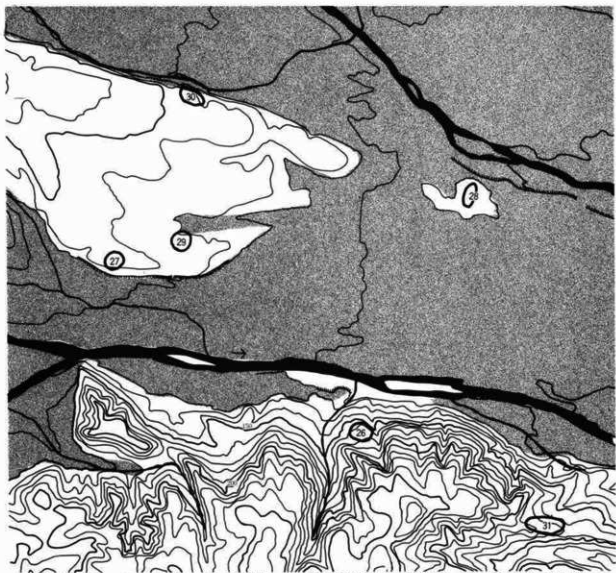


24. 太平城遺跡 (新潟県見附市)



25. 樋口内城船遺跡 (長野県上伊那郡辰野町)





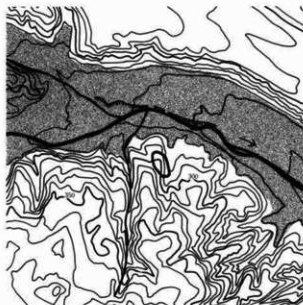
26. 少林山台遺跡 27. 八幡遺跡 28. 引間遺跡 29. 四ノ市遺跡 30. 刺崎遺跡 31. 乗附遺跡 (高崎市)



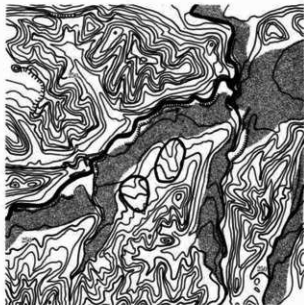
32. 下川田・平井遺跡 33. 日影平遺跡 (沼田市)



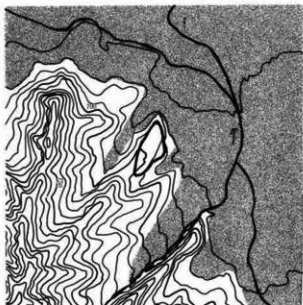
34. 注連引原遺跡 35. 下原遺跡 36. 中原遺跡 (安中市)



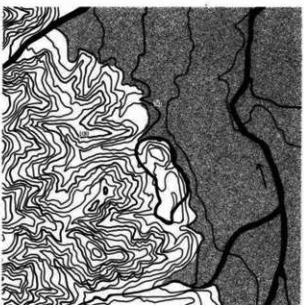
37. 古立東山道跡 (甘家郡妙義町)



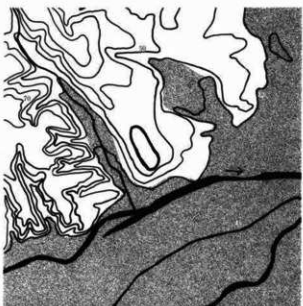
38. 箱戸原道跡 (富岡市)



39. 後沢道跡 (長野県佐久市)



40. 斐太道跡 (新潟県新井市)



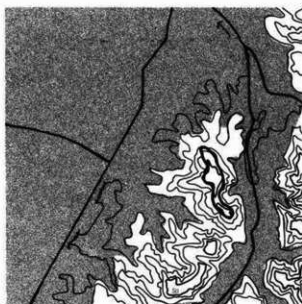
41. 胸堀道跡 (埼玉県東松山市)



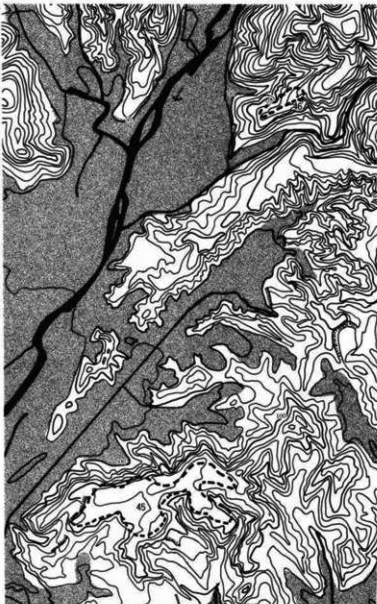
42. 山谷古墳遺跡 (新潟県西蒲原郡巻町)



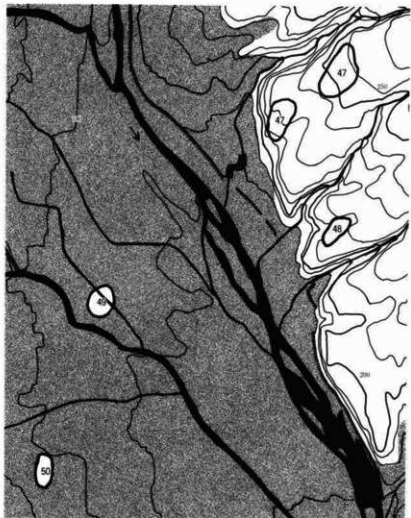
43. 大沢遺跡 (新潟県西蒲原郡巻町)



44. 古津八幡山遺跡 (新潟県新津市)



45. 西平戸遺跡 46. 中芝原遺跡 (静岡県周智郡森町)



47. 分郷八崎遺跡 48. 下達原遺跡(勢多郡北橘村)  
49. 中村遺跡 50. 有馬遺跡(渋川市)

立地であることは、間違いない。そこには、快適さ以外のものを必要とする目的意識が見られる。

なお、これらの遺跡のうち上野地方の遺跡に限って見れば、Aの有馬と押出で鉄剣が、Cの三後沢で鉄鏃、Dの下小塚・下小塚Ⅱ・三ツ俣で鉄鏃と銅戈、水沼そしてEの分郷八崎で鉄鏃、また古立東山では石戈が出土している。

### (3) 高地性集落について

高地性集落とは、小野忠照が1953年に瀬戸内地方の弥生集落を考える上で提唱した用語である。その後概念を整理して、山地性集落と高位台地性集落を含み、後者は「斜面が急で、台麓からの比高が20mを超え、水田経営や日々の生活に不便な地形で、むしろ外敵の監視と通報所や防塞のような、広い意味の防衛的条件を備えていたり、その機能を予想することができるような地形の場所に占拠している集落遺跡」としている。そして、反対の低地性集落を「水田農民の居住に適した」集落であり、比高20mであっても「山麓や低地帯に可耕地や居住適地がありながら、登り降りに著しく困難な急斜面や断崖をめぐらした高所の集落なら、水田農民にとって特殊な機能をもつ異常な集落の立地といえるので、高地性集落の範疇に入る」とした。

そのような小野の概念規定を一つの基礎として、1972年から76年にかけて「弥生系高地性集落址の研究」の名で全国的な調査がなされた。この時、田村晃一は、中部・関東地方の防衛機能を持った高地性集落として、越後の斐太遺跡と上野の北山第1地点遺跡(富岡市)そして稲荷山遺跡(吉井町)をあげている。北山第1

地点遺跡は、北山茶臼山古墳の東側の尾根端部で、本遺跡の庚申山地区から直線で僅か300mの距離にある。

その後、小野は「狹義の高地性集落」の要件として、①縄文晩期から古墳時代の時代限定、②現在の農村集落と重複していないような異常性、③見張り・通報・防塞にふさわしい位置と地形、④防備施設と武器的遺物の存在を限定条件とした。一方、そのような小野の研究を受け継いだ森岡秀人は、広く西日本の高地性集落全体を集落規模から次のように分類した。

- A型 1～2棟の住居からなる小規模なもの。付帯施設を伴わない。
- B型 3～4棟にとどまる住居群。付帯施設を伴う。
- C型 6～7棟構成の単位集団の住居群。付帯施設を伴う。
- D型 広範囲な丘陵上に20棟を超える住居が集住形態をとるもの。付帯施設を伴う。

そして特筆する付帯施設としては、貝塚・焼土坑(狼煙台)・段状整形(斜面の居住空間への造成)を上げている。また鉄製武器の保有率が高いことも、重要な特徴とした。

なお、立地条件については、山頂部立地と丘陵性のものを含んでいることは確かだが、後者については一般農耕集落との「明解な分類基準を占地の上からのみ設けることは不可能というほかない」とした。また、近畿地方では50m以下の比高のものが、高地性集落と認定されたものの半数近くに達していることも指摘している。

以上の研究史の流れの中で本遺跡を考えれば、小野の設定した定義に全て該当することは間違いない。また先に分類した東日本の集落遺跡でのE類は、分郷八崎・下遠原・日影平遺跡で現在の農村集落と立地上の重複が見られるが、その他の遺跡はほぼその定義に該当すると言える。

さらに本遺跡は、森岡分類ではD類にあたり、付帯施設とした焼土坑に類するものや段状整形があることは問題ない。また、他の弥生集落に比べ鉄器が多いことも明らかである。

そのような点から見ると、定義的には「狹義の高地性集落」ではないとすることに、むしろ証明を要する。ただ、小野が強調した水田農民との関係を見るなら、少なくとも沖積地が極めて少ない鍋川流域一帯には平地であっても水田が弥生時代後期にかなりの規模で形成された可能性は、ほとんど考えられない。この地域は、近世に至るまで稲作は乏しかった。本遺跡でも、米が大量に貯蔵されてあった痕跡を指適することは難しい。

その意味で、本遺跡は水田耕作集落と一体の関係で形成されたものではないと考えられる。定義的には西日本の高地性集落と同じものだが、その背景となった経済・生産はかなり異なったものと言わざるをえない。また、他のE類遺跡の状況も同様の可能性が考えられる点は、注意を要するだろう。

#### 参考文献

- 小野忠熙編.1953『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告』山口大学島田川流域学術調査団
- .1977『高地性集落について』『日本古代文化の探求 城』社会思想社
- 編.1979『高地性集落跡の研究 資料編』学生社
- .1981『高地性集落論』『三世紀の考古学』中巻
- 森岡秀人.1986『高地性集落』『弥生文化の研究7 弥生集落』雄山閣

## 6 黒曜石類と遺物埋没課程

本遺跡の調査では、各遺構から多種類の遺物が出土した。特に弥生時代の竪穴住居と思われる遺構から、大量の竈を中心とする黒曜石製品・剥片類が出土したことは、特筆に値する。それらは、単純に縄文時代のもの流入とするにははるかに量が多く、また下層からの出土も決して少なくなかった。

この黒曜石類(チャートを含む)の時代的な帰属を、層位的に理解することを目的として、各遺構出土の全ての遺物(本報告に掲載していない全ての破片類ならびに自然石を含む)について重量を計測した。各遺構の出土物の重量比を、地区時代種別ごとに平均したものが次表である。

なお、遺構の時代認定は、埋土の特徴及び下層出土遺物の比率による。また下層とは上層倒壊時の初期埋没土と考えられる層、上層とはそれ以後の二次的な埋没土である。出土遺物には次表に示さなかった微量の陶磁器・金属器がある。自然石の比率は、それら全ての出土遺物との合計重量に対する割合である。数値の太字は出土遺物中の最大重量のものを示している。

遺構検出遺物類平均重量比(%)

太字は各最大割合

地区	観音山								庚申山					
	近世全体	古代竪穴	古墳竪穴	古墳全体	縄文竪穴	縄文全体	弥生竪穴	弥生全体	古代竪穴	古代全体	縄文竪穴	縄文全体	弥生竪穴	弥生全体
上層														
弥生土器	48.5	43.9	40.2	41.5	4.0	11.7	78.3	74.6	1.5	11.6	0.0	4.3	65.5	63.4
縄文土器	11.1	1.6	1.9	2.2	30.8	38.6	3.6	5.1	1.9	3.2	91.7	29.4	12.2	12.8
土師器	7.5	46.7	34.6	37.8	1.5	4.9	2.0	2.1	75.3	54.2	8.3	4.0	9.3	12.2
石斧類	33.4	7.3	23.1	18.1	62.2	42.2	14.8	16.5	5.1	12.8	0.0	12.3	7.0	6.3
黒曜石類	0.7	0.6	0.2	0.2	1.6	2.6	1.1	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7	5.9
自然石	7.8	10.4	19.9	22.8	45.4	22.4	20.9	20.2	15.0	8.7	0.0	0.0	28.5	25.3
下層														
弥生土器	19.5	5.3	21.8	23.1	0.5	0.2	62.5	62.9	0.3	12.3	0.0	1.1	79.9	71.0
縄文土器	14.3	0.1	0.7	1.1	78.1	57.3	0.9	1.4	0.6	5.9	0.0	66.8	6.1	5.4
土師器	5.9	81.5	60.8	60.6	1.8	1.5	1.6	1.4	59.4	46.2	0.0	0.0	0.4	0.3
石斧類	41.7	11.9	16.6	15.0	17.4	40.3	32.5	32.0	37.7	24.5	0.0	16.4	13.0	11.5
黒曜石類	16.8	0.0	0.2	0.3	2.3	0.8	2.5	2.2	0.0	0.2	0.0	0.7	0.7	0.6
自然石	0.0	32.8	46.5	38.4	48.2	30.2	23.4	22.9	22.4	28.8	0.0	7.4	31.6	28.1
掘り方														
弥生土器	0.0	0.0	48.1	40.1	0.0	0.0	58.3	54.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
縄文土器	100.0	0.0	18.5	15.4	34.3	34.3	4.2	8.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
土師器	0.0	0.0	27.0	22.5	0.0	0.0	3.8	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
石斧類	0.0	0.0	3.5	2.9	32.3	32.3	21.2	23.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
黒曜石類	0.0	100.0	3.0	19.2	33.3	33.3	10.8	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	11.1
自然石	0.0	0.0	32.8	27.3	0.0	0.0	11.8	9.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

## (1) 認定時代との関係

各時代の竪穴の遺物を見ると、それぞれ次のような特徴がある。

古代 下層では土師器が6～8割だが、観音山の上層では弥生土器と土師器はほぼ同率。

古墳 下層では土師器が6割だが、観音山の上層では弥生土器が4割で最高。

縄文 下層では縄文土器が8割近くだが、上層では石斧類が6割以上になる。

弥生 下層での弥生土器は6～8割だが、上層に比べ石斧類の率が増える。

全体としては、下層であっても他の時代の土器類の混入は皆無ではない。特に観音山の古墳時代では弥生土器が2割、庚申山の弥生時代では縄文土器が6%ほど見られる。前者では掘り方の遺物の4～5割が弥生

土器であることと関係するのだろうか。

基本的に同時代の遺物がほとんどない近世の遺構の状態が、観音山の一般的な混入の傾向を示していると思われる。そこでは大きく見れば上層で半分近くが弥生土器であったが、下層では石斧類が4割以上になっている。

重い石斧類がより下に沈むのは自然のこともかもしれないが、自然石のあり方を見ると、下層に自然石のない近世だけでなく、観音山の縄文時代でも自然石の割合が変化しないのに上層に比べ圧倒的に石斧類の割合が減っている。その他でも、自然石の含有率と石斧類の上下層での変化は、あまり一致していない。そのため、縄文土器の比率が減っているにも関わらず、下層でより増加している観音山の弥生堅穴の石斧類は、全てが縄文土器と同じ時代のものとは考えにくい。

## (2) 黒曜石類の割合

全体的には、次のような堅穴出土割合の特徴が見られる。

古代 観音山上層に微量。庚申山なし。

古墳 両地区上下層に微量。

縄文 観音山上層1%強、下層2%強。

弥生 観音山上層1%、下層2%強。庚申山上層7%弱、下層1%弱。

つまり、弥生時代堅穴での比率は、古墳時代堅穴での出土状態より縄文時代堅穴でのものに近い。なお、庚申山弥生時代では高率だが、上層と掘り方に多く見られるように、これは外部からの流入と判断できる。そこでの縄文土器の上下間の減少とも対応している。

しかし、観音山弥生堅穴では、①縄文堅穴と同程度に下層が多い、②上層に多い縄文土器の割合と対応していない、③掘り方では他の時代堅穴での縄文土器の割合に比べ多い、の各特徴が見られる。

ただ、それらは縄文時代堅穴や縄文土器の割合と比較して、圧倒的な高率を示しているわけではない。恐らく、前項で見た弥生土器と同時代の石斧類の存在と同程度のことなのだろう。

## (3) 他時代遺物混入の可能性

以上のような重量比率による黒曜石類の存在は、石斧類と共に観音山の弥生堅穴にあっては他の時代より、やや多い。少なくとも、このことからそれらの黒曜石類の全てが、縄文時代かそれ以前のものであると断定することは難しい。換言すれば、弥生土器と同時に埋没したものも含まれているはずである。

ここでの黒曜石類の大部分が剥片であることから、それはその時点での加工の可能性をも示唆している。もちろんそのことは直ちに、弥生土器と同じ時代に原産地から運ばれた原石を加工していたことであるかは、不明である。

どの時代でも、明らかに他の時代の遺物(この場合は土器)が混在しており、特に上層においてその傾向は顕著である。観音山地区のような時代の重複する遺跡での堅穴などの生活遺構にあっては、下層出土の優位遺物と上層のそれが異なることは、ここで明瞭になった。そして、土器と異なって概念的に時代認定が簡単でない遺物の層属は、単純には考えられないことも指摘できるだろう。

なお、下小塚遺跡群(甘楽郡甘楽町)・伊勢町遺跡群(吾妻郡中之条町)・北西ノ久保遺跡(長野県佐久市)でも、弥生後期の堅穴住居から黒曜石製の打製石鏃は複数出土しており、今後その傾向はさらに増える可能性は高い。そして、北西ノ久保遺跡には縄文遺構が存在しないことを付記しておく。

## V 分析成果

## 1 黒曜石分析

鈴木正男(立教大学一般教育部) 戸村健児(立教大学原子力研究所)

## (1) はじめに

天引狐崎遺跡(甘楽郡甘楽町)97点、北西ノ久保遺跡(長野県佐久市)71点、および中高瀬観音山遺跡121点、総計289点の黒曜石について黒曜石分析を行った。その結果をここに報告する。

黒曜石分析は黒曜石の産地推定と水和暦年代測定からなる。即ち考古学的黒曜石の多様な属性のうち二つ、運搬あるいは交易による移動の方向と距離(空間系)とそれが行われた年代(時間系)を同時に明らかにする。

遺跡出土黒曜石の原産地は、熱中性子放射化分析と判別分析法(Suzuki & Tomura, 1983; Suzuki et al. 1984a, b)によって推定した。黒曜石の産地の判別には、日本全国30箇所を越える黒曜石原産地のそれぞれ100点の測定値に基づき、多変量解析プログラム DISCRIM(SAS)を用いた。

また、年代は黒曜石水和暦年代測定法によって測定し、水和速度は前橋における補正值0.88を用いた。

## (2) 黒曜石分析結果

以下に、それぞれの遺跡出土黒曜石の分析結果をまとめて示し、個々のデータについては後述した。

## [天引狐崎]

	計	HOSHIGAT	WADATOGE
2,400±250	13	13	0
3,900±250	68	61	7
5,300±400	10	10	0
離散値 6,700	1	1	0
8,200±100	3	1	2
離散値 9,200	1	0	1
離散値 10,900	1	0	1
計	97	86	11

## [北西ノ久保]

	計	HOSHIGAT	YATUSGAT	不明
測定不能	2	0	1	1
2,000±150	3	3	0	0
3,150±100	4	4	0	0
3,750±200	34	34	0	0
4,650±250	16	16	0	0
5,850±350	10	10	0	0
10,900±150	2	2	0	0
計	71	69	1	1

## [中高瀬観音山]

	計	HOSHIGAT	OMEGURA	WADATOGE
1,850±300	10	3	0	7
3,250±150	6	2	0	4
離散値 3,750	1	0	0	1
離散値 4,300	1	1	0	0
離散値 4,900	1	1	0	0
5,650±200	27	17	2	10
6,950±400	15	6	5	9
7,900±200	26	17	0	7
8,950±200	24	2	0	17
9,850±100	4	2	0	2
10,950±100	4	0	0	4
離散値 12,450	1	1	0	0
離散値 13,800	1	1	0	0
計	121	53	7	61



## 参考文献

- Suzuki, M. 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241-318.
- Suzuki, M. and Tomura, K. 1983: Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99-110.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Aoki, Y., and Tomura, K. 1984a: Intrasite obsidian analysis of the Hashimoto site, Sagami-hara-shi, Kanagawa-ken, Japan. St. Paul's Review of Science, 4, 121-129.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K. 1984b: Obsidian analysis: 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

[天引孤峰]

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位・取上番号	形状
1	6.05	4.1	10.7	3.58	2.97	0.46	18.7	6.10	HOSHIGAT	8,200	26	上	割片
2	8.98	10.5	33.7	4.50	5.84	0.57	26.2	5.20	WADATOGE	3,900	26	上	割片
3	6.70	4.1	12.2	3.62	3.47	0.42	19.9	4.20	HOSHIGAT	3,900	26	上	割片
4	6.67	3.5	12.0	3.96	3.76	0.52	19.4	4.10	HOSHIGAT	3,900	26	上	割片
5	6.19	4.1	11.9	3.67	3.29	0.40	18.6	4.10	HOSHIGAT	3,900	26	上	割片
6	6.15	4.0	11.2	4.29	3.33	0.46	17.4	4.30	HOSHIGAT	3,900	26	上	割片
7	5.25	2.9	9.9	3.35	2.80	0.43	15.4	3.90	HOSHIGAT	3,900	26	上	割片
8	9.88	11.4	34.1	4.60	6.44	0.56	28.5	8.70	WADATOGE	10,900	30	上	割片
9	6.33	3.4	12.4	4.45	3.50	0.47	18.8	4.30	HOSHIGAT	3,900	30	下	割片
10	6.06	3.7	11.4	4.35	3.24	0.38	18.1	4.20	HOSHIGAT	3,900	30	no.46	割片
11	6.03	3.7	11.1	3.88	3.08	0.44	16.7	5.10	HOSHIGAT	5,300	32	不明	割片
12	6.49	4.5	11.9	3.56	3.50	0.44	19.0	4.30	HOSHIGAT	3,900	32	不明	割片
13	6.64	3.2	12.1	4.26	3.61	0.43	18.8	4.30	HOSHIGAT	3,900	32	不明	割片
14	6.48	4.2	11.7	4.38	3.31	0.57	19.6	4.20	HOSHIGAT	3,900	36	床下	割片
15	8.38	9.4	32.7	5.43	5.68	0.56	27.3	5.10	WADATOGE	3,900	40	上	割片
16	6.68	5.1	12.4	3.94	3.15	0.62	20.7	4.20	HOSHIGAT	3,900	70	no.13	割片
17	6.43	3.9	12.1	3.54	3.59	0.59	19.2	4.10	HOSHIGAT	3,900	70	no.46	割片
18	6.52	3.8	11.8	4.15	3.24	0.47	17.9	3.50	HOSHIGAT	2,400	70	no.51	割片
19	6.08	4.0	11.0	3.66	3.26	0.53	18.0	4.20	HOSHIGAT	3,900	70	no.75	割片
20	6.23	3.4	12.0	3.95	3.32	0.37	18.7	4.30	HOSHIGAT	3,900	70	no.80	割片
21	6.35	4.4	11.6	4.36	3.30	0.49	19.9	4.10	HOSHIGAT	3,900	70	no.120	割片
22	6.44	3.1	12.1	3.57	3.32	0.49	19.1	3.90	HOSHIGAT	3,900	70	no.125	割片
23	6.34	4.1	12.7	3.27	3.28	0.55	20.1	3.20	HOSHIGAT	2,400	70	no.140	割片
24	8.85	10.4	33.7	6.04	6.01	0.59	25.4	5.20	WADATOGE	3,900	70	no.149	割片
25	6.63	3.4	12.9	3.67	3.67	0.47	20.1	3.40	HOSHIGAT	2,400	70	no.151	割片
26	6.31	4.2	11.3	3.50	3.29	0.44	19.3	3.50	HOSHIGAT	2,400	71	上	割片
27	6.67	3.8	11.2	3.72	3.20	0.40	19.2	4.10	HOSHIGAT	3,900	71	上	割片
28	6.42	3.5	11.2	3.93	3.37	0.45	18.4	4.20	HOSHIGAT	3,900	71	上	割片
29	6.27	3.9	11.7	3.87	3.37	0.43	18.4	3.20	HOSHIGAT	2,400	71	no.59	割片
30	6.49	3.5	12.0	4.03	3.35	0.47	20.2	5.10	HOSHIGAT	5,300	71	no.104	割片
31	5.62	2.8	10.4	4.19	2.95	0.46	15.8	4.20	HOSHIGAT	3,900	71	no.116	割片
32	5.22	2.9	9.5	2.57	2.91	0.44	15.7	3.40	HOSHIGAT	2,400	71	no.116	割片
33	6.42	3.0	10.3	2.82	2.79	0.45	15.3	4.10	HOSHIGAT	3,900	71	上	割片
34	6.50	3.7	11.5	4.96	3.41	0.51	18.3	3.50	HOSHIGAT	2,400	74	no.46	割片
35	6.61	5.2	12.2	4.96	3.53	0.47	19.3	3.90	HOSHIGAT	3,900	74	no.74	割片
36	6.10	3.5	11.9	3.76	3.21	0.53	18.4	4.20	HOSHIGAT	3,900	81	no.7	割片
37	6.21	4.2	12.0	3.50	3.41	0.55	18.5	4.20	HOSHIGAT	3,900	81	no.7	割片
38	6.55	4.1	13.3	4.39	3.46	0.56	19.6	4.10	HOSHIGAT	3,900	81	no.23	割片
39	6.50	4.3	12.6	3.94	3.49	0.54	19.5	3.10	HOSHIGAT	2,400	82	下	割片
40	6.33	4.3	12.0	3.73	3.39	0.57	18.4	4.00	HOSHIGAT	3,900	82	上	割片
41	8.32	10.2	34.1	4.72	5.52	0.58	25.9	5.00	WADATOGE	3,900	83	no.3	割片
42	6.26	4.2	12.1	3.75	3.47	0.46	19.7	4.50	HOSHIGAT	3,900	83	no.3	割片
43	6.59	3.9	12.5	3.55	3.55	0.59	18.8	4.30	HOSHIGAT	3,900	83	上	割片
44	8.21	9.4	32.0	5.28	5.54	0.57	34.6	5.30	WADATOGE	3,900	87	no.1	割片
45	8.01	8.0	31.5	4.56	5.41	0.61	33.3	7.50	WADATOGE	8,200	88	no.6	簾
46	8.29	4.5	12.6	3.87	3.35	0.47	19.8	4.60	HOSHIGAT	5,300	88	上	割片
47	6.36	3.6	12.6	4.28	3.43	0.48	19.3	4.20	HOSHIGAT	3,900	88	上	割片
48	6.10	3.8	11.6	3.68	3.27	0.51	18.9	4.30	HOSHIGAT	3,900	88	上	割片
49	6.29	3.4	12.2	3.99	3.32	0.59	19.5	4.90	HOSHIGAT	5,300	88	上	割片
50	5.76	3.5	10.7	3.73	3.09	0.44	17.9	4.70	HOSHIGAT	5,300	88	上	割片
51	6.44	4.5	11.9	4.17	3.42	0.58	19.2	5.10	HOSHIGAT	5,300	89	上	割片
52	6.83	3.9	13.1	4.47	3.55	0.50	21.3	3.30	HOSHIGAT	2,400	89	上	割片

## V 分析成果

(天引鎮崎)

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	清標	層位・取上番号	形状
53	5.85	3.6	11.1	3.45	3.21	0.51	18.1	4.20	HOSHIGAT	3,900	89	上	剥片
54	6.51	4.2	12.4	3.62	3.49	0.51	21.2	4.20	HOSHIGAT	3,900	89	上	鐵
55	9.23	11.5	33.7	5.47	6.51	0.55	28.2	5.30	WADATOGI	3,900	89	上	鐵
56	6.37	4.2	11.8	3.72	3.38	0.56	19.9	3.50	HOSHIGAT	2,400	91	上	剥片
57	5.89	3.8	10.8	4.15	3.26	0.51	17.6	4.10	HOSHIGAT	3,900	98	上	剥片
58	6.29	3.6	12.0	3.62	3.36	0.50	19.1	4.30	HOSHIGAT	3,900	98	上	剥片
59	6.58	3.8	13.2	4.13	3.51	0.54	20.2	3.10	HOSHIGAT	2,400	98	上	剥片
60	6.26	4.1	11.3	3.76	3.37	0.44	19.5	4.30	HOSHIGAT	3,900	98	上	鐵
61	6.33	4.0	11.8	3.13	3.29	0.63	19.6	4.20	HOSHIGAT	3,900	98	no.44	剥片
62	6.70	4.1	12.4	3.97	3.55	0.60	19.8	3.10	HOSHIGAT	2,400	99	no.6	剥片
63	6.32	4.2	12.1	3.59	3.36	0.50	18.4	4.70	HOSHIGAT	5,300	99	no.20	剥片
64	6.24	3.7	11.7	3.96	3.26	0.57	19.4	3.90	HOSHIGAT	3,900	99	no.21	剥片
65	6.23	4.1	11.8	4.42	3.26	0.51	19.8	4.40	HOSHIGAT	3,900	99	no.36	剥片
66	6.46	3.9	12.6	4.09	3.56	0.55	19.6	4.00	HOSHIGAT	3,900	99	no.38	剥片
67	6.59	3.2	12.4	4.43	3.72	0.55	20.5	4.10	HOSHIGAT	3,900	99	no.64	剥片
68	6.57	3.9	13.0	3.92	3.37	0.41	20.6	4.30	HOSHIGAT	3,900	99	no.65	剥片
69	6.43	4.5	12.4	3.38	3.40	0.52	20.1	4.20	HOSHIGAT	3,900	100	no.45	剥片
70	6.36	4.6	11.5	4.22	3.46	0.51	21.6	4.90	HOSHIGAT	5,300	100	no.60	剥片
71	5.91	3.3	11.5	2.92	2.96	0.44	18.5	4.30	HOSHIGAT	3,900	100	no.60	剥片
72	5.78	3.0	10.6	3.46	2.98	0.38	17.9	4.10	HOSHIGAT	3,900	100	no.69	剥片
73	6.62	4.3	12.0	3.21	3.16	0.62	19.1	4.10	HOSHIGAT	3,900	100	no.69	剥片
74	7.06	3.4	13.4	4.90	3.30	0.57	19.8	3.90	HOSHIGAT	3,900	131	no.6	剥片
75	6.48	3.9	11.9	2.59	3.49	0.52	18.1	3.10	HOSHIGAT	2,400	131	no.12	剥片
76	6.39	3.3	11.5	3.23	3.26	0.55	19.4	4.40	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
77	6.66	3.5	12.5	3.20	3.32	0.51	17.9	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
78	6.30	2.6	11.7	3.61	3.03	0.49	18.9	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
79	6.49	3.6	11.3	3.76	3.17	0.51	18.0	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
80	9.21	7.7	31.9	4.16	5.79	0.55	27.9	5.20	WADATOGI	3,900	133	上	剥片
81	6.51	3.6	12.0	2.96	3.35	0.46	19.3	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
82	6.67	4.8	12.8	2.65	3.17	0.45	18.2	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
83	6.61	4.0	12.0	3.43	3.27	0.59	20.0	5.00	HOSHIGAT	5,300	133	上	剥片
84	5.74	3.2	10.6	3.32	2.97	0.42	18.5	4.80	HOSHIGAT	5,300	133	上	剥片
85	6.66	3.6	13.1	3.66	3.24	0.53	18.4	3.90	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
86	6.04	2.5	10.7	3.16	3.05	0.46	18.4	5.50	HOSHIGAT	6,700	133	上	剥片
87	7.36	3.9	13.6	3.87	3.44	0.49	20.1	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
88	6.25	3.3	11.9	3.48	3.10	0.53	19.5	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
89	6.85	3.6	13.6	3.80	3.39	0.58	21.3	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
90	7.14	2.4	13.3	2.13	3.32	0.46	25.9	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片 有葉鐵
91	2.89	1.3	4.0	0.98	1.15	0.22	10.5	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
92	9.97	9.2	34.6	5.22	6.04	0.37	30.7	7.60	WADATOGI	8,200	71	no.69	
93	6.46	3.8	12.4	3.39	3.23	0.45	17.7	4.20	HOSHIGAT	3,900	83	no.4	
94	6.89	3.0	12.2	4.86	3.17	0.56	17.6	4.30	HOSHIGAT	3,900	100	no.9	
95	6.14	2.8	11.1	3.82	3.13	0.48	18.4	4.20	HOSHIGAT	3,900	83	不明	
96	5.55	3.0	11.0	3.29	3.05	0.45	18.3	4.20	HOSHIGAT	3,900	32	no.165	
97	9.22	7.9	32.3	4.28	5.79	0.50	28.5	8.00	WADATOGI	9,200	旧河	no.620	

(北西ノ久保)

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代
1	5.76	3.0	10.9	3.74	3.11	0.58	18.0	3.10	HOSHIGAT	3,750
2	6.03	3.5	11.6	3.51	3.10	0.49	17.8	3.00	HOSHIGAT	3,150
3	5.87	3.5	11.2	3.38	3.15	0.47	17.7	3.50	HOSHIGAT	4,650
4	5.57	3.5	10.9	3.26	3.03	0.46	16.7	4.00	HOSHIGAT	5,850
5	5.93	3.5	11.3	3.41	3.10	0.46	17.9	3.10	HOSHIGAT	3,750
6	6.87	3.5	11.3	3.28	3.18	0.48	18.1	3.40	HOSHIGAT	3,750
7	5.55	3.5	10.8	3.20	2.94	0.40	16.6	3.20	HOSHIGAT	3,750
8	6.18	3.9	11.9	3.26	3.42	0.46	19.1	2.36	HOSHIGAT	2,000
9	6.00	3.0	11.9	3.05	3.40	0.46	18.6	2.99	HOSHIGAT	3,150
10	6.34	2.7	11.6	3.69	3.41	0.56	19.6	3.70	HOSHIGAT	4,650
11	5.78	2.6	10.6	2.79	3.22	0.56	16.6	3.54	HOSHIGAT	4,650
12	5.82	3.4	10.8	3.54	3.19	0.47	15.8	2.28	HOSHIGAT	2,000
13	5.88	3.3	11.7	3.22	3.32	0.40	15.5	2.52	HOSHIGAT	2,000
14	5.92	3.8	11.4	3.01	3.30	0.49	15.1	3.78	HOSHIGAT	4,650

〔北西ノ久保〕

No.	Sm	U	Th	Hf	Se	Fe	La	水和	原産地	年代
15	5.86	3.1	11.2	2.81	3.17	0.46	16.6	2.99	HOSHIGAT	3,150
16	5.93	3.6	11.2	3.23	3.21	0.48	18.4	4.25	HOSHIGAT	5,850
17	5.62	3.2	11.6	3.06	3.09	0.51	17.8	5.51	HOSHIGAT	10,900
18	5.88	3.3	11.2	3.07	3.08	0.47	15.7	3.46	HOSHIGAT	4,650
19	5.80	3.1	11.5	3.44	3.14	0.47	16.1	3.23	HOSHIGAT	3,750
20	5.68	3.0	11.0	3.51	3.00	0.49	16.9	5.59	HOSHIGAT	10,900
21	6.22	3.4	12.1	3.60	3.45	0.48	18.7	3.23	HOSHIGAT	3,750
22	5.85	3.3	12.3	2.67	3.43	0.49	18.7	3.15	HOSHIGAT	3,750
23	5.87	2.8	11.7	3.37	3.30	0.44	17.5	3.78	HOSHIGAT	4,850
24	6.19	3.6	12.4	4.01	3.53	0.49	17.6	3.70	HOSHIGAT	4,650
25	5.74	3.5	10.8	3.24	3.35	0.53	16.7	3.62	HOSHIGAT	4,650
26	5.90	3.3	11.6	3.22	3.39	0.41	18.0	3.62	HOSHIGAT	4,650
27	5.77	3.8	11.2	3.47	3.33	0.46	16.5	4.25	HOSHIGAT	5,850
28	6.04	2.9	10.5	3.55	3.23	0.62	16.1	3.94	HOSHIGAT	5,850
29	5.85	3.2	11.7	3.49	3.18	0.44	16.9	3.23	HOSHIGAT	3,750
30	6.05	3.6	12.3	3.29	3.22	0.41	17.0	4.09	HOSHIGAT	5,850
31	5.89	3.6	11.2	3.09	3.11	0.58	17.2	3.23	HOSHIGAT	3,750
32	5.56	3.8	10.8	2.87	3.02	0.41	16.2	3.94	HOSHIGAT	5,850
33	5.88	4.1	11.0	3.96	3.26	0.47	19.5	3.31	HOSHIGAT	3,750
34	6.60	3.8	10.9	3.14	3.05	0.46	18.0	3.31	HOSHIGAT	3,750
35	5.79	3.2	11.3	3.99	3.14	0.47	18.7	4.01	HOSHIGAT	5,850
36	5.68	4.0	11.2	3.71	3.04	0.48	17.8	3.46	HOSHIGAT	4,650
37	5.71	2.9	11.0	3.34	3.15	0.43	18.9	3.62	HOSHIGAT	4,650
38	6.04	4.1	11.2	4.11	3.38	0.51	18.7	3.38	HOSHIGAT	3,750
39	5.70	4.0	10.7	3.26	3.17	0.47	16.4	3.94	HOSHIGAT	5,850
40	5.52	4.3	10.8	2.77	3.02	0.46	16.7	4.01	HOSHIGAT	5,850
41	5.45	4.2	10.3	2.87	3.01	0.47	18.4	3.31	HOSHIGAT	3,750
42	4.88	2.8	9.0	3.83	2.27	0.70	29.3		YATSUGAT	
43	5.79	4.6	10.6	2.84	3.22	0.43	16.5	3.31	HOSHIGAT	3,750
44	6.18	4.3	13.1	3.77	3.36	0.48	18.9	2.91	HOSHIGAT	3,150
45	5.55	3.2	10.8	2.92	3.15	0.44	17.7	3.70	HOSHIGAT	4,650
46	5.86	5.0	11.6	3.32	3.03	0.46	18.0	3.54	HOSHIGAT	4,650
47	5.57	3.6	10.6	3.02	3.09	0.48	17.3	3.23	HOSHIGAT	3,750
48	5.32	3.6	10.5	3.21	3.05	0.44	17.5	3.31	HOSHIGAT	3,750
49	5.51	3.7	11.0	3.18	3.12	0.48	18.5	3.54	HOSHIGAT	4,650
50	5.96	3.7	11.6	3.27	3.30	0.46	18.6	3.70	HOSHIGAT	4,650
51	2.91	0.0	2.6	2.03	29.8	5.05	11.6			
52	5.47	4.4	11.0	2.97	3.07	0.45	18.0	3.23	HOSHIGAT	3,750
53	5.84	3.6	11.3	4.38	3.25	0.39	17.7	3.23	HOSHIGAT	3,750
54	8.60	4.1	10.6	3.45	3.06	0.44	16.0	3.23	HOSHIGAT	3,750
55	5.85	3.6	10.6	3.27	3.22	0.46	17.8	3.31	HOSHIGAT	3,750
56	5.87	4.0	10.7	3.43	3.26	0.48	18.8	3.38	HOSHIGAT	3,750
57	5.62	3.8	11.1	3.54	3.19	0.47	16.8	3.23	HOSHIGAT	3,750
58	5.51	3.0	10.9	3.10	3.04	0.45	17.3	4.25	HOSHIGAT	5,850
59	5.96	3.1	11.3	3.28	3.21	0.48	17.5	3.23	HOSHIGAT	3,750
60	5.54	3.6	10.6	3.28	3.01	0.41	17.2	3.38	HOSHIGAT	3,750
61	5.49	3.5	10.7	3.31	3.00	0.45	17.1	3.31	HOSHIGAT	3,750
62	5.47	3.5	10.9	3.25	3.00	0.41	17.0	3.31	HOSHIGAT	3,750
63	5.38	3.1	10.3	2.84	2.84	0.48	16.1	3.23	HOSHIGAT	3,750
64	5.54	3.5	10.9	3.16	2.94	0.46	17.6	3.16	HOSHIGAT	3,750
65	5.76	3.5	11.1	3.21	3.08	0.43	17.0	3.31	HOSHIGAT	3,750
66	5.67	3.3	11.4	3.55	3.03	0.49	18.9	3.23	HOSHIGAT	3,750
67	5.50	3.3	10.9	3.35	2.99	0.43	17.2	3.15	HOSHIGAT	3,750
68	6.68	3.5	10.4	3.44	2.94	0.47	15.6	3.31	HOSHIGAT	3,750
69	5.50	2.5	10.7	3.15	2.97	0.42	17.3	3.62	HOSHIGAT	4,650
70	5.50	3.2	10.7	3.39	3.08	0.42	17.6	3.31	HOSHIGAT	3,750
71	5.56	3.1	10.6	3.14	3.02	0.44	16.7	3.31	HOSHIGAT	3,750

## V 分析結果

(中高濃度山)

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位・遺物番号	形状
1	7.88	8.1	31.0	4.62	5.01	0.65	30.6	5.10	WADATOGE	3,750	014	F	銅片
2	7.62	8.1	30.1	4.58	4.88	0.61	30.0	7.40	WADATOGE	7,900	014	F	銅片
3	8.92	9.5	33.0	4.91	5.93	0.57	25.9	7.90	WADATOGE	8,950	014	F	銅片
4	8.83	9.5	32.5	4.84	5.88	0.51	25.8	7.90	WADATOGE	8,950	014	F	銅片
5	8.98	10.2	33.6	6.28	6.03	0.55	25.6	7.50	WADATOGE	7,900	080	F	銅片
6	8.96	10.1	32.8	4.73	5.98	0.54	25.5	6.30	WADATOGE	5,650	001	掘り方	銅片
7	6.17	3.8	12.3	3.67	3.35	0.61	18.5	5.90	HOSHIGAT	7,900	001	上	銅片
8	6.10	3.7	12.4	3.62	3.23	0.52	18.7	5.90	HOSHIGAT	7,900	015	F	銅片
9	6.32	4.1	12.5	4.23	3.41	0.58	18.2	5.90	HOSHIGAT	7,900	048	F	銅片
10	5.71	3.6	11.3	3.34	3.22	0.49	16.8	5.90	HOSHIGAT	7,900	048	F	銅片
11	8.45	9.1	33.2	4.85	5.27	0.66	31.4	6.70	WADATOGE	6,950	047	F	銅片
12	8.87	9.5	32.7	4.66	5.55	0.55	25.1	6.70	WADATOGE	8,950	070	掘り方	銅片
13	5.78	3.9	11.7	3.46	3.14	0.55	16.8	3.80	HOSHIGAT	3,250	080	F	銅片
14	6.12	3.6	12.3	3.30	3.32	0.53	18.4	2.80	HOSHIGAT	1,850	080	F	銅片
15	5.89	3.9	11.9	3.20	3.25	0.47	19.3	3.70	HOSHIGAT	3,250	080	F	銅片
16	6.56	6.1	24.4	3.98	4.07	0.66	29.7	6.30	OMEGURA	8,950	119	F	銅片
17	8.95	9.4	32.3	5.07	6.09	0.53	25.7	4.00	WADATOGE	1,850	145	F	銅片
18	8.70	9.5	32.4	4.45	5.78	0.55	24.9	6.30	WADATOGE	5,650	014	上	銅片
19	6.57	6.6	25.4	4.06	4.20	0.57	27.2	6.30	WADATOGE	5,650	014	上	銅片
20	8.18	9.3	30.9	4.32	5.58	0.44	24.1	8.00	WADATOGE	8,950	014	上	銅片
21	5.80	3.7	11.8	3.68	3.22	0.53	17.5	7.50	HOSHIGAT	12,450	014	上	銅片
22	8.43	9.0	30.4	4.54	5.76	0.55	23.3	7.50	WADATOGE	7,900	014	上	銅片
23	5.90	3.9	11.6	3.64	3.24	0.50	17.6	6.50	HOSHIGAT	8,950	014	上	銅片
24	5.95	4.4	12.2	3.37	3.17	0.48	17.2	5.90	HOSHIGAT	7,900	014	上	銅片
25	8.63	9.5	32.1	4.85	5.84	0.56	25.8	7.90	WADATOGE	8,950	014	上	銅片
26	8.87	10.6	32.5	4.61	5.91	0.59	25.5	3.50	WADATOGE	1,850	080	上	銅片
27	5.86	4.0	12.3	3.48	3.23	0.53	17.5	5.00	HOSHIGAT	5,650	080	上	銅片
28	5.81	3.6	11.9	3.45	3.31	0.51	17.6	7.90	HOSHIGAT	13,800	080	上	銅片
29	7.37	7.9	28.6	4.44	4.66	0.60	29.8	6.20	WADATOGE	5,650	080	上	銅片
30	6.06	4.0	12.0	3.67	3.30	0.51	18.8	5.10	HOSHIGAT	5,650	080	上	銅片
31	5.97	4.4	10.9	3.43	3.05	0.48	17.5	6.10	HOSHIGAT	7,900	080	上	銅片
32	6.74	4.1	11.5	3.73	3.12	0.57	18.5	5.10	HOSHIGAT	5,650	080	上	銅片
33	9.98	11.7	32.9	5.78	6.10	0.56	27.3	4.90	WADATOGE	3,250	080	上	銅片
34	8.46	9.7	29.8	5.51	5.66	0.57	24.2	7.90	WADATOGE	8,950	003	上	銅片
35	7.76	10.3	30.7	5.45	5.83	0.50	23.7	7.90	WADATOGE	8,950	015	上	銅片
36	6.32	4.1	12.0	3.95	3.19	0.56	19.2	6.60	HOSHIGAT	9,850	015	上	銅片
37	5.85	4.2	10.9	3.10	2.88	0.47	17.4	6.10	HOSHIGAT	7,900	015	上	銅片
38	7.69	9.4	30.7	4.59	5.56	0.57	24.3	8.70	WADATOGE	10,950	015	上	銅片
39	5.97	4.5	11.8	3.00	3.08	0.46	18.8	5.70	HOSHIGAT	6,950	015	上	銅片
40	6.57	9.0	29.0	4.50	4.59	0.49	27.9	7.80	WADATOGE	8,950	015	上	銅片
41	7.72	8.3	28.6	4.35	5.47	0.49	22.9	4.90	WADATOGE	3,250	G		銅片
42	5.55	3.5	10.4	3.35	3.00	0.44	15.8	6.10	HOSHIGAT	7,900	G		銅片
43	5.57	4.0	18.0	4.09	3.35	0.61	27.8	6.40	OMEGURA	8,950	G		銅片
44	5.43	3.3	10.3	3.24	2.86	0.45	15.7	5.10	HOSHIGAT	5,650	G		銅片
45	5.40	3.4	10.5	3.27	2.97	0.46	16.6	5.00	HOSHIGAT	5,650	G		銅片
46	3.99	2.8	11.1	3.30	3.09	0.54	11.5	5.90	HOSHIGAT	7,900	G		銅片
47	8.09	8.9	29.3	4.36	5.69	0.55	24.2	7.50	WADATOGE	7,900	G		銅片
48	5.56	3.5	10.8	3.25	3.02	0.49	16.7	6.00	HOSHIGAT	7,900	G		銅片
49	5.25	3.3	9.8	3.23	2.91	0.44	15.7	6.50	HOSHIGAT	8,950	G		銅片
50	7.44	8.0	27.2	3.93	5.17	0.47	23.4	7.90	WADATOGE	8,950	G		銅片
51	11.9	10.4	39.0	6.42	7.08	0.55	27.7	6.40	WADATOGE	5,650	G		銅片
52	9.51	12.9	34.7	5.20	6.56	0.55	25.5	8.70	WADATOGE	10,950	G		銅片
53	7.86	5.6	14.6	4.10	3.70	0.61	21.4	5.80	HOSHIGAT	6,950	G		銅片
54	9.06	10.5	33.6	4.69	6.10	0.65	26.2	6.70	WADATOGE	6,950	G		銅片
55	6.59	4.6	13.1	3.72	3.38	0.54	19.9	5.80	HOSHIGAT	6,950	G		銅片
56	9.84	10.9	32.8	4.86	5.91	0.51	26.4	7.50	WADATOGE	7,900	G		銅片
57	10.4	13.1	36.8	5.78	6.28	0.53	26.4	7.90	WADATOGE	8,950	G		銅片
58	7.55	5.2	13.3	4.08	3.63	0.53	18.8	5.90	HOSHIGAT	7,900	G		銅片
59	9.77	12.5	33.5	4.23	6.14	0.53	26.0	7.80	WADATOGE	8,950	G		銅片
60	6.73	4.3	12.2	3.48	3.27	0.52	18.2	5.70	HOSHIGAT	6,950	G		銅片
61	5.85	4.5	12.6	3.27	3.39	0.58	18.7	4.40	HOSHIGAT	4,300	G		銅片
62	7.35	7.8	25.8	4.91	4.38	0.70	31.2	7.90	WADATOGE	8,950	070	掘り方	銅片
63	11.1	13.0	36.4	6.21	5.58	0.64	28.7	4.00	WADATOGE	1,850	(072)	F	銅片

## 〔中高瀬観音山〕

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位・遺物番号	形状
64	6.34	4.4	11.9	3.47	3.28	0.51	18.2	5.10	HOSHIGAT	5,650	(072)	下	切片
65	7.99	9.8	29.8	4.78	5.58	0.55	23.3	3.30	WADATOGI	1,850	(072)	下	切片
66	8.16	11.1	31.8	5.02	5.60	0.48	25.3	8.70	WADATOGI	10,950	(072)	下	切片
67	9.28	12.1	33.9	6.02	5.92	0.65	31.0	7.90	WADATOGI	8,950	(072)	下	切片
68	7.21	6.8	25.0	5.16	4.07	0.76	30.9	6.10	OMEGURA	7,900	G		切片
69	5.90	4.5	12.5	3.98	3.21	0.51	19.1	4.90	HOSHIGAT	5,650	06	上	切片
70	7.40	4.2	13.2	4.09	3.70	0.51	19.8	6.10	HOSHIGAT	7,900	056	上	切片
71	6.56	4.1	12.2	3.72	3.31	0.49	17.3	6.10	HOSHIGAT	7,900	056	上	切片
72	6.20	4.3	11.6	3.27	3.30	0.46	18.2	4.90	HOSHIGAT	5,650	056	上	切片
73	8.43	11.5	31.2	5.23	5.61	0.57	26.1	6.30	WADATOGI	5,650	056	上	切片
74	7.42	4.5	13.4	3.64	3.63	0.45	19.0	5.10	HOSHIGAT	5,650	056	上	切片
75	9.19	12.7	32.9	4.82	5.07	0.50	25.8	6.30	WADATOGI	6,560	056	上	切片
76	8.39	9.2	32.7	5.17	5.55	0.67	33.8	7.90	WADATOGI	8,950	056	上	切片
77	5.80	3.6	11.0	3.29	3.04	0.45	18.2	5.70	HOSHIGAT	6,950	056	上	切片
78	6.62	4.2	12.6	3.38	3.29	0.54	17.8	2.70	HOSHIGAT	1,850	056	上	切片
79	6.61	4.4	12.0	3.72	3.34	0.51	20.4	4.90	HOSHIGAT	5,650	056	上	切片
80	6.17	4.8	12.1	3.52	3.27	0.50	19.9	5.00	HOSHIGAT	5,650	056	上	切片
81	5.74	3.4	10.5	3.22	3.12	0.50	18.0	5.10	HOSHIGAT	5,650	069	下	切片
82	6.10	5.5	18.4	4.37	3.39	0.65	31.3	6.20	OMEGURA	8,950	069	下	切片
83	6.40	4.1	11.6	3.59	3.29	0.55	17.8	5.90	HOSHIGAT	7,900	069	下	切片
84	6.39	4.4	12.2	3.36	3.27	0.48	18.7	5.80	HOSHIGAT	6,950	069	下	切片
85	8.66	9.8	31.6	4.78	5.86	0.51	26.8	6.70	WADATOGI	6,950	069	下	切片
86	9.09	9.2	32.9	4.69	5.13	0.57	26.5	3.30	WADATOGI	1,850	069	下	切片
87	8.63	10.4	31.1	4.68	5.88	0.53	28.7	4.70	WADATOGI	3,250	069	下	切片
88	7.97	8.4	29.7	4.69	5.35	0.51	25.9	6.10	WADATOGI	5,650	069	掘り方	切片
89	9.04	10.5	32.1	5.01	5.95	0.54	27.9	7.90	WADATOGI	8,950	069	掘り方	切片
90	8.00	8.0	29.8	4.71	5.46	0.52	25.9	8.80	WADATOGI	10,950	095	上	切片
91	7.69	8.6	28.1	4.16	5.29	0.50	28.4	6.70	WADATOGI	6,950	095	上	切片
92	7.93	8.5	29.6	7.40	5.47	0.51	25.5	3.50	WADATOGI	1,850	095	下	切片
93	5.85	3.5	11.0	2.96	3.20	0.49	18.7	5.90	HOSHIGAT	7,900	141	下	切片
94	8.07	9.1	29.9	4.58	5.61	0.49	26.6	6.30	WADATOGI	5,650	141	下	切片
95	7.94	9.3	29.9	4.32	5.49	0.48	25.7	6.80	WADATOGI	6,950	141	下	切片
96	8.59	10.0	31.5	4.39	6.02	0.48	26.7	7.90	WADATOGI	8,950	141	下	切片
97	6.34	6.5	23.3	4.36	4.04	0.61	29.8	6.30	OMEGURA	8,950	141	上	切片
98	5.93	3.4	11.1	3.42	3.14	0.51	18.2	2.80	HOSHIGAT	1,850	141	上	切片
99	8.25	9.0	30.2	4.14	5.77	0.54	26.4	4.80	WADATOGI	3,250	141	上	切片
100	6.43	6.4	23.6	4.29	4.04	0.58	30.7	5.90	OMEGURA	7,900	141	上	切片
101	8.02	9.1	28.2	5.10	4.90	0.39	28.0	7.40	WADATOGI	7,900	014	3005	礫
102	5.77	3.6	10.4	3.31	3.00	0.55	17.2	6.70	HOSHIGAT	9,850	046	3015	礫
103	8.29	10.1	29.6	4.90	5.55	0.49	25.4	8.30	WADATOGI	9,850	050	3024	礫
104	5.82	3.8	10.1	3.28	2.94	0.44	16.1	4.70	HOSHIGAT	4,900	155	3115	礫
105	8.61	10.1	31.2	4.68	5.62	0.53	26.3	7.40	WADATOGI	7,900	200	3135	礫
106	5.69	3.2	10.9	3.60	3.01	0.50	17.5	5.00	HOSHIGAT	5,600	080	3079	礫
107	8.43	7.8	31.0	5.13	5.61	0.41	24.6	8.30	WADATOGI	9,800	014	3006	礫
108	5.77	3.9	11.3	3.41	2.96	0.42	18.3	4.90	HOSHIGAT	5,650	063	3051	礫
109	5.26	3.1	9.6	3.08	2.91	0.50	17.2	5.90	HOSHIGAT	7,900	067	3052	礫
110	5.72	4.2	10.8	3.31	3.02	0.59	18.0	5.90	HOSHIGAT	7,900	056	3032	礫
111	8.03	9.1	30.1	4.94	5.44	0.49	24.1	4.00	WADATOGI	1,850	(072)	3163	礫
112	8.16	10.3	30.2	5.00	5.48	0.60	24.8	6.30	WADATOGI	5,650	B-7G	3184	礫
113	7.05	2.3	13.0	3.11	3.37	0.54	18.9	5.10	HOSHIGAT	5,650	158	下	切片
114	5.77	3.3	10.4	3.30	2.94	0.53	18.9	5.10	HOSHIGAT	5,650	158	下	切片
115	8.82	7.9	30.3	3.23	5.60	0.50	26.7	7.10	WADATOGI	6,950	158	下	切片
116	7.18	5.5	23.6	4.66	3.96	0.71	31.2	6.20	OMEGURA	8,950	158	下	切片
117	8.49	7.9	29.9	4.68	5.64	0.68	26.9	7.10	WADATOGI	6,950	158	下	切片
118	4.46	4.3	15.6	2.72	3.04	0.29	13.1	5.20	HOSHIGAT	5,650	160	下	切片
119	9.01	8.6	32.5	3.93	5.70	0.53	25.0	7.90	WADATOGI	8,950	160	下	切片
120	9.45	8.4	32.6	5.85	5.74	0.55	30.0	7.90	WADATOGI	8,950	160	下	切片
121	9.19	8.7	31.9	4.80	6.09	0.46	27.1	6.90	WADATOGI	6,950	160	下	切片

G: グリッド 層位中の斜体字は遺物番号

## 2 出土炭化材の樹種

鈴木三男(東北大理学部生物学科) 能城修一(農水省森林総合研究所)

中高瀬観音山遺跡では弥生時代後期及び古墳時代中期の消失家屋が多数検出され、建物部材に由来する多数の炭化材が発掘された。これらの炭化材のうち、弥生時代後期の047号・063号・075号・088号・093号・209号・213号・218号遺構、および古墳時代中期の135号・205号遺構から134点及び57点、合計191点をそれぞれ選出し、樹種の同定を行った。資料はいずれも完全に炭化しており、切片の作成は不可能なので、徒手により木口、柎目、板目の破断面をそれぞれ作り、金属反射顕微鏡で観察、同定した。炭化材は乾燥すると崩壊してしまうため証拠標本の保存が困難なので、これらの観察された面について顕微鏡写真を撮影し、そのフィルムを以て証拠標本に代えた。このフィルムは東北大学理学部植物分類学講座に保存されている。

## (1) 同定された樹種

- ①カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 写真1-5(観音山-120)、6(観音山-82)  
極めて均質な保存の良い炭化材で、年輪は目立たず、早晚材の区別は顕微鏡下で始めて可能である。仮道管と単列の放射組織からなり、樹脂細胞、放射仮道管、樹脂道を欠く。仮道管の内壁には明瞭な螺旋肥厚が2-3本づつまとまって走っている。分野壁孔は小さく、開孔部が狭いトウ型-ヒノキ型で1分野当たり1-2個ある。これらの形質、特に螺旋肥厚の形状からイチイ科のカヤの材と同定した。
- ②クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真7-10(観音山-62)、11(観音山-58)  
年輪始めの大道管の孔眼が顕著で、しばしば孔眼のところで接線方向に一年輪分ごとに割れる環孔材で、晩材部では小道管が多数集まって火炎状の紋をなす。道管の穿孔は単一、螺旋肥厚を欠く。道管一周閉鎖状仮道管間の壁孔は丸い有縁壁孔、道管-放射組織間壁孔は不定形である。放射組織は単列同性である。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。
- ③コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 写真12-16(観音山-3)、17(観音山-22)  
年輪始めに多くは一列に並んだ大道管が有り、急激に径を減じて晩材部では中-小型で丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、螺旋肥厚を欠く。道管一周閉鎖状仮道管間の壁孔は丸い有縁壁孔、道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形を中心とした不定形である。木部柔組織は接線状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合放射組織である。後者には結晶細胞が混じる。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、落葉性のクヌギ節の材と同定した。この節にはクヌギ、アベマキが含まれるが材構造での区別は困難である。
- ④コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真18-22(観音山-39)  
年輪始めに多くは一列に並んだ大道管が有り、急激に径を減じて晩材部では小型の道管が火炎状放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、螺旋肥厚を欠く。道管一周閉鎖状仮道管間の壁孔は丸い有縁壁孔、道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形を中心とした不定形である。木部柔組織は接線状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合放射組織である。後者には結晶細胞が混じる。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、落葉性のコナラ節の材と同定した。この節にはコナラ、ミズナラ、カシワなどが含まれるが材構造での区別は困難である。
- ⑤コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真23-28(観音山-16)、29(観音山-1)  
中型で丸い道管がルーズに集まって放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一、道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形で構状に並ぶ。木部柔組織は接線状でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合放射組織である。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑性のカシ類(アカガシ亜属)の材と同定した。この亜属にはシラカシ、アカガシ、アラカシなど多数の種があるが材構造での互いの区別は困難である。
- ⑥ニレ属 *Ulmus* ニレ科 写真30-33(観音山-95)  
年輪始めに大道管が有り、そこから急激に径を減じて、晩材部では小道管が多数集まって波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は輪郭が蜂の巣状になる。小道管の内壁には顕著な螺旋肥厚がある。放射組織は1-5細胞幅くらいの同性で接線面で見ると奇麗な紡錘形をしている。これらの形質からニレ科のニレ属のうち、アキニレを除いた、ハルニレ、オヒヨウニレなどの材であると同定した。
- ⑦ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真34-39(観音山-89)  
ニレに良く似た環孔材で、通常年輪始めに一列に大道管があり、晩材部では小道管が多数集まって波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は輪郭が蜂の巣状になる。小道管の内壁には顕著な螺旋肥厚がある。放射組織は1-5細胞幅くらいの異性で接線面で見ると奇麗な紡錘形をしてい

る。上下辺の細胞はしばしば大きくなり、大きな結晶を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

⑧ ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. et Zucc.バラ科 写真40-44(観音山-144)

丸ない楕円形の中一小型の道管が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁に顕著な螺旋肥厚がある。木部柔組織は量が少なく目立たない。放射組織は1-4細胞幅くらいで縦長の紡錘形で異性である。これらの形質からバラ科サクラ属の材であることが分かり、特に特徴的な道管配列からヤマザクラと同定した。

⑨ モモ *Prunus persica* Batsch バラ科 写真45-50(観音山-123)

丸い中型の道管が年輪始めに比較的密に並び、順次径を減じて晩材部では丸い小型の道管が単独あるいは数個複合して均一に分布する半環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁に顕著な螺旋肥厚がある。木部柔組織は量が少なく目立たない。放射組織は1-4細胞幅くらいで縦長の紡錘形で異性、直立細胞、方形細胞がよく目立つ。これらの形質からバラ科サクラ属のうち、中国原産のモモの材と同定した。

⑩ キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 写真51-55(観音山-114)

年輪はじめに大道管が1-2列に並び、順次径を減じて晩材部では小道管が多数斜め接線状に複合して木部柔組織とともに波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著な螺旋肥厚がある。放射組織は1-4細胞幅の同性で接線面で見ると形の整った紡錘形をしている。以上の形質からミカン科のキハダの材と同定した。

⑪ ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ウルシ科 写真56-62(観音山-125)

年輪のはじめに大道管が2-3列に並び、そこから順次径を減じて、晩材部では薄壁で多角形の小道管が主に放射方向に数個複合して散在している環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁には繊細な螺旋肥厚がある。放射組織は1-3細胞幅で背の高い異性である。これらの形質からウルシ科のヤマウルシの材と同定した。

⑫ カエデ属 *Acer* カエデ科 写真63-66(観音山-33)

丸一楕円形の薄壁の小道管が単独あるいは数個複合して均一に散在する散孔材。年輪界は扁平な長方形をした繊維状仮道管が数層あることによりかろうじて認識できる。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著な螺旋肥厚がある。繊維状仮道管は薄壁で径の大きいものと厚壁で径の小さいものがそれぞれが集まって全体として雲紋状を呈する。放射組織は1-6細胞幅位の同性で、接線面で見ると大型の紡錘形をしている。年輪界にある木部柔組織には時に結晶細胞が含まれる。これらの形質からカエデ科のカエデ属の材と同定した。この属には多数の種類があり、道管や放射組織の形態などがいろいろつかのグループに分けられるが、炭化材のそれらの識別は困難である。

⑬ ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメド科 写真67-72(観音山-88)

年輪のはじめに大道管が2-3列に並び、そこから順次径を減じて、晩材部では厚壁で輪郭が多角形、内腔が円形の小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して散在している環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状で密である。放射組織は1-5細胞幅で背の高い異性である。これらの形質からクロウメド科のケンボナシ属の材と同定した。この属にあるケンボナシとケンボナシは材構造での区別が困難である。

⑭ トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 写真73-78(観音山-163)

年輪のはじめに大道管が1-2列にルーズに並び、そこから順次径を減じて、晩材部では厚壁で輪郭が多角形、内腔が円形の小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して散在している環孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状で密である。木部柔組織は周囲状および翼状。放射組織は1-3細胞幅で背の低い同性である。これらの形質からモクセイ科のトネリコ属の材と同定した。この属にはシオジやヤチダモなどいくつかの種があるが材構造は互いに似ていて区別が困難である。

⑮ 散孔材一種 Diffuse porous wood 写真79-80(観音山-30)

微細な小道管が均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。試料が小さいため接線、放射破断面での観察ができないため、詳細な同定はできなかった。

⑯ ススキ *Miscanthus sinensis* Anders. イネ科 写真81-84(観音山-110)

中空でない茎に中心側の原生木部腔とその左右外側に2-数本の後生木部道管があり、背輪側に節部があってそれらを厚壁で径の小さい繊維組織が取り囲むイネ科特有の維管束が散在する。茎表面は液状に隆起した部分とへこんだ部分が交互にあり、縦長の表皮細胞が整然と長軸方向に配列している(写真84)。これらの形質からイネ科のススキの茎と同定した。写真86、87に示したようにチマキザサやメダケなどの竹笹類とは茎が中空でないことばかりでなく、表皮細胞の形態、茎表面の隆起線などにおいても区別される。

⑰ 竹笹類 Bamboo イネ科 写真88-90(観音山-69)

中空で茎表面が平滑な円をなす茎で、中心側の原生木部腔とその左右外側に2本の後生木部道管があり、背輪側に節部があってそれらを厚壁で径の小さい繊維組織が取り囲むイネ科特有の維管束が散在する。これらの形質からイネ科のタケ亜科(竹笹類)の茎と同定した。この仲間には多数の種があるが茎の

## V 分析成果

太さなどで変異があるが内部構造での区別はきわめて困難である。

### (2) 同定された樹種と住居址炭化材の樹種構成

弥生時代後期の047号遺構(試料数27点-以下同)、063号(24点)・075号(53点)・088号(4点)・093号(9点)・209号(4点)・213号(1点)、そして218号(12点)と計8遺構から合計134点の炭化材を、一方、古墳時代中期の135号遺構(37点)と205号遺構(20点)の2遺構から57点の炭化材を同定した結果が、標本番号順に表1に、遺構別に表2に、そして樹種別に集計したものが表3に示されている。

表3にみるように弥生後期の炭化材と古墳中期のそれとは、アカガシ亜属とコナラ節をのぞいてはそのほかの全てがそのいずれかのみから出土しており、使用樹種が歴然と異なっていることがわかる。弥生時代後期で同定された樹種でもっとも多かったのはクリ(92点)で全体の7割を占める。ついで多かったのはヤマザクラの9点であるが、これは075号遺構だけからの出土で他の住居址からは全くない。ついでカヤ(6点)、ケンボナシ属・ススキの茎が各4点、コナラ節・アカガシ亜属・ケヤキ・モモの各3点、トネリコ属・キハダの各2点、そしてヤマウルシ・ニレ属・竹笹類の各1点で、イネ科の茎も含めて合計14の樹種が同定された。

これらをもとに建築材としては圧倒的にクリが用いられ、その他の樹種は後で述べるヤマザクラを除いてはいずれも特に樹種を選んで集中的な利用を図ったとは思われず、クリを中心とした建築部材の単に補修的な利用であったか、あるいは建物構造とは直接結びつかない材が炭化して出土したことを示唆する。一方、屋根葺き材と思われるものはいずれもススキであったことは、当時の家屋が現在にまでつながるいわゆる茅葺きであったことを示している。

一方、古墳時代中期の135号・205号遺構では弥生時代とは全く対照的に建築部材の中心はもっとも多いのがクスギ節で47点(9割)もあることから示されるように、クスギ節(本遺跡ではクスギそのものと見做される)一辺倒の建築材使用であることがわかる。そしてその補修的な利用としてアカガシ亜属(4点)、それにコナラ節・カエデ属・散孔材一種(各1点)が認められた。

### (3) 竪穴住居毎の樹種構成

足の踏み場がないほどびっしりと炭化材が見事なまで保存されていた弥生時代後期の大型住居075号遺構からは、53点の樹種が調査された。その大部分はクリで、37点(7割)を占める。クリ材は長さ2mに及ぶ柱材や幅50cmを超える板材など大きなものから直径数cmの棒状の炭化材まで様々なサイズのものが消失家屋床面全体を通して出土しており、この家屋の建築部材が多くはクリ材でできていたことが分かる。

しかし、本遺跡を通してもっとも大きな炭化材であるNo.41は長さ7m近い柱材で、これはカヤであった。また、この遺跡でヤマザクラはこの住居址でのみ検出されたが、それらは建物のちょうど四隅付近から出土しており、この木がこの建物構造上、コーナー部分で特異な使われ方をしていたことを示唆するのかもしれない。この住居址ではそのほか、トネリコ属(2点)・ケンボナシ属(2点)・アカガシ亜属(1点)、それに屋根葺き材と思われるススキ(1点)が出土しており、これらの樹種の炭化材の分布と形態をみても特に特徴的な点はみられないことから、補修的な利用であったことをうかがわせる。

弥生時代後期の建物はこのほか様々なサイズのものが多数あり、そのうち何種かではやはり炭化材が出土している。047号遺構では大量の炭化材が出土したが、そのうちの27点の樹種が調べられた。その結果、屋根葺き材と思われるススキと竹笹類の2点を除いては全てがクリ材であった。063号遺構でも多数の炭化材が出土しそのうち24点が調べられたがケヤキ、ケンボナシ属、ニレ属の5点を除いてはクリ材であり、これは218号遺構においても大きな炭化材が全てクリであり、047号遺構と基本的には同じであるとみせる。また088号・209号・213号の各遺構では炭化材の残存がわずかであるため全体像は分からないが、数少ない炭



化材の同定結果はやはりクリ材が中心であったことと矛盾しない。

これに対して093号遺構では調べられた9点にクリ材は全く含まれず、コナラ節(3点)・アカガシ亜属(2点)・キハダ(2点)、それに屋根葺き材と思われるススキ(2点)となっていて他の弥生時代後期の住居とは大変異なっている。これは炭化材の残存が少ないことも関係しているのかもしれないが、他の家屋とは異なった時期あるいは異なった性格の建物であった可能性を示唆するのかもしれない。

古墳時代中期の135号遺構では37点が調べられ、うち、28点がクスギ節、4点がアカガシ亜属、それにカエデ属と散孔材一種が各1点、それにクスギ節のものを思われる樹皮が3点であった。この樹皮がクスギ節であるとすると実に37点のうち31点がこの樹種と言うことになる。また、樹皮が出土していることから木材は樹皮付きのまま丸太で利用されたことを示唆し、これまでに言われている堅穴住居の木材使用が樹皮付き丸太であることとよく一致する。

また、アカガシ亜属の4点はいずれも住居の北西辺に集中し、またそのうちの3点は配列から同一個体由来する可能性が考えられ、この部分での補修利用の結果である可能性が考えられる。また、207号遺構からも大量の炭化材が出土したが、そのうち20点の調査結果、19点がクスギ節で1点がコナラ節であった。このコナラ節の材は棟木などに相当するような位置で出土しており、補修的と言うより当初から使われていたものと考えの方が適当である。コナラ節の材の家屋への利用は群馬県では古墳時代の藤保沢中ノ山遺跡で認められており、ここではコナラ節の材が建築材の中心をなしており、遺跡が高標高であることと赤城火山のすそ野で比較的乾燥しており、ナラ林が周囲に広く成立していたと考えられることによると推定されている(鈴木・能城,1986)。

#### (4) 関東地方の炭化材による住居建築材の復元

関東地方では縄文時代以来、焼失した家屋がしばしば発掘され、その炭化材の樹種同定から建築材の復元が試みられている。縄文時代では堅穴式住居の炭化材がよく調べられ、それによるとほとんどの柱材がクリであるという(千野,1984; 島地ほか,1988)。弥生時代でもこの傾向は変わらない(山田,1993)。ところが古墳時代になるとクリに代わってクスギ材が家屋建築材の主流になる。このことは当遺跡でも劇的に入れ替わることが認められている。

一方、群馬県内の新保遺跡は弥生時代終末-古墳時代前期の低湿地遺跡で、河川の流路から木製の櫛や鎌などの農具とともに板や柱などの建築部材、そして当時遺跡周辺に生育していた樹木に由来する自然木が大量に出土し、その樹種が調べられた(鈴木・能城,1986,1988b)。その結果、農具にはクスギ節とアカガシ亜属の材が大量に用いられていること、柱材や板材などには針葉樹のモミ属、一方自然木による植生復元では、クリは少ないこと、そのことは花粉分析の結果でも支持されること(バリノサーヴェイ,1988)などが明らかになった。これはクスギ節の材が農具ばかりでなく、堅穴式住居の建築材として中心的に用いられていたことで当遺跡の古墳時代中期とよく一致している。

これらのことから、弥生時代にはクリ材が建築材として中心的に用いられたものの、古墳時代になるとクリ材の使用はさげられ、クスギ材がそれにとって代わったわけであるが、その理由には、1) 弥生時代までのクリ材の大量使用により住居を建てるには十分なクリ材が得られなくなっていたこと、2) 加工技術、特に利器が石器から鉄器に代わることにより、鉄器で加工しやすい樹種に利用の中心が代わったこと、3) クリ材を使う文化からクスギ材を使う文化に代わったこと、などの可能性が考えられる。

1) の植生の改変による利用樹種の変化の例は畿内の古代におけるヒノキ材の大量使用による天然林の消失とそれ以降のスギ材利用、所沢丘陵におけるモミ材の大量使用によるモミ林の消失(能城・鈴木,1990)な

## V 分析成果

ど、近代ではクリ材の鉄道枕木への利用とその消失によりブナ材へ代わったことなど、例を挙げることが出来る。しかし、クリ材中心の縄文時代(一弥生時代)とクスギ材中心の古墳時代(一古代)は当遺跡に限らず関東地方では広く認められていること、古代になっても枕や橋などの水湿地での土木用材にはクリ材を用いていることなどから考えると、遺跡周囲からクリ材が消失したわけではないことが考えられる。

2) の点については、クリ材は保存性においてはきわめて優秀であるが、大変粘り強く打撃には強いが、金属器など鋭利な刃物での加工はかなり難しい一方、クスギ材は切削加工が比較的容易で、また、放射面での削り取りが大変容易で大きな柁目板や角材が得易いことがある。3) については現象としてクリ材中心からクスギ材中心に移り変わったことは認められるものの、これが文化としてのシフトの変更によるものかどうかを示唆する事象は今の所見つかっていない。

結局、現時点では加工技術の変化が利用樹種の変化を生み出したのではないかと考えるのが適当であろう。

### 引用文献

- 島地謙・伊東隆夫・林昭三・鈴木三男・光谷拓実・布谷知夫・能城修一, 1988. 『日本の遺跡出土土製品総覧』, 雄山閣出版(東京) 296pp.
- 鈴木三男・能城修一, 1986. 『新保遺跡加工木の樹種』 『新保遺跡Ⅰ, 弥生・古墳時代大講義』 群馬県教委: 71-94.
- 鈴木三男・能城修一, 1988a. 『群馬県群保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種』 『群保沢中ノ山遺跡Ⅰ』 群県文: 180-192.
- 鈴木三男・能城修一, 1988b. 『新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古樹種復元』 『新保遺跡Ⅱ』 群馬県教委: 435-453.
- 千野裕道, 1984. 『縄文時代のクリ』 『歴史公論』 昭和59年6月号: 44-51.
- 能城修一・鈴木三男, 1990. 『木材化石群集』 『お伊勢山遺跡の調査第4部弥生時代から平安時代』 早稲田大学所沢校地文化財調査室: 39-50.
- 山田昌久, 1993. 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史』 『植生史研究特別第1号』, 242pp.

表1 竪穴住居出土炭化材の樹種

標本番号	樹種名	遺積	遺物	時代	標本番号	樹種名	遺積	遺物	時代
観音山-1	アカガシ亜属	135	75	古墳中期	観音山-32	クスギ節	135	92	古墳中期
観音山-2	アカガシ亜属	135	78	古墳中期	観音山-33	カエデ属	135	101	古墳中期
観音山-3	クスギ節	135	82	古墳中期	観音山-34	樹皮(クスギ節?)	135	54	古墳中期
観音山-4	クスギ節	135	77	古墳中期	観音山-35	樹皮(クスギ節?)	135	46	古墳中期
観音山-5	クスギ節	135	71	古墳中期	観音山-36	クスギ節	135	80	古墳中期
観音山-6	クスギ節	135	104	古墳中期	観音山-37	樹皮(クスギ節?)	135	26	古墳中期
観音山-7	クスギ節	135	42	古墳中期	観音山-38	クスギ節	205	2	古墳中期
観音山-8	クスギ節	135	38	古墳中期	観音山-39	コナラ節	205	8	古墳中期
観音山-9	クスギ節	135	63	古墳中期	観音山-40	クスギ節	205	37	古墳中期
観音山-10	クスギ節	135	60	古墳中期	観音山-41	クスギ節	205	1	古墳中期
観音山-11	クスギ節	135	58	古墳中期	観音山-42	クスギ節	205	29	古墳中期
観音山-12	クスギ節	135	34	古墳中期	観音山-43	クスギ節	205	34	古墳中期
観音山-13	クスギ節	135	45	古墳中期	観音山-44	クスギ節	205	43	古墳中期
観音山-14	クスギ節	135	5	古墳中期	観音山-45	クスギ節	205	6	古墳中期
観音山-15	クスギ節	135	16	古墳中期	観音山-46	クスギ節	205	65	古墳中期
観音山-16	アカガシ亜属	135	76	古墳中期	観音山-47	クスギ節	205	36	古墳中期
観音山-17	アカガシ亜属	135	83	古墳中期	観音山-48	クスギ節	205	55	古墳中期
観音山-18	クスギ節	135	39	古墳中期	観音山-49	クスギ節	205	13	古墳中期
観音山-19	クスギ節	135	32	古墳中期	観音山-50	クスギ節	205	10	古墳中期
観音山-20	クスギ節	135	55	古墳中期	観音山-51	クスギ節	205	42	古墳中期
観音山-21	クスギ節	135	69	古墳中期	観音山-52	クスギ節	205	74	古墳中期
観音山-22	クスギ節	135	6	古墳中期	観音山-53	クスギ節	205	67	古墳中期
観音山-23	クスギ節	135	17	古墳中期	観音山-54	クスギ節	205	12	古墳中期
観音山-24	クスギ節	135	14	古墳中期	観音山-55	クスギ節	205	23	古墳中期
観音山-25	クスギ節	135	62	古墳中期	観音山-56	クスギ節	205	49	古墳中期
観音山-26	クスギ節	135	31	古墳中期	観音山-57	クスギ節	205	7	古墳中期
観音山-27	クスギ節	135	4	古墳中期	観音山-58	クリ	047	44	弥生後期
観音山-28	クスギ節	135	1	古墳中期	観音山-59	クリ	047	65	弥生後期
観音山-29	クスギ節	135	7	古墳中期	観音山-60	クリ	047	58	弥生後期
観音山-30	散孔材一種	135	73	古墳中期	観音山-61	クリ	047	54	弥生後期
観音山-31	クスギ節	135	74	古墳中期	観音山-62	クリ	047	59	弥生後期

## 2 出土炭化材の樹種

標本番号	樹種名	遺構	遺物	時代
観音山-63	クリ	047	46	弥生後期
観音山-64	クリ	047	37	弥生後期
観音山-65	クリ	047	40	弥生後期
観音山-66	クリ	047	5	弥生後期
観音山-67	クリ	047	34	弥生後期
観音山-68	クリ	047	60	弥生後期
観音山-69	竹筴類一種	047	49	弥生後期
観音山-70	クリ	047	26	弥生後期
観音山-71	クリ	047	47	弥生後期
観音山-72	クリ	047	22	弥生後期
観音山-73	クリ	047	16	弥生後期
観音山-74	ススキ	047	9	弥生後期
観音山-75	クリ	047	25	弥生後期
観音山-76	クリ	047	33	弥生後期
観音山-77	クリ	047	19	弥生後期
観音山-78	クリ	047	1	弥生後期
観音山-79	クリ	047	3	弥生後期
観音山-80	クリ	047	24	弥生後期
観音山-81	クリ	047	27	弥生後期
観音山-82	カヤ	047	7	弥生後期
観音山-83	クリ	047	10	弥生後期
観音山-84	クリ	047	18	弥生後期
観音山-85	クリ	063	16	弥生後期
観音山-86	クリ	063	15	弥生後期
観音山-87	クリ	063	10	弥生後期
観音山-88	ケンボナシ属	063	7	弥生後期
観音山-89	カヤキ	063	11	弥生後期
観音山-90	クリ	063	14	弥生後期
観音山-91	ケンボナシ属	063	33	弥生後期
観音山-92	カヤキ	063	8	弥生後期
観音山-93	クリ	063	6	弥生後期
観音山-94	クリ	063	9	弥生後期
観音山-95	トネリコ属	063	31	弥生後期
観音山-96	クリ	063	5	弥生後期
観音山-97	クリ	063	26	弥生後期
観音山-98	クリ	063	27	弥生後期
観音山-99	クリ	063	28	弥生後期
観音山-100	クリ	063	29	弥生後期
観音山-101	クリ	063	22	弥生後期
観音山-102	クリ	063	19	弥生後期
観音山-103	クリ	063	4	弥生後期
観音山-104	クリ	063	1	弥生後期
観音山-105	クリ	063	18	弥生後期
観音山-106	クリ	063	17	弥生後期
観音山-107	クリ	063	3	弥生後期
観音山-108	クリ	063	23	弥生後期
観音山-109	コナラ節	093	4	弥生後期
観音山-110	ススキ	093	10	弥生後期
観音山-111	アカガシ亜属	093	6	弥生後期
観音山-112	コナラ節	093	7	弥生後期
観音山-113	ススキ	093	11	弥生後期
観音山-114	キハダ	093	2	弥生後期
観音山-115	コナラ節	093	3	弥生後期
観音山-116	キハダ	093	9	弥生後期
観音山-117	アカガシ亜属	093	1	弥生後期
観音山-118	クリ	218	12	弥生後期
観音山-119	クリ	218	11	弥生後期
観音山-120	カヤ	218	14	弥生後期
観音山-121	カヤ	218	19	弥生後期
観音山-122	クリ	218	5	弥生後期
観音山-123	モモ	218	1	弥生後期
観音山-124	クリ	218	8	弥生後期
観音山-125	ヤマウルシ	218	16	弥生後期
観音山-126	クリ	218	13	弥生後期
観音山-127	クリ	218	20	弥生後期

標本番号	樹種名	遺構	遺物	時代
観音山-128	クリ	218	2	弥生後期
観音山-129	クリ	209	2	弥生後期
観音山-130	モモ	209	5	弥生後期
観音山-131	ケヤキ	209	8	弥生後期
観音山-132	クリ	209	3	弥生後期
観音山-133	クリ	088	11	弥生後期
観音山-134	クリ	218	4	弥生後期
観音山-135	クリ	213	1	弥生後期
観音山-136	カヤ	088	2	弥生後期
観音山-137	モモ	088	1	弥生後期
観音山-138	カヤ	088	5	弥生後期
観音山-139	ヤマザクラ	075	32	弥生後期
観音山-140	クリ	075	38	弥生後期
観音山-141	クリ	075	36	弥生後期
観音山-142	クリ	075	49	弥生後期
観音山-143	クリ	075	72	弥生後期
観音山-144	ヤマザクラ	075	37	弥生後期
観音山-145	クリ	075	102	弥生後期
観音山-146	ケンボナシ属	075	6	弥生後期
観音山-147	クリ	075	108	弥生後期
観音山-148	クリ	075	17	弥生後期
観音山-149	クリ	075	62	弥生後期
観音山-150	クリ	075	12	弥生後期
観音山-151	クリ	075	25	弥生後期
観音山-152	ヤマザクラ	075	85	弥生後期
観音山-153	クリ	075	45	弥生後期
観音山-154	クリ	075	98	弥生後期
観音山-155	クリ	075	60	弥生後期
観音山-156	アカガシ亜属	075	52	弥生後期
観音山-157	クリ	075	104	弥生後期
観音山-158	クリ	075	42	弥生後期
観音山-159	ヤマザクラ	075	68	弥生後期
観音山-160	クリ	075	100	弥生後期
観音山-161	クリ	075	65	弥生後期
観音山-162	ヤマザクラ	075	1	弥生後期
観音山-163	トネリコ属	075	74	弥生後期
観音山-164	ヤマザクラ	075	50	弥生後期
観音山-165	ケンボナシ属	075	9	弥生後期
観音山-166	クリ	075	95	弥生後期
観音山-167	ヤマザクラ	075	73	弥生後期
観音山-168	クリ	075	46	弥生後期
観音山-169	ヤマザクラ	075	34	弥生後期
観音山-170	クリ	075	86	弥生後期
観音山-171	クリ	075	82	弥生後期
観音山-172	クリ	075	70	弥生後期
観音山-173	カヤ	075	41	弥生後期
観音山-174	クリ	075	47	弥生後期
観音山-175	クリ	075	18	弥生後期
観音山-176	クリ	075	81	弥生後期
観音山-177	クリ	075	31	弥生後期
観音山-178	ヤマザクラ	075	11	弥生後期
観音山-179	クリ	075	79	弥生後期
観音山-180	クリ	075	35	弥生後期
観音山-181	クリ	075	99	弥生後期
観音山-182	クリ	075	110	弥生後期
観音山-183	クリ	075	51	弥生後期
観音山-184	クリ	075	90	弥生後期
観音山-185	クリ	075	20	弥生後期
観音山-186	クリ	075	3	弥生後期
観音山-187	クリ	075	29	弥生後期
観音山-188	クリ	075	23	弥生後期
観音山-189	クリ	075	59	弥生後期
観音山-190	トネリコ属	075	22	弥生後期
観音山-191	ススキ	075	91	弥生後期

V 分析成果

表2 住居別出土炭化材の樹種とサイズ(\*サイズの単位は全てcm \*\*木取りは遺物台帳の所見に基づく)

標本番号	樹種名	遺種	遺物	幅*	厚さ	長さ	木取り**	時代
観音山-78	クリ	047	1	14.5	8.5	75	板目	弥生後期
観音山-79	クリ	047	3	15	7.5	70.5	板目	弥生後期
観音山-66	クリ	047	5	6	3	37	板目	弥生後期
観音山-82	カヤ	047	7	7	2.5	48	板目	弥生後期
観音山-74	ススキ	047	9					弥生後期
観音山-83	クリ	047	10	7	2.5	47	半割	弥生後期
観音山-73	クリ	047	16	6.5	3	74	みかん割	弥生後期
観音山-84	クリ	047	18	7.5	3.5	49.5	みかん割	弥生後期
観音山-77	クリ	047	19	7	5.5	42	みかん割	弥生後期
観音山-72	クリ	047	22	6	4	9	みかん割	弥生後期
観音山-80	クリ	047	24	7	4	36	板目	弥生後期
観音山-75	クリ	047	25	10	5	74	半割	弥生後期
観音山-70	クリ	047	26	5	4	17	半割	弥生後期
観音山-81	クリ	047	27	6	5	43	板目	弥生後期
観音山-76	クリ	047	33	6	2.5	19	みかん割	弥生後期
観音山-67	クリ	047	34	6	4	36	みかん割	弥生後期
観音山-64	クリ	047	37	9.5	3	23.5	板目	弥生後期
観音山-65	クリ	047	40	8.5	2.5	30.5	丸太	弥生後期
観音山-58	クリ	047	44	5	3	14	板目	弥生後期
観音山-63	クリ	047	46	7.5	4	10	板目	弥生後期
観音山-71	クリ	047	47	7	3	12	板目	弥生後期
観音山-69	竹筴類一種	047	49					弥生後期
観音山-61	クリ	047	54	8	4	30	板目	弥生後期
観音山-60	クリ	047	58	14	7	50	板目	弥生後期
観音山-62	クリ	047	59	6.5	7.5	38	板目	弥生後期
観音山-68	クリ	047	60	7.5	4.5	40	板目	弥生後期
観音山-59	クリ	047	65	7	6	33	板目	弥生後期
観音山-104	クリ	063	1	8	3.5	62	板目	弥生後期
観音山-107	クリ	063	3	7.5	3.5	63	板目	弥生後期
観音山-103	クリ	063	4	28	8	35	丸太	弥生後期
観音山-96	クリ	063	5	10.5	7	87	板目	弥生後期
観音山-93	クリ	063	6	5	12	57	丸太	弥生後期
観音山-88	ケンボナシ属	063	7	7	4.5	14	板目	弥生後期
観音山-92	ケヤキ	063	8	12	7	9.5	板目	弥生後期
観音山-94	クリ	063	9	8	7	10	丸太	弥生後期
観音山-87	クリ	063	10	5	1.5	9	板目	弥生後期
観音山-89	ケヤキ	063	11	15	3	25	板目	弥生後期
観音山-90	クリ	063	14	7	7	18	板目	弥生後期
観音山-86	クリ	063	15	9	3	22	板目	弥生後期
観音山-85	クリ	063	16	11	7	9.5	板目	弥生後期
観音山-106	クリ	063	17	14	5	30	丸太	弥生後期
観音山-105	クリ	063	18	8	4~1	59	板目	弥生後期
観音山-102	クリ	063	19	8.5	3.5	40	板目	弥生後期
観音山-101	クリ	063	22	7	1.5	26	斜目	弥生後期
観音山-108	クリ	063	23	7	2.5	22	斜目	弥生後期
観音山-97	クリ	063	26	8	2.5	17.5	板目	弥生後期
観音山-98	クリ	063	27	7	3	22	板目	弥生後期
観音山-99	クリ	063	28	8	7	7	板目	弥生後期
観音山-100	クリ	063	29	8	3.5	42	板目	弥生後期
観音山-95	ニレ属	063	31				板目	弥生後期
観音山-91	ケンボナシ属	063	33	5	3.5	11	板目	弥生後期
観音山-162	ヤマザクラ	075	1	9	4	66	板目	弥生後期
観音山-186	クリ	075	3	6.5	4	38.5	板目	弥生後期
観音山-146	ケンボナシ属	075	6	7	3	25	板目	弥生後期
観音山-165	ケンボナシ属	075	9	8	3	55	板目	弥生後期
観音山-178	ヤマザクラ	075	11	5.5	4	19	みかん割	弥生後期
観音山-150	クリ	075	12	6	4	17	斜目	弥生後期
観音山-148	クリ	075	17	6	4	30	板目	弥生後期
観音山-175	クリ	075	18	13	4	90	板目	弥生後期
観音山-185	クリ	075	20	9	3	46	半割	弥生後期
観音山-190	トネリコ属	075	22	10	2~1	44	板目	弥生後期
観音山-188	クリ	075	23	5	3.5	47	板目	弥生後期
観音山-151	クリ	075	25	9.5	5	60	板目	弥生後期
観音山-187	クリ	075	29	7	3.5	79	板目	弥生後期
観音山-177	クリ	075	31	7	4.5	82	半割	弥生後期
観音山-139	ヤマザクラ	075	32	8	5.5	41.5	半割	弥生後期
観音山-169	ヤマザクラ	075	34	5	5	22	みかん割	弥生後期
観音山-180	クリ	075	35	7	6	37	板目	弥生後期
観音山-141	クリ	075	36	6	5	40	板目	弥生後期
観音山-144	ヤマザクラ	075	37	8.5	6	40	丸太	弥生後期
観音山-140	クリ	075	38	6.5	5	42	板目	弥生後期

## 2 出土炭化材の樹種

標本番号	樹種名	遺積	遺物	幅*	厚さ	長さ	木厚り**	時代
観音山-173	カヤ	075	41	24	13	690	丸太	弥生後期
観音山-158	クリ	075	42	10	7	73	丸太	弥生後期
観音山-153	クリ	075	45	13	6	80	板目	弥生後期
観音山-168	クリ	075	46	14	3	28	板目	弥生後期
観音山-174	クリ	075	47	17	5	153	板目	弥生後期
観音山-142	クリ	075	49	9.5		75	板目	弥生後期
観音山-164	ヤマザクラ	075	50	13		13	丸太	弥生後期
観音山-183	クリ	075	51	51	3	81	板目	弥生後期
観音山-156	アカガシ亜属	075	52	18	2	43	板目	弥生後期
観音山-189	クリ	075	59		7	178	板目	弥生後期
観音山-155	クリ	075	60	9	3.5	56	板目	弥生後期
観音山-149	クリ	075	62	13	5	69.5	丸太	弥生後期
観音山-161	クリ	075	65	10	5	136	板目	弥生後期
観音山-159	ヤマザクラ	075	68	13	13	37	丸太	弥生後期
観音山-172	クリ	075	70	8.5	5	109	板目	弥生後期
観音山-143	クリ	075	72	15	9	202	板目	弥生後期
観音山-167	ヤマザクラ	075	73	10	7	67	半割	弥生後期
観音山-163	トネリコ属	075	74	7	4	108	丸太	弥生後期
観音山-179	クリ	075	79	9	3.5	115	丸太	弥生後期
観音山-176	クリ	075	81	7	3	53	板目	弥生後期
観音山-171	クリ	075	82	10.5	5	85	丸太	弥生後期
観音山-152	ヤマザクラ	075	85	6	6	63	丸太	弥生後期
観音山-170	クリ	075	86	6	4	45	板目	弥生後期
観音山-184	クリ	075	90	6	4	54	半割	弥生後期
観音山-191	ススキ	075	91					弥生後期
観音山-166	クリ	075	95	6	4	30	板目	弥生後期
観音山-154	クリ	075	98	6	5	66	板目	弥生後期
観音山-181	クリ	075	99	7	5	62	板目	弥生後期
観音山-160	クリ	075	100	8	4	30	板目	弥生後期
観音山-145	クリ	075	102	8	4	67	板目	弥生後期
観音山-157	クリ	075	104	10	6	90	板目	弥生後期
観音山-147	クリ	075	108	6	2	40	板目	弥生後期
観音山-182	クリ	075	110	10	2	54	板目	弥生後期
観音山-137	モモ	088	1	5		50		弥生後期
観音山-136	カヤ	088	2	3		60		弥生後期
観音山-138	カヤ	088	5	2		100		弥生後期
観音山-133	クリ	088	11	3		5		弥生後期
観音山-117	アカガシ亜属	093	1	20	3	56	板目	弥生後期
観音山-114	キハダ	093	2	4		34	みかん割	弥生後期
観音山-115	コナラ節	093	3	7	3	27	板目	弥生後期
観音山-109	コナラ節	093	4	18	3	47	板目	弥生後期
観音山-111	アカガシ亜属	093	6	16	5	40	板目	弥生後期
観音山-112	コナラ節	093	7	6.5	4	34	板目	弥生後期
観音山-116	キハダ	093	9					弥生後期
観音山-110	ススキ	093	10					弥生後期
観音山-113	ススキ	093	11					弥生後期
観音山-28	クスギ節	135	1	6	2	23	半割	古墳中期
観音山-27	クスギ節	135	4	5	2.5	12	みかん割	古墳中期
観音山-14	クスギ節	135	5	6	2.5	8	みかん割	古墳中期
観音山-22	クスギ節	135	6	9	5	68	丸太	古墳中期
観音山-29	クスギ節	135	7	7	3.5	38	半割	古墳中期
観音山-24	クスギ節	135	14	7		38	板目	古墳中期
観音山-15	クスギ節	135	16	7.5	5.5	52	丸太	古墳中期
観音山-23	クスギ節	135	17	7.5	3	32		古墳中期
観音山-37	樹皮(クスギ節?)	135	26					古墳中期
観音山-26	クスギ節	135	31					古墳中期
観音山-19	クスギ節	135	32					古墳中期
観音山-12	クスギ節	135	34					古墳中期
観音山-8	クスギ節	135	38					古墳中期
観音山-18	クスギ節	135	39					古墳中期
観音山-7	クスギ節	135	42					古墳中期
観音山-13	クスギ節	135	45					古墳中期
観音山-35	樹皮(クスギ節)	135	46					古墳中期
観音山-34	樹皮(クスギ節?)	135	54					古墳中期
観音山-20	クスギ節	135	55					古墳中期
観音山-11	クスギ節	135	58					古墳中期
観音山-10	クスギ節	135	60					古墳中期
観音山-25	クスギ節	135	62					古墳中期
観音山-9	クスギ節	135	63					古墳中期
観音山-21	クスギ節	135	69					古墳中期
観音山-5	クスギ節	135	71					古墳中期
観音山-30	散孔材一種	135	73					古墳中期

V 分析成果

標本番号	樹種名	直径	遺物	偏*	厚さ	長さ	木取り**	時代
観音山- 31	クスギ節	135	74					古墳中期
観音山- 1	アカガシ亜属	135	75					古墳中期
観音山- 16	アカガシ亜属	135	76					古墳中期
観音山- 4	クスギ節	135	77					古墳中期
観音山- 2	アカガシ亜属	135	78					古墳中期
観音山- 36	クスギ節	135	80					古墳中期
観音山- 3	クスギ節	135	82					古墳中期
観音山- 17	アカガシ亜属	135	83					古墳中期
観音山- 32	クスギ節	135	92					古墳中期
観音山- 33	カエデ属	135	101					古墳中期
観音山- 6	クスギ節	135	104					古墳中期
観音山- 41	クスギ節	205	1		15	98		古墳中期
観音山- 38	クスギ節	205	2		8	78		古墳中期
観音山- 45	クスギ節	205	6		9	86		古墳中期
観音山- 57	クスギ節	205	7		9	34		古墳中期
観音山- 39	コナラ節	205	8		17	354		古墳中期
観音山- 50	クスギ節	205	10		14	83		古墳中期
観音山- 54	クスギ節	205	12		5	65		古墳中期
観音山- 49	クスギ節	205	13		14	21		古墳中期
観音山- 55	クスギ節	205	23		7	67		古墳中期
観音山- 42	クスギ節	205	29		4	42		古墳中期
観音山- 43	クスギ節	205	34		10	28		古墳中期
観音山- 47	クスギ節	205	36		9	23		古墳中期
観音山- 40	クスギ節	205	37		6	14		古墳中期
観音山- 51	クスギ節	205	42		7	17		古墳中期
観音山- 44	クスギ節	205	43		7	62		古墳中期
観音山- 56	クスギ節	205	49		7	19		古墳中期
観音山- 48	クスギ節	205	55		3	23		古墳中期
観音山- 46	クスギ節	205	65		7	26		古墳中期
観音山- 53	クスギ節	205	67		15	13		古墳中期
観音山- 52	クスギ節	205	74		6	13		古墳中期
観音山-129	クリ	209	2		10	10		弥生後期
観音山-132	クリ	209	3		18	6		弥生後期
観音山-130	モモ	209	5		10	15		弥生後期
観音山-131	ケヤキ	209	8		2.5	5		弥生後期
観音山-135	クリ	213	1		8	30		弥生後期
観音山-123	モモ	218	1	3	3	15		弥生後期
観音山-128	クリ	218	2	15	5	295		弥生後期
観音山-134	クリ	218	4	9	7	56		弥生後期
観音山-122	クリ	218	5	10	8	30		弥生後期
観音山-124	クリ	218	8	7	8	13		弥生後期
観音山-119	クリ	218	11	7	4	30		弥生後期
観音山-118	クリ	218	12	4	6	14		弥生後期
観音山-126	クリ	218	13	6	7	21		弥生後期
観音山-120	カヤ	218	14	6	6	3		弥生後期
観音山-125	ヤマウルシ	218	16	12	9	70		弥生後期
観音山-121	カヤ	218	19	8	8	75		弥生後期
観音山-127	クリ	218	20	30	3	80		弥生後期

表3 炭化材樹種の遺構別構成

(注、同定試料はこの表の他に樹皮(クスギ節?)が3点ある。)

遺構	047	063	075	088	093	209	213	218	弥生計	135	205	古墳計	合計
クリ	24	19	37	1		2	1	8	92			0	92
ヤマザクラ			9						9			0	9
カヤ		1		2					4			0	4
ススキ	1		1		2				4			0	4
ケンボナシ属			2						4			0	4
コナラ節					3				3		1	4	4
ケヤキ			2			1			3			0	3
アカガシ亜属				1		2			3			0	3
モモ					1		1		3			0	3
トネリコ属				2					2			0	2
キハダ						2			2			0	2
ヤマウルシ								1	1			0	1
竹笹類	1								1			0	1
ニレ属		1							1			0	1
クスギ節									0	28	19	47	47
カエデ属									0	1		1	1
敷孔材一種									0	1		1	1
合 計	27	24	53	4	9	4	1	10	132	30	20	50	182



1. カヤ 観音山-120 木口 50倍.



2. カヤ 観音山-120 木口 100倍.



3. カヤ 観音山-120 板目 100倍.



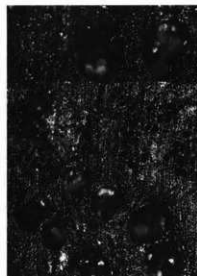
4. カヤ 観音山-120 板目 200倍.



5. カヤ 観音山-120 板目 200倍.



6. カヤ 観音山-82 板目 200倍.



7. クリ 観音山-62 木口 50倍.



8. クリ 観音山-62 木口 100倍.



9. クリ 観音山-62 板目 200倍.



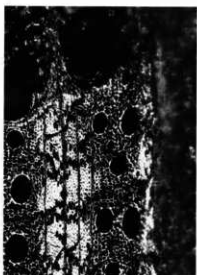
10. クリ 観音山-62 柎目 100倍.



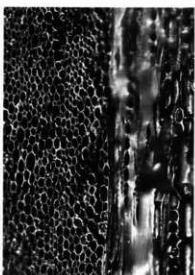
11. クリ 観音山-58 柎目 200倍.



12. クスギ節 観音山-3 木口 50倍.



13. クスギ節 観音山-3 木口 100倍.



14. クスギ節 観音山-3 板目 200倍.



15. クスギ節 観音山-3 柎目 100倍.



16. クスギ節 観音山-3 柎目 200倍.

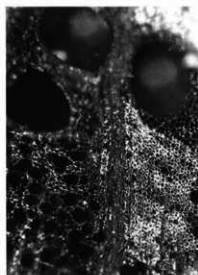


17. クスギ節 観音山-22 木口 50倍.



18. コナラ節 観音山-39 木口 50倍.





19.コナラ節 観音山-39 木口 100倍.



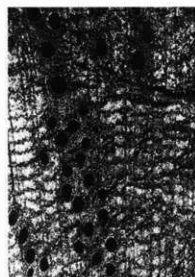
20.コナラ節 観音山-39 板目 100倍.



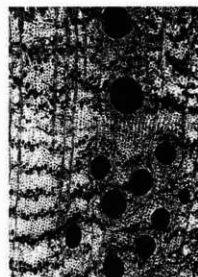
21.コナラ節 観音山-39 板目 200倍.



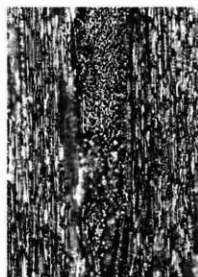
22.コナラ節 観音山-39 板目 200倍.



23.アカガシ亜属 観音山-16 木口 50倍.



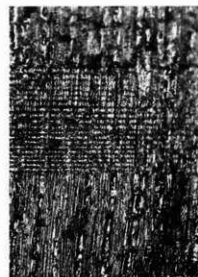
24.アカガシ亜属 観音山-16 木口 100倍.



25.アカガシ亜属 観音山-16 板目 100倍.



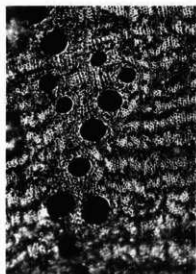
26.アカガシ亜属 観音山-16 板目 200倍.



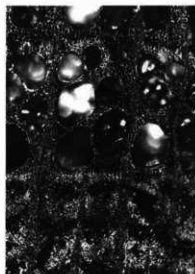
27.アカガシ亜属 観音山-16 板目 100倍.



28.アカガシ亜属 観音山-16 板目 200倍.



29.アカガシ亜属 観音山-1 木口 100倍.



30.ニレ属 観音山-95 木口 50倍.



31.ニレ属 観音山-95 木口 100倍.



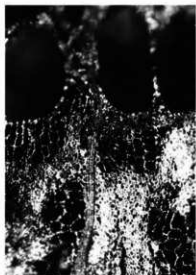
32.ニレ属 観音山-95 板目 100倍.



33.ニレ属 観音山-95 板目 200倍.



34.ケヤキ 観音山-89 木口 50倍.



35.ケヤキ 観音山-89 木口 100倍.



36.ケヤキ 観音山-89 板目 100倍.



37.ケヤキ 観音山-89 板目 200倍.



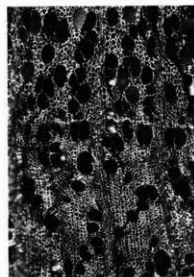
38.ケヤキ 観音山-89 柀目 200倍.



39.ケヤキ 観音山-89 柀目 200倍.



40.ヤマザクラ 観音山-144 木口 50倍.



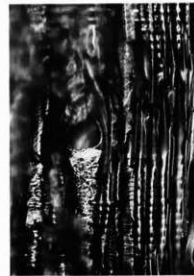
41.ヤマザクラ 観音山-144 木口 100倍.



42.ヤマザクラ 観音山-144 板目 100倍.



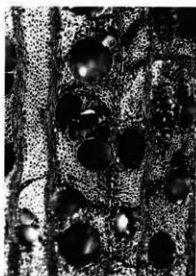
43.ヤマザクラ 観音山-144 板目 200倍.



44.ヤマザクラ 観音山-144 柀目 200倍.



45.モモ 観音山-123 木口 50倍.



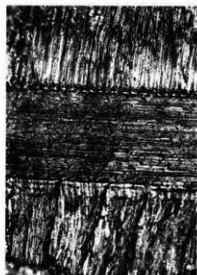
46.モモ 観音山-123 木口 100倍.



47.モモ 観音山-123 板目 100倍.



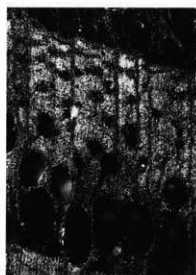
48.モモ 観音山-123 板目 200倍.



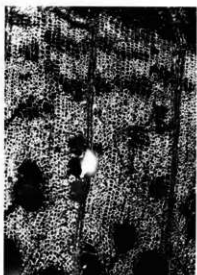
49.モモ 観音山-123 板目 100倍.



50.モモ 観音山-123 板目 200倍.



51.キハダ 観音山-114 木口 50倍.



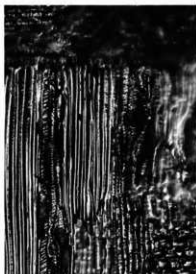
52.キハダ 観音山-114 木口 100倍.



53.キハダ 観音山-114 板目 100倍.



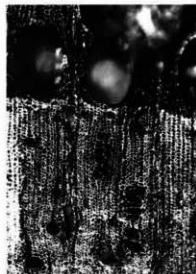
54.キハダ 観音山-114 板目 200倍.



55.キハダ 観音山-114 柀目 200倍.



56.ヤマウルシ 観音山-125 木口 50倍.



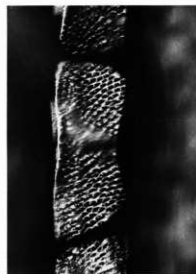
57.ヤマウルシ 観音山-125 木口 100倍.



58.ヤマウルシ 観音山-125 板目 100倍.



59.ヤマウルシ 観音山-125 板目 200倍.



60.ヤマウルシ 観音山-125 板目 200倍.



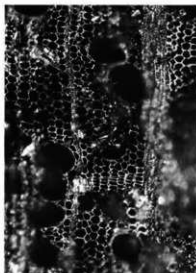
61.ヤマウルシ 観音山-125 柀目 100倍.



62.ヤマウルシ 観音山-125 柀目 200倍.



63.カエダ属 観音山-33 木口 50倍.



64.カエデ属 観音山-33 木口 200倍.



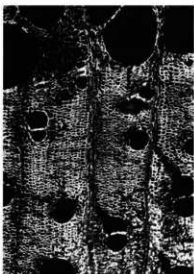
65.カエデ属 観音山-33 板目 100倍.



66.カエデ属 観音山-33 板目 200倍.



67.ケンボナシ属 観音山-88 木口 50倍.



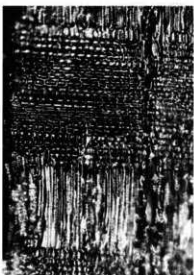
68.ケンボナシ属 観音山-88 木口 100倍.



69.ケンボナシ属 観音山-88 板目 100倍.



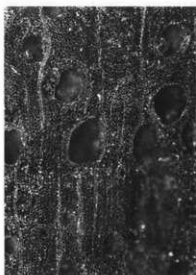
70.ケンボナシ属 観音山-88 板目 200倍.



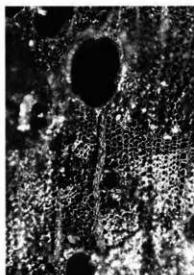
71.ケンボナシ属 観音山-88 板目 100倍.



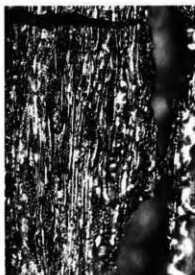
72.ケンボナシ属 観音山-88 板目 200倍.



73. トネリコ属 観音山-163 木口 50倍.



74. トネリコ属 観音山-163 木口 100倍.



75. トネリコ属 観音山-163 板目 100倍.



76. トネリコ属 観音山-163 板目 200倍.



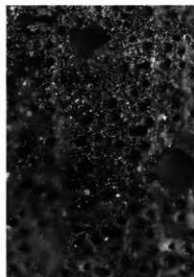
77. トネリコ属 観音山-163 板目 200倍.



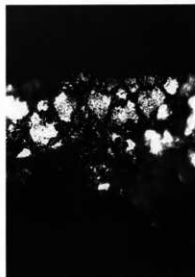
78. トネリコ属 観音山-163 板目 200倍.



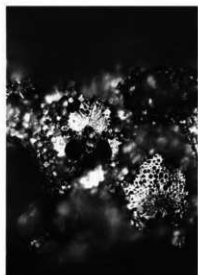
79. 散孔材一種 観音山-30 木口 50倍.



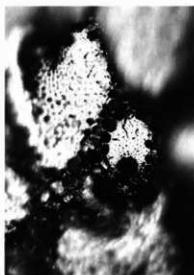
80. 散孔材一種 観音山-30 木口 100倍.



81. ススキ 観音山-110 木口 50倍.



82. ススキ 観音山-110 木口 100倍.



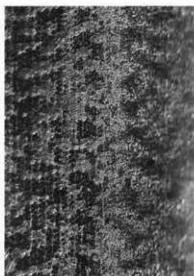
83. ススキ 観音山-110 木口 200倍.



84. ススキ 観音山-110 板目 200倍.



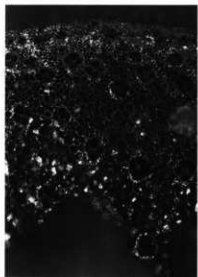
85. ススキ 現生 板目 200倍.



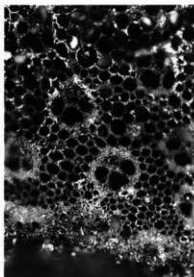
86. チマキザサ 現生 板目 200倍.



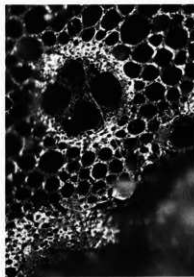
87. メダケ 現生 板目 200倍.



88. 竹笹類 観音山-69 木口 50倍.



89. 竹笹類 観音山-69 木口 100倍.



90. 竹笹類 観音山-69 木口 200倍.



### 3 プラント・オパール分析

古環境研究所

#### (1) はじめに

中高瀬観音山遺跡では、弥生時代後期とされる住居跡が多数検出され、その床面や炉跡からは焼土や炭化物などが検出されていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いてこれらの試料の分析を行ない、当時の住居跡内部におけるイネ科植物の利用やイネ科栽培植物の有無について知見を得ようとしたものである。

#### (2) 試料

1989年12月10日に現地調査を行なった。調査地点は、弥生時代後期の093・172・180・196・200・209号遺構である。このうち、093号遺構では屋根材と見られる炭化物、172・200号遺構では炉跡の焼土とその比較試料、180・196・209号遺構では床面の土壌とその比較試料を採取した。試料数は計21点である。

#### (3) 分析法

炭化物(093号遺構試料)については、電気炉による灰化処理(550℃・5時間)のち、その一部をスライドガラス上に展開し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は、400倍の偏光顕微鏡下でプレパラートの全面について行なった。

土壌試料については、「プラント・オパール定量分析法(藤原,1976)」をもとに、次の手順で行なった。

- (1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 $\mu$ m, 約0.02g)  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20 $\mu$ m以下)除去、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

#### (4) 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールの分類群は次のとおりである。イネ科:イネ・ヨシ属・ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)・シバ属。タケ亜科:Alaタイプ(ネザサ節など)・B1タイプ(クマザサ属など)・B2タイプ(メダケ属など)・その他。不明:Aタイプ(ウシクサ族類似)・Bタイプ(キビ族類似)・Cタイプ・Dタイプ(くさび型)・Eタイプ・棒状珪酸体・その他である。なお、タケ亜科の細分は、杉山,1987によった。

以上の分類群について定量を行ない、表(p.325)に数値データを示した。

#### (5) 考察

##### A 住居跡の屋根材について

093号遺構から検出された屋根材と見られる炭化物について、上記の方法で分析を行なった。その結果、

## V 分析成果

ウシクサ族(ススキ属)の機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールが多量に検出され、他の分類群はほとんど見られなかった。このことから、炭化物の給源植物はススキ属を主体とするものであり、同住居跡の屋根材にはススキが使用されていたものと推定される(定性分析)。

### B 炉跡の焼土について

172・200号遺構では、炉跡の焼土について分析を行なった。その結果、ウシクサ族(おもにススキ属)やタケ亜科(ネザサ節やクマザサ属など)他が検出されたが、密度は比較的低い値である。また、比較試料として分析を行なった炉の覆土や焼土直下の土壌でも、ほぼ同様の結果であり、焼土のみに特徴的な組成は認められなかった。

以上のことから、これらの炉跡でススキ属やタケ亜科植物などが焼かれていた可能性はあるものの、上層や他所からこれらのプラント・オパールが混入した可能性も考えられる。

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、キビ族(ヒエやアワなどが含まれる)やジュズダマ属(ハトムギが含まれる)およびムギ類などがあるが、これらのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。なお、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、不明としたものの中に栽培種由来するものが含まれている可能性も考えられる。

### C 住居跡床面の土壌について

180・209号遺構では、床面の土壌について分析を行なった。その結果、後者からは、タケ亜科Alaタイプ(ネザサ節など)が140,300個/gと極めて高い密度で検出された。同試料は、床面に張り付いた土器の直下から採取されたものであり、上層からプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。これらのことから、同住居跡の床面には、何らかの形でネザサ節などのタケ亜科植物が敷かれていた可能性が考えられる。また、ウシクサ族(おもにススキ属)も両者で比較的高い密度で検出されていることから、これらの床面にはネザサ節以外にもススキ属が敷かれていた可能性が考えられる。

196号遺構では、住居跡の中央部分(A地点)と南端部分(B地点)の2地点で、床面の土壌とその上下層について分析を行なった。その結果、床面の土壌(4層)では、タケ亜科Alaタイプ(ネザサ節など)やウシクサ族(おもにススキ属)などが検出されたが、いずれも直上の3層よりも低い値であり、同層のみに特徴的な組成は認められなかった。したがって、ここで検出されたプラント・オパールが、そこに敷かれていたもの由来するものか、上層や他所からの混入によるものかは判断はできない。いずれにしても、これらのプラント・オパール組成は、当時の遺跡周辺の植生を反映しているものと考えられる。

ネザサ節やススキ属は、日光が遮られる林床では生育しにくいことから、遺跡周辺の当時の植生は森林で覆われたような状況ではなく、比較的开かれた環境であり、これらの植物が繁茂していたものと推定される。また、その有用性から、これらの植物は住居の屋根材や床上マットなどの建築材、および燃料などとして広く利用されていたものと考えられる。

なお、A地点の1層では、イネのプラント・オパールが検出されたが、密度は700個/gと低い値である。したがって、同層で稲作が行なわれていた可能性はあるものの、上層や他所からの混入の危険性も考えられる。

#### 参考文献

- 杉山真二, 1987 「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』31: 70-83.  
杉山真二・松田隆二・藤原宏志, 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20: 81-92.  
藤原宏志, 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9: 15-29.  
藤原宏志, 1979 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12: 29-41.

表 中瀬湖観音山遺跡におけるプラント・オパール分析結果 (093号試料を除く 単位:  $\times 10^2/g$ )

分類群	試料名							
	172号		080号		209号		196号A地点	
	焼土	焼土下	床	床	1	2	3	4
イネ科								
イネ								7
ヨシ属				8	20			15
ウシクサ族(ススキ属等)	15	14	113	148	37	19	22	44
シバ属								15
タケ茎科								
A1aタイプ(ネザサ節等)		7	278	1403	304	45	178	145
B1タイプ(クマザサ属等)	22	27	83	89	29	19	9	25
B2タイプ(メダケ属等)		7		20	7			
その他	7	27	83	197	163	32	44	63
不明								
Aタイプ(ウシクサ族類似)					22	19	4	12
Bタイプ(キビ族類似)			15	49	7	12	4	6
Cタイプ	22	7	8	15				8
Dタイプ(くさび型)			8		7			17
Eタイプ	7	14		20	7			12
棒状珪酸体	29	7	67	494	126	26	30	32
その他	46	117	97	316	259	97	83	125
プラント・オパール総数	48	227	760	2756	1020	269	374	464

分類群	試料名									
	196号B地点					200号				
	1	2	3	4	5	床	1	2	3	4
イネ科										
イネ										7
ヨシ属			21		8					
ウシクサ族(ススキ属等)	20	28	14	67	14		27	12		62
シバ属			7							
タケ茎科										
A1aタイプ(ネザサ節等)	60	189	109	67	71	7	55	30	6	174
B1タイプ(クマザサ属等)	27	140	27	127	57	188	7	24	45	31
B2タイプ(メダケ属等)										
その他	54	77	54	42	100	97	7	12	13	74
不明										
Aタイプ(ウシクサ族類似)	13	28	14		7		14	12		43
Bタイプ(キビ族類似)	7		7		7	7	14			12
Cタイプ		14		8	7	14				
Dタイプ(くさび型)	7			8	7					6
Eタイプ				51	7				6	6
棒状珪酸体	20	84	41	59	29	63	102	91		93
その他	107	147	82	228	93	97	137	18	51	143
プラント・オパール総数	315	735	348	665	385	487	370	199	121	644

## 4 出土種実

吉川純子(パレオ・ラボ)

## (1) 種実の同定結果と若干の考察

試料は各時代の遺構ごとに採取された試料で、5試料をのぞき炭化種実であった。試料には整理の都合上、通し番号KU-01からKU-22までがつけられている。次頁表に番号・遺構の種類・出土分類群名・出土部位・個数・時代を示した。

出土した種実は、未炭化のイシミカワ、イヌタデ近似種、炭化かどうか不明のカラスザンショウをのぞくと、すべて食用または食用に準ずる利用のできる果実、穀物であった。また、炭化塊とあるものは、穀物ま

## V 分析成果

たはマメ類と考えられる。モモの最古は、縄文時代前期に長崎県伊木力遺跡から出土例がある(南木ほか,1990)が、弥生時代前期以降は各地で出土例があり(寺沢,1986)、ひろく利用されていたようである。トチノキは複雑なく抜きを必要とするにもかかわらず、縄文時代からすでにひろく利用されていたようである。しかし、現在ではほとんど節木の目的で利用されているが、イネがひろく栽培される以前のトチノキの食べ方はわかっていない。

ここでは、イネの出土数が少なく、マメ類が比較的多く出土した。出土遺構が少ないが、寺沢,1986によると、アズキの仲間には日本ではかなり古くから利用栽培していたと思われ、穀類、マメ類の分布状況は弥生時代前期では九州から中国地方の海岸部を中心に集中していたものが、後期では東日本で卓越するということである。ここではアズキ近似種までしか同定できなかったが、形態的に類似するリュウクトウは縄文時代後期の福井県鳥浜貝塚・岐阜県桜岡遺跡・長野県伴野原遺跡で出土例がある(寺沢,1986)。

カラスザンショウ、イシミカワ、イヌタデ近似種については、利用されていたかどうかは不明である。また、炭化種実でないことから、後世の混入の可能性も否定は出来ない。

### (2) 出土種実の形態記載

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura: 炭化した果皮の大変小さい破片を出土した。住居跡などからはこのような炭化片の状態で出土することがほとんどで、完形に近い状態ではあまり出土しない。内果皮は縦帯で堅く、僅かな破片でも厚さが著しく変化し、外面には線状の模様が入ることがある。そのため、炭化材料ともほかの堅果の果皮とも比較的容易に区別できる。

モモ *Prunus persica* Batsch: すべて炭化した核で、半分のものもかなり周辺がけており、完全な核はなかった。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.: 内果皮の破片を出土したが、もともと黒色で大変堅く、炭化しているかどうかの判断が難しい。完形は、偏楕円形で一文字状にやや太いへそがあり、全体にやや不規則で顕著な網目がある。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume: 炭化した種子の破片を出土した。堅果の種子は破片になると同定が難しくなるが、割れ方(ブナ科は子葉の構造からまず真半分に割れる)、表面のおうとつ、大きさなどからブナ科の種子ではなく、トチノキであることがわかる。

表 出土種実一覧表

(KU08,14は種実でないため省略)

番号	遺構	分類群名	部位	個数	時代
KU01	216号No.1	炭化塊		多数	古墳前期
KU02	216号No.1	アズキ近似種	炭種子 完形及び半分	150+	古墳前期
KU03	216号No.1	アズキ近似種	炭種子 完形	30+	古墳前期
KU04	216号No.1	マメ科	炭種子 完形及び半分	多数	古墳前期
KU05	216号No.1	アズキ近似種	炭種子 完形及び半分	50+	古墳前期
KU06	216号No.1	アズキ近似種	炭種子 完形及び半分	1000+	古墳前期
KU07	250号下層	モモ	炭核 破片	1	古墳中期
KU09	KJ08号C-1	トチノキ	炭種子 破片	10+	弥生後期
KU10	KJ15号C-1	モモ	炭核 破片	2	古代
KU11	136号粘土	オニグルミ	炭内果皮破片	9	古代
KU12	136号粘土	イヌタデ近似種	果実 完形	20	古代
KU13	B-8G	イシミカワ	果実 完形	1	不明
KU15	113号	モモ	炭核 破片	2	弥生後期
KU16	152号	モモ	炭核 破片	1	弥生後期
KU17	160号横穴埋土	イヌタデ近似種	果実 完形	1	古墳中期
		イネ	炭胚乳 破片	2	古墳中期
		カラスザンショウ	内果皮 破片	9	古墳中期
		オニグルミ	炭内果皮破片	63	古墳中期
		炭化塊		8	古墳中期
KU18	160号横穴埋土	イネ	炭胚乳 完形	1	古墳中期
KU19	161号No.47	イヌタデ近似種	果実 完形	7	弥生後期
		オニグルミ	炭内果皮破片	2	弥生後期
KU20	184号埋土	イシミカワ	果実 完形	13	弥生後期
KU21	198号	イネ	炭胚乳 完形	1	弥生後期?
KU22	205号貯蔵穴上層	オニグルミ	炭内果皮破片	5	古墳中期

イネ *Oryza sativa* L. : 穎は完全に取れて、胚乳だけの状態で炭化されている。2粒だけ完形で出土しており、胚乳の長さはKU-18が3.8mm、KU-21が4.7mmであった。

アズキ近似種 cf. *Vigna angularis* Ohwi et Ohashi : ここで出土した種子は炭化して種皮がとれているものが多く、へそも明確に確認できるものがみられなかった。炭化の割合によっては原型をとどめない場合もあり、細かい同定は難しい。アズキは種子が楕円形で幅より若干厚さが薄い。野生種のツルアズキは種子がアズキより細長く、へそが隆起している。リョクトウ(ヤエナリ、ブドウともいう)は種子が円筒形でやや小さい。ここでは細長い種子はほとんど見られなかったが、現在のアズキにやや近い形態を持つものと、リョクトウに近い形態をもつものの2通りがあるようである。また、ここで出土した種子の長さは5.6mm前後、現在のアズキは完熟のもので7mm前後のものが多いが、生育状況、その後の品種改良、炭化による収縮などが考えられるため、一概に分類群を決定できない。

イシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. : 果実は球形で黒色、光沢があり、がく片が残っている。果実のみであると、炭化しているかどうかの判断が難しいが、がくの状態、破片の内側が炭化していないことから、未炭化の果実である。生育場所は水湿地などの周辺部で、乾燥の激しい場所では生育しにくい。通常、未炭化の果実は風化され残りにくいが、堆積した場所が湿った場所または堆積後湿った環境が続くと風化を受けずに残っている。

イヌタデ近似種 cf. *P. longisetum* De Bruyn : 果実は3稜形、黒褐色で光沢があり、長さは2.5mm前後である。サナエタ節のはかの数種類と区別がつきにくい。イシミカワ同様の理由で未炭化と言ったことがわかる。イヌタデは多少乾燥した場所でも生育が可能である。

#### 引用文献

- 寺沢薫, 1986 「弥生時代の食料—畑作物」『季刊考古学』第14号、雄山閣出版、23-31p.  
南木睦彦・松川昭平, 1990 「伊木力遺跡の大型植物化石群集」『伊木力遺跡』多良見町教育委員会、642-659p.

## 5 $^{14}\text{C}$ 年代測定

バレオ・ラボ

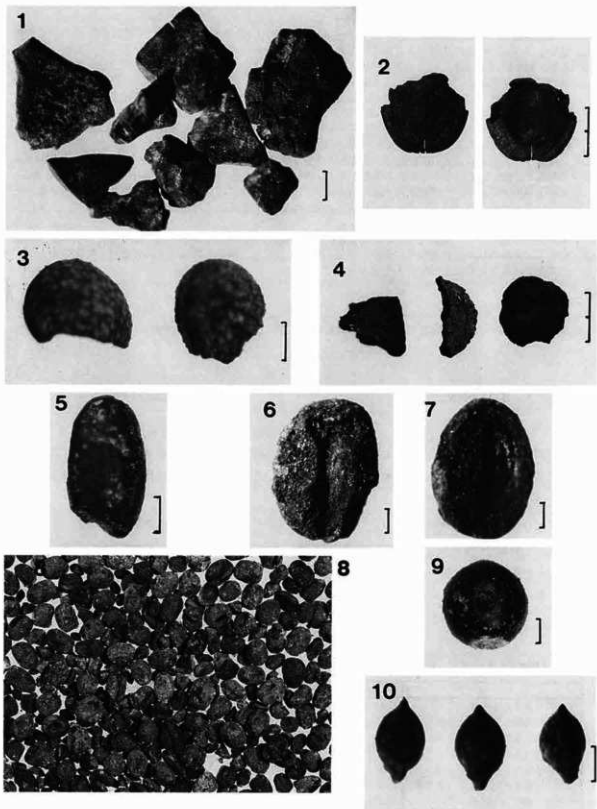
測定試料は、7住居跡から出土した炭化材である。これら試料は、炭化材の樹種を検討した後、以下の放射性炭素年代測定を行った。なお、放射性炭素年代測定は、学習院大学理学部年代測定室の木越邦彦氏に測定していただいた。

年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期として Libby の半減期5570年を使用。付記した誤差は、 $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(One sigma)に相当する年代。試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示。また、試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記。

表1 住居跡出土炭化材の $^{14}\text{C}$ 年代測定結果

試料	Gak-No	$^{14}\text{C}$ 年代値(1950年よりの年数)
① 047号遺構炭化材33 (タリ)	GaK-18125	2,550 $\pm$ 80(600 B.C.)
② 063号遺構炭化材5 (タリ)	GaK-18126	2,270 $\pm$ 80(320 B.C.)
③ 075号遺構炭化材99 (タリ)	GaK-18127	2,200 $\pm$ 80(250 B.C.)
④ 135号遺構炭化材7 (タヌギ節)	GaK-18128	2,170 $\pm$ 80(220 B.C.)
⑤ 160号遺構炭化材下層(タヌギ節)	GaK-18129	2,160 $\pm$ 80(210 B.C.)
⑥ 205号遺構炭化材1 (タヌギ節)	GaK-18130	1,630 $\pm$ 80(A.D.320)
⑦ 218号遺構炭化材4 (タリ)	GaK-18131	2,200 $\pm$ 80(250 B.C.)

V 分析成果



中高瀬観音山遺跡出土の種実 (スケールは1mm, 2・4は1cm)

1.オニグルミ、内果皮、炭化破片 2.モモ、核、炭化破片 3.カラスザンショウ、内果皮、破片 4.トチノキ、種子、炭化破片 5.イネ、胚乳、炭化完形、 6.アズキ近似種、種子、炭化完形 7.アズキ近似種、種子、炭化半分 8.アズキ近似種、マメ科、完形、半分、破片の集合 9.イシミカワ、果実、完形 10.イヌタテア近似種、果実、完形

## VI 調査成果まとめ

### 1 中世以降

#### (1) 近世

近世の遺構は比較的多いが、大部分は畠作に伴う土坑で居住を想定させるような遺構・遺物は検出しなかった。それ以外で特筆すべきは、観音山地区の道130号・131号遺構と庚申山地区の石組K101号遺構である。

観音山地区のその二つの小道は、中央尾根上平坦部東側をL字形に区切った形で延び、東側全体と北側直下は大きく削られ古代以前の遺構は見られない。これは、東谷側の傾斜面を開墾して高地にした跡だろう。

東谷下位の開墾部の遺構には、天明3(1783)年の大爆発による浅間山の軽石(As-A)がない。当然、この大天災からの復興を目指したそこでの開墾活動が、これらの小道の継続利用になったと思われる。それ以前に比べ耕作がなされていた痕跡が谷部まで拡大している。

一方、庚申山地区の石組は、明らかに調査開始直前までここにあった庚申塔群の基部である。移築された121基の庚申塔を中心とする石塔の中で最古の紀年銘は、馬頭観音塔の天明4(1784)年である。その後、寛政12(1800)年の庚申祭をきっかけに百度申の奉納がなされた。もちろん、最初の馬頭観音塔の設置は、浅間大爆発による被害の供養を目的としたことは、想像に難くない。

それより両地区の近世の開発は、天明の浅間山大噴火を契機として、観音山地区は高地開墾・庚申山地区は信仰地として拡大したことが明瞭である。なお、高瀬村は寛文8(1686)年の郷帳では2,450石の石高で、甘栗部最大の耕地面積を持っているが、その内訳は田方656.7石、畠方1,793.2石である。高地が多い構成を見ると、天明の被害の高地復興を目的に、本遺跡を含む高瀬山全域に開墾を始めた理由も理解できる。

#### (2) 中世

中世の遺物は極めて少なく、全ての取り上げ遺物の中で確認できたのは中性灰で焼成された瓦質のコネ鉢片(144i)1片のみである。これは、観音山地区東谷北側の曲輪105号遺構下層(B3グリッド)から出土した。

史跡範囲確認調査によれば、105号の延長筋にあたる中央尾根先端東側支尾根では、土塁・堀(1トレンチ)と帯曲輪(2・4・5トレンチ)が確認されている。北側に土塁(幅10m高1m)が続く堀(幅11.5m深1.4m)は、支尾根の走向に直行する東西方向に走っている。その堀の底から同じレベルで続くと考えられる帯曲輪(幅10m上段との差1.5m)が本調査部分まで南に100mほど延びている。本調査範囲に接する箇所では、この帯曲輪は方形(10×10m)に東側に張り出る。その幅はちょうど105号と116号の範囲に一致している。

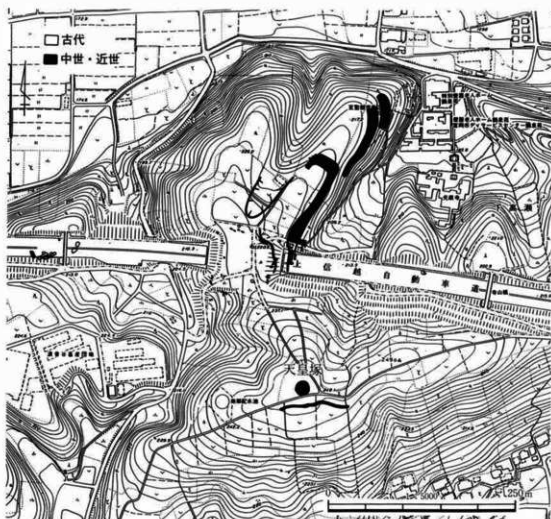
そのまま両遺構の走向に沿って東谷先端の湧水部にあたり井戸状の土坑103号もあり、この帯曲輪の機能は、水の手確保の意味があったと思われる。また土塁の北側の支尾根先端部は中心的な曲輪の存在が想定できる平坦部(20トレンチ)があり、東側下方には少なくとも2段に渡って帯曲輪と推定できる平坦面がある。

以上のように、東側支尾根全体(長250m幅70m)は中世の城跡になる。

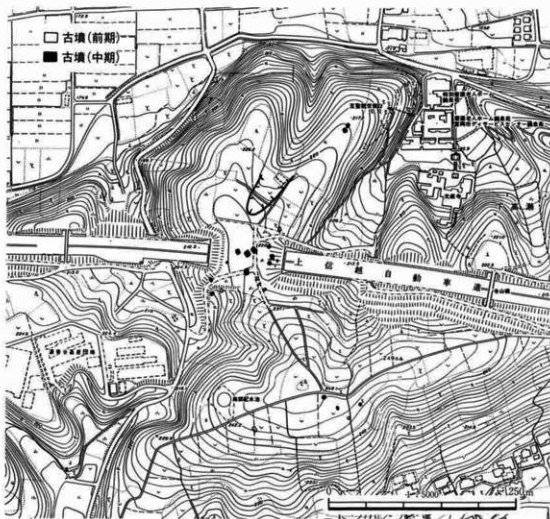
同調査では、山頂部の天皇塚(円形・推定裾径35m頂部径10m高2.5m)は経塚と推定され、また天皇塚南側の地境に一致する堀(長90m上幅1~2m深1m)も同じ頃のものと考えられている。なお、光厳寺には、元中3(1386)年銘の鏡鏡が残っている。

### 2 古代

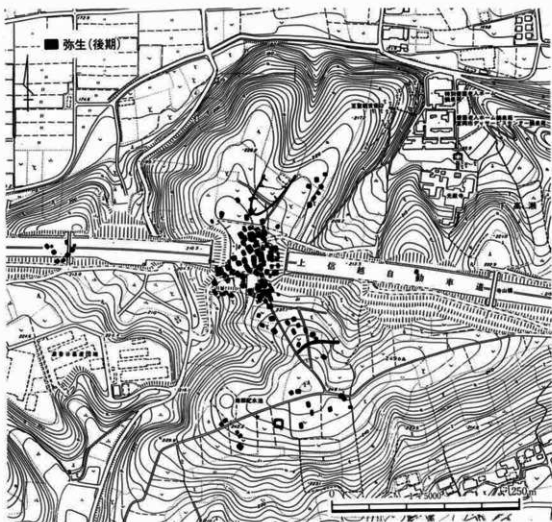
観音山地区では中央尾根上に小集落(3軒の堅穴)がある。これに対し、庚申山地区では、急斜面地に礎石建物、また2基の斜面石組遺構など特異な遺構が見られた。さらに須恵器水甕や鉄鈴のような極めて信仰色の濃い稀少な遺物も出土した。



時代別の遺構分布(1)







時代別の遺構分布(2)



## VI 調査成果まとめ

すでに第三章7節や第四章4節で指摘したが、本遺跡も含めた高瀬山一体は律令盛期の8～9世紀において信仰に関する遺物・遺構が集中して発見されている。再述になるが、近接する式内名神社の貫前神社(中世には上野一の宮)と深いつながりのある山岳信仰の中心地であったことが最大の理由であろう。

## 3 弥生・古墳時代

### (1) 古墳時代中後期

観音山地区では、中期に中央尾根上で鍋川流域では規模の大きな集落が短期間展開する。この集落の存続は細別すれば二つの時期に分かれるが、全体としては5世紀前半におけるそれぞれの存在を認識しうる程度のタイムスケールの間だったであろう。また同時期の他の集落に比べ、かなり多量に祭器類を堅穴廃棄後に献納する習俗を多くが持っていた。

居住条件の悪いこの場所にわざわざ大規模の集落が存在したことは、その習俗に理由があると考えざるをえない。庚申山で単独の穴(KP01号)に土器が入れられたことも含めて、信仰的な理由が大きく存在したと思われる。なお、この時期には、鍋川流域全体で集落・古墳とも数が激減している。

後期は、観音山尾根全体(合計竪穴計8軒・掘立1棟)で小規模な集落が散在している。しかし、弥生後期と古墳中期の集中地である本調査地内の中央尾根上には見られない。なお、山頂部から東に続く緩やかな稜線上の下高瀬上之原遺跡では、5世紀後半～6世紀初頭の7基の古墳が見られた。また同遺跡内の谷頭には2基の埴輪窯があった。観音山尾根の小規模集落は、それらとの関係が考えられる。

### (2) 弥生時代～古墳時代前期

本遺跡の中心をなすこの時代については、すでに第三章・第四章で多くの点に触れてあり、また第四章で全体的な観点に関して各方面から指摘を受けている。それらの視点は必ずしも完全に一致してはいなく今後の研究の進捗に委ねることになるが、ここでは重要な問題点に対する編者の見解を提示したい。

【立地の特異性】これは明瞭なことであり、学術用語としての定義の上からは、本遺跡は高地性集落以外の何物でもない。同時に同様の例は東日本においても、他にも多く見られる。

【急激な拡大と減少】弥生後期後半に急速に膨張し終末に激減する現象は、確実である。そして特に膨張の前後の時期には、極めて居住が少ない。当然、その要因は単なる人口増大では説明できない。

【軍事的緊張状態との関係】要害地形での立地に加えたものとして、木柵・矢倉状建物さらに堀が存在する。鉄鍬の量は多い。ここで出土石鍬は縄文時代製作のものが多く、本遺跡以外でも弥生時代の集落からは、かなり打製石鍬が見られる。これは、緊張関係の反映としか考えられない。

【鍋川流域の弥生社会】花粉分析や残存炭化種子から見ても、大規模な稲の栽培・米の貯蔵の可能性は少ない。河岸段丘が多いこの地域の地形から見ても、人口数をまかなえる水田耕作の存在は考えにくい。その点では、西日本の高地性集落とは異なり、むしろ社会変動期における西日本と東日本を結ぶ交通要地として流通の拠点であったことが、人口急増の原因と想定できる。

【編年問題】弥生後期7期の075号遺構埋土上層で、少しまとまった数量の古墳中期初頭の土器が見られる。それは、本地域での古墳前期とされる時期が必ずしも長期間でないことを示唆している。

## 4 縄文時代

主体をなすのは、前期後半の諸磯b・c期である。出土土器片量は決して少なくないため、保存された弥生堅穴の下にまだ縄文遺構が存在する可能性は高い。大量に出土した石器類については、多くが縄文時代のものであり、特に在地原石の硬質泥岩と信濃からの搬入原石の黒曜石については本遺跡で剥片剥離作業を行っていた。しかし、弥生時代の石器も混在していることも確かであり、今後の研究課題となる。

## Ⅶ 特 論

### 1 中部高地千曲川水系の弥生集落の繋がり

—長野県佐久地域を中心として—

小山岳夫(長野県北佐久郡御代田町教育委員会)

#### (1) はじめに

近年の大規模開発にともない長野県内でも多くの弥生時代集落が発掘された。しかし、その発見例の多くは各盆地の平坦部に集中しているため、中部高地の弥生時代における高地性集落など高所の遺跡の実態についてはいまだ不明確と言わざるを得ない。群馬県に接する長野県佐久地域で集落跡が盆地に偏在する傾向を打ち破り、高冷地や山上などそれまでの未開地に分布域を拡大するのは、日本列島に前方後円墳が築造される直前段階で、防衛目的とされる環濠集落が発達するのと同じ時期なのである。

したがって、本稿では最大目的とされる中高瀬観音山遺跡をはじめとする群馬県と長野県の弥生時代後期後半の社会の関連について十分な検討ができないと思う。ここではとりあえず弥生時代において群馬県と最も共通要素が多い隣接地・佐久地域を中心として長野県内の状況分析を行うことにより、中部高地一円の弥生社会の結びつきを考察してみたい。

#### (2) 長野県の弥生社会

長野県は四方を急峻な山脈に囲まれるため、県外に到達するのはもとより、県内の他地域に移動するのに苦勞を要する。松本・伊那・諏訪・佐久・善光寺など県内5か所に形成される狭小な盆地はそれぞれに固有の気候・風土を持ち、現代でもそこに住む人々はそれぞれに異なった気質を具えている。

長野県の弥生時代後期は古くから異なった様相をもつ千曲川流域を中心とする「箱清水式」と、天竜川流域の「座光寺・中島式」土器に象徴される2大文化圏に別れると指摘されてきた。この基本的な骨組みは今でも変わらないが、近年の研究成果により同じ流域内でも土器に見られる特徴は小地域単位の個性が強いことが明らかになった。

#### A 善光寺平

千曲川流域の中核地域と目されるのは県内最大の沖積地をもつ善光寺平南部である。千曲川の氾濫による数回の洪水砂の流出により厚く覆われているため、近年まで弥生集落は実態不明確であったが、高速道等の発掘により長野市松原遺跡で巨大な環濠をもつ弥生中期後半(畿内Ⅲ様式新Ⅳ様式)の集落が姿を見せた。ちなみにその規模は集落域のほぼ全容が判明している佐久平の最大集落北西ノ久保遺跡の5-6倍(竪穴住居址総数推定で450-540棟、一時期ではないので注意)に達しようというものであった。おそらく千曲川流域でこれを上回る大集落跡はないと考えられ、後期に至ってもこの状況は変わりそうにない。また、この時期、環濠をめぐらす集落が存在するのも県内唯一である。生産遺跡は石川条里・川田条里遺跡などで弥生時代の広大な水田跡が発見されている。

県内の弥生集落規模No.1の善光寺平南部では時間の推移に伴う後期弥生土器の変化も実に迅速で、高坪に見られる畿内要素の取り込みは周辺他地域よりもいち早く行われる。他器種の壺・甕なども甕描文の払拭、櫛描文への転換の速度は他地域を圧倒している。

以上のように集落規模・水田跡に見られる経済力、環濠の掘削や土器に見られる西日本的要素の先取性な

## Ⅷ 特 論

ど善光寺平南部の弥生社会は千曲川流域において文化的に卓越した地位にあったことが予想される。次に流域周辺地域の状況を観察してみよう。

新潟県を北に接する善光寺平北部の中野や飯山地方など千曲川上流域の河岸段丘に立地する弥生集落は、盆地の狭小さも相まって、その規模は南部に遠く及ばない。環壕も現状で未発見である。竪穴住居形式及び土器様相は地理的に北へ向かうほど北陸色を強く被る傾向にあり、西日本の要素の先取性が当地において強く発揮されるように思えるが、高坏の型式変化(畿内V様式系への転換)はむしろ善光寺平南部より若干遅れるようだ。このような状況から善光寺平北部～飯山地方にかけては、信濃弥生時代の西日本の文化要素導入の玄関口として役割が大きいものの、在地文化の中心地および発信地とはなり得なかったと考えられる。

### B 上田・佐久地域

千曲川上流域には上田・佐久盆地がある。上田盆地では不思議なことに現在の発掘調査はもとより、過去の既出資料にも中期後半の資料がなく、本格的弥生集落の造営は後期後半に至ってからである。集落経営が開始されると、その規模は爆発的な膨張を見せ、善光寺平南部、松本盆地に継ぐまでに発達するようである。土器様相は千曲川左岸・上田盆地西部の広大な沖積地塩田平においては善光寺平南部的な様相に近く、千曲川右岸・上田盆地東部の浅間山麓裾野のやや狭隘な台地では後述する佐久盆地東部との共通性を色濃く見せている。

関東の玄関口佐久盆地では、千曲川を隔てた東と西の地域で土器様相・竪穴住居に用いられる炉のありかたに差異が認められることが明らかになってきた。群馬県との関連を考える上での重要地域であるので特に詳しく記述しておく。当地では東は浅間山麓裾野の狭長な台地、対して西は八ヶ岳北東麓末端の低丘陵地帯に弥生集落が立地する。東の土器様相は「箱清水式」の先行型式後期初頭の「吉田式」文様要素を後期後半、古墳時代初頭にまで継承することに特徴付けられる。壺の頸部には矢羽状の寛描文、壺には横羽状の櫛描斜走文が好んで用いられる。一方、西では「吉田式」の旧型要素が残ることは少なく、高坏の型式変化の後進性を除けばその様相は善光寺平・上田盆地西部に近いものである。炉は東では石で囲う、火床に土器を敷くなど佐久地域独自の組み立てを行うのに対し、西では善光寺平の弥生住居に採用される地床炉が一般的である。

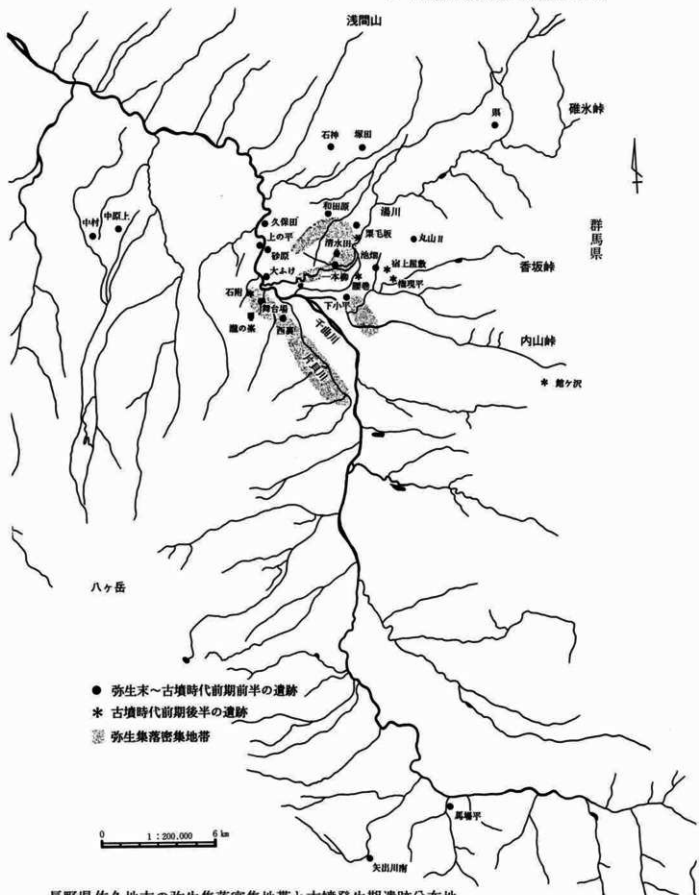
### C 長野県弥生後期社会の状況分析

佐久盆地の東における土器型式の停滞性は千曲川流域では中核地善光寺平から最も遠隔地にあたるため、地域の独自性が強化された結果、生じた現象とも考えられる。現実には佐久以外でも前述の飯山や大町・松本・諏訪など善光寺平から遠く離れる地域ほど「箱清水式」土器の基本からの離脱が大きくなる。松本・諏訪などは伊那の「座光寺・中島式」土器分布域との接触地にあたるため、「箱清水式」「座光寺・中島式」の折衷型式が作られる。

また、県外にまで目を向けると群馬県の場合、中期後半では千曲川流域と同じく栗林式土器を起点に持ちながら、地域社会の発展に伴って「箱清水式」とは分化した独自の变化を遂げた後期弥生土器型式「櫛式」を成立させている。山梨県で発見されている中部高地の系譜を引く後期弥生土器群についても同様であろう。このように土器様相からみた中部高地一円の弥生土器は社会的に成熟したと考えられる後期にいたり、同じ系統下でありながらそれぞれに小地域に根ざした個性的な展開を見せている。そしてその傾向は中核地帯と目される善光寺平から遠ざかるほど強くなるのである。

ところでここで注意を要するのが佐久平の西側の状況である。前述のように佐久育ちではない、善光寺平南部的色彩をもつ土器文化が西側に存在している事実は、同じ盆地内にありながら川を隔てて違う集団が存在

1 中部高地千曲川水系の弥生集落の繋がり



長野県佐久地方の弥生集落密集地帯と古墳発生期遺跡分布地

在することを感じさせる。善光寺平の文化要素が間近に見えるにもかかわらず、佐久固有の東側の集団はこれを甘受しようとはしなかったことになる。弥生時代後期後半に至ると盆地生粋の封鎖性の強い社会が確立されていたことを伺わせる現象である。

### (3) 群馬県との連絡

前項では長野県の弥生時代後期は、小地域単位で独自性の強い社会が形成されていることが想定された。しかし、こうした情勢下でありながらも善光寺平南部と上田西部、上田西部と佐久西部、上田東部と佐久東部などは土器様相などの共通性が強く、隣接する地域相互の交渉は活発に行われていたことを示す現象も確認された。この小地域間交渉は単に県内にとどまらず、県外にも及んでいる。その具象として後期中頃の長野県佐久市周防畑B遺跡と群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡をあげることができる。

周防畑B遺跡は1時期20棟を越えると考えられる佐久盆地ではこの時期最大級の集落遺跡である。出土土器は千曲川流域の東側の特徴を備えたものを主体とするが、これらの組成中には「赤井土・吉ヶ谷式」と考えられる単節あるいは附加条縄文土器も含まれている。この系統の土器が確認された遺跡は今まで佐久で500軒以上の堅穴住居が調査されているにもかかわらず周防畑B遺跡以外にない。

一方、南蛇井増光寺遺跡は後期のみの総数で181軒の堅穴住居が検出され、その規模は更に膨張することが確実な群馬県最大級の巨大集落である。ここからは赤色塗彩される壺の頸部文様に矢羽状の縄描文を刻むなど、佐久盆地の東側と多くの共通要素を持つ土器群が多く発見されている。従って、当遺跡は、佐久盆地の弥生集落と強い接触を持っていたと考えられる。

ちなみに南蛇井増光寺遺跡の発掘まで、群馬県の弥生集落跡では顕著な信州系「箱清水式」土器は未発見であった。また、南蛇井増光寺遺跡とはほぼ時を同じくして行われた上信越自動車道建設に伴う発掘調査で確認された中高瀬観音山遺跡をはじめとする弥生後期の近隣の諸集落でも、信州系土器の匂いはほとんど感じられない。このような状況から見ると峠を越えて長野一群馬間の交渉を持ち得たのは限られた大規模集落に過ぎなかったことになる。当時における両地域の関係は地元代表格の集落同志の一本のラインで繋がっていたに過ぎなかったであろうか。

### (4) まとめ

弥生時代の長野県は土器様相の違いこそあれ、東隣の群馬県とは「中部大型縄描文」という土器文様に見られる基本的共通要素が結びついている。従って、文化的発信地と考えられる善光寺平の情報が何らかの形で群馬県まで伝達されていたことを想定しても良いだろう。ただし、その伝達方式は前項までに検証されたように善光寺平から群馬県までストレートに繋がるようなものではなかったようだ。長野県千曲川流域から群馬県にかけては「箱清水式」の本流を基本とする<善光寺平北部→善光寺平南部→上田盆地西部→佐久盆地西部>、「箱清水式」の先行型式「吉田式」の旧態要素を保守する<上田盆地東部→佐久盆地東部→群馬県富岡市(南蛇井増光寺遺跡のみ)>など盆地単位を越えた個性的な土器をつくる小地域が形成されており、その小地域の連鎖的な交流が情報伝達の基本となっていた可能性が高い。

善光寺平で発信された情報は、先の佐久市周防畑B遺跡、富岡市南蛇井増光寺遺跡の状況から見て、佐久平西部を経由して、佐久平東部から間接的にもたらされた可能性が高い。この結果、現代の伝言ゲームのように発信源からの情報は必ずしも正確に伝わらないこともあったために、遠隔地ほど土器様相に見られる地域的個性がより発揮されることになったのであろう。

なお、冒頭で述べたように今まで佐久地方で確認された群馬県や山梨県に通じる古代の峠や道筋に点々とある高冷地・山上の小集落や磨製石鏃の散布地の多くは古墳発生期に位置付けられることが確実な状況で、

本稿で目的とする中高瀬観音山遺跡で集落が営まれた時期「樽式」2・3期とはずれが生じている。このため、本稿では詳述しなかった。山間部についてはまだ未解明の部分が多いため、まったくないとは言えないが、少なくとも中部高地の弥生時代における高冷地・山上の遺跡は古墳時代に比べると発達をみる段階にいたっていない。短期間で行き来可能な小地域間の交流にとどまっていたと考えられる封鎖性の強い当地の弥生社会では、峠路に集落を置く必然性がなかったようにも思えるのである。

小稿を執筆する機会を与えて頂いた坂井隆氏には資料調査などでたいへんお世話になりました。記して感謝致します。

[註]

- 1 佐久平の古墳発生期における遺跡立地については拙稿、1994「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」『長野県考古学会誌』74に詳述しているので参照されたい。
- 2 善光寺平南部の弥生土器編年については千野浩、1989「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』3・41-4(3)に詳しい。
- 3 群馬県の弥生土器編年については、飯島克巳・若狭徹、1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』3・40-9に準拠した。

参考文献

- 千曲川水系古代文化研究所編、1980『編年』  
 長野県埋蔵文化財センター、1988～1990『長野県埋蔵文化財センター年報』5～7  
 飯山市教育委員会、1992『上野遺跡4』  
 長野県埋蔵文化財センター、1994『栗林遺跡・七瀬遺跡』『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 長野県考古学会、1992『中部高地における弥生集落の現状—長野県考古学会30周年記念大会資料集』  
 佐久考古学会、1990『赤い土器を追う』  
 長野県、1982『長野県史 考古資料編主要遺跡(北・東信)』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団、1992『南蛇井増光寺遺跡1』  
 山梨県教育委員会、1987『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』

## 2 北関東・北陸東部の弥生集落遺跡の立地

若林正人(群馬県立医療短大事務局)

### (1) 北関東地方の状況

#### A 群馬県地方の地形状況

集落の立地を語る前にまず、対象地の地形を述べておきたい。

群馬県の地形を見ると、関東平野の一角を占める平野部から、中部高地・上越国境の山間部への移行地帯を呈している。南東部は標高20mに満たない低地帯で、そこから北方及び西方に向かって徐々に標高を高めていくが、一様に推移するのではなく、山地形や丘陵に区画されて複雑な様相を呈している。高崎から前橋にかけては緩傾斜地の前橋台地が形成されているが、盆地状の地形を示す澁川中流域および利根沼田地域・中之条地域などでは河岸段丘が顕著に発達している。

また、高崎西部から西方の山間地にかけては東西方向に数条の丘陵が発達している。さらに、赤城山や榛名山の山裾部には河川の浸食等による段丘地形が多く認められる。そのなかで、河岸段丘の上・中段段丘面縁辺部や丘陵縁辺部は周囲の平地に対して特に眺望にすぐれており、また広い範囲を見渡すことのできる位置にあるものが多いことを指摘しておきたい。なかには中高瀬観音山遺跡に典型的にみられるように、足元に可耕地が広がるものも多い。これらは、群馬県の集落遺跡の性格を考える際に重要な点である。

#### B 群馬県地方の遺跡立地

群馬県では、弥生時代後期の集落は、自然堤防上・低台地・河岸段丘上など多様な立地状況を示すが、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前半にかけての時期に、丘陵上や段丘縁辺部など相対的に高位置に立地するものや眺望に優れた位置に立地するもの、可耕地を見下ろす位置に立地するものが増えていることが指摘されている。また、集落の周囲に環濠をもつものや、焼失住居が高い比率を占めるものも出現する。それらの分布状況も、後期の遺跡自体がほとんど見られない東部を除き、北部・中央部・西部と広範に認められる。なお、この場合、丘陵上の立地とは、周囲に集落域に適した平地が広がるにもかかわらず、丘陵上を選地するものを指し、その地域全域が丘陵地形を呈し、長期間にわたって継続して集落が営まれる場合は除いている。

具体的には、まず、丘陵上や段丘縁辺部に立地する遺跡として、北部では中之条町伊勢町遺跡群、沼田市下川田平井遺跡、日影平遺跡など、中央部では赤城村見立瀬井遺跡・北橋村分郷八崎遺跡・下遠原遺跡など、西部では高崎市観音山丘陵の少林山台遺跡、若田丘陵の縁辺部に八幡遺跡・引間遺跡・剣崎遺跡・四ノ市遺跡、富岡市の高瀬丘陵では中高瀬観音山遺跡・内匠諏訪前遺跡・日影岡地遺跡・阿曾岡遺跡などがある。

環濠をもつものでは、中之条町伊勢町遺跡群・沼田市日影平遺跡・富岡市中高瀬観音山遺跡、粕川村西原遺跡などがある。また、焼失住居の検出例については、北端では川場村門前橋詰遺跡、西端では倉瀬村水沼遺跡で焼失住居が調査され、その報告書等で住居の廃棄状況の特異なことが指摘されているのを始めとして、同様な例は北部・中央部・西部等で広範に認められている。

このような、①特殊な立地を示すもの(広い意味での高地性集落)や、②周囲に環濠をもつもの(環濠集落)や、③焼失住居が高い比率を占めるものを、その特異性に注目して防御的集落と仮に総称する。実際には、中高瀬観音山遺跡のようにこれらの全ての要素を備えた集落もあり、また、1つの要素のみの集落もあり、多様な有り方を示している。

このうち、丘陵上や段丘縁辺部に立地するものについては、高地性集落の一類型とみてよいと考えてい



る。「高地性」という点については、西日本にみられる典型的なもの(急峻な山地形の頂上部に立地する)との比較から、これらを本来の高地性集落にはあたらぬとする見方もある。しかし、前述のように群馬県では丘陵や台地地形、なだらかな山麓地形が発達しており、この地形上の特徴と、高地性集落の機能の本質が「防衛」と「見張り」にあることを考えれば、両者とも同じ発想のもとに形成されたとみられる。本来の高地性集落の代わりに、段丘縁辺部に立地するものが見られる点がこの地域の特徴に対応した「防衛性」を考慮した配置を示すものと解釈できる。ただし、沼田市戸神山などのように平地に接して比較的急峻な山地形が見られる場所もあり、今後の調査によって本格的な高地性集落が発見される可能性も残っている。

なお、注意すべきものとして、渋川市有馬遺跡や高崎市新保遺跡などのように、前代から継続する大規模集落とみられるものやそのほかの小規模な遺跡でも、平地に立地し、調査範囲内では防衛性が希薄なものがある。今後のより詳細な検討に期待したい。ただし、高崎市熊野堂遺跡のように後期中業と末期の住居跡があるが、防衛的集落が多くみられる後期後業に断絶が認められる遺跡もあり、一律ではない。

また、集落が防衛性を高める際に、環濠集落を形成する場合と高地性集落を形成する場合とを比較すると、単純に考えると、既存の集落の周囲に濠を設けるよりも、集落を高位置に移転することの方が日常生活に与える影響は大きかったであろう。耕地や各種の資源などのそれまでの生産基盤の放棄や他の集落との交易の断絶など、経済的な打撃を受けるだけでなく、場合によっては生業の転換も伴ったものとみられるからである。したがって、1つの見方としては、既存の集落立地に環濠をもった場合よりも、高地性集落を築いた地域の方がより防衛の必要性の度合いが強かったともいえる。

これら防衛的集落の存続時期については、中高瀬観音山遺跡で焼失住居が重複して築かれているように、ある程度の期間継続していたとみられる。また、その年代については、正確には地域差も考慮した土器編年の詳細な検討が必要であるが、後期後業段階の中で消滅するものや、後期末を主体とするもの、古式土器を伴うものなど、遺跡によって時期差がみられる。おおむね、西部・中央部では後期後業段階のものも多く、北部では沼田市下川田平井遺跡が後期末、昭和村糸井宮前遺跡が後期末から古墳時代前期前半であるように、時期が下っても形成されているようである。例えば、富岡市では中高瀬観音山遺跡は後期末になると急速に衰退し、代わりに南蛇井増光寺遺跡が平地に立地している。中高瀬観音山遺跡と同じ丘陵上には小規模な内匠上之宿遺跡・内匠日影周地遺跡がのこる程度になっている。

ちなみに、群馬県では中期後半においても防衛的集落が出現しており、前橋市清里庚申塚遺跡・高崎市浜尻遺跡・富岡市小塚遺跡等は環濠集落であり、石戈を出土した妙義町古立東山遺跡は段丘縁辺部に立地している。小塚遺跡で炭化糧が出土しているように、本格的な農耕集落の形成に伴う緊張関係とそれに対応しようとする活動を反映しているのであろう。ただしこの段階の遺跡の調査例は少なく、散発的で、個々の遺跡の様相も明瞭ではない。今後の調査例の増加に待ちたい。

### C 群馬県以外の状況

北関東では、栃木県・茨城県では今のところ明確な防衛的集落は確認されていないようである。なお、南関東では弥生時代後期中業以降において東海地方からの土器・人間集団の移動が活発であり、後期後業にかけて東京都新宿区下戸塚遺跡・神奈川県綾瀬市神崎遺跡をはじめとする多くの環濠集落が形成されていることが指摘されている。特にこれらの集落では山中式・菊川式など東海地方の土器の出土が顕著であり、防衛的集落の出現に外部からの人間集団の移動が直接かかわっていることが確認できる。また、これに伴って在地の従来の社会にも変化があらわれ、特に埼玉県において吉ヶ谷式土器を使用する集団が群馬県南西部に移動していることも推定されている。

## D 防衛的集落の出現の条件

防衛的集落の出現の条件として、第一に相対する勢力があり、それに対抗するだけの勢力の結集が可能であること、が必要である。このことから逆に、弥生時代後期の群馬県では一定度の社会の発展が進んでいたことが考えられる。ちなみに、この時期には、集落の規模・金属器など特殊な遺物の出土などから地域の拠点集落とされるものが県内各地に出現しており、中高瀬観音山遺跡の他に渋川市有馬遺跡・高崎市新保遺跡・同市八幡遺跡・中之条町伊勢町遺跡群などがある。

では、具体的には、防衛的集落出現の原因には何が考えられるのであろうか。南関東や北陸地方の例では、防衛的集落の形成には外部からの集団の移住が直接の契機になっている。しかし、群馬県の場合、防衛的集落の形成が開始された段階では、外部からの集団の移住にはさほど大きなインパクトは認められない。後期後葉に吉ヶ谷式土器使用集団の流入があるものの、南西部を中心としており、北部での検出例は少ない。また、防衛的集落内でも在地の櫛式土器や赤井戸式土器が主体的に出土しており、外部からの影響は顕著ではない(一部の古墳時代前期前半の集落では古式土器器が出土しているが)。

従って、外来集団との接触が根本的な原因であったとは考えにくい。むしろ防衛的集落の出現の背景には在地社会の内的発展を考えてもよいのではないかと思える。すなわち、後期後葉段階になると群馬県においても、弥生社会の発展に伴って地域社会の中に諸矛盾の高まりや地域統合の動きが高まってきていたと推定される。これは外部からのわずかな働き掛けによっても、地域社会に大きな変動を誘発する状況にあったのではないだろうか。具体的には、隣接する埼玉県の状況を見ると、後期後葉以降において埼玉県から群馬県への人間集団の移動が考えられるが、このことによる社会動揺もきっかけの一つになったと考えられる。このような動揺により、社会再編成の動きが高まり、大規模集落の出現や防衛的集落の形成が必要となるような状況が出現したと推定できる。

なお、重要なことは、この緊張状態の中で、集落内では防衛的集落を維持し他の集落に対抗するために、指導者層への権力の集中が進んでいったことが推定できることである。環濠を巡らせたり、高位置に立地したりした集落では日常生活に大きな不便を強いることになるが、このことだけを考えると、集落の構成員にその不便を強いるには指導者への強制力の付与が不可欠になると考えられるからである。これはやがて、集落の指導者から地域首長への転化を促すことになり、後の古墳社会の受容をより容易にする働きをしたといえる。

これは、渋川市中村遺跡・有馬遺跡・沼田市石墨遺跡などで、円形周溝墓の範疇とみられる「糠床墓」やそれに類する墓が築かれ、後二者で権力の象徴としての鉄剣・鉄銅・玉類などが出土していることから考えられる。鉄剣は高崎市八幡遺跡や中之条町伊勢町遺跡群でも出土している。

次に、防衛的集落の消滅の理由であるが、これにも内因と外因が考えられる。まず、内因では、ある程度の緊張の期間を経て、県内各地での地域再編成がある程度達成されたことが想定される。これによって、緊張状態が徐々に解消され、しだいに防衛的集落の必要性がなくなったと考えられよう。外因では前期古墳の出現にみられる、畿内勢力の本格的な進出がある。緊張状態の期間を経て成長した地域首長たちは畿内勢力に取り込まれ、やがて前期古墳を築造するようになっていったとみられる。

このことは、弥生時代後期に濃密に集落が展開していた西部・中央部地域に、いち早く富岡市北山茶臼山古墳・同西古墳、高崎市茶崎蟹沢古墳、元島名将軍塚古墳などの前期古墳が築造されていることから考えられる。また、前期古墳が認められず、畿内勢力の進出の方向から外れていたとみられる北部で比較的遅くまで防衛的集落が存続していることは逆の理由によるものとみられる。地域首長にとっては上位権力にあ

る畿内勢力の影響によっても、地域間の緊張関係は解消していったと推定される。

群馬県の場合、弥生時代から古墳時代への移行にあたっては、外来集団の影響も大きいのが、このような地社会の変容も無視できないと考える。古墳時代を迎える際の在地の主体的な動向を解明する資料として、防衛的集落の研究は重要である。

#### 参考文献

- 群馬県.1986『群馬県史資料編2 原始古代2』  
 群馬県.1990『群馬県史通史編1 原始古代1』  
 1993「転機4号 東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器」『第8回東海埋蔵文化財研究会 論考編』  
 その他当該遺跡の各報告書

### (2) 北陸地方の集落遺跡の立地【PL.27,28】

ここでは、北陸地方の状況について、新潟県を例にとって検討する。新潟県の主な集落遺跡の立地は、縄文時代の遺跡を除けば、自然堤防上・砂丘列上・平野の微高地上などであるが、弥生時代後期後半前後に丘陵上に立地するものが現れてくる。それらには、単純に標高からみれば典型的な高地上性集落とはいええないものもあるが、「防衛性」と「眺望」を備えていると判断されるものである。また、低丘陵上に立地する集落であっても環濠をもつものもある。これらは、その防衛的な機能に着目して一括して扱い、防衛的集落として検討対象とすることができる。新潟県の弥生時代後期の代表的な防衛的集落には、新井市の斐太遺跡群、新津市の古津八幡山遺跡、見附市の大平城遺跡、長岡市の横山遺跡、巻町の山谷古墳下層遺跡、巻町の大沢遺跡、三島郡和島町奈良崎遺跡などがある。また、環濠を伴う集落ということでは11の遺跡があるという(考古学協会シンポ資料)。

これらのうち主な遺跡の概要は、次のとおりである。

**斐太遺跡群** 標高約88mの丘陵上に位置し、平野との比高は約40mを計る。小規模な沢を挟んで、北側の百両山遺跡、南側の上ノ平・矢代山遺跡に分かれ、あわせて斐太遺跡群と称される。過去に、部分的ではあるが、地表からの確認調査や発掘調査・試掘が実施され、約100軒の住居跡と環濠が確認されている。

**古津八幡山遺跡** 標高約50mの丘陵上に位置し、平野との比高は約45mである。28軒以上の住居跡・環濠・前方後方型周溝墓・円墳が検出されている。

**横山遺跡** 標高約26mの独立丘上に立地し、周囲の水田面との比高は約6mである。4軒の住居跡と方形周溝墓1、三重の環濠が検出されている。土砂採取により地形が大きく削られているが、本来は大規模な拠点集落であったとする推定もある。

**大沢遺跡** 標高約38mの丘陵上に立地し、平野との比高は約30mである。数軒の住居跡と方形周溝墓1基が検出されている。

**大平城遺跡・山谷古墳下層遺跡** とともに弥生時代の遺跡としての詳細は不明であるが、いずれも平野からの比高は40mを超える。特に、大平城遺跡は環濠および方形周溝墓を伴うとされている。

以上を、遺跡の規模・立地などから分類すると以下のようである。

規模の点では斐太遺跡群・古津八幡山遺跡は大規模なものであり、横山遺跡・大沢遺跡は小規模なものである。特に、斐太遺跡群は極めて大規模なものといえる。立地では、斐太遺跡群・古津八幡山遺跡・大沢遺跡・山谷古墳下層遺跡・奈良崎遺跡が丘陵上の高所にあり、横山遺跡は水田中の比高の小さい小独立丘陵上にある。また、斐太遺跡群・古津八幡山遺跡・横山遺跡・奈良崎遺跡では環濠が確認されている。

なお、出土土器は、いずれも後期後半の北陸系土器を主体とし、畿内系の古式土器器はほとんど見られな

## Ⅵ 特 論

いようである。すなわち、北陸系土器の波及期以後で、畿内系の古式土師器が主体を占める段階以前のものであることがわかる。また、詳細に検討すると、同一遺跡内や遺跡相互間でも出土土器に多少の時期差が見受けられ、ある程度の期間、緊張状態が継続していたことがわかる。

このことから、これら防衛的集落の出現の理由については、畿内勢力の直接的な進出よりは、北陸系勢力との関連が考えられている。さらに、注目すべきこととして、古津八幡山遺跡・山谷古墳(前方後方墳)下層遺跡では集落消滅からさほど時間が経過しない時期に前期古墳が構築されている。

以上のことから、新潟県の防衛的集落の特徴として、次の点を指摘できる。

ア 規模・立地にバラエティがある。このことは、新潟県の防衛的集落の形成が、特定の性格の集落に限られるのではなく、普遍的な現象であるといえる。また、その分布も県下全域に渡っている。新潟県のほぼ全域が総体として、防衛的集落を必要とするような緊張状態にあったといえる。

イ 前期古墳の構築との間に有機的な関連をもつとみられるものが一部に存在することがあげられる。このことから、集落を形成した集団と前期古墳を築造した集団とが、何らかの点で系譜的なつながりを有するとみられる例があることを示している。

ここで、イの視点に着目してさらに検討を進めたい。同じく大規模な防衛的集落でありながら、集落解体後に前期古墳を伴う古津八幡山遺跡と伴わない斐太遺跡群を比較したい。

古墳の出現に必要な条件は、単純化して考えると、①有力首長の存在と、②畿内勢力の影響下にあることであろう。これを新潟県の事例で考えれば、次のように説明できる。まず、①については、防衛的集落の維持にあたっては立地条件の不利益さによって、食料確保・生産活動・交易・日常生活など多くの面で集落の成員に制約が働いたはずである。一方、その制約を成員に強制していくなかで、集落内に指導者層に強制力が生じていったと推定される。このことを通して、緊張状態にある社会のなかで、集落の指導者層への権力の集中が図られたと考えられる。そのような指導者層が首長への転化の直前の状態にあったことは、古津八幡山遺跡の前方後方型周溝墓から推定される。この点については斐太遺跡群においても同様の状況にあったであろう。

しかし、前者では、直径約60mの新潟県では最大級の円墳を構築し、後者では古墳等はみられない。この違いは、②から、前者が畿内勢力の東北地方への進出経路に当たっていることによるとみられる。この地域の有力首長が畿内勢力に取り込まれた結果、古墳を築造するようになったと推定できる。ただし、斐太遺跡群については、長野県北部の勸介山古墳、蟹沢古墳などの前期の前方後方墳との関連を指摘する意見もあり、今後、検討すべき点もある。なお、前述の土器の様相から、この段階では畿内勢力の直接的な進出ではなく、北陸系勢力を介した間接的な影響下にあったとみられる。

防衛的集落は、弥生時代後期の社会状況を示し、古墳時代への移行のありかたを示すものとして、さらに積極的な検討・解釈が必要である。推論を重ねた検討ではあったが、最後に、さらに防衛的集落の性格を検討していくには、新潟県の場合、今後の課題として、より詳細な土器編年を確立すること、北陸系土器の流入との関連を追求すること、集落廃絶後に前期古墳が造られるものと造られないものとの差(古墳の伝播経路の追求と関連する)の理由を検討すること等が必要であると述べてまとめておきたい。

### 参考文献

- 日本考古学協会新潟大会実行委員会.1993『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム2資料 東日本における古墳出現過程の再検討』  
新潟県.1983『新潟県史資料編1 原始・古代一 考古編』  
新潟県.1986『新潟県史資料編1 原始・古代』  
新潟市教育委員会.1992『古津八幡山古墳1 1991年測量調査報告』

### 3 弥生時代北関東の集落立地とその様相

—群馬県域を中心として—

柿沼恵介(新田郡新田町立水崎小学校)

#### (1) はじめに

鶴が東南東方向に首を伸ばしてはばたく姿に例えられている群馬県は、その大半を占める両翼から尾にかけての地域が山岳部となっており、ほぼ中央を縦に割く形で利根川が南流している。残りの狭隘な鶴首部分は関東平野の最奥部として平坦地が広がっており、利根川は、埼玉県との県境付近を東南東方向に流下する。

弥生時代の各遺跡は、合流点を中心とする大小各河川域を選地しており、全体的に西濃東薄である。しかし、時期・遺跡の性格によって選地の主要因を自然的条件としたり、社会的条件としたり、両者を採用したりする等相違をみせており、遺跡密度の濃淡が地形・地理的に変動している。自然的条件を主要因とするものには、主対象となる生産物の違いによっても選地域が異なってくる等の様相がみられる。

#### (2) 前期末～中期前半

弥生文化が数次に亘って波及してくる弥生時代前期末から中期前半にかけては、自然的条件を選地の主要因としているが、二者が看取できる。1つは、標高200mを越える山間部の丘陵・台地縁辺・河岸段丘上を選んでおり、1つは、標高60m前後の自然堤防状の微高地に立地している。現時点での遺跡数は、前者が圧倒的に多く、鳥居峠や碓氷峠・和美峠・内山峠等のルートを通して西から波及してきた弥生文化が、中心的に採用されたことを物語っている。遺跡の内容としては、岩陰遺跡や土壘が大半で、住居を営んだ例としては、調査例で2遺跡、開墾時に伴う焼土等の存在から推定できるものが1遺跡である。調査した2遺跡は、鍋川右岸の上位段丘上にある神保榎松遺跡(吉井町)と碓氷川上位段丘面南端の独立的景観を呈する丘陵上に占地する注連引原Ⅱ遺跡(安中市)とである。

中でも、中央部付近に地床炉を持つ不整形丸方形の堅穴住居跡1軒を検出した注連引原Ⅱ遺跡は、住居が土壘群と離れた位置に占地しており、岩櫃山式期の集落造営観の一端を示している。

後者の遺跡数は現状では少ないが、沖積地の調査が深い部分にまで及ぶにつれ、増加することが予測できる。内容の判明している遺跡としては、沖Ⅱ遺跡(藤岡市)の土壘墓群等である。明確な住居検出例はないが、焼土の存在や遺物の出土範囲等から長楽寺遺跡・阿久津宮内遺跡(尾島町)でその存在が推測できる。住居形態が、明確な堅穴であったかどうかを含め、主とする生産対象に規制される集落の選地条件や出土土器の様相に前者の遺跡とは相違が指摘でき、複線的波及経路の追求とも絡めて課題となるところである。

#### (3) 中期後半～後期初頭

中期中葉には一時的な過疎現象が到来するが、後半に至って、波及期段階では集落造営の選地対象となっていなかった地域に遺跡が激増してくる。地形的には、山麓縁辺の河岸段丘や自然堤防状の微高地・低台地であり、位置的には、榛名山東麓から南麓にかけての地域(前橋台地及びその周辺)や鍋川流域、利根川上流域、吾妻川流域、烏川上流域に増加が目立つ。また、赤城山山麓では、丘陵性の台地も選地対象としている。

これら該期の出土土器をみると、甕・壺・甔・鉢・高坏・小型甕・小型壺・小型台付甕・注口土器等があり、弥生土器の組成・器制が確立している。また、鋤・鋸等の各種農具や弓等の狩猟具、斧柄等の工具、容器類を含む生活用具、建築材等の木製品、加工材の出土も、農耕を基本とした弥生文化の安定した内容を示している。立地地域とも考え併せた時、主体的には、広狭の違いはあるにせよ水田適地をめざしており、魚作を折り混ぜながらも稲作志向が強く、それに合った自然的条件を重視した選地形態を探っていると指摘でき、

そこに波及期との違いをみる。

反面、水田遺地を周辺に持たない場所を選地する遺跡もあり、水田・畠という異なる農耕形態への比重のかけ方の違いから生じた選地という解釈だけでは説明できない要素も認める。後述する環濠集落・焼失集落(住居)の成因の1つと考える社会的条件も含めた選地を考慮する必要がある。

ここで、該期の土器及び集落の様相をみていくと、土器においては、二つの地域圏が明確である。1つは前橋台地を中心に西側の山間部へと展開する地域圏であり、1つは赤城山を中心として、その南麓及び北麓の薄根川・片品川流域、伊勢崎市・太田市周辺の平野部へと連なる縦方向に延びる地域圏である。前者は、中部高地の栗林式土器と祖源を同じくする竜見町式土器であり、後者は、荒川前原系土器群である。後者の様相は一律性に欠けており、竜見町式土器を基調としながらも、南東北の二ツ釜式土器や川原町口式土器・北陸の山草苜式土器、南関東の宮ノ台式土器、在地派生土器等が絡んでおり、西方・東北方・東南方の該期弥生土器文化からの影響を受け入れている。自立的性格に乏しいことが、1つの独自性ともなっている複合土器文化である。

次に、集落の様相であるが、特記事項として、環濠集落の明確な存在、第一期焼失集落の出現が挙げられる。環濠集落は、図-1からも明らかのように、いずれも竜見町式土器文化圏にみられ、小塚遺跡(富岡市、図1-7・図2)、清里庚申塚遺跡(前橋市、図1-2)、浜尻B遺跡(高崎市、図1-5)・高崎城三ノ丸遺跡<sup>(1)</sup>(高崎市、図1-6)・上笠榎南遺跡(高崎市、図1-4)、中村遺跡(渋川市、図1-1)で検出されている。時間的には、少なくとも2期に細別できる可能性を有する。焼失集落は、小塚遺跡と荒川前原系土器文化圏である西迎B遺跡(柏川村、図1-3)で確認されている。

まず、環濠・焼失集落である小塚遺跡例をみると、鍋川の支流である高田川左岸の自然堤防の微高地に、中期後半に入って新たに営まれた集落で、倒卵形と推定される環濠の内側に7軒の竪穴住居と1基の竪穴・11基の土壇が検出された。全掘でないため集落規模等は不明であるが、確認された住居はすべて焼失している。環濠は東側に、開口したままの通路状の張り出しを有しており、断面の基本形は、中位に段を持つ畚形を呈する。他遺跡では、V字状の断面が主流をなす。本集落は、焼失後再開されず、短期間で暮を閉じている。

次に、焼失集落である西迎B遺跡の概要であるが、本集落は独立丘陵状をなす洪積台地の南端に位置しており、隣接する谷地との比高は、深いところで5m程である。調査された該期の遺構は、11.68×7.40mの大型住居1軒及び現状で9×5.8mの比較的大型の住居をそれぞれ核とする竪穴住居15軒であり、内5軒は焼失住居の可能性が高い。小規模集落の多い荒川前原系土器文化圏の拠点集落であり、土器の様相より2期に細分可能である。本集落も焼失後、その機能が消滅し、再び集落が形成されるのは古墳時代に入ってからである。この他に、中期後半から後期までほぼ連続と集落を営んだ新保遺跡(高崎市)も2条の自然小河川に囲まれた区域を居住地としており、環濠集落的な意識を持っていたと推測できる。

以上記してきた環濠・焼失集落の成因であるが、環濠集落は、村落の区画を示すと共に、その共同体組織の対外的防御施設ともなり得ることは明らかである。該期における事例は、本県だけにとどまらず、ほぼ同時期と推定できる南関東の宮ノ台式期の大塚遺跡や中部高地の栗林Ⅱ式期を主体とする松原遺跡等でも検出されている。焼失集落についても宮ノ台式期の朝光寺遺跡や高台に立地する三殿台遺跡に例をみる。

その成因としては、

A：不注意や雷害等の自然災害に主因をもつ火災の類焼・延焼による一次的焼失で、生活用具は殆ど持ち出せないケースが多い。

B：土石流等の自然災害による廃棄は別にして、環境の変化等による廃棄に伴う、習俗としての住居へ

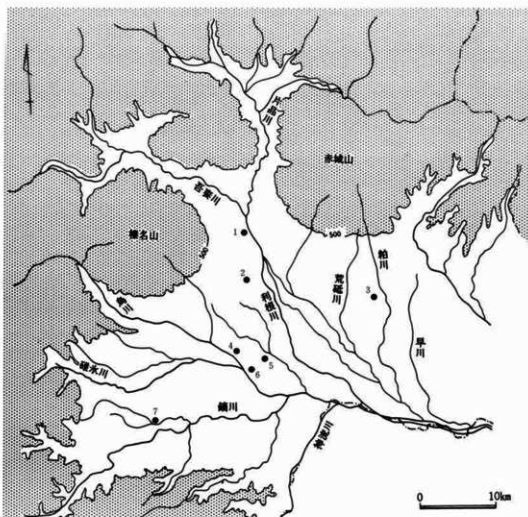


図1 中期後半から後期初頭の環濠・焼失集落分布

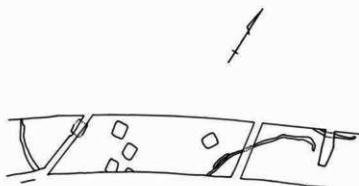


図2 小塚遺跡

## Ⅳ 特 論

の放火による二次的焼失。この場合、生活用具は当然持ち出すことができる。

C：集落間、或いはそれを越えた文化圏、さらに広い政治圏での戦闘の過程、またはその結果招来された集落への放火による一次的焼失。このケースでは、不意打ちのような予測できない戦闘の場合は、生活用具は持ち出せないが、中長期的に不安定な社会情勢が続いていれば、ある程度は生活用具を持ち出し得る。

D：呪術等宗教的要因や疾病等に伴う二次的焼失等で、生活用具は、場合によっては持ち出せない。

の4ケースを想定することができる。これら4観点から該期の焼失集落を検討した時、Aは、他県の焼失事例の存在や同時的に出現した環濠集落の実例等から、他県でも偶々同じように焼失ケースが多かった、或いは環濠集落が存在していた等偶然性の重なりに依拠した説明に終始せざるをえない。Bは、該期集落の中で焼失例を持たないケースも多く、一文化圏の中で習俗として定着していないことになる。

Cは、弥生文化人の羨望である広大な稲作適地をもつ前橋台地及びその周辺に環濠集落が主に分布していること、各集落はその地域における拠点集落と考えられること、環濠集落と焼失集落が同時期に出現していること、他県にも同様な事例を認めること等より蓋然性が高く、自立性に乏しい土器文化圏の存在や既に指摘されている時代の潮流も傍証となる。Dについては、データ不足が否めない。

これらのことから、群馬県における中期後半、特に後葉から後期初頭にかけたの弥生集落について下記のことを考える。

- ① 農耕作業や集落造営等に伴う村落共同体組織の階層分化と協同化が成立していた。
- ② 拠点集落を核に、集落間の紐帯組織が成立していた。
- ③ 土器文化圏同士を比べた時、集落構成の充実度・被災率の違いは、社会的成熟度の違いにその原因がもたれられる。本県の場合、十分に評価できる熟成状態には到っておらず、環濠・焼失集落の出現も、余波的な戦闘への対応・結果という規模で終始した。

### (4) 後期後半～古墳時代初頭

中高瀬観音山遺跡の所屬時期を対象としている。

#### A 土器編年と地域圏

後期後半の集落に視点をあてると、中期後半後葉の集落同様、山麓縁辺の河岸段丘や自然堤防状の微高地・低台地・丘陵性の台地を選地しているが、集落規模の拡大に伴う新しい集落の展開、つまり、遺跡の増加がより一層顕著となる。これは、農業技術の進歩に伴う生産力の向上・安定が、新たな農耕適地の需要へとつながり、可耕地への分散移動となってもたらされたものと推測できる。

そのことは、前橋台地上の御市呂遺跡・岡道遺跡・熊野堂遺跡・融通寺遺跡・小八木遺跡・日高遺跡(図4-29)・新保遺跡(図4-31)・並榎北遺跡・東町Ⅲ遺跡等、25遺跡以上を数えるC軽石下木田の検出例や貯蔵用の大型壺の増加等によっても傍証できる。また、この他にも、二之宮千足遺跡(前橋市)や関後遺跡(柏川村)・甘楽条里遺跡(甘楽町)のC軽石下、あるいは、砂礫土下の木田や有馬遺跡(図4-25)・有馬条里遺跡(図4-24)・中村遺跡(洗川市)・覚延天之宮遺跡・上ノ坊遺跡(前橋市)、熊野堂遺跡の畠跡の確認など、農耕形態の多様化が看取できる。しかし、それだけで遺跡数の増加・新集落の出現・展開を説明するには不十分であることは当然である。そこで、ここでは、後期後半から古墳時代初頭期における群馬県出土土器の様相や集落の様相に限定して述べることで、遺跡数の増加を説明していく。

まず、後期土器及び古墳時代初頭の土器については、後期後半期に明確となる2つの地域圏が中心となる。

1つは、竜見町式土器文化圏の継承発展形態である樽式土器文化圏として位置づけられる。この土器文化



圏は、純正度が高く、その後半期まで他の土器文化圏の要素が殆ど介入していないこと、県内では、広大な農耕適地を後背に持ち、遺跡の広がりや数から強者の存在ととらえられ、中業には明確な小地域圏が分立してくる。かつて、筆者は、大規模開発以前の資料を軸として、本県における後期埴式土器をA類→B類・B'類という流れでとらえ、B類・B'類という小地域圏の存在及び、両B類期における古式要素と古式土師器的要素の存在から時間の広がりや予測し、時期細別の可能性(井上・柿沼, 1977)を指摘した。その後、8小地域圏を設定し、榛名山東南麓地域を中心にⅣ期区分論(三宅・相京, 1982)が提示された。

これは、該段階における編年論として首肯できるが、古墳時代との画期が不明である点、榛名山東南麓地域第Ⅲ期に盛行する刻列を施す折返し口縁、または有段刻列突帯口縁壺の位置付けに欠ける点、簾状文の系統的変遷論が不詳である点等、拙論同様、資料分析結果をもとにした予察に不十分さが指摘できる。

その後、新保遺跡大溝出土の厩大な出土土器を、型式学的操作法から抽出した類型を軸に詳細に分析構築した様式論(佐藤, 1988 2論文)が提示された。結論的には、後期土器を大別3期区分している。後期3期の裏の簾状文のあり方・有段刻列突帯口縁の認識等細部の把握が不明瞭であるが、地域的跛行性をも踏まえており、現時点の埴式土器編年論では最も説得性を有する。

さらに、同様な様式論の観点から埴式土器を分析し、後期弥生土器を時間的小区分でⅢ期に区分(若狭, 1988, 89)し、外來系器種の組成への参画を契機に埴式系土器とするⅢ段階区分論(若狭, 1990)が提示された。小様式の変遷論としては、埴式系土器の各3段階に赤井戸式系土器・埼玉県児玉地域の土器群を対比しており、今後も妥当性を有すると考える。加えて、種々の要素の検討・構築を経て現象の解釈をすべきとしながら、古墳時代の地域動向について、在地文化圏内外の人的移動・初期古墳成立との因果の可能性を示唆しており、傾軋に値する。

外來系文様要素や遠隔地の土器の参入、焼失集落の出現時期への解釈を含め、種々の変容が同時的に噴出している後期3期の細分論を前提とし、そこに画期を求めると考えに立つ筆者は、3期と埴式系土器Ⅰ段階との間に画期を求めると論者との間に細部でのずれを認める。これは、資料がより増加していることから、今後より明確に規定されると考える。

これらを踏まえて、埴式土器の様相・出土数をみた時、後期3期及び埴式系土器Ⅰ段階の増量が目につく。継続している新保遺跡や有馬遺跡・日高遺跡等では、3期段階に集落内住居の増加が顕著である。また、**兼附遺跡**(高崎市, 図4-32)・**少林山台遺跡**(高崎市, 図4-33)・**分郷八崎遺跡**(北橘村, 図4-18)・**日影平遺跡**(沼田市, 図4-10)・**鎌倉遺跡**(沼田市, 図4-1)・**下川田平井遺跡**(沼田市, 図4-6)・**水沼遺跡**(倉洞村, 図4-20)等、3期段階になって新規に集落を形成している遺跡の存在を広域、かつ多数認める。

この3期段階の土器の文様要素(次頁図-3)をみると、南東北の伊勢林前式・輪山式土器に祖源を持ち、吉ヶ谷式・十王台式・二軒屋式土器にも採用された有段刻列突帯口縁や1-3段の折返し口縁部への縦、或いは稀に矢羽根状の刻列の存在<sup>2)</sup>が前橋台地及びその周辺地域に顕著である。また、頸部における2-4連節の簾状文や丁字文の存在、胴上部等における横走羽状充塹細網描文の出現も指摘できる。これらの様相の一部は、**天狗原遺跡**(宇都宮市)等出土の二軒屋式土器にも登場している。

なお、ここでは紙数の都合上、土器編年論について詳述する余裕はないが、型式学的編年論の1つの要素として、後期及び古墳時代初頭の簾状文を抽出してその傾向をみると、単節→短間隔2連節→長間隔短2連節→多連節(3-9連節)→長間隔単節・柵柵横線文・単節状多連節→無文化という流れをたどることができ、画期は、3連節・4連節を主流とする多連節段階に置く。実際には1つの遺構から混在して出土するケースも多いが、出土比率の検討からもこの方向に向かっている。いずれにしても、1期・2期に比較して、

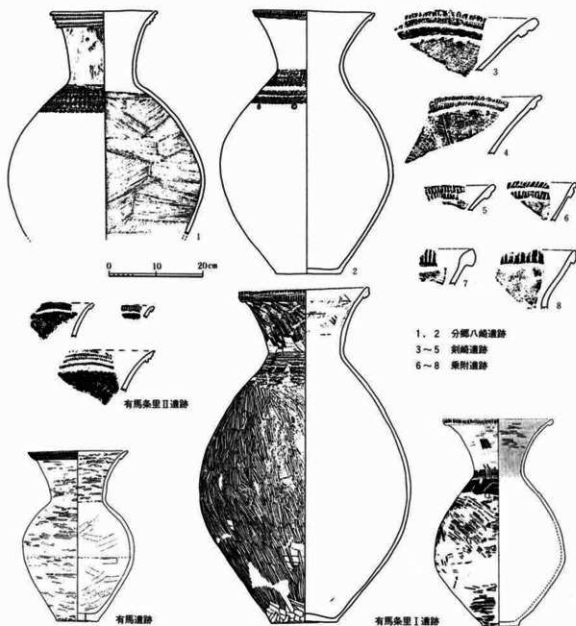


図3 刻列文弥生土器

夥しい数の住居・集落、及び多岐にわたる内容を含んだ土器が確認されており、細分の可能性がある。

樽式土器Ⅰ段階においては、折り返し口縁部刻列や胴上部における縦走充填細櫛描文・波状文区画櫛描縦線文の存在、頸部における櫛描横線文・長間隔単節・単節状多連節の描出、古墳文化期の外来系器種の参入等が指摘できる。

これを、中高瀬観音山遺跡出土土器に照らし合わせてみると、管見であるが、短2連節が主流を占めること、折り返し口縁部刻列は存在するが少数例であること、赤井戸式土器や十王台式土器・南関東系の土器等が若干混入していること、樽と赤井戸式土器の文様要素が1土器のなかに融合した形で描かれたものも存在する

こと等が指摘できる。小地域圏の存在を標榜しながら、後期3期に盛期を迎える遺跡といえる。これに対して、谷を挟んで西隣する庚申山地区出土土器は、樽式系土器の範疇で捉えることができ、集落の移動が推測できる。

もう1方の地域圏では、後期後半後葉に入って、赤城山南麓等を中心とする丘陵性台地や扇状地を含む低台地に集落が形成される。土器の様相としては、吉ヶ谷式土器と濃い顔縁関係を持つ赤井戸式土器が中心となる。どちらかという、弱者の存在である。その区分については、赤井戸Ⅱ期を弥生終末とし、Ⅲ期を古墳時代初頭に位置づける編年論(小島,1982)が提唱されている。赤井戸Ⅱ期・Ⅲ期については前述した若狭氏の補完がある。

また、この時期で注目されるのは、広大な平坦地及び湿沢地を有する空間の地としての関東平野部だけでなく、西部や北部の山間地にも現状で弥生後期とされる外来系土器が客体的存在として参入していることである。例としては、荒砥前原遺跡(前橋市、図4-36)や西太田遺跡(伊勢崎市)・花園遺跡(新田町)・常木遺跡(尾島町)・石墨遺跡(沼田市、図4-2)等出土の十王台式土器、後閑遺跡(前橋市)等出土の弥生町式土器、判形遺跡(吾妻東村)出土の畿内Ⅴ様式壺の系譜をひく柳描文土器、内堀遺跡群(前橋市)や神宮寺西遺跡(渋川市、図4-23)・長根安坪遺跡(吉井町)出土の天王山式土器、町田小沢Ⅱ遺跡(沼田市、図4-4)等出土の5の字口縁を有する月影Ⅰ式土器の存在<sup>31)</sup>であり、樽式土器や赤井戸式土器と伴出しているケースが多い。

つまり、後期3期段階には、外来系文様要素が加わってくるだけでなく、弥生文化期の外来系土器が客体的存在として入ってきていることを指摘しうる。このことは、高い純正度を誇ってきた樽式土器文化において、その3期のある段階で、他の土器文化圏の文様要素を取り入れたり、客体的にせよ外来系土器を受け入れ、保持する事態が生じたことを物語っており、従来とは異なる交渉・接触のあり方を示唆している。しかも、同様な現象は、赤井戸式土器Ⅰ期段階にも認められる。

## B 焼失集落

次に、該期の集落についてであるが、図-4(p.350)にあるように環濠集落及び、前項の中期後半後葉以上に焼失した住居や集落(第二期)の増加を認める。同時に、新たに展開した集落の増加が特筆できる。環濠集落としては、樽式土器文化圏に属する日影平遺跡(沼田市、図-5)や正観寺遺跡(高崎市)、赤井戸式土器文化圏である西原遺跡(柏川村、図-6)等が挙げられる。焼失した住居或いは集落としては、管見であるが、樽式土器文化圏を中心に抽出した表(p.355)からも明らかなように、前項の中期後半～後期初頭段階以上に増加率が顕著である。新たに展開した集落は、先にも若干触れたが、被災した遺跡数を超える数を検出しており、その中でも後期3期から古墳時代前期にかけてピークを迎えている。

まず、環濠・焼失・新規展開集落の三条件を具備する日影平遺跡例をみると、利根川左岸と片品川右岸に挟まれた標高383m前後の最高位段丘上に位置しており、片品川との比高は80mを測る。断面V字状に掘られた環濠は、全体として倒卵形を呈すると推測でき、長軸110m、短軸85m程である。出土土器の一部には折り返し口縁部に波状文を施すものや、2連節・3連節の簾状文、波状文区画縦線文等があり、後期3期に盛期を持つと考える。現状で環濠内に24軒の竪穴住居を検出しており、焼失住居の割合は約1/4である。この被災率は、正観寺遺跡や中高瀬観音山遺跡(図4-41)にも近似しているが、同時期占地住居が特定されることにより、より高まる可能性がある。本遺跡は、完掘でないため焼失時期を同定する資料に乏しいが、今後の調査では同時期占地住居の割り出しが重要視される。また、このことは、他の焼失住居・集落についても同様な検討の必要性を指摘している。

西原遺跡は、石田川と東神沢川に開析された赤城山南面の洪積台地先端部に位置しており、西の谷とは5m程の比高を有する。トレンチを主体とする調査で、2ヶ所に土橋を持つ、台形断面の環濠の半周と区画内に



赤井戸式土器・櫛溝土器・古式土師器三者の共伴する赤井戸式系土器期の堅穴住居5軒を確認している。環濠の底面直上は浅間山C軽石純層で埋まっている。この他に、櫛溝系土器I段階の集落である見立溜井遺跡(赤城村、図4-15)では、集落から離れた位置に、覆土の様相から集落と同時期と考えられる断面V字状の溝が途絶えた形で検出されている。

次に、第二期焼失集落であるが、櫛溝土器文化圏だけでなく、西大室遺跡群(図4-37)をはじめとする赤井戸式土器文化圏でも被災率の高まりが顕著である。その様相を以下の3観点でみていく。

#### ア. 集落の継続性

継続的集落である日高遺跡や新保遺跡・有馬遺跡等でも後期3期段階での焼失住居例が存在するが、後期3期段階に新規に展開した分郷八崎遺跡・乗附遺跡・下川田平井遺跡・水沼遺跡等で焼失集落例が顕著である。さらに、櫛溝系土器I段階期に新たに展開した荒神前遺跡(群馬町、図4-27)や見立溜井遺跡・中棚遺跡(昭和村)、赤井戸式系土器段階の西大室遺跡群でも多くの焼失例を認める。中でも、周境状遺構を付帯する3軒の堅穴住居と1棟の平地建物がセットで検出された荒神前遺跡は、C軽石降下直前で全住居が焼失しており、見立溜井遺跡同様後期集落の好資料を提供している。

#### イ. 集落の規模

全貌を把握した集落が少ないため、やや根拠に乏しいが、拠点集落である新保遺跡や有馬遺跡・有馬条里遺跡・日影平遺跡をはじめ、立地からある程度の集落の広がりや予測できる遺跡で被災しているケースが多い。

#### ウ. 集落の立地

微高地や低台地上に立地する新保遺跡や日高遺跡・正観寺遺跡等に比して30-80mの比高を有する、用水の不便な段丘崖や台地・丘陵上に立地する遺跡で被災率が高い。中高瀬観音山遺跡や分郷八崎遺跡・乗附遺跡・少林山台遺跡・下川田平井遺跡・水沼遺跡等がこれに該当する。

これらの遺跡に平面的な視点も加えると、利根川や烏川・鍋川等の比較的大きな川に面した、眼下の見晴らしのよい尾根部に立地している。つまり、河川に沿った主要道の動向が把握しやすい位置にあるという見方もできる。この他にも、未見であるが、桃瀬川・胡桃沢川によって画された吾妻川左岸河岸段丘上を遺地している中之条町の伊勢町遺跡群(図4-22)では、環濠を伴う100軒以上の後期堅穴住居が確認されており、いくつもの大型住居や焼失住居の検出と共に、群馬と長野の文化交流ルートの拠点と把握されている<sup>(4)</sup>。

以上のことから、第二期焼失集落は、集落の継続性の有無・集落の規模・集落の選地域に必ずしも指標となる厳密な規制条件及び一律性を認めることはできないが、現状では、後期3期から少なくとも櫛溝系土器I段階まで集中的かつ広範囲に存在することは確言できる。そして、焼失の成因としては、前項であげたA・B・C・D以外に、Eとして住居の構造上の欠陥による一次的焼失が検討材料となる。それは、後期3期段階の炉が壁に近づくこと、また、複数炉が存在する例が多いことを指している。

ここで近隣の動向をみると、長野県では、善光寺平南部の篠ノ井遺跡群で3連節期の環濠集落<sup>(5)</sup>が、また、佐久地域では終末段階とされる西一里塚遺跡・戸坂遺跡で環濠集落<sup>(6)</sup>が、さらに松本平南部では、上木戸遺跡で環濠集落が推測されている。他に、山梨県の平野遺跡では、25軒の終末期とされる住居が全部焼失しており、上野遺跡では終末期から古墳時代初頭の環濠と推定される溝が斜面に掘られている<sup>(7)</sup>。この傾向は、横山遺跡・八幡山遺跡で終末期とされる環濠集落が確認された新潟県<sup>(8)</sup>、大宮台地南部の木曾良遺跡・中里前原遺跡等で弥生町式期の環濠集落を、馬場北遺跡や深作東部遺跡群等で前野町式期の環濠集落を検出した埼玉県<sup>(9)</sup>にも広がっている。

これらのことも視野に入れて焼失の主因を求めると、Aは偶然性の重なりが、より高まったとする説明に

なり、Bは習俗として広まりはみられるが、未だ定着していないことになる。Cは、焼失例が広域かつ多数界内の該期集落に認められ、それらはすぐには再開されず一旦途絶するケースが多いこと、その中でも卓越した可耕地を有し、該期の先進地であり集落としての優位性をうかがうことのできる前橋台地縁辺の拠点集落や他の集落に焼失が顕著であること、農耕適地からかなり急峻な比高を有する眺望のよい位置に立地する新規展開集落に焼失が目立つこと、日影平遺跡や正観寺遺跡のように環濠・焼失両条件もそろえる集落が存在すること、該期の土器に外来系器種や外来系文様要素の参入が広域に多数指摘でき、それ以後、土器文化圏としての独自性・純正度が低下してくること、他県でも類する例が増加していること等より妥当性のある解釈といえる。

Dは、データが不足しているが、焼失例があまりに多く可能性は低い。新しい検討要素のEは、炉が壁寄りになっても棟方向であり、従前の条件との違いは少ない。また複数炉の場合は、低くなった屋根の下に炉がくるケースもみられ、焼失の危険性は高まる。しかし、単数炉や炉が内寄りに位置することの多い古墳時代初頭の住居・集落にも焼失が目立つことから説明不足を否認ない。

### C 高地性集落の出現

以上のことから、後期3期から古墳時代初頭にかけての集落の拡大・分散は、可耕地を求めての自然的条件を主因とする展開だけでなく、防衛という社会的条件を採用した展開も数多く存在したと指摘できる。その結果、高地性集落の範疇でとらえうる比高を有する眺望のよい地に、分郷八崎遺跡をはじめ各遺跡が出現したと考える。

その内容は、環濠集落・焼失集落・高地性集落の出現頻度の高まり及びその広域性や遠隔土器文化の参入に伴う自立性減少の共通性等より明らかのように、集落・土器文化圏を超えた広域現象であり、政治的動因による直接的軍事行動に対応するものであったと考える。その行動の当面の対象は、西側からの進入ルート沿いの拠点集落であり、優位性を誇る地域であったと推測でき、漸次東の地域にも及んだと解釈できる。その結果的な一現象として、有馬遺跡・有馬条里遺跡を見下ろす位置に展開する分郷八崎遺跡例のように、広い台地に選地する3期段階の中規模以上の集落が焼失し、西隣する小台地に5軒から成る小規模集落を新たに造営して、その後高地性集落としての役割の消失により集落の機能の停止期を迎え撤退に至る遺跡が出現したとする、穿った見方も可能となる。

同様に、少林山台遺跡・八幡遺跡(高崎市)・有馬遺跡・有馬条里遺跡・中村遺跡・空沢遺跡(渋川市)等の前橋台地周辺の遺跡に、直後に登場した礎床墓という葬制の新たな採用にみる小地域圏の表出、さらに礎床に類似した形態・遺物を持ちながら礎床を伴っていない石墨遺跡(沼田市)等、北毛地域との近い類縁関係の存在、及び鍋川流域等における異系統土器が伴出・混在する異相土器文化の出現等、派生的でしかも跋行性を有する小地域圏現象も内包する様相として指摘できる。

これらとは別に、遺跡相の中で特筆できるのは、焼失を体験した高地性集落である中高瀬観音山遺跡(富岡市)である。該遺跡は、大型住居を核とする集落構成だけでなく、焼土坑や掘立建物・櫓等の相関関係を検討することで構造的な集落理解が可能であると共に、同一丘陵上にある周辺諸遺跡との関係を描出することで地縁共同体の様相をも提示できる内容を具有している。

以上の現象を招来した軍事的行動は、茂木雅博氏の「茨城には高地性集落はない。」という言<sup>30</sup>、及び佐真真氏の「茨城以北には弥生の防衛村はない。」という話<sup>31</sup>が確実であるならば、該期段階は「毛」地域で収束したということになる。いずれにしても、弥生時代の終焉と新たな時代の到来に対応した後期後半から古墳時代初頭にかけての集落立地は、前述のとおり種々の様相を提示しているが、社会的成因の比重の高まりが明らかである。

## (5) おわりに

本県における弥生時代集落の立地は、農耕の形態・規模によって選地を異にするが、基本的には自然的条件の採用をベースにしている。その中でも、大きな時代の流れと共に、自然的条件を選地主要因とする波及期段階、社会的条件も若干加味されてくる中期後半から後期初頭段階、さらに社会的条件重視の出現率が高まる後期後半から古墳時代初頭段階と、大きく3段階の画期をみる事ができた。

その中で、三つめの画期において大胆な仮説として出てくる、〈軍事体制として従来に比べると必然的に整備・統制された組織の構築が、大きな動員力と共に武器の製作等諸技術の開発・発展を促し、充実した防衛施設の設置と大規模工事の実施に挑むことを可能にし、戦闘の収束によって整備された組織及び発展した諸技術が、平和への転用となって、用排水の管理に活用されたり、土木用具製作に活用されたりするなどして、不毛の平野部への展開を可能にした〉、という大課題の検証が重要となる。

また、細部においては、個々の地域に応じた農耕経営のあり方の検討とその集積からくる類型化や既存集落と新興集落の相関関係の把握に向けた検討、集落の選地・展開形態の類型化の検討、それらに立脚した社会情勢の分析、さらには戦闘状況等を傍証する資料の検討や後背補給地の追求とも絡めた軍事的行動→入植という時間的位置づけの検証等多くの追究すべき課題が残されている。以上、細かなデータの検索、論証ゆきで覚え書き的内容に終始した本稿であるが、これを起点として、今後精密な検証を軸に構築を図っていきたい。

なお、獨筆するにあたり、遅筆にもかかわらず、快く種々の資料提示・便宜をはかっていただいた群馬県埋蔵文化財事業団の坂井隆氏、多くのご教示をいただいた井上唯雄氏に心より感謝する次第である。

## 【註】

- 1 環濠区画内のはば中央に四隅土橋の方形周溝部1基のみを検出している。高崎城築造に伴い、弥生期の遺構が破壊され、検出が難しいということもあるが、夥しい数のピットが検出されている。推測原地形から、烏川左岸段丘上という切り立った「ハナ」的地形の上を選地していることから、堅穴住居以外の別の建物・遺構の存在及び日常的な生活跡でなく、特別の目的をもって設けられたエリアであるか、等について今後検討の余地を残している。
- 2 1位の折り返し口縁を横描沈線で区画し、2-3段に模したものも存在する。
- 3 小池雅典氏のご教示によると、焼失住居から出土した多量の遺物の一つとのことである。氏のご好意で管見したところ、後期3期段階の主に2連節・3連節まれに平行横線文を施す壺や2連節下波状文区画縦線文を有する壺、小型壺・小型台付壺・蓋・甕・高坏・鉢・片口・紡績車・加工木製品などが伴出している。
- 4 大木紳一郎、1993「平成4年度県下の弥生時代調査研究動向」『埋文群馬』20
- 5 千野浩、1992「善光寺平南郡（長野市域）における弥生集落研究の現状」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
- 6 小山岳夫、1992「佐久地方弥生集落の変遷」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
- 7 中山誠二、1992「山梨県の弥生集落の変遷」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
- 8 品田高志、1992「新潟県の弥生集落」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
- 9 井上尚明、1988「関東埼玉」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
- 10 平成6年5月29日亀城プラザ文化ホールで行なわれた下記講演会時の講師紹介時の言葉
- 11 佐原真講演会「貝塚のムラと米づくりのムラ」の中での話 平成6年5月29日 亀城プラザ文化ホール

※図-2, 3, 5, 6は報告書所載のものを転載加筆

## 引用・参考文献

- 群文(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 相京建史他、1992『新保田中村前遺跡Ⅱ』群埋文  
 相澤貞順・中村富夫、1973『群馬県北村分郷八崎弥生住居跡』『考古学雑誌』59-1  
 新井仁福、1993『内匠上之宿遺跡』群埋文  
 飯島克巳・若狭徹、1988『櫛式土器編年の再構成』『信濃』40-9  
 飯塚誠編、1993『少林山台遺跡』群埋文  
 五十嵐信他、1986『中村遺跡』沈川市教育委員会  
 .1980『正観寺遺跡群(Ⅱ)』高崎市教育委員会  
 .1981『正観寺遺跡群(Ⅲ)』高崎市教育委員会  
 五十嵐信・久保泰博、1986『正観寺遺跡』『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県  
 石坂茂編、1983『阿道遺跡』群埋文  
 石野博信、1985『古代火災住居の課題』『永末先生米寿記念論文集』永末先生米寿記念論文集刊行会  
 井上唯雄・柿沼恵介、1977『弥生土器・関東北部』『考古学ジャーナル』143  
 .1978『弥生土器・関東北部』『考古学ジャーナル』145

Ⅷ 特 論

- 伊藤肇編.1992『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』群理文
- 井上太.1987『小塚・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会  
.1992『柳戸原Ⅰ・柳戸原Ⅱ・西平原』富岡市教育委員会
- 内田憲治他.1985『峯岸遺跡』新里村教育委員会
- 大江正行・平野進一他.1982『日高遺跡』群理文
- 大江正行編.1989『師遺跡・鎌倉遺跡』群理文
- 大賀健他.1983『井出村東遺跡』群馬町井出村東遺跡調査会
- 大西雅広他.1985『上並榎南遺跡』群理文
- 大木神一郎他.1984『城平遺跡・諏訪遺跡』群理文  
.1992『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
- 岡本範之他.1993『戸神諏訪遺跡Ⅱ』沼田市教育委員会・群馬県企業局
- 尾崎喜左衛門他.1975『水沼遺跡』倉潤村誌別冊
- 小野和之他.1979『小八木遺跡調査報告書(Ⅰ)』高崎市教育委員会
- 柿沼恵介.1986a『荒口前原遺跡』群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県  
.1986b『倉潤東小庭遺跡』群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県  
.1986c『兼附遺跡』群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
- 柿沼恵介他.1986『分郷八崎遺跡』北橘村教育委員会
- 柿沼恵介.1990『弥生文化の伝播と展開』群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
- 柿沼幹夫.1988『埼玉県北西部地方の縄文土器』埼玉考古』23
- 加部二夫他.1989『内堀遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 神部聖語他.1979『引間遺跡』高崎市教育委員会  
.1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会
- 木村収編.1992『内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡』群理文
- 小池雅典.1988『日影平遺跡』弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題。埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会  
.1990『奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)』沼田市教育委員会
- 小島純一.1982『赤井戸式土器について』弥生終末期の土器。群馬県考古学談話会  
.1983『赤井戸式土器について』人間・遺跡・遺物—わが考古学論集—  
.1985『深津地区遺跡群』粕川村教育委員会  
.1988『堤頭遺跡』粕川村教育委員会  
.1990『西迎遺跡』粕川村教育委員会
- 小林良光編.1988『神宮寺西遺跡』渋川市教育委員会  
.1989『市内遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会
- 坂井隆他.1984『熊野堂遺跡第Ⅱ地区・用雲遺跡』群理文
- 坂口一.1989『有馬里遺跡Ⅰ』群理文
- 櫻井孝他.1981『浜尻遺跡』高崎市教育委員会
- 佐藤明人.1988『櫛式土器の様式推移と地域色』群馬の考古学』群理文  
編.1986『新保遺跡Ⅰ』群理文  
他.1988『新保遺跡Ⅱ』群理文  
編.1990『有馬遺跡Ⅱ』群理文  
.1990『弥生時代の生活環境』群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
- 藤原幹夫他.1985『西島遺跡群(Ⅱ)』高崎市教育委員会
- 下城正他.1985『飯田遺跡』群理文
- 大工原豊編.1988『注連引原Ⅱ遺跡』安中市教育委員会
- 高野学他.1979『正観寺遺跡群(Ⅰ)』高崎市教育委員会
- 郡丸肇他.1985『見立沼井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会  
編.1990『町田小沢遺跡』沼田市埋蔵文化財発掘調査団
- 富澤敏弘他.1985『中棚遺跡』昭和村教育委員会
- 中村茂編.1994『高崎城三ノ丸遺跡』高崎市教育委員会
- 堀静夫.1976『天狗原遺跡』栃木県史資料編 考古一』栃木県
- 平岡和夫他.1990『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連窪沢遺跡・八木連窪畑遺跡』山武考古学研究所
- 平野進一他.1979『日高遺跡(Ⅰ)』高崎市教育委員会  
.1982『日高遺跡』群理文  
.1990『日高遺跡の弥生水田』群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
- 藤巻幸男編.1985『荒砥前原遺跡・赤石城址』群理文
- 馬目順一.1976『伊勢林前遺跡Ⅱ地区』福島いわき市教育委員会
- 水田登他.1985『石巻遺跡』沼田市教育委員会
- 水田登・石塚正則・市隆之他.1989『門前橋詰遺跡・舩海戸遺跡・高野原遺跡』群理文
- 三宅敦久・相京達史.1982『櫛式土器の分類—種名山東南麓を中心として—』弥生終末期の土器。群馬県考古学談話会
- 宮下昌文.1989『上久屋橋遺跡』沼田市埋蔵文化財発掘調査団
- 村田喜久夫.1982『西太田遺跡』伊勢崎市・伊勢崎市教育委員会
- 山口逸弘他.1985『赤井宮前遺跡Ⅰ』群理文
- 若狭徹.1988『保渡田荒神前遺跡・保渡田里掛遺跡』群馬町教育委員会  
.1989『井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態』群馬文化』220  
.1990『群馬県における弥生土器の崩壊過程』群馬考古学手帳』1



表 後期後半～古墳時代初期の焼失住居・集落(様式土器文化圏中心)一覧

番号は図4に対応

No	遺跡名	所在地	立地	主体時期・軒数	焼失住居/検出軒数
1	鎌倉	沼田	薄根川左岸上位段丘上	後期3期	3/9
2	石墨	沼田	薄根川右岸上位段丘	後期3期古墳初頭	5/10
3	町田小沢	沼田	小沢川右岸段丘比高6m	様式系1	3/3
4	町田小沢Ⅱ	沼田	小沢川右岸段丘比高6m	後期3期	1
5	奈良田向	沼田	発知川左岸比高30m	後期3期	1/3
6	下川田平井	沼田	利根川右岸舌状台地	後期3期	6/15
7	戸神諏訪	沼田	発知川右岸台地	様式系1	5
8	戸神諏訪Ⅲ	沼田	発知川右岸台地比高23m	様式系1	5
9	上久屋橋場	沼田	片品川右岸第一段丘	後期3期	1/2
10	日影平	沼田	片品川右岸利根川左岸最高位段丘	後期3期	約2-3割
11	藪田	月夜野	利根川右岸上位河岸段丘	後期3期	1
12	大原	月夜野	赤谷川中段段丘	後期3期	1
13	高野原	川場	田沢川右岸	様式系1	1/3
14	門前橋詰	川場	桜川右岸	後期3期	2/2
15	見立溜井	赤城	滝川右岸台地比高30m	様式系1	6/10
16	糸井宮前	昭和	片品川左岸下位段丘	赤井戸式系	4/13
17	中棚	昭和	片品川左岸最高位段丘	様式系1	3/5
18	分郷八崎	北橋	利根川左岸上位河岸段丘	後期3期	7以上
19	関越道分郷八崎	北橋	利根川左岸上位河岸段丘	様式系1	3/5
20	水沼	倉渡	烏川右岸河岸段丘	後期3期	1以上
21	倉渡東小校庭	倉渡	烏川左岸低位河岸段丘	様式系1	1/2
22	伊勢町遺跡群	中之条		様式系1	
23	神宮寺西	渋川	午王川左岸微高台地	後期3期?	3/4
24	有馬桑里	渋川	榛名山東南麓末端扇状地	後期3期(2期)	6/45
25	有馬	渋川	滝沢川と午王川間台地	後期3期	3/41
26	井出村東	群馬	井野川左岸自然堤防	後期2期	4/5
27	笠神前	群馬	東谷津川・大清水川間の台地	様式系1	5/5
28	正観寺	高崎	榛名山麓傾斜地末端微高地	後期3期(2期)	約2-3割
29	日高	高崎	榛名山東南麓扇状地形微高地	後期3期	多と表記あり
30	新保田中村前	高崎	赤谷川左岸自然堤防状微高地	後期3期	2
31	新保	高崎	赤谷川左岸自然堤防状微高地	後期3期 9/32 様式系	4/24
32	桑附	高崎	碓氷川右岸舌状台地	後期3期	4/14
33	少林山台	高崎	碓氷川右岸扇形傾斜地	後期3期	3
34	雨壺	高崎	井野川左岸台地	後期2期	1
35	並榎山王裏	高崎		様式系1	1
36	荒砥前原	前橋	荒砥川・神沢川間の舌状台地	赤井戸式系	3/7
37	西大室	前橋		様式系・赤井戸式系	
38	下田中	新田	大間々扇状地端部低台地	古墳初期	8/30
39	間之山	伊勢崎		古墳初期	1
40	多比良	吉井		赤井戸式	5/5
41	中高瀬観音山(1)	富岡	鍋川右岸丘陵比高60m	後期3期	約3割

※発掘見学時のメモによるものあり。

(1) = 「発掘された鍋の谷」所収の調査遺跡一覧による

## 4 鏡川上・中流地域の弥生集落

井上 太(富岡市教育委員会)

## (1) はじめに

鏡川上・中流地域の弥生時代の遺跡の調査は、県内でも早い時期に開始された。まず昭和37年、甘楽町立第一中学校の校庭において、後期の集落遺跡である笹遺跡の発掘調査が県立博物館によって実施された。昭和40年には、鏡川流域の外縁部にあたる碓氷郡松井田町の上人見向原遺跡が、やはり県立博物館によって調査され、中期の再葬墓跡が確認されている。昭和40年代後半からは高度経済成長の社会状況の中、この地域においても開発事業に伴う緊急調査が多くなり、富岡市中高瀬遺跡・田篠塚原遺跡等が発見されている。

50年代後半に入ると、各市町村教育委員会に埋蔵文化財担当の職員が置かれ、開発事業に伴う発掘調査に対応する体制となり、弥生時代の遺跡の調査例も多くなった。富岡市では黒川小塚遺跡・七日市観音前遺跡、甘楽町では福河北遺跡、妙義町でも下高田島畑遺跡等があげられる。隣接地の安中市でも、県内初の中期初期の集落跡である注連引原Ⅱ遺跡が調査された。

上信越自動車道の建設に伴う発掘調査が開始されると、昭和62年以後平成3年までに、弥生時代の遺跡の発見・調査例が激増した。富岡市では南蛇井増光寺遺跡・中沢平賀界戸遺跡・原内出Ⅰ遺跡・上丹生千足遺跡・中高瀬観音山遺跡・下高瀬寺山遺跡・内匠日影岡地遺跡・内匠上之宿遺跡、下仁田町では下鎌田遺跡、甘楽町では天引向原遺跡・天引狐崎遺跡・白倉下原遺跡、妙義町では八木連登畑遺跡・八木連登沢遺跡・古立中村遺跡・古立東山遺跡等と、調査例が蓄積されていった。

この間、富岡市教育委員会と甘楽町教育委員会が実施した調査でも弥生時代の遺跡例は多くなった。工業団地造成に伴う富岡市ノ宮押出遺跡、ほ場整備事業に伴う上丹生市子塚・山ノ上遺跡、甘楽町では下小塚遺跡、下小塚Ⅱ遺跡、三ツ俣遺跡等が発掘調査されている。さらに平成5・6年には甘楽町南小塚遺跡、富岡市黒川東八木遺跡、宇田阿曾岡・権現堂遺跡等が調査された。

## (2) 主な集落遺跡の概要

これまでに調査された弥生時代の遺跡のうち、中期も含めて主要な集落遺跡について概要を紹介しておく。

## ① 笹遺跡

甘楽町小川から笹にかけての段丘面上に広がる遺跡である。このうちの南東部の一隅が校庭とされて、昭和36年に調査された。

弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居跡4軒が発見されている。出土遺物をみると後期の初めから終りの時期までの土器が認められ、さらに引き続き古墳時代から奈良時代のほぼ全般にわたる土器や住居跡もみられる。弥生時代後期から始まり、古墳時代以降まで長期に継続した集落跡である。さらに報告書によれば、近接地に弥生時代中期の遺跡も存在する。

## ② 福河北遺跡

甘楽町笹の笹ノ森古墳の北側に位置しており、昭和62年、住宅団地の造成に際して調査された。

後期の竪穴住居跡10軒程が検出されている。出土土器は棒式土器と赤井戸式土器系統の土器が混入しており、後期でも終末期の集落跡とみられる。

## ③ 天引狐崎遺跡

甘楽町天引の丘陵上に立地する。上信越自動車道に伴い調査された。

後期の住居跡が40軒検出されているほか、方形周溝墓4基もこの期のものとされている。

## ④ 天引向原遺跡、白倉下原遺跡

甘楽町天引・白倉の丘陵上、甘楽パークینگエリア周辺部にあたり、上信越自動車道に伴い調査された。本来一つの遺跡とみられる。中期では前半から後半にかけての土坑10基が検出された。後期は住居跡18軒で、後半から終末期にかけての時期である。

古墳時代以降も継続して集落が営まれ、前期の住居跡から小型の珠文鏡が出土している。

## ⑤ 下小塚・下小塚Ⅱ・三ツ俣・南小塚遺跡

甘楽町白倉地内の丘陵上で、上信越自動車道に隣接する場所で発見された。町営の文化会館等の施設の建設に先立って、平成2年から5年にかけて調査された。調査年度や字名で細かい呼称が付されているが本来は一つの集落である。

弥生時代の遺構は、中期では埋甕や土坑がわずかに発見されている。後期に至ると住居跡が合計で90軒以上に達し、大規模な集落となる。櫛式土器と赤井戸式系土器の混じる終末期のものが多く、全体の三分の一以上が焼失住居であるという。十王台式土器が1点出土しているほか、鉄鏃2点、銅鋼、さらに古墳時代の住居跡からの出土ではあるが、銅戈の破片も出土している。

## ⑥ 小塚遺跡

富岡市黒川の、高田川沿いの自然堤防状の微高地に位置する。富岡バイパスの建設に先立って、昭和56年に調査された。中期後半の竜見町期の環濠集落の一部が発見された。竪穴住居跡7軒のほか、炭化した榎を出土した貯蔵穴も7基検出された。遺構の分布は環濠内に散在しており、遺物からみても短期間の集落であったとみられる。

## ⑦ 南蛇井増光寺遺跡

富岡市南蛇井の中沢川右岸の平坦部に立地する。上信越自動車道に伴い調査された。中期は竜見町期の竪穴住居跡4軒、土坑・埋甕が検出され、太型蛤刃石斧・偏平片刃石斧等も出土している。

後期では竪穴住居跡181軒、方形周溝墓2基等が検出され、初頭から終末期の全体にわたる大集落であったことが判明した。遺物では赤井戸式系統の土器が多くみられ、石鏃が17点と多数出土したほか、石包丁も1点出土している。次の古墳時代前期には住居跡はみられず、集落は続かないようである。

## ⑧ 押出遺跡

富岡市一ノ宮坂井の、丹生川に沿う低地後背部の緩やかな北斜面に位置する。平成元年、県企業局の工業団地造成に先立って調査された。

後期の竪穴住居跡が5軒検出されている。後期でも中頃の時期の集落で、終末期には続かず、いったん集落は断絶しているようである。次の古墳時代前期石田川期には再び集落が形成される。竪穴住居跡の中には長辺が10m以上で、鉄鏃・鉄槍・ガラス玉・環状石斧等の遺物を出土した大型住居跡があるほか、南関東系の土器の出土もみられる。

## ⑨ 市子塚・山ノ上遺跡

富岡市上丹生中山にあり、妙義町との境界の山地から続く台地上に位置する。土地改良事業に伴い、平成元年に調査された。

検出された竪穴住居跡は2軒のみであったが、幅・深さとも2m程の環濠の一部も発見されている。時期は後期の終末期で、櫛式土器と赤井戸式系土器が混じる。環濠は大規模であるが、比較的小規模な短期的な集落跡であったとみられる。

## ⑩ 阿曾岡・権現堂遺跡

## Ⅷ 特 論

富岡市宇田の高田川と丹生川の合流地点付近に位置する。平成6年、土地改良事業に伴って調査された。

中期の竜見町期から後期の終末期まで続く集落である。その後も、古墳・奈良・平安時代の全般を通して集落が継続するとみられる。

中期の集落は平地部の権現堂にあり、環濠集落である。住居跡は4軒が検出された程度で、小集落であったとみられる。後期に入ると、検出された住居跡116軒と集落の規模が拡大し、後半には独立丘陵の阿曾岡上部にも多数の住居跡が営まれる。特に終末期には、丘陵上の東半部に密集した状況がみられ、焼失住居の数も非常に多い。しかし次の古墳時代前期には丘陵上は、40m級の前方後方墳2基、方形周溝墓1基が築造される墓域となり、集落は再び丘陵の下部に営まれている。

### ⑪ 古立東山遺跡

妙義町古立の丘陵上に立地する。上信越自動車道に伴って調査された。

中期後半の竜見町期の住居跡が10軒発見され、大型蛤刃石斧2点・石戈破片1点が出土している。石戈は同じく妙義町八木連西久保遺跡でも発見されている。

後期は前半の時期で、4軒の住居跡が検出され、磨製石鎌の工房跡とみられている。

### ⑫ 古立中村遺跡

東山遺跡の南東、同じく丘陵上に立地し、上信越自動車道に伴って調査された。

中期後半では住居跡1軒と土坑、溝跡が検出されている。後期は後半から終末期にかけての住居跡11軒、方形周溝墓1基が検出されている。

### ⑬ 八木連党畑遺跡

妙義町下八木連の丘陵上に立地する。上信越自動車道に伴って調査された。

後期の終末期の住居跡が11軒検出されている。櫛式土器とともに赤井戸式系の土器のほか土師器も混じっており、古墳時代の遺跡と考えた方が適当と思われる。同様の時期の遺跡として富岡市野上の鶴戸原Ⅰ・Ⅱ遺跡があげられる。

## (3) まとめ

これまで、ある程度内容の知られる鍋川上・中流域の弥生時代の主な遺跡について概要を記してきた。ここで主眼とするのは後期の遺跡の動向についてであるが、ここでは中期からの動向を含めてまとめておく。

当地域で弥生時代の集落遺跡がみられるのは、現在のところ中期後半の時期からである。中期前半の岩瀬山期の遺跡としては、富岡市七日市観音前遺跡があるが、集落跡は発見されていない。

中期後半の竜見町式土器の時期にいたると各所に集落が成立してくる様子がうかがえる。富岡市小塚遺跡、同南蛇井増光寺遺跡・同権現堂遺跡・同中高瀬観音山遺跡・妙義町古立東山遺跡等で、集落全体が調査された例はないが、この時期は住居が10軒程度の集落跡であったとみられる。小塚遺跡や権現堂遺跡では環濠も検出されており、弥生文化が定着する時期と考えられる。また、丘陵上に立地する例も多い。

次に、後期の櫛式土器の時期には、平地部はもちろん丘陵上にも集落の数が急激に増加する。集落の規模には明らかに大きな差異が現われ、特に大規模な集落が点々と立地する様子がうかがえる。中高瀬観音山遺跡、南蛇井増光寺遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡、下小塚・下小塚Ⅱ・三ツ俣・南小塚遺跡等で、これらの周辺には同時期に小規模な集落群も存在するようである。このような大規模集落は、中期の段階から存続している集落が多く、後期には拠点集落へと成長したと考えられる。これに対し、小規模な集落群は後期でも短期的なものが多い。また、これらの拠点集落の分布は、鍋川上中流域内の要所に一定の間隔をおいて立地

#### 4 鍋川上・中流地域の弥生集落

しており、後期には、これらを中心にしたいくつかの小地域圏が成立していたと考えられる。

特徴的な出土遺物では、鉄鍬(中高瀬観音山遺跡・押出遺跡・下小塚遺跡)、鉄槍(押出遺跡)、銅劍・銅戈(三ツ保遺跡)、ガラス玉(押出遺跡)等の出土があり、中期後半の時期にも石戈(古立東山遺跡・八木達西久保遺跡)、磨製石包丁(中高瀬観音山遺跡)、磨製石斧(南蛇井増光寺遺跡・古立東山遺跡)といったものがみられ、当地域の弥生社会の発展段階を示していると考えられる。

鍋川上中流地域の弥生時代の遺跡の調査・発見例は、この10年程の間に急激に回数が増加した。しかし、当地域の弥生時代の細かい研究はこれからという状況であり、本稿の内容は大雑把な見通しという程度である。今後、地域の土器編年を確立し、各遺跡の詳細な分析を行っていく必要がある。

紙数の都合で、参考文献・資料等の掲載は割愛させていただくが、甘楽町の遺跡については甘楽町教育委員会社会教育課文化財保護係長小安和順氏にご教示をいただいた。



鍋川上・中流地域の弥生集落

▲中期 ●後期

## 5 弥生後期大型竪穴式建物の復元

—075号遺構の復元考察—

石井榮一(東京都世田谷区教育委員会)

### (1) はじめに

本稿は、弥生時代後期と推定される大型建物跡(075号遺構)の上屋を復元考察するものである。075号遺構は、確認面より約1mほど掘り下げられた位置にこの建物跡の生活面が発見されている。生活面からは相当数の炭化した木材が検出されており、初見した限りではその多くは上屋に係わる部材であったと推定できた。発掘調査終了後、それらの一部は樹種同定が行われた。しかし、炭化材を除いては遺物が少なく、かろうじて年代の推定ができる程度であり、この遺構がどのように使用され、なぜ焼失したかなどの基本的状況を推定することはできなかった。

そこで上部構造の復元に当たっては、可能な限り炭化材の形状や樹種同定の結果などから判断された樹種の材料特性等も含めながら検討を試みた。しかし、筆者は本遺構調査にすべて立ち会う事ができなかったため、復元検討に際しては調査図及び調査担当者の所見なども参考にしたことを初めに申し添えておきたい。

### (2) 概要

さて、本遺跡は富岡市のほぼ中央、鍋川右岸の丘陵上に位置し、標高は230m程である。その後の調査なども含め、縄文時代前期から中世に至るまでの長期間に亘る遺構の確認がなされている<sup>(1)</sup>。その主体は弥生時代後期の集落跡で、規模は東西200m、南北350mにも及び、居住域の周囲を柵で囲んだり、集落内部を区画する濠まで備えていたことが判明した。遺跡内より確認された建物跡は、平坦部及び西側の急斜面地に掘立柱建物跡も確認されたが、多くは竪穴式建物遺構でその数は100棟以上にも上っている。

弥生時代の竪穴式建物跡の特徴を見ると、出入口を南側に設けている遺構が多い。当地方では、冬期には北西側から吹く風が強く、丘陵上に展開する本遺跡も風を遮ることができにくい。そのため、少しでも風を除けるように配慮するためこのような配置としたのであろう。

また弥生時代後期の遺構からは、外部に設けられた土坑とを結ぶトンネルを持つ遺構が8棟確認されている。おおよそ、トンネルは遺構の縁辺部より屋外に向かい4m程度の長さを持ち、直径も人間が腹這いになって通れる0.5m程度である。このようなトンネルがどのような意味を持つか今後の研究が待たれるが、いずれにせよ本遺跡の特殊性を物語ることになるように思われた。

次に075号遺構について見ると、横列で囲まれていたと推定されている集落内の中央北寄りに位置している。竪穴の掘り込み規模は、東西方向6.5~7m、南北方向10mあり、この時期の住居跡としては大規模な建物跡である。遺構内には主柱穴4か所、南側に出入口を構成したものとと思われる柱穴2か所、掘り込み内の周辺部には側柱穴4か所が確認されている。主柱穴間の柱間寸法は長軸(南北)方向5.4~5.3m、短軸(東西)方向では北通りは2.7m、南通りは2.2mで、南側が狭まっている。また、各柱穴の南北方向柱心通りはそれぞれ一直線上に配されているが、平行ではなく、東通りの柱心が斜めになっており、南側出入口に向かって狭まるような柱配置となっている。竪穴の掘り込みもほぼ同様である。

出入口部の柱間寸法は間口1.8m、主柱穴までは1.4mである。側柱穴は4か所のみ確認されており、柱間寸法は、ほぼ2m前後となっているが、主柱穴との柱心通りは一致しない。出入口を構成する柱間に梯子の差込み穴、また南西際には貯蔵穴が検出された。

炭化材については多数検出されているが、特に注目すべきは遺構西側に長さ約6.9mの角柱状と、南側主

柱穴間の0.81×0.51mの板状の炭化材であった。その他、棒状の炭化材が縁辺部に多数見受けられた。本遺跡中、多量の炭化材を伴って検出された遺構は他に6棟確認されているが、検出点数では075号遺構が最多であった。

以上のように、075号遺構は本遺跡中もっとも大型の建物の1つであり、また上屋に絡む炭化材が多く出土していることから、上屋の復元を検討する。

### (3) 各部の検討

#### A 柱

075号遺構の平面状況を見ると、まず主柱穴及び出入口を構成したと思われる柱穴の平面形状に特徴がある。遺構の短軸方向に長く、長軸方向に短い偏平或いは楕円形で、他の同時期の遺構を見ても規模の大小に係わりなく同様の平面形状を持つ柱穴が多い。

また柱穴断面を見ると、他の遺構では短軸方向に幅広く、長軸方向にせまい形状を持っている。残念ながら075号遺構では断面調査はされていないが、おそらく同様の柱穴形態で掘り込まれているものと思われる。

この柱穴から想像する限り、ここに立てられていた柱は柱穴の形状そのままに板状の柱が立っていたか、地上では丸または角柱で、地中に埋め込まれている部分のみが偏平に削り込まれた柱形状が推定できた。また、複数の柱を平行に並べ埋め込んだなどの形態も想定できた。

同様の柱穴を持つ遺構例としては、東京都板橋区赤塚水川神社北方遺跡<sup>(2)</sup>などが見られる。また、複数の柱を埋め込んだ遺構例としては、東京都狛江市の和泉駄倉遺跡<sup>(3)</sup>がある。この遺構は偏平の柱穴平面形式であったが、精密の結果、柱穴の底部に複数の柱痕が確認されたことから判明した。

本遺跡では、狛江市のような状況は確認されていない。075号遺構を含む弥生時代後期の住居跡は、地中部分では偏平の断面形状に加工を施された1本の柱が使われていたこと、地上部では地中部分の形を大きく変えることのない、遺構の短軸方向に長く、長軸方向に幅の狭い偏平柱を使用していたと見ることが出来る。

また、075号遺構では出入口と想定できる位置(南妻側)にも同様の柱穴が検出されているが、主柱穴と違い、長軸方向に長い柱配置としている。

次に側柱穴をみると、現在確認されている側柱穴4か所は、ほぼ円形の平面形状を持っている。このことから、主柱穴とは異なる丸柱が使用されていたと思われる。しかし、4本では上屋を構成することはできない。075号遺構と切りあう状況で検出されている074号遺構では、同様の側柱穴が周辺部から一定の間隔で確認されている。時代的にあまり差のない本遺構も同様の側柱穴が存在していたものと推定される。

#### B 上屋

本遺跡で検出された炭化材の樹種同定結果については、別に詳細な報告がなされるはずであり、本稿では建築材料として見た075号遺構の炭化材を検討することとする。

前述したが本遺構では多数の炭化材が検出されている。その多くは検出状況や個別の形状などから、この遺構を構成していた建築部材と見て良いであろう。それらを総観すると、炭化材の出土状況は遺構中央部が少なく、周辺部に多く残っている。主要構造材と推定できる炭化材3〜4点が確認できる他は、大半が形状・寸法から見て上屋の構成材である。主要構造材中、最も特徴的な炭化材は、遺構西辺部より検出された角柱状の炭化材であろう。長さ6.9m、幅0.24m、厚さ0.13mで、樹種同定の結果カヤの木であることが判明した。

次に、南側主柱穴間より板状の炭化材が検出されている。長さ0.81m、幅0.51m、厚さ0.03m程で、クリの木の端部に意図的に穿かれたと思われる穴が認められる。

また、屋根を構成する椽首の一部と思われる材らしきものが東辺中央に棟方向に向かい検出されている。

材質はトネリコ属である。その他、<sup>○○○</sup>屋中や垂木と思われる屋根下地材が相当数で、材質はクリ・ヤマザクラ・アカガシ亜属その他となり、周辺部に中央へ向かって倒れ込むように検出されている。炭化材が最も多く残存している堅穴の周縁部では、比較的長めの材も見られる。材質としてはクリ・ケンボナシ属・トネリコ属である。長い材で2 m程度のももあり、いずれも堅穴の側壁に沿って検出されている。

遺構南東隅に、わずかではあるがススキと笹類の炭化材も検出されている。

では、これらの炭化材についてもう少し検討を加えて見よう。まず角柱状の炭化材であるが、カヤの木は直幹性常緑高木で、主幹が一直線に育つこと、加工が容易である事などから、長尺の材料を必要とする場合最も適した樹木の一種である<sup>4)</sup>。火災に遭っているため、当初どの程度の長さがあったかは不明であるが、検出したとおり長さ6.9 m程度とすれば、これを用いる部分は、桁或いは棟木以外にはない。

桁は柱間に架かるため、長くても5.5 mそれ以上は不可能と思われる。とすれば棟木ということになるが、屋根の形状によっては不適切な場合がある。例えば、寄棟造りの屋根を想定すると、妻側からも約45度の勾配で屋根が登るため、棟の長さは明らかにこの材より短くなる。入母屋造りとした場合は、破風を設けるため棟木が梁・桁よりそれぞれ外に出る必要があり、少なくとも6.9 mの材料を使用することは納得できる。つまり、この炭化材から想定する限り、本遺構は入母屋造りの屋根形状を持つ建物であったと推定できる。

#### C- 屋根下地

次に、南側主柱穴間から検出された板状の炭化材について検証してみる。長さ0.91 m、幅0.81 m、厚さ0.03 mの寸法は、当時の技術から想定してかなり貴重な部材であったと思われる。火災に遭っているため、当初どの程度の寸法(むしろ長さかどの程度であったか)かは推定できないが、かなり重要な位置に用いられていたものであろう。

材質はクリが使用されているが、このような板材を探るには最も適した樹種である。クリの木の柀目は大変良く発達しており、輪切りにした材を楔などを使って縦に割くことで板材とすることができる。その他、アカガシ亜属・ヤマザクラ・トネリコ属・ケンボナシ属などは先に触れたように、大きめの断面を持つ材にあつては軸組に、小断面の材は屋根下地を構成する材であつたものであろう。

これらの材料ではトネリコ属の多くが割裂しやすく、ケンボナシ属もまた同様であり、切削・加工は容易な材料となっている<sup>4)</sup>。これらの樹種を建築材料とした場合、未熟な道具であっても加工しやすいということになる。上記の樹種は、建築材料として多数用いる必要から、近隣の雑木林などから選択し使用したものと推定できる。

では、他の焼失遺構から確認できる炭化材はどのような樹木が使用されていたのであろうか。075号遺構から検出された材以外に、ケヤキ・モモ・キハダ・コナラ・ヤマウルシ・ニレなどの樹木が確認されている。いずれも小断面の材であることから、これらもやはり同様な目的で選択し使用されていたものであろう。

いずれにしても、これらの炭化材から見る限り弥生時代には既に樹種の特性を利用し、用材として加工していたことを想定することができるのである。

#### (4) 復元検討

##### A 出入口

本遺構の平面を見ると、南妻側に向かって主柱の柱間寸法を狭めている。さらに、この柱心を延長すると、出入口を構成する2本の柱もほぼ同心上に重なっている。この時期に、柱穴を一定の軸線に沿って掘ることは、他の遺構から検討しても十分に可能である。もし、位置がずれたまま柱を立てた場合、柱上に乗る桁で相互の平行を保つには柱間が長すぎて困難である。また、堅穴の掘り込みも同様に柱心の傾きに沿って掘ら



れており、これらの点から見ても、柱心の傾きは意図的に行われたものではないかと推定できる。

なぜこのように傾ける必要があったかであるが、出入口を構成する部分は、最低限の高さを確保するために別に庇を設けたりする必要がある。その結果、屋根や構造の一部を切断したりする必要が生じる。茅葺きの建物は一屋根で葺き、屋根下地の構造も連結することにより全体で外力に耐えることができる特性がある。また、一屋根で葺くことは雨仕舞いが向上し、腐朽する部分が少なくなるなどの利点も考えられるのである。

全体を一屋根で葺くには、勾配の違う出入口部分に摺り合せを行う必要がある。そこで、摺り合せしやすいように南側を狭めた平面形式としたのではないかと推定ができる。

## B 柱

次に柱であるが、075号遺構と重なりあって上の面から検出された074号遺構を見ても、平面規模的にはほぼ同様であり、主柱穴の形状も円形ではなく偏平に近い形状で検出されている。少なくとも、両遺構の建築年代間の中で、継続して偏平の柱を使用する期間があったと見られるのである。

さて、偏平の柱を使用する目的であるが、茅葺きの民家では、中世から少なくとも近世中期頃までは主要構造柱を五平<sup>ニゴ</sup>と呼ばれる長四角の断面形状を持つ柱が使用されていた。五平と呼ばれる柱は、梁方向つまり短軸方向に長辺を向け配している。この理由としては、梁方向の水平応力を補うためとされている。長軸方向に対して、短軸方向の柱数は一般的に少なくなるため、この方向に働く水平応力に対して弱い。それを補う意味で使われたのが、この様な長四角柱となるのである。つまり少しでも転びにくくする理屈である。

一概に比較資料とはならないが、この様な竪穴式建物で側柱を含めた耐力を想定しても、長軸に比べ短軸方向は水平応力に対する耐力は少ないと思われる。それを補うためにこのような偏平の柱を使うことは、五平の柱を使用することと同様に理にかなっているといえよう。

また、掘立柱は構造力学的に見てある意味では固定端と呼ばれる構造形式に分類できる。古民家などのように玉石の上に柱を立てるのと違い、地中深く埋め込み、かつ周囲の土を突き固めているので、単純に言えば柱自体が水平方向の力に対して耐力を持っていると言うことになる。つまり、竪穴式住居の構造は掘立柱であるため、桁や梁に複雑な組手を使わずとも、ただ屋根からの垂直荷重を支えられればよいのである。075号遺構などのように、さらに短軸方向に長い断面を持つ柱材を併用することは、よりこの水平応力に耐えられることになるのである。

偏平の柱を使う理由はもう1点考えられる。桁を乗せる場合、小規模では柱頭が二股の材を選択しその上に桁を乗せるように考えられるが、大きな柱を必要とする場合には簡単にその様な形の材を入手するのは困難である。幅広の材を用いれば桁受けを加工するにも簡単で、また柱心通りにズレが生じても多少であれば調整が可能であるからである。

## C 炉

次に炉であるが、跡は2ヶ所確認されている。1ヶ所は東南の主柱穴より北東に上がった位置、もう一つは北側柱穴間ほぼ中央よりやや北に上がった位置である。炉跡はいずれも床面を掘り下げ、それぞれ内側に長手の石を横にして埋め込んだ形で検出されている。屋外に向かって煙道は設けられず、囲炉裏形式といえよう。埋め込まれた石は、焚口の形状を確保するために設置されたものようで、近世期においても竈やヘッツイには同じ機能の石や瓦などを埋め込んで使用している。周囲には、石などを埋め込み炉縁としたような痕跡は特に見られなかったが、そのような配慮があったことはある程度考えられる。

さて炉の位置であるが、いずれも屋根高が最もある主柱間をはずし、周辺部に寄っている。炉は、裸火が直接屋根に上る危険性があり、必然的に火災の発成率が高い。北側にある炉は、まだ中央部に近く上部にあ

る程度の高さが見込まれるが、東側の炉は周辺に近く、屋根面も近くなる。その様な危険な位置に炉を構築するであろうか。あえてこの様な位置に設ける理由としては、居住形態の変化もあろうが、それに対する何らかの方法が有ったの事であろう。例えば、周辺部の屋根が高くなったり、火棚の様なものが設置されたなどが考えられる。

#### D 外壁

周辺部、つまり側通りの屋根が高くなることは、住居の構造的变化がなければ考えられない。本遺跡では、側柱穴を持った遺構が何棟か確認されている。一般的にはこの側柱穴は側柱の前身と考え、今まで周境帯或いはその外側に扱首を刺し屋根を形成していたが、側柱が用いられるようになり、その上に乗る桁(側桁)に扱首を架けるようになる。つまり、屋根が地盤面から浮き上がり、外壁が出現し、内部も屋根が高くなるのである。この様な変化は、床を持つ建物への発展段階と見ることができるのであるが、本遺構から検出できた側柱穴をどのように復元するかが、上屋構造を考える上で重要な点となるのである。

側柱穴について、重要な考察を九州大学の土田充義先生がされている<sup>(5)</sup>。側柱穴が必ずしも側柱であったとは認められないとの考察である。つまり、竪穴式住居では内部に土留めを築くため杭を立てたと思われる穴が検出されることがある。この杭と側柱を混同して復元検討されることがあるが、それはおかしいとの意見である。土留めを目的とした杭が上に伸び、その上に桁を架け扱首を受けたとしても、それは側柱として明確に上屋を構成する構造材とはならないということである。

本遺構では、側柱穴の寸法などから見ると土留めとは思えぬ径をもった材料が使用されていたと推定でき、柱間もほぼ一定の間隔で検出されている。これらの条件から考えれば、土留めを兼ねていたとしても、側柱として明らかに架構の中に組込まれていたと見るのが妥当と思われる。

#### (5) 住居の復元

##### A 構造

上屋の復元に当たっては、まず構造を検討する必要がある。主柱は、既に検討したように柱穴形状から見ても偏平の断面形状を持った柱を使用していたものと思われる。このことから想定できる形は、板状か或いは原木を半載した半円形が妥当であろう。加工工程は両方ともほぼ同様であるが、板状に加工するには当然工程が増えることになる。使用された材質については、炭化材からは確認されていないが、加工や入しやすい材種となると樹種同定で多く検出されているクリなどは最も適した材料である。そこで材料はクリとし、断面積の多い原木を半載した柱とした。

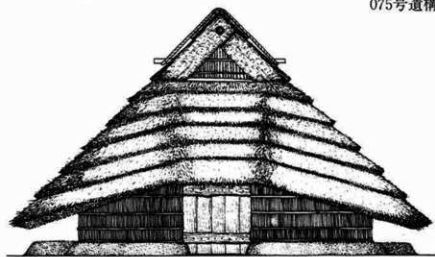
主柱に架かる桁梁は、柱の向きから想定すると柱上に長軸方向に桁をのせ、桁に直交させるように梁を架けていたものと思われる。それぞれがどのように繋がれていたかについては、現状では復元は困難である。

側柱穴については、柱穴の間隔や想定できる部材寸法などから判断して、側柱として構造的役割を持ち、かつ土留めとしての機能も併せ持つ柱が立っていたとみるべきである。また、側柱上には側桁が架けられていたと思われる。

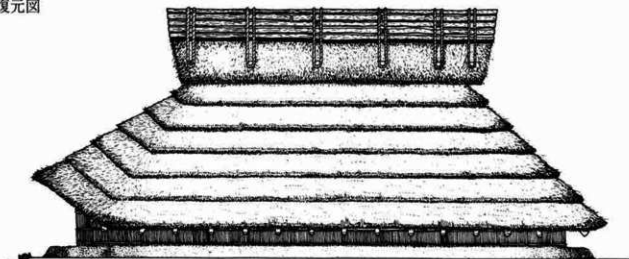
角柱状の炭化材は、寸法から棟木とした。棟木の納まりは、扱首の頂上に乗せる場合と、扱首の先端を棟木に寄り添わせる方法があるが、部材寸法から見る限りかなりの重量があったと推定できた。そのため、梁に束を立てその上に棟木を乗せ、扱首は寄り添わせる架構とした。扱首と桁・梁及び側桁の接合部は互いに欠き込み、重ねることによりズレを防ぐと共に、縄或いは捻<sup>ひねり</sup>により結び固定する方法を検討した。

内部は検出されたとおり炉を2か所とし、いずれも緑石を配置した。また、炉上部に火棚を想定した。火棚は幾つかの機能があるが、炉より発生する火の子を抑制したり、収穫物を乾燥或いは蒸<sup>ゆ</sup>し保存したり、

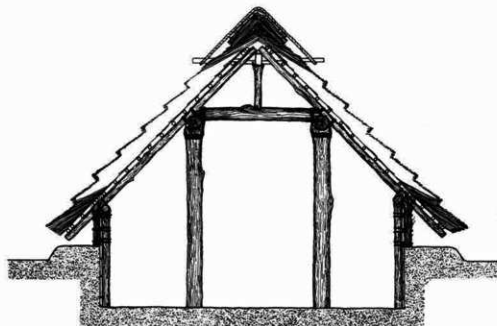
075号遺構上屋復元図



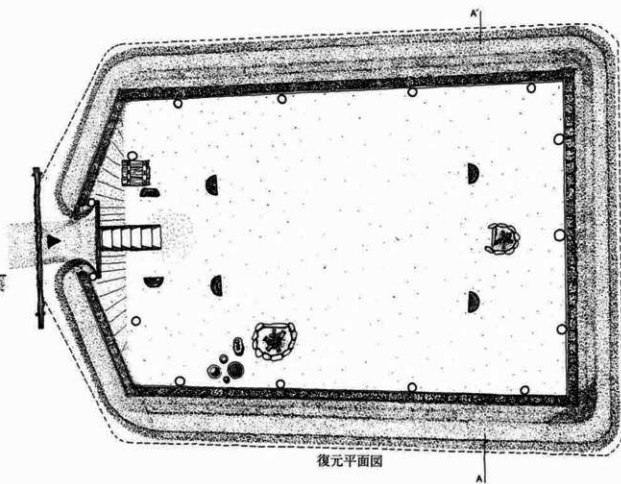
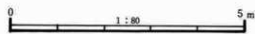
南側立面図



東側立面図

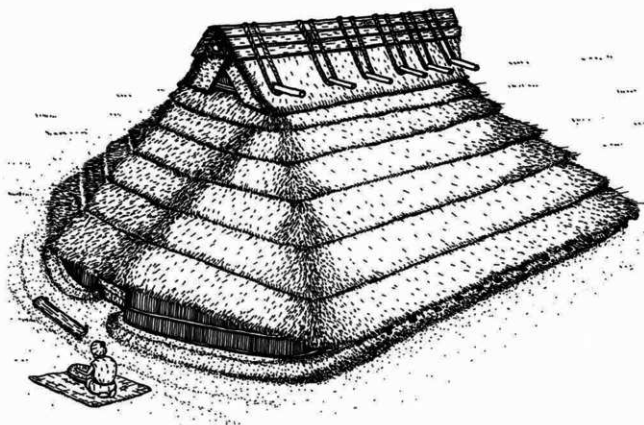


A-A' 断面図



復元平面図





暖を取る際に炉で発生した熱を反射させ、広範囲に輻射熱を送るなどの機能を持っており、生活には必要であったと推定されるからである。

出入口は、柱穴間に梯子の差し込み穴が検出されたことから、<sup>11)</sup> 榎木梯子が据えられていたものと思われる。

## B 屋根

屋根は、柱穴等の検出状況のまま南妻側を狭め、出入口の屋根勾配のみを変えた入母屋造の一屋根とした。

葺き材は、炭化材から茅が検出されていることから茅葺きであろう。また、炭化材中に笹類がもわずかに検出された。近世民家でも、棟を納める際に下地として笹を使用することがあるが、これは棟の部分が最も腐りやすく、茅に比べ腐朽しにくい笹を用いるのである。また笹は、棟を形成する際に縄で縛り込んで茅のように折れにくい特徴があることから使用されている。

本遺構でも、棟の腐朽しやすい部分は笹を使用していたのではないかと推定した。

棟の納めについては、棟木下に簀状に材を差し込み、そこに縄を掛け、棟を固定する方法とした。

また、入母屋造りであるため破風が設けられる。破風は椽首で下地を構成しその上に茅を葺くが、端部が崩れやすいため補強の必要がある。特に立地環境から想定しても風による崩壊の可能性は高いと思われる。炭化材として出土した板材は、恐らく破風の崩れを防ぐために用いられた破風板と思われる。先端部に穿かれた穴は破風部分に取り付ける際に棒状の部材を通し、棟の内部に差し込んだものであろう。破風板は2枚1組で、穿かれた穴を中心にハの字に振り分け、破風部分に固定されていたものであろう。

葺き方については、屋根を刈り込まず、葺上げた形状のままとした。当時屋根裏面を刈り込むための鎌などの加工道具の存在はなかったと思われる。また茅の芯は大変硬く、それを刈り込むには鎌のような道具のみでは困難と思われる。そこで、軒先から茅を葺上げ押杆<sup>オシコ</sup>で表面を押さえ、さらに押杆の上に茅束を重ね順次

## Ⅷ 結 論

葺上げるのみの形状とした。外壁を検討する資料は特に検出されなかったが、材質的に最も入手しやすい茅壁を想定し、また軒下には雨水の侵入を防ぐために周堤を推定した。

### (6) まとめ

一般的にこの時期の住居を検討する場合、明確な資料が出土しない限り使用された部材や架構方法の検討は担当者の経験的判断や、前例を踏襲する方法で決定されてきたようである。しかし小規模な遺構は別としても、075号遺構のような大型建物では、使用された部材の寸法や工法・仕口・材質、また架構方法などを十分に検討しなければ上屋の復元は不可能である。当然復元考察する場合、構造力学的見地からの検討を避けて通るわけには行かない。当時その様な学問的検討などありえないから、それを決定してきた根拠は経験的判断であったのであろう。

幸にも、本遺構は建築部材と思われる炭化材がかなりの点数出土したため、復元考察を検討するうえでは貴重な資料となった。しかし、上屋を復元するにあたっては相当な部分を推定せざるをえない。そこで最も問題であったのが、当時の技術レベルの想定であった。

本遺構の考察において、一つづつ問題点を検討する作業をとおして、逆に確信を持った点もあった。それは偏平の柱を使ったり、柱心を傾けたり、適切な樹種を選定し加工していることや、同様な建築工法を用いた遺構が複数確認できるなど、ある程度専門的または専門化した集団が存在し、技術的かつ生産的手段を持つて住居の普請に係わっていなければ不可能ではなかったかということである。つまり、当初問題であった技術レベルの想定であった。

いずれにせよ、これらを経験的に理解し、部材の選定を行い建物を築いたことは事実である。弥生時代後期の建築技術を知る上で、本遺構は重要な意味を持つといえよう。

なお、本稿をまとめるにあたり丑野毅・後藤定一郎・對比地秀行の各氏には貴重な御指導・御助言をいただいた。また作図には川上明子氏の協力を得た、記して感謝する次第である。

### 【註】

- 1 「新指定の文化財」『月刊文化財—平成6年6月—』文化庁
- 2 板橋区教育委員会。1989 『東京都板橋区赤塚氷川神社北方遺跡(Ⅰ)—1983—1986年度発掘調査報告(その1)—』
- 3 和泉駅倉遺跡については、東京都給江市教育委員会社会教育課對比地秀行学芸員よりご指導頂いた。
- 4 黄島恒夫・岡本省吾・林昭三。『原色木材大図鑑』保育社
- 5 土田充義・宮原種生。1977 『2、道添遺跡における住居跡の周溝について』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—福岡県八女市室岡所在遺跡群の調査—』福岡県教育委員会

## 6 火災住居について

鈴木拓男(千葉県安房郡市広城市町村圏事務組合消防本部)

### (1) はじめに

火災とは人の意図に反して発生若しくは拡大し、又は放火により発生して消火の必要ある燃焼現象であって、これを消火するために消火施設又はこれと同程度の効果あるものを利用を必要とするもの、又は人の意図に反して発生若しくは拡大した爆発現象を言う。

火災原因調査の目的は、国民の生命、身体及び財産に大きな損害を与える火災の発生した原因と火災の拡大要因及び損害状況を調査し、その結果を各種行政及び国民生活に反映させる事によって、今後の火災の発生を予防し、火災の発生件数を減少させることにある。その為「火災の発生又は延焼拡大等の原因となるべき物についての科学的、技術的な調査に重点を置き、関係のある者又は目撃者等に対する質問による調査をするものである」と定義されている。

今私に与えられた事は中高瀬観音山遺跡の火災について特定しようとするものであるが、何しろ関係者の証言が得られないこと、物的証拠の品が少なく当時の生活様式の記録もなく時間が大きく経過したことによる困難性はあるが、現地を検証し、又各種資料と文献によって中高瀬観音山遺跡の火災について考察するものである。

### (2) 中高瀬観音山遺跡の火災全体像について

中高瀬観音山遺跡で発掘された弥生後期～古墳中期の竪穴住居は全体で109軒になるが、そのうち時代は違うものの火災跡とははっきりしているものと、火災の可能性のある遺構を合わせると55軒にもなり、火災跡が無いもの54軒とほぼ同数になる。火災発生率は、他の遺跡に比べて高いと考えられる。

#### A 火災発生率の高い理由

##### ア 気象から見た火災発生

1961～90年の群馬県前橋地方気象台の観測によると、1月に北北西の季節風が多く、月平均気温-1.7℃、相対湿度55%、降水量21.1mmで、月平均日照時間は200時間であり、火災の発生拡大しやすい気象状況である。

##### イ 火の使用度からの火災発生

冬季は暖を取るための火の使用が炊事の他に多くあったと思われる。

#### B その他

ア 延焼拡大について：住居跡が密集している。

イ 地形：斜面部分が多くあり、山裾部分から火災が発生すると延焼しやすい。

### (3) 中高瀬観音山遺跡竪穴住居の火災原因についての考察

この時代の一般的に考えられる火災原因は、次のとおりと思われる。

#### A 生活の火の不始末

ア 囲炉裏の火の粉不始末

イ 囲炉裏の火の粉の飛び火

ウ 屋外においてのゴミ燃やしの延焼

075号遺構には二つの囲炉裏の存在が確認されていることにより、アは充分考えられる。又、イは燃料とする薪の樹種により木皮部が燃える時に火の粉となり、飛散することがある。ウは生活する上で出る不用物

## Ⅷ 特 論

焼却処分による延焼。

### B 自然界による出火

- ア 落雷による出火
- イ 強風による樹木と樹木の接触による摩擦熱による出火
- ウ 自然発火

アは、当地方は日本でも有数な強風と落雷が発生する地方である。イは、可能性はあるものの現代日本ではあまり例がない。ウは、乾草などの植物類が発酵作用により発熱する事が良く知られている。堆肥はこの発酵作用を利用して作られるものであるが、ときには自然発火を起こす。

### C 放火

- ア 戦争(抗争)により火矢等による出火。
- イ 病氣多発(伝染病)により焼き払いし再建するか転居。

#### (4) 木材の燃焼について

木材を空気中または酸素の中で加熱すると180℃前後で分解が始まり、可燃性ガス(CO、H<sub>2</sub>、CH<sub>4</sub>など)を生ずるようになる。このとき、口火を近づけると瞬間的に炎を生ずるが持続しない(引火)。250～290℃になると口火を近づけると持続する炎を生ずるようになる(着火)。この状態の時に口火がなければ炎は生じない状態を示す(無炎着火)。さらに高温(350～450℃)になると、木材温度が急激に上昇し自然着火するようになる(自然着火)。これらの木材の燃焼現象は、木材の熱伝導度・比重・含有成分・材の断面積・材の平滑度・含水率などにより影響されるが、加熱条件は木材の燃焼に大きな影響を与え、200℃以下でも長期加熱されると、低温着火の現象を示す事がある。

木材の耐火性について、ナナカマド・キリ・ケヤキなどは燃えにくく、耐火性を持つことが知られている。キリは耐火金庫の引き出しなどに使われているが、可燃性ガスの生成および発煙量が少なく、また火災の際に炭化部分に水をかけると特に燃焼しにくくなる。ナナカマド・ミヤマナナカマドなどは、7度焼いても炭になりにくいといわれる。カシも着炎燃焼しにくいといわれるが、その原因のひとつにカリウムなどのアルカリ金属の多いことが考えられる。クリ炭はおきが燃えにくく立ち消えしやすいが、これは火災の際におきが燃えにくく、火の粉の飛びにくいことに関連していると考えられる。

又、木材の耐火性の大体の傾向としては、比重の大きい方が着火しにくいようである。

木材の着火・着炎・比重

	着火(引火)	着炎(発火)	比重		着火(引火)	着炎(発火)	比重
クリ		460	0.68	サクラ	256-258	442	0.36
カヤ		440-460		スギ	320	485	0.38
ヤマザクラ	256-258	430-490	0.66	セン	322		0.35
トネリコ		416	0.67	クルミ	340	490	0.44
ケヤキ	264	426	0.76	ツガ	350		0.52
キハダ		250-269		ナラ	325	495	0.58
ケンボナン				ヒノキ	325	485	0.58
カシ	260	540	0.16	ブナ	365	505	0.65
ニレ	240	440	0.13	カツラ		482	
コナラ	272			アカタモ		485	
ススキ				ホオノキ	263	436	0.48
竹筴				キリ	269	485	0.23

太字は075号選撰の炭化材。この表は各種資料から抜き出したもので、試験方法又は試験場所は不統一。



## (5) 075号遺構の火災についての考察

## A 時期

075号遺構は弥生時代後期の7期に相当し、同時期の調査された14軒の中で7軒に火災跡がある。これは50%で、かなり高い出火率となる。

## B 焼きの状況

この遺構は残っている炭化材が最も多くある事と、床面に平均的に炭化材が散乱している点に特徴がある。石井榮一氏による復元図を見ると、主柱4本もかなり太い材を使用している点や、大量の屋根材が使用されているため屋内から出火し、早いうちにカヤ材の棟木が落下したと思われる。又、多量の屋根材が床に落下して蒸し焼きの状況で長い時間経過したと思われる。

それは太い柱材が完全燃焼されている事、棟木その他の木材の結束については捻<sup>ひね</sup>字により固定されていたが、捻<sup>ひね</sup>字は火により早いうちに焼き切られて棟木が落下したと推定される。又、落下した位置も西側の隅である事により、あの様な炭化材となって残ったのだろう。

075号遺構の火災で最も特徴のある事は、なぜこの遺構のみが多量の炭化材が残ったかであるが、火災が自然鎮火する寸前に雨が降ったのではないかと思われる。それは、木材と屋根材が黒くなっている点による。普通完全燃焼すれば木材は白い灰となる。又、屋根材については灰は残っても白くなり、風で吹き飛ばされて屋根材の灰はないと推定されるが、写真を見るに床全体の灰は同じ黒色である。

石守見氏の「復元住居を用いた焼失実験の成果について」によれば、実験では柱材が残っていた。だが、075号遺構では柱材が残っていない点は、焼失実験では屋根材の量が少ないために、屋根材が早く燃えつきた事と思われる。075号遺構の写真では、床面の北側に赤褐色部分が多く、焼きが激しくなったように見える。

炭化材の配置では、遺構の中央部よりやや東側にはあまり大きな炭化材がなく、完全燃焼に近い状態である。又、内壁のまわりに多く炭化材が残っている事は、壁すなわち隅は燃えにくい場所である為と思われる。

## C 出火原因

遺跡全体の出火原因の可能性は前述の通りだが、075号遺構について考察すると、一般的には遺構内の囲炉裏からの出火の可能性が大であると思われる。二カ所の囲炉裏に火が使用されていたと思われるが、どちらかの囲炉裏から出火したであろうか。炭化材の残っているクリ材の大きさから見ると、南入口付近と西側壁に残っているクリ材の炭化材が均等である。又、東側のクリ材炭化材としては最も長いものでは、北側部分が焼け細っている点等から見ても、使用された部材の大きさ・太さが同じであれば、北の囲炉裏と推定される。

外部からの出火の可能性については、次のとおりである。

建物の焼損の状況から考えると、平地に木造平屋建の建物が焼損した場合、外部から出火して消火作業が行われない時には、建物全体が出火した方向に倒れるのが原則である。ただし、この075号遺構の場合、半地下式の建物で約1m掘ってあるため、柱は屋内の方向に全部倒れると思われる。その為に、この遺構については、外部から出火したとしても、堅穴の外側には炭化材は飛散しないだろう。

又当地方は雷が多い事で有名だが、落雷データが入手できないため、可能性がある事だけを書き添える。

## 参考文献

- 『木材保存ハンドブック』昭見堂1961
- 『木材工業ハンドブック』丸善1970
- 井上嘉之.1972『木材の劣化と防止法』森北出版
- 『木材の物理学』文永堂1985
- 日本火災学会編、『火災復元(新版)』共立出版
- (財)消防科学総合センター、『自然発火による火災事例』
- 石守見.1995『復元住居を用いた焼失実験の成果について』『研究紀要』12.群博文

## Ⅷ 保存・整備

### 1 富岡住民と遺跡保存

松倉絃洋(中高瀬観音山遺跡の活用を考える会)

中高瀬観音山遺跡は、上信越自動車道の建設に際して、群馬県富岡市に発見された遺跡です。

弥生時代後期の東日本では極めて珍しい高地性集落で、「東の吉野ヶ里」と評されました。その重要性が地域住民に知らされて、保存の運動が起きたのです。それは小さな組織でしたが、大きな成果を挙げることができました。

さて、この遺跡が群馬県埋蔵文化財調査事業団に依り発見され(89年6月)、住民の知るところとなったのは、同事業団が発行した『発掘ニュース』(第1号89年7月10日)と、毎月1回行われた見学会が発端でした。

当時は、自動車道の工程全体も遅れ、文化財調査もいよいよ最終段階になっていました。道路公団も早く調査を終えて本格的な建設工事に入りたい矢先だったので、大変な時期と重なり事業団の調査員もご苦労が多かったと思います。

この見学会と『発掘ニュース』(月2回発行)が回を重ねるごとに、地元では少しづつではありますが、見学者が増えだしたようです。が、それでも反応はいま一つの感があり、その頃、保存ということは思いもありませんでした。9月頃でしたか、事業団の調査事務所から、遺跡の近くにある光厳寺の私(住職)に、この遺跡の素晴らしいところをできるだけ多くの人に覚えてもらいたいと、さらに案内がありました。

私は友人である小堀氏(市教育委員 石材業)や下山氏(新聞店)といっしょに改めて遺跡を見学し、そこで話し合いました。

この「東の吉野ヶ里」と評されるものが、この地に発見され、それが間もなく道路工事によって取り壊される、それもリミットは翌年3月ということ。この厳しい現実に対して、「何とかして見よう」という熱い思いがこみ上げて来たのです。

「先ずこの遺跡の重要性をPRすべきだ！その為には、現地を見てもらうこと、その重要性を認識してもらおうこと、それは講演会を含めたイベントが良いだろう」ということとなりました。そこで組織を造る必要があるが、時間はありませんでした。しかたなく「組織は少数精鋭で小回りのきくもので行こう」ということになり、結果、小堀・下山それに元校長の今井と坂本、横田(教員)・飯森(ユニスコ役員)・山田(印刷業)、松倉の計8名で『中高瀬観音山遺跡を学ぶ会』を結成したのです。

12月9日10日にイベント「昔にもどる日」の事業を、企画・実施することとなりました。開催まで約1か月間、資金は全くありませんでした。それが、市民や友人・知人に募金をお願いして、何と1週間で「50万円」が集まってしまいました！会場の県信用組合は、休日だが特別の好意で無料で貸して下さいました。更に、あの佐原真先生や白石太一郎先生が手弁当でかけつけて下さったことに、今更ながら、驚きと感謝と尊敬の念で胸が熱くなります。

当然マスコミも注目して下さい、会場は満員の盛況でした。これらの聴衆は地元が中心でありましたが、「今朝の新聞を見て飛んで来た」と、埼玉や東京・千葉の方もおられたのにこれまた驚きました。二日目の現地説明会は、「のろし」をあげる古来の伝達方式とオートバイによる競争を行ったりして、大勢の参加者を得たことも忘れられません。



## 2 史跡公園整備計画の概要

井上 太(富岡市教育委員会)

### (1) これまでの経過

平成2年5月、日本道路公団は、富岡市・群馬県教育委員会等による中高瀬観音山遺跡の保存要望に対し、オープンカットという当初の工事計画を変更して、トンネル化による遺跡の保存を決定した。

この前提の県教育委員会・富岡市との三者の協議においては、まず保存の根拠となる遺跡の性格や意義について明確にすること、遺跡の周辺部の広がりを確認すること、保存後の管理活用の計画を示すことなどが合意された。

県教育委員会では、同年3月、遺跡の内容や範囲についての確認調査を実施した。また富岡市では県教育委員会とも協議のうえ、保存後は史跡公園として整備活用していくことを決定した。

その後、市教育委員会は、県教育委員会・文化庁の指導のもとに、保存整備の前提として、遺跡を国指定史跡として申請することとした。このため、平成2年度・3年度の二度に亘って遺跡の範囲確認調査を実施し、平成4年には史跡指定の申請範囲を確定した。

一方、保存整備計画の策定は、平成4年、学識経験者、県・市等関係各機関代表者、地域代表者等からなる中高瀬観音山遺跡保存整備委員会を組織し、計画の基本方針となる保存整備基本構想の作成に着手した。平成5年には委員会のもとに、市の各関係行政部課等の実務担当者による幹事会を組織し、基本構想の検討を進めた。

国指定史跡への申請は、平成5年度に地権者説明会・測量調査を実施し、同6年に地権者全員の指定同意を得て、文化庁へ申請した。

同じく6年4月には、文化庁文化財保護審議会において国指定史跡の指定答申がなされ、保存整備基本構想についても4月にまとめられた。

その後は、この基本構想にもとづいて保存整備基本計画の作成を進めている。

### (2) 保存整備基本構想の概要

全体を六章に分けており、以下にその内容を記していく。

**I章** 構想の目的・位置付けについて述べる。富岡市民憲章の中には「伝統を尊び、文化の香り高いまちづくり」が掲げられており、本史跡公園を市街地南部の文化施設の拠点と位置付けた。

さらに、本遺跡の位置する丘陵上には、他にも北山茶臼山古墳・内匠城址といった重要な遺跡が立地しており、また、この丘陵上からの眺望は壮観で、風光明媚な場所でもある。このため、整備方針は、本遺跡の保存、活用を中心としつつ、さらに恵まれた歴史的・自然的環境を活かして、多くの人々の学習、憩いの場となる史跡公園の建設をめざす。

さらに、弥生時代の遺跡の保存整備例は県内でもただ一つであり、特に丘陵上の高地に立地するという特色を活かして整備していく。

**II章** 富岡市の現況について、位置・産業・文化・交通に分けて概述した。

**III章** 遺跡の概要で、これまでの調査の経過と結果についてまとめた。結論として、本遺跡は丘陵地を利用して営まれた、弥生時代後期の鍋川中流域の中心的な集落の一つであり、この地域を代表する集落遺跡であるとした。

**IV章** 整備計画についてで、まず公園の規模は、遺跡の範囲のみでなく周辺部の自然環境も取り込み、



保存整備基本構想図

## Ⅳ 保存・整備

全体で約24haの規模とした。このうち史跡の範囲は中央部の約4.7haである。

次に整備の内容については、1)史跡地内の整備、2)周辺部の公園整備、3)施設の整備、4)便益施設の設置に分けて考えた。

史跡地内の整備にあたっては、保存を第一義として、整備活用を考えている。遺構展示ゾーンでは、この遺跡の特色の一つとして、大型の焼失住居跡を調査時の状況のままに展示し、遺跡についての説明施設を設置する。遺跡整備ゾーンは主に体験学習のゾーンとし、弥生時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡をはじめ、横列や物見台等を再現し、さらに当時の墓跡である方形周溝墓も復元して、弥生時代のムラや生活の様子を視覚的にとらえられる場とし、弥生時代の生活を体験学習するための各種の行事を催す場とした。

周辺部の公園整備では、公園ゾーン(いこいの広場)として、展望台の設置、木製遊具等を配した自由広場の設置、草花や花木を四季を通じた植栽等で、来園者の休養・憩いの場とする。自然環境保全ゾーンは、できるだけ弥生時代の環境を再現するとともに、遊歩道等を設置し、自然観察等の行事による自然学習・野外観察もできる場としていく。

施設の整備では、遺跡や公園内の導入案内施設を兼ねた考古資料館を設置し、来園者が弥生時代を中心とした古代の様子を分かりやすく、しかも楽しみながら学習できるようにし、埋蔵文化財センターの併設、機能補完によって、さらに埋蔵文化財全般に対する学習・理解が図られるようにする。

便益施設としては、来園者を現代から弥生時代へタイムスリップさせ、資料館と丘陵上の遺跡をつなぐ手立てでもあるタイムトンネル、眺望を活かし公園のシンボルともなる展望台を設ける。他に遺跡と調和させた休憩施設・トイレ・説明施設等を適所に設け、駐車場は2か所に設置する。

**V章 活用・管理・運営計画で、活用計画としては、市民の憩いの場としての利用はもちろん、各種行事の企画実施のほか、市内外の関連施設や観光施設との連携等により、来園者の利便を図っていく。**

管理・運営計画では、目的に沿った十分な活動が実施できるよう、専門職員の配置、ボランティア等の一般市民の積極的参加・協力の運営組織を考えていく。

この他、中高瀬観音山遺跡の立地する丘陵上には、他にも北山茶臼山古墳・内匠城址といった重要な遺跡の存在が知られており、本史跡公園の活用にあたっては、将来のこれらの遺跡の整備・活用も合わせて考えていく。

**Ⅵ章 年次計画で、基本構想の作成から整備事業全体の完了までを10年間で計画した。**

以上が基本構想の概要であるが、平成6年度現在整備計画の作成は緒についたばかりの段階である。今後とも文化庁・県教育委員会をはじめとする関係機関の指導のもと、保存整備委員会を中心にして、基本計画・基本設計・実施設計へと具体化に向けて進めていきたい。

# 三 資 料





## IX 索引

第II章に記した検出遺構と遺物については、次頁からの索引で、それぞれ番号順に種類・時代(遺構)と種類・器形(遺物)と共に本文編・写真編の掲載頁を記した。番号・種類などからの検索に利用されたい。

なお、この索引には含めていない各遺構・遺物のデータについては、次の内容でC資料編に掲載した。また資料編内容を記録した下記のフロッピーディスクは、実費により当事業団でコピーサービスを行っている。

メディア: 2DD MS-DOSフォーマットディスク 1枚

型式: テキストファイル

(本索引と重複する項目で資料編データと差異がある場合、本索引が正しい。また資料編正誤表記述も含め、フロッピーディスク内では全て訂正してある。)

## 《資料編内容》

## 遺構一覧(ファイル名 nakaikoh.txt)

遺構番号 遺構種類 時代 時期(天明:1783=天明3年の浅間山噴火) 位置 グリッド 形態計測値(全体が知れないものは、判明値に+を付与した 単位m・m<sup>2</sup> ※はテラス部分を含めた値) 規模(堅穴の床面積 本文編p.272参照) 勾配(立地面の傾斜角度 単位度) 海拔高度(単位m) 火災状況(堅穴での痕跡 本文編p.283参照) 重複遺構番号(=:新旧関係不明?:重複の可能性) 特徴遺物 本文編頁 写真編頁 保存状況(保存の程度) その他(自然科学分析など)

## 土器一覧(ファイル名 nakadoki.txt)

遺物番号 種類(J:縄文土器 Y:弥生土器 H:土師器 S:須恵器 G:瓦質土器 T:陶磁器 JY:縄文弥生の区分が難しいもの YH:弥生土師の区分が難しいもの) 時代 出土遺構(グリッドの場合は最後にG) 層位 器形 遺存部位 胎土(SS:混入砂粒極小 S:混入砂粒小 M:混入砂粒中 L:混入砂粒大 LL:混入砂粒極大 Fe:鉄分混入 G:金色鉱物粒混入 B:黒色鉱物粒混入) 焼成(O:酸化 R:還元 N:中性 軟:軟質 硬:硬質) 色調 紋様など(波状:波状文 縞状:縞状文 コバメ:「ハケメ」) 使用痕 廃棄痕 重量 本文編頁 写真編頁

## 石斧類一覧(ファイル名 nakaseki.txt)

遺物番号 出土遺構(同前) 層位 器形 石材 重量(単位g) 法量(長さ・幅・厚さ 単位cm 推定は括弧入り) 本文編頁 写真編頁

## 黒曜石類一覧(ファイル名 nakakoku.txt)

遺物番号 出土遺構(同前) 層位 器形 石材 重量(単位g) 法量(長さ・幅・厚さ 単位cm 推定は括弧入り) 剥片一括の場合は記載なし) 製作状態 本文編頁 写真編頁 備考

## 金属器類等一覧(ファイル名 nakakin.txt)

遺物番号 種類 時代 出土遺構(同前) 層位 器形 材質 重量(単位g) 法量(長さ・幅・厚さ 単位cm) 本文編頁 写真編頁 備考

## 観音山遺物重量(ファイル名 nakajuu1.txt)

## 庚申山遺物重量(ファイル名 nakajuu2.txt)

全遺構の上層・下層・掘り方ごとに出土した全遺物の弥生土器・縄文土器・土師器・石斧類・黒曜石類などごとの重量と百分比を記し、全出土物重量に対する自然石の混入率も併せる。

遺構索引

番号	種類	時代	本文頁	写真頁	番号	種類	時代	本文頁	写真頁	番号	種類	時代	本文頁	写真頁
001	竪穴	古墳	41	61, 62	071	竪穴	弥生	130	146	145	竪穴	弥生	119	139
002	土坑	近世	52	71	072	谷?		164	191	146	土坑群	近世	63, 94	85
003	竪立	古墳	52	71	073	竪穴	弥生	81	99	147	竪穴	近世	45	65, 64
004	竪穴	弥生	51	70	074	竪穴	弥生	81	99, 100	148	土坑	弥生	155	168, 170
005	竪穴	古墳	48	67, 68	075	竪穴	弥生	81	101, 102	149	竪穴	弥生	136	150, 151
006	竪穴	弥生	47	66	076	竪穴	弥生	130	146	150	竪穴	弥生	153	166, 167
007	土坑	近世	40	60	077	竪穴	弥生	22	39	151	竪穴	弥生	119	140, 139
008	土坑	近世	40	60	078	竪穴	弥生	134	149	152	竪穴	弥生	119	139
009	竪穴	古墳	48	67	079	竪穴	弥生	134	149	153	竪穴	弥生	136	152
010	土坑	近世	48	69	080	竪穴	弥生	90	109, 111	154	竪穴	弥生	140	154
011	竪穴	弥生	52	72, 73	081	竪穴	弥生	151	164, 165	155	竪穴	弥生	141	155, 156
012	土坑	近世	40	60, 63	082	竪穴	弥生	151	164	156	竪穴	弥生	169	175
013	土坑	近世	48	69	083	竪穴	弥生	132	147, 148	157	欠番			
014	竪穴	弥生	35	55, 56	084	竪穴	弥生	132	147	158	竪穴	弥生	28	47
015	竪穴	弥生	32	51, 52	085	竪穴	弥生	132	147	159	トノネ土坑	古墳	155	168, 170
016	土坑	近世	30	49	086	竪穴	弥生	153	166	160	土坑	弥生	141	156
017	土坑	近世	52	72	087	竪穴	弥生	153	166	161	竪穴	弥生	151	155
018	竪穴?	縄文	52	72, 73	088	竪穴	弥生	23	40, 42	162	土坑	縄文	151	165
019	竪穴	弥生	41	62	089	竪穴	弥生	155	168, 169	163	トノネ土坑	弥生	151	164, 165
020	竪穴	弥生	41	61, 63	090A	横列	弥生	164, 166	176	164	竪穴	弥生	94	113, 114
021	竪穴?	弥生	48	69	090B	横列	弥生	164, 166	176	165	トノネ土坑	弥生	136	151
022	土坑	近世	52	73	091	欠番				166	竪穴?	弥生?	136	152
023	竪穴	弥生	41	63	092	竪穴	古代	78	96	167	トノネ土坑	弥生	94	113
024	竪穴	弥生?	41	63	093	竪穴	弥生	87	106, 107	168	土坑	弥生	23	43
025	竪穴	弥生?	50	70	094	竪穴	古墳	70	90	169	土坑?	弥生	15	43
026	土坑	近世	48	69	095	竪穴	古墳	100	120	170	土坑	縄文	141	156
027	土坑	近世	48	69	096	土坑	近世	166	178	171	竪穴	弥生	44	64
028	土坑	近世	47	66	097	土坑群	近世	166, 168	178	172	竪穴	弥生	145	159
029	土坑	近世	32	54	098	土坑	近世	167	179	173	土坑	不明	145	159
030	土坑	弥生	48	69	099	土坑	近世	169	180	174	竪穴	弥生	145	158
031	竪穴	弥生	32	51, 53	100	土坑	近世	169	180	175	竪穴	弥生	145	159
032	土坑	近世	41	63	101	土坑	近世	169	180	176	土坑?	弥生	160	173
033	竪穴	縄文	176	186	102	土坑	近世	169	180	177	竪穴	弥生	160	173
034	土坑	弥生	19	37	103	土坑	近世	168	177	178	竪穴	弥生	160	174
035	土坑	弥生	30	49	104	小竪	近世	168	177	179	竪穴	弥生	160	174
036A	横列	弥生	34	54	105	曲輪	中世	168	177	180	竪穴	弥生	163	174, 175
036B	横列	弥生	34	54	106	土坑	近世	167	179	181	トノネ土坑	弥生	163	174
036C	横列	弥生	34	54	107	溝	近世	63, 64	84	182	竪立	弥生	86	106
036D	横列	弥生	34	54	108	土坑群	近世	63, 64	112, 113	183	竪立	弥生	57	78
036E	横列	弥生	34	54	109	竪穴	弥生	67	88	184	竪穴	弥生	97	117
036F	横列	弥生	34	54	110	竪穴	弥生	73	92	185	竪穴	弥生	97	118
037	欠番				111	竪穴	古墳	121	136, 137	186	竪穴?	弥生?	72	92
038	欠番				112	竪穴	弥生	119	139	187	竪穴?	弥生?	70	90
039	柱穴	弥生	15	35	113	竪穴	弥生	147	160, 161	188	竪穴?	弥生?	70	84
040	土坑	近世	15	34	114	竪穴	弥生	88	108	189	土坑	弥生	68	86, 89
041	土坑	近世	15	34	115	竪穴	弥生	88	108	190	竪穴	弥生	101	122
042	竪石	縄文?	20	37	116	曲輪	中世	164, 165	176	191	土坑	近世	68	86, 89
043	土坑	縄文?	15	34	117	土坑群	近世	63, 64	85	192	土坑	不明	68	86, 89
044	土坑	近世	19	37	118	竪穴	弥生	101	121	193	不明	縄文	30	41
045	土坑	近世	15	34	119	竪穴	弥生	101	121, 122	194	竪穴	弥生	30	50
046	竪穴	弥生	55	74	120	土坑	近世	63, 97	118	195	竪穴	弥生	163	175
047	竪穴	弥生	65	86, 87	121	土坑	近世	168	179	196	竪穴	弥生	157	171
048	竪穴	弥生?	76	84, 85	122	土坑	近世	168	179	197	土坑?	弥生	99	119
049	土坑	弥生?	15	35	123	土坑	近世	168	178	198	土坑	弥生	23	40, 43
050	竪穴	弥生	55	75	124	小竪	近世	164, 168	178	199	竪穴	弥生	68	86, 89
051	竪穴	弥生	55	75	125	土坑	近世	164	176	200	竪穴	弥生	138	153, 154
052	欠番				126	土坑	弥生?	169	180	201	土坑	弥生?	99	119
053	竪穴	縄文	20	38	127	土坑	近世	166	178	202	土坑	弥生	63, 97	118
054	土坑	近世	15	36	128	土坑	近世	63	84	203	竪穴	弥生	75	93
055	竪穴	弥生	55	74	129	土坑	近世	164, 168	178	204	竪穴	弥生	75	93
056	竪穴	縄文	60	81	130	道	近世	63, 64	84, 85	205	竪穴	古墳	112	129, 131
057	土坑	縄文?	60	84	131	道	近世	63	85	206	風倒木	古墳	107	126
058	土坑	近世	60	84	132	土坑	近世	164, 166	176	207	竪穴	弥生	112	134
059	トノネ土坑	弥生	90	109	133	土坑	近世	168	179	208	竪穴	弥生	107	126
060	土坑	弥生	23	36	134	トノネ土坑	近世	101	121, 122	209	竪穴	弥生	110	128
061	竪穴	古代	58	77	135	竪穴	古墳	150	163	210	竪穴	弥生	110	129
062	竪穴	弥生	58	77	136	竪穴	古代	144	157, 158	211	土坑	古代	138	153
063	竪穴	弥生	58	79, 80	137	トノネ土坑	弥生	73	92, 93	212	土坑	不明	76	94
064	欠番				138	建物?	近世	168	177	213	竪穴	弥生	125	141
065	土坑	弥生?	15	36	139	竪穴	古墳	106	125	214	竪穴	弥生	125	141, 142
066	竪穴	弥生	117	135	140	竪穴	弥生	106	125	215	竪立	弥生	125	141, 142
067	竪穴	弥生	79	97	141	竪穴	古墳	104	123, 124	216	竪穴	古墳	159	172
068	竪穴	弥生	79	97, 98	142	竪穴	弥生	97	117	217	土坑	近世	170	187
069	竪穴	古墳	127	143	143	土坑	近世	63, 99	119	218	竪穴	弥生	143	157
070	竪穴	弥生	127	145	144	土坑	弥生	119	139	219	土坑	近世	170	188

## 遺物索引土器類

番号	種類	時代	本文頁	写真頁	番号	種類	時代	本文頁	写真頁	番号	種類	時代	本文頁	写真頁
220	土坑	近世	170	188	2538	掘立	弥生	18	29,30	K020	欠香			
221	土坑	近世	170	187	2539	掘立	弥生	18	29,30	K021	欠香			
222	土坑	縄文	170, 172	183	2530	掘立	弥生	18	29,30	K022	溝	不明	210	215
223	土坑	近世	170	187	253E	掘立	弥生	18	29,30	K023	土坑	縄文	210	216
224	土坑	近世	170	187	253F	掘立	弥生	18	29	K101	石組	近世	215	221
225	土坑	近世	170	183	253G	掘立	弥生	18	なし	K101	竪穴	弥生	200	207
226	土坑	近世	170	183	253H	掘立	弥生	18	31	K102	土坑	古代	212	218
227	土坑	近世	170	185	253I	掘立	弥生	15	31	K103	竪穴	弥生	201	208
228	土坑	縄文	170	186	253J	掘立	弥生	15	なし	K104	竪穴	弥生	211	212, 216
229	土坑	縄文	170, 172	183	253K	掘立	弥生	15	なし	K105	竪穴	古代	207	212, 214
230	竪穴	縄文	170, 172	181	253L	掘立	弥生	15	32	K106	竪穴	古代	207	213, 214
231	土坑	近世	170	185	253M	掘立	弥生	15	なし	K107	竪穴	古代	207	213, 214
232	土坑	縄文	170	186	253N	掘立	弥生	15	33	K108	竪穴	弥生	204	210
233	竪穴	縄文	170, 174	184	253O	掘立	弥生	15	32	K109	竪穴	弥生	196	203
234	土坑	縄文	170	185	253P	掘立	弥生	15	33	K110	竪穴	弥生	210	215
235	土坑	縄文	170, 174	184	K001	土坑	不明	216	222	K111	土坑	縄文	204	210
236	土坑	縄文	170, 174	184	K002	土坑	縄文	207	213	K112	竪穴	弥生	199	206
237	土坑	近世	170	188	K003	土坑	弥生	196	202	K113	竪穴	古代	212	219, 220
238	土坑	縄文	170	187	K004	土坑	縄文	198	204	K114	竪穴	弥生	206	211
239	柱穴	弥生	135	149	K005	土坑	古代	196	203	K115	竪穴	古代	212	219, 220
240	土坑	縄文?	22	39	K006	土坑	不明	201	207	K116	竪穴	弥生?	200	207
241	柱穴	不明?	170	188	K007	埋裏	縄文	198	204	K001	溝	不明	217	222
242	土坑	弥生	153, 155	なし	K008	土坑	不明	200	なし	K002	溝	不明	196	203
243	土坑	縄文	170	185	K009	欠香				K003	溝	不明	204	210
244	土坑	縄文	170	182	K010	土坑	縄文	210	216	KP01	柱穴	古墳	216	221
245	土坑	縄文	170, 172	182	K011	土坑	不明	198	205	KP02	柱穴	不明	216	221
246	土坑	縄文	170	185	K012	土坑	縄文?	198	205	KP03	柱穴	不明	216	221
247	土坑	縄文	81	106	K013	土坑	古代	199	206	KP04	柱穴	不明	216	221
248	竪穴	縄文	94	115	K014	土坑	縄文	209	211	KT01	建物	古代	212	217
249	土坑	縄文	94	115	K015	土坑	不明	195	なし	KT02	建物	古代	212	218, 219
250	竪穴	古墳	94	116	K016	土坑	不明	202	なし	KT03	斜面石組	古代	202	208, 209
251	欠香				K017	土坑	不明	202	なし	KT04	斜面石組	古代	195	202
252	土坑	縄文	94	116	K018	土坑	不明	204	208	K001	埋裏	縄文	198	205
253A	掘立	弥生	15	29	K019	土坑	不明	199	206	K002	埋裏	縄文	198	205

## 遺物索引土器類

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0001	H	環	42	62	0036	Y	要	51	70	0071	Y	高坏	36	55
0002	H	環	42	62	0037	Y	要	51	70	0072	Y	鉢	36	55
0003	H	環	42	62	0038	Y	要	51	70	0073	Y	鉢	38	58
0004	H	鉢	42	62	0039	Y	要	51	70	0074	Y	小型短頸壺	36	55
0005	Y	高坏	42	61	0040	H	粘土塊	49	68	0075	Y	要	38	58
0006	Y	壺	42	61	0041	Y	小型鉢	49	68	0076	Y	要	38	58
0007	Y	台付壺	42	61	0042	H	壺	49	68	0077	Y	要	36	55
0008	Y	壺	42	61	0043	H	小型壺	49	68	0078	Y	要	36	55
0009	Y	無頸壺	42	61	0044	H	器台	49	68	0079	Y	要	38	58
0010	J	鉢	42	61	0045	H	要	49	68	0080	Y	壺	38	58
0011	J	浅鉢	42	61	0046	H	台付壺	49	68	0081	Y	要	38	58
0012	J	鉢	42	61	0047	欠香		49	68	0082	Y	要	36	55
0013	J	鉢	42	61	0048	H	台付壺	49	68	0083	Y	要	38	58
0014	J	鉢	42	61	0049	H	高坏	49	68	0084	Y	要	38	58
0015	J	深鉢	42	62	0050	Y	ミニチュア	49	68	0085	Y	要	36	55
0016	H	環	53	72	0051	H	粘土塊	49	68	0086	Y	要	36	55
0017	H	環	53	72	0052	Y	壺?	49	68	0087	Y	要	38	58
0018	H	環	54	72	0053	Y	紡輪車	49	68	0088	Y	要	38	59
0019	H	環	53	72	0054	Y	要	47	66	0089	Y	要	36	55
0020	H	環	53	72	0055	Y	要	47	66	0090	Y	要	36	55
0021	H	環	53	72	0056	Y	高坏	47	66	0091	Y	短頸壺	38	59
0022	H	高坏	53	72	0057	Y	要	47	66	0092	Y	壺	36	55
0023	Y	壺	51	70	0058	J	深鉢	47	66	0093	Y	大型壺	39	58
0024	H	壺	53	72	0059	Y	棒状不明	47	66	0094	Y	壺	36	55
0025	H	壺	53	72	0060	H	長壺	49	67	0095	Y	壺	36	56
0026	J	浅鉢	53	71	0061	Y	有孔鉢	54	73	0096	Y	壺	36	56
0027	H	壺	54	72	0062	Y	有孔鉢	40	60	0097	Y	壺	38	58
0028	H	壺	54	72	0063	Y	鉢	38	58	0098	Y	壺	39	59
0029	Y	壺	53	71	0064	Y	ミニチュア	38	58	0099	Y	大型壺	39	59
0030	J	深鉢	53	71	0065	Y	高坏	38	58	0100	Y	大型壺	38	59
0031	J	鉢	53	71	0066	H	高坏	36	56	0101	H	大壺	37	56
0032	J	鉢	53	71	0067	H	台付壺	36	56	0102	Y	壺	36	56
0033	H	高坏	53	72	0068	Y	有孔鉢	36	55	0103	Y	壺	36	56
0034	Y	壺	53	71	0069	Y	台付壺	38	58	0104	Y	壺	36	56
0035	H	長壺	53	72	0070	Y	蓋	38	58	0105	Y	壺	36	56

J 縄文土器 Y 縄文-弥生土器 Y 弥生土器 Y H 弥生-土師器 H 土師器 S 須恵器 T 陶磁器 G 瓦質土器

Ⅹ 索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0106	Y	壺	36	56	0182	J	鉢	33	54	0258	J	深鉢	20	38
0107	Y	壺	36	56	0183	J	鉢	176	186	0259	J	鉢	20	38
0108	Y	壺	36	55	0184	J	鉢	176	186	0260	J	鉢	57	75
0109	Y	壺	36	56	0185	J	深鉢	19	37	0261	J	鉢	20	38
0110	Y	壺	36	56	0186	Y	壺	31	49	0262	J	深鉢	20	38
0111	Y	壺	36	56	0187	Y	欠香			0263	J	鉢	20	38
0112	Y	壺	38	58	0188	Y	壺	17	31	0264	J	深鉢	21	39
0113	J	鉢	38	58	0189	J	鉢	17	31	0265	J	深鉢	21	39
0114	J	鉢	38	58	0190	J	鉢	17	31	0266	J	鉢	57	75
0115	J	鉢	38	58	0191	Y	壺	17	35	0267	Y	壺	62	84
0116	Y	小型壺	36	56	0192	Y	無蓋壺	17	35	0268	J	深鉢	62	84
0117	Y	小瓶	36	56	0193	Y	無蓋壺	17	35	0269	Y	壺	91	112
0118	Y	小瓶	36	56	0194	Y	壺	17	35	0270	Y	壺	91	112
0119	Y	紡錘車	36	56	0195	Y	壺	17	35	0271	Y	小型鉢	191	190
0120	Y	紡錘車	36	56	0196	Y	壺	17	35	0272	Y	欠香		
0121	Y	高坏	33	52	0197	Y	壺	17	34	0273	Y	小型鉢	118	135
0122	Y	蓋	33	52	0198	Y	壺	56	75	0274	Y	壺	118	135
0123	Y	蓋	33	53	0199	Y	高坏	56	74	0275	Y	壺	118	135
0124	Y	壺	33	53	0200	Y	壺	56	74	0276	J	鉢	118	135
0125	Y	壺	33	52	0201	Y	高坏	56	74	0277	Y	鉢	118	135
0126	Y	壺	33	51	0202	Y	壺	56	75	0278	Y	壺	118	135
0127	J	鉢	33	51	0203	Y	壺	56	74	0279	Y	小型壺	79	97
0128	J	壺	33	52	0204	Y	壺	56	74	0280	Y	壺	79	97
0129	H	壺	33	52	0205	Y	壺	56	74	0281	Y	壺	79	97
0130	Y	壺	33	52	0206	Y	壺	56	74	0282	Y	高坏	80	98
0131	Y	壺	33	51	0207	Y	壺	56	74	0283	Y	高坏	80	98
0132	Y	壺	33	52	0208	Y	壺	56	74	0284	Y	壺	80	98
0133	Y	壺	33	53	0209	Y	壺	56	75	0285	Y	鉢	80	98
0134	Y	壺	33	52	0210	Y	壺	56	74	0286	Y	壺	80	98
0135	H	壺	33	52	0211	Y	壺	56	74	0287	Y	壺	80	98
0136	Y	壺	33	51	0212	Y	壺	56	74	0288	H	壺	80	98
0137	Y	壺	33	52	0213	Y	欠香			0289	Y	有孔鉢	80	98
0138	J	鉢	33	51	0214	Y	壺	65	86	0290	Y	壺	80	98
0139	J	鉢	33	51	0215	Y	壺	65	86	0291	Y	壺	80	97
0140	Y	壺	33	52	0216	Y	壺	66	87	0292	J	鉢	80	97
0141	J	壺	33	51	0217	H	壺	65	86	0293	H	壺	128	144
0142	Y	壺	33	52	0218	Y	壺	66	87	0294	H	鉢	128	144
0143	J	壺	33	51	0219	J	壺	66	87	0295	H	壺	128	144
0144	J	壺	33	51	0220	J	壺	66	87	0296	H	壺	128	144
0145	J	壺	33	51	0221	J	壺	66	87	0297	H	壺	128	144
0146	J	壺	33	51	0222	Y	壺	66	87	0298	H	壺	128	144
0147	Y	壺	33	52	0223	Y	壺	77	94	0299	H	壺	128	144
0148	J	壺	33	51	0224	Y	壺	77	94	0300	H	壺	128	144
0149	J	壺	33	51	0225	Y	壺	77	94	0301	H	壺	127	143
0150	J	壺	33	51	0226	Y	壺	77	94	0302	H	壺	128	144
0151	J	壺	33	53	0227	Y	壺	77	94	0303	H	壺	128	144
0152	Y	壺	31	49	0228	Y	壺	77	94	0304	H	壺	128	144
0153	T	袋物	31	49	0229	Y	壺	77	95	0305	H	壺	128	144
0154	Y	壺	53	72	0230	J	鉢	77	94	0306	H	壺	128	144
0155	Y	壺	53	72	0231	Y	紡錘車	77	95	0307	H	壺	128	144
0156	J	壺	53	72	0232	Y	紡錘車	77	95	0308	H	壺	128	144
0157	J	壺	53	72	0233	Y	有孔鉢	77	94	0309	H	壺	128	144
0158	J	壺	53	73	0234	Y	壺	77	95	0310	H	壺	128	144
0159	J	壺	53	73	0235	J	壺	77	35	0311	H	壺	128	144
0160	J	壺	54	73	0236	Y	壺	56	76	0312	H	壺	128	144
0161	J	深鉢	54	73	0237	Y	壺	56	76	0313	H	壺	128	144
0162	Y	高坏	42	62	0238	J	深鉢	56	75	0314	H	壺	128	144
0163	Y	高坏	42	62	0239	J	深鉢	56	75	0315	H	壺	128	144
0164	Y	壺	42	62	0240	J	深鉢	56	75	0316	H	壺	127	143
0165	Y	壺	42	62	0241	Y	紡錘車	56	76	0317	H	壺	127	143
0166	Y	壺	42	62	0242	Y	紡錘車	56	76	0318	H	鉄弁型土製品	128	143
0167	Y	壺	42	63	0243	Y	壺	56	76	0319	Y	ミニチュア	129	145
0168	Y	壺	42	63	0244	Y	壺	56	76	0320	Y	壺	129	145
0169	Y	壺	49	69	0245	Y	壺	57	76	0321	Y	壺	129	145
0170	Y	壺	42	63	0246	Y	壺	57	76	0322	Y	壺	129	145
0171	Y	壺	50	70	0247	Y	壺	57	76	0323	Y	壺	131	146
0172	Y	壺	50	70	0248	Y	壺	57	76	0324	Y	ミニチュア	131	146
0173	J	壺	50	70	0249	Y	高坏	57	76	0325	Y	壺	130	146
0174	Y	壺	49	69	0250	J	鉢	57	76	0326	Y	壺	131	146
0175	Y	壺	49	69	0251	Y	壺	17	33	0327	Y	大型壺	131	146
0176	Y	壺	49	69	0252	Y	壺	17	33	0328	Y	無蓋壺	24	40
0177	Y	壺	49	69	0253	Y	壺	17	33	0329	Y	壺	131	146
0178	Y	高坏	33	54	0254	Y	壺	17	33	0330	Y	壺	130	146
0179	Y	小型高坏	33	54	0255	J	鉢	17	33	0331	J	深鉢	131	146
0180	Y	壺	33	54	0256	J	鉢	20	38	0332	Y	壺	130	146
0181	J	鉢	33	54	0257	J	鉢	20	38	0333	Y	壺	84	100

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	
0334	Y	小型鉢	84	100	0410	Y	台付甕	92	111	0486	Y	小壺	24	40	
0335	Y	高坏	84	99	0411	Y	台付甕	91	110	0487	Y	高坏	24	41	
0336	Y	甕	82	100	0412	Y	甕	92	111	0488	H	高坏	27	42	
0337	Y	高坏	82	100	0413	Y	小型甕	92	111	0489	H	高坏	27	42	
0338	Y	甕	84	100	0414	Y	甕	92	111	0490	H	高坏	24	41	
0339	Y	甕	82	100	0415	Y	甕	92	111	0491	Y	小型甕	27	42	
0340	Y	甕	82	100	0416	Y	小型甕	92	111	0492	Y	台付甕	27	42	
0341	Y	片口	84	100	0417	Y	甕	92	111	0493	Y	甕	27	42	
0342	Y	甕	84	100	0418	Y	甕	92	111	0494	Y	大壺	27	42	
0343	Y	甕	82	100	0419	Y	甕	91	110	0495	Y	大壺	27	42	
0344	Y	甕	84	99	0420	Y	大型鉢	92	111	0496	Y	大壺	24	40	
0345	Y	甕	82	100	0421	Y	甕	91	110	0497	H	壺	24	41	
0346	Y	壺	82	100	0422	Y	壺	91	110	0498	H	壺	24	41	
0347	Y	壺	82	100	0423	Y	壺	92	111	0499	H	壺	24	41	
0348	Y	J	82	100	0424	J	鉢	91	110	0500	Y	壺	24	40	
0349	Y	甕	84	99	0425	Y	甕	91	110	0501	Y	小型鉢	24	40	
0350	T	碗	84	99	0426	Y	甕	91	110	0502	Y	壺	24	40	
0351	H	台付甕	83	103	0427	Y	甕	92	111	0503	Y	壺	24	40	
0352	H	小型壺	83	103	0428	Y	甕	92	111	0504	Y	壺	24	40	
0353	H	小型壺	83	103	0429	J	鉢	92	111	0505	Y	壺	24	40	
0354	H	鉢	83	103	0430	Y	壺	92	111	0506	Y	壺	24	40	
0355	H	小型壺	83	103	0431	H	Y	壺	92	111	0507	Y	壺	24	40
0356	H	高坏	83	103	0432	Y	紡績車	91	110	0508	Y	壺	24	40	
0357	H	高坏	83	103	0433	J	注口	91	110	0509	Y	壺	24	40	
0358	H	高坏	83	103	0434	Y	壺	91	110	0510	Y	壺	24	40	
0359	H	高坏	83	103	0435	Y	壺	92	111	0511	Y	壺	24	40	
0360	H	甕	83	103	0436	Y	小型鉢	152	165	0512	Y	壺	24	40	
0361	Y	小型鉢	85	105	0437	Y	高坏	152	165	0513	Y	壺	24	40	
0362	Y	小型甕	82	103	0438	Y	高坏	152	165	0514	Y	壺	24	40	
0363	Y	小型甕	85	105	0439	Y	甕	152	165	0515	Y	壺	24	40	
0364	Y	台付甕	85	105	0440	Y	小型甕	152	164	0516	J	壺	24	40	
0365	H	有孔鉢	83	103	0441	Y	短頸壺	152	165	0517	J	鉢	24	40	
0366	Y	有孔鉢	85	105	0442	Y	小型甕	152	164	0518	J	壺	24	40	
0367	Y	有孔鉢	85	105	0443	Y	壺	152	164	0519	H	高坏	24	41	
0368	Y	有孔鉢	85	105	0444	Y	小皿	152	165	0520	Y	粘土塊	24	40	
0369	J	鉢	82	103	0445	Y	片口	0521	164	0521	J	壺	156	169	
0370	Y	甕	85	105	0446	Y	小壺	0522	164	0522	J	小型台付鉢	156	169	
0371	Y	壺	85	105	0447	Y	ニチュウ	152	164	0523	Y	小型台付鉢	156	169	
0372	H	Y	82	103	0448	J	鉢	152	164	0524	Y	小壺	156	169	
0373	Y	壺	85	105	0449	Y	甕	152	164	0525	Y	小型鉢	156	169	
0374	Y	壺	82	103	0450	Y	紡績車	152	164	0526	Y	小型甕	156	169	
0375	H	壺	83	103	0451	Y	高坏	133	148	0527	Y	小型甕	156	169	
0376	Y	壺	85	105	0452	Y	蓋	133	148	0528	Y	台付甕	156	169	
0377	J	Y	82	103	0453	Y	小型甕	133	148	0529	Y	壺	156	169	
0378	J	Y	82	103	0454	Y	台付甕	133	148	0530	Y	壺	156	169	
0379	J	Y	82	103	0455	Y	台付甕	133	148	0531	Y	壺	156	169	
0380	J	深鉢	85	105	0456	Y	台付甕	133	148	0532	Y	壺	156	169	
0381	J	深鉢	82	103	0457	Y	甕	133	148	0533	H	壺	156	169	
0382	J	Y	82	103	0458	Y	台付甕	133	148	0534	Y	小型甕	156	169	
0383	J	Y	82	103	0459	Y	甕	133	148	0535	J	鉢	156	169	
0384	J	深鉢	82	103	0460	Y	甕	133	148	0536	J	鉢	156	169	
0385	J	深鉢	82	103	0461	Y	壺	133	148	0537	J	鉢	156	169	
0386	J	浅鉢	82	103	0462	Y	小型鉢	133	148	0538	H	不明	24	41	
0387	J	土師	82	103	0463	Y	甕	133	148	0539	H	壺	156	169	
0388	J	把手型飾り	85	105	0464	J	鉢	133	148	0540	Y	壺	61	81	
0389	J	把手型飾り	85	105	0465	Y	H	壺	133	148	0541	Y	壺	61	81
0390	Y	高坏	131	146	0466	Y	甕	133	147	0542	Y	小型甕	61	81	
0391	Y	台付甕	130	146	0467	Y	甕	133	147	0543	J	深鉢	61	81	
0392	H	甕	130	146	0468	H	甕	133	147	0544	Y	甕?	61	81	
0393	Y	有孔鉢	22	39	0469	H	鉢	133	147	0545	J	鉢	62	83	
0394	Y	小型甕	22	39	0470	Y	小型甕	133	147	0546	J	鉢	62	83	
0395	Y	甕	22	39	0471	欠	香	133	147	0547	J	鉢	62	83	
0396	Y	壺	135	149	0472	Y	甕	133	147	0548	欠	香	61	81	
0397	Y	甕	135	149	0473	Y	高坏	133	147	0549	Y	壺	61	81	
0398	Y	甕	135	149	0474	Y	甕	133	147	0550	Y	壺	61	81	
0399	Y	小型鉢	135	150	0475	Y	鉢	133	147	0551	J	鉢	61	81	
0400	Y	高坏	135	149	0476	Y	甕	133	147	0552	J	鉢	61	81	
0401	Y	壺	135	150	0477	Y	甕	133	147	0553	J	鉢	62	83	
0402	J	鉢	135	149	0478	Y	小壺	154	166	0554	J	鉢	62	83	
0403	Y	高坏	135	149	0479	Y	小型台付鉢	154	166	0555	J	鉢	61	81	
0404	J	把手	135	149	0480	Y	壺	154	166	0556	J	鉢	61	81	
0405	Y	小型甕	91	110	0481	Y	壺	154	166	0557	J	鉢	61	81	
0406	Y	小型鉢	92	111	0482	Y	長方形板	154	166	0558	J	鉢	61	81	
0407	Y	小型鉢	92	111	0483	Y	J	壺	154	166	0559	J	鉢	61	81
0408	Y	小型鉢	92	111	0484	Y	壺	154	166	0560	J	鉢	61	81	
0409	Y	高坏	92	111	0485	Y	壺	154	166	0561	J	鉢	61	81	

## IX 索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0562	J	鉢	61	81	0639	Y	壺	71	91	0716	H	高坏	123	138
0563	J	鉢	61	81	0640	Y	大型壺	71	91	0717	H	高坏	122	136
0564	J	鉢	61	81	0641	Y	大壺	71	91	0718	H	高坏	122	136
0565	J	鉢	61	81	0642	Y	大壺	69	90	0719	H	高坏	123	138
0566	J	鉢	61	81	0643	Y	鉢	71	91	0720	H	高坏	123	138
0567	J	鉢	62	83	0644	J	鉢	69	90	0721	H	高坏	123	138
0568	J	鉢	62	83	0645	J	鉢	71	91	0722	H	高坏	122	136
0569	S	鉢	59	78	0646	J	浅鉢	71	91	0723	H	高坏	122	136
0570	H	坏	59	78	0647	J	鉢	69	90	0724	H	高坏	122	136
0571	H	坏	59	78	0648	J	鉢	71	91	0725	H	高坏	122	136
0572	Y	有孔鉢	59	78	0649	Y	鉢	69	90	0726	H	高坏	124	138
0573	Y	有孔鉢	59	78	0650	J	鉢	69	90	0727	H	高坏	124	138
0574	H	高坏	58	77	0651	Y	壺	69	90	0728	H	高坏	124	138
0575	Y	高坏	58	77	0652	Y	壺	71	91	0729	H	高坏	124	137
0576	Y	高坏	58	77	0653	H	凹盤	69	90	0730	H	高坏	124	137
0577	Y	高坏	58	77	0654	J	鉢	71	91	0731	Y	高坏	122	136
0578	Y	高坏	58	77	0655	Y	鉢	69	90	0732	H	高坏	122	137
0579	Y	高坏	58	77	0656	Y	小型鉢	69	90	0733	Y	高坏	124	138
0580	Y	高坏	58	77	0657	Y	ミニチュア	71	91	0734	Y	高坏	122	136
0581	Y	高坏	58	77	0658	H	ミニチュア	100	120	0735	H	高坏	122	136
0582	Y	高坏	58	77	0659	H	小型壺	100	120	0736	Y	高坏	120	139
0583	Y	高坏	58	77	0660	H	高坏	100	120	0737	Y	高坏	148	161
0584	Y	高坏	58	77	0661	H	高坏	100	120	0738	Y	高坏	148	160
0585	J	鉢	58	77	0662	H	高坏	100	120	0739	Y	高坏	148	161
0586	J	鉢	58	77	0663	H	鉢	100	120	0740	Y	高坏	148	161
0587	J	鉢	58	77	0664	H	鉢	100	120	0741	Y	高坏	148	161
0588	J	鉢	59	78	0665	H	鉢	100	120	0742	Y	高坏	148	161
0589	Y	壺	59	78	0666	H	高坏	100	120	0743	Y	高坏	148	161
0590	Y	壺	59	78	0667	H	壺	100	120	0744	Y	高坏	148	161
0591	Y	壺	59	78	0668	H	土玉	100	120	0745	Y	高坏	148	161
0592	Y	壺	59	78	0669	H	ミニチュア	63	84	0746	Y	高坏	148	161
0593	Y	壺	59	78	0670	Y	壺	95	112	0747	Y	高坏	148	161
0594	Y	壺	59	78	0671	Y	壺	95	112	0748	Y	高坏	148	161
0595	J	鉢	59	78	0672	Y	ミニチュア	67	88	0749	Y	高坏	148	161
0596	Y	壺	59	78	0673	Y	高坏	67	88	0750	Y	高坏	148	161
0597	Y	壺	59	78	0674	Y	高坏	67	88	0751	Y	高坏	149	161
0598	Y	壺	59	78	0675	Y	高坏	67	88	0752	Y	高坏	149	162
0599	Y	壺	59	78	0676	Y	高坏	67	88	0753	Y	高坏	149	162
0600	Y	壺	59	78	0677	Y	高坏	67	88	0754	Y	高坏	149	162
0601	Y	壺	59	80	0678	Y	高坏	67	88	0755	Y	高坏	149	162
0602	Y	壺	59	80	0679	Y	高坏	67	88	0756	Y	高坏	148	160
0603	欠	壺	59	80	0680	Y	壺	67	88	0757	Y	高坏	148	160
0604	Y	壺	59	80	0681	Y	壺	67	88	0758	Y	高坏	149	162
0605	Y	壺	59	80	0682	Y	壺	67	88	0759	Y	高坏	148	160
0606	Y	壺	59	80	0683	J	鉢	67	88	0760	Y	高坏	149	162
0607	Y	壺	59	80	0684	Y	小壺	74	92	0761	Y	高坏	148	160
0608	Y	壺	59	80	0685	Y	壺	74	92	0762	Y	高坏	149	162
0609	T	丸	182	184	0686	Y	大型壺	74	92	0763	Y	高坏	148	160
0610	H	坏	78	96	0687	Y	壺	74	92	0764	Y	高坏	149	162
0611	H	坏	78	96	0688	J	浅鉢?	74	92	0765	Y	高坏	148	160
0612	H	坏	78	96	0689	H	鉢	122	136	0766	Y	高坏	149	162
0613	H	坏	78	96	0690	H	鉢	123	137	0767	Y	高坏	149	162
0614	H	坏	78	96	0691	H	鉢	123	137	0768	Y	高坏	149	162
0615	H	坏	78	96	0692	H	小型壺	123	137	0769	Y	高坏	149	162
0616	H	坏	78	96	0693	H	坏	123	137	0770	Y	高坏	148	160
0617	H	坏	78	96	0694	H	坏	123	137	0771	Y	高坏	148	160
0618	H	坏	78	96	0695	H	坏	122	136	0772	J	高坏	148	160
0619	H	坏	78	96	0696	H	坏	123	137	0773	Y	高坏	149	162
0620	H	坏	78	96	0697	H	坏	123	137	0774	J	高坏	148	161
0621	Y	鉢	59	78	0698	H	坏	123	137	0775	Y	高坏	149	162
0622	Y	鉢	78	107	0699	H	坏	123	137	0776	J	高坏	148	160
0623	Y	鉢	78	107	0700	H	坏	123	137	0777	Y	高坏	89	108
0624	J	鉢	78	107	0701	H	坏	123	137	0778	Y	高坏	89	108
0625	Y	小壺	78	107	0702	H	坏	123	137	0779	Y	高坏	89	108
0626	Y	小壺	78	107	0703	H	坏	123	137	0780	Y	高坏	89	108
0627	J	鉢	78	106	0704	H	坏	123	137	0781	Y	高坏	89	108
0628	J	鉢	78	106	0705	H	坏	123	137	0782	Y	高坏	89	108
0629	Y	鉢	78	107	0706	H	坏	123	137	0783	J	高坏	89	108
0630	J	浅鉢	78	106	0707	H	脚付壺	123	138	0784	H	高坏	89	108
0631	J	浅鉢	78	106	0708	H	脚付壺	123	138	0785	Y	高坏	89	108
0632	Y	壺	78	107	0709	H	高坏	123	138	0786	Y	高坏	89	108
0633	Y	小型鉢	78	107	0710	H	脚付壺	123	137	0787	Y	高坏	89	108
0634	Y	高坏	71	91	0711	H	高坏	123	138	0788	Y	高坏	89	108
0635	Y	高坏	69	90	0712	H	高坏	122	136	0789	Y	高坏	89	108
0636	Y	壺	71	91	0713	H	高坏	123	138	0790	T	高坏	165	176
0637	Y	小型壺	71	91	0714	H	高坏	123	138	0791	Y	高坏	165	176
0638	Y	壺	71	91	0715	H	高坏	123	138	0792	Y	高坏	102	121

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
0793	Y	小型壺	102	121	0869	Y	鉢?	46	65	0945	Y	高坏	25	45
0794	Y	小型壺	102	121	0870	J	鉢?	46	65	0946	H	高坏	27	46
0795	Y	小型壺	102	121	0871	J	鉢	46	65	0947	H	ミニチュア	25	45
0796	Y	壺	102	121	0872	Y	鉢	137	151	0948	Y	高坏	25	45
0797	Y	壺	102	121	0873	Y	ミニチュア	137	150	0949	Y	壺	27	46
0798	Y	壺	102	121	0874	Y	小型鉢	137	150	0950	Y	壺	27	46
0799	Y	壺	102	121	0875	Y	高坏	137	150	0951	Y	壺?	25	45
0800	Y	壺	102	121	0876	Y	壺	137	150	0952	Y	壺	27	46
0801	Y	壺	102	121	0877	Y	壺	137	150	0953	Y	台付壺	25	45
0802	Y	小型壺	102	121	0878	Y	小型壺	137	150	0954	Y	壺	25	45
0803	Y	壺	103	122	0879	Y	小型壺	137	151	0955	Y	壺	25	45
0804	Y	壺	103	122	0880	Y	壺	137	150	0956	Y	壺	25	45
0805	Y	有孔鉢	103	122	0881	Y	壺	137	150	0957	Y	壺	25	45
0806	Y	深鉢	103	122	0882	Y	壺	137	150	0958	Y	壺	25	45
0807	J	鉢	63	84	0883	Y	壺	137	150	0959	Y	壺	24	40
0808	J	鉢	148	85	0884	Y	壺	137	150	0960	Y	欠香		
0809	Y	鉢	63	85	0885	J	鉢	137	151	0961	Y	壺	27	46
0810	Y	壺	63	85	0886	J	浅鉢	137	151	0962	Y	壺	25	45
0811	H	台付壺	150	163	0887	Y	小型壺	154	167	0963	Y	壺	27	46
0812	H	高坏	150	163	0888	Y	台付壺	154	167	0964	Y	壺?	25	45
0813	H	台付壺	150	163	0889	Y	台付壺	154	167	0965	Y	壺?	27	46
0814	H	台付壺	150	163	0890	Y	高坏	154	167	0966	J	鉢	27	46
0815	S	小坏	144	158	0891	Y	壺	154	167	0967	J	深鉢	25	45
0816	H	坏	144	158	0892	Y	壺	154	167	0968	Y	深鉢	27	46
0817	H	坏	144	158	0893	J	鉢	154	167	0969	Y	無蓋壺	27	46
0818	H	小型壺	144	158	0894	Y	壺?	154	167	0970	J	鉢	27	46
0819	H	鉢	144	157	0895	Y	紡錘車	154	167	0971	Y	紡錘車	25	45
0820	H	無蓋壺	144	157	0896	Y	壺	120	140	0972	Y	土製勾玉	27	46
0821	H	小型壺	144	157	0897	Y	壺	120	140	0973	H	ミニチュア	25	45
0822	H	壺	144	157	0898	Y	壺	120	140	0974	H	壺	27	46
0823	H	壺	144	158	0899	Y	壺?	120	140	0975	Y	壺	142	155
0824	H	壺	144	158	0900	Y	壺	120	140	0976	Y	大型壺	142	155
0825	H	壺	144	157	0901	Y	壺	120	140	0977	Y	壺	142	155
0826	H	壺	144	158	0902	Y	壺	120	140	0978	Y	壺	142	155
0827	Y	壺	74	93	0903	Y	壺?	120	140	0979	H	紡錘車	142	155
0828	Y	土製勾玉	74	93	0904	Y	高坏	142	156	0980	Y	壺	152	165
0829	H	高坏	106	125	0905	Y	壺	142	156	0981	Y	台付壺?	152	165
0830	H	台付壺	106	125	0906	Y	小型壺	142	156	0982	Y	小型壺	152	165
0831	Y	小型鉢	106	125	0907	Y	小型壺	142	156	0983	Y	壺	152	165
0832	J	深鉢	106	125	0908	Y	壺	142	156	0984	Y	鉢	95	113
0833	H	高坏	106	125	0909	Y	紡錘車?	142	155	0985	Y	小型高坏	95	113
0834	H	高坏	104	123	0910	J	鉢	142	156	0986	Y	有孔鉢	95	113
0835	H	高坏	104	123	0911	Y	紡錘車	142	155	0987	Y	壺	95	113
0836	H	高坏	104	123	0912	Y	壺	169	175	0988	Y	壺	95	113
0837	H	高坏	104	123	0913	Y	鉢	28	47	0989	Y	壺	95	114
0838	H	高坏	104	123	0914	Y	鉢	28	47	0990	Y	壺	95	114
0839	H	高坏	104	123	0915	Y	壺	29	48	0991	Y	壺	96	114
0840	H	壺	104	124	0916	Y	小型壺	28	47	0992	Y	有孔鉢	96	114
0841	H	壺	105	123	0917	Y	壺	29	48	0993	Y	小型壺	95	114
0842	H	壺	105	124	0918	Y	壺	29	48	0994	Y	有孔鉢	95	113
0843	Y	台付壺	104	123	0919	Y	高坏	28	47	0995	H	壺?	95	114
0844	Y	小型短頸壺	104	123	0920	Y	壺	29	48	0996	J	鉢	95	113
0845	H	壺	105	124	0921	Y	壺	28	47	0997	J	鉢	95	113
0846	H	壺	105	124	0922	Y	壺	28	47	0998	J	鉢	95	113
0847	H	壺	105	124	0923	Y	壺	28	47	0999	Y	壺	137	151
0848	H	台付壺	105	124	0924	Y	壺	29	48	1000	Y	壺	137	151
0849	J	鉢	104	123	0925	Y	壺	29	48	1001	Y	壺	137	151
0850	H	ミニチュア	105	124	0926	J	鉢	28	47	1002	Y	有孔鉢	137	151
0851	Y	壺	98	117	0927	J	深鉢	29	48	1003	J	鉢	96	114
0852	Y	壺	98	117	0928	Y	小型壺?	120	48	1004	Y	小型鉢	25	43
0853	Y	紡錘車	98	117	0929	Y	小型壺	28	47	1005	Y	壺	25	43
0854	Y	壺	120	139	0930	Y	小型壺	28	47	1006	Y	壺	25	43
0855	Y	壺	120	139	0931	Y	壺	28	47	1007	Y	壺	26	43
0856	J	鉢	120	139	0932	Y	壺	29	48	1008	Y	壺	26	43
0857	Y	壺	120	139	0933	Y	壺	29	48	1009	Y	壺	26	44
0858	Y	壺	120	139	0934	Y	有孔鉢	29	48	1010	Y	壺	27	44
0859	Y	壺	46	65	0935	Y	壺	28	47	1011	Y	壺	26	44
0860	Y	台付壺	46	65	0936	Y	壺	156	170	1012	Y	壺	26	44
0861	Y	壺	46	65	0937	Y	壺	156	170	1013	Y	壺	26	44
0862	Y	壺	46	65	0938	Y	壺	156	170	1014	Y	壺	26	44
0863	Y	壺	46	65	0939	H	高坏	27	46	1015	Y	壺	24	40
0864	Y	壺	46	65	0940	H	高坏	27	46	1016	Y	有孔鉢	26	44
0865	Y	有孔鉢	46	65	0941	H	高坏	25	45	1017	Y	壺	25	44
0866	J	鉢	46	65	0942	H	高坏	27	46	1018	Y	壺?	25	44
0867	Y	壺?	46	65	0943	H	高坏	27	46	1019	Y	壺	25	44
0868	Y	小型壺	46	65	0944	Y	壺	25	45	1020	J	壺	27	44

## IX 索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
1021	J	鉢	27	44	1097	Y	鉢	31	50	1173	H	H	114	132
1022	Y	ミニチュア	25	44	1098	Y	無蓋	163	175	1174	H	H	114	133
1023	H	有孔円盤	17	44	1099	Y	蓋	163	175	1175	H	H	114	133
1024	J	深鉢	142	156	1100	Y	蓋	158	171	1176	H	H	115	133
1025	J	深鉢	142	156	1101	Y	蓋	158	171	1177	H	H	114	133
1026	J	鉢	142	156	1102	Y	蓋	158	171	1178	H	H	113	130
1027	Y	蓋	44	64	1103	Y	蓋	158	171	1179	H	H	114	133
1028	Y	蓋	44	64	1104	Y	蓋	158	171	1180	H	H	115	133
1029	J	鉢	44	64	1105	Y	蓋	158	171	1181	H	H	115	133
1030	Y	蓋	44	64	1106	Y	蓋	158	171	1182	H	H	115	133
1031	Y	蓋	44	64	1107	Y	蓋	158	171	1183	H	H	115	133
1032	J	鉢	44	64	1108	Y	鉢	99	119	1184	Y	Y	113	129
1033	Y	土製勾玉	44	64	1109	T	皿	99	119	1185	Y	Y	113	129
1034	Y	蓋	146	159	1110	Y	小型鉢	67	88	1186	Y	Y	113	129
1035	Y	H 小型蓋	146	158	1111	Y	蓋	69	89	1187	Y	Y	113	129
1036	Y	H 小型蓋	146	158	1112	Y	蓋	68	89	1188	Y	Y	114	132
1037	Y	H 器台	146	158	1113	Y	蓋	68	89	1189	J	J	113	129
1038	H	匙	146	158	1114	Y	蓋	68	89	1190	Y	Y	113	129
1039	Y	小型高坏	146	159	1115	Y	高坏	69	89	1191	Y	Y	114	132
1040	Y	台付羹	146	159	1116	Y	台付羹	69	89	1192	H	H	113	129
1041	Y	羹	146	159	1117	Y	羹	69	89	1193	Y	Y	113	129
1042	Y	羹	146	159	1118	Y	羹	69	89	1194	Y	Y	113	129
1043	Y	羹	146	159	1119	Y	羹	69	89	1195	Y	Y	114	132
1044	Y	羹	146	159	1120	J	鉢	68	89	1196	H	H	113	130
1045	Y	蓋	146	159	1121	Y	無蓋	69	89	1197	H	H	108	126
1046	Y	蓋	146	159	1122	Y	小型鉢	139	154	1198	H	H	108	126
1047	Y	高坏	146	159	1123	Y	小型台付鉢	139	154	1199	H	H	108	126
1048	Y	鉢	146	159	1124	Y	小型羹	139	154	1200	H	H	108	126
1049	Y	台付羹	161	173	1125	Y	小型羹	139	154	1201	Y	Y	108	126
1050	Y	蓋	161	173	1126	Y	蓋	139	154	1202	Y	Y	108	126
1051	H	蓋	98	118	1127	Y	小型台付鉢	139	154	1203	Y	Y	108	126
1052	Y	台付羹	137	152	1128	Y	有孔鉢	139	154	1204	Y	Y	108	126
1053	Y	高坏	140	154	1129	Y	有孔鉢	139	154	1205	Y	Y	108	126
1054	H	台付羹	161	173	1130	Y	蓋	139	154	1206	Y	Y	116	134
1055	Y	蓋	161	173	1131	Y	蓋	139	154	1207	Y	Y	116	134
1056	Y	蓋	161	173	1132	J	深鉢	139	153	1208	Y	Y	116	134
1057	Y	蓋	161	173	1133	J	深鉢	139	153	1209	Y	Y	114	134
1058	Y	蓋	161	173	1134	Y	蓋?	139	154	1210	Y	Y	116	134
1059	Y	小型羹	161	174	1135	Y	小型鉢	75	93	1211	J	J	116	134
1060	Y	小型羹	161	174	1136	Y	小蓋	75	93	1212	Y	Y	114	134
1061	Y	蓋	161	174	1137	Y	小蓋	75	93	1213	Y	Y	114	134
1062	Y	台付羹	161	174	1138	J	鉢	173	182	1214	Y	Y	114	134
1063	Y	小型羹	161	174	1139	Y	蓋	75	93	1215	J	J	114	134
1064	Y	羹	161	174	1140	J	深鉢	75	93	1216	J	J	114	134
1065	Y	蓋	161	174	1141	Y	蓋	75	93	1217	Y	Y	114	134
1066	Y	小蓋	163	175	1142	Y	蓋	75	93	1218	Y	Y	109	127
1067	Y	鉢	163	175	1143	Y	欠番	75	93	1219	Y	Y	109	127
1068	J	深鉢	163	175	1144	H	高坏	75	93	1220	Y	Y	109	127
1069	Y	羹	98	117	1145	H	増	114	132	1221	Y	Y	109	127
1070	Y	短頸蓋	98	117	1146	H	増	114	132	1222	Y	Y	109	127
1071	Y	有孔鉢	98	117	1147	H	増	114	132	1223	Y	Y	109	127
1072	J	鉢	98	117	1148	H	増	114	132	1224	Y	Y	109	127
1073	J	深鉢	98	117	1149	H	増	114	132	1225	Y	Y	109	127
1074	J	深鉢	98	117	1150	H	増	114	132	1226	Y	Y	108	127
1075	J	鉢	98	117	1151	H	増	113	130	1227	Y	Y	108	127
1076	Y	紡績車	98	117	1152	H	増	114	132	1228	Y	Y	108	127
1077	Y	蓋	98	118	1153	H	増	114	132	1229	Y	Y	108	127
1078	Y	蓋	98	118	1154	H	増	113	130	1230	J	Y	108	127
1079	Y	蓋	98	118	1155	H	増	113	130	1231	Y	Y	108	127
1080	Y	蓋	139	152	1156	H	増	114	132	1232	Y	Y	108	127
1081	Y	蓋	103	122	1157	H	増	114	132	1233	J	J	108	127
1082	Y	蓋	103	122	1158	H	増	113	130	1234	J	Y	109	127
1083	Y	蓋	31	50	1159	H	鉢	113	130	1235	Y	Y	109	127
1084	Y	台付羹	31	50	1160	H	鉢	113	130	1236	Y	Y	111	128
1085	Y	蓋?	31	50	1161	H	高坏	113	130	1237	Y	Y	111	128
1086	Y	蓋	31	50	1162	H	高坏	114	132	1238	Y	Y	111	128
1087	J	鉢	31	50	1163	H	高坏	114	132	1239	Y	Y	111	128
1088	J	鉢	31	50	1164	H	高坏	114	132	1240	Y	Y	111	128
1089	J	鉢	31	50	1165	H	高坏	114	132	1241	Y	Y	110	128
1090	J	浅鉢	31	50	1166	H	高坏	113	130	1242	Y	J	110	128
1091	J	鉢	31	50	1167	H	高坏	114	132	1243	Y	J	110	128
1092	Y	蓋	17	31	1168	H	高坏	113	130	1244	Y	J	110	128
1093	Y	ミニチュア	31	49	1169	H	高坏	113	130	1245	J	J	110	128
1094	Y	羹	31	49	1170	H	高坏	114	132	1246	Y	Y	111	128
1095	Y	羹	31	49	1171	H	高坏	113	130	1247	Y	Y	111	128
1096	Y	羹	31	49	1172	H	羹	114	133	1248	Y	Y	111	129



番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
1249	Y	壺	111	129	1316	H	坏	211	216	1383	H	坏	214	219
1250	Y	壺	111	129	1317	Y	小型高坏	211	216	1384	H	坏	214	219
1251	Y	壺	111	129	1318	Y	壺	211	216	1385	H	坏	214	219
1252	Y	壺?	111	129	1319	Y	大型壺	211	216	1386	H	坏	214	219
1253	Y	壺?	110	128	1320	Y	紡錘車	211	216	1387	H	坏	214	219
1254	H	長壺	139	153	1321	S	坏	208	212	1388	S	壺	214	219
1255	Y	小型鉢	125	141	1322	H	坏	208	212	1389	S	壺	214	219
1256	Y	壺	126	141	1323	H	坏	208	212	1390	S	壺	214	219
1257	Y	壺	125	141	1324	H	坏	208	212	1391	H	坏	213	218
1258	Y	壺	125	141	1325	H	坏	208	212	1392	J	坏	214	219
1259	Y	高坏	126	142	1326	H	坏	209	213	1393	H	坏	(集合)	なし
1260	Y	壺	126	142	1327	H	坏	208	212	1394	S	坏	(集合)	なし
1261	H	埴	159	172	1328	H	埴	209	213	1395	J	壺	214	219
1262	H	埴	159	172	1329	H	埴	208	212	1396	S	壺	214	219
1263	H	埴	159	172	1330	H	小型壺	209	213	1397	S	壺	203	209
1264	H	埴	159	172	1331	H	壺	208	212	1398	J	壺	203	209
1265	H	埴	159	172	1332	H	壺	209	213	1399	Y	壺	203	209
1266	H	埴	159	172	1333	H	壺	209	213	1400	S	壺	203	209
1267	H	台付壺	159	172	1334	S	壺	208	212	1401	J	深鉢	203	209
1268	H	台付壺	159	172	1335	J	鉢	209	213	1402	Y	壺	195	202
1269	H	壺	159	172	1336	T	銚子	208	212	1403	T	油皿	215	221
1270	H	台付壺	159	173	1337	H	長壺	209	213	1404	T	油皿	215	221
1271	H	壺	159	173	1338	H	長壺	209	213	1405	J	鉢	209	213
1272	H	台付壺	159	172	1339	H	壺	208	214	1406	J	深鉢	197	204
1273	H	壺	159	172	1340	H	坏	208	214	1407	J	深鉢	197	204
1274	H	壺	159	173	1341	H	坏	209	214	1408	J	深鉢	197	204
1275	Y	小型高坏	143	157	1342	H	坏	208	214	1409	J	破片	197	204
1276	Y	小型壺	143	157	1343	H	台付壺	208	214	1410	J	鉢	197	204
1277	J	深鉢	173	183	1344	H	壺	208	214	1411	H	壺	196	203
1278	J	深鉢	173	183	1345	S	坏	208	214	1412	S	壺	196	203
1279	J	深鉢	173	183	1346	H	坏	208	214	1413	J	深鉢	196	203
1280	J	深鉢	173	183	1347	H	坏	209	214	1414	J	深鉢	197	204
1281	J	深鉢	173	182	1348	H	坏	209	214	1415	J	深鉢	210	216
1282	J	深鉢	173	182	1349	H	坏	208	214	1416	J	鉢	206	211
1283	J	深鉢	173	182	1350	H	坏	209	214	1417	J	鉢	206	211
1284	J	深鉢	173	182	1351	S	壺	209	214	1418	J	鉢	206	211
1285	J	深鉢	173	182	1352	Y	短頸壺	205	210	1419	J	深鉢	197	205
1286	J	深鉢	173	182	1353	Y	壺	205	210	1420	J	鉢	197	205
1287	J	深鉢	175	184	1354	Y	壺	205	210	1421	H	小型壺	216	221
1288	J	深鉢	175	184	1355	Y	壺	205	210	1422	H	坏	214	217
1289	J	浅鉢	175	184	1356	Y	器台	205	210	1423	Y	壺	192	189
1290	J	深鉢	171	187	1357	S	壺	205	210	1424	Y	壺	192	189
1291	J	浅鉢	96	115	1358	J	鉢	205	210	1425	T	皿	179	191
1292	J	深鉢	95	115	1359	H	坏	210	215	1426	Y	ボタン状	182	194
1293	J	鉢	95	115	1360	H	紡錘車	210	215	1427	Y	紡錘車	191	190
1294	J	深鉢	95	115	1361	J	鉢	210	215	1428	T	銚子	191	190
1295	J	深鉢	96	115	1362	J	鉢	210	215	1429	S	坏	213	217
1296	J	鉢	95	115	1363	J	鉢	199	206	1430	S	壺	213	217
1297	J	鉢	95	115	1364	H	坏	214	219	1431	H	坏	214	217
1298	H	ミニチュア	96	116	1365	H	坏	214	219	1432	H	坏	214	217
1299	H	小型壺	96	116	1366	H	坏	214	219	1433	H	円筒土製品	214	217
1300	H	器台	96	116	1367	S	水瓶	214	220	1434	H	粗製高坏	214	217
1301	H	台付壺	96	116	1368	S	壺	214	219	1435	H	壺	214	217
1302	H	壺	96	116	1369	H	壺	206	211	1436	H	小輪	214	217
1303	H	台付壺	96	116	1370	Y	器台	206	211	1437	H	ミニチュア?	213	217
1304	Y	壺	96	116	1371	H	台付壺	206	211	1438	S	短頸壺	203	209
1305	J	深鉢	96	116	1372	H	器台	206	211	1439	Y	壺	182	194
1306	H	紡錘車?	96	116	1373	Y	壺	206	211	1440	Y	壺	182	194
1307	J	鉢	95	116	1374	J	鉢	206	211	1441	G	コネ鉢	182	200
1308	Y	壺	200	207	1375	J	鉢	206	211	1442	Y	壺?	182	194
1309	H	皿	214	218	1376	H	坏	214	220	1443	Y	壺	182	194
1310	H	壺	213	218	1377	J	鉢	214	220	1444	Y	壺	182	194
1311	Y	小型壺	201	208	1378	S	坏	214	219	1445	T	小皿	182	194
1312	Y	小型鉢	201	208	1379	H	小皿	213	218	1446	Y	壺	205	210
1313	Y	小型壺	201	208	1380	H	坏	213	218	1447	T	細管	24	41
1314	Y	小型壺	201	208	1381	H	坏	213	218					
1315	Y	大型壺	201	208	1382	H	坏	214	219					

遺物索引石斧類

番号	器 形	材 質	本文	写真	番号	器 形	材 質	本文	写真
2001	磨り石	凝灰質砂岩	42	63	2076	磨製石斧	実質凝灰岩	62	83
2002	打製石斧	硬質泥岩	42	62	2077	削器	硬質泥岩	61	83
2003	砥石	砂岩	42	62	2078	打製石斧	珪質頁岩	61	83
2004	打製石斧	硬質泥岩	53	72	2079	打製石斧	硬質泥岩	61	83
2005	礮器	粗粒安山岩	53	72	2080	石鏃?	黒色安山岩	61	83
2006	打製石斧	硬質泥岩	53	72	2081	砥石	砂岩	62	83
2007	砥石	砂岩	51	70	2082	削器	硬質泥岩	62	83
2008	磨り石	粗粒安山岩	49	67	2083	打製石斧	硬質泥岩	62	84
2009	多孔石	緑色片岩	54	73	2084	欠番			
2010	磨り石	緑色片岩	40	60	2085	打製石斧	硬質泥岩	59	77
2011	砥石	硬質泥岩	39	59	2086	砥石	雲母石英片岩	58	77
2012	石核	硬質泥岩	39	59	2087	磨り石	珪質頁岩	59	80
2013	石砧	硬質泥岩	37	57	2088	磨り石	頁岩	80	98
2014	削器	硬質泥岩	37	57	2089	砥石	緑色片岩	80	97
2015	礮器	硬質泥岩	37	57	2090	打製石斧(石鏃?)	硬質泥岩	80	98
2016	削片	硬質泥岩	37	57	2091	石核	硬質泥岩	80	98
2017	削器	硬質泥岩	37	57	2092	石核	硬質泥岩	80	98
2018	石核	硬質泥岩	37	57	2093	砥石	実質安山岩	127	143
2019	石核	硬質泥岩	37	57	2094	礮器	硬質泥岩	127	143
2020	打製石斧	黒色安山岩	37	57	2095	打製石斧	硬質泥岩	131	146
2021	磨鉢車	滑石	36	57	2096	欠番			
2022	原石	雲母石英片岩	36	57	2097	欠番			
2023	打製石斧(石鏃?)	硬質泥岩	37	57	2098	砥石	砂岩	84	100
2024	打製石斧	珪質頁岩	39	59	2099	削器	硬質泥岩	84	100
2025	打製石斧	硬質泥岩	37	57	2100	打製石斧	硬質泥岩	84	100
2026	石核	硬質泥岩	37	57	2101	磨製石斧	緑色片岩	84	104
2027	打製石斧	硬質泥岩	37	57	2102	磨製石斧	ホルンフェルス	85	105
2028	削器	硬質泥岩	37	57	2103	磨製石斧	緑色片岩	84	104
2029	块状耳飾り	滑石質鮫紋岩	33	52	2104	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2030	打製石斧	アイサイト	33	52	2105	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2031	打製石斧	硬質泥岩	33	52	2106	打製石斧	黒色安山岩	84	104
2032	打製石斧	硬質泥岩	33	52	2107	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2033	石核	硬質泥岩	33	52	2108	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2034	削器	硬質泥岩	54	73	2109	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2035	打製石斧	硬質泥岩	53	73	2110	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2036	削器	硬質泥岩	53	73	2111	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2037	石核	硬質泥岩	53	73	2112	削器	硬質泥岩	84	104
2038	石核	硬質泥岩	53	73	2113	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2039	削片	硬質泥岩	50	70	2114	打製石斧	硬質泥岩	84	104
2040	礮器	石英砂岩	47	66	2115	不明石製品	滑石	84	104
2041	砥石	実質砂岩	49	69	2116	打製石斧	硬質泥岩	135	149
2042	多孔石(台石?)	石英閃緑岩	177	186	2117	打製石斧	硬質泥岩	135	149
2043	凹石	粗粒安山岩	177	186	2118	砥石	牛伏砂岩	135	150
2044	打製石斧	硬質泥岩	31	49	2119	砥石	牛伏砂岩	135	150
2045	石鏃	硬質泥岩	17	31	2120	凹石	緑色片岩	91	110
2046	不明石製品	滑石	56	74	2121	磨り石	緑色片岩	92	112
2047	不明石製品	滑石	56	75	2122	磨り石	緑色片岩	91	110
2048	凹石	牛伏砂岩	65	86	2123	磨り石	実玄武岩	91	110
2049	磨り石	不明	77	94	2124	打製石斧	硬質泥岩	91	110
2050	磨鉢車	白色凝灰岩	77	95	2125	打製石斧	硬質泥岩	91	110
2051	磨鉢車削片	白色凝灰岩	77	95	2126	削器	硬質泥岩	91	110
2052	打製石斧	アイサイト	77	94	2127	石核	黒色安山岩	91	110
2053	打製石斧(石鏃)	粗粒安山岩	56	76	2128	石核	硬質泥岩	91	110
2054	欠番				2129	打製石斧	アイサイト	91	110
2055	打製石斧	硬質泥岩	17	33	2130	砥石	砂岩	152	164
2056	凹石	流紋岩	20	38	2131	磨鉢車	白色凝灰岩	133	148
2057	石皿	雲母石英片岩	21	38	2132	打製石斧	硬質泥岩	133	148
2058	砥石	実玄武岩	20	38	2133	磨り石	砂岩質準片岩	133	147
2059	打製石斧	硬質泥岩	20	38	2134	打製石斧	硬質泥岩	133	147
2060	打製石斧	緑色片岩	20	38	2135	磨り石	流紋岩	133	147
2061	打製石斧	珪質頁岩	20	38	2136	磨り石	粗粒安山岩	24	41
2062	磨り石	粗粒安山岩	20	38	2137	磨り石	粗粒安山岩	24	41
2063	打製石斧	硬質泥岩	57	75	2138	磨り石	雲母石英片岩	27	43
2064	磨製石斧	実玄武岩	62	83	2139	多孔石	緑色片岩	24	41
2065	凹石	粗粒安山岩	62	83	2140	打製石斧	硬質泥岩	24	41
2066	打製石斧	硬質泥岩	61	83	2141	打製石斧	硬質泥岩	24	41
2067	打製石斧	硬質泥岩	61	83	2142	削片	硬質泥岩	24	41
2068	削器	硬質泥岩	61	82	2143	石核	黒色安山岩	24	41
2069	削器	硬質泥岩	61	82	2144	打製石斧	黒色安山岩	24	41
2070	打製石斧	黒色安山岩	61	83	2145	欠番			
2071	打製石斧	硬質泥岩	61	82	2146	打製石斧	硬質泥岩	24	41
2072	礮器	硬質泥岩	61	82	2147	削片	硬質泥岩	24	41
2073	打製石斧	硬質泥岩	61	83	2148	削片	硬質泥岩	27	43
2074	块状耳飾り	滑石質鮫紋岩	61	83	2149	打製石斧	硬質泥岩	27	43
2075A	原石	滑石	62	83	2150	打製石斧	硬質泥岩	27	43
2075B	原石	滑石	62	83	2151	磨り石	粗粒安山岩	27	43

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2152	打製石斧	硬質泥岩	27	43	2228	切片	硬質泥岩	25	45
2153	切片	硬質泥岩	156	169	2229	削器	硬質泥岩	25	45
2154	切片	硬質泥岩	156	169	2230	紡錘車切片	滑石	27	46
2155	切片	硬質泥岩	156	169	2231	磨り石	ひん岩	142	155
2156	切片	硬質泥岩	156	169	2232	磨り石	石美閃緑岩	142	155
2157	切片	硬質泥岩	156	169	2233	削器	硬質泥岩	95	113
2158	打製石斧	緑色片岩	156	169	2234	打製石斧	硬質泥岩	96	114
2159	切片	硬質泥岩	156	169	2235	打製石斧	硬質泥岩	95	113
2160	礫器	硬質泥岩	185	196	2236	打製石斧	粗粒安山岩	96	114
2161	削器	硬質泥岩	185	196	2237	打製石斧	硬質泥岩	96	114
2162	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2238	打製石斧	実玄武岩	137	151
2163	打製石斧	硬質泥岩	87	107	2239	砥石	砂岩	26	44
2164	打製石斧	デイスサイト	87	107	2240	凹石	黒色片岩	26	44
2165	打製石斧	硬質泥岩	71	91	2241	削器	硬質泥岩	26	44
2166	打製石斧	硬質泥岩	71	91	2242	削器	硬質泥岩	27	44
2167	块状耳飾り	滑石	69	90	2243	磨り石	粗粒安山岩	142	156
2168	打製石斧	硬質泥岩	69	90	2244	欠番			
2169	打製石斧	硬質泥岩	69	90	2245	磨り石	ひん岩	146	159
2170	打製石斧	粗粒安山岩	69	90	2246	削器	硬質泥岩	146	159
2171	打製石斧	頁岩	100	120	2247	打製石斧	瑤瑯石	146	159
2172	石核	硬質泥岩	168	177	2248	打製石斧	硬質泥岩	146	159
2173	打製石斧	硬質泥岩	168	177	2249	紡錘車	白色凝灰岩	161	173
2174	打製石斧	砂岩	96	112	2250	多孔石	緑色片岩	161	174
2175	凹石	粗粒安山岩	96	112	2251	打製石斧	緑色片岩	98	118
2176	多孔石	砂岩	67	88	2252	磨り石	瑤瑯石(硬質泥岩)	98	118
2177	打製石斧	硬質泥岩	67	88	2253	礫器	硬質泥岩	98	118
2178	磨り石	粗粒安山岩	122	138	2254	打製石斧	硬質泥岩	98	117
2179	打製石斧	硬質泥岩	122	138	2255	磨り石	閃緑岩	98	118
2180	磨り石	実玄武岩	149	162	2256	欠番			
2181	磨り石	粗粒安山岩	149	162	2257	石核	硬質泥岩	31	50
2182	磨り石	粗粒安山岩	149	162	2258	磨り石	砂岩	31	50
2183	垂飾	緑色片岩	149	162	2259	打製石斧	硬質泥岩	158	171
2184	垂飾	流紋岩	148	160	2260	凹石	砂岩	158	171
2185	打製石斧	硬質泥岩	149	162	2261	打製石斧	硬質泥岩	69	89
2186	打製石斧	硬質泥岩	149	162	2262	勾玉未成品	流紋岩	139	153
2187	块状耳飾り	滑石質蛇紋岩	89	108	2263	管玉	瑤瑯石	113	130
2188	打製石斧	瑤瑯石	89	108	2264	打製石斧	硬質泥岩	113	130
2189	石核	硬質泥岩	165	176	2265	玉原石	滑石質蛇紋岩	115	133
2190	石核	硬質泥岩	165	176	2265B	玉原石	滑石質蛇紋岩	115	133
2191	打製石斧	硬質泥岩	165	176	2265C	玉原石	滑石質蛇紋岩	115	133
2192	打製石斧	硬質泥岩	165	176	2265D	玉原石	滑石質蛇紋岩	115	133
2193	砥石	砥沢石	165	176	2266	多孔石	デイスサイト?	115	133
2194	砥石	砂岩	102	121	2267	棒状礫	緑色片岩	115	133
2195	磨り石	粗粒安山岩	103	122	2268	削器	黒色安山岩	113	130
2196	打製石斧	硬質泥岩	63	85	2269	打製石斧	硬質泥岩	113	130
2197	打製石斧	粗粒安山岩	63	85	2270	打製石斧	硬質泥岩	113	130
2198	打製石斧	硬質泥岩	150	163	2271	磨り石	雲母石英片岩	113	130
2199	打製石斧	硬質泥岩	150	163	2272	磨り石	流紋岩	113	130
2200	削器	黒色安山岩	74	93	2273	砥石	砂岩	113	130
2201	削器	硬質泥岩	104	123	2274	磨り石	黒色片岩	113	130
2202	打製石斧	硬質泥岩	104	123	2275A	白玉	滑石	113	130
2203	打製石斧	硬質泥岩	104	123	2275B	白玉	滑石	113	130
2204	磨り石	頁岩	120	139	2275C	白玉	滑石	113	130
2205	打製石斧	硬質泥岩	63	85	2275D	白玉	蛇紋岩	113	130
2206	凹石	実デイスサイト	63	85	2275E	白玉	蛇紋岩	113	130
2207	砥石	砂岩	46	65	2275F	白玉	蛇紋岩	113	130
2208	磨り石	粗粒安山岩	137	151	2276	勾玉	滑石	113	130
2209	磨り石	砥沢石	120	140	2277	磨り石	緑色片岩	108	126
2210	砥石	砂岩	120	140	2278	切片	硬質泥岩	114	134
2211	削器	瑤瑯石	137	152	2279	打製石斧	硬質泥岩	114	134
2212	紡錘車	砂岩	29	47	2280	打製石斧	硬質泥岩	109	127
2213	磨り石	粗粒安山岩	29	48	2281	打製石斧	粗粒安山岩	109	127
2214	石核	硬質泥岩	29	48	2282	磨り石	流紋岩	109	127
2215	打製石斧	硬質泥岩	29	48	2283	砥石	砂岩	110	128
2216	切片	硬質泥岩	29	48	2284	凹石	実安山岩	110	128
2217	切片	硬質泥岩	29	48	2285	勾玉	鮮緑色硬質鉱物	110	128
2218	切片	硬質泥岩	29	48	2286	凹石	粗粒安山岩	126	141
2219	打製石斧	硬質泥岩	29	48	2287	磨り石	実安山岩	126	141
2220	打製石斧	硬質泥岩	29	48	2288	砥石	砂岩	126	142
2221	切片	硬質泥岩	29	48	2289	凹石	粗粒安山岩	173	181
2222	打製石斧	硬質泥岩	29	48	2290	凹石	緑色片岩	173	181
2223	磨り石	粗粒安山岩	29	48	2291	磨り石	緑色片岩	173	181
2224	多孔石	緑色片岩	25	45	2292	切片	硬質泥岩	173	181
2225	削器	硬質泥岩	25	45	2293	凹石	緑色片岩	173	181
2226	削器	硬質泥岩	25	45	2294	磨り石	流紋岩	173	181
2227	打製石斧	硬質泥岩	25	45	2295	打製石斧	硬質泥岩	173	181

Ⅱ 索引

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2296	打製石斧	綠色片岩	173	181	2372	凹石	綠色片岩	173	197
2297	削器	硬質泥岩	173	181	2373	打製石斧	硬質泥岩	186	197
2298	磨製石斧	安曇蛇紋岩	173	181	2374	打製石斧	硬質泥岩	186	196
2299	凹石	綠色片岩	171	186	2375	削器	硬質泥岩	186	201
2300	打製石斧	硬質泥岩	175	184	2376	打製石斧	硬質泥岩	186	197
2301	打製石斧	硬質泥岩	175	184	2377	打製石斧	硬質泥岩	186	201
2302	削器	硬質泥岩	175	184	2378	削器	硬質泥岩	186	201
2303	削器	硬質泥岩	175	184	2379	打製石斧	硬質泥岩	180	192
2304	打製石斧	硬質泥岩	175	184	2380	打製石斧	硬質泥岩	180	192
2305	打製石斧	硬質泥岩	175	184	2381	石核	硬質泥岩	180	192
2306	打製石斧	硬質泥岩	95	115	2382	不明石製品	綠色片岩	181	191
2307	打製石斧	硬質泥岩	95	115	2383	削器	綠色片岩	180	193
2308	石核	硬質泥岩	95	115	2384	打製石斧	硬質泥岩	180	193
2309	削器	硬質泥岩	96	116	2385	打製石斧	珪質頁岩	180	193
2310	こも編み石	石末閃綠岩	95	116	2386	凹石	粗粒安山岩	190	197
2311	こも編み石	粗粒安山岩	96	116	2387	打製石斧	粗粒安山岩	186	197
2312	こも編み石	粗粒安山岩	96	116	2388	打製石斧	硬質泥岩	186	197
2313	こも編み石	粗粒安山岩	96	116	2389	打製石斧	硬質泥岩	186	197
2314	削片	硬質泥岩	96	116	2390	石核	硬質泥岩	186	197
2315	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2391	石核	硬質泥岩	186	197
2316	接器	硬質泥岩	185	196	2392	不明石製品	硬質泥岩	186	201
2317	打製石斧	硬質泥岩	179	191	2393	削器	硬質泥岩	186	201
2318	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2394	打製石斧	硬質泥岩	186	201
2319	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2395	打製石斧	硬質泥岩	186	201
2320	打製石斧	硬質泥岩	179	191	2396	打製石斧	硬質泥岩	186	197
2321	打製石斧	硬質泥岩	179	191	2397	削器	硬質泥岩	186	201
2322	削器	硬質泥岩	179	191	2398	石核	硬質泥岩	186	201
2323	削器	硬質泥岩	179	191	2399	削片	硬質泥岩	186	201
2324	砥石	砥粒安山岩	179	191	2400	打製石斧	硬質泥岩	186	201
2325	打製石斧	硬質泥岩	179	192	2401	削器	硬質泥岩	186	201
2326	凹石	ひん岩	181	192	2402	削器	硬質泥岩	186	201
2327	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2403	打製石斧	珪質頁岩	180	193
2328	打製石斧	珪質頁岩	185	196	2404	石核	硬質泥岩	180	193
2329	打製石斧	硬質泥岩	185	201	2405	打製石斧	硬質泥岩	180	193
2330	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2406	削器	綠色片岩	186	197
2331	石核	硬質泥岩	185	196	2407	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2332	凹石	砂岩	181	192	2408	削器	硬質泥岩	187	197
2333	磨り石	砂岩	190	196	2409	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2334	石核	硬質泥岩	179	191	2410	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2335	打製石斧	硬質泥岩	179	192	2411	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2336	不明石製品	綠色片岩	181	192	2412	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2337	打製石斧	硬質泥岩	179	192	2413	打製石斧	硬質泥岩	187	201
2338	打製石斧	珪質頁岩	179	192	2414	打製石斧	硬質泥岩	187	201
2339	石核	硬質泥岩	179	192	2415	打製石斧	硬質泥岩	187	201
2340	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2416	打製石斧	珪質片岩	187	201
2341	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2417	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2342	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2418	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2343	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2419	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2344	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2420	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2345	打製石斧	細粒安山岩	180	192	2421	打製石斧	珪質頁岩	187	201
2346	接器	硬質泥岩	180	192	2422	打製石斧	頁岩	187	201
2347	石核	硬質泥岩	180	192	2423	打製石斧	珪質頁岩	180	193
2348	削器	硬質泥岩	180	192	2424	礮器	硬質泥岩	180	193
2349	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2425	打製石斧	硬質泥岩	187	197
2350	打製石斧	珪質頁岩	185	197	2426	凹石	綠色片岩	190	197
2351	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2427	多孔石	綠色片岩	190	197
2352	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2428	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2353	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2429	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2354	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2430	石核	硬質泥岩	187	198
2355	削片	黑色安山岩	180	192	2431	石核	硬質泥岩	187	198
2356	石核	硬質泥岩	180	192	2432	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2357	打製石斧	硬質泥岩	186	197	2433	石核	硬質泥岩	187	198
2358	凹石	安曇綠岩	190	201	2434	削器	硬質泥岩	187	198
2359	打製石斧	硬質泥岩	186	197	2435	磨製石斧	實玄武岩	189	198
2360	削器	硬質泥岩	186	197	2436	削器	硬質泥岩	187	198
2361	打製石斧	硬質泥岩	185	196	2437	接器	硬質泥岩	187	198
2362	削器	硬質泥岩	186	196	2438	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2363	打製石斧	硬質泥岩	186	201	2439	礮器	硬質泥岩	187	198
2364	削器	硬質泥岩	180	192	2440	削片	硬質泥岩	187	198
2365	打製石斧	硬質泥岩	180	192	2441	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2366	削器	珪質頁岩	180	192	2442	打製石斧	硬質泥岩	187	198
2367	石核	硬質泥岩	180	192	2443	打製石斧	硬質泥岩	188	198
2368	磨製石斧	綠色片岩	189	197	2444	削器	硬質泥岩	187	201
2369	打製石斧	硬質泥岩	186	196	2445	打製石斧	硬質泥岩	188	198
2370	凹石	綠色片岩	190	197	2446	打製石斧	硬質泥岩	188	198
2371	打製石斧	硬質泥岩	186	197	2447	打製石斧	硬質泥岩	188	198

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
2448	打製石斧	硬質泥岩	188	198	2511	石匙	黑色安山岩	189	199
2449	砥石	綠色片岩	189	198	2512A	石匙	黑色頁岩	189	201
2450	礮器	硬質泥岩	188	198	2512B	石匙	黑色安山岩	189	201
2451	石核	硬質泥岩	188	201	2513	磨製石斧	雲母蛇紋岩	189	199
2452	削器	硬質泥岩	188	201	2514	不明石製品	滑石	190	199
2453	打製石斧	硬質泥岩	188	198	2515	異形石器	黑色安山岩	189	199
2454	凹石	綠色片岩	190	198	2516	欠香	珠寶頁岩	191	190
2455	削器	硬質泥岩	188	201	2517	石錐			
2456	打製石斧	硬質泥岩	188	201	2518	欠香			
2457	打製石斧	綠色片岩	188	198	2519	石皿			
2458	石核	硬質泥岩	188	201	2520	多孔石			
2459	打製石斧	粗粒安山岩	188	198	2521	打製石斧			
2460	打製石斧	珠寶頁岩	188	198	2522	削器			
2461	削器	硬質泥岩	188	198	2523	礮器			
2462	削器	硬質泥岩	188	198	2524	砥石			
2463	打製石斧	硬質泥岩	188	198	2525	打製石斧			
2464	打製石斧	硬質泥岩	188	198	2526	打製石斧			
2465	削器?	綠色片岩	188	199	2527	打製石斧			
2466	打製石斧	硬質泥岩	188	199	2528	砥石			
2467	削片	硬質泥岩	188	201	2529	打製石斧			
2468	打製石斧	頁岩	188	201	2530	多孔石			
2469	打製石斧	黑色安山岩	188	201	2531	砥石?			
2470	打製石斧	硬質泥岩	188	201	2532	打製石斧			
2471	石核	硬質泥岩	188	199	2533	削器			
2472	打製石斧未成品	硬質泥岩	188	199	2534	打製石斧			
2473	打製石斧	硬質泥岩	188	199	2535	削器			
2474	削器	黑色安山岩	189	199	2536	削器			
2475	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2537	打製石斧	細粒安山岩	47	66
2476	石核	硬質泥岩	189	199	2538	磨り石	粗粒安山岩	201	208
2477	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2539	打製石斧	硬質泥岩	209	213
2478	打製石斧	硬質泥岩	189	201	2540	打製石斧	珠寶頁岩	209	213
2479	打製石斧	硬質泥岩	189	201	2541	打製石斧	硬質泥岩	208	212
2480	凹石	硬質泥岩	189	199	2542	打製石斧	珠寶頁岩	208	212
2481	凹石	粗粒安山岩	190	199	2543	砥石	砥石	208	212
2482	独鈎石	綠色片岩	189	199	2544	打製石斧	硬質泥岩	208	214
2483	石核	硬質泥岩	189	199	2545	打製石斧未製品	珠寶頁岩	208	214
2484	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2546	礮器	硬質泥岩	205	210
2485	打製石斧未成品	硬質泥岩	189	199	2547	打製石斧	硬質泥岩	205	210
2486	打製石斧	角閃石安山岩	189	199	2548	石核	硬質泥岩	210	215
2487	打製石斧	龜灰頁珠寶頁岩	189	199	2549	こも編み石	雲母石英片岩	214	220
2488	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2550	こも編み石	粗粒安山岩	214	220
2489	石核	硬質泥岩	189	199	2551	こも編み石	粗粒安山岩	214	220
2490	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2552	こも編み石	綠色片岩	214	220
2491	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2553	敵石?	綠色片岩	214	220
2492	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2554	こも編み石	雲母石英片岩	214	220
2493	打製石斧	硬質泥岩	189	199	2555	こも編み石	粗粒安山岩	215	220
2494	打製石斧	雲母石英片岩	192	190	2556	こも編み石	閃綠岩	215	220
2495	削器	硬質泥岩	181	193	2557	こも編み石	綠色片岩	215	220
2496	打製石斧	硬質泥岩	181	193	2558	こも編み石	雲母石英片岩	215	220
2497	石核	硬質泥岩	181	193	2559	こも編み石	砂岩	215	220
2498	削片	硬質泥岩	181	193	2560	打製石斧	硬質泥岩	206	211
2499	削器	硬質泥岩	181	193	2561	打製石斧	雲母石英片岩	197	204
2500	礮器	硬質泥岩	181	193	2562	打製石斧	硬質泥岩	210	216
2501	棒器	硬質泥岩	181	193	2563	打製石斧	硬質泥岩	206	211
2502	棒器	硬質泥岩	181	193	2564	打製石斧	硬質泥岩	217	222
2503	削片	硬質泥岩	181	193	2565	打製石斧	硬質泥岩	217	222
2504	打製石斧?	硬質泥岩	181	193	2566	礮器	硬質泥岩	217	222
2505	石核	硬質泥岩	181	193	2567	打製石斧	硬質泥岩	217	222
2506	削器	頁岩	181	193	2568	打製石斧	硬質泥岩	213	218
2507	石核?	黑色安山岩	181	193	2569	石核	硬質泥岩	217	222
2508	块状耳飾	滑石	190	199	2570	打製石斧	硬質泥岩	20	38
2509	欠香				2571	紡錘車	砂岩	115	133
2510	欠香				2572	石錐	硬質泥岩	173	181

遺物索引黑曜石類

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
3001	打製石鏃	黒曜石	42	61	3077	打製石鏃	黒曜石	91	110	3152	打製石鏃	黒曜石	182	194
3002	打製石鏃	黒曜石	42	61	3078	打製石鏃	黒曜石	91	110	3153	打製石鏃	黒曜石	182	194
3003	打製石鏃	黒曜石	47	66	3079	打製石鏃	黒曜石	92	112	3154	打製石鏃	黒曜石	182	194
3004	打製石鏃	黒曜石	54	73	3080	打製石鏃	黒曜石	152	164	3155	打製石鏃	黒曜石	182	194
3005	打製石鏃	黒曜石	37	57	3081	打製石鏃	黒曜石	133	148	3156	打製石鏃	黒曜石	182	194
3006	打製石鏃	黒曜石	37	57	3082	打製石鏃	黒曜石	133	148	3157	打製石鏃	黒曜石	182	194
3007	打製石鏃	黒曜石	37	57	3083	打製石鏃	黒曜石	133	148	3158	打製石鏃	黒曜石	182	194
3008	打製石鏃	黒曜石	37	57	3084	打製石鏃	黒曜石	24	41	3159	打製石鏃	黒曜石	182	194
3009	打製石鏃	黒曜石	38	59	3085	打製石鏃	黒曜石	24	41	3160	打製石鏃	黒曜石	182	194
3010	打製石鏃	黒曜石	33	52	3086	打製石鏃	黒曜石	24	41	3161	打製石鏃	黒曜石	182	194
3011	打製石鏃	黒曜石	33	52	3087	打製石鏃	黒曜石	24	41	3162	打製石鏃	黒曜石	182	200
3012	打製石鏃	黒曜石	33	54	3088	石鏃	黒曜石	156	169	3163	打製石鏃	黒曜石	179	191
3013	打製石鏃	黒曜石	31	49	3089	打製石鏃	黒曜石	156	169	3164	打製石鏃	黒曜石	179	191
3014	打製石鏃	黒曜石	17	34	3090	打製石鏃	黒曜石	69	90	3165	打製石鏃	黒曜石	182	194
3015	打製石鏃	黒曜石	56	74	3091	打製石鏃	黒曜石	69	90	3166	打製石鏃	黒曜石	182	194
3016	打製石鏃	黒曜石	56	75	3092	打製石鏃	黒曜石	69	90	3167	打製石鏃	黒曜石	182	194
3017	打製石鏃	黒曜石	65	86	3093	打製石鏃	黒曜石	71	91	3168	打製石鏃	黒曜石	182	200
3018	打製石鏃	黒曜石	65	86	3094	打製石鏃	黒曜石	71	91	3169	打製石鏃	黒曜石	182	194
3019	打製石鏃	黒曜石	65	86	3095	打製石鏃	黒曜石	100	120	3170	打製石鏃	黒曜石	182	194
3020	打製石鏃	黒曜石	66	87	3096	打製石鏃	黒曜石	96	112	3171	打製石鏃	黒曜石	183	200
3021	打製石鏃	黒曜石	77	94	3097	打製石鏃	黒曜石	74	92	3172	打製石鏃	黒曜石	179	193
3022	打製石鏃	黒曜石	77	95	3098	打製石鏃	黒曜石	74	92	3173	打製石鏃	黒曜石	183	194
3023	打製石鏃	黒曜石	77	94	3099	打製石鏃	黒曜石	74	92	3174	打製石鏃	黒曜石	183	194
3024	打製石鏃	黒曜石	56	75	3100	打製石鏃	黒曜石	74	92	3175	打製石鏃	黒曜石	183	194
3025	打製石鏃	黒曜石	56	76	3101	打製石鏃	黒曜石	122	138	3176	削器	黒曜石	182	194
3026	打製石鏃	黒曜石	56	76	3102	打製石鏃	黒曜石	122	138	3177A	打製石鏃	黒曜石	183	200
3027	打製石鏃	黒曜石	56	75	3103	打製石鏃	黒曜石	122	138	3177B	打製石鏃	黒曜石	183	200
3028	打製石鏃	黒曜石	56	75	3104	打製石鏃	黒曜石	149	162	3178	打製石鏃	黒曜石	183	200
3029	打製石鏃	黒曜石	20	38	3105	打製石鏃	黒曜石	148	160	3179	打製石鏃	黒曜石	183	200
3030	打製石鏃	黒曜石	57	75	3106	異形石鏃	黒曜石	149	162	3180	打製石鏃	黒曜石	179	193
3031	打製石鏃	黒曜石	62	83	3107	打製石鏃	黒曜石	165	176	3181	打製石鏃	黒曜石	183	194
3032	打製石鏃	黒曜石	61	82	3108	打製石鏃	黒曜石	150	163	3182	打製石鏃	黒曜石	183	194
3033	打製石鏃	黒曜石	61	82	3109A	打製石鏃	黒曜石	104	123	3183	打製石鏃	黒曜石	183	194
3034	打製石鏃	黒曜石	61	82	3109B	打製石鏃	黒曜石	104	123	3184	打製石鏃	黒曜石	183	194
3035	打製石鏃	黒曜石	61	82	3110	打製石鏃	黒曜石	137	151	3185	打製石鏃	黒曜石	183	194
3036	打製石鏃	黒曜石	61	82	3111	打製石鏃	黒曜石	137	151	3186	打製石鏃	黒曜石	183	194
3037	打製石鏃	黒曜石	61	82	3112	打製石鏃	黒曜石	154	167	3187	打製石鏃	黒曜石	183	194
3038	打製石鏃	黒曜石	61	82	3113	打製石鏃	黒曜石	120	140	3188	打製石鏃	黒曜石	183	194
3039	打製石鏃	黒曜石	61	82	3114	打製石鏃	黒曜石	137	152	3189	打製石鏃	黒曜石	183	194
3040	石鏃	黒曜石	61	82	3115	打製石鏃	黒曜石	142	155	3190	打製石鏃	黒曜石	183	194
3041	打製石鏃	黒曜石	61	82	3116	打製石鏃	黒曜石	142	155	3191	打製石鏃	黒曜石	183	194
3042	打製石鏃	黒曜石	62	83	3117	打製石鏃	黒曜石	29	47	3192	打製石鏃	黒曜石	183	194
3043	打製石鏃	黒曜石	92	112	3118	打製石鏃	黒曜石	29	48	3193	打製石鏃	黒曜石	183	194
3044	打製石鏃	黒曜石	91	112	3119	打製石鏃?	黒曜石	29	47	3194	打製石鏃	黒曜石	183	194
3045	打製石鏃	黒曜石	17	36	3120	打製石鏃	黒曜石	29	48	3195	打製石鏃	黒曜石	183	194
3046	打製石鏃	黒曜石	59	78	3121	打製石鏃	黒曜石	156	170	3196	打製石鏃	黒曜石	183	194
3047	石鏃	黒曜石	59	78	3122	打製石鏃	黒曜石	25	45	3197	打製石鏃	黒曜石	183	200
3048	打製石鏃	黒曜石	59	80	3123	打製石鏃	黒曜石	27	46	3198	打製石鏃	黒曜石	183	200
3049	打製石鏃	黒曜石	59	80	3124	打製石鏃	黒曜石	96	114	3199	打製石鏃	黒曜石	183	194
3050	欠倉	黒曜石	59	80	3125	打製石鏃	黒曜石	146	159	3200	打製石鏃	黒曜石	183	194
3051	打製石鏃	黒曜石	79	97	3126	打製石鏃	黒曜石	98	117	3201	打製石鏃	黒曜石	183	194
3052	打製石鏃	黒曜石	79	97	3127	打製石鏃	黒曜石	98	117	3202	打製石鏃	黒曜石	183	194
3053	打製石鏃	黒曜石	79	97	3128	打製石鏃	黒曜石	71	90	3203	打製石鏃	黒曜石	183	194
3054	欠倉	黒曜石	80	97	3129	打製石鏃	黒曜石	31	50	3204	打製石鏃	黒曜石	183	194
3055	打製石鏃	黒曜石	80	97	3130	打製石鏃	黒曜石	99	119	3205	打製石鏃	黒曜石	183	194
3056	打製石鏃	黒曜石	80	98	3131	打製石鏃	黒曜石	68	89	3206	打製石鏃	黒曜石	183	194
3057	打製石鏃	黒曜石	131	146	3132	打製石鏃	黒曜石	68	89	3207	打製石鏃	黒曜石	184	194
3058	打製石鏃	黒曜石	83	103	3133	打製石鏃	黒曜石	68	89	3208	打製石鏃	黒曜石	184	194
3059	打製石鏃	黒曜石	83	103	3134	打製石鏃	黒曜石	139	153	3209	打製石鏃	黒曜石	184	194
3060	打製石鏃	黒曜石	83	103	3135	打製石鏃	黒曜石	139	153	3210	打製石鏃	黒曜石	184	194
3061	打製石鏃	黒曜石	83	103	3136	打製石鏃	黒曜石	139	154	3211	削器	黒曜石	184	194
3062	打製石鏃	黒曜石	83	103	3137	打製石鏃	黒曜石	115	133	3212	削器	黒曜石	184	194
3063	打製石鏃	黒曜石	83	103	3138	打製石鏃	黒曜石	109	127	3213	打製石鏃	黒曜石	184	194
3064	打製石鏃	黒曜石	83	103	3139	打製石鏃	黒曜石	111	129	3214	打製石鏃	黒曜石	184	194
3065	打製石鏃	黒曜石	83	103	3140	削器	黒曜石	110	128	3215	打製石鏃	黒曜石	184	194
3066	打製石鏃	黒曜石	83	103	3141	打製石鏃	黒曜石	125	142	3216	打製石鏃	黒曜石	184	194
3067	打製石鏃	黒曜石	83	103	3142	打製石鏃	黒曜石	125	142	3217	打製石鏃	黒曜石	184	194
3068	打製石鏃	黒曜石	83	103	3143	打製石鏃	黒曜石	173	181	3218	打製石鏃	黒曜石	184	194
3069	打製石鏃	黒曜石	83	103	3144	打製石鏃	黒曜石	173	181	3219	打製石鏃	黒曜石	184	194
3070	打製石鏃	黒曜石	83	103	3145	打製石鏃	黒曜石	173	181	3220	打製石鏃	黒曜石	184	194
3071	打製石鏃	黒曜石	83	103	3146	打製石鏃	黒曜石	175	184	3221	石鏃	黒曜石	184	200
3072	打製石鏃	黒曜石	83	103	3147	打製石鏃	黒曜石	175	184	3222	打製石鏃	黒曜石	184	194
3073	打製石鏃	黒曜石	22	39	3148	打製石鏃	黒曜石	17	31	3223	石鏃	黒曜石	184	194
3074	打製石鏃	黒曜石	22	39	3149	打製石鏃?	黒曜石	182	194	3224	打製石鏃	黒曜石	184	194
3075	打製石鏃	黒曜石	91	110	3150	打製石鏃	黒曜石	182	200	3225	打製石鏃	黒曜石	184	194
3076	打製石鏃	黒曜石	91	110	3151	打製石鏃	黒曜石	182	194	3226	打製石鏃	黒曜石	184	194

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
3227	打製石鏃	黒曜石	184	194	3303	原石	黒曜石	83	100	3379	削片	黒曜石	なし	63
3228	打製石鏃	黒曜石	184	194	3304	石核	黒曜石	135	150	3380	削片	黒曜石	なし	37
3229	打製石鏃	黒曜石	184	194	3305	石核	黒曜石	83	99	3381	削片一拵	黒曜石	なし	49
3230	石鏃	黒曜石	184	194	3306	原石	黒曜石	92	112	3382	削片	黒曜石	なし	200
3231	打製石鏃	黒曜石	184	194	3307	削片	黒曜石	なし	41	3383	削片一拵	黒曜石	なし	31
3232	打製石鏃	黒曜石	191	190	3308	石核	黒曜石	71	91	3384	削片一拵	黒曜石	なし	35
3233	打製石鏃	黒曜石	191	190	3309	削片	黒曜石	なし	136	3385	削片	黒曜石	なし	35
3234	打製石鏃	黒曜石	191	190	3310	削片	黒曜石	なし	85	3386	削片一拵	黒曜石	なし	34
3235	打製石鏃	黒曜石	191	190	3311	削片	黒曜石	なし	157	3387	削片一拵	黒曜石	なし	74
3236	打製石鏃	黒曜石	191	190	3312	削片	黒曜石	なし	159	3388	削片	黒曜石	なし	74
3237	打製石鏃	黒曜石	191	190	3313	削片	黒曜石	なし	159	3389	削片一拵	黒曜石	なし	86
3238	打製石鏃	黒曜石	191	190	3314	削片	黒曜石	なし	117	3390	削片一拵	黒曜石	なし	86
3239	打製石鏃	黒曜石	192	190	3315	削片	黒曜石	なし	89	3391	削片一拵	黒曜石	なし	87
3240	打製石鏃	チャート	37	57	3316	削片	黒曜石	なし	172	3392	削片	黒曜石	なし	87
3241	打製石鏃	チャート	37	57	3317	石核	黒曜石	175	184	3393	削片一拵	黒曜石	なし	87
3242	打製石鏃	チャート	37	57	3318	削片	黒曜石	なし	184	3394	削片一拵	黒曜石	なし	94
3243	打製石鏃	珪質準片岩	38	59	3319	削片	黒曜石	なし	184	3395	削片一拵	黒曜石	なし	94
3244	石鏃	石鏃	17	34	3320	削片	黒曜石	なし	115	3396	削片一拵	黒曜石	なし	95
3245	打製石鏃	チャート	77	94	3321	削片	黒曜石	なし	190	3397	削片	黒曜石	なし	95
3246	打製石鏃	チャート	56	76	3322	削片	黒曜石	なし	190	3398	削片	黒曜石	なし	95
3247	打製石鏃	黒色安山岩	56	75	3323	削片	黒曜石	なし	189	3399	削片一拵	黒曜石	なし	95
3248	打製石鏃	チャート	56	76	3324	削片	黒曜石	なし	62	3400	削片一拵	黒曜石	なし	75
3249	打製石鏃	チャート	91	112	3325	削片一拵	黒曜石	なし	61	3401	削片一拵	黒曜石	なし	76
3250	打製石鏃	チャート	59	80	3326	削片	黒曜石	なし	62	3402	削片	黒曜石	なし	76
3251	打製石鏃	玉髄	129	145	3327	削片	黒曜石	なし	62	3403	削片一拵	黒曜石	なし	76
3252	磨製石鏃	珪質準片岩	131	146	3328	削片	黒曜石	なし	72	3404	削片一拵	黒曜石	なし	76
3253	打製石鏃	チャート	83	103	3329	削片一拵	黒曜石	なし	72	3405	削片一拵	黒曜石	なし	76
3254	打製石鏃	チャート	83	103	3330	削片一拵	黒曜石	なし	70	3406	削片一拵	黒曜石	なし	33
3255	磨製石鏃	珪質準片岩	135	149	3331	削片一拵	黒曜石	なし	68	3407	削片一拵	黒曜石	なし	39
3256	打製石鏃	チャート	92	112	3332	削片一拵	黒曜石	なし	68	3408	削片一拵	黒曜石	なし	38
3257	打製石鏃	チャート	87	107	3333	削片一拵	黒曜石	なし	67	3409	削片一拵	黒曜石	なし	75
3258	打製石鏃	チャート	137	151	3334	削片	黒曜石	なし	67	3410	削片一拵	黒曜石	なし	83
3259	打製石鏃	黒色頁岩	120	140	3335	削片一拵	黒曜石	なし	66	3411	削片	黒曜石	なし	82
3260	打製石鏃	チャート	27	46	3336	削片一拵	黒曜石	なし	66	3412	削片	黒曜石	なし	82
3261	磨製石鏃	珪質準片岩	161	173	3337	削片	黒曜石	なし	60	3413	削片	黒曜石	なし	82
3262	打製石鏃	チャート	158	171	3338	削片一拵	黒曜石	なし	67	3414	削片	黒曜石	なし	82
3263	打製石鏃	黒色頁岩	139	153	3339	削片	黒曜石	なし	73	3415	削片	黒曜石	なし	82
3264	打製石鏃	黒色安山岩	75	93	3340	削片一拵	黒曜石	なし	60	3416	削片	黒曜石	なし	82
3265	打製石鏃	チャート	115	133	3341	削片	黒曜石	なし	59	3417	削片	黒曜石	なし	82
3266	打製石鏃	チャート	173	183	3342	削片一拵	黒曜石	なし	57	3418	削片	黒曜石	なし	82
3267	欠奉				3343	削片	黒曜石	なし	57	3419	削片	黒曜石	なし	82
3268	打製石鏃	珪質頁岩	184	194	3344	削片	黒曜石	なし	57	3420	削片一拵	黒曜石	なし	82
3269	打製石鏃	チャート	184	194	3345	削片一拵	黒曜石	なし	57	3421	削片	黒曜石	なし	82
3270	削片	チャート	184	194	3346	削片	黒曜石	なし	57	3422	削片	黒曜石	なし	82
3271	打製石鏃	黒色安山岩	184	194	3347	削片	黒曜石	なし	57	3423	削片	黒曜石	なし	82
3272	打製石鏃	黒色頁岩	184	200	3348	削片	黒曜石	なし	59	3424	削片一拵	黒曜石	なし	82
3273	打製石鏃	チャート	184	200	3349	削片	黒曜石	なし	59	3425	削片一拵	黒曜石	なし	83
3274	打製石鏃	玉髄	184	194	3350	削片	黒曜石	なし	59	3426	削片	黒曜石	なし	84
3275	打製石鏃	珪質頁岩?	184	194	3351	削片	黒曜石	なし	59	3427	削片	黒曜石	93	112
3276	磨製石鏃	珪質準片岩	184	194	3352	削片	黒曜石	なし	59	3428	削片一拵	黒曜石	93	112
3277	打製石鏃	チャート	179	191	3353	削片	黒曜石	なし	57	3429	削片一拵	黒曜石	なし	36
3278	打製石鏃	チャート	191	190	3354	削片一拵	黒曜石	なし	57	3430	削片一拵	黒曜石	なし	78
3279	打製石鏃	珪質頁岩	191	190	3355	削片	黒曜石	なし	57	3431	削片一拵	黒曜石	なし	77
3280	石鏃	黒曜石	61	82	3356	削片	黒曜石	なし	59	3432	削片一拵	黒曜石	なし	78
3281	石鏃	黒曜石	156	169	3357	削片一拵	黒曜石	なし	52	3433	削片	黒曜石	なし	80
3282	石鏃	黒曜石	156	170	3358	削片	黒曜石	なし	52	3434	削片一拵	黒曜石	なし	194
3283	石鏃	黒曜石	96	116	3359	削片	黒曜石	なし	52	3435	削片一拵	黒曜石	なし	135
3284	黄形石鏃	黒曜石	179	191	3360	削片	黒曜石	なし	52	3436	削片一拵	黒曜石	なし	135
3285	削片	黒曜石	なし	194	3361	削片	黒曜石	なし	53	3437	削片一拵	黒曜石	なし	135
3286	石核	黒曜石	184	194	3362	削片一拵	黒曜石	なし	53	3438	削片一拵	黒曜石	なし	135
3287	石鏃	チャート	185	200	3363	削片一拵	黒曜石	なし	53	3439	削片一拵	黒曜石	なし	97
3288	石鏃	黒曜石	185	194	3364	削片一拵	黒曜石	なし	52	3440	削片一拵	黒曜石	なし	97
3289	削片	黒曜石	なし	61	3365	削片	黒曜石	なし	52	3441	削片	黒曜石	なし	98
3290	削片	黒曜石	なし	59	3366	削片	黒曜石	なし	52	3442	削片一拵	黒曜石	なし	97
3291	削片	黒曜石	なし	59	3367	削片一拵	黒曜石	なし	53	3443	削片一拵	黒曜石	なし	98
3292	石核	黒曜石	176	186	3368	削片	黒曜石	なし	53	3444	削片一拵	黒曜石	なし	143
3293	石核	黒曜石	177	186	3369	削片	黒曜石	なし	53	3445	削片	黒曜石	なし	145
3294	削片	黒曜石	なし	84	3370	削片一拵	黒曜石	なし	49	3446	削片	黒曜石	なし	145
3295	削片	黒曜石	なし	85	3371	削片一拵	黒曜石	なし	72	3447	削片	黒曜石	なし	145
3296	削片	黒曜石	なし	82	3372	削片	黒曜石	なし	62	3448	削片	黒曜石	なし	145
3297	削片	黒曜石	なし	83	3373	削片	黒曜石	なし	73	3449	削片一拵	黒曜石	なし	145
3298	削片	黒曜石	なし	82	3374	削片一拵	黒曜石	なし	63	3450	削片	黒曜石	なし	145
3299	削片	黒曜石	なし	82	3375	削片	黒曜石	なし	70	3451	削片	黒曜石	なし	145
3300	削片	黒曜石	なし	97	3376	削片一拵	黒曜石	なし	66	3452	削片	黒曜石	なし	145
3301	旧石器	黒曜石?	131	146	3377	削片	黒曜石	なし	54	3453	削片	黒曜石	なし	145
3302	石鏃	黒曜石	131	146	3378	削片一拵	黒曜石	なし	54	3454	削片	黒曜石	なし	145

Ⅹ 索引

番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	
3455	銅片	黒曜石	△L 145	3531	銅片一拵	黒曜石	△L 162	3607	銅片一拵	黒曜石	△L 114	3607	銅片一拵	黒曜石	△L 114
3456	銅片一拵	黒曜石	△L 145	3532	銅片一拵	黒曜石	△L 160	3608	銅片一拵	黒曜石	△L 114	3608	銅片一拵	黒曜石	△L 114
3457	銅片	黒曜石	△L 145	3533	銅片一拵	黒曜石	△L 162	3609	銅片	黒曜石	△L 151	3610	銅片	黒曜石	△L 151
3458	銅片	黒曜石	△L 145	3534	銅片	黒曜石	△L 162	3610	銅片一拵	黒曜石	△L 151	3611	銅片一拵	黒曜石	△L 44
3459	銅片	黒曜石	△L 145	3535	銅片一拵	黒曜石	△L 108	3611	銅片	黒曜石	△L 44	3612	銅片一拵	黒曜石	△L 44
3460	銅片一拵	黒曜石	△L 146	3536	銅片一拵	黒曜石	△L 108	3612	銅片一拵	黒曜石	△L 44	3613	銅片	黒曜石	△L 44
3461	銅片一拵	黒曜石	△L 146	3537	銅片一拵	黒曜石	△L 108	3613	銅片	黒曜石	△L 44	3614	銅片	黒曜石	△L 44
3462	銅片一拵	黒曜石	△L 100	3538	銅片一拵	黒曜石	△L 176	3614	銅片	黒曜石	△L 64	3615	銅片	黒曜石	△L 64
3463	銅片一拵	黒曜石	△L 100	3539	銅片	黒曜石	△L 85	3615	銅片	黒曜石	△L 64	3616	銅片	黒曜石	△L 64
3464	銅片一拵	黒曜石	△L 104	3540	銅片一拵	黒曜石	△L 121	3616	銅片	黒曜石	△L 64	3617	銅片	黒曜石	△L 64
3465	銅片一拵	黒曜石	△L 105	3541	銅片一拵	黒曜石	△L 121	3617	銅片	黒曜石	△L 64	3618	銅片一拵	黒曜石	△L 158
3466	銅片一拵	黒曜石	△L 146	3542	銅片	黒曜石	△L 122	3618	銅片一拵	黒曜石	△L 158	3619	銅片一拵	黒曜石	△L 159
3467	銅片一拵	黒曜石	△L 39	3543	銅片一拵	黒曜石	△L 122	3620	銅片一拵	黒曜石	△L 173	3621	銅片一拵	黒曜石	△L 173
3468	銅片	黒曜石	△L 39	3544	銅片一拵	黒曜石	△L 122	3622	銅片一拵	黒曜石	△L 173	3623	銅片一拵	黒曜石	△L 174
3469	銅片一拵	黒曜石	△L 149	3545	銅片一拵	黒曜石	△L 122	3624	銅片	黒曜石	△L 174	3625	銅片一拵	黒曜石	△L 117
3470	銅片一拵	黒曜石	△L 149	3546	銅片一拵	黒曜石	△L 163	3626	銅片	黒曜石	△L 118	3627	銅片一拵	黒曜石	△L 118
3471	銅片一拵	黒曜石	△L 149	3547	銅片	黒曜石	△L 163	3628	銅片一拵	黒曜石	△L 118	3629	銅片	黒曜石	△L 118
3472	銅片	黒曜石	△L 112	3548	銅片	黒曜石	△L 163	3629	銅片一拵	黒曜石	△L 118	3630	銅片	黒曜石	△L 118
3473	銅片	黒曜石	△L 110	3549	銅片一拵	黒曜石	△L 158	3631	銅片一拵	黒曜石	△L 50	3632	銅片一拵	黒曜石	△L 171
3474	銅片	黒曜石	△L 110	3550	銅片一拵	黒曜石	△L 157	3633	銅片一拵	黒曜石	△L 171	3634	銅片一拵	黒曜石	158 171
3475	銅片	黒曜石	△L 110	3551	銅片	黒曜石	△L 93	3635	銅片	黒曜石	△L 119	3636	銅片	黒曜石	△L 43
3476	銅片	黒曜石	△L 110	3552	銅片	黒曜石	△L 93	3637	銅片一拵	黒曜石	△L 89	3638	銅片一拵	黒曜石	△L 89
3477	銅片	黒曜石	△L 110	3553	銅片	黒曜石	△L 125	3639	銅片一拵	黒曜石	△L 89	3640	銅片	黒曜石	△L 154
3478	銅片	黒曜石	△L 110	3554	銅片一拵	黒曜石	△L 125	3641	銅片一拵	黒曜石	△L 154	3642	銅片一拵	黒曜石	△L 133
3479	銅片	黒曜石	△L 110	3555	銅片一拵	黒曜石	108 124	3643	銅片一拵	黒曜石	△L 130	3644	銅片一拵	黒曜石	△L 130
3480	銅片	黒曜石	△L 110	3556	銅片一拵	黒曜石	△L 123	3645	銅片一拵	黒曜石	△L 133	3646	銅片一拵	黒曜石	△L 126
3481	銅片	黒曜石	△L 110	3557	銅片一拵	黒曜石	△L 124	3647	銅片一拵	黒曜石	△L 126	3648	銅片一拵	黒曜石	△L 134
3482	銅片一拵	黒曜石	△L 110	3558	銅片	黒曜石	△L 134	3649	銅片一拵	黒曜石	△L 127	3651	銅片一拵	黒曜石	△L 127
3483	銅片	黒曜石	△L 112	3559	銅片	黒曜石	△L 123	3650	銅片一拵	黒曜石	△L 127	3652	銅片一拵	黒曜石	△L 128
3484	銅片一拵	黒曜石	△L 112	3560	銅片	黒曜石	△L 123	3653	銅片一拵	黒曜石	△L 128	3654	銅片一拵	黒曜石	△L 129
3485	銅片	黒曜石	△L 112	3561	銅片	黒曜石	△L 123	3655	銅片一拵	黒曜石	△L 129	3656	銅片一拵	黒曜石	△L 141
3486	銅片一拵	黒曜石	△L 112	3562	銅片	黒曜石	△L 123	3657	銅片	黒曜石	△L 142	3659	銅片一拵	黒曜石	△L 142
3487	銅片一拵	黒曜石	△L 164	3563	銅片	黒曜石	△L 124	3660	銅片一拵	黒曜石	△L 142	3662	銅片一拵	黒曜石	△L 172
3488	銅片一拵	黒曜石	△L 164	3564	銅片	黒曜石	△L 124	3663	銅片一拵	黒曜石	△L 172	3664	銅片一拵	黒曜石	△L 157
3489	銅片一拵	黒曜石	△L 164	3565	銅片	黒曜石	△L 124	3665	銅片一拵	黒曜石	△L 183	3666	銅片一拵	黒曜石	△L 183
3490	銅片一拵	黒曜石	△L 148	3566	銅片一拵	黒曜石	△L 124	3668	銅片一拵	黒曜石	△L 183	3669	銅片一拵	黒曜石	△L 181
3491	銅片一拵	黒曜石	△L 148	3567	銅片一拵	黒曜石	△L 117	3670	銅片一拵	黒曜石	△L 181	3671	銅片一拵	黒曜石	△L 182
3492	銅片一拵	黒曜石	△L 148	3568	銅片一拵	黒曜石	△L 139	3672	銅片	黒曜石	△L 182	3673	銅片一拵	黒曜石	△L 184
3493	銅片一拵	黒曜石	△L 148	3569	銅片	黒曜石	△L 139	3674	銅片一拵	黒曜石	△L 184	3675	銅片一拵	黒曜石	△L 184
3494	銅片一拵	黒曜石	△L 147	3570	銅片一拵	黒曜石	△L 65	3676	銅片一拵	黒曜石	△L 184	3677	銅片一拵	黒曜石	△L 184
3495	銅片	黒曜石	△L 147	3571	銅片一拵	黒曜石	△L 65	3678	銅片一拵	黒曜石	△L 184	3679	銅片一拵	黒曜石	△L 115
3496	附器	黒曜石	154 166	3572	銅片一拵	黒曜石	△L 65	3680	銅片一拵	黒曜石	△L 115	3681	銅片一拵	黒曜石	△L 115
3497	銅片一拵	黒曜石	△L 166	3573	銅片一拵	黒曜石	△L 65	3682	銅片一拵	黒曜石	△L 116				
3498	銅片	黒曜石	△L 166	3574	銅片	黒曜石	△L 170								
3499	銅片	黒曜石	△L 166	3575	銅片一拵	黒曜石	△L 150								
3500	銅片一拵	黒曜石	△L 41	3576	銅片	黒曜石	△L 150								
3501	銅片一拵	黒曜石	△L 41	3577	銅片一拵	黒曜石	△L 151								
3502	銅片一拵	黒曜石	△L 43	3578	銅片一拵	黒曜石	△L 167								
3503	銅片一拵	黒曜石	△L 169	3579	銅片一拵	黒曜石	△L 167								
3504	銅片一拵	黒曜石	△L 169	3580	銅片一拵	黒曜石	△L 140								
3505	銅片一拵	黒曜石	△L 169	3581	銅片一拵	黒曜石	△L 140								
3506	銅片一拵	黒曜石	△L 194	3582	銅片一拵	黒曜石	△L 140								
3507	銅片	黒曜石	△L 96	3583	銅片一拵	黒曜石	△L 140								
3508	銅片一拵	黒曜石	△L 107	3584	銅片	黒曜石	△L 140								
3509	銅片一拵	黒曜石	△L 90	3585	銅片一拵	黒曜石	△L 152								
3510	銅片一拵	黒曜石	△L 90	3586	銅片	黒曜石	△L 152								
3511	銅片一拵	黒曜石	△L 91	3587	銅片	黒曜石	△L 152								
3512	銅片	黒曜石	△L 120	3588	銅片一拵	黒曜石	△L 154								
3513	銅片	黒曜石	△L 120	3589	銅片一拵	黒曜石	△L 154								
3514	銅片	黒曜石	△L 120	3590	銅片一拵	黒曜石	△L 155								
3515	銅片	黒曜石	△L 120	3591	銅片一拵	黒曜石	△L 156								
3516	銅片一拵	黒曜石	△L 120	3592	銅片	黒曜石	△L 175								
3517	銅片一拵	黒曜石	△L 120	3593	銅片	黒曜石	△L 47								
3518	銅片	黒曜石	△L 180	3594	銅片一拵	黒曜石	△L 47								
3519	銅片一拵	黒曜石	△L 177	3595	銅片一拵	黒曜石	△L 47								
3520	銅片一拵	黒曜石	△L 112	3596	銅片一拵	黒曜石	△L 48								
3521	銅片一拵	黒曜石	△L 12	3597	銅片一拵	黒曜石	△L 170								
3522	銅片	黒曜石	△L 88	3598	銅片一拵	黒曜石	△L 170								
3523	銅片一拵	黒曜石	△L 88	3599	銅片一拵	黒曜石	△L 45								
3524	銅片一拵	黒曜石	△L 92	3600	銅片一拵	黒曜石	△L 46								
3525	銅片一拵	黒曜石	△L 92	3601	銅片一拵	黒曜石	△L 46								
3526	銅片	黒曜石	△L 92	3602	銅片一拵	黒曜石	△L 155								
3527	銅片一拵	黒曜石	△L 138	3603	銅片一拵	黒曜石	△L 165								
3528	銅片一拵	黒曜石	△L 136	3604	銅片一拵	黒曜石	△L 113								
3529	銅片一拵	黒曜石	△L 138	3605	銅片一拵	黒曜石	△L 113								
3530	銅片一拵	黒曜石	△L 139	3606	銅片一拵	黒曜石	△L 114								



番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真	番号	器形	材質	本文	写真
3683	剥片	黒曜石	△	116	3746	剥片	黒曜石	△	195	3808	器形	材質	△	112
3684	剥片	黒曜石	△	167	3747	剥片	黒曜石	△	195	3809	剥片	チャート	△	164
3685	剥片一拵	黒曜石	△	116	3748	剥片	黒曜石	△	195	3810	剥片	チャート	△	43
3686	剥片	黒曜石	△	31	3749	剥片	黒曜石	△	195	3811	剥片	チャート	△	169
3687	欠番				3750	剥片一拵	黒曜石	△	195	3812	剥片一拵	チャート	△	92
3688	剥片	黒曜石	△	194	3751	剥片一拵	黒曜石	△	200	3813	剥片	珪質頁岩	△	162
3689	剥片	黒曜石	△	194	3752	剥片一拵	黒曜石	△	200	3814	剥片	チャート	△	108
3690	剥片	黒曜石	△	194	3753	剥片一拵	黒曜石	△	200	3815	剥片	チャート	△	85
3691	剥片一拵	黒曜石	△	200	3754	剥片一拵	黒曜石	△	195	3816	剥片	黒曜石	△	150
3692	剥片	黒曜石	△	195	3755	剥片一拵	黒曜石	△	195	3817	剥片	チャート	△	140
3693	原石	黒曜石	△	191	3756	剥片一拵	黒曜石	△	200	3818	剥片	チャート	△	47
3694	剥片	黒曜石	△	195	3757	剥片一拵	黒曜石	△	195	3819	剥片	チャート	△	48
3695	剥片	黒曜石	△	195	3758	剥片一拵	黒曜石	△	200	3820	剥片	チャート	△	170
3696	剥片	黒曜石	△	200	3759	剥片一拵	黒曜石	△	200	3821	剥片一拵	チャート	△	46
3697	剥片	黒曜石	△	191	3760	剥片	黒曜石	△	200	3822	剥片	チャート	△	118
3698	剥片	黒曜石	△	195	3761	剥片	黒曜石	△	200	3823	剥片	チャート	△	93
3699	剥片	黒曜石	△	200	3762	剥片	黒曜石	△	200	3824	剥片	チャート	△	130
3700	剥片	黒曜石	△	195	3763	剥片	黒曜石	△	200	3825	剥片一拵	チャート	△	183
3701	剥片	黒曜石	△	200	3764	剥片	黒曜石	△	200	3826	剥片	チャート	△	181
3702	剥片	黒曜石	△	195	3765	剥片一拵	黒曜石	△	200	3827	剥片	チャート	△	115
3703	剥片	黒曜石	△	191	3766	剥片	黒曜石	△	195	3828	剥片	チャート	△	196
3704	剥片	黒曜石	△	195	3767	剥片	黒曜石	△	195	3829	剥片	チャート	△	200
3705	剥片	黒曜石	△	195	3768	剥片	黒曜石	△	195	3830	剥片	チャート	△	196
3706	剥片	黒曜石	△	195	3769	剥片	黒曜石	△	195	3831	剥片	チャート	△	196
3707	剥片	黒曜石	△	200	3770	剥片一拵	黒曜石	△	196	3832	剥片	チャート	△	196
3708	剥片	黒曜石	△	200	3771	剥片一拵	黒曜石	△	196	3833	剥片	チャート	△	196
3709	剥片	黒曜石	△	195	3772	剥片一拵	黒曜石	△	196	3834	剥片	チャート	△	200
3710	剥片	黒曜石	△	195	3773	剥片一拵	黒曜石	△	196	3835	剥片	チャート	△	200
3711	剥片	黒曜石	△	195	3774	剥片	黒曜石	△	196	3836	打製石鏝	チャート	△	211
3712	剥片	黒曜石	△	195	3775	剥片	黒曜石	△	196	3837	打製石鏝	黒曜石	△	212
3713	剥片	黒曜石	△	195	3776	剥片	黒曜石	△	196	3838	打製石鏝	黒曜石	△	220
3714	剥片一拵	黒曜石	△	195	3777	剥片	黒曜石	△	196	3839	打製石鏝	黒曜石	△	197
3715	剥片	黒曜石	△	200	3778	剥片一拵	黒曜石	△	196	3840	石鏝	黒曜石	△	204
3716	剥片	黒曜石	△	195	3779	剥片	黒曜石	△	193	3841	石鏝	黒曜石	△	212
3717	剥片	黒曜石	△	195	3780	剥片	黒曜石	△	193	3842A	原石	黒曜石	△	210
3718	剥片	黒曜石	△	200	3781	剥片	黒曜石	△	193	3842B	石核?	黒曜石	△	215
3719	剥片	黒曜石	△	195	3782	剥片一拵	黒曜石	△	193	3843A	石核?	黒曜石	△	197
3720	剥片	黒曜石	△	195	3783	石核	黒曜石	△	185	3843B	石核	黒曜石	△	204
3721	剥片	黒曜石	△	195	3784	剥片一拵	黒曜石	△	200	3844	剥片	黒曜石	△	203
3722	剥片	黒曜石	△	200	3785A	剥片	黒曜石	△	185	3845	剥片	黒曜石	△	222
3723	剥片	黒曜石	△	195	3785B	剥片	黒曜石	△	185	3846	石核	黒曜石	△	199
3724	剥片一拵	黒曜石	△	200	3786	剥片	黒曜石	△	196	3847	剥片	黒曜石	△	212
3725	剥片	黒曜石	△	200	3787	剥片	黒曜石	△	196	3848	剥片	黒曜石	△	214
3726	剥片	黒曜石	△	200	3788	石鏝	黒曜石	△	192	3849	剥片	黒曜石	△	210
3727	剥片	黒曜石	△	195	3789	剥片	チャート	△	57	3850	剥片	黒曜石	△	210
3728	剥片	黒曜石	△	195	3790	剥片	チャート	△	53	3851	剥片	黒曜石	△	210
3729	剥片	黒曜石	△	195	3791	剥片	チャート	△	74	3852	剥片	黒曜石	△	211
3730	剥片	黒曜石	△	195	3792	剥片一拵	チャート	△	94	3853	剥片	黒曜石	△	211
3731	剥片	黒曜石	△	190	3793	剥片一拵	チャート	△	95	3854	剥片一拵	黒曜石	△	210
3732	剥片	黒曜石	△	190	3794	剥片一拵	チャート	△	76	3855	剥片	黒曜石	△	205
3733	剥片	黒曜石	△	190	3795	剥片	チャート	△	75	3856	石核?	黒曜石	△	211
3734	剥片	黒曜石	△	195	3796	剥片一拵	チャート	△	82	3857	打製石鏝	黒色安山岩	△	185
3735	剥片	黒曜石	△	195	3797	剥片一拵	チャート	△	83	3858	搔器	黒曜石	△	191
3736	剥片一拵	黒曜石	△	195	3798	剥片	チャート	△	84	3859	打製石鏝	赤色珪質岩	△	57
3737	剥片一拵	黒曜石	△	195	3799	剥片一拵	チャート	△	80	3860	石鏝	チャート	△	62
3738	剥片一拵	黒曜石	△	195	3800	剥片	チャート	△	135	3861	石鏝	チャート	△	84
3739	剥片	黒曜石	△	200	3801	剥片	チャート	△	97	3862	搔器	チャート	△	100
3740	剥片一拵	黒曜石	△	195	3802	削器	チャート	△	80	3863	欠番			
3741	剥片一拵	黒曜石	△	195	3803	削器	チャート	△	80	3864	石鏝	チャート	△	44
3742	剥片一拵	黒曜石	△	195	3804	剥片	チャート	△	80	3865	石鏝	チャート	△	31
3743	剥片	黒曜石	△	200	3805	剥片	チャート	△	143	3866	削器	チャート	△	185
3744	剥片	黒曜石	△	200	3806	剥片	チャート	△	145	3867	削器	チャート	△	185
3745	剥片	黒曜石	△	195	3807	剥片	チャート	△	100	3868	石鏝	チャート	△	185

## 金属器等索引

番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真	番号	種類	器形	本文	写真
4001	鉄製品	鉄滓	53	72	4026	鉄製品	鐵	113	130	4051	鉄製品	角釘	191	199
4002	銅鏡	一鏡	37	59	4027	鉄製品	鐵?	115	133	4052	鉄製品	鉄滓	なし	193
4003	鉄製品	鐵	39	59	4028	鉄製品	板状	113	130	4053	鉄製品	角釘	191	201
4004	鉄製品	有孔円盤	39	59	4029	鉄製品	ヤリガンナ	113	130	4054	銅鏡	寛永通宝	191	201
4005	鉄製品	鑿	33	52	4030	鉄製品	鐵?	113	130	4055	鉄製品	板状小片	191	199
4006	銅鏡	寛永通宝	33	53	4031	鉄製品	刀物	109	127	4056	鉄製品	楕板状	191	199
4007	銅鏡	寛永通宝	42	62	4032	鉄製品	角釘	109	127	4057	銅鏡	寛永通宝	191	199
4008	鉄製品	L字形	47	66	4033	鉄製品	小片	なし	153	4058	銅鏡	一鏡	191	199
4009	鉄製品	鐵	84	103	4034	鉄製品	有孔厚板	159	172	4059	鉄製品	刀子	191	199
4010	鉄製品	刀物?	84	103	4035	鉄製品	板状小片	191	190	4060	銅製品	有孔薄板	191	199
4011	銅製品	銅鉾津?	91	110	4036	鉄製品	小片8片	なし	214	4061	鉄製品	有突帯板状	191	199
4012	鉄製品	鐵?	24	41	4037	鉄製品	小片状金具	213	217	4062	銅製品	刀物	191	199
4013	鉄製品	鉄鉦?	27	42	4038	鉄製品	鉄滓小片	なし	220	4063	銅鏡	寛永通宝	217	222
4014	欠番				4039	鉄製品	角棒状	213	218	4064	鉄製品	十字形金具	217	222
4015	鉄製品	櫛?	167	179	4040	鉄製品	鈴	214	219	4065	鉛製品	鉄弾	213	217
4016	鉄製品	角釘	63	84	4041	鉄製品	刀子	203	209	4066	鉄製品	鉄滓	なし	217
4017	鉄製品	板状	120	139	4042	鉄製品	鉄滓	なし	202	4067	鉄製品	カスガイ	213	217
4018	鉄製品	鐵	102	121	4043	銅鏡	寛永通宝	215	221	4068	鉄製品	鉄滓	なし	217
4019	鉄製品	鉄滓	144	158	4044	鉄製品	鉄滓	なし	221	4069	鉄製品	刀子?	217	222
4020	鉄製品	鐵	106	125	4045	鉄製品	薄小片	196	203	4070	鉄製品	鐵	84	103
4021	鉄製品	鐵	104	123	4046	銅鏡	寛永通宝	206	211	5001	ガラス	小玉	98	3
4022	鉄製品	鐵	142	156	4047	銅鏡	寛永通宝	191	199	5002	ガラス	小玉	113	3
4023	鉄製品	刀物基部	25	45	4048	鉄製品	鉄滓	なし	201	5003	ガラス	小玉	109	3
4024	鉄製品	刀子?	26	44	4049	銅鏡	寛永通宝	179	193					
4025	鉄製品	鐵	158	171	4050	鉄製品	薄小片	191	199					

## Summary

## 1. Outline of the Site

This Nakadakase Kannon-yama site is located at Kannon-yama and Kohshin-yama sections, Nakadakase, Tomioka city, Gunma Pref., inland of east Honshu. Both points situated at the top of two ridge on Takase hills in right side Kabura river, 60 meter high from ground level, can be seen as the most strategic point, through the Kanra corridor and face to Nukisaki shrine, known as first rank shrine on Kohzuke (Gunma) district.

The archaeological excavations as administrative research on construction of the Johshin-etsu highway was held from Mei 1st 1989 to Feb. 28th 1990 as the first, from June 1st to July 31th 1990 as the second, by our Public Corporation for Archaeological Operations of Gunma. During time of the twice excavations, preservation for the main part of this site was decided, because of importance as a large residential site on Yayoi period. After that, the Education Board of Tomioka City researched for purpose of confirmation to the Historical Remains' scope on 1992 and 93. The Council of Cultural Property, the National Agency for Cultural Affairs submitted a report that appointed this site as the National Historical Remains on April 1994.

## 2. The Number of Discovered Monuments

Pre Modern Ages : the ruins of Kohshin stone monuments complex

the Middle Ages : a small part of fortress on hill top

the Ancient Ages : religious monuments including foundation stones of 2 buildings and 2 stone structures on sharp slope

Kofun Period : the ruins of a village, consist of 13 hole type dwellings

Yayoi Period : the ruins of a large village /town, consist of more 104 hole type dwellings, a half of them fired, surrounded moat and wood fences with artifacts of arms such as 9 iron arrowheads

Johmon Period : the ruins of a village, consist of more 7 hole type dwellings on the Early stage

## 3. Conclusion

### A. After The Middle Ages

After the big eruption of Asama volcano on 1783, on the top of these hills was started developing with large scale for a field and Kohshin religious place. At the Middle ages, a fortress constructed on this hill.

### B. The Ancient Ages

On the area of Kohsin-yama ridge, was found several buildings concern with Shinto/Buddism, and fine ewer of Sueki stone-ware. It seems that this site functioned as a local center of religious for mountains.

### C. Yayoi & Kofun Periods

At the Later stage of Yayoi period a highly defensive large scale village /town was constructed on this hill top. In eastern part of Japan this site is one of the biggest population density within limits of such location in unsuitable conditions. And at the end time of Yayoi period this town was suddenly destroyed. The history of short time on this town is reflecting a situation of important point on this strategic route for the connecting eastern with western part of Japan at the social/political turbulent time.

### D. Johmon Period

Large number of stone axes were found at later time of the Early stage. Among of stone tools is included enormous obsidian tools from Nagano district, and those flakes, cores and arrowheads showed existence of the tool industry on this place.

(Sakai T.)

## 報告書抄録

フリガナ	ナカダカセカンノンヤマ
書名	中高瀬観音山遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻	第32集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第194集
編著者名	坂井 隆 関根慎二 麻生敏隆 大木紳一郎 友廣哲也 石塚久則 深澤敦仁 鈴木正男 鈴木三男 古環境研究所 吉川純子 パレオラボ 小山岳夫 若林正人 柿沼恵介 井上 太 石井榮一 鈴木拓男 松倉敏洋
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	1995年

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナカダカセ カンノンヤマ 中高瀬観音山	トミオカシ ナカダカセアザ カンノンヤマ ・コウシンヤマ 富岡市中高瀬字 観音山・庚申山	102105		361415	1385315	19890501～ 19900228	16,400㎡	高速道路 建設
						19900601～ 19900731	2,000㎡	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
中高瀬観音山	祭祀 生産	近世	庚申塔群跡	1	少量の肥前陶磁片	浅間山噴火復興の信仰 跡と島開発跡	
			土坑	57			
	城館	中世	曲輪	2	瓦質コネ鉢1	山城跡	
			礎石建物	2	須恵器水瓶	山岳信仰関係の施設	
	居住	古代	斜面石組 堅穴住居	2 8	2 鉄鈴		
			居住	古墳	掘立建物 堅穴住居	1 13	中期の土師器高坏・埴 が多い
	居住	弥生			堅穴住居	96	鉄鏝9・鉄鑿1 後期の土器・石器多数 ガラス小玉3 炭化建物部材
			トンネル土坑付堅穴	8			
掘立建物			10				
櫓列			17				
柱穴群 土坑			3 15				
居住	縄文	堅穴住居 土坑 埋甕	7 29 3	黒曜石を中心とする石 器が多い 旧石器加工痕剥片1	前期の石器は多時代に 渡って使用か		

群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第104集  
四路自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告第32集

群馬県富岡市 **中高瀬観音山遺跡**

---

平成7年12月18日 印刷

平成7年12月25日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北楯村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北楯村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局

---